THE CENTRAL REVIEW

中央公論

夏期特輯號

第四十五年　第七號　第五百十號

昭和五年七月一日發行 [illegible]

冠松次郎新著

双六谷

四六判四百二十頁
寫眞四十八面
地圖二枚
定價二圓五十錢

本書は、双六谷本流の金木戸川を中心とした山岳溪谷の概觀及び紀行であつて、笠ヶ岳山脈より双六谷に到り、鷲羽岳を經て中俣岳、北俣岳、寺地山に到る山岳と、これらの山岳より源を發する支流を包含してゐる。日本アルプス大山系の高峯登攀が、片つ端から記錄を作られた中に、最後に取り殘された溪谷が双六谷と黑部川の二つである。今や此方面の大先達格たる冠氏により、「黑部」に續いて「双六谷」が集大成せられ、二つの謎は完全に解決せられる

黑部

四六判四百八十頁美本
寫眞三十五面地圖二枚
定價二圓五十錢

冠氏の「黑部」の著は、ウイムパアのマタアホルンの述作に於けるが如く、ただ一人者であることを認めねばなるまい。「黑部」は黑部川の山と谷の總說から始まつて、前篇の上流地帶は、後立山々脈の一部と、黑部山塊から立山々脈の一部に及び、後篇の下流地帶では、平の小屋から十字峽下流に及んでゐる。總評すれば、本書は黑部山谷の精細緻密なる記述であつて、しかも單に現在の好案内書に止まらず、先驅者としての探撿時代の記錄をも含んでゐるが故に、すでに喪失された原始の俤までが本書によつて保存されてゐる譯で、ここに黑部川といはんよりも日本アルプス大峽谷の百科全書として綜合集成されたのである。近來の日本山岳文獻は、本書の出現によつて最高峯の一つを加へたといふも過ぎてはゐまい。（小島烏水氏評）

冠松次郎著

立山群峯

二圓五十錢

立山本峯を中心に、東は後立山の連嶺、南は平の小屋―ザラ峠―立山溫泉―常願寺本流を結ぶ線、西北は常願寺川流域と富山平原とによつて限られる地域を含む。寫眞地圖挿入。

冠松次郎著

劍岳

二圓五十錢

微より細に入る記述の正確さ！あくまで研究的態度を以て深く探入して行く著者の熱！日本アルプスの北部立山連峯の季節々々の自然の姿が鮮に躍動してゐる。寫眞地圖挿入。

田部重治著

山と溪谷

二圓五十錢

本書は、詩人の心を以て、哲人の眼を以て、しかも周到なる登山家の用意を以て、深林と溪谷との美を說いた山旅の記錄である。山へ行く人、山をあこがれる人、山を愛する人々に贈る好著。寫眞登山行程表入

田邊主計譯

エベレスト登山記

七月刊行

「世界の屋根」と誇り、「アジアの心臟」と呼ばれるヒマラヤ大山脈中の秘峯エベレストの登攀を錄したヤングハズバントの世界的名著。寫眞入

婦人

夫の自殺を見送る……生田花世

夫を佛門に送りて……宮島麗子

一は月明の瀬戸内海を永遠の死の床に選んだ詩人春月氏を涙と合掌と歡喜を以て送る花世夫人の涙傷記。一は京都天龍の禪房に出離して六人の孩子・最愛の妻に生別した作家資夫氏の勇敢・冷厳な全貌を語る靈歎だ。

新進作家五人集

□女王の幻想……龍膽寺雄

□殺された人の母……武田麟太郎

□淑女のハンドバック……井伏鱒二

□鼠……堀辰雄

□片隅の會話……岡田禎子

第二の蜜月（實話）

□傷痕は殘つたけれど

□友人に刺戟されて

□郊外新宅

◆この一戰

◆明眸診斷

◆浴衣と髪

◆友愛結婚

◇口繪 二十四頁◇

父秋聲を語る（煩悩の父ヂヤズの父そして老大家としての父を解剖し醫箴し讃歎する。）……徳田戯二

天才「島清」の狂死（滯幸なる狂天才島田清次郎は土に還つた。彼が短生涯の決算報告だ。）……杉並喬吉

小泉遞相を泣かせた孝行兒（孝行兒の母を訪れて聽く。陰慘なる世相に一沫の光明を導く朗らかな生活劇。）……本誌記者

モダン令孃の早慶野球觀戰記……

▽慶應側・坂部榮

▽早大側・小俣愛子

◇夫婦愛の甦生……小原國芳

◇戀知る頃の乙女へ……加藤武雄

◇精神變質者の話……杉田直樹

◇夏季の誘惑を避けるには……保科久義

□寡婦の貞操……（片山哲・三宅やす子・深尾須磨子・加藤籌子・滋野ジャンヌ・田中芳子・等）

□夏の女・座談會……（片岡鐵兵・岩田専太郎・今井邦子・北小路喜勢子・小泉芳江・千葉華子）

公論

七月特輯號

「第二の蜜月」

（十六日發賣）定價七拾錢

中央公論社

「東雲のストライキ」と歌はれてから既に三十年遊女屋が貸座敷と名を改めてから最早五十年になるが果して彼女等は人身賣買の絆を脱したか？白色奴隷解放の爲に捧げられた熱血と吸血鬼の青白き笑を見よ

娼妓解放哀話

沖野岩三郎著

新吉原「吉原掟」抜萃

——本文より——

一、遊女勤の儀は第一に僞を專らとし、かりそめにも誠の心あるまじきこと。

一、美男、大通、心意氣の面白き客たりとも惚れることは停止致し置候故、その儀は屹度相愼しみ申すべきこと。

一、醜男、ひげ武者、老人、又は梅毒かきのお客なりとも、金澤山の方は惚れたるに見せかけること。

一、朝夕の食事は控へ目にいたし、客のものをたんと食べ候やう心掛けること。

一、召抱への砌、年代の金相濟せる上は、年明の日まで主人より一錢の合力もこれなき間、左樣心得精々主人方へ金を過分に取り入れるやう心掛ること。

一、衣類夜具頭のもの其外諸道具殘らず捺へかた致し候についくは萬事客人にねだり掛け飾實にまけぬやう氣をつけ借金出來候ことは毛頭考へ出すまじき事。

一、定め通りの仕着せは地合あしく、値段の安い品を興へる故、なるだけ自分の力で、上等の衣類を拵へ申すべく仕着せは安物故、使用致すな耻と心得、早速除け候こと勝手たるべきこと。

一、客人歸りて後は無益の酒をのむことは停止いたし候こと。

（以下略）

又と得難い珍奇な寫眞資料八葉

四六判四〇〇頁

定價一圓二十錢

送料内地十二錢

目次摘要

中央公論社

東京驛前丸ビル

振替東京三四番

Agfa

モウベックス、カメラ

十六ミリ活動寫眞機（四十呎）

最も新しくて、最も廉價です

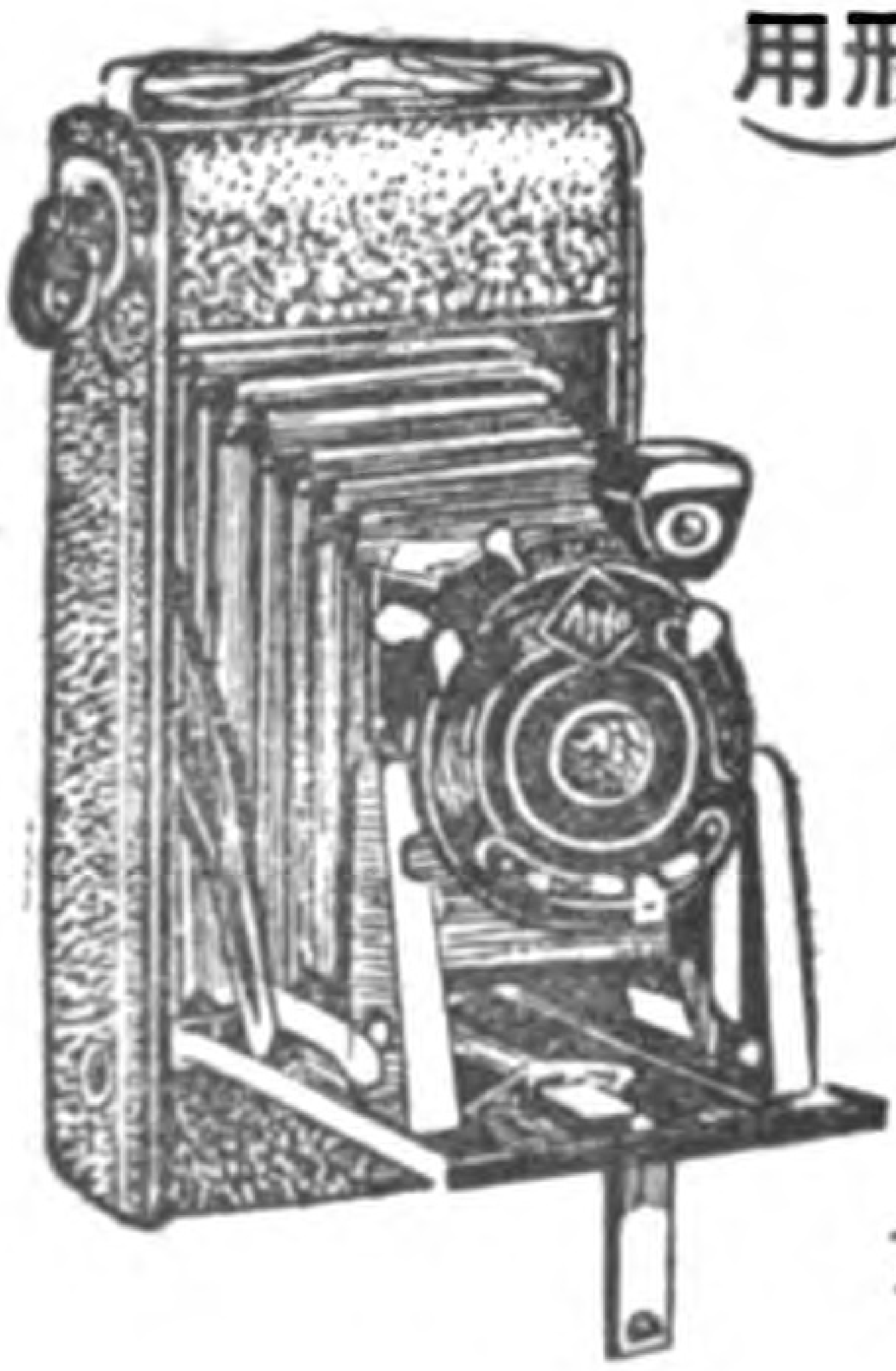


ビリー、カメラ

（ブローニー形 ロールフイルム用）

全く初めての方でも

文句なしに好く寫せます



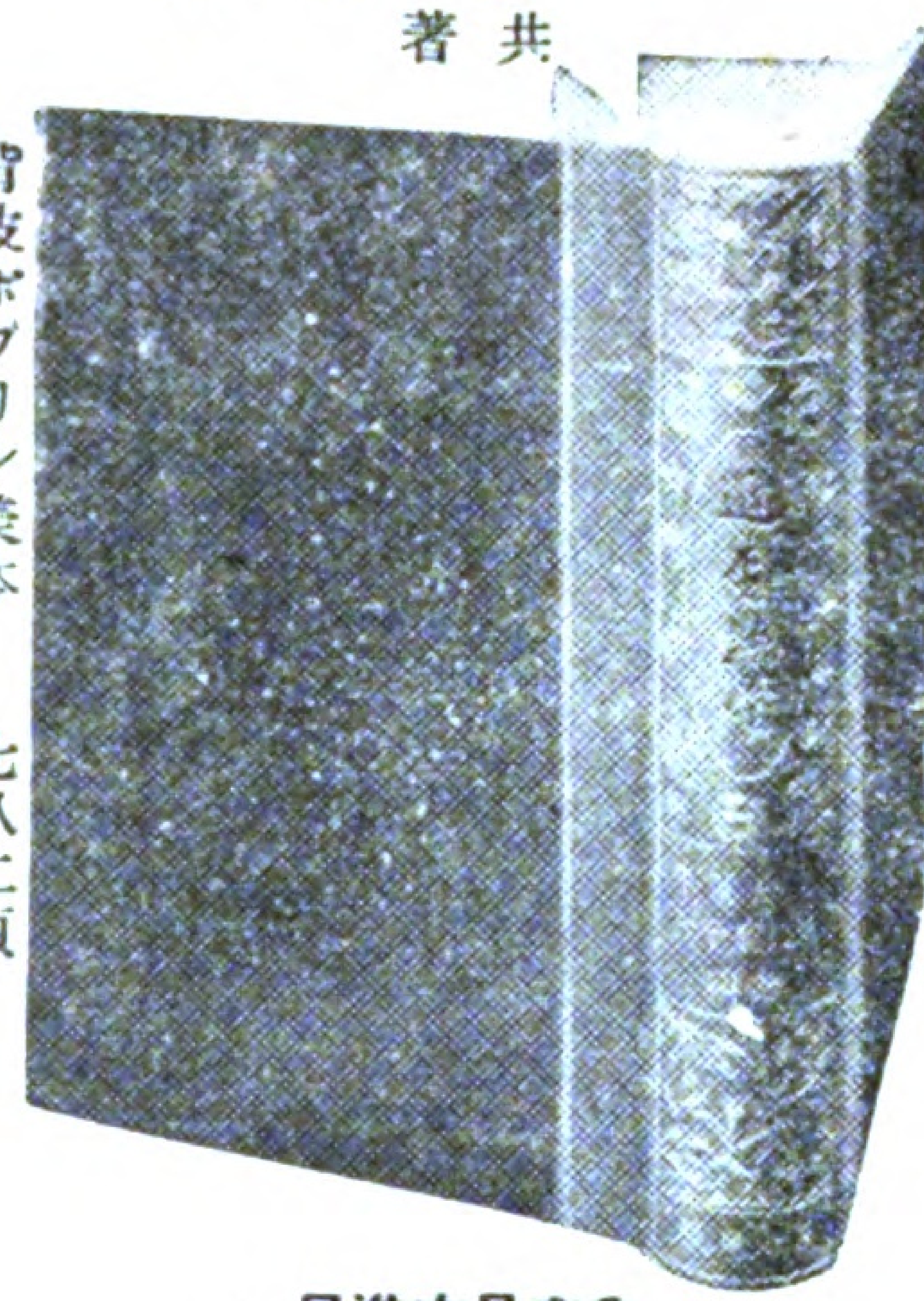
アグフア合名會社

東京　大阪

M・N・E怪談

30—229(N)

文學博士 上田萬年
樋口慶千代 共著



小村雪岱装幀 新型四六倍判

背皮ポプリン美本 七八二頁

—内容見本進呈—

特價 七圓五十錢

特價期間 六月三十日限

送料三十六錢
（定價八圓五十錢）

四回拂の便あり

詳細は内容見本を御覧下さい。

國語・國文の研究者は　家庭の品位に

文藝・演劇の愛好者は　書架の誇りに

音曲研究者は　心の散策に

近松語彙

不朽の名著、尊い業績

文學博士 笹川臨風

近松と西鶴とは、江戸文學中に於ける難解第一のものである。源氏物語は難解にしても、古來幾多の註釋書があるが、近松と西鶴とは前人に之を註釋したものが無く其註釋は全く最近のことに屬してゐる。特に近松が和漢の書に出入し、佛典を窺ひ、故事典故をふんだんに使ひ、上方詞から四國九州の言葉を初め、出たらめの唐音までをも巧妙に用ひ、俚言俗語を自由自在に慣用してゐるのを、脈絡整然として之を解釋するのは、事容易でない。近松研究は先づ此から出發しなければならないが、今日まで、其深奥を探つて之を闡明したものは全く無く、從前の註釋には幽微を顯彰したものがなかつた。樋口慶千代君は近松研究に於ける第一人者で、上田博士と合著に成れる語彙は、實に其の十五年間の苦心の結晶で、同君半生の心血の凝つたものである。此書一たび出でて、近松學は其の夕闇にも似てゐる時代から、一躍して、白日冲天の明るさに進むだのである。是に至つて萬象歴然として、物皆透徹するの觀がある。近時出版界に大著名篇の出づるもの少しとしないが、此者の如きは其最も傑出したものの一たることを疑はない。燦として靈光殿の如く、卓然群書の間に秀でて、あたり眩いまでに輝いてゐる。不朽の名著、尊い業績。

東京市九段坂下　冨山房　振替東京五〇一番



草馬　　　小川芋錢筆

政海暗礁の一掃

——卷頭言——

上層の現在政客間には今仍ほ統帥權問題が八釜しく、關心の標的となつて居る。而しここに[illegible]點を取て見ても我々大衆の間に疑問とされて居るものは唯の一つもない。我々大衆が一點か疑[illegible]ら問題ともせぬものが不思議に實際政界の大問題となると云ふ所に我々憲政擁護の[illegible]が現れて居る。議會に於ける態度の決斷には快服出來ぬが現内閣の該問題に對する最後の決意は甚しく大衆の期待と相隔たるものではないらしい。果して然らば現内閣は少くとも此問題に付ては大衆の支持を持み得る立場に在りと云へる。夫れにも拘らず飽くまで所信を押し通せば内閣瓦解の危機に直面せざるを得ないと云ふのだから不思議ではないか。

内閣が頑張れば軍部のストライキは免れない。其處をいゝ加減にして通つても樞密院と云ふ難關がある。此處もうまく切拔けたと云ふことであれば、現内閣の政權持續の上には結構だが、そこに既に何等かの妥協あることが暗示され、少くとも軍部對政府關係の在來の慣行の肯定を疑ふを得ず、從て憲政途上の障礙は依然として少しも取除かれぬことを認めざるを得ないのである。

之に反して内閣が勇敢に其所信に邁進したらどうなる。それで軍部樞密院を屏息せしめ得れば大手柄だが、十中八九は却て瓦解の悲運を免れまい。而して次に來る内閣は軍部の立場を承認する條件の下に於てのみ成立可能なるは云ふまでもなく、假りにそれが政友會内閣だとすれば、やがて總選擧を以て民政黨と決戰せざるを得ず、勝てばよし、負くれば又もや内閣の更迭を見ねばならぬが、前說を棄てて新に陣を軍部に容れぬ限り民政黨の組閣の成功は覺束ないから、一時中間内閣にやらせると云ふやうなことにならぬとも限らない。斯くては我國の憲政はこゝに又もや數十年の逆轉を經驗すべく餘儀なくされることになる。

斯う考へると軍部對政府の確執は一方資本主義の代辯たる既成政黨と他方封建的殘滓たる特權階級との無意義の亂鬪と觀て不然之を看過することは出來ないのである。憲政機構の内部に巧に織り込まれたる暗礁は、何人が運用の衝に當ても苦惱の種たるを失はず而もそは容易に取去り得ないものであるを思ふとき、今次の統帥權問題は、上層政客のそれとは全然別の意味に於て、また我々大衆の多大の關心を要する問題でもあると考へる。

最近殊に目覺しい大衆の政治的進出は既成政黨を爭鬪線上の直接の敵手として勇敢に戰を挑んで居る。併し大衆がいよいよ其の抱負經綸を實行せんとするにおいて障害をなすものは獨り既成政黨のみではない、貴族院もあり、軍閥もあり、樞密院もある。花々しき將來を約束されつゝも今言ふに足る程の實勢力をなして居ないので既成政黨の地盤を侵蝕することに依て自家勢力を擴大する事のみに專念沒頭しては居るものの、やがて實際政治の責任を頒つ地位に立たば、始めて所謂政界暗礁の堅壘が如何に打ても叩いても制度の保障に依て微動だもしないことに驚くであらう。革命的戰術を擇ぶものでない限り、之等をどう始末するかは今より機事に攻究しておくの必要がある。

今は主として軍部に付て述べたが、政界の暗礁は之れ丈けではない。掃海作業は何時何人に取ても必要だ。封建的特權階級に對する自由主義政黨の仕事に過ぎぬなどと傍觀するのは餘りに政治的達觀を缺く態度ではあるまいか。

中央公論



第四十五年第七號
七月號
第五百拾號

大衆失業の原因と「對策」と闘爭と

猪俣津南雄

一

二タ月ほど前に、ドイツのミユラー内閣が失業問題で倒れたことは、まだ讀者諸君の記憶に新しいであらう。ミユラー内閣は、失業保險金の增額案を議會に出して反對され、遂に瓦解したのであつた。しかるに最近にはまた、同じ失業問題で、イギリス勞働黨内閣は危機に瀕した。かやうに、失業問題は今や主要資本主義國の政府の運命を左右するほどの重みと深刻さとを持つに至つたのである。

イギリス勞働黨内閣は、失業問題の「解決」を中心スローガンとして選擧に勝ち、[illegible]において、勞働黨の組閣はよほど失業問題を緩和するであらうといふ期待を大衆に與へてゐた。しかるに、英國の失業者は、勞働黨の組閣以來どし〳〵と增し、五月初の失業者數は組閣當時より四五十萬人の增大を來たし、一九二二年四月以來の最高たる百七十一萬二千人に達した。(むろん、實際の失業者數は此の公表された數字より遙か大きいに違ひない。)また增加率も激增した。三月中旬から五月初に至る一月半の間に約十萬人を增し、五月十日に至る二週間の增加は三萬八千人にのぼつた。かゝる狀勢の下に、『勞働黨内において左翼的色彩を帶びつゝあるランカスター公領尙書サー・オズワルド、モズレー氏は、トーマス氏の生ぬるき失業對策にあきたらず、より大膽なる失業救濟策を主張し、廿日遂に辭表を提出するに至つた』ものである。けだし、「失業救濟大臣」の稱號を得たトーマスは、昨年十一月、下院において「失業救濟」の尨大な計畫を發表し、失業救濟補助委員會に三億六千萬圓、道路建設費に三億一千萬圓、植民地開發費に三千萬圓、合計四億二千萬圓を支出し、その他尙ほ巨額の支出をすると言つたにも拘らず、失業は少しも「救濟」されなかつたからである。勞働黨内閣は、内閣改造をやつて一應命をとりとめたやうだが、しかしそれは言ふまでもなく、問題の根本に何等の變化を與へるものでなく、少しでも事態を緩和するものでない。

が、もちろん、大衆失業とその激增とは、イギリスだけのことではない。一年前に「萬年景氣」の持主と言はれた米國は、今や墜落して世界恐慌の震源地となつてゐるが、その米國には六百萬人の失業者があつて、まさに世界の失業をリードしてゐる。米國の勞働者數は約一千百萬人であるから、その五割五分が失業したことになる。

米國に次いで巨大な失業者軍を有するのはドイツであつて、昨年末の總數は三百五十萬人であつた。その後最近までには少なくも三四十萬人は增加したものと推定される。失業者數において第三位を占めるイギリスに就いてはすでに述べたが、日本は恐らく第四位を占め、失業者總數は百五十萬人以上にのぼるであらう。イタリーにおける昨年中

の失業者數は毎月平均三十萬人であつた。昨年末および最近の數字は發表されてをらないが、最近では七八十萬人を下るまい。オーストリア、ポーランド、チエッコスロヴァキア、ハンガリー等の歐洲の弱小國においても、昨年末でさへすでに十五萬乃至二十五萬の大衆失業があり、昨今ではそれ〲三四十萬人に達してゐる。更に、資本主義の發達の後れた南米諸國においてすら、百四五十萬人の失業者がみられ、印度、支那においても、最近異常な失業者增加が生じつゝある。

以上を通計すれば、世界の失業者總數は實に千七百萬人にのぼり、その家族を加へれば優に六千萬人といふ日本の總人口に等しい人間が貧困の底に突き落されてゐるのである。

最近における失業者の激增は、沒落の世界資本主義の一時的相對的安定が崩れて、世界恐慌が始まつたことに基づいてゐる。このことは、それ自身極めて重大な意義を持つが、世界戰爭後――卽ち世界資本主義がその沒落期に轉入して以來の失業は、すでに恒常的・慢性的な現象となつてゐたことを忘れてはならぬ。次表(次頁)は、歐洲資本主義が謂はゆる「安定」期に入り込んでからの失業狀態を示す。(讀者諸君は、一九二七年は、ドイツを中心にすばらしい景氣の發展を見た年であることを想起すべきである。ブルヂョアジーは、それを「ドイツの復興」だといつてはやし立てた!)

更に、イギリスにおいても、ドイツにおいても、米國においても、不況期には失業が增し、好況期には減るとはいへ、その好況期においてさへ常に大衆失業が生じてゐた。しかも好況期における大衆失業そのものは、前の好況期におけるそれよりも常に遙かに增大した。この傾向は、比較的正確な失業統計を有するドイツについて最も明瞭に知ることが出來る。卽ち一九二五年の景氣の最高潮に達した時期における失業者數は、十九萬八千であつたのに、一九二七年の嵐の如き好景氣に際しては、生產は遙かに多額にのぼつたにも拘らず、失業者數は官廳の統計によつてすら五十萬、プロレタリア失業委員會の計算によれば七十萬に達した。そして勞働組合について言ふならば、この一九二七年

の失業は戦争前の平均數の三倍にのぼつた。しかもこの比較的に少い七十萬人前後の數字は、僅か一、二年續いただけで、一九二七年末には又も百五十萬人にのぼつてしまつた。

國別　　年次	月平均 一九二五年	月平均 一九二六年	月平均 一九二七年	最少時における數 一九二七年	
イギリス	一、三三七、八四五	一、五〇五、七三二	一、一七四、二〇五	五月	一、〇五八、七九一
ドイツ	四六四、七八九	一、六九二、八七〇	八二六、四九七	十月	四九二、〇五八
フランス	四〇、八三四	一一、三〇八	五二、三六〇A	九月	二七、八九六
ベルギー	三四、二九四	二四、六九六	三三、八四九B	六月	二八、四二一
オーストリー	一四九、九七二	一七六、五三七	一七〇、〇八二	十月	一二七、三一三
イタリー	一一〇、二九八	一一三、九〇二	二四六、五〇六	六月	二一四、六〇三
ポーランド	一九九、八四三	二三四、三二二	一六九、六九三	十月	一一七、〇二一
チエッコスロヴアキア	四九、三六九	六七、八五一	五六、〇九五	九月	三七、六三四
スエーデン	一一・一%	一二・二%	一一・三%	八月	七・八%
デンマーク	一四・七%	二〇・八%	二二・〇%	九月	一六・二%
ノルウエー	一三・二%	二四・三%	二五・八%	八月	二〇・六%

備考一、イギリスは被保險失業者、ドイツは補助金のみで生活するもの、ベルギーは被保險失業者、オーストリーは補助金を受ける失業者、イタリーは完全に失業せるもの、一九二四年一月—九月の月平均。

二、Aは一月より九月に至る月平均、Bは一月より八月に至る月平均、Cは一月より九月に至る月平均。

かゝる事態は何を意味するか？それは、資本主義がもはや到底吸收消化し得ないところの勞働力の絶對的過剩をつくり出してしまつたことを意味せねばならぬ。

二

多くの産業においては季節々々に失業者が生じ、また一般に景氣循環の不況期には多數の失業者を出すことは、誰もが知つてゐる。更にまた機械を使用すれば人間の勞働力が不用となり、失業者が出來るといふことも、今日では殆ど常識になつてゐる。しかし、利潤を追求する資本家等が相互の競爭の壓力の下に、各自の企業の生産技術を改良し、新しい機械を使用し、勞働の生産性を高めつゝ、換言すれば「合理化」を遂行しつゝ、不用化された勞働力、仕事にありつけぬ働き手、過剩人口をつくり出し、そしてそれを「熱病的な好景氣の時期においてのみ吸收さるべき」「産業豫備軍」たらしめておくことは、「近代工業にとつて必要な生産條件の一である」のみならず、此の産業豫備軍の大きさは、資本主義が發達すればするほど、相對的にも絶對的にも増大する、といふマルクスの認識および理論には、まだ親しみのない人も多いかも知れぬ。しかし、吾々は、この理論の解説は他の機會に讓り、こゝではたゞその理論の正しさは歴史の發展が完全にこれを證明したことを指摘するに止めるであらう。

事實において、戰前の資本主義的發展にあつても、後の恐慌は前の恐慌よりも大なる失業者群を街頭に投げ出すのを常としたし、それの勞働者總數に對する割合も、傾向としてますく多くなつてゐた。が、しかし、世界戰爭までは、不況期に生じた失業者は「熱病的な好景氣」の來る毎にすべて生産に吸收されたばかりでなく、ヨリ多くの新しい勞働者までが吸收されるのを常とした。それは、(一)當時の資本主義は絶えず新しい市場を擴張することができ、且つ(二)若干の産業における新機械の使用と生産の増大と商品の低廉化とは、該産業に使用される原料等を生産する

ところの他の諸産業の生産過程をも促がして、勞働力の需要を增大せしめることが出來たからである。あの時代の失業は、周期的・一時的な現象であつた。が、戰後における失業は恒常的慢性的であるのを特徴とすることを吾々は見た。しかるに、この現在の特殊の失業に直面しながら、尙ほ附隨的にかの古典的な失業の概念に支配され「何とかなるだらう」といふやうな、知らず／＼の事態過小評價や自慰・自欺に陷つてゐる者は少なくない。そしてブルヂョアジーは、それにつけこんで盛に欺瞞をやつてゐる。

だが、戰後における慢性的な大衆失業は、等しく恐慌と合理化とによつて生ずるにしても、戰前の失業とは全く性質を異にするものである。

第一、失業の原因たる恐慌の性質が違つてゐる。戰後の恐慌現象の特徵は、諸々の國々にちぐはぐに起こること、恐慌から恐慌までの期間が非常に短いか乃至は際限もない不景氣として現はれること、全體としてみれば一般的・慢性的な恐慌狀態を呈することである。これは、戰爭によつて多くの資本主義國の國內市場が異常に狹隘化したことにより、植民地および半植民地國の工業化の發展により、またどの國も高率の關稅防壁をうちたてゝゐることにより、新しき市場の擴張はもはや不可能となつたのに、戰時および戰後を通じて生產能力が異常に增大したことのために生ずるところの、一般的生產過剩に基づく恐慌だからである。從つて戰後の諸恐慌は、新しき市場の擴張に基づく好景氣や生產增大によつてヨリ多くの勞働者が生產に吸收されないうちにやつて來る。(生產能力は合理化によつて飛躍的に增大するが、新しき市場擴張が不可能なために生產の方はそれほど增大せず、何處でも高率の生產制限を餘儀なくされてゐる)。

第二、戰後の合理化は重點の置きどころが違つてゐる。合理化は常に不用な人手——失業者——をつくるのだが、戰後の合理化は、その重點を、新機械の使用よりはむしろ、勞働の組織化と細分——特に不休傳送帶の使用——によ

つて勞働力の搾取を高めることにおいてゐる。おまけに獨占は、合理化による商品の低廉化を妨げる。從つて以前の合理化の場合のやうに、新機械の使用が、おのづから他の産業部門の生産擴張を促がして、勞働力の需要を增大せしめるといふことがない。即ち、合理化は盛に失業者を出すが、以前のやうにそれを引取るところがなくなつた。失業者はいつまでも失業者たらざるを得ぬ。

第三、新市場擴張の可能性は激減し、新機械使用の副作用としての失業緩和が生じないとすれば、固定化した大衆失業の出現はその必然の結果である。しかるにまた、戰後の合理化の特殊性に基づいて、勞働は非常に單純化され、熟練の度は低下せしめられ、從つて勞働者の習業期間が短縮されるから、以前ならばまだ勞働年齢に達しない若者達の大群が、合理化のある每に勞働市場へ押し寄せる。不用化した人手の激增と同時に生ずる新しき求職者の激增!

第四、最後に、現在の失業者大衆は、戰前のやうな、他國への移住の可能性を全く奪はれてゐる!

かくして、こゝもはやどうにも動きのとれぬ、絶體絶命の失業者大衆は創造されたのだ。しかも、ひたすらに利潤の增大を追求する資本家そのもののやうに冷酷な自働機械と無慈悲な新生産方法とによつて。こゝに、問題の大衆失業の祕密を開く鍵がある。

廣大な失業者大衆の壓力は、工場に殘る勞働者等の勞働搾取を不可避的に激烈ならしめる。それがまた更に、彼等をも工場から追ひ出して失業者軍の群に投ずる。かたまりは大きくなる。かうして、『現代の資本主義がどうにも拔け出しやうのない魔法の循環』はつくられてゐる。

三

資本主義諸國における「失業對策」なるものは、かゝる「魔法の循環」のうちにあるブルヂョアジーのやつてゐる

ことなのだ。さればこそ、一切の對策は、たゞ、それ自身の崩壊と無力とを隱蔽しつくすためにのみ、かけされてゐるのである。

試みに、「最も完備した失業救濟の施設」を持つといふイギリスとドイツを見よ。

イギリスは前から失業保險法を持つてゐた。被保險勞働者數一千二百萬人。ドイツは八年間の審議を重ねた――何たる愼重さだ！――揚句、一九二七年に强制失業保險法を制定した。被保險勞働者數一千六百萬人。この失業保險法がどんないかさま物であつたかは、ミユラー内閣すらが保險金の値上げを餘儀なくされてそのために倒れたことによつて明らかではないか。イギリスの失業保險は、僅かながらも失業者を利益するものであつた。が、それだけにまた、イギリス勞働階級の生活水準を更に引き下げることが必要となるや否や、ボールドウィン内閣の手で滅茶苦茶にされた。保險金支給の許可はやかましくなり、期間は短縮され、婦人や青少年に對する率はひどく引き下げられた。かくて、「最も完備した」英・獨の失業保險法は、ブルヂヨアジーをして、あるかなきかの利益を餌にして失業者大衆を、就業勞働者大衆の條件低化と失業化とのために、利用し易からしめる道具にすぎない。

「生產的」失業救濟――これは政府が金を出して資本家に事業を與へ、失業勞働者を雇傭せしめることの、大げさな名前である。この名の下に「救濟」されるのは總じて資本家であつて勞働者ではない。ドイツにおいて、比較的「弊害」のない土木事業の擴張によつて、恐慌に對抗せんとする試みが繰り返へされたが、計畫上では總失業者の二五％（平均四十萬）に仕事を與へる筈のものが、實際には七％（十二萬）を雇傭し得たにすぎなかつた。そしてドイツでもイギリスでも、土木關係の追加事業を見出すことはます／＼困難となり、また地方の負擔がます／＼重くなつて來た。失業者を出す產業を高率關稅で保護するといふやうな「失業救濟」のからくりは、餘りに見え透いてゐて問題にもなるまい。

最後に失業救濟基金法。これは政府が失業手當を與へるのだが、イギリスは一九二〇年、ドイツは一九二四年から

これを始めた。怠け者でも、不具者でも、病人でもなくて、熱心に勞働を求めてゐるところの、不可思議な現代窮民を救濟(!)するための此の支出は、加速度的に増大せざるを得なかつた。ドイツは、一九二四年度に二億四千萬マルクを支出したが、一九二六年には恒常的失業者が激増したために例外的失業救濟法を制定し、總支出額は十二億マルクにのぼつた。そして一九二九年には更に十三億マルクに増大した。イギリスは、一九一九年から一九二六年までの八ヶ年間に、總額二十四億圓、一年平均三億圓を支出し、一九二九年には三億五千萬圓を支出した。

かくの如きが最も完備したブルヂョア的失業對策の成果である。ブルヂョア的對策は、失業問題の解決どころか、失業狀態の緩和をすらも――極く一時的なそれを除けば――なし得なかつた。ブルヂョアジーとその政府は、決して本氣で「失業救濟」をやりはせぬ。やり得ない性質のものだからである。彼等は、たゞ餘儀なくされる、――社會的危機の恐慌と、欺瞞・懷柔の必要とによつて。だが、なかんづく、勞働者階級の鬪爭の壓力によつて。勞働者階級の弱いアメリカやフランスやイタリーでは、失業者大衆は失業手當すら手にすることが出來ないのだ。

沒落期の資本主義は、固定的失業の大衆をつくり出した。それはもはや「産業豫備軍」でさへもない。それはたゞ、ブルヂョアジーとその政府の「對策」の故に日に〳〵重き負擔を廣汎な民衆の背に加重しつゝも、自らは癈兵ほどの待遇もされぬ『産業癈兵軍』と化されてゐる。癈兵軍は加速度的に増大しつゝある。そしてそれは自己の餓死、自己の死滅への増大だ。だが、進んで勞働を欲求し、しかも完全な勞働能力を持つ此の廣汎な大衆は、甘じて死滅するのであらうか? また、死滅せしめてよいであらうか?

四

世界恐慌と合流する「解禁」恐慌は、この問題を、日本資本主義につきつけてゐる。資本主義日本に現はれた大衆

失業とその加速度的な増大を見よ。

内務省社會局が昨年九月からやつてゐる失業統計は、全人口の僅か一割を對象とし、その調査方法も甚だ不完全な推定によるもので、全く信を措るに足らないが、それでも二月中の全國の失業者數は三十五萬人と報告した。そしてその増加は、十月に三萬人、十一月に一萬人、十二月に一萬五千人、一月から二月に三萬五千人であるといふ。此の調査は失業者數の過小評價をもつて著名であるが、しかも尚はその加速度な増大をかくすことが出來ない。

更に、社會局工場及鑛山勞働者移動調によると、常時五十人以上使用する全國工場の本年二月末現在の職工總數は百十九萬人餘で、昨年六月末に比すれば十八萬三千人を減じた。この期間における解雇職工數は、五十一萬三千人で、前年同期に比すれば約四萬人（八％）を増加した。解雇の増加は製絲業（一四・〇％）、織物業（一〇・五％）、紡績業（三・八％）に著しい。その他にあつては微弱である。鑛山勞働者の失業乃至解雇の増加はこの調査にはまだ現はれてゐない。

この調査は、（一）二月以後を示してゐない。しかるに同じく五十人以上の工場に關する日銀調査の勞働者指數は別表の如く、三月の減少率は二月のそれよりも大なることを示してゐるし、諸般の情況は、四月は三月よりも、五月は四月よりもいよ〳〵大なることを推定せしめるに充分である。加ふるにこの調査は、（二）最も多數の失業者を出してゐる五十人以下の工場を除外してゐる。最後にこの調査は、（三）工場鑛山以外の勞働者は全く除外してゐる。

しかるに、例へば地方土木建築業組合の議會に提出した調査は、

工場勞働者指數（日銀調）

年次		勞働人員	定額賃金	實收賃金
大正十五年		100.0	100.0	100.0
昭和二年	（上期）	96.7	99.9	101.7
	（下期）	92.8	99.8	102.4
昭和三年	（上期）	90.6	99.3	104.5
	（下期）	90.0	98.8	106.1
昭和四年	（上期）	91.0	98.7	105.1
	（下期）	91.1	98.4	102.6
昭和五年	一月	88.7	98.6	100.4
	二月	87.8	98.4	101.8
	三月	86.9	98.2	102.8

同業關係の失業者だけでも東京に十一萬五千人、全國に約七十萬人はあると報告した。

かくて、五月末の失業者數は優に百五十萬人を超えたと見積るも決して過大でないであらう。しかも、失業者の洪水はまだ始まつたばかりである。『新聞の報導は泉南泉北全工場の閉鎖、播州織物組合の休機斷行、和歌山紀陽織物の破産(之による五百の失職者は解雇手當なきため歸鄉すら不可能)等織物業の慘狀を傳ふるのみならず、最近殊に、大阪機械工作所、大阪鐵工所、吳其他海軍工廠、藤永田造船所、川崎新田富士電機等における大量的馘首、磐城炭坑の一部休坑、富士製紙の北海道二工場の閉鎖、大阪琺瑯の閉鎖等、各種の事業に亙つて打擊の漸く顯著なるを報じてゐる。又、大阪方面の小工場においては工場主がその工場閉鎖に當つて解雇手當の支給が出來ぬため、職工を置き去りにして逃亡しつゝあるものが續々として續出しつゝあるといふ。卽ち、工場鑛山勞働者の解雇失業狀況は、今後においてますます深刻化すべきものと思はるゝ』といふ東洋經濟新報の觀測は全く正當である。最近の新聞は更に、芝浦の東京鐵骨や星製藥の大量的馘首、北洋漁夫の失業を報じた。造船業全般に亙る「職工整理」の危機も迫つて來た。續出する繫船や停船のために海員の大量的失業が始まつた。失業の巨浪は鐵道從業員をも襲ふであらう。國有鐵道は合理化によつてすでに數千人の「冗員」をつくり出してゐる。事業の新設・擴張が殆ど停頓したことは、首切られる者の大多數を赤裸々の失業者たらしめるであらう。

では、かうした大衆失業とその激增に當面して、ブルヂョア政府はいかなる對策を講じたか?

一、政府は、組閣の當初に諮問機關として設けた社會政策審議會に對して失業對策に關するまことに長々しい諮問を發した。

二、現下失業防止及び救濟を徹底的にやるのには、職業紹介機關を通じて就職率を知るやうな姑息な方法では完全を期し難いから、豫算を計上し、英國の例に倣つて失業保險制度を設けるに限る、などといふ宣傳をした。

三、「公私事業及び其の他失業の救濟に關する事項を調査・審議し、且つ關係各大臣の諮問に應じ、關係各大臣に建議することを得」るところの、失業防止委員會なるものの官制を發表した。

五、井上藏相は、「財政の許す範圍内において極力失業救濟を實行する意向である」ことを聲明した。（四月二十四日東日）ついでながらこれは、財政の許す範圍外において何事かをなし得る大藏大臣が在るかのやうに聞えて面白い。

六、曩に緊縮政策に基づいて極度に制限した處の地方起債のうち、失業救濟を目的とするものゝ條件を緩和した。

この起債額	二一・一九六（百萬圓）	事業費總額	二四・五七六（百万圓）
地方失業救濟事業のために融通する預金部低利資金額	一一・七七二	勞力費總額	八・三八九
同目的のための國庫補助所要額	一・七五九	勞働者使用延人員	四・四三四

即ち事業費總額二千四百五六十萬圓の約三分の一は、「勞力費」として「救濟」される失業者の俸給や賃金となり、殘る三分の二の一千六百三十萬圓ほどが資本家に取引を與へてその利潤源泉となる。勞力費の八百三十萬圓は、四百四十三萬三千人の失業勞働者に職を與へるに足る！ 但しそれは延人員である。それをわかり易い數字に直せば、例へば二萬五千人の失業勞働者を六ヶ月半足らず雇傭し得るだけである！ 而も此の種の「救濟」事業の實績は、計畫上の數字の三割見當なるを通例とする、即ち七千五百人。そして現在の失業者はといへば、實に百五十萬人を下らないのである。

これが、少しでも對策を講じたことを意味するであらうか。

五

失業問題の解決などは論外としても、失業者大衆のために、失業の緩和のために、效果ある方策を施すことすらも、

わがブルヂョア政府はやらうとはしない。また、やることも出來ない。どうしてか？

大正九年から昭和元年（もしくは三年）までのインフレーション政策によつて、稅源は全く涸渇した。租稅および官業收入の七割の負擔に耐えきれなくなつた大衆は、徹底的な減稅を欲してやまないのに、ブルヂョアジーの帝國主義政策の必死的遂行のため、軍備充實の必要はいよ〳〵急である。失業者扶助の費用を大衆から徵收することは至難なのに、インフレーション政策の破綻によつて不可避的に生じたデフレーションのために資本利潤を著しく低下せしめられたブルヂョアジーは、一文の負擔增加をも峻拒する。といつて國債を增發することも不可能だ。「特融」インフレーション以來巨額の國債を背負ひ込んだ金融資本ブルヂョアジーは、增發どころか國債の整理償還による市價維持を强要する。

かうした財源の缺乏があるのみならず、失業こそは、支配的ブルヂョアジーにとつて寧ろ必要なのだ。何故といつて、失業者を出さずして「財界整理」と產業合理化をやるとは不可能であり、產業合理化と「財界整理」の遂行こそは、今や彼等の絕對要求なのだ。——最後に、ブルヂョアジーとその政府とは、勞働者階級の力に對してたかをくゝつてゐる。

失業問題に對して無爲無策なる濱口內閣は、ブルヂョアジーにとつては有爲有策である。金融資本の意圖の忠實な執行者たる濱口內閣は、「失業に對する根本對策」を、「產業の振興」（！）に見出すことを忘れなかつた。そして產業振興のための中心方策は、「財界整理」と產業合理化であるといふ。それは首相及び多くの閣僚達が議會で述べたのであるが、俵商工大臣は次のやうに「エコノミスト」（四月號）に書いてゐる。

「失業問題は素より殊に重要視し、十分の考慮を拂はねばならぬ。しかしながら、合理化が漸次實行され能率增進が實現さるゝに至りて、物價低下し、內外市場における販路增大するに至れば、增大する需要に順應するため、勞働に對する需要は以前にもまして大となる理である。合理化の結果として全產業界の隆盛を來たして在來の各種產業部門の活況を呼び、また更に新しき產業の勃興するにおいては、勞働に對する需要は增加して寧ろ失業者

を減ずることが大であらう。

合理化が行はれゝば、内外市場における販路は増大する、これはまことにブルヂョアジーには都合よく出來た合理化ではある。しかし、現實の合理化の結果は全くその正反對で、増大する生産能力に比して販路はますます狹隘となることを吾々は見た。そしてこの世界資本主義の没落期における合理化こそは、恒常的・慢性的な大衆失業をつくり出す最大原因であることを吾々は見たのである。しかもさうした傾向は、現在の日本資本主義の合理化においては一層甚だしいであらう。何故ならば、一般的生産過剰に基づく世界恐慌が極端に世界市場を狹隘化してゐるそのうへに、すでに決定的に立ち後れてしまつた合理化運動によつて、國際市場における日本商品の競爭力を優越せしめるとは、殆ど望まれぬことである。況んや、日本の主要輸出品は、生絲の如き、合理化の餘地の甚だ狹いものなるにおいておや。

六

日本現在の大衆失業は、幾つかの累積した原因に基づいてゐる。

(一)インフレーション時代においてすでに強大資本がいち早く行つたところの合理化はその一である。多かれ少なかれ效果的な合理化をやつた諸産業——石炭、鋼鐵、銅、紡績——は、次の如き結果をもたらした點で全く一致する。勞働の生産性又は能率の著しき増大と、多かれ少なかれ高率の生産増加と、そして勞働者總數の絶對的減少。そしてこれらの諸産業は、世界恐慌と合流した「解禁」恐慌に當面して、最も激烈な生産過剰に陷り、今や更に恐慌に原因する失業者をも出してゐる。

(二)「解禁」恐慌、これは前記の諸産業のみならず、すべての産業の利潤率を激減せしめ、過剰資本の切捨を餘儀なくさせる。過剰資本の切捨は、大體二つの形態を取り、劣弱企業の破産か、減資か、強大企業による併合かのいづれ

かを結果する。いづれの場合も必然的に解雇者を出すが、今やすべての産業部門が整理を強制されるとすれば、首切られる者の大多數は失業者たらざるを得ぬ。ブルヂョアジーの金輸出禁止――インフレーション政策は、大正九年恐慌の進展を喰ひ止め、當時において當然に切捨てらるべき過剩資本を持ち越したばかりでなく、物價を高位に維持したり、金融景氣や證券景氣を出すことによつて、劣弱企業をも負債に負債を積み重ねて生存せしめ、過剩資本に過剩資本を累加せしめたのであつた。金融恐慌後の「特融」も同様の結果を生んだ。しかし他方では、高い物價や、獨占價額や、資本家の保護救濟の費用の大衆への轉嫁や、金融資本による整理・併合と强大資本のいち早き合理化と金融恐慌とによりて生じたところの、劣弱企業・中小資本の沒落及び失業者の增加や、資本攻勢による賃銀の引下げ、勞働條件の惡化等によつて、大衆の消費力・購買力はます〳〵おとろへたのに、生產設備および生產能力は絕えず增大したのだから、それと市場との間の矛盾は異常に深大化してきた。インフレーション政策の破綻と共に不可避となれるデフレーション＝金解禁を契機とし、物價の激落、生產および利潤率の激減等を通じて、過剩資本の切捨を强制せんとしてゐるところの現在の恐慌過程を、吾々は「解禁」恐慌と呼んでゐる。此の恐慌が暴力的に解決せんとしてゐる矛盾が深大であるだけそれだけ、切り捨てられる過剩資本が巨大であるだけそれだけ、「解禁」恐慌がつくり出す失業者軍は尨大なものでなければならぬ。(それはしかし、ブルヂョアジーとその政府が、再びインフレーション政策に逆戻りしないことを條件とする)。

(三)金流出防止のための緊縮政策――これは「解禁」恐慌の過程と結びついてはゐるが、しかし別個の要因である。金融恐慌以來の金融機構は大きな矛盾をもつに至り、金解禁による急激な正貨の流出を、高金利政策によつて、防止することが出來なくなつた。そこで、ブルヂョアジーは、緊縮政策によつて輸入を減少せしめんと企てたのである。濱口內閣は、昭和五年度の中央および地方財政に五億圓の節約を施したと稱してゐる。これが、軍縮や行政整理等と共に、多くの失業者を出すことはいふまでもない。

(四)世界恐慌、——この打撃を最も強く受けたものは、製絲業、綿絲業の勞働者である。その他の輸出品生產に從事する勞働者も一樣に打撃をうけてゐる。打撃はそこから波及する。

七

世界恐慌は、各國の國內市場を著しく收縮せしめると同時に、各國の資本を國外の市場獲得の激烈な鬪爭に驅り立てるであらう。ダンピングはすでに始まつてゐる。が、さうであればあるほど、各國のブルヂョアジーは、わけても日本ブルヂョアジーは、急速に「財界整理」と產業合理化とを敢行しなければならぬ。財界整理と關稅引上げとによつて、國內の獨占の體制を强め、獨占の高利潤を割いて海外市場における競爭力を强めると同時に、出來るだけ安い價額を武器として世界市場で戰ふためには、產業合理化による外はないからである。整理と合理化とは、ますます多くの勞働者を生產から驅逐するであらう。そして、さらでだに狹小な國內市場をますます狹ばめてしまふであらう。

日本においても、合理化によつて街頭に投げ出される勞働者數は、再び目立つて減少する機會は恐らくない。これまでにも非常に大きな農村過剩人口は、世界恐慌期の農產物や繭の下落により、プロレタリア化する農民を加へてますます夥しきものとなり、加速度的脈力をもつて都市や工場地帶に溢れ出で、合理化によつて生產から驅逐された勞働者達と一と塊になるであらう。沒落する小ブルヂョア群も加はるであらう。それにまた、植民地的收奪によつて大量的にプロレタリア化するところの朝鮮勞働者の大群が——現に三十萬人に達するそれ——が、僅かでもよき賃銀を求めて絕えず加はり來たるであらう。合理化による勞働行程の單純化は、高い熟練勞働を安い不熟練勞働に置き代へるであらう。熟練勞働者が失業する。

今迄のところ資本主義日本は、大衆的失業をつくり出しながらも、解雇手當制と、家族制度と、農村が持つてゐた

失業者收容力とによつて、事態の尖銳化を免かれてゐた。だが、しかし、失業手當が使ひつくされ、家族制度や農村の失業者收容力のつきるにつれて、事態の全體が質的飛躍を遂げるであらう。「歸農」の慣行や家族制度のため、失業の病毒は內攻してゐただけそれだけ、××××××××××××××。

この、決して消滅することのない失業は、單に失業者自身にとつて此の上もない苦惱であるのみでなく、工場に殘つてゐる勞働者の搾取を更に一層强めずにはゐない。合理化をやつたブルヂョアジーは、何倍かの勞働のエネルギーを就業勞働者に支出させながら、少しでも賃銀を高めて償ふ代りに、却つて賃銀を引下げる。勞働力は有り餘つてゐて、使ひ××た勞働者の代りは幾らでもあるからである。窮迫せる失業者の狀態は、かくして就業勞働者の生活水準を押し下げる。就業勞働者をして、賃銀の切下げと時間の延長と堪へがたき勞働狀態とを甘受せずにはゐられなくする。「締付け工場」を持ち、賃銀鬪爭をやつて組合基金をつく、[illegible]職業的な幹部を養つてゐた組合主義の組合は、勞働力の供給に對する統制力を全く失ふことにより、役に立たない組合となる。ブルヂョアジーが「產業豫備軍」とそれの重みで沈淪する就業勞働者大衆の反抗に對して、ファシスト的彈壓を加へるやうになればなるほど、組合主義の組合とその幹部とは、いよ〳〵公然とブルヂョアジーと手を握る。

八

一九三〇年三月六日、數百萬の失業者が「失業反對國際鬪爭デー」に參加した。ドイツでも、米國でも、イギリスでも、支那・印度でも。

資本主義的合理化反對、解雇反對!

勞働日は七時間!

すべての失業勞働者に、失業婦人勞働者に、失業全期間の賃銀全額を渡せ!

すべての操短勞働者に全賃銀を!

これが失業者軍のスローガンであつた。彼等の「飢餓行進」には、就業勞働者の大軍も加はつた。氾濫する失業者運動は、或は堂々たるデモンストレーションとなつて勞働者大衆の「街頭への權利」を實現し、或は失業者委員會や失業者ソヴィエットに發展し、結晶する

それと共にまた、失業者軍の存在を利用して就業者大衆の搾取を強めんとするブルヂョアジーと抗爭するところの、就業プロレタリア大衆の闘爭は發展する。ドイツにおけるストライキは、ます／＼激烈で頑強になつてゆく。フランスのストライキ數は、前年に二倍したし、イギリスのそれは數倍した。そして全體を通じて、個々の經濟的ストライキから大衆的政治的ストライキに發展せんとする傾向を見せてゐる。フランスのストライキ總數の一六%は、同情罷業に轉化したし、ドイツのストライキの或者は、解雇勞働者擁護のストライキに轉化した。日本においても、昨年は、殆ど一昨年に二倍した爭議人員が闘爭し、大正八年の最高記録を破つてしまつた。爭議そのものもまた、解雇反對、失業手當要求等、生産から驅逐されまいとする命がけの闘爭の性質を帶びてきた。今年に入つては、全國的大紡績爭議や操短擴張反對の闘爭が展開され、失業から自己を防衛せんとする諸爭議は、一月二月中の大阪だけでも百八十を數へられた。

全世界の勞働者の最も進歩した部分の要求と闘爭とは、失業勞働者それ自身を組織し指導することに向けられてゐる。

新しき失業を防止するために、また失業者を再び生産に引入れんがために、從來の賃銀で勞働時間は七時間に短縮せよと叫ばれてをり、時間外勞働の拒絶、大衆的解雇反對が叫ばれてゐる。資本家の負擔において國家が支給する失業手當を平均賃銀の水準にまで引上げることが要求され、かゝる手當を、失業の第一日から、その全期間を通じて、

すべての失業者に例外なく與へることが要求されてゐる。失業者には、一切の税金、家賃、電氣・水道・瓦斯料金を免除せよとも要求されてゐる。そしてこれらすべての要求と、そのための行動とを通じ、組織勞働者と未組織勞働者とを問はず、すべての失業者を失業者委員會に組織し、それを更に地域的に失業者評議會に組織する鬪爭が展開されつゝある。かゝる失業者の組織は、×××組合運動と緊密に結びつけられることにより、就業者と失業者との大衆的デモンストレーションに導かれたのである。

資本主義は、數百萬人の人間に、失業飢餓と苦惱と貧窮の宣告を下した。失業者の××は、この資本主義に對する鬪爭の××に立たずにはをらない。そして、更に何倍も大きな失業者軍をつくり出し、何倍も殘酷な搾取を加重せねば止まないところの、××××××の準備に對しては飽くまでも反對し、恐慌と不景氣の全負擔を勞役者の肩に轉嫁せんとするブルヂョアジーの試みを粉碎すべき×××を戰ふであらう。

失業者大衆の鬪爭は、勞働者階級の最も廣汎な大衆を動かすところの、最も××ある××となるかも知れぬ。彼等は、ますます、現代資本主義の矛盾の激化と××への××の過程において、大衆失業が演じつゝある眞の役割に眼ざめてくるであらう。そして今のところ拔けようにも拔けられぬ大衆失業の袋小路から、その決定的な脱出を××ならしめる唯一の方向をさへ遂には××××××であらう。

恰もこの時、鋭角的な對立をなす二つの事實が失業者大衆の面前にある。

一方には、勞働者の××――そこでは、五ケ年計畫の遂行における輝かしき成功と、農民層構成の變化とによつて、失業者を減少せしめる方向への決定的な轉向がある。

他方には、ブルヂョアジーの祖國――そこでは、勞働者の黨を僭稱する一大政黨の政府の下に、しかもそのあらゆる努力と焦燥とにも拘らず、勞働者の失業は加速度的に增大し、今やその政府と、これにかけられた全大衆の期待とを、まさに根柢から掘り崩しつゝある。

資本主義第三期の再生産論

——日本資本主義生産力と市場の問題についての一考察——

高橋正雄

世界資本主義は歐洲大戰後三つの時期をもつ、と云はれてゐる。第一は、大戰直後の混亂期、第二は、いはゆる資本の安定期、そして第三が現在の第三期。第三期は、安定期において培はれたところの、資本主義に内在的な諸傾向が極めて尖鋭に發現し來つたことをその特徴とする。具體的に云へば——經濟的情勢の關する限り——増大した生産能力と販賣市場の不均衡、(このことは、現代が金融資本の時代であることからして必然に、或は一國内において或は數國に亙つての金融資本と産業資本との利害關係の極めて複雜な結合——對立的或は協動的の——を生ぜしめる。そして、これと一定の關連をもちつつ、次に)熱狂的な取引所投機、等。後者については、我々は、脇村義太郎助教授の次のことばを引くことができる。——

「一九二九年春、東京取引所において日本漁業株式會社の相場の崩壞をきつかけとし、さらに七月八月に起つた日本の取引所の混亂は、金解禁のためといふ特殊事情によつたものと一見考へられるが、決して孤立せる現象ではなかつた。實に各國における殆んどすべての取引所における株式暴落の連鎖の一環であり、口火を切つたものであつた。

一、二の商會の破綻、殊にフランクフルトのアルゲマイネ生命保險會社の破綻は一九二九年九月ベルリン取引所に恐慌を齎した。ベルリン景氣研究所の株價指數は年初の一四六・六から十月には一一七・七に下落した。これと前後してロンドンではハットレイの事業の破綻から大きな打撃が生じた。ウイーンにおいても同じ頃重大な取引所恐慌が起つた。アムステルダムにも波及した。十月になつてニューヨークを中心に「永久の繁榮」の國アメリカにおいて殆んどすべての景氣研究所の觀測、財界有力者達の前途觀を裏切りつゝ未曾有の取引所恐慌が起つた。それは十一月、十二月とくりかへされた。アメリカの恐慌は更に歐大陸の諸國に影響を及ぼした。その影響は一九三〇年になつて東洋諸國にも波及し、日本の證券取引市場を再

び揺り動かした。……』（『ドイツ造船トラストへの道――戦後ドイツ造船業における鐵鋼業と金融資本の隆替』二〇一―二頁。）

前者すなはち生産能力と販賣市場との不均衡については、何等の贅言を要しないであらう。植民地および後進國における資本主義の發達および政治的社會的の不安。各國における高率關税壁の設定。輸出貿易の保護奬勵に關する各國の努力、等々を想ふべきである。

こゝで我々が考察しようとするのは、しかしながら、第三期における世界資本主義そのものではない。かゝる世界資本主義の一環としての、或はむしろ世界資本主義から、云はゞ、捨象されたものとしての日本資本主義である。しかも、再生産行程としての日本資本主義、その生産力と販賣市場との順應過程――いはゆる「矛盾の止揚」の過程――の極めて一面的な、斷片的な考察たるに止る。

一　再生産の問題

問題をたやすく理解するために簡單なことから始めよう。

我々は生存するためには、例へば米を食はねばならぬ。米は云ふまでもなく農業部門において生産される。農業部門は米を生産するために、種子たる米の外に種々なる農業用の道具または機械と、農業勞働に從事する人々とを必要とする。ところで、農業用の機械等は機械製造部門において生産される。この部門では機械を生産するために次のものを必要とする、例へば、機械を作る機械の外に、原料たる鐵や助成材たる石炭と、更に、これに從事する人々。この鐵を生産するのは製鐵部門であるがこゝではまた、機械、鐵鑛石、石炭と、これに從事する人々が必要とされる。石炭は炭坑業部門の生産物であるが、その生産には、採掘のための機械および、例へば汽罐を働かすための石炭と、これに從事する人々が必要である。最後に、鐵鑛石を採掘する部門についてもおなじである。――特に斷はるまでもなく、農業部門で生産された米は、農業部門をも含めた總ての部門の人々に供給されねばならない。もしまた、暖をとるために石炭が必要とされるならば、これもまたすべての人々に供給されるべきであらう。

我々は米と石炭とを消費手段と呼び、その他のものを（石炭は兩者へは入る）生産手段と呼ぶ。そこでさきの事例を一般的に云へばかうである。我々は消費手段を消費することによつて我々の生存を保つことができる。消費手段を生産するには生産手段が必要である。しかも、生産手段は消費手段の生産に役立つ過程において消費してゆく。それ故、消費手段を不斷に消費

しうるがためには、それが不斷に生產されねばならぬ——このことはすなはち生產手段について云へば不斷に消費されることであり、從つてまたそのためには、生產手段は不斷に生產されねばならぬことを意味する。換言すれば、我々が生存しつゞけるためには、消費手段の生產と生產手段の生產とが相並んで同時に行はれねばならぬ。我々はもう一歩を進めよう。此兩種の生產部門は只同時に活動するだけでは不充分である。各生產部門の生產物相互の間に過不足があつてはならぬ。例へば、いかなる事由によるにせよ、石炭の生產額が減ずるならば、石炭を使用する部門の一部又は全部は、從前通りの生產を行ひ得ず、結局において消費手段の生產に影響し、かくして我々の生存を脅かすであらう。もしまた或る部門の生產が多すぎるならば、この生產物の一部は他の何れの生產部門によつても使用されず、從つて、無益な生產がなされたことになるであらう。これは生產に從事する人々を配置する場合にもまた同樣である。かくして我々は、生產手段と生產者の配置が凡ての生產部門を通じて一定の均衡を保たねばならぬことを知る。そして、此均衡は次の如くである。すべての生產部門において人は、過去の勞働の蓄積である生產手段に生きた勞働を加へて生產する。例へば農業部門においては、この二つが結合して一定量の米を生產する。生產手段として蓄積された勞働量を一〇〇、これに附加へられた生きた勞働量を五〇とすれば、米は一五〇の勞働量を代表する。今農業生產に從事する人々がこの五〇を食つてしまうとすれば一〇〇だけが殘る。これは他の生產部門の人々によつて消費されねばならぬ。他のすべての生產部門を一括して生產手段の生產部門と呼ぶならば、そこでは例へば、五〇〇の過去の勞働（生產手段）と一〇〇の生きた勞働とが働いてゐるでもあらう。そして、この六〇〇が今は、生產された生產手段の形で存在する。そこで、さきに殘つてゐた一〇〇だけの米——それは消耗した生產手段の化身である——が、この六〇〇の中の一〇〇と取りかへられ、それによつて、生產手段の生產部門に從事する人々は米を手に入れ、それを消費することができる。殘りの五〇〇は、生產手段の生產部門相互の間に適宜に交換され合ふであらう。

更に進んで考へよう。いかなる社會においても、すべての成員が生產に從事してはゐない。老幼者、病癈者等生理的に生產に從事しえない人口があり、その外、なんらかの理由により——例へば社會的に共通な機能を果す等——生產に從事しない人口がある。これらの人口は生產することなくして消費する。これらの人口が消費する消費手段はいかにして生產されるか？答は簡單である。この消費手段は、生產者によつては消費されな

いといふ意味において、換言すれば生産にはなくともよいといふ意味において、剰餘たる生産物である。從つて、どこかで必要以上の勞働がなされたことを見出せばよい。我々はさきに、五〇の勞働量を代表する米が、その生産者によつて消費し盡されることにして話をすゝめた。しかし、それは必要ではない、否、事實に反してゐる。事實においては、生産者は生存し續けるためには、例へばこの半分、すなはち二五あればよいであらう。彼は五〇だけの勞働をするが、その全部を必要とはしない。かくして、二五が必要な生産物(或は勞働)、二五が剰餘たる生産物(或は勞働)といふことになる。これは「他の生産部門」についても同樣。そこで我々はいまや七五の剰餘生産物たる米をもちそれに應じて若干の人々——もし生活標準がおなじならば、生産者と同數の非生産者——を養ひうるわけである。いままで我我は、勞働を分けてたゞ過去の勞働(生産手段)と生きた勞働となしたが、後者を更に必要勞働、剰餘勞働とに分たねばならない。だがいづれにしても、さきに見たやうな關係が各部門に存在しなければならないことに變りはない。

なほ、右の剰餘生産物は消費手段の形をとることを絶對的に必要とはしない。さもなければ、最良の場合を考へても、社會の生産は年々同じことを繰返へすのみであつて、その社會は一歩も進歩するをえないであらう。進歩する社會においては、剰餘生産物の一部は生産手段の形を以つて存在する。そして、他の一部をもつて生産に從事する人々を養ふであらう。かくすることによつて、生産の規模を擴大してゆくことができるであらう。この場合にもまた、さきに我々が見たやうな均衡關係——ます〳〵複雜になるとは云へ——が保持されねばならぬことは云ふまでもない。

ともあれ我々は消費することをやめえないと同じく、生産することをやめえない。我々の生産活動と消費生活とをかく不斷の行程として見る時、それがすなはち再生産の行程である。それは例へば一年を期間とする生産行程の不斷の更新或は擴大であらう。——以上において我々は再生産とその問題とを見たわけである。

しかしながら右の如く理解された再生産は抽象的であり一般的である。その意味においてそれは、どの社會にもあてはまり、どの社會にもあてはまらぬ。我々の問題は資本主義社會の再生産であり、從つて資本の再生産である。

我々は、「ロシヤにおける資本主義の發達」の著者に從つて次の如く問題を展開しよう。第一に資本主義國の總生産物は、個

個の生產物とおなじやうに、三つの部分から成り立つ。すなはち、一、不變資本。二、可變資本、三、剩餘價値の三部分から成り立つ。(さきに我々が、過去の勞働、必要な勞働、剩餘の勞働と云つたものに相應する。)第二に、資本主義生產は二大生產部門、すなはち第一、生產手段の生產部門、第二、消費手段の生產部門に分れてゐるとが必要である。云ふまでもなく資本主義生產は交換價値に基いて行はれるのであるから、こゝに我々が云ふことはすべて、素材の方面についてのみならず、交換價値についても考へられねばならぬ。資本主義の再生產は、一定の價格を前提するのであるから、價格の變動がまた極めて大なる意義を有する。重複の嫌ひがあるが、我々は資本主義の言葉をもつてこの過程を述べよう。單純な再生產、すなはち生產行程が同一規模を以つて繰返される場合には、次のことが必要である。第二部門の可變資本と剩餘價値(これは消費手段の形をとつてゐる)とはこのおなじ部門の資本家と勞働者によつて實現される。更に、第一部門の可變資本と剩餘價値(これは生產手段の形をとつてゐる)は、實現されるためには、第一部門に働く(すなはち生產手段の生產に從事する)資本家と勞働者のための消費手段と交換されねばならぬ。他方において、第二部門の不變資本(これは消費手段の形をとつてゐる)は、次年度に新に生產に入り込みうるために生產手段として實現されねばならぬ、かくして生產手段の形をとる可變資本と剩餘價値が消費手段の形をとる不變資本と交換される。第一部門の勞働者と資本家とはかくの如くにしてその生活資料を獲得し、他方第二部門の資本家は自己の生產物を賣却し、新なる生產のために不變資本を獲得する。單純再生產においては、この二つの量はおなじでなければならぬ。(剩餘價値が蓄積されて資本に轉化する場合、すなはち擴張再生產の場合には、第一部門における可變資本と剩餘價値の和は第二部門の不變資本より大でなければならぬ、すなはち、こゝで問題となる限りにおいて、生產手段の量は消費手段の量より大でなければならぬ。それは、生產の擴張が前提されてゐるのであるから、當然である。)また、生產手段の形をとつてゐる不變資本(第一部門)が殘つてゐる。これは一部は同一部門における資本家間の交換によつて實現される。例へば鐵と石炭との如き。また一部は同一企業において生產に使用されることによつてである。さきに我々の見た石炭、種子たる米、等。資本主義における再生產は右の如く理解されねばならぬ。

我々の課題に從つてこゝで市場を問題としよう。我々がさきに述べた再生產の緣の結び目はすべて市場である。勞働力の市場については云はないとして、消費手段の市場においては資本

家と勞働者、資本家と資本家が取引をなし、生產手段の市場においては資本家と資本家とが取引をする。取引の圓滑なる遂行のみが再生產の圓滑なる進行を保證する。或は兩者は同一物の兩面である。かくて、再生產の諸條件はすべて市場の狀況にかかる。

それ自身完了せる資本主義國が理論的に可能であることゝ、現實において資本主義が自己以外のものと一定の關係に立つこと、は別である。具體的に云つて、一つの資本主義は――それ自身市場ではあるが――その同じ國內においては他の樣式の生產と市場關係を結び、國外においては他の資本主義および他の樣式の生產と市場關係を結ぶ。從つてその再生產の行程もまたこの全領域において行はれる、云ふまでもなくさきに我々が見たやうな諸條件を充しつゝ。

當該資本主義それ自身の責任!? からにせよ、或はそれにとつては外的な他のいかなる原因からにせよ、もし、圓滑なる再生產の條件が攪亂されるならば、そのことは――云ふまでもなく經濟的領域に觀察を限定する限り――必ずや市場と生產能力との均衡關係の不安定として、從つて資本主義そのもの、困難として現はれるであらう。――かくて我々は始めて、問題の入口に到達した。迂回しすぎたかもしれぬ。だが、以上の論述の後においてはいくらでもこの先きを急ぐことができる。

二　日本資本主義のための市場の狹隘化

(1)　外國市場の狹隘

一國の生產活動の何パアセントが外國市場を目あてにしてゐるか――これを見出す方法はいろいろあるが、今、それには關說せぬ。例へば、イギリスについては總生產の少くとも四分の一、アメリカについては八パアセントと云はれてゐる(橋研究所譯編「帝國主義の現段階」九七頁)。日本については、大正十二年中の事實からして一三・七六%といふ數字があげられてゐる。(大阪每日發行「エコノミスト」、大正十五年四月一日號、二六頁)。この數字を一應信用するならば、日本資本主義は、從つてその再生產は極めて高度に外國市場に依存してゐることが知られる。そして、その後、このパアセントは增加し來つたと推定すべきであらう。然るに東洋經濟新報(昭和五・五・二四)の報ずる所によれば、一月―五月の輸出貿易は、本年においては昨年の二四・三%を、一昨年の一八・一%を減じてゐる。輸出品物價指數の下落を考慮に入れゝば、本年は昨年の一〇%減にあるがこのことは必ずしも、右の打擊の實質を減殺するものではないであらう。不斷の發展

をその本質とする資本主義にとつて、かくの如き發展はその影響する所甚大であると云はねばならぬ。

何がかくの如き市場の縮小を生ぜしめたか？　それは一時的なものであらうか(？)いろいろな原因があるであらう。例へば最近の「海外經濟事情」(外務省通商局編纂、昭和五　五・二六)を見れば、そこには「最近の諸外國關稅改正概要」として米國、印度、濠洲、加奈陀(？)、蘭領印度における、我が國に不利な關稅改正運動が紹介されてゐる。更にまた外國市場縮小の原因として支那・印度における政治的・社會的不安定・銀價の暴落、日本の金解禁の影響等があげられるであらう。しかしながらこの何れもが資本主義第三期の內在的本質的な傾向の直接或は間接の表現でなくて何んであらう。この外例へば「海外經濟事情」の殆んど每號に各國の輸出奬勵施設が報道されてゐる。このことは、狹まりゆく市場に對し各國の競爭がそれだけ激烈になり、かくてますます市場を狹小ならしめることを意味する。かくて現在においては、我々は、海外市場が縮小し、それが全體の再生產行程に大なる反作用を及ぼすことを忘れてはならぬ。

(2)　市場としての農村

我が國の農村においては資本主義的生產方法が支配してゐるないことは云ふまでもない。しかし、農村はすでに深く商品生產の中に入り込んでゐる。この限りにおいて農村を日本資本主義の一つの市場として考察することができる。農村は都會に、すなはち不正確ではあるが資本主義のために消費資料または原料を供給する。都會の資本家および勞働者等はこれを購入する。農村はこの取引によつて貨幣を獲得するが、今やこの貨幣をもつて資本主義に對する市場として現はれる。かくして種々の生產手段または消費手段たる工業品を購買するであらう。かくして農村と都市との間には、さきに我々が種々なる生產部門間において見たとおなじやうな代謝關係が存在する。與ふることは得ることである。もし都會が農村から購買する際に不當に廉價に買入れるならば、農村の購買力はそれだけ減じ、市場としての農村はそれだけ縮少されるであらう。

那須皓教授は大正十四年の本邦(內地)農產物價額を計算して四四三九百萬圓としてゐられる。そして米麥の二五億圓、繭の八億餘圓等がその筆頭である。我が國における統計の不備はこの中どれだけが商品として販賣されるかを示さない(「日本農業論」一二頁、二五八頁)が、恐らくはその半以上を販賣するでもあらう。然らば農村が販賣する商品、農村が購買する商品の價格に於て我々は現在何にを見るであらうか。たゞその一つ、本年の繭價は「三割安」をあければ充分である。そして農村が購買す

る商品は一として獨占價格をもたないものがあるであらうか。更に我々は最近の調査として農村の負債四〇—五〇億といふ數字をもつ。それは全部が都市から農村への貸金ではないであらうが、金融事情が中小資産者に不利に轉換しつゝある時、一割——一割二分と註される利拂は、農村の購買力を、從つて市場としての農村の重要さをますます縮少するであらう。租税その他の公課の配分は云はずとしても、鋏價の發落——それは日本の産業と世界資本主義の覇者アメリカを結ぶ太い紐帶である——といひ、獨占價格といひ、また負債の重力といひ——こゝにもまた我々は現段階的な現象を見ざるをえない。

(3)　強制的な諸價値の値下り

第三期の一つの重大な特徴として有價證券取引所市場の大投機＝大恐慌があげられることは、さきに指摘した。我が國ではこれはどんな風になつてゐるだらうか。

銀行・株式會社・證券取引所等の信用制度が資本主義社會において如何なる機能を演ずるかを究めることは、いま、その所でない。古今幾多のローとイザアク・ペレイルのことを論ずるのも、また、いま、その所でない。我々は「信用制度なるものが過剰生産竝びに商業上の過剰投機を促す主要槓杆として現はれる」ことと「性質上伸縮自在なる再生産行程がこの場合強いて最大極限まで擴大せしめられる」こと、また「信用制度なるものは斯樣にして生産力の物質的發展と世界市場の成立を促進する……と同時に、この矛盾の激烈なる爆發を、恐慌を速かならしめる」(同上、五七〇頁)ことを一般的に云ふに止める。

そしてこゝではたゞ具體的に我が國における株價の値下りを見よう。例へば、たゞ一つの生産部門における最大の企業若干についてすら次の如き數字があげられてゐる。(福岡日日新聞、昭和五・四・一二) すなはち、鐘紡、東洋紡、合同紡、日本紡、富士紡、日清紡、福島紡の七大會社の總株數について、昨年四月十一日と本年同日とを比較するに二億四千萬圓の下落を來したといふ。また東洋經濟新報の調査によれば、東京株式取引所上場株の中の一三七種について、今年一月と一箇年半前とを比較すると三四億圓餘から二三億圓に、約三割すなはち一〇億餘の値下りを示してゐる(同誌、昭和五・三・八號二六頁)。また、五年四月末と四年六月と比較すれば二割五分餘、四年三月と比較すれば三割一分餘の下落となつてゐる。(同誌、昭和五・五・二四號、三八頁)。極めて概括的な計算が許されるならば、このことは、過去一箇年において——我が國の總拂込資本金額の株價から見て——少くとも三〇乃至四〇億の減價となるのではなからうか。云ふまでもなく、「各會社の株式は、現實の資本を、此等の企業に投じられた機能資本を、換言すれば、此等の企業に資本として支出する目的で株主が前貸した所の貨幣額を代表するもので

ある。（斯くいへばとて、此等の株式が單なる評價を代表するに過ぎぬ場合もあり得ることを排除するものではないけれども、この資本は、一方には所有名義たる株式の資本價値として、他方には此等の企業に現實に投ぜられた、又は投ぜらるべき資本として、といふ風に二重に存在するものではない。それはたゞこの後ちの形態を以つて存在するのみである。而して株式なるものは、この資本に依つて實現さるべき剩餘價値の比例分に對する所有名義に外ならない」（同上、第三卷下・一〇頁）。そしてこの所有名義たる株式はその配當の還元されたる貨幣額として通用する。それは――或は擬制的と呼ばれ或は社會的に虛僞なるものと呼ばれるにせよ――ともかくも一定の價値を、貨幣量を、購買力を代表する。こゝに資本主義生產に對して有する株式の意義がある。資本主義生產は、從つて其再生產は市場をめがけて、購買力をめがけて行はれる。そして、株式はまさにかゝるものなのである。株式が現實に貨幣に換價されて消費手段に對する市場を形成するにせよ、或は抵當となることによつて生產手段に對する市場を形成するにせよ、それは、そしてその一定の大いさは、現實の再生產にとつての缺くべからざる一モメントとなつてゐる。もしこれが極めて大なる變動を蒙るならば、直ちに再生產行程の大なる混亂を生ずるであらう。そして先きに見たやうな大なる變動を、我々は我が國において現實に見るのである。さきに我々が引用したことばに續けて、[illegible]敎授は云ふ、「かくて派生的需要により獨占的時代にあつては、現在的過剩生產となり、一般的世界經濟恐慌が接近する。」（同上二四頁）株式のみでなく、その他の證券、地價等のこともこゝに併せて考へるべきであるが、今は觸れぬ。いづれにしてもこの方面からする市場狹隘の事實が存在することは明かである。

（4）　自己の市場としての資本主義

こゝでこのことを考察するのは奇異に思はれるかもしれぬ。しかし、「市場の大いさといふことには二つの意味がある。第一は消費者の分量すなはちそれの數である。併し第二には相互に獨立せる職業の數でもある」（剩餘價値學說史、第三卷、二二三頁）。消費者の數の最も多くを占めるものは、云ふまでもなく、勞働者である。從つて「商品の購買者としての勞働者は市場にとつて重要である。然るに自己の商品――すなはち勞働力――の販賣者として云へば、資本家社會は、それを價格の最低限に制限する傾向を持つ」（資本論、第二卷、三八五頁、註）。數が增加するか、或は、一人宛の賃銀が增加するか、それとも兩者共に生ずるかでなければ、この市場は發展するをえない。然も資本主義は發展する市場とのみ兩立する。我々は現在の日本資本主義において何を見るか？　まさに就業勞働者の減少と賃銀の低下とであつてこゝに――このことに關聯して提起されつゝある問題はともかく

くとして——市場の縮少の强き傾向がある。私はこゝで怪しげな統計!? を掲げて讀者を煩はすことをなさないであらう、なぜなら、「農村と家族制度に蔽はれてゐる我が國の失業問題はそれを計量する何等の方法も未だ見出されてをらない」から。(大阪地方職業紹介事務局長遊佐敏彦氏「社會不安と失業」、大阪朝日、昭和五、五、一二)

それならば第二の意味の市場は如何? それは、資本主義社會について云へば、各産業部門間における資本家と資本家との間の生産手段の取引を主として意味することになるであらう。冗慢な説明を省き、たゞ數字をして云はしめよう。東洋經濟新報は各種の數列(貨幣額ではなく數量について)の自然增又は減を控除して、昨年と今年とにつき增減の指數を算出してゐる、卽ち左の如くである。(詳しくは昭和五・五・二四號四四頁以下參照)

石炭消費高	(一月—三月累計)	減	一九%
鋼材供給高	(一月—二月累計)	同	一二
銑鐵輸入高	(一月—三月累計)	同	三七
銅消費高	(一月—二月累計)	同	二二
セメント消費高	(一月—三月累計)	同	二一
米材横濱入荷高	(同　上)	同	八二
麵粉供給高	(同　上)	同	一
苛性曹達供給高	(同　上)	增	四七

(大正十二年一月—三月を一〇〇とする指數)

我々はこの外、國有鐵道發送噸數について、手形交換高について、いづれも同樣の傾向を指摘することができる。(前掲東洋經濟參照)

豫定の紙數が盡きようとしてゐる。私は先きを急がねばならぬ。私は、上來論じたるところによつて、我が國資本主義にとつての市場の縮少を證明しえた、と思ふ。先に述べたやうに、再生産行程は生産と消費、販賣と購買との統一である。一の縮少と他の伸張とは到底兩立することができぬ。然らば、以上の如き狀勢に當面して、或は、以上の如き狀勢をつくりつゝ、生産能力は如何に善處しつゝあるであらうか? 簡單にこれを見よう。

三　生産力の市場への順應

(一)　過剩資本の破壞

こゝで過剩資本の問題を展開すべきであるが、いまは、過剩資本の存在から出發する。資本家生産は云ふまでもなく賣らんがための生産である。從つて、市場よりもヨリ大なる生産といふことは一の矛盾である。しかしながら現實においては、資本家間の競爭は——技術の發展を通じて——必然的に過剩生産に驅りたてる。過剩蓄積を、すなはち過剩資本を生ぜしめる。もし全部の資本が運轉せしめられるならば利潤率の低下を來す。或は、一部の資本は他の部分の資本を犧牲としてのみ利潤率をお

ゆることができる。かくして過剰資本は如何様にしてか整理されねばならぬ——一部の資本は休用状態に置かれる」か或は「その一部は破壊される」かせねばならぬ。そして資本主義の自然律はまづ第一に競争による資本の破壊でなければならぬ。我々は本年に入りて特に激増せる「事業会社の減資解散」の数字をあげることができる。また資本が現實に倒壊し、「その職工の大部分が帰郷することさへも出來ない」例がある。すなはち、かゝるものとして「本年一月より倒壊工場は五十八、その解雇職工一萬五百餘人に逹する」といふ（大阪毎日、昭和五・五・二一）。恐らくこれを「計算する何等の方法も未だ見出されてゐない」であらうが、これこそ最も強く我々の感得するところであらう。この點において今、日本は恐慌状態にあると云ふことができる。

（2）資本の休用——操短

しかしながら、今日においても過剰資本の整理をなすものは競争のみであると云ふならば、餘りにも時代に盲目なるの謗を免れぬであらう。現代こそまさに獨占資本主義の時代である。獨占の形成されない重要生産部門は一つもない。從つてそこでは、資本の整理もまた、競争以外或は競争以上のものによつてなされないであらうか？　何人も豫期するやうに、「協定」或は「決議」による資本の休用がある。すなはち操短である。

昭和五年五月現在に於て我々は次の如き操短一覧表を見る。

新紡三割七分（但し六月十六日より[illegible]、[illegible]）、[illegible]（[illegible]）六日中間協定[illegible]、生糸二割、[illegible]割、[illegible]、時計四割、洋紙三割五分、新聞用紙一割見當、板紙二割、石炭一割、セメント五割三分、銅材三割、硫酸[illegible]、任意操短のものに製粉、製麻。これは前掲東洋経済新報所載のものであるが、大阪毎日新聞によれば、この外、羽二重三割、亜麻五割、人造肥料二割等があげられてゐる（同紙、昭和五・五・七）。これらは重要産業部門のみである。地方的な産業、或は中小産業をも考慮に入れたならば蓋し莫大なものがあるであらう。

過剰資本の整理に先行し或は随伴して起りつゝある過剰労働の整理は、さきに我々の觸れたところである。

我々の課題に從つて、不備的ながら以上の考察をなした。我々は日本資本主義の市場が狭隘化しつゝある事實を見た。そしてそれに順應せんとする資本の意識的或は無意識的な行動を検した。理論的に不正確な表現ではあるが、我々が検した資本のこの行動は、現在の市場を目標としてなされてゐる。然も、資本のかゝる行動それ自身が必然に市場の狭隘化を強める。一回或は數回の再生産行程の後において、再び今日と同じ状態に至らないであらうか？

またもし我々が、資本の破壊または休用の一面のみを見て資

資本の形成を見ないならば餘りに一面的であらう。事實、操短の行はれる部門においてこそ、有力な資本による最新技術の設定および採用がなされてゐる。それは現在においては潛在的な資本たるであらう。しかしながら、將來において――例へば操短の更新期において――自ら現實的資本たることを要求しないであらうか。もし要求するならば、――そして要求せんとするからこそそれは資本として投下されるのである、――再び資本の間の競爭が激發し、再び今日と同じ位置（恐らくヨリ高度のものであらう）に至るのではなからうか。「擴大された生産條件と、擴大された市場と、增進した生産力とを以つてする同一の循環が再反復されるであらう」か。

かくして唯一の救ひ手は「擴大された市場」のみ。そしてもしそれが求めうべくんば、たゞ、海外においてのみであらう。然るに、海外の市場においてこそ、まさに、各國資本の「白兵戰」（印度の綿布關稅に對する紡績聯合會聲明書の一句）が酣である。この白兵戰において生産費の低下が必要である。そして生産費の低下はとりもなほさず合理化の道へ通ずる。賃銀の低下、勞働强度の濃度化、中小企業の整理、新技術の採用――合理化はまたそのまゝ國内市場のヨリ强き狹隘化へ通ずる。かくてまたヨリ强き海外進出への促迫が起る。前提は結果となり、結果は前提となる。高率の獨占保護關稅によつて國內市場を確保するも以つてダンピングを行ふに足る獨占利潤の獲得は困難である。資源の貧弱もまたマイナスの作用をなす。日本資本主義はかくて進むも退くも大なる困難の前に立つであらう。

「擴大された市場」――その絶對的可能と不可能とを我々は今、斷定することはできぬ。さきに我々があげた市場狹隘化の事實およびその背後にあつてそれに作用する諸事由は、相互に一定の關聯を持ちつゝも、必ずしも不斷に同一の方向に動くものではない。或ものはその强さを弱めるであらう、或るものはその方向を變ずるであらう、また逆の場合もあるであらう。その度毎に日本資本主義の市場を洗ふ波濤の干滿もまた異なるであらう。たゞいづれにもせよ、それが日本資本主義再生産行程の何等かの因子と變化となることによつて、日本資本主義そのものに作用し反作用を受けるであらう。蓋し再生産こそ――我々がさきに見たやうに――使用價値と交換價値との、商品と貨幣との、販賣と購買との、生産と消費との、資本と賃勞働との、その他等々の關係の統一を表はすものであるから。そして、日本資本主義は、世界資本主義の、或は世界經濟の再生産行程の一環として、かの「第三期」的色彩を受けてゐる。この色彩の下においてのみ、日本資本主義の運動はよく理解されうるであらう。

（一九三〇―六―三）

「全國勞働組合同盟」の結成と統一戰線への展望

森戸辰男

はしがき

一九三〇年六月一日、大阪中ノ島公會堂において日本勞働組合同盟と勞働組合全國同盟との兩組合を中軸とする合同大會が開かれ、新たに全日本の一道三府十六縣に亘る四萬の大衆を包容する「全國勞働組合同盟」が結成された。それは分裂に分裂を重ねて來つた我國の無産階級運動を合同・統一へと方向轉換せしめたる最初の行動として極めて意義深きものである。さうして大會の内容も亦その社會的重要性にふさはしく、感激と緊張と和親と鬪志とに溢れたはち切れさうな充實さを示した。私は本誌からこの合同について私の感想を書くことを求められたが、別に新たな感想もないので、同大會の席上に述べることを許された私の祝辭の手稿に、餘りに興奮してゐる千餘大衆に對してふさはしからぬために省略したところの部分（特に五箇）を補足して、私の責を塞ぎたいと思ふ。内容が語られた當時の事情に制約されて、稍ゝ全面性において缺くるところある點については、特に讀者の諒恕を乞ふ次第である。

一

諸君の記憶のいまだ新たな五月一日！　滿堂の諸君の大半はここ、日本最大の産業都市・大々阪の中心たるこの同じ中ノ島の向の廣場に勢揃ひして、全世界のプロレタリアとともに、メーデーのデモンストレーションを舉行された。頻々たる資本の攻擊を思はせる篠つく雨にもめげず「資本家的産業合理化絕對反對」を最先とする二十有餘のスローガンを高く掲げて、諸君は全資本家階級の前に統一したる無産階級團結の威力を展示されたのであつた。しかし、何よりも殘念なことは、この外面的一時的な統一がいまだ内面的・永續的統一によつて裏付けられてゐなかつたことだ。さうして、ために、その示威力もまた、這般の事情に精しい支配階級者に對しては、著しくその效果を低

けられざるをえなかつたのである。

丁度一ケ月後の六月一日！　產業資本の總本山の眞ン中のこの同じ中ノ島公會堂において唯今開かれてゐるこの合同大會は益々露骨になりつつある資本家階級の攻撃に答へた第二の——私の信ずるところに從へば、遙かに重大性に富むところの——デモンストレーションであり、プロテストである。資本攻勢は世界的である。それは大戰後、世界的規模において益々深刻化し來つた資本主義の矛盾を彌縫し、勞働者、農民其他小・中產者の犧牲において、資本主義の危機を切拔け、その「安定化」又は「再建」を期さうとする、大資本王らの、同じく世界的な命がけの努力にほかならぬ。彼等は國民の大衆を失業と窮乏との、從つてまた不健康と無教養と道德的頹廢との、深淵につき落すことによつて大資本家の利潤率を擁護しようとするこの許すべからざる我利的努力を『產業合理化』の美名によつて神聖化しようとしてゐるのだ。さうして我國においても亦資本家階級は夙に、諸君の多くがいまだ產業合理化の名をだに耳にせぬ間に、着々として產業合理化を實踐し來つた。濱口內閣の功績（？）はただ、既に大資本の產業對策となつてゐたところのこの產業合理化を國家的政策の政治的段階へと引上げたことに存するのである。從つて濱口內閣が產業合理化を國策として採用するとせざるとに拘らず、勞働時間、勞働強度、賃銀問題、大衆解雇等を通じて、既に諸君は資本の攻勢の何者たるかをひしひしとその身に體驗され、のみならず、事情の許す限り、諸君の產業的諸陣地から、鬪爭を以てこの資本家的理不盡にプロテストされつつあるのである。最近における勞働爭議の激增はなによりもよいその證據だ。即ち昭和二・三年度においてそれぞれ五七五と四一〇であつた勞働爭議數は、昨年に至つて一躍一二二五に上り、本年に入つては一月より四月までに既に爭議件數四三九、參加人員五九五五一を數へ、之を昨年の同期に較べると、件數において百三十餘、人員において二萬といふ夥しい增加を示してゐる。資本の攻撃に對する勞働者諸君の抗議と反抗とは職場において工場においてかくの如くに高まりつつあるのである。單にそれのみではない、この頻發する資本家の攻撃と之に伴ふ勞働爭議は諸々の無產政黨、諸々の勞働組合間における共同鬪爭の機緣となり、その重大なるもののみについて見るも、吾々は既に失業反對、鐘紡減給反對、東京、神戶兩市電爭議應援等等のための共同鬪爭委員會を持つことができたのである。尤も多くの場合、その提携と活動とが形式的・表面的の域を脫してゐないこれらの共同鬪爭委員會には、望まるべき多くのことが殘されてゐるとはいへ、これまた、無產政黨合同の機運の進展

と列んで、我國資本家階級に對する無產階級の一大示威たるを失はぬであらう。

しかしこれらすべての示威と反抗とにも拘らず、最近、我國の勞働階級者が資本家階級の攻擊に對してなしえた最大の示威と反抗は、全國四萬の組織勞働者を代表する諸君が、今日ここに、敵階級に對する熾烈なる鬪志と階級的同志に對する熱き信賴とを以て結ばれるこの合同の實踐、この事實を措いては他に之を求めえないと私は考へるのである。

二

なぜであるか。久しい間我國における無產階級運動の意義ある大會は、政治戰線においても、經濟戰線においても、殆んど分裂大會であつたかの觀さへある。私に強い印象を、そして日本の勞働運動史上には深い足跡を殘した組合大會について云へば、第一は、大正十一年九月、當大阪の天王寺公會堂において開かれ、五十九團體參加の下に、總同盟の民主的集中主義と反總同盟派の自由聯合主義とが火花を飛ばして相爭うたところのかの「總聯合創立大會」であり、第二は、大正十四年三月神戸基督教青年會館に開かれ、左右兩翼の對立が激化したところの總同盟の年次大會と、それに續いて同年五月、同市同所に開かれ、多くの人々にとつて[illegible]新たな[illegible]として[illegible]日本勞働組合評議會の創立大會[illegible]。これはいづれもその社會的重要性にふさはしい緊張と充實とを持つた文字通りはち切れそうな大會ではあつたが、悲しいかな、あるひは分裂の大會であるか、あるひは分裂を背景とする悲痛なる獨立の大會であつたのだ。かくの如き事態のもとに、いま、諸君は我國勞働運動史上まさに一新時代を劃すべき最初の合同大會に合同して、統一を熱求する大衆の要望に向つて最初の福音を送られんとしてゐる。資本に對する鬪爭への悲壯なる決意の中にも、諸君の面上に、抑へがたき喜色の漂うて居り、洋々たる前途に對する希望と感激の涙さへが光つてゐるのは、けだし故なきことではない。

人々はいふ、世界は久しい資本攻勢に對して、いま、勞働攻勢の時代に這入つた、と。しかしこれは特に我國については其儘には肯定しがたい主張と思はれるが、少くとも我國の勞働者はいまだ攻勢への轉化を組織的に、效果的に遂行しうる狀態にはおかれてゐないやうに思はれる。

なぜなら、そのことのためには、まづ四分五裂したるその勢力を結集・統一することがその一大要件であるのだから。恰も此の時、攻勢準備の志向を持ちつゝ我國組合戰線の統一に向つ

一下歩を踏み出すところの本合同大會こそは、なんらの誇張なしに最近我國の勞働者運動が資本攻勢に對して答へた最大の、さうして最も約束的なプロテストであり、デモンストレーションであるといふことができる。從つて本大會は離反してゐた同志が再び舊交の手を握りかはすところの和氣あい〳〵たる懐舊と歡喜の感傷的場面でのみあるのではない。その基調においてはそれはいや高く築かれつゝある資本家の城砦に對して腕を組んで突喚せんとする颯爽たる戰士の嚴粛・悲壯なる勢揃ひであるのである。

三

私の個人的な心持を云ふのを許して貰へば、私はかの友愛會時代から多大の關心をかけつゝ總同盟の生成と發展とを見守つて來たものだ。いまだ統一を失はなかつた總同盟が久しく我國勞働運動における光輝ある指導的役割を果し來つたことは私にとつてもまた一つの喜であつた。しかるに、其後それにはかの悲しむべき分裂が、一度、二度、三度來り、總同盟はいたましくも、四つの支流に分たれた。たとへそれが必然の過程であつたとはいへ、これら數次の分裂は我國の勞働運動史上における極めて遺憾な出來事であつたに違ひない。しかもこの分裂したる總同盟の四つの流れは依然として我國勞働運動の主流をなし來つたのであるが、いまこれらの四つの流れの中のヨリ重要なる二つものがここに再び合流するに至つたのである。私は大會の役員及來賓の顏ぶれを見るとき、統一されたる光輝ある總同盟が再び復興したのではないかとさへ疑ふ。そこには大矢、望月、山内、藤岡、上條、棚橋、加藤、麻生、山名等々の諸君の顏が見える。遺憾ながら鈴木・松岡・西尾・赤松等の諸君は見受けられず、野田、渡邊、山本、中村、野阪等の諸君も參加されてはゐない。これら左・右兩翼を除けば、そこには全盛時代に於ける總同盟の鬪爭的指導者の殆んどすべてが網羅されてゐるとも云ふもあえて過言ではない。それはまさに光輝なる總同盟の新たなる復活である。

ここに參集されてゐる年若き鬪士諸君は幾分懐古的なこの私見にあるひは賛せられぬかも知れぬ。それは前途をのみ見つめてゐられる青年諸君にとつてはまことにふさはしきよいことである。だが、諸君！　かつて諸君の僚友が華々しい革命理論に共鳴しつゝ所謂全面的政治進出をなし、その高踏的理論の高塔から諸君の「組合主義」を痛罵したとき、敢然、現實的鬪爭主義の見地に立ちつゝ勞働組合の堅壘を守り通したのは諸君ではなかつたか。他方において、一部の勞働指導者が階級的敵者と

の取引におけるその階級的裏切を正當化せんとしたとき、鬪爭として鬪爭的階級精神を擁護したのもまた諸君ではなかつたか。さうして極左的感激の陶醉的誘惑を斥けて、現實の泥濘の中に堅實な鬪爭を戰ひ拔くとともに、安易なる階級妥協への右翼的轉落を警めつつ階級的立場を嚴守すること、これこそかつての總同盟の傳統的精神ではなかつたか。私が總同盟の復興をいふ眞意は、實はこの光輝ある總同盟傳統の精神の復興について云はんとしたのである。さうしてかつての總同盟のこの精神を最もよく體現してゐる兩同盟の合同は極めて自然であるとともに、現在の時局においては、上記の意味において極めて時宜に叶へるものといふことができる。

四

新合同組合は四萬に餘る組織勞働者をその背景としてゐるとのことである。今日我國の組織勞働者は約三十萬と云はれてゐるから、單なる量的考察よりすれば、我國勞働者運動の組織的勢力の約六分ノ一がそれに代表されるわけである。しかしョリ詳細に考へて見ると、この三十萬中には階級的立場に立つとはいひがたい團體もかなりあるし、また十萬の海上勞働、二萬の交通勞働も含まれてゐるのだから、恐らく新組合は階級的立場にたつ一般的陸上勞働組織中に位置すべきところの最も有力なる鬪爭的經濟團體ではないかと私は思つてゐる。

しかし吾々の特に重視しなければならぬのはむしろ新團體の質的考察である。勞働組合の主要任務は日常鬪爭の大衆的組織たることに存する。したがつて大衆を持たざる勞働組合は片輪者たらざるをえないが、されはとて組合の重要性を組合員の頭數によつてのみ測定しようとするのは、とんだ間違ひと云はねばならぬ。また、經濟鬪爭の効果的な遂行は熾烈なる鬪志と的確なる戰術のみを以つてしてはいまだ期しがたい。それを勝利あらしめるためには、尚、一定の軍資金を持つてゐなければならぬ。其他、尚、組合の健全なる發達のために或程度の財政的基礎が必要とされることももとよりであるが、しかし、組合金庫の重量は鬪爭團體としての組合の價値を表示するものでは斷じてないのである。更に、組合はそれが階級的鬪爭組織であるがためには、階級意識と鬪爭精神とによつて滲透されてゐなければならぬ。とはいへ、大衆から遊離した前衛的宗派團體の「左翼理論」の高度も亦勞働組合の重要性の決定條件とはなりえない。否。勞働組合はこれら諸條件を併せ有してこそ、即ち、階級的立場と鬪爭的精神を指導原理としつつ、しかも現實的態度を失はずして、果敢に執拗に日常鬪爭を遂行するところの、一定

の財政的基礎と嚴密なる紀律・統制とを有する大衆的團體であつてこそ、始めて健全なる勞働組合と稱することができるであらう。或はその組合員數の多いといふ點において、或はその財力の豐富などいふ點において、或はその信奉する理論の急進的であるといふ點において、新組合を凌駕してゐる組合系統又は個々の組合がないのではない。だが、これらの諸特質を綜合するところの大衆的鬪爭團體たるの資格においては、恐らくは、諸君の創設せられる新同盟の右に出づるものは他に求めがたいのではないか、と私は考へてゐる。

五

新同盟の社會的重大性は、けれども、それの光輝ある傳統においてよりも、それの堅實なる現在の狀態においてよりも、むしろそれの多望なるべき將來において存する。この意味においては、新同盟の社會的重大性は、諸君によつて代表せられてゐる全組合員の掌中にあるともいふことができる。そしてそれに應じて諸君の任務と責任ともまた極めて重且つ大ならざるをえないであらう。

新同盟が我國無產階級運動進展のために果すべき使命は幾多あるが、その中、私は現段階において特に緊要なる戰線統一の問題に關してのみ特に諸君の注意を喚起したい。勞働組合運動に直接關係ある統一はいふまでもなく、經濟戰線の統一であるが、それには消極方面と積極方面とがある。そしてここに私が戰線統一の消極方面といふのは、諸君が「再び分裂せざる合同」を強調せられるのと同じ意味において、合同組合を再び分裂させないといふことを指すのである。變轉逆睹しがたき時局に置かれ、一方からは尖端的理論と英雄主義の、他方から、妥協と偸安の、誘惑に絕えず曝されつつ、しかも屈伸性と發展性を失ふことなく、統制ある緊密な組織として新團體を盛り立てて行くことはたしかに至難の業である。さうしてかかる難事は、それがいかに感激的であらうとも一回の誓約や決議によつて成しとげられるものではない。したがつてそれは組合指導者及大衆の不斷の聰明・自重・忍耐・戒心等と組合組織の合理的な改造によつてのみ、始めて或程度の達成を期しえられるのである。ところで團體の統一性を傷けることにおいて最も危險なるものは、分派的對立の存在である。團體には常に反對派があり、そしてそれは團體の發展のためには不可兒の要件である。併しこの反對派の中には、善意と理解を持ちつつ民主的反對によつて團體の有機的發展を期さうとするものと、屢々對立團體とも連絡しつつ團體の發展ではなく、却つてそれの攪亂・破壞・乘取りを陰

許さるものとの二つがありうる。組合の健全なる發達を希ふ者は、幹部も大衆も、前者に對しては極めて寛大でなければならぬと同様に、後者に對しては極めて嚴格でなければならぬのが當然だ。けだし、善意なる反對派を抑壓することは組合發展の源泉を枯渇せしめることであり、惡意なる反對派を放任することは組合の統制を弛緩せしめ、やがてその崩壊に導くものであるから。しかし實際上の困難は、複雜なる事情の下においてよく諸々の反對派の本質を看破してこれら兩者を分別することにある。さうしてそれがために組合指導者及大衆の愼重なる考慮と聰明なる判斷とが特に、要求せられるのである。

次に、組合においては屢々青年と中・老年との對立が生じ、そしてそれは往々危機まで發展する危險を孕むのみならずこの對立・抗爭は左・右兩翼よりするフラクション運動に最もよい機會を與へるのである。青年者の長所は理論・理想・果敢なる直線的行動に對して鋭敏な感受性を持つと等であり、之に反して中・老年者は經驗・現實・熟慮・不撓の努力を重んずると等においてその美點を持つ。組合運動はこれらの兩方面を適當に統一することによつてのみ、健全なる發展を期しえられるのであるから、これら兩者を分離し、その各々を一面的に成長せしめて之を對立・軋轢にまで導くことは、特別の事情の存在せざる限り、決して望ましきことではない[illegible]を誘發するが如き方法を探ることは、十分なる考慮の下でなければ、容易に許さるべきことではない、と私は考へる。序ながら所謂「理論派」と「實際派」の對立の大衆的基礎の一面は、大體、上記の青年者と中・老年者との對立に求められる。從つてもし後者の關係が破壞的な對立でなく、有機的な綜合でさへありうれば、前者の關係も亦、內的結束の動搖にまで惡化する代りに、理論と實際との統一に導く有益なる相互批判として、組合發展の上に不可見の役割を果すことになりはすまいか。

なほ、組合幹部と組合大衆との對立もその團體の不安定をもたらす重大原因に數へられる。本來、勞働組合の如き民主的大衆組織の幹部は組合大衆の基礎の上に、その支持によつて立つてゐるべきものであるから、彼等と大衆との對立が眞實に根本的であれば——特に眞實というたのは反對派は屢々眞實には小部分の要求をも「大衆」の名において之を提起することがあるから——彼等はもはやその地位に留まりえないわけである。あるひは萬一なんらかの人爲的手段によつて強いて之を維持するならば、それとともに民主的大衆團體は化して專制的官僚組織になつて了ふ。さうして過去における組合分裂の一部分は、官僚化したる組合幹部が大衆の合理的要求に對して民主的取扱を拒否し

たることに端を發してゐるかの如くである。いふまでもなく組合の幹部は責任ある指導者であるが故に、大衆の欲求と稱せられてゐるところのものの一切を其儘直接に受け容れるべきではなく、屢々漠然且つ衝動的でしかない素朴な大衆の欲求をば、主體的・客觀的・狀勢の現實に照合しつつ、合理的な具體的要求に仕上げ、之を掲げてその實現に努力することを彼等の任務とする。さうしてこの任務の遂行によつて、始めて幹部は幹部としての自己の職責を果たし、大衆は自己の欲求の合理的滿足を達成しうるのである。而し、このことが圓滑に行はれ從つてまた大衆と幹部との對立が發生しないためには、諸君は、一方において、これら兩者の疎隔に導くやうな一切の事情を廢除すると共に、他方においては、幹部と大衆との不斷の接觸と交互作用を可能とするが如き民主的集權制度の徹底を期せねばならぬのである。

終りに、組合內部の對立を激化する恐れあるものとして、私はなほ地方的對立を擧げることができる。といふのは今日の組織形態においては、全國的組織內において、地方聯合會の占める極めて重大なる地位に照應して、重要なる地方聯合會間の意見の對立は屢々全國的組織自體の危機に導くことになりやすい。さうしてかやうな危險は、今日のやうな組織が存續する限りは、決して消失するものとは考へられぬ。それの爲に、この觀點からも亦、——それはその他のより重要な見地からすでに要望され來つてゐるのであるが——所謂產業別編成の可及的急速なる實現が望ましいことになるのである。

六

諸君の任務は、しかし、諸君の組合の統一を擁護することにおいてつきるのではむろんない。戰線の統一の主眼は、むしろ諸君の外にあるところの諸組合と諸君の新組合とが如何にして統一戰線を形造るか卽ち全組合戰線の統一にある。その分裂事情において類似し、それぞれ關東地方と關西地方とにその根據地を持つたことのために對立感情を激化せしめなかつたところの兩組合の合同は想像しうべき諸々の合同中、最も自然なものであると共に、また最も容易なものであつたといへる。實際、他組合との合同は決してさう簡單なものではないらしい。だが、統一に對する諸君の熱意はこの第一步に留まることなく、更に第二步、第三步を踏み出される時がやがて來るであらうことを私は期して待つてゐる。たとへ現在、卽時合同の機が熟して居らぬとも、諸君は或は共同鬪爭の持ちかけにより、或は全國勞働組合會議の提唱によつて、これらのものの間に合同機運を促進するの用意を持つてゐられることであらうと思ふ。

だが、組合運動の現狀の下では、たとへすべての組織勞働者を統一しえたとして、それは僅かに三十萬であつて、我國勞働者總數の幾部分でもない。社會局の調査によれば、工場・鑛山・交通勞働者は昨年末において約四百九十萬あり、工場勞働者だけでも約二百萬を越えてゐるといふ。さすれば組織率は前者に對しては約十六分の一であり、後者に對しては約十分の一である。故に諸君にしてもし諸君の組合を所謂勞働貴族の排他的團體に墮落させまいとするならば、諸君はぜひとも此尨大なる未組織大衆に對する諸君の重大なる責務を忘れてはならない。殊に產業合理化の血祭である失業大衆に對して、諸君の衷心からの同情と熱烈なる援助と屢々組織上の連絡とが必要とされるであらう。

かくの如き勞働組合の大衆化を期するためにはしかし——萬一、勞働組合法が實施せられる場合にはこの必要は愈々緊切である——諸君は勞働組合の所謂「混合型」形態の發達を請願し勞働大衆の日常鬪爭の機關としてのその性質を確立する必要があるとはいへ、そのことは日常鬪爭の繁忙の裡に、勞働者階級の課せられてゐるヨリ重大なる階級的任務を忘れることであつては斷じてならぬ。これ組合運動が大衆化し日常鬪爭化するに比例して、指導者の側における明確なる階級的理論と清澄なる鬪爭的階級精神の必要が愈々强調されねばならぬ所以である。

戰線統一に關する組合の任務は常に經濟戰線の統一に局限さるべきではなく、政治戰線の統一に向つて延長されねばならない。無產政黨間の「合同」が即時實現不能の狀態にあるのはともかくとして、實現可能な範圍の合同においてすら、しかもその可能な範圍がほぼ具體的に決定されたかに見えるにも拘らず、この合同が依然として宙に迷うて今日、諸君は組合戰線の上において達成した合同の機運を移して、政治戰線における合同の拍車たらしめるの決意を持つて欲しい。

無產政黨が合法的に存在せざりし時代において、勞働組合が無產政黨の性質をも併せ帶びることは、止むをえざることでもあり、望ましきことでもあつた。しかし、無產政黨と勞働組合とが併存するに至つた今日においては、兩團體にそれぞれその特質に從ひ分化された範圍にその活動を集中して行くべきはもちろんであり、したがつて勞働組合は所謂「混合型」を脫却しなければならぬ。だが、このことはもちろん、組合の政治的中立、もしくは政治的無關心を肯定し、進んでは、一般に政治運動の場合によつては、合法政治運動の否定を主張するところのサンヂカリスム的・無政府主義的・又は極左主義的見解を承認するこ

とでは決してない。まさに反對である、私は、今日、組織勞働者の間には、無產政黨の無力とその分裂・抗爭其他の醜狀に愛想をつかした結果、早急にも上記の非政治乃至反政治的見解に共鳴する要素がかなり增大しつつありはせぬかと思うてゐるが、しかし政治に對する消極乃至斗急な否定的態度は克服されねばならぬものと確信してゐる。見よ、資本家階級は最近における顯著なるその政治的進出によつて、彼等の經濟的要求を着着として政治化し國策化しつつあるではないか。彼等は濱口內閣をして先きには金解禁を、今日では產業合理化を、重要國策として採擇せしめ、その實用を督勵しつつある。更に、最近における勞働組合法案反對における彼等の共同戰線はいかがであるか。さすれば、我國無產階級の意識分子である組織勞働者は政治と國家とを資本家階級の獨占に委することなく、多くの場合、無產政黨を通して又は之と協力して、自己の政治的要求のために鬪爭するのみならず、その經濟的要求又は鬪爭をもそれが、全體的意義を有する限り、之を政治的要求乃至鬪爭にまで轉化・發展せしめなければならぬのである。

他方において、勞働組合は我國の無產政黨運動において特殊の重要なる地位を占めてゐる。それはもちろん團體として政黨の構成に參加してはゐないが、その財政的支持において、その活動分子の供給において、屢々また運動其者の指導において、無產政黨に對して極めて重要なる支持を與へつつあるのである。かく考へるとき、我國無產政黨の主流の分岐がほぼ組合系統の分裂に隨うて、そして之に副うて、行はれたことは決して理解しがたきことではない。かくの如くであれば、また逆に、組合戰線における統一は必然に政治戰線の統一として反映するであらうから、諸君はよくこの關係を見透し、積極的な働きかけによつてこの必至の機運を意識的に促進しなければならぬ。過去數年、我國無產運動の經濟戰線が分裂に分裂を重ね、共に伴うて政治戰線も四分五裂するといふ痛ましき經驗を繰返して憂鬱たらざるをえなかつた吾々の心には、今日始めて諸君に依て達成された組合戰線の統一に於るこの重大なる最初の收獲が政治戰線統一の上にも亦新なる轉機を光明を投げ與へるであらうことを豫見して、久し振りに晴れ晴れした歡びが返り來つたのが感ぜられる。

八

諸君は諸君の陣營に對してかくの如き重大なる使命を擔ひつつ、諸君の敵對階級に對しては、不斷の日常鬪爭において、さうしてそれと結びついた無產階級の明日の世界のためにする鬪爭において、果斷・細心且つ不撓の戰を鬪うて行かうとされてゐる

る。」だが、現下の全面的反動の時代においてこの闘爭を有效に發展せしめるためには、冷靜なる判斷と鐵の如き意志とが必要とされるであらう。と同時に、かくの如き時代にあつては、一方では、統制ある組織的運動よりもヒロイックな、そして多くの場合絶望的な急進的行動の方がヨリ力強き魅力を以て大衆に訴へるであらうし、他方では、荊棘に充ちた闘爭の道よりも、支配階級との妥協による不義の安易にひたることの方がヨリ力強き誘惑として大衆に働きかけるであらう。しかし諸君は左・右兩翼よりするこの誘惑を一蹴して、來るべき勝利の日まで、諸君の團結の威力による堅實なる階級闘爭を全力を擧げて戰ひ拔かれることと私は確信してゐる。諸君はブルジョア新聞における好評をえんがために、また所謂社會批評家の一顰一笑を標準として、運動されてゐるのでは無い。諸君は明確たる理論的見透しと斷乎たる決意とを以て、無産階級解放の歴史的偉業の遂行に參ぜられつつあるのだ。或者は諸君を左翼小兒病者と罵しるであらうし、他の者は諸君を右翼改良主義者として攻撃するであらう。しかし、神曲の作者とともに、「人々をしてその言ふに任せよ」、諸君は一向に、歴史が諸君をその軌道においたところの諸君の階級闘爭の路上を驀進されんことを、この光榮ある機會において、私は切に諸君に要望する次第である。

醫學の階級性

安田德太郎

一

醫學に階級性があるか？　丁度「無産者病院設立運動」がブルジョア新聞に報道された頃、種々さまざまな抗議が直接私に向つてもちこまれた。曰く、醫學は超階級的のものである、金持も貧乏人も、プロもブルも一視同仁に診るのが醫術の使命である。かやうな特殊なる病院を利用して階級闘爭を煽動するのは言語同斷である。曰く、そんな病院を中心に現代醫制の暴露が行はるれば、醫者に對する患者の信頼がますます失墜する。曰く、安價でどんどん大衆的診療が行はるれば開業醫の繩張が荒されて醫師はますます食へなくなる。曰く、「われわれの病院を作れ！」などといふのは無産者のくせに贅澤三昧な注文である。そんな病院で薄給に甘んじて働く醫者こそよほどのブルジョアであらう。又曰く、社會政策的にみては結構な計畫である。政府から大いに援助して貰つてはどうだ。

かやうなる批判から、『無産者病院』といふ名稱が超階級的を誇りとする醫師の面々に一種のショックと一種の不安とを與へたことは確かであつた。尖鋭化する階級闘爭の巨濤がブルジョア醫學の岸邊にひしひしと押し寄せて來たことは誠に彼等にとつて一大脅威であらねばならなかつた。

では果して醫學は超階級的のものであらうか？　科學は人類の最大多數の幸福をもたらすことをその究極の目的とする。醫學の目的も亦畢竟するに、人類の疾病を撲滅し、萬人に幸福な健康な生活を確保するところに存してゐる。眞理のための眞理とか、生命現象の神秘とかを目指す醫學も人間生活、社會生活を離れて實在し得ない。大衆の幸福を離れて眞の醫學は存在し

得ない。患者にとつては理論や講釋はどうでもよい、病氣を治して貰へばよいのである。たとへば天然痘の病原菌は現代になつても未だ分かつてゐない。併し種痘によつて既にその豫防法が完成された以上、病原菌發見は今日ではどうでもよい題目になつてしまつた。

理論は灰色であり、生命の黄金樹は緑である。勿論われわれとて理論を蔑視するのでない。「革命的理論なくして革命的運動はあり得ない」といふのはレーニンの名句であるが、疾病治療の革命も亦理論を抜きにした盲滅法な實踐によつて行はれるのでない。たとへばサルワルサンの發明は實に理論醫學の勝利であつた。しかしながら萬事さうであつたとはいへぬ。現代使用する治療法や藥物のすべてが、このやうに理論的に發見發明されたのでない。古代エジプトの醫術では早くに阿片、蓖麻子油、柘榴根皮等が使用されてゐた。水銀、沃度加里、罌粟、規那、ヂキタリスは昔も今もその重要さに變りがない。昨日の迷信も正しき理論を得て今日の科學となる。古來の草根木皮、民間藥は近代醫學によつて廣汎に攝取され理論づけられた。

醫學は資本主義によつて偉大な發展をとつた。併し醫學それ自體が單獨に獨自の進展をとつたのでなく、自然科學の諸分科と平衡を保ちつつ、時代の生産關係に依協して發展したのである。醫學もまた經濟的基礎の變動するにつれて變革するところの巨大なる上層建築の一つに過ぎない。

このやうにして近世醫學は文藝復興期における寺院階級と新興商工階級の對立のうちに誕生したのである。市民階級の勃興と共に一歩々々科學は巨大なる飛躍にまで發展した。天文學、數學、物理學、解剖學、生理學はさらに促進された。市民階級はその工業的生産の發展のために、自然物の本質と自然力の活動を研究する科學を必要とした。だがこれまでは科學は寺院の溫順なる侍女に過ぎなかつた。寺院は科學をして信仰によつて課せしめた限界を踏み出すことを許さなかつた。――一言でいへばそれが一切であつた。それは決して科學でなかつた。今や科學は寺院に反逆した。市民階級は科學を必要とし、科學を武器として反逆の尖端を切つた。」(エンゲルス)

暗黑なる中世紀の醫學の權威は弊履の如く棄てられて新しくギリシヤに還れと叫ばれる。コンスタンチノープルの陷落と共に、ギリシヤの寫本が歐洲の地に送られて、新しくギリシヤ醫學の研究が勃興する。印刷術の發明がヒポクラテス、ガレン等々のギリシヤ醫學の翻譯書を普及する。このやうにして當時の醫家はガレンの醫學を最高權威とし、化石したガレン主義は封建醫學に君臨し、これに反抗するものは學問の神聖を瀆するも

のと觀ぜられた。新興醫學はガレンの復歸に發し、ガレンの克服に進む。しかしてガレンの解剖學はヴェサルにより、ガレンの治療學はホーヘンハイムによつて克服されたのである。

近世醫學はその誕生の當初からして階級的であつた。解剖學の樹立にあたつて寺院階級に屬する醫家と新興階級に屬する外科醫の對立に特に留意しなくてはならぬ。當時封建的イデオロギーを支持する大學教授及び一般醫家は、文獻的な思辨的な研究を第一とし、外科醫を職人として蔑視した。人體解剖にあたつて執刀するのは外科醫であつて、教授は單に講述するにとどまつた。

二十三歳の外科教授ヴェサルは數年間の人體解剖の實踐によつてガレンの甚しい誤謬を發見した。そして二十九歳にして「人體構造論」の發表をもつて解剖學と稱する近世醫學を樹立した。彼は當時の職人から種々の技術を習得し、職人の使用する道具を外科に移入した。即ち當時のツンフト的な手工業の生産用具がヴェサルの手によつて醫學にもちこまれたのである。新興醫學は新興階級と同盟するに非ずば達成されるものでなかつた。

併しヴェサルの新學說は異常なる反抗をよびさました。ガレン主義者は憤激し、恩師シルヴィウス先生は忿怒した。激しい論戰が開始される。支配階級の觀念科學と新興階級の唯物科學の對立が「人體構造論」を契機に爆發する。ヴェサルは無神論者である。××××である。昔のアレキサンドリアの解剖學者のやうに、生ける人間を解剖した。かういふデマゴーグがとばされる。大學は未だ支配階級の鼻息を窺はねばならなかつた。大學はローマ法王の權力に屈服しなければならなかつた。彼の著書は法王廳に押收され、彼の教職は罷免され、宗教裁判所の迫害の下にヴェサルは伊太利の地を逃れねばならなかつた。

時代の人體觀、生命觀は治療法に影響する。併し人體觀といひ、生命觀といひ又時代のイデオロギー的反映に外ならない。マルクスは「資本論」の中でかういつてゐる。「デカルトは動物を單なる機械と定義してゐるが、彼は動物を助手と觀じた中世紀と違つたところのマヌファクチューア時代に立脚して眺めてゐる。」

ガリレイの精神をうけついだハァヴェーによつて血液循環說が發見され生理學が誕生する。物理學におけるニュートンの發見とあひまつて、人體の機械觀を釀成し、物理學的治療の道が開かれる。「人間即機械」の著者醫師ラメトリーの戰鬪的唯物論は佛蘭西革命におけるブルジョアジーの鬪爭道具となつた。醫學は科學としての眞の形態を完備するために觀念論に抗して唯物論を戰ひとらねばならなかつた。

佛蘭西革命はブルジョアの政治的勝利を確立し、英吉利産業革命はブルジョアの經濟的勝利を約した。大工業の發展はブルジョア醫學をしてさらにさらに飛躍せしむる。ダーウヰンの進化論は醫學においてもその人體觀、その生命觀を根本的に變革してしまつたのであるが、一方において進化論はマンチエスター商工階級の自由競爭の反映に外ならなかつたのである。この機會に私は近世病理學の建設者ウィルヒヨウの姿を思ひ出す。彼は一八七七年の獨逸博物學會において進化論が社會主義を助成することを强調して「進化論は正しい學說である筈がない。といふのはその學說は甚だしく危險なものであるから」と一喝した。ダーウヰン主義の宣傳者なるヘツケルはこの大家の一喝に縮み上つて、ダーウヰン說は社會主義を助成するとは思考され難い、ダーウヰン主義と社會主義は「火と水」のやうな關係にあると繰返し辯解しなければならなかつた。その翌年ビスマルクによる社會黨鎭壓令が發布されたのである。隣國佛蘭西におけるかのパリ・コンミユンに恐怖したこの反動病理學者は炯眼にも「科學の階級性」をはつきりと把握してゐたのであつた。

二

我國醫學の發展も明治維新の革命に始まる。勿論德川末期において蘭方醫と漢方醫の抗爭はあつたにしても、西洋醫學は漸次漢方を凌いで勢力を高めては行つたが、それは封建制度そのものの中での發展するものではなかつた。併しひと度封建制度の崩壊、明治維新の革命によつて資本主義制度が樹立されるや、明治政府はその急進的な諸制度の改革と共に、獨逸より新しい醫制を直輸入して、西洋醫學は完全に漢方醫を驅逐してしまつた。醫師開業制といひ、現行醫師法といひ、すべては營利を基調とする資本主義そのままの姿である。

「資本主義は勞働者を疫病の盛動する不潔極まりなき勞働地帶におしこめた。自分等も傳染病の犧牲になるかも知れないといふ恐怖から、ブルジョアジーは彼等賃銀奴隷の住宅街を申譯ながら衛生的にする爲にいろいろのことを試みた。……資本主義社會は醫學研究の資本主義的に組織された體系すら行使した。開業醫、私立病院、官立病院、療養地、結核療養所、さらに藥局等等は營利のもとに組織づけられた。勞働者は療養地などに行けない。結核療養所には勞働者の姿など見られない。藥劑師もいたるところで利潤の收穫に奉仕した。これらすべての事業は他種のあらゆる事業と等しく經濟的見地からなされたのである。かやうな一切合切は資本家的財布の利益から勞働者階級の利益に移されねばならなかつた。」(××主義ABC)

現代醫制において私達は醫術の鬼畜にも等しい階級性を看取する。若しわれわれが醫學者としはたまた醫師として飽く迄も純科學的良心を持して研究に診療に從事する時、私達の科學、私達の活動がいたるところで資本主義的桎梏に縛られてゐるのに氣が附く。醫師會と警察署が主催となつて毎年毎年「結核豫防デー」に「新鮮な空氣！　日光に親しめ！　榮養を十分に！」といくらビラを撒布しようとも、プロレタリアートの結核罹病率は年年歳歳増加するばかしである。

紡績工場、製絲工場の女工の結核は特筆すべきものである。現今では産業豫備軍があふれてゐるために、女工採用の身體檢査は非常に嚴重を極めてゐる。この嚴格さは鐘紡の職工體格檢査標準表をみても想像出來る。かういふ嚴格な身體檢査をパスした頑強な女工でも工場で二三年勞働するうちに結核で倒れてしまふ。私もかういふ經驗を持つた。帝大で外來診療をやつてゐた頃、紡績工場の監督が女工を十人ばかり引率して診察を受けに來た、どの女工を診ても肺結核であつた。そして監督が一人一人に就いて結核の進行程度をきいた。工場醫があるのにと思つたが、要するに女工といふ機械が未だどれだけ役立つものか、未だどこまで使用出來るものかの鑑定に帝大附屬醫院を選んだのであらう。一般に女工は可なり病勢が進行して、もうどうしても搾取出來なくなつてはじめて解雇されるのであつて、結核のため工場を去つた女工の半數は解雇後半ケ年に郷里で死亡することが統計的にも確定されてゐる。鐘紡王國武藤山治の退職慰勞金三百萬圓は文字どほり何百萬の女工が生命を賭した勞働そのもののかたまりである。姉や妹が紡績女工になつて數年の後肺病で死亡したため、階級意識にめざめて猛然と左翼運動に身を投じた勞働者鬪士を私は可なり多數に知つてゐる。

鐘紡には立派な××結核療養所がある。女工で結核になればその療養所に收容されると宣傳されてゐる。參觀した人はみなその設備と鐘紡の溫情主義に随喜する。ある年その結核療養所の醫員の就職口があつた。ところが嘗つてそこに數年間奉職してゐた醫師がいふのには「あんなサナトリウムへ行つてはいけない。月給は良いが患者などなくて退屈でたまらぬ」と就職志望者に說教して廻つた。鐘紡工場で結核になつた女工を悉くこの療養所に收容すれば忽ち滿員となるべきだが、この結核療養所は病氣を治すところでなくて、溫情主義を合理化するところの一つの見世物に過ぎないのである。

鐘紡系では工場醫が醫學研究のために工場の衛生狀態や職工の健康狀態を學會で發表するのを禁じてゐる。これは全國のどこの工場でも同じことであらう。勿論會社の設備を讚美するや

うな研究なら奨勵しても差支へない。資本家は勞資協調方法によ工場衛生の進路を極度に恐れてゐる。たとへば人造絹絲工場では職工の眼疾が非常に多いと噂されてゐた。ところが最近のブルジョア新聞に深夜業廢止によつて職工の有毒瓦斯による眼疾は九〇パーセント減少したとわざ〴〵誇大に宣傳されてをつた。

たとへ醫師となつて純科學的態度から工場勞働者の保健狀態を向上せしめようと努力しても、到るところにブルジョアジーの魔の手がのびて、われ等の科學、われ等の活動の進路を阻止する。このやうにして醫學は、醫術はブルジョアの階級的利益の方向にむかつてのみ進展するのである。

かやうな結果醫學者も醫師もその科學をもつてブルジョアジーに奉仕しようとする。さる衛生學者がわざわざ『勞働饅頭』といふのを作つて、わざわざブルジョア新聞を通して社會に發表した。紡績の女工が寄宿舍で起床し洗面し朝食をとり、次いで工場で從業するのに甚だ時間がかかる。能率のあがる朝の時間をかういふことのために浪費するのは勿體ない。そこで起床し洗面して『勞働饅頭』を頰張りながら直ちに從業すれば、朝食の時間も省けるし能率もあがる。『勞働饅頭』の營養價、カロリー量は申分ないから人體には却つて有益である。産業合理化に狂ふする資本家はこれに飛びつく。[illegible]である。[illegible]醫學者から資本家に捧げられる産業合理化は醫學的に支持される。翻つて一方において資本家的産業合理化に反抗する工場勞働者は晝食、夕食に二十分の休憩時間を與へろ！とそのストライキの條件に掲げてゐるではないか？

三

「ブルジョアジーは、從來、名譽な、敬虔な畏敬をもつて眺められた一切の職業から、その後光を剝ぎ去つてしまつた。彼等は、醫師、法律家、僧侶、詩人、學者をその賃金勞働者に轉化してしまつた」とマルクスは絶叫したが、確かに醫師は資本主義社會において完全に一個の商賣人に轉じてしまつたのである。このやうにして醫業は疾病の治療を直接の目的とせずに、醫師の生活維持のための營利業となつたのである。

たとへばここに肝臟徽毒の患者があつたとする。サルワルサンを注射すれば治るにきまつてゐる。併し患者に注射料を支拂ふ能力がなければ、醫者は患者にわざわざ注射を強制することは出來ない。たとへばここに姙婦があつて高度の腎臟炎をやんでゐるとする。姙娠中絶をしなければ母體の危險は火を睹るよ

り明かである。併し入院料も手術料も支拂ふ能力がないために、患者が姙娠中絶を拒絶すれば醫者はこれ以上何とも出來ない。みすみす死亡するのを傍觀してゐるより外に爲方がない。萬一患者が死亡したところで、それは、醫者の責任でなくて患者の貧困の責任である。ところがチフスとか赤痢とかいふ傳染病なら、たとへ患者が貧困であつても、强制的に無料で入院せしめる制度になつてゐる。傳染病を放置しておけば病原菌は上層階級にも蔓延する恐があるからである。若し傳染病患者を隱蔽すれば醫師は重く罰せられる。即ち疾病を撲滅するといふ醫師の使命は患者の經濟生活によつて阻止されるのである。勢ひ醫術はブルヂョアヂーの階級的利益に利用されるやうになる。

大體現代の開業醫は患者に藥を賣りつけねば立つて行けない。そこで萬事大袈裟に重々しくやらねばならぬ。患者の財布をねらつて賣込主義を恥じなくてはならぬ。學問だけでは醫者は出來ない。おどしたり、すかしたり、引つぱつたりして患者の吸引策を講ぜねばならぬ。そこに微妙不可思議な開業術があり、醫師のはやるはやらぬは、その純科學的良心でなくて、一つにその「口先療法（ムンドテラピー）」にかかつてくる。現代では通俗醫學が大衆に滲透してゐる。婦人雜誌、大衆雜誌・新聞欄に醫學記事が滿載されてゐる。現代人の醫學常識は驚くべきものであり、うかうかするとあべこべに醫者が患者に逆捩を食はされる場合がある。併しそれらの記事たるや醫院案內の客引に過ぎない。醫學博士をとると新聞雜誌に通俗醫學記事を書きたがる。名前を賣るといふことは患者の吸引策として最も有效であるからである。婦人雜誌をみると通俗醫學の執筆者の醫院案內の廣告が同じ雜誌に載つてゐるぐらゐである。だから患者は醫學知識を持つてゐても批判力を缺いてゐる。醫師のトリツクを分析する力を持つてゐない。却つて醫師の暗示にかかりやすく敎育されてゐる。かういふ情勢の下では、患者の經濟生活を深く考慮して、出來る限りくだらぬ費用を省いてやらうとする醫師の親切な努力は却つて緣下の力持となつて、患者自體を決して喜ばしむるものとならない。

ブルジョア醫術はその本質たる營利追求に向つて狂奔する。新しい治療法、新しい藥劑、すべては購買力のない大衆からますます離れて行く。製藥會社と醫學者の同盟もすさまじい。各大學の藥物敎室へ製藥會社から莫大な研究費が寄附される。每月五十圓の手當を藥屋から貰つてゐる研究生もあつた。「效がなくてもよいから何か發明して下さい」と、藥屋の番頭は公然といふ。ある醫學博士は稀の賣藥を發明して、效かないと世間に定評が出來るまでに既に巨萬の富を作つた。大學勤務の醫師の實

會には藥[illegible]の系統[illegible]して[illegible]發揮[illegible]隔離して現れる。

一方現代において醫師と藥劑師の對立が存在してゐるが、ますます貧困化する大衆は醫師から離れて賣藥師に走る。結核も黴毒も大金なくしては治らない。絶望に喘ぐプロレタリアートは賣藥、灸鍼、加持祈禱にすがるに到る。藥劑師の勃興はブルジヨア醫師團に恐慌を與へる。若し醫藥分業が制定されれば、醫師の生活難は深刻化するだらう。藥劑師の影響下から患者を引離すため醫術は新しい形態をとらねばならぬ。注射療法や物理學的療法のすばらしい流行もその一つの現れである。

さらに健康保險制度に觸れよう。日本金融資本家は日本醫師會と完全に握手した。大體勞働者の疾病保險は資本家が全額負擔しなければならぬ。それにも拘らず、資本家はその保險金を勞働者の賃銀から掠めとり、一方社會的義務と稱しきはめて低い歩率をもつて醫師にその治療の全責任を強制する。そこで開業醫は健康保險醫となつても被保險者に安全な治療が施せない。保險制度に對して醫師の間に大きな不平が漲つてゐる。健康保險の患者には病氣の如何を問はず一律に重曹とヂアスタアーゼだけを與へてゐる醫師が澤山ある。保險醫は不親切だ、藥は滅茶だ、健康保險では病氣は治らないといふ不平が勞働者の間に立つてゐる。[illegible]保險では[illegible]

この矛盾は[illegible]とのやうに解決されるだらうか。

四

醫師に對する不平、不滿が全プロレタリア層に醱酵しつゝある。併しかやうなすさまじい潮流を作つたのは醫師といふ個人の頭腦からではない。醫師となるためには長い年限と莫大な資本を必要とする。學位をとるためには一萬圓の資本を投資しなければならぬ。學士と博士は各大學から年々洪水の如く吐き出されて行くが、既に就職口は滿員となり、販路を梗塞された商品としての醫師のストックが大學の倉庫に滿ち溢れてゐる。大衆が購買力を失つたため、開業醫はますます沒落し、大病院は患者の激減によつて經營困難に陷つてゐる。醫師階級にも生活難の聲が響く。醫學博士が門前雀羅を張る一方に、低廉なる坊間素人治療家の門前は市をなす。これが一九三〇年における日本資本主義、第三期における日本醫師界の姿である。

資本主義は今や真の醫學の發展の巨大なる桎梏に轉じ始めた。あらゆるところに矛盾が漲つてゐる。この矛盾は醫界それ自體によつて解決されることは覺束ない。商品制度の醫學をし

て自らの墓穴を掘らしめよ。

來るべき新社會において醫學は新しい形態をとるであらう。プロレタリアートのヘゲモニーにおいて醫學は新しい發展をとるであらう。我々は其先驅をサヴエート・ロシアに見る。政治組織に對する種々さまざまなデマゴーグに拘らず、サヴエートの診療制度のみが、その地を踏んだ日本のあらゆるブルジョア代表者によつて驚歎されてゐる。罵倒に價する政治經濟組織の上に歎賞に價する診療制度がどうして建設されたのであらうか。

ここで私はパヴロフを思ひ出す。ノーベル賞金受賞者、かのロシア生理學者パヴロフはその『條件反射』(佛蘭西譯、一九二七年)の序文においてロシア革命を呪咀して「人類は自然に對して凱歌をあげた。人類は大陸を、深海を、大空を、征服する……。それにも拘らず、その同じ人類が、その同じ叡智をもつて、ある暗黒な衝動力に導かれて、戰爭と革命の醜悪と蠻行によつて、自らに無限の物質的損失と名状しがたい苦難を致した。自然科學の萬國的概念に立脚したる人間性の精密科學のみが、人類を暗黒から引きはなし、彼等の人間關係の恥辱から人類を解放さすことが出來るであらう」と述べた。さらにブハリンとの論爭においてパヴロフは、われわれは落ついて眞理の探究にいそしむことの出來る社會制度を要求すると反駁した。だが條件反射の學説がいかに偉大であらうとも、その偉大さはプロレタリア革命の偉大さの前には完全に影をひそめるであらう。

日本における階級鬪爭の激化と共に醫師もまたプロレタリアートに對して積極的な攻勢をとり始めた。新潟でも三重でも農民組合員は醫師會からボイコットを食されてゐる。醫師ははつきりと地主の味方に立つてゐる。醫師は故なくして診療を拒むことを得ずといふ醫師法條文は戰鬪的プロレタリアに對して一片の反古と化しつつある。かやうな情勢は鬪爭の鋭尖化と共に全國的に波及されて行くだらう。各帝大醫學部においても、各單科大學においても、マルクス主義を奉ずる學生は、卒業後教室員あるひは研究室員となることが拒絶されるであらうといふ流言蜚語が流布される。ブルジョア醫學はあまりにも露骨にその階級性を暴露して行く。かやうな現狀を見て何人か醫學の超階級性を高唱することが出來ようぞ。

一方において「我等の病院を作れ！」「プロレタリア醫師團を作れ！」と左翼陣營の大衆がわれ〳〵に呼びかける。マルクス主義を奉ずる全國各大學の進歩的なる少壯醫師は一團となつて時代の尖端を切らうとしてゐる。醫學も醫術も醫師も亦階級鬪爭の怒濤の上に動搖する。かやうにして日本醫學の階級性は將に切實深刻にならうとしてゐる。(一九三〇・五・二八)

借金不拂問題の檢討

小岩井浄

一

最近借金支拂猶豫（モラトリウム）の問題が全國農民組合新潟縣聯合會によつて問題となり、今年の四月上旬に大阪で開かれた全國農民組合の三回大會に同聯合會から提出され『署名運動、請願運動を起す』といふ具體的實行方法と共に可決された事がある。この問題はつゞいて同月の半ばに東京で開かれた勞農黨の擴大中央委員會にも新潟縣の代表者から提案されて論議に上つたといふ事を聞いてゐる。

更に第五十八議會には勞農黨首大山郁夫氏がその質問演說の中で現在極度に窮迫してゐる農村の救濟の爲には農民の借金問題を解決しなければならないといふ事を述べこれに對する應急策として勞農黨は『借金支拂猶豫に關する法律案』を提出しやうとするのだと主張され且つその內容として、月收百五十圓以下の者にして現に債務を有する者は其債務の支拂を昭和十年五月一日迄延期すること、無論其延期中の利息は之を請求することが出來ぬやうにするのだと說明されてゐる。官報の議事錄や當時のブルヂョア新聞が見るとこの說明をきいて政友會や民政黨の連中はゲラ〱笑ひ出したらしいが、昭和二年の金融恐慌の際には金融資本家の利益と救濟のため現に「モラトリウム」が施行し、おまけに無產大衆の負擔に於いて約九億の金を投じて之を救ふて置きながら、大山氏のこういふ主張を「勝手な事をぬかす蟲のいゝ奴だ」位に圖々しくも恥知らずの彼等は嘲笑したのであらう。

それはとにかくこうして借金支拂猶豫の問題は、今や一般無產農民の面前にはつきりした要求として現はれて來たのである。

尤も全國農民組合の創立當初にも既にその運動方針の中には肥料等の獨占價格に對する鬪爭と共に「高利に對する鬪爭」といふ一項目が擧げられてゐた。又農民運動と緣故の淺からぬ布施辰治氏にも「無產者モラトリウム」の主張があつた。だがまだその具體的な運動は進められてゐなかつた。併し全國農民組合の去る四月の大會が新潟縣聯合會の提案になるこの問題をとりあげる迄には各地に多少部分的ではあるが、具體的な運動の萌芽を見とめる事が出來る。新潟縣の經驗の

外に北海道にも開いてゐるし、又島根縣にもすゝめられた。島根縣聯合會は全國農民組合の中でも戰鬪的な聯合會であるが、そこの「縣聯活動報告」の中に次ぎの様なおもしろいニュースを見出す。

税務所と三代商店をヘコマシ
古い借金を棒引す

酒及日用品の販賣店たる八束郡本庄村合名會社三代商店の沒落により税務所は税金の滯納を理由に債權を差押へた。五年十年の古き借金を電燈料さへ拂へないで困つてゐる農民に對して強制的に直ちに税務所に拂はねば權力で拂はせるとオドして來たので、農民の驚きは非常なもので、ない金は支拂はれぬ、殊に殆んど十年以前のもの多く此の不當な強迫的な行爲に奮激した農民は直ちに債務者同盟を組織して、演説會にビラポスターにあらゆる鬪爭を進めて來た處、驚いた税務所と三代商店は遂に古い借金全部棒引、新しいものも二割三割の支拂で大勝利的解決をなした。

二

借金支拂猶豫の運動は其後漸次波及する傾向が見られる。全農千葉縣聯合會のニュース(五、一〇)にも「借金支拂ひ延期のために戰へ!」といふスローガンが揭げられてゐる。又「山梨縣聯情報(五、一五)には

……一家の苦勞がコモつて居るそのマイ(繭)が、一貫目四圓五十錢だ。そんなことで蠶種代をどうして拂ふのだ。手傳つて貰ふた人に御禮も出來ないではないか、ましてやアテにしてゐた肥料金や畑小作料借金や店借りなんか何處を押せば出て來るのか「アテ事とフンドシは前からハズレル」とよく云ふが全くだ。フンドシやなんかのはずれたのは直せもするが生活のアテがハズれたのは食へない事になるから大變だ。

我々農民をこんなハメにおとし入れるのは誰だ。銀行家ではないか。我々はこのことから知らなければならないことは我々の生活を苦しめて居る敵は單に目の前にゐる地主ばかりでなく遠くコンクリートの大建物の中に居る銀行家も又そうであることを知らなければならない。

眞實はあの銀行家こそが今の勞働者農民を死ぬ程苦しめてゐる大親分なのだ。銀行家に外國へ金を出さしてウントもうけさせる代りに生絲の値をウント引下げた金解禁を濱口内閣が組閣第一番にやつた事を考へてもわかるではないか、そのことは又今の政府が銀行家にカタをもつために農民なんかドウならうと見かへらない政府であることがわかるではないか……(畧)……

畑小作料五割引
借金無期延期
(その他のスローガン省略)

長野縣聯合會の「聯合會通信」(五、三〇)を見ても同じ様な記事が揭げられてゐる。

……繭上りを當てに肥料を買つたり、借金してどうやらやつて來

てゐる――がどうなるものかだ。これに毒の値上りには個小作料を地主の奴（公でもつて行かねばならない。兵庫縣（但馬會の調査では一反目入圓以上かゝる）を割つて安い値を賣りその上高い小作料を取られるんでは立つ瀬がない。

……先づ農民會議、農代、小作人大會、農民大會を開いて次の要求を地主や資本家及その政府へタタキつけやう。

個小作料を全免しろ！

借金を棒引きにしろ！

災害農民の損失は國庫で補償しろ！

肥料、農具は國庫で無利子で貸せ！

これらのニュースによつても借金の利子をまけろ！　支拂を猶豫しろ！　の要求が漸次無産農民の間に波及しつゝある事は明かだ。のみならず山梨、長野では既に「五年間の支拂延期」といふ様なことではなくて支拂の無期延期・借金の棒引き（もはやそれはモラトリウムではない）のスローガンにまで發展してゐる事實も注意す可きである。

三

勿論誰でも借りた金の支拂を延ばして貰ふ事が出來、それ處か棒引きにさへして貰へたらイヤといふ者はないであらう。だが借金の支拂を猶豫しろ！　のスローガンが最近に到つて無産農民の間から勃然として起こり、それが支持されるのは、そんな漠然たるタナボタ式の理由からでない事は云ふまでもない。それは貧農民のセッパつまつた日常生活の要求に基づくものであつて、いかに無産農民の生活が著しく窮乏化したか、從つて又借金などいふものにどんなに苦しんでゐるかといふ事を表はすものに外ならないのである。

小作人の窮乏！　小作人はいくら汗と泥で働いてもまづ第一に地主には封建的な搾取をやられ、ブルヂョアジーの搾取をうけ、働いて居つて鍬を殺つてゐるといふ事實は、時にはお役所の統計ですら掩ひかくすことが出來ず、農民組合運動の最初から指摘されて來た事である。今雜誌「農民闘爭」の第一號に載つてゐる山形縣東根支部の調査にかかる稻作一段歩收支計算表によれば、

支出合計		收入	
手間賃（三八・三人分）	三八、三〇円	玄米四斗六升入六俵（一俵十一圓二十錢）	六七、二〇
肥料代	一七、三五	ワラ（百丸）	四、〇〇
小作料及ビ雜費	三五、四〇	クヅ米及ビシイナ	、五〇
農具損料	六、九〇	糠	、一〇
固定資本利子	五、二五		
支出總計	一〇三、九五五	收入總計	七一、八〇

右の收支決算の結果は三十一圓十五錢五厘の缺損になる。そこで支出の部から一人一日一圓といふ低廉な見積りの手間賃を控除すると始めて七圓十四錢五厘といふ利益が浮んで來る。だが之では一町歩小作しても僅かに七十圓にしかならぬ。之ではどうしても小作人の一家は飢餓線以下に叩きのめされて了ふ。人間らしく生活してゆける道理がない。

ところが之のみではない。無産農民の窮乏化は金融ブルヂョアヂーのカイライ民政黨内閣の緊縮政策、金解禁、産業の合理化等の巨大な拍車のために全く××する處を知らないものがある。まづ第一に地主の立禁、差押等の強襲は益々加はる上に、農産物の下落、(日用品の物價低落は農村にはたいした恩恵にならぬ)失業者の歸農、出稼ぎ賃勞働の杜絶、獨占價格租税等の負擔の増大、女工等の賃銀不拂、失業、更に先きにも引用したニユースの中に記載されてゐる様に繭價の崩落、等々、目もあてられぬ慘憺たるものではないか。

かゝる窮状にある無産農民がこの上に高利を督促され、借金の催促で差押でもやられたらどんな事になるだらうか。

四

一體無産農民の借金がどの位あるかは殆ど據る可き資料がない。農村全體としても何等正確な根據がない。唯々推定によつて凡そ五〇—六〇億位といふ概算をするだけである。だがこの見當は大體確かであらう。「今日の農民の借金は六十億圓に上つてゐると言はれて居る。其利子すらも十億圓を算して居ると言はれて居ります。細かな統計は私達は持つて居りませぬけれども、併しながら少し前の事であるが、杉山元治郎君が「農村貧窮論」と云ふものを書いてゐる。其中に昭和元年迄の統計を舉げて居るのであります。それを讀むと斯ふ書いて居る「大正元年大藏省理財局の調査に依れば、農家の負債總額は七億四千六百萬圓あつて、其内不動産擔保付のものが三億七千八百萬圓約五〇パーセント、それから動産擔保付負債が七千九百萬圓、是が金額の約一〇・六パーセント、無擔保負債が二億八千九百萬圓、是が全額の約三八・七パーセント、さうして一戸當りの負債額は約三十五圓を示して居るのである。然るにそれから十五年後の昭和元年には、農家の不動産擔保付負債總額は約二十四億即ち約六倍以上に増加して居る。十五箇年に農民の借金が六倍以上増加して居るのである。然らば不動産以外の負債はどうであるかと云ふと、是は正確な數字を言ふことは出來ないが、大藏省理財局の調査に依りて推論するに、約二十五億五千萬圓になるのである」此兩者を合計すると云ふと、實に五十億圓近くになるのである。」斯う云ふことを言はれて居るのでありますが、是は恐らく正確に近いものであらうが昭和元年に農民の借金は約五十億圓に近かつたのでありますが、それから四五年を經つた今日に於ては六十億圓の農民の借金があると云ふことを推論すると云ふとは、決して過大に失するものでないと信ずるのであります』(大山氏前記質問演説速記錄より)

だがこの六十億といふのは勿論農村全體の借金の概算である。だからしてその中には大地主も中地主も不在地主も含まれてゐるのだ。併し地主の借金がどうであらうとそれは全然關係がない。問題は無産農民の借金と年々の利子との調査である。

前掲の大正元年の大藏省の統計を仔細に見る時は多少この問題を解く鍵を見出すことが出來る。勿論不動産擔保の借金の中にも小自作農、自作兼小作がその所有地を抵當にして借金してゐる者が、おそらく多分に含まれてゐるであらう。又私人からの借金、無擔保の借金の中に小地主階級の者が若干混入してゐるといふ様なこともあらう。だがその口數、利率、その他種々の點から無産農民の債務が農村全體の借金

のかなりの部分を占めてゐることは特に[illegible]たい。殊に小作人に云ふ作料の延滞を借用證文に書き直した借金。凶作時代の借金、生活費の不足から來る高利の借金、家内の突發事件から來る臨時の借金、農具その他の購入のための借金、無理に土地を買はされた爲の負債、店借り等々數へれば際限のない幾多の關係によつて債務を負ふてゐる。頼母子講のカラも借金になり、信用組合を地主連中に食ひつぶされ、借出し金の追求激しい事も屢々見受けられる。そして借金の相手――債務者が大體地主の中でも株にでも手を出す様な目先きの利く連中であり、概して高利で貸付けられてゐるといふ事も推測が出來る。かくして無産農民は今日全く借金地獄の中にもがいてゐる様なものである。

かういふ情勢のもとにおかれて、無産農民がこの借金の利息をまけてくれ！ 借金の支拂を猶豫してくれ！ といふ要求をもつ様になつた事は當然の事である。無産農民は長い間擔保無しで、低利で相當纏つた金融の道を講じて貰ひたいといふ要求をもつてゐた。今無産農民は巨大な負債をもつてゐるがそれは併し、容易く借込む事の出來た事を示すものではない。だからして又高利でもある。今や無産農民は金融資本家の××たる民政黨政府の下に益々窮迫化され餓死線をさまよひ、無い袖はふれぬ、借金はまつてくれ、利息も拂へぬまけろ！と叫び出したのである。

五

さてこの借金支拂猶豫の運動は今後どう展開してゆくであらうか。

この運動は二つの方向を辿るであらう。一つは資本家地主の政府に借金の支拂猶豫――モラトリウムをやれ！ と迫つて、その施行を、獲得しやうとするのだ。 他の一つは[illegible]た借金を棒引させ、利息をまけさせ、[illegible]。勿論この二つの方向を[illegible]ものと考へたり、分離したりすることが間違ひであることは言ふまでもない。

丁度こんな點で借家人の運動とよく似た處がある。借家人運動は、居住權の確立といふ様な目標に運動を集中してゐるが之は資本家地主の政府に強要し、對抗する政治的な闘争である。同時に借家人運動は一面又家賃値下等も家主と闘ふことによつて獲得してゆくのである。(云ふまでもなくこの場合にも二つのちがつた方面に向つてゐると見える。この運動は相互に密接な聯關をもつて居り、またもたすべきであつてきりはなして考へるのは大まちがひである。)

更に借家人運動の場合の居住權の確立は到底資本家地主の政府のもとに於いて根本的に解決されるものではない。それは勞働者農民の政府の樹立される時と處とでなくては解決されないのである。居住權といふ様な生活問題の解決に永久的であり積極的である問題に比べれば借金の支拂猶豫にしてもたとひ棒引きにしてもその意義と價値を異にしてはゐるが、それにしてもこの要求もおそらく資本家地主の政府によつては、實施される可能はないであらう。先年のモラトリウムの實例もあるにはあるが、無産農民の利益のための長年月のモラトリウム、況して借金棒引きなどといふことが到底彼等によつて斷行される筈がない。こんな點に於いても兩者の運動には類似點が見られる。

借家人運動は一應借家人組合によつてそれ自身獨立して運動がす、

められる。多分に小ブル的になり、又事件師的になる危險が伴ふ。殊に運動それ自身の途を歩む關係上、勞働組合運動にとつては直接たいした貢獻は見られない樣である。(併し實は勞働者の家賃値下等を中心にせねばならぬのであるが)之に反して借金不拂運動は無産農民自身の現實當面の要求であるだけに農民組合がとりあげてゐる。勿論債務者同盟といふ樣な一種のカムパニア組織がとられる事もあるであらうけれ共、全くそれは農民組合の運動の一部門に外ならない。夫だけに又この運動は例へば立禁反對、小作料減免の深刻な爭議に於いて屢々小學校兒童の同盟休校を決議し實行する!　勿論そこにはピオニーロの組織訓練、無産者教育と云ふ樣な積極的な必要もあるのだ!　事に依て解決促進の一助とする樣に、借金棒ビキを決議し叩きつけることによつて、債權者高利貸の大地主に對抗する一つの鬪爭にするといふ樣な事も出來るであらう。

借金の利子をまけろ、支拂を延期しろ!　借金を棒引きにしろ!　殊に之を資本家地主の政府に叩きつける場合、無産農民の日常生活から來る當面の要求を巧みに統一し而かも金融資本家の支配に對立して無産農民の政治的な要求として、實に效果的なスローガンである。それは都市プロレタリアの産業合理化反對と共に現在の時代に於いて特別の意味をすらもつた鬪爭題目と云ふことが出來るかも知れない。

だが併しこのスローガンとこの運動がいかに無産農民の窮迫した生活から出て來やうとも、その意義と價値とをあまりに高く評價しすぎてはならぬ。無産農民の窮乏を根本的に條件づけるものは土地所有の矛盾に胚胎してゐることは改めて今更云ふまでもない。無産農民の正面の×は土地を奪はんとし、高い小作料を搾取せんとする地主であり、それを後ろからつゝいてゐる資本家地主の××である。中心のスローガンは立禁反對立毛押反對!　土地を農民へ!　(そして勞働者農民の×××××!)である。借金不拂運動は何といつても中心的な要求でも運動でもない。土地を農民へ!　の××××××な要求に附隨して鬪はれなければならぬまでである。

況して借金支拂猶豫に關する法律案といふ樣な事で議會主義に陷す る樣なことがあつては××にならない。全國農民組合大會の決議した署名運動、請願運動もいゝけれどもこの點を又同時に警戒する必要がある。併し運動はなされなければならぬだらう、又債權者に向つて鬪ふ部分的な鬪爭をも充分支持しなければならない。寧ろこの運動で相當の效果をあげる事が出來るであらう。

今かうして執筆してゐるところへ大阪府下の泉南地方で立禁を前に勇敢に鬪つて來た上瓦屋支部から「ケサ三ジ一ブタヂキンヤラレタ」との電報がとびこんで來た。この支部の爭議團は青年隊は云ふまでもなく婦人隊、少年隊まで組織され、デモを勇敢にやり實に見事に組織と訓練とをもつて鬪つて來たのであるがその前團長は地主に對する借金の事などが主として原因したとかいふ事で先日急に爭議團を裏切つた。爭議團は勿論之をたゝきのめして今日まで鬪つて來たのだ。

農民組合の運動で屢々小作人が借金のために地主に強く當れないといふ樣なことが見受けられる。こんな點からも借金棒引き運動は農民組合によつて押しすゝめられていゝわけである。而かもそれは長野縣などで展開されてゐる女工不拂賃銀に對する鬪爭と何等矛盾するものでないことは言ふまでもない。(六、四朝)

金解禁逆戻りか

高橋龜吉

一 金解禁善後策進退谷る

濱口內閣が去る一月十一日舊平價金解禁を斷行したことは、當時の我が經濟の竝々ならぬ疾患から見て、及び、世界經濟の大不景氣襲來の兆候顯著なりし事實に鑑み、無謀極る暴擧であつたことは、その前後より、われ等の縷述し口を酸くして警告し來つた通りである。果然、その結果は、周知の如き深刻無比の一大不景氣に、我が經濟界は襲はれるに至つた。之に對し、濱口內閣は、此の大不景氣の基因は世界的不景氣に在り、而して此の世界的不景氣は全く何人も豫想し得なかつたことであつて、今日の我が深刻なる不景氣は、現內閣の金解禁の責任ではないと云ひ譯してゐる。例へば去る臨時議會の貴族院で首相は之を次の如く述べてゐる。

「今日の財界の不景氣、延いて失業問題は、寧ろ其原因の大部分は、世界的の原因であると存じます、金解禁を行ひまする時に於ては、まだ銀塊相場の暴落は左程でなかつたのであります、印度の綿布關稅の問題もまだ起つて居なかつたのであります、如何にも米國の金融市場の混亂はありましたけれども、それが延いて以て亞米利加全體の非常なる不景氣を起さうとは、其當時何人も豫想しなかつた所であります、不幸に致しまして、解禁後に於て種々の事柄が起りまして、世界的の不景氣になつて今日の不況を招いたことは誠に遺憾でありますけれども、少くとも政府は其當時に於きましては、解禁後に起つた如き世界的の大不景氣を豫想することは出來なかつたのであります」（昭和五年五月四日貴族院議事速記錄）

首相は大膽にも、昨年十月の米國株界の大反動が、世界的大不景氣に發展するとは、其當時何人も豫想しなかつた所だと言明してゐる。だが、この位ひ雄辯に、濱口內閣の經濟的無能を告白せるものはない。如何にも、その前後、米國の銀行家や政

府など、何かためにする必要のある者の間には故意に樂觀論が多かつた（それは常に起る現象で何人も之を考慮して財界の前途を觀察するものなること、現に日本で然るが如くである）が、そうでなく、冷靜に當時の資本主義世界の形勢を觀察せる者は、世界的不景氣襲來、乃至世界的恐慌來を觀察してゐたのであつて、このことは、日本が金解禁を斷行せる前後に於ける世界の文献を一寸調べれば、容易に分ることである。否、筆者の如き、さうした觀察の資料に最も乏しき環境にある者すら、當時、米國財界の反動來が、世界的物價下落時代への轉入を意味すること、かゝる場合の舊平價解禁の無謀なることは明かに指摘してゐたのである（拙著「大不景氣襲來及其對策」第四編參照）。

それは兎に角、濱口內閣の金解禁政策は、右の世界的大不景氣を全く豫期せずに組み立てられたものなることは、右に由つて明かだ。しかし、此の事實は、同時に、濱口內閣が、舊平價金解禁の打擊を如何に過少評價してゐて、解禁後の經濟的苦痛に對し、極めて無知な樂觀を夢みてゐたことを反證するものだ。何となれば、若し濱口內閣にして、舊平價解禁の打擊の程度を十分に知り、且つ當時の日本經濟の不良健康狀態をハッキリ掴んでゐたならば、當時已に銀塊は續落して前途悲觀の豫測多く（現に三井物産の如き昨年秋頃から此の方針で警戒してゐたと云ふ）、更に米國財界の大反動で前途の見越に議論のあつたと云ふ、世界經濟の危急狀態を前にして、舊平價解禁などを斷行すべき筈のものでないからだ。

首相及藏相の說明に由ると、舊平價解禁の打擊例へば七なる所へ、世界的不景氣の打擊例へば四が加つて、こゝに現在の如き深刻なる不景氣十一が現出したのだ、と云ふが如く、之を單に「7+4=11」の數學的問題に取扱つてゐる。だが、問題は左樣に簡單なものでない。例へば、人間の疲勞について一考せよ。假りに五迄の疲勞ならば一夜の睡眠で健康は囘復するとしても、七の疲勞ならば、數週間の療養をしなくては健康は囘復せぬ。若し夫れ、七の限度を越して八の疲勞を與へれば體力に由つては生命にも關することゝなり、それが十を越せば常人の健康は破綻して、遂に死にすら見舞はれるのだ。又、普通の健康狀態ならば二三日のアスピリン劑で治る感冒も、體が極度に衰弱せる場合には同一強度の感冒も遂には生命にも關するのである。それと同じく、經濟社會も亦、或る程度までの不景氣には容易に對抗し得るが、それが或る一點以上を超過すると、遂には經濟的社會的一大破綻にまで爆發するものである。

斯樣なわけで、若し、濱口內閣が、その舊平價解禁斷行の深刻なる打擊を十分に承知してゐたならば、當時の世界經濟の危

至なる客觀情勢（それは何人にも認められたる所にして）、かの際、内地經濟に多大の打撃を與へる舊平價解禁を到底斷行し得るものでない。しかも濱口内閣は、われ等の警告を無視して之を斷行したのだ。以て、濱口内閣が、舊平價解禁の打撃を如何に過少評價して（しかも之につき十分の調査もせずに）、無知無謀な樂觀に浮薄な政策を進めたかを容易に推想し得る。

斯く濱口内閣が、當時の我が經濟狀態に於ける舊平價解禁の大打撃につき多大の見込違ひのあつたこと（その詳細は拙著「大不景氣襲來及其對策」參照）、竝に、世界的大不景氣を全く豫想せずして、打撃甚大な舊平價解禁を斷行した當然の歸結として、金解禁斷行後に於ける我が經濟界の推移は、濱口内閣にとつては、こと〳〵に「意外の惡化」であつた。こゝに、濱口内閣の金解禁善後策は遂に、必至の破綻に脅かさるゝに至つたのである。その詳細は後ちに記すが、先づ此處でその要點について見れば、濱口内閣の金解禁善後策は、いまや左の如く進退全く谷り、その何れかの一角に破綻を暴露する外なき危險が、愈々必至の勢ひとなりつゝあるのである。

(1) 緊縮政策續行に伴ふ破綻

濱口内閣は金解禁を完ふするためには緊縮政策を續行する外なしと言明してゐるが、それでは、已に約百萬人を突破すると推算されてゐる失業者の救濟は斷念して、益々失業者を增發せしめる。而して若しこれを放任せんか、由々敷社會問題として勃發し、その結果、濱口内閣の金解禁善後策は、社會的に觀ても遂に破綻せざるを得なくなる。加之、農民中小商工業者の苦痛亦、失業者と殆んど變らぬ狀態にあつて、之れ亦、永く今日のまゝを續け得る力はない。

(2) 失業救濟及不景氣對策に伴ふ金解禁の破綻

そこで、濱口内閣は、右の不祥事を避けるがためには、嫌でも應でも、效果的な失業救濟策及び不景氣緩和策を急速に斷行せねばならぬ。その速效方法としては、しかし、第一には歐米の現に實行してゐるが如く、此際數億圓の公債を發行して、政府が生產事業を興す外にない。だが、さうすれば、入超を增進さして正貨準備の危機を招來さし、一方に公債累積を起して銀行に大損害を與へて金融破綻の危險を激成する。第二の失業對策は第一程直接には效果的ではないが、しかし、之亦英米の現に實行してゐるが如く、金利低下政策を採り、資金の借用を容易にして（インフレーション政策をとつて）資本家經濟の事業活動を刺戟することであるが、之亦、正貨を流出せしめ正貨準備の危機を激成して、再び金輸出禁止をやる覺悟がなくては出來ない相談だ。

即ち、急迫せる我が經濟社會現下の難局を凌駕せんとする有ゆる效果的方策は、何れも、(一)失業其他の生存難から來る社會的破綻、(二)金融的破綻、(三)金本位維持の破綻(即ち金解禁が逆戻つて再び金の輸出禁止、爲替下落、平價切下金解禁への除伏)、の何れかの破綻に衝突するのであつて、その何れかの破綻を覺悟せざる限り、效果的な善後策は見付からないのである。之れ、現在の此の深刻なる殺人的不景氣に直面しながら、絶望的に「何等の應急對策すら無し」と呼ばれる所以である。

しかし、云ふ迄もなく、實際に對策がないのでは決してない。たゞ、濱口内閣の舊平價金解禁政策の破滅――金輸出再禁止と新平價解禁への逆轉――を避けんとする限り、今日の此の殺人的大不景氣にも拘らず、何等の效果的應急對策すら、之を實施する餘地が全く無いのである。濱口内閣の舊平價金解禁對策は文字通り全く進退谷つたのである!!

二　緊縮政策の續行と問題の焦點

以上の如きわけで、濱口内閣は、金解禁斷行の政策を生かさんとする限り、此の殺人的大不景氣にも拘らず、依然、從來のまゝの不景氣深刻化政策、即ち緊縮政策を續ける外はない。濱口首相は臨時議會で之を左の如く言ひ表はしてゐる。

「偖て金の解禁後に於ける財政經濟政策は如何にすれば宜しいかと申しますれば、既に金の輸出を解禁しました以上は、金貨制度の維持、金貨本位の擁護と云ふことが、御互國民の最も盡力すべき要點であります。此金貨本位の擁護をするが爲には、依然として政府は財政緊縮の方針を繼續しなければならぬ、勿論消費節約の持續をせんければならぬ、隨つて三土君の長き御質問の結論たる、政府は、今日の不景氣を救濟するが爲に、是迄の財政緊縮の方針を打切る考はないかと云ふ其御質問に對しては、斷じて打切ることがない。政府は金の解禁を斷行した時と同一の精神、同一の努力を以て、此金貨本位の擁護に盡力をする積りであります、若し三土君の御質問の御趣意の通りに、今日政府の緊縮の政策を抛擲を致し、再び所謂積極放漫の政策を採る時に於ては、金の解禁に依つて、出入自由となりました所の我國の正貨は、滔々として外國に向つて流れて行く、それは今日尚ほ一億や二億や三億では追付くものではありませぬ、さう云ふ事柄を三土君は如何に考へられて質問せられたのであるか、私には其考が隣張了解が出來ない。繰返して申します、政府は少くとも財政上に於ては、是迄の方針を變更するの意思は毛頭持つて居ない。即ち吾々は將來國民經濟建直しの爲に、是迄進んで來た所の態度を以て、着々として進行する積り

であります、唯其進行の途上に於て、不幸にして或は失業問題の如き、緊急差措き難い問題の起つた場合に於ては、其障碍は出來得る限り之を排除し、出來得る限り之を緩和致して、吾々の進む道を進行する外はないのであります。一時の故障に恐れを爲して、此大道を踏外して邪道に迷入るが如きことは、斷じて吾々はやらぬ積りであります」（昭和五年四月二十六日衆議院議事速記錄）。

だが、斯く緊縮政策の續行に由つて、謂ふ所の國民經濟の建て直しを斷行し、以て、今日の大不景氣から、云ふに足る景氣の回復を見る迄には、如何に早くとも一年や二年の歲月を待たねばならない。現に、濱口首相自らも之を左の如く認めてゐる。

『只今の再質問に依れば、政府は今日の方針を繼續して置いて、如何にして國民經濟が立直せると云ふ根據を持つて居るか、此理論的の根據を聽きたいと云ふことでありました、其理論的の根據に付ては先刻大藏大臣が財政演說の時に於きまして詳細申述べた通りであります、卽ち整理緊縮の結果として物價は漸次低落をして國際的の平準に近付く、其結果として輸入は減退し、輸出は漸を逐うて增加する、是に於て國際貸借は改善をさる、國產愛用の奬勵と相俟つて內地の產業は振興の緒に就く、固より是は一朝一夕直ちに顯著なる效果が現はるゝとは申しませぬ、それは國民の忍耐力と努力とを要します、私は信ずるに依れば、我が日本國民は其忍耐力と努力とを有するだけの力があると信じます」（昭和五年四月二十六日衆議院議事速記錄）。

金解禁善後策としての濱口內閣の「緊縮政策」は、勞多くして效果尠きことについては筆者の繰返し指摘せるところである（拙著「經濟國難來」參照）。だが、こゝには姑く、これを濱口內閣の云ふが如く理論的に正しい政策だと假定しよう。而して、右の濱口內閣の處方は、患者の體力が普通の場合ならば、首相の信ずる如く、之に由つて結局、國民經濟の建て直しが出來るものと假定しよう。だが、政治は大學の講堂とは違ふ。生きた問題は決してそれで解決されたのではない。當面の問題の焦點は他に在る。一體、現下の問題の重點は、日本經濟と云ふ重症患者に對し、如何なる處方をするかと云ふ點だ。ところで、重症患者の處方に方つて一番大切なことは、與へられた病名に對し、如何なる治療をなすべきかの病理學上の原則論ではない。そんなことは、學校出たてのホヤ／＼醫者にも出來る。かゝる場合、最も肝腎なことは、さうした教科書通りの治療の打擊に、患者の體力が果して耐え得るかどうかだ。又、他に併發症があつて、正規の治療をやれば恐るべき副作用を伴ふが如きこと無きか否かだ。こゝに良醫と藪醫との差があり、その[illegible]

の如何が、直ちに患者を殺すか活かすかの重大事を決定するのである。斯様なわけで、濱口內閣の緊縮政策の續行（金本位維持を絶對とする限りその外に策はない）については、此際、單に抽象的にそれの適否を論ずべき場合でなく、假りに之を可とするも、果して、之に耐え得る體力が現下の日本經濟に果してあるか否かでヨリ重大な問題なのである。

こゝに於て、問題の重點は、先づ、金解禁前後に於て、我が經濟の體力は、普通の處方に耐え得る狀態であつたか、將又、病理學の原則通りの處方に耐え得ざる程の衰弱狀態であつたか否かである。ところが、當時の我が經濟は、積年の不養生で、實に、左の如き幾つかの疾患で身動きもならぬ重症に陷り、極度の衰弱狀態にあつたのであつた。

(1)金解禁對策につき最も重大關係ある國際收支關係は、殆んど破產狀態の危機に迫つてゐた。

(2)又、金解禁後の苦痛に對する對抗力の第一線に立つべき內地の金融は、特融の結果、半身不隨の癈疾狀態にあつた。

(3)加ふるに、肝心の產業界、農業界は大正九年以來の積年の強壯策で、その體力は極度に衰弱し、普通の健康體ならば、容易に凌駕し得る打擊にすら、此際に於ては、其の打擊が動機になつて、積年の無理が一時に發して、ドット床につくに至る危險線に立つてゐた。

斯樣に各種の重症疾患を煩つてゐては、濱口內閣の「緊縮政策」と云ふ荒療治の徹底は、到底、日本經濟の體力の耐え得るところでないのである。卽ち、無理に之を强行せば、病氣は治るかも知れぬが、その前に生命が續かなくなると云ふ破綻に必然に脅かされるに至るのである。以下、右の諸點につき更に詳しく別敍するであらう。

三　國際收支關係の逼迫と金解禁善後策の容易

舊平價で金解禁を斷行せんとする場合、一番細心な注意を必要とする點は、豫め、國際收支のバランスを、確保する十分の用意を整へてかゝることである。それも、英國の如く、貿易外收入が每年四十億圓內外もあつて、貿易の輸入超過を差引くも、尙ほ十億圓內外の受取超過になる國であるならば兎に角、最近年の日本の如く、貿易外受取勘定を差引くも、尙ほ每年二億圓內外の支拂超過を續けてゐる國柄に於ては、特に、此の點の用意が最も重大である。されば、日本が舊平價解禁を斷行しようとするには、事前に於て、少くとも國際收支の均衡を回復する點にまで豫め貿易狀態を改善してかゝるのが舊平價解禁の正道であつた。然らずして、濱口內閣の如く、從來の國際收支

逆調関係のまゝで我か金解禁を断行し、その金解禁の存りで貿易の改善を期せんとする危道を行かうとする場合には、その貿易関係の改善が完成する迄の期間（例へば一産業合理化一、國産奬勵等々現に濱口内閣のとつてゐる政策が奏功する迄には早くも二三年を要する）、國際收支の逆調を支えて行くだけの十分の正貨が準備されてゐなくては駄目だ。然らざれば、中途で、金本位維持困難となり、金解禁は失敗して再び金輸出禁止となる惧が甚大であるからだ。然るに、我が濱口内閣は、事前に國際收支のバランスを圖る用意もやらず、又、金解禁後、貿易狀態の囘復する迄の一定期間、國際收支の逆調を支へるだけの正貨の十分なる準備もなくて、無謀にも、舊平價金解禁を斷行して了つたのである。此の間の消息は、去る臨時議會で、井上藏相自ら、次の如くハッキリと語つてゐるところだ。「海外關係に於ては、段々惡くなりますから、……持つて居つた戰爭中に得られました在外正貨は皆拂つてしまつて、七億五千萬圓と云ふ日本は借金を背負つたのであります。さうして……昭和四年の七月の狀態はどうであるかと云ふと、爲替は凡そ一割一分下つて居ります。さうしてそれは何時から下つたかと云へば、大なる下落の時期は昭和四年の一月からであります。斯樣な狀態で行つて、さうして政府の持つて居りました在外正貨はどうであるかと云ふと、[illegible]。爲替がどうして維持が出來ますか、[illegible]出來ませうか。日本は毎年見込一億以上の輸入超過の資金を要るのであります、金がなければ外國から物を買つて來ることは出來ぬのであります。其金が昨年の七月頃に最小限に減つて、さうして爲替相場が一割一分下つて、此先どうして日本が行けますか。それでありますから、吾々は金の解禁は大正九年以來の問題でありますが、是に依つては最早長く此儘で棄置くことはならぬと云ふことが其時の事情であります。それを御考へにならずに、唯平生の場合と考へて、金の解禁をしたから此の中が斯うなつたと云ふ議論は當りませぬ」（昭和五年四月二十九日衆議院議事速記錄）。

右に明かなる如く、井上藏相は、普通の場合なら兎に角、在外正貨は最小限に減じ、しかも、國際貸借尻は支拂超過で、このまゝでは最早、爲替相場（當時四十四弗内外）の更らに暴落することが不可避の非常狀態にあつたから、急速に金解禁（舊平價での）を斷行したと云ふ。だが、實は、我が國際收支關係が斯くの如き危急狀態にあつたと云ふことは、四十四弗以下の爲替相場に平價を切下げて解禁するより外に對策はないと云ふことを經濟的に明示するものであつて、決して、井上藏相の云ふ

ふが如く、そのために、急速に舊平價解禁をなさねばならなかつた、と云ふ經濟事情の說明にはならないものだ。

それは兎に角、斯くの如く、國際收支關係の危急狀態の下に於て、爲替相場を約一割五分ばかり更に引上げる舊平價解禁を斷行したのであるから、貿易關係は愈々惡化して、國際收支關係は益々行詰らざるを得ぬ。さうなれば、多大の正貨の流出で、金解禁は逆戾ることは必定だ。斯樣なわけで濱口內閣の金解禁善後策は、右の對策として、如何なる犧牲を拂つても、急激に輸入を阻止する政策を採らざるを得ないのである。

こゝに、濱口內閣金解禁善後策が、今日、進退谷るに至つた禍根が在る。卽ち、右の危急事情に應ずるため、濱口內閣は一年五億圓に上る政府事業を中止又は繰延べ、無公債政策を採つた。然るにかゝる政策は、産業界に最大の打擊を與へ、最も多くの犧牲を對抗力最も少き失業者に轉嫁するものだ。のみならず、舊平價解禁の結果は濱口內閣の樂觀的豫期を丸で裏切つて、その打擊の甚大なること未曾有の不景氣を現出しつゝ、ある。加ふるに濱口內閣には全然豫期せぬ（しかし多くの人は之を惧れてゐた）世界大不景氣が襲來した。斯くて、莫大なる失業者とその生存の危急は益々加重し、農民及び中小商工業者の苦痛は耐ゆべからざる程度にまで深刻化した。

かゝる危急狀態に對しては、社會の安寧秩序の維持を最大の責務とする政府としては、之を緩和し、救濟する效果的政策を當然に採らねばならぬ。然らざれば、社會の安寧秩序の維持は保證されぬ。だが、その效果的政策を採れば、前揭首相の答辯の如く、已に危急線に浮沈せる我が國際收支關係を惡化さして、金解禁は逆轉するは必至の形勢だ。濱口內閣の金解禁善後策は、斯樣にして、何れに行くも、破綻を脅かされてゐるのである。

四　內地金融の疾患と金解禁の效果的善後策不能

加之、濱口內閣の金解禁善後策は又、內地金融の疾患から、正規の對策不可能のために、多くの弊害を伴ふ危道に趨るを餘儀なくせられ、此の側面からも、幾多の破綻を脅威せられてゐる。一體、舊平價解禁を斷行せんとするからには、事前に金利を引上げて、豫め財界を之に順應せしめ、旁々、資本主義的に消費の節約を行ふべきであり、而して一度び解禁斷行の曉、不景氣の深刻化す場合には、その打擊を緩和するために、金利を引下ける政策を採るべきだ。現に歐米諸國何れも、不景氣の深刻化すると共に、金利の著しき引下政策を取つて、之を不景氣緩和策の主柱としてゐること周知の通りである。然るに、日本に於ては、財界救濟のために、震手法、臺銀及日銀特融法の下に、

約十億圓の固定的インフレーションを行つた結果、金解禁前の金融は異常の低金利を持續し、且つ、それすらも、日本銀行が市中銀行に莫大の公債を賣附けて、辛ふじて、低金利をその程度に止め得たものであつて、到底、斯くの如き正規の對策を實現せしめる體力を具へてゐなかつた。

斯くの如き金融狀態で舊平價解禁をやるのは非常な無理だ。果然、金解禁後の善後策は、此の一角から幾多の破綻に脅かされた。卽ち、金解禁後に至るや、一方には金融關係からの正貨の流出を喰止め、一方には消費の節約を資本主義的に確保するために、本來ならば、金利の引上げを是非とも斷行せねばならぬ羽目に陷つたのであつたが、それを斷行しては、それでなくてすら物價暴落の打擊で瀕死に陷つてゐる財界に、更に金利關係から有價證券の暴落を齎らし、金融恐慌襲來の危險を招來する惧あるため、遂に之を斷行することが出來ない。否、反對に、各種の方法で（公債の償還、在外正貨の正金への預入等）却つて、低金利政策を採つたのである。

その結果は先づ、意外に巨額の正貨の流出（內地正貨二億數千萬圓、在外正貨約二億圓、合計四億數千萬圓と推算される）となつて、當局者を狼狽さした。又、折角、外資輸入の效果ありとたのんでゐた英貨公債の借換は、「國辱的」高利と相俟つて、却つて正貨流出を誘發し、且つ、今度、外資輸入に盡力したることを閑却することゝなつた。斯樣にして、我が正貨維持の基礎を著しく動搖せしめた。

右の金融的疾患の結果は又、消費の節約を、弊害のより著しく小なる資本主義的方法――金利の引上――に由つて確保することを不能ならしむるため、その代りに、一年四五億圓に上る政府事業の繰延中止、消費節約運動等々の如き、社會の進步に必要な消費をも、玉石混淆的に抑壓する封建的消費節約方法を採らざるを得ず、ために、舊平價解禁の打擊を、愈々加重せしめることゝなつた。加之、右の如き金融的疾患の結果は又、社會的破綻防止のために必要な、公債發行に由る失業者救濟事業の遂行をも不可能狀態に陷らしめた。蓋し、それを斷行せば、前述の如く入超の增大を齎らして金本位の破綻を脅かすのみならず、更に公債市價の暴落となつて、銀行に一大損失を與へ、金融的破綻を脅威するからだ。（顧るに四月末現在の普銀所有の公債は十六億七千萬圓故、一割下落――五分四厘利廻が六分利廻になればそれ以下の下落だ――しても約一億七千萬圓の損失だ。外に公債及株式所有が十五億餘圓あるから、之れをも加算すると三億圓。若し後者を二割――株式暴落の今日實際はそれ以上だらう――とせば約五億圓からの損失になるのである。）斯樣にして、濱口內閣の金解禁善後策

は、此の側面からも、破綻の脅威を加重せられた。加之、歐米の如く、此の不景氣の深刻化にも拘らず、それの緩和策として、金利を引下げることも亦、前述の如き國際收支關係上、正貨流出の惧あるために出來ないと云ふ羽目に陷つてゐるのである。

五　失業者、農民、中小商工業者生活難からの破綻

轉じて、國內産業界を見るに、大正九年の反動、大正十二年の大震災、竝に戰後打續く不景氣と彌縫策とのために、多くは著しき衰弱に襲はれて、普通の健康狀態の如き抵抗力は極度に消磨せられてゐる。かゝる際に、世界的大景氣に襲はれ、更に、多大の打撃を伴ふ舊平價金解禁が斷行せられたのである。その痛苦の深刻なるは云ふを要せぬ。加ふるに、金解禁善後策は、前述の如きわけで、産業界に最悪結果を齎らす封建的緊縮政策が斷行せられ、かくて、經濟界の打撃が意外に激烈なること明かとなれる今日に於てすら、已述の如き國際收支關係の危機と、國內金融の半身不隨とのために、不景氣緩和乃至は不景氣の犧牲者救濟の應急處置として、金利引下、及び公債事業の實施すら之を實行する餘裕が無いと云ふ窘窮した有樣だ。

斯樣にして、殺人的不景氣の最後の而して最大の犧牲は、結局、失業者の續出と云ふ形に集積せられる。而して、失業者に之を轉嫁する資格を有せぬ農民、中小商工業者は極度の疲弊と生活難に押し詰められる。此の結果、濱口內閣の金解禁善後策——緊縮政策の徹底——が、果して、成功するか否かは、此等失業者、農民、中小商工業者が、右の犧牲に果して耐え得るか否かに主として懸るものである。

扨て、失業者其他の對抗力如何の問題であるが、假りに失業者の多くが首相の期待するが如く如何に「愛國者」なればとて家族の命を支へるパンが無くなつては以上の如き犧牲に耐えることは到底不可能だ。況んや、今度の失業者は、濱口內閣は之に耐ふるを愛國的と見るかも知れぬが、勤勞者農民等から見れば、濱口內閣の政策は、金融資本家を偏護するために一國の最貴重な生産力を破壞する反社會的政策であつて、かゝる犧牲を甘んじて受ける社會的理由は毫もないと云ふ見解をとつてゐる。これでは精神的な忍耐力をも期待することは出來ない。然るに、これ等失業者が已に百萬內外と推算せられ、しかも、濱口緊縮政策の續く限り、殺人的不景氣は、こゝ一年內外で緩和せられる見込はない。否、今後、失業者は益々增大し、且つ解雇手當等の涸渇すると共に、失業問題は愈々急迫した由々敷社會問題となる事情に在る。此秋に於て、濱口內閣如何に無公債政策を固守せんとしても、社會の安寧秩序を保持する責任を全

うするためには、到底それは不可能だ。言ふならば、農民（昨年八圓で賣れた繭が今年は四圓臺だし）、中小工業の疲弊困憊ら、之れを今日のまゝに放置することは到底許されないことで、社會の安寧秩序を維持せんがためには、何とか其の苦痛を緩和する應急策を採らざるを得ぬ。

顧るに、濱口首相は、前掲引用文に於て、「金解禁を斷行せるからには、金貨本位の擁護と云ふことが、御互國民の最も盡力すべき要點であります」と斷じてゐる。しかし、首相は、ヨリ大なる責務を忘れてゐる。それは、國民大衆の生活を保證すると云ふことが、政府の何を措いても、先づ第一に盡力せねばならぬ最重點だと云ふことだ。然るに、いまや、國民大衆の生活が極度に脅かされてゐるのだ。此の危急の場合に臨んで、「金貨本位の擁護に對し最も盡力せねばならぬ」とは何事だ。食の餘裕全く無き際、愛兒が病氣で死に瀕せる時、「借金は身を亡す」と云ふ名で、之を病院に送らずに濟まされるとでも考へてゐるのか？　要するに、首相には、現下の國民大衆、就中失業者、農民等の急迫したパンの問題が如何に重大意味を有せるかゞ殆んど理解せられてゐないのだ。濱口内閣緊縮政策の破綻は、必ずや、此の點の無知から勃發するに違ひない。蓋し、現下の失業者、農民、中小商工業者等の生存脅威の問題は、急性と慢性

とも云はれるが、要するに、ある人は云ふ[illegible]する非常緊急の場合だ。金本位一の放棄――[illegible]止への遊戯――などを恐れてゐる場合ではないのだ。現に、金融資本家自らは、非常緊急の場合、と云ふ名に於て、ある金融大恐慌の場合に、七億圓の國庫補償の下に、約九億圓の特融を斷行さすと云ふが如き暴擧すらやつてのけたではないか。

果して然らば、失業者、農民、中小商工業者の救濟的救濟のために、濱口内閣の無益な緊縮政策は嫌でも應でも一大破綻を來さざるを得ない（現に地方債に於て破綻してゐるが、その位ひで、此の難局が凌駕出來るものでない）。金本位維持のために濱口内閣が如何に緊縮政策を固守せんとする固い決意を有するとも、國内の社會、經濟事情は、之を續け得ざる點に於て、已に行詰り、急迫した眼で何等かの安全瓣を切りに探してゐる。さうした急迫した所にまで押詰つてゐるからだ。云ふ迄もなく、その結果は、一方には失業者其他の社會的破綻を防止し得るが、他方に於ては、同時に新平價金解禁破綻の極度の危機を招來する。

六　國際收支改善の困難と新平價金解禁破綻の脅威

已に、本論の第二項で詳述せる如く、金解禁斷行前後の我が

貿易は、當時の下落せる爲替相場（濱口内閣組織當時は四十四弗内外）を以てして、尙ほ、滔々たる輸入超過を續け、加ふるに、之をカバーすべき在外正貨は極度に減少して、我が國際收支關係は非常な危機に立つてゐたのであつた。卽ち、當時の我が經濟界は、貿易のバランスを確保し得る點にまで平價を切下げて金解禁を斷行する外に、國際收支關係のバランスを保つ方法はない客觀事情にあつた譯だ。然るに、此の秋に於て、濱口内閣は無謀にも舊平價金解禁を斷行して、逆に、爲替相場を約一割三分方引上げ、それだけ益々輸出を不利にし輸入を有利にする結果を齎らした。これだけでも、我が國際收支關係は、益々危機に陷る事情だつた。

ところが、我が國際收支關係は、右の危急事情の上に、更に昨年十月米國株界の暴落を劃期とする世界的大不景氣襲來の打擊を受け、且つ、從來下落歩調を續けて來た銀塊相場は、今年一月初旬以降に至り、更に加速度的に慘落し（遂に十七片を割つた!!）對支貿易は極度の不振に陷り、加ふるに印度の禁止的綿布關税の實施のために此の側面からも多大の打擊を受けた。顧るに、我が輸出の約四割近くは生絲の占むるところで、之に對支及對印度輸出を加へると、別掲第一表の如く、以上で我が輸出の實に六割七分五厘に達する。

（一）生絲及び對支對印度輸出の重大位地

	生絲輸出	對支輸出	對印度輸出	以上小計	輸出總額	總額に對する小計の割合
	千円	千円	千円	千円	千円	%
大正一四	八七九、六六七	五七〇、一〇〇	一七三、四〇三	一、六二三、一七〇	二、三〇五、五八九	七〇・四
昭和一	七三四、〇五三	五二一、四六七	一五五、九五〇	一、四一一、四七〇	二、〇四四、七二七	六九・〇
二	七四二、二六六	四五五、四五三	一六七、五八〇	一、三六五、二九九	一、九九二、三一七	六七・〇
三	七三三、六九七	四八三、三三二	一四六、〇〇六	一、三六三、〇三四	一、九七一、九九五	六九・一
四	七八一、〇四〇	四七一、一三八	一九八、〇五六	一、四五〇、二三四	二、一四八、六一八	六七・五

（備考）對支輸出には關東州を加算す。

然るに、これ等の輸出は、已述の如く、致命的打擊を蒙つたのである。就中、生絲は、輸出數量の激減（四月迄の數量では昨年同期に比し約三割四分强の減少だ）の上に、價格が暴落してゐる。例へば昨年の輸出平均價格は千三百五十九圓だが、今日（六月四日）の横濱市場相場は八百圓を割らんとしてゐる。假りに數量は昨年の三割減、價格は一千圓平均だとせば、生絲だけで昨年の七億八千百萬圓に對し今年は四億二百萬圓となり、差引約三億八千萬圓の輸出激減だ。

一般、日本の輸出上生絲の重大なることは宛かも、濠洲の羊毛、加奈陀及びアルゼンチンの小麥と同樣だ、否、それ以上だ。蓋し、日本の貿易バランスの均衡は專ら生絲の輸出に賴れるこ

と、宛かも濠洲が羊毛に、加奈陀、アルゼンチンが小麥に崩れると同様以上だ。然るに、濠洲は羊毛市價の暴落のために、加奈陀、アルゼンチンは小麥市價の暴落のために、遂に何れも貿易バランスが破れて、最近、再び金の輸出禁止を斷行せざるを得ざるに至つたこと周知の通りだ。

生絲市價が八百圓割れを脅かされるに至つたと云ふことは、當に農民生活危機を意味するのみならず、實に、我が貿易バランス破綻の一大脅威である。之れ宛かも、羊毛暴落が濠洲の貿易バランスの破綻を意味し、小麥の暴落が加奈陀、アルゼンチンの貿易バランスの破綻と同意語であつたと同様だ。蓋し、日本には、生絲（及び絹布、而して以上合計輸出九億三千餘萬圓）の外、輸入代金をカバーするに足る重要輸出品はないのだ。なる程、綿絲布が四億五千萬圓ばかり輸出されるが、その大部分は原料棉花代で、輸入代金をカバーする力は極めて少ない。以上を除くと、その他輸出品は之を全部合計するも八億圓しか殘らない。然るに、生絲は一時市價四千圓内外を示し、その後大體に千五百圓から二千圓位ひの市價を標準にして、日本の貿易は略ぼバランスがとれる事情にあつた。然るに、生絲市價は其後人絹の壓迫で更に下落して此の三年間ばかりは千三四百圓臺に著落し、此の市價暴落のために、從來已に貿易バランスが破綻されてるためであつた。これ、昭和二年以[illegible]不景氣にも拘らず、我が貿易が依然として入超を續けて來た原因だ。このことは、生絲市場を假りに二千圓だと見れば、別揭第二表下段の如く昭和二年、四年の三ヶ年已に一億圓以上の輸出超過を示してゐた筈であつた一事を顧ることに由つて明示することが出來る。

（一）生絲市價崩落と日本貿易バランスの破綻

	内地貿易 輸入	内地貿易 輸出	内地貿易 入超	生絲輸出 數量	生絲輸出 價額	生絲輸出 一擔當平均價	昭和一年以降平價二千圓換算輸出額	同上の場合の入出超（＊出超）
	百万円	百万円	百万円	千担	百万円	円	百万円	百万円
大正一四	二、五七三	二、三〇六	二六七	四三八	八七九	二、〇〇六	二、二〇六	一六七
昭和一	二、三七七	二、〇四五	三三二	四四一	七三四	一、六六七	二、一九七	八〇
二	二、一七九	一、九九二	一八七	五三三	七四一	一、四四三	二、〇九三	＊二四
三	二、一九六	一、九七三	二二四	五四七	七三三	一、三三七	二、二三五	＊二五九
四	二、二一六	二、一四九	六七	五七四	七八一	一、三五九	二、一五七	＊三〇一

然るに、生絲市價が、今度は更に慘落して八百圓割れを脅かされてゐる。斯くの如き生絲市價崩落のために起つた、我が貿易バランスの缺陷を他の輸出品の增進に由つてカバーする期待は少くともこゝ一年餘りの期間では、殆んど絶望だ。これだけでも、我が貿易バランスは羊毛暴落の濠洲や、小麥暴落の加奈陀及アルゼンチンと同じ運命に脅かされてゐる。加之、已述の如

く、我が重要輸出先たる對支、對印輸出が殆んど絶望的な大打撃を蒙つたのだ。

　之に反し、輸入の方は、これ迄已に多大の不景氣と、物價先安見越で、極度に手控へられてゐて、今後は寧ろ増加の傾向（季節的關係を控除して）こそあれ、大して減少を期待し得ない事情に在る。現に、實際の貿易尻も、去る二月迄は入超高が昨年に比し極めて少額だつたが、爾後は今年の方が昨年よりも大體に増大の傾向に轉じてゐる。例へば別掲第三表に出つて觀測されたい。

（三）貿易バランス惡化の傾向　（單位百萬圓）

	輸出 三年	輸出 四年	輸出 五年	輸入 三年	輸入 四年	輸入 五年	入出超 三年	入出超 四年	入出超 五年
一月	一四四・三	一八一・六	一四六・〇	一九一・九	二四〇・八	一八二・七	△四七・六	△五九・二	△三六・七
二月	一六〇・七	一四七・三	一一八・九	二〇〇・九	二三七・四	一六〇・二	△四〇・二	△九〇・一	△四一・三
三月	一六九・二	一六七・四	一三九・九	二二三・六	二一一・一	一八六・七	△五四・四	△四三・七	△四六・八
四月	一五九・七	一七六・五	一一七・二	一八八・〇	二一三・三	一四八・四	△二八・三	△三六・八	△三一・二
五月	一六四・九	一八三・九	一一五・二	二〇一・九	二一九・九	一五五・六	△三七・〇	△三六・〇	△四〇・四
以上小計	七九八・八	八五六・七	六三七・二	一、〇〇六・三	一、一二二・五	八二九・六	△二〇七・五	△二六五・八	△一九六・四
六—十二月小計	一、一七二・四	一、二九一・四	—	一、一八九・四	一、〇九三・三	—	△一七・〇	×一九八・一	—

（備考）△印 入超。×印出超

　これは又、内外物價關係からも窺ひ得られる。例へば、今年四月末の物價指數を昨年同月と比較するに、別掲第四表の如く、英米何れも約一割四分の下落である。此間、日本の物價（表示の紙幣物價）は紙幣で計算せば、なる程一割五分三六を著落したが、しかし、他方に舊平價解禁で圓爲替が著騰した爲め、結局、日本の國際的物價（表示の金物價）は僅かに七分弱の下落に過ぎぬ。卽ち、過去一ヶ年の不景氣の壓迫で我が物價は大暴落したが、外國も亦暴落し、且つ爲替相場が騰貴したがために、今日の我が物價は、結局昨年四月當時よりも約七％方却つて世界的に高位になつてゐると云ふ始末だ。之れでは、到底貿易關係の改善は期待出來ぬ。

（四）日英米物價地位比較

	昭和四年四月末	昭和五年四月末	下落點數	同上下落率
日本紙幣物價	一七四・五	一四七・七	二六・八	一五・三六％
同上金物價	一五七・一	一四六・二	一〇・九	六・九四
英國	九四・〇	八一・四	一三・〇	一三・八三
米國	一二、六七五	一〇、九三八	一、七三七	一三・七〇

（備考）日本は東洋經濟指數、英國はエコノミスト指數、米國はブラッドストリーツ誌五月初指數。

以上の如き狀態に於て、此の下期の出超を期待するは、餘りに現實を無視した空想だ。それは豫測の範圍を超越して、單なる希望を語るに過ぎないと云ふべきだ。然るに藏相は切りに下期の出超を期待してゐる。だが、別掲第二表にも明かなる如く、昭和三年の下期は却つて千七百萬圓の入超だつた。今年の形勢は已述せる如きわけで、昭和三年當時以上に出超期待に不利だ。しかも、以上は、濱口内閣の聲明通り、其の「緊縮政策」が續行されると見ての觀測だが、失業問題の激化、農民中小商工業者極度の疲弊に鑑み、社會的不祥事件の勃發を未然に防止するためには、嫌でも應でも、效果的な救濟政策を採らざるを得ず、そのためには、「緊縮政策」は多大の破綻を來すものと見ねばならぬ。其の曉には、首相自ら語れるが如く、此の一角からも輸入超過は少からず促進されるのだ。

斯樣なわけで、この下期には出超どころか、昭和三年以上の入超の惧が甚大だ。萬一にもさうした現象が現實に具現せんか、來年上半期の入超約二億圓の資金の大部分は、正貨の流出とならざるを得ない。加ふるに、貿易外受取勘定は、爲替相場の騰貴、海運の不況、米國財界惡化等々の事情から半減する惧あり、これでは朝鮮及臺灣の入超尻をも補ふに足らなくなる危險が甚大だ。然るに、我が正貨は、藏相の期待を全く裏切つて、解禁以來已に二億[illegible]千萬圓なるを流出し、いまや、八億[illegible]千萬圓を餘すに過ぎぬ。その上に、在外正貨は殆んど涸渇してゐると見られてゐる（野村證券經濟週報五月十三日號參照）。いかにも、去る英貨公債の借換で、現金應募の大部分は（約一億圓近く）在外正貨として新に利用出來る。これだけが唯一の強味だ。しかし、他面に於て、下期の出超期待で、我が爲替銀行が外國に短期借入せるもの少からざるべきを差引かねばならないから、之に多大の期待をかけるわけには行くまい。

兎に角、萬一にも、筆者が以上に於て惧れるが如く、下期が出超どころか入超となり（假令出超となつても數千萬圓に過ぎずとせば）、而して來年上期に二億圓内外の入超を示すが如きことあらんか、（藏相が切りに自慢する今年の入超は五月迄で已に約二億圓だ）今日の國際貸借關係の實情からは、正貨準備の危機が叫ばれるに至るは必然だ。しかも尙ほ、前途、貿易關係の改善期待確實ならず、爲替が今日以上に下落するが如きことありとせんか、再度の金輸出禁止の脅威を感じて、資本が逃避し出すと云ふ、最も恐るべき危險が擡頭する。

こゝに於て、濱口内閣としては、全力を傾けて斯かる事態の防止策を講ずるに違ひない。だが、之を確保する效果的方法は今日の世界的大不景氣と、已述の如き重要輸出品の打撃とに鑑

み、輸出增進の期待は困難故、唯だ一つ輸入を極端に阻止する外に策はない。その資本主義的方法としては、ウント金融を引締め、財政支出を此上更に削減し、一方に需要を極度に抑えると共に、內地物價の下落を更に〳〵促進せねばならぬ。だが、斯の如き效果的方策を敢行せんとせば、失業者は益々增大し、農民中小工業者の困憊は愈々激化し、一般產業資本家損失の深化は遂に多くの大中事業の破綻を齎らすことを覺悟せねばならぬ。然るに、我が社會は、今日ですら、已に失業問題の激化が憂慮せられて、それの救濟策を緊急必要事としてゐるのだ。又、多くの農民、中小商工業者は、早くも絕望的悲鳴を擧げてゐるのだ。又、財界は株の暴落で已に大なる危機を孕んでゐるのだ。此の秋に於て、この上、右の如き荒療治が加重せられ得るものとは到底考へられないのである。

果して然らば、濱口內閣の舊平價金解禁は、こゝに全く最後の破綻に直面する必至の形勢に陷つたのである!! 筆者を以てすれば、已に多大の犧牲をかけて一度び舊平價解禁を斷行したのであるから、此上我が經濟力に甚大の犧牲を課することなくして、成功的に金本位を維持し得る見込があれば、之を極力維持することに贊成だ。しかし、金本位の維持がすべての目的ではない。日本經濟の建て直しの一有力手段として金本位の維持を必要とするに過ぎないのである。然るに、その金本位を維持するがためには、以上に詳述するが如く非常な無理を押し通さねばならず、從つて、此上更に多大の我が經濟力を犧牲にせねばならない。果して右の私見が事實ならば、宜敷、再び金の輸出禁止を斷行して、貿易バランスの採れる所にまで爲替を下落せしめ、その點で、改めて、新平價金解禁(舊平價解禁でなく)を斷行することが、日本のためにヨリ有利に、その經濟を建て直す所以であると思ふ。いまや、我が經濟の實情は、金解禁問題を右の如き眼で以て、いま一度再吟味すべき必要に迫れることを絕叫してゐるのである。筆者が、以上に於て、極めて大膽率直な私見を開陳せし所以も亦、要するに、事前に於て、早く本問題再吟味の風潮を作り、萬一、筆者の現に惧れるが如き情勢の實現せる場合に、周章狼狽せざるやう、豫め、それの對策が樹立せられんことを願ふが故である。さきの金解禁問題の如く、かゝる大問題を十分、社會的に吟味することなくして、輕率に二三の當局の專斷に委するが如き失敗を、決して再びしてはならない。

英雄論

正宗白鳥

一

「こいつは惡人だ。惡漢だつたよ」と、ナポレヲンは、ある日、ルソーの墓の前に立つた時に云つた。「フランスの平和のためには、この男なんか生れて來なかつた方がよかつたのだ」

「何故です？　統領閣下(コンシュル)」

「この男が革命の道をつけたのだ。この男が無かつたら、フランス革命なんていふ餘計なものが無くつて濟んだのだ」

「しかし、閣下は革命をお歎きになるやうな方とは、どうしてもお見受け申されませぬが……」

「いや、時日が立つと分るだらう。世界平和のためには、ルソーのやうな奴はゐなかつたのがよかつたか、どうだか。……ルソーばかりぢやない。おれなんかも、世界平和のためには、出て來なかつた方がよかつたかも知れない」

　あの自信の強いナポレヲンでも、たまにはかういふ疑惑に包まれることもあつた。英雄とか大才とか名づけられる者は、世の中に存在しないのが、人類全體のために幸福であるかも知れない。ナポレヲンがさう氣づいた時分から、世界の識者が、人類發生以來の英雄崇拜の夢からいくらか醒めかゝつたらしく、歷史を民衆的見解から批判することが次第に流行しだし

た。トルストヰの所謂「歴史の入場券」所有者は、幾億萬に達してゐるので、決して少数の偉人英雄に、その入場券を占領させる譯に行かないと思はれだした。「古人は我々に英雄叙事詩の模範を殘した。その中では、英雄が歴史の興味の全部をなしてゐる。それ故、我々はさういふ種類の歴史は、この人間時代に於いて、何らの意味をも持たないといふ考へ方に、依然として慣れることが出來ないのである」と、トルストヰは、「戰爭と平和」の中で歎息してゐるが、その後、民衆的傾向はます〳〵歩を進めて、「多数と貧乏とが人類の最も重要な美徳(the only important Virtues of Mankind)である」と思はれるやうにさへなつた。西洋模倣第一の近代日本に、この思潮の輸入されない筈はないので、文學にも政治にも、まだ附燒刃の域を脱しないにしても、さういふ色彩は急速に加はりだした。いろんな意味の優越感が、平清盛の甲冑のやうに、僧衣で蔽うても隱し切れないのに關はらず、一切平等の殊勝な念佛聲が盛んになつた。

「おれは、生れて來るのが遲過ぎた」と、ナポレヲンは、戴冠式の日に近臣に向つて云つた。「無論おれは華やかな事業を仕遂げて來たが、おれを昔の英雄に比べると、格段に相違があるぢやないか。たとへば、アレキサンダーを見ろ。アレキサンダーは、亞細亞を征服した後で、自分をヂユピター神の子だと公言してゐたが、母親のオリンピアと、師匠のアリストートルと、二三人の物識りを除いたら、人民は皆んなさう信じてゐたのだ。ところが、今おれが自分を全知全能の神の子だと公言して、今日のやうな機會に、神子出現の感謝祭を行はせようとしたなら、皆んなが嗤ふにちがひない。魚屋の嚊あでも、舌を出しておれを馬鹿にするだらう。當節は、平民どもも文明開化になり過ぎたよ」

二千年前に現はれたからこそ、キリストも神の子として通用したので、時代はすでに神話の域を脱してゐる？　しかし、ナポレヲンは澆季の世に不滿を感じてかく云ひながら、アレキサンダーを理想としてゐた。シーザーを模範としてゐた。破天荒の大破壞事業をやつた佛蘭西革命でさへ、獨創と云ふよりも剽竊と云つていゝところが多いので、あの大芝居の登場俳優は、ルソーやヴォルテールに感化されてゐたばかりでなく、めい〳〵に一冊づゝ、プルターク英雄傳の流布本を持

つてゐて、そこに書いてある俗語を使つた。その書中に挿まれてゐる劍戟家の身振や表情を眞似た。日本でも讀本の武俠の型が眞似られたと同じ心理なのだ。飮めぬのに大酒をしたり、肩を怒らしたり、尻をまくつたりするのは、卑俗な英雄型であるが、しかしこの方がプルターク型よりも民衆的である。

我々が幼年の頃には、陸軍大將や豐臣秀吉が、一般年少者の前途の理想になつてゐたらしい。西洋では、プルターク中の人々が、有爲の青年の憧憬の的になつてゐたことが、いろ／＼な傳記や小說に散見してゐる。しかし、ナポレヲン出現後には、時代の近い希臘羅馬の英雄よりも、このコルシカ生れの矮漢が、標本的英雄となつた。歐米を旅行して、國々で自慢してゐる英雄の遺跡を見て廻つても、ナポレヲンの印象が最も深い。少くも、通俗的人氣はナポレヲンに及ぶ者はないやうである。アメリカのワシントンもイギリスのネルソンも、ドイツのフレデリック大王も、漫遊者を動かす力が彼れほど強くはない。彼れがどんなに世界史上の華やかな立役者であつたかといふことは、西洋史の知識に乏しい極東の漫遊客の心にも觸れるのである。

私は、年少の頃、和譯の「三國志」や「漢楚軍談」を讀んだ。「眞書太閤記」などをもいくらか讀んだ。しかし、どれもさう面白いとは思はなかつた。關羽張飛沛公項羽などによつて士氣を鼓舞されたことはなかつた。そして、ナポレヲンについても、關羽張飛を連想してゐたのであつた。日本で最初にこの西歐の英雄を憧憬したのは、頼山陽であらう。彼れは、長崎に遊んだ時、和蘭陀醫者から、この英雄の事績を聞いて、「佛郎王歌」といふ一篇の敍事詩をつくつてゐる。この醫者はモスコー征伐軍に加はつて、負傷者の治療をしてゐたので、馬を喰つて饑死を免れたと云つてゐるほどで、その觀察談は餘程面白かつたであらうと想像されるが、山陽の詩は甚だ凡庸で、異國情調の新味なども少しも加はつてゐない。「山陽詩鈔」には、この詩の前に、「荷蘭船行」といふ長詩が收められてゐて、その結末に、「嗚呼小醜何煩ニ遠圖一。萬里逐レ利在ニ貪饕一。可憐一葉凌ニ鯨濤一。吁如ニ浮蟻慕ニ羶臊一」と、あの頃の時代思想を唄つてゐる。萬里の波濤を越へて來た貿易船で、蛙

が臭いものを恭つて來ると擲捨して、自から高く留つてゐたのが、百年前の日本であつた。山陽は時代相應の民衆詩人であつたが、先覺者でも豫言者でもなかつた。小醜と云ひ可憐と云つた山陽も、明治以後の紅毛人模倣時代を見たら、一寸先きの分らない人智の淺はかさを少しは反省したであらう。

新日本の紅毛人模倣もテンポが早い。西歐人を小醜呼はりして、「割レ雞貴ニ牛刀ニ」と豪語した山陽時代から急速に轉じて、明治の初期には、「建業たゞ期すワシントン。鬪爭獨り希ふナポレヲン」と、活氣ある新代の青年に唄はれるやうになつた。現日本の青年の模倣癖から理想鄕とされてゐるらしいロシアに於ても、以前は、其處の青年の頭に、ナポレヲンは餘程強く印象されてゐたらしい。プウシユキンもレルモントフも憧憬の思ひを寄せて唄つてゐる。トルストイは、「戰爭と平和」のなかで、醉つぱらひのラヴラシユカの口を借りて、「子供のやうな向う見ずと、增長慢のお蔭で、あいつ途方もない評判男になつた」とか、「あいつ、類のない馬鹿なことや下衆つぽいことをやり居つた。……どんな子供でも耻かしいと思ひさうな下衆つぽい限りのことをしつくした」とか、ナポレヲンについて惡聲を放つてゐるが、何事にもトルストイと對立してゐるドストエフスキーは、「罪と罰」のラスコルニコフをして、ナポレヲンを崇拜させてゐる。ナポレヲンのやうに強くなつたつもりで、因業な老婆を殺させてゐる。「ナポレヲンのやうな男の身體は、人間の肉で造られてゐるのではない。靑銅造りだ」と、ラスコルニコフは呟いてゐる。

その實、ナポレヲンは、決して「向う見ず」なことはしなかつた人らしい。肉體も靑銅造りでないばかりか、普通人よりも弱かつたらしい。第一統領であつた頃は、「あれで、一週間も生きてゐられるだらうか」と、と人に疑はれるほどに脆弱に見えたことがあつた。後年次第に強くはなつたが、それでも、ちよつとした隙間洩る風のためによく風邪をひいた。明るい所では眠れなかつた。少しの過食のためにも嘔吐した。靴が堅くても我慢出來なかつた。新しいペンキの臭ひにも堪へられなかつた。神經は婦人の如くセンシチブだつた。「おれは、どれほど小食したと思つても、いつもそれが喰ひ過ぎに

なる」と自分でも云つてゐる。酒と云つたら水で割つた赤葡萄酒を少し飲むくらゐであつた。食事は八分間で喰ひ、晩餐の時間も十五分で澤山だつた。女との戀も極めて忙しかつた。皇后ヂョセフィーヌが詰るやうに云つてゐる。彼れが女に心を惹かれるのは、一年の間を通じて、五日か六日くらゐなものであつた。その時でさへも……」

青春の頃は兎に角、中年以後の彼れは、チュイルリーの宮殿の陰鬱な部屋で、行者のやうな禁慾生活を過した。肉體が靜止して精神のみが活動してゐた。電光が人間の肉體に宿つてゐたやうなものだ。

「明日が來り、明日が去り、又來り又去つて、時は忍び足に、小刻みに、記錄に殘る最後の一分まで經つてしまふ。すべて昨日といふ日は、阿呆どもが死んで土になりに行く道を照したのだ」といふ、悲劇の主人公の悲痛な臺詞は、早くから私の胸に刻まれてゐるが、英雄の傳記と云ひ、名作家の戯曲と云ひ、古今の名小說と云ひ、どれもみな、要するに「阿呆どもが死んで土になり行くまでの旅行記」を、光線ニュース見たいに、明かに照らし示したものゝやうに私には思はれてゐる。しかし、ナポレヲンは、そのうちでよく生きてゐた。人間として誰れよりもよく生きてゐた。闇夜にきらめいてゐる電光のやうであつた。……彼れの傳記を讀むと、一生のどのページを切取つて見ても、冴えた生命が見られぬところはない。永遠茫大な宇宙を背景にして、電光がピカ／＼光つてゐる。敗軍の時にも失意の時にも、彼れの心の電光は衰へを見せてゐない。死に面してさへさうだつた。「彼れはまことに人間の精神の指導者であつた。最後の强敵——死——に打勝つことをも人間に敎へてゐる」と、彼れの讃美者は云つてゐる。「予を信じる者は決して死を見ざるべし」とは、二千年間歐洲の衆賢衆愚を魅了した神の子キリストの有難いお言葉であつたが、俗界の覇王であつたナポレヲンも、さういふ力を有つてゐたのであらうか。

私は、多數の名畫家の描いた多數のキリストや、殉敎者を見たが、東洋人の目に神々しさや、偉大さや、仁慈溢るゝばかりの親しさを覺えるものは、案外尠くて、むしろ抹香臭くて馴染みがたい感じのすることが多かつた。いろ／＼な有名

人の顏のうちで、ナポレヲンの面相が最も完備した偉人顏として、私の目に映つた。ダヴィの描いた「サンベルナール山を越ゆる彼」や、メソニエールの、彼れを題材として描いた幾つかの小品や、ワーテルローの古跡にあるパノラマのなかのナポレヲンなど、全身の神經が電光の如くきらめいてゐた。

二

癈兵院(Hotel des Invalides)といふところが、シエーヌ河の左岸にある。ルイ十四世時代の建築で、大ナポレヲンや三世ナポレヲンによつて修理されて、老朽兵士や不具になつた兵士の收容に當てられてゐたと、案内記に書かれてゐる。今は古ぼけて埃つぽい。階上階下に武器の陳列があるが、ここのは大したことはない。歐洲諸國は、それ〴〵に古今の武器や戰畫の陳列をやつて、自國の敗軍は知らん顏して、戰勝のみを誇つてゐるが、日本では、遊就館のやうに、大和魂を籠めた傑れた武器を陳列してゐても、これ等は皆國内戰爭の記念見たいなものであるのが、外國の遊就館とは違つてゐる。

それで、フランスの癈兵院は、我等に取つてはあまり興味のないものであるが、しかし、それ等の武器陳列室に接して、同じ構内に存在してゐる莊厳な寺院は、伊太利あたりの古い寺院よりもグロテスクでなく抹香くさくなく、フランス流に灰汁拔けがしてゐる。ナポレヲンの遺骸は、セントヘレナからこの寺院の地下に改葬されてゐる。墓と云つても、日本の墓とはまるで感じが違ふ。西洋では、昔から日本よりも一層墓を重んじたらしい。私は、ニューヨーク滯在中、市中から數哩を隔てた所の墓地を見たが、それは壯大なものであつた。近來死體を木乃伊にすることも行はれだしたさうだ。埃及研究はこの頃ます〳〵盛んになつて、ニューヨークの博物館には、新發掘の木乃伊が夥しく陳列されてゐる。金が豐かで現世の榮華を極めてゐる米國人は、この世に未練が多くて、自分の肉體をも不朽にしたくなるのであらう。この大墓地の近所に犬の墓地があるが、それでも、日本の墓地以上である。墓石に苔が蒸して、閼伽にボウフリが湧いて、枯つ葉

の浮いてゐるやうな、人生無常の風味は、西洋の墓では見られない「われ遺書をにくむ、死して徒らに人の涙を乞はんより、生きながらにして、吾むしろ鴉をまねき、汚れたる脊髄の端々をついばましめん」と、ボオドレエルは嘆じて叫つてゐるが、フランスの文學者の墓なんか隨分立派だ。

ナポレヲンの墓の如きは、墓と云ふよりも贅澤な美術品である。ロンドンで、ウエストミンスター寺院内の文學者墓域や、ポーロ寺の美術家墓域を見たあと、同じポーロ寺のネルソンやウエリントンの巨大な墓石を見て、西洋だつて、軍人尊崇熱は日本同様であると感ぜられたが、フランスでも、パンテオンに葬られた諸文豪の墓は、それ相應の有難味はあつても、ナポレヲンに比べると、比較にならぬほど見窄らしいのである。

奈翁の死骸を収めてゐるといふ石棺は、赤味を帯びた御影石で、長さ十三呎、幅六呎半、高さ十四呎に達して、周圍の舗石のモザイクは月桂冠を現はして、その中に、彼れが生前に大勝利を得た諸方の地名が嵌め込まれてゐる。人一代でこれほど多數の目醒ましい勝利を得たことは、世界史上稀有のことなので、佛人はそれを自慢にしてゐるのである。ゾラやユゴーに與ふる月桂冠の幾百倍をこの軍國主義者に與へてゐる。この納骨所を取圍んだ廻廊には、この大皇帝の大勝利を表象するための大巨像が十二箇も配置されて、その間には、分取品や敵の國旗が點綴されてゐる。しかし、私が感動されたのは、この華美豪奢な墓域を見た時ではなくつて、武器陳列室の一隅にある奈翁記念品部屋へ足を踏込んだ時であつた。その古ぼけた淋しい部屋には、奈翁戰場用のピストルや双眼鏡や、野營用の質素な寢臺などもあつたが、セントヘレナ幽閉中の常用品が、殊に私の目についた。「蕭條たる英雄の末路」といふ月並な感慨が、支那の詩文によつて情緒の教育をされて來た我々の心には、自から浮んで來るのである。意外にも、奈翁の死面がそこに置かれてゐるのに氣がついたが、私は、ふと島村抱月氏の死顏を思出した。奈翁と抱月氏とは顏立ちがまるで異つてゐる譯で、一つは可成り肉付のいゝ丸顏で、一つは痩せた細つこい顏なのだが、奈翁も死面に於ては、生前の豐頰をも精悍の氣宇をも失つてゐた。痩せて細つそ

りしてゐた。死面をつくることは、死後に銅像のつくられると同樣、日本にも流行して來たが、生の執着のしつこたらしさが感ぜられる。ローマのペテロ寺やロンドンのウエストミンスター寺などで、墓碑の上に、魔神が人間を奪つて行かうとする凄い光景を現はした彫刻が蔽ひかぶさつてゐるのを見ると、西洋人種の生死に關する考への執拗なことが想像された。寂滅爲樂と云つたやうなすがすがした情味は感ぜられない。「われ遺書を忌み、墳墓を憎む」と唄つたボードレエルは私はむしろ同感したくなる。「死骸を火葬にして灰を海に投ぜよ」と遺言したエンゲルスにも同感したくなる。唯物論者とデカダン詩人と、この點で心を一にしてゐるのを私は面白いと思つた。

この淋しい死面を御神體として、華美な殿堂のつくられてゐることを考へてゐると、民衆は今なほ英雄の前に並んで跪くのだと思はれる。あの時代に、少くも二百萬人の生命が、ナポレヲンのために、戰場で亡んだ譯だが、その殺人發頭人の前に民衆は跪くのである。「英雄が神の子とは思はれなくなつた時代に生れた」のを、奈翁は歎じてゐたが、彼れは、生前にも死後にも、民衆から神としてあがめられてゐるのである。人の世は次第に英雄の影が薄くなつて民衆時代となつて進むと云はれてゐるが、肝心な民衆は、いつになつても「英雄妄崇」から脱却し得られないのだ。彼れの生前、大臣でも議員でも、將校でも、あるひは彼れの竹馬の友で、長い間彼れの秘書役を勤めて、丹念な「奈翁傳」を書殘したブーリエンヌのやうな男でも、彼れの兄弟でも姉妹でも、二人の妻君でも、幾人かの情婦でも、すべて彼れに背いたのに關はらず、彼れの母と一般民衆とは、終始彼れを離れなかつた。……この事は、ナポレヲン史を讀んで、わが心に強く印象された一つである。社會的地位の高い者ほど、また彼れに接近してゐる者ほど、彼れに對する愛情が薄く、理解が乏しかつた。社會的地位の低い者ほど、また彼れから離れてゐる者ほど、彼れに對する愛情が濃くて理解が深かつたとも云はれる。「汝は世の知者賢者にはこれ等のことを隱し、赤兒にのみ顯はし示した」と、聖書に記されてゐる言葉を照合して見ると、ナポレヲンやキリストの持つてゐる尊い物は、民衆や赤兒にのみ分ることになるのだが、ここに、一面の眞理はあるにしても全面

の眞理があるとは私には思はれない。民衆や赤兒は愚昧だからではあるまいか。「おれのやうな人間は、百萬人の生命を犠牲にするくらゐ何とも思つてゐない」といふナポレヲンの言葉は、聞く者をして戰慄させるであらう。しかし、民衆がこれに對して、「あなたのためになら、我々の生命を棄てるくらゐ何でも御座いません」と答へたと知つたら、非英雄時代の今日では怪訝に堪へぬであらう。しかし、ある女やある男のために生命をも棄てる男女の所行は、傍觀者には馬鹿氣きつたことゝ思はれるが、戀した男女の微妙な心理は傍觀者には分らないのだ。「宗教的迷信」「英雄崇拜」「盲目的戀愛」は、冷靜なる理智では批判出來ないのである。

霜の深いある朝、奈翁が、彼れの傍によろめきながら隨行してゐる老兵士に向つて、「寒くはないか。モナミ」と訊くと、「いえ。あなたのお側にゐますと、溫くなります」と、老兵士は答へた。

奈翁がエルバ島に押籠められてゐた頃のある日、三人の兵士が巴里の居酒屋へ行つて、四つのコップを命じた。「だつて、あなた方はお三人ぢやありませんか」と、主人が云ふと、「餘計な心配しないで、言ひつかつた通りにしろ。四人目のお客が今に來るのだ。」——ナポレヲンのことだ。

戰爭で酷使されて、饑ゑて凍えて傷ついて、最後の息を引取る時に、彼等の多くは、主人を恨まないで、むしろ彼れのために祈つたと云はれてゐる。「皇帝萬歲」の聲は、瀕死の兵士の口から屢ゝ叫ばれたといふ。

それでは、ナポレヲンは、民衆を愛してゐたかといふに、雜多紛々の美談的ゴシップが傳つてゐるにしても、彼れの心の底には、衆人に對して愛情の焰は燃えてゐなかつたらしい。少年時代から最も深く彼れに接して、彼れの心の隅々までも知つてゐた筈のブーリエンヌが云つてゐる。「ナポレヲンは、人間を動かす二つの力は、自利と恐怖だと信じてゐた。愛といふものは、"foolish blindness" だと屢ゝ云つてゐた。おれは、誰れをも愛しない。兄弟をも愛しない。兄のジヨセフだけにはちよつと愛情を有つてゐるが、それだつて習慣の力だ。おれはデユロックも好きだが、あの男は眞面目で意志が

顔い。それで一生に一度も涙なんか流したことはなかつたであらう。それで、おれ自身は全くの一人ぼつちで、ほんとうの親友は一人もないことを、おれはよく知つてゐる」

そこで、**ブーリエンヌ**は、「**ボナパルトは不幸な男だ**。**友情を信ぜず**、神から與へられた尊い愛を知らなかつた」と評してゐるが、**これも**、**燕雀が鴻鵠の心を忖度する類ひかも知れない**。**ある時**、兄のジョセフが、「親身に君のことを氣遣つてる**人間は僕一人だ**」と云ふと、**ナポレヲンはその感傷的な言葉を刎ね返して**、「**それは**餘計なことだ。僕は五百萬の人間に**愛される必要がある**」……**彼れは**、**自己の胸裡の夢想を實行に移すためには**、**最大多數の人間を必要としたのである**。

そして、この唯我王のために、大多數の民衆が甘んじて肉彈となつたのである。奈翁の如きは、人類最後の英雄であつて、現代の民衆は英雄偉人の犠牲となる愚かさから目醒めてゐるのであらうか。「戀愛」から目醒め、「宗教迷信」から目醒め、「英雄妄拜」から目醒める民衆世界を、我々は想像し得られるのであらうか。

「大戰爭の間には、ナポレヲンの前後左右は極度に靜まりかへつてゐる。鐵砲の音だけが遠く近く響いて激戰たることを示してゐるが、それを外にしては、蜂の羽叩きの音も聞取れるほどの閑かさだ。あたりの人々は、咳一つするのも憚られる。」

從軍者であつたスタンダルは、かう簡潔に戰場の光景を描寫してゐる。神來の興に驅られてゐる藝術家の境地は、戰場に於ける奈翁の心境であつた。彼自身、戰爭は最高の美術であると確信してゐたらしい。戀愛至上主義や宗教至上主義のやうに、彼れは戰爭至上主義を奉じてゐたのであらうが、民衆も彼れと心を一つにして、戰爭の三昧境に入る心理が、今日の我々には分らない。フランス革命の跡仕末は、ナポレヲンのやうな人間でなければ出來なかつたので、佛國民は彼れを戴いて彼れの跋扈にまかせてゐたといふのが、歴史家の普通の見解で、「一人のナポレヲンが出現しなかつたら、他に人があつて必ずその地位を補充したであらうといふことは、必要なる人は、必要なる時、常に見出されたといふ事實によつて明かである」と、マルクス派の誰れかも云つてゐる如く、あの頃のフランスにはナポレヲンか、ナポレヲンの補充的人

物が必要であつたと解釋すれば、それで濟むのだが、さうすると、民衆といふものは盲目なもの、やうに私には思はれる。自己の闘爭心や破壊慾のために、二百萬人を戰死させて悔ひないナポレオンのやうな一人の男に手引されなければ、——あるひは、「その地位を補充したであらう他の奇蹟的人物」の出現を待たなければ、國の秩序が保てなかつたとすると、數ばかり多い民衆も、所用要ないのである。「人間は自己の利益と恐怖で働く」と奈翁が云つた恐怖といふ意味に、人間は生存上屢々不安に襲はれるので、強者に隷屬して強者の保護の下で安心しようといふ人類固有の心理が指してゐるのであらう。ゴルキー作の「猶太人の浮世」を、二葉亭の名翻譯によつて私は愛讀したのであるが、弱者カインが強者アルチムに縋がつて、周圍の虐待を免れようとする心理は、民衆對英雄の心理を髣髴させてゐるやうに思はれる。「おれほど戰に強い者は昔から無かつた」「おれのやうな人間がまたと世に出て來るのは何千年先きのことだ」といふ大言壯語に相應しい實力を備へてゐた彼れを親分として頂いて、心丈夫に思ふのがあの頃の民衆心理であつた。

「おれは、誰れをも愛しない」と、奈翁自身が云つてゐる如く、古來の英雄は民衆を愛したのではなかつたが、愚かなる民衆は、その英雄を仰いで、死面の前にも拜跪するのである。

三

「戰爭術ではあらゆる場合を考慮に入れて、精確な數學的計算を試みて、運まかせの範圍を少くするのが常例であるが、この知識と偶然との度合は天才によつてのみ識別されるのだ。凡人に取つては、偶然はいつも神秘不可思議なものとして存在して、たゞ上べだけが事實として映るのだ」

偶然と云ひ、運命と云ひ、「星」と云ひ、天外から投げられた骰子見たいなもので、戰爭でも他の事業でも、偶然を有つた遊戯であるが、ナポレオンほど、數學的正確と、幾何學的知覺と豫言者的幻想をもつて、この遊戯を試みたものは古今

つたと云はれる。最も明晰であるべき數學と、最も盲目であるべき偶然との結合融和が彼れに於いて見られた。

戰爭のはじまる前に、彼れは、何日間か、床の上に大きな地圖を擴げて思慮を凝らすのを例とした。地圖の上には、さまヾヽな色のついた蠟で塗つた針がいくつも刺されてゐるが、これは、自他の軍隊の實際の位地と想像裡の位地を示してゐるのだ。それを見ながら彼れは、百里千里の遠近の地へ傳達させる自己の計劃を案出するのである。集中的進軍、間斷なき攻擊、電光のやうな打擊。――かういふ劃策が美術の作品か幾何學の定理のやうに美しくて單純であつた。彼れの戰術の大目的は、戰端開始前に、敵軍をしてその根據地との連絡をすべて不可能ならしめることにあつた。すべて數學と力學に基いて考へられた。ある軍隊の有つてゐる力は、力學上の運動の量と同樣で、その力を計算するには、兵數に進行の速力の度を掛ければいゝので、進軍の急力は軍隊の勇氣を增し、勝利の機會を多くするといふのが、ナポレヲンの戰法なのであつた。

この劃策に當つては、極度の注意が施されて、ちよつと見ると、「臆病」とも思はれさうであつた。「野營でプランを立てゝる時には、おれほど臆病なものはないのだ。おれは、あらゆる危險を誇張して考へるのだ。……最も烈しい心配を經驗するが、しかし、周圍の者におれの不安を見透かされはしない。極めて冷靜に見せかける用意は忘れてゐない。おれは實際女が子供を產落す時のやうに苦しむのだ。しかし、劃策が決定すると同時に、おれは一切すべてを忘れて、たゞ成功を待つばかりだ」

一たび決心した後ですべてを忘れることは、すべてを覺えてゐるよりも困難である。はじめは處女の如く、終りは脱兎の如く、不意の千里眼的洞察力と豫言者の心の閃めきが、いくたびも勝利を得させたと云はれる。彼れは、「午前二時の精神的活氣」といふ言葉を口にしてゐる。それは不用意の勇氣を差してゐるので、豫想しない事件が起つた時に、咄嗟にそれを批判し解決するためには、その勇氣が必要なのだ。そして、彼自身はこの午前二時の精神的活氣を充分に有つてゐる

と信じてゐた。」

この非凡な頭腦の所有者も、「誠實」に缺いてゐたらしく思はれる。長い年月一しよに暮してゐた間、ボナパルトは、一分間も誠意を示したことはなかつた」と、ジョセフィーヌが歎じてゐる。無論この婦人のいふことなど悉く信じる譯には行かないが、傳記學者が盛んに書入れてゐる奈翁の婦人宛ての柔しい手紙なんかを、文字通りに讀んで、彼れを誠意のある男と速斷するのは淺見である。「女子は男子の奴隷としてつくられてゐる。……我々男子を良き方向へ導く女子が一人あるとすると、百人の女子は、男子を下らない所へ連れて行くのだ。男女平等を要求するのは狂人じみた考へだ。彼等は我等の所有物で、我等が彼等の所有物ではない。女子は男子に子供を與へるが、男子は女子に何物も與へない。男子が女子に屬するのは、果實を有つた樹木が園丁に屬するのと同樣だ。……かういふ差別があつたにしても、女子は侮蔑されるのではない。人にはそれ〲の特權もあり義務もある。淑女達は、美しくて愛嬌があればいゝのだ。それとゝもに、柔順でなければならぬ」

ナポレヲンの婦人觀は純然たる東洋流であつた。

彼れは、政略上さま〲な貧民救助の方法を講じてはゐたが、民衆を彌次馬と思ひモッブと思はないではゐられなかつたらしい。彼れは帝王貴族を見た目を轉じて群衆を見ると、いくらか侮蔑の念を減じる氣持になつたが、それも大したことはなかつた。民衆も、貴族と同樣に、彼れの計劃遂行のために利用さるべきものと、彼れには思はれてゐた。世界の形勢を變化させた傑物は、多くの首領株の人間を籠絡して目的を達したのではなくつて、群衆を手に入れたゝめなのだ。貴族を籠絡する男は要するに陰謀家で、結果は面白くない。群衆を動す人間こそ、本當に地上の形勢を一變させるのだ。」彼れはその民衆觀を明かに洩らしてゐる。彼れの聰明な頭腦は、十九世紀に起つたあらゆる問題を豫感してゐたが、社會問題だけは念頭に浮べてゐなかつたと云はれてゐる。

ナポレヲンの婦人觀と民衆觀の要點はかういふ風であつたが、その宗教觀も、幼時から最後まで一貫してゐて、すべての宗教を排斥してゐた。民衆のためには宗教を必要とした彼れも、「おれは耶蘇だつて、外の狂信家同樣に死刑になつたのだと確信してゐる。自分を豫言者だの救世主だのと言觸らす人間はいつの時代にもあつたのだ。……おれは、賞罰を掌る神なんかゞあらうとは信じられない。正直なものが不仕合せで、惡い奴が仕合せな例をおれはたび／＼見てゐる。タレーランを見るがいゝ。あの惡黨も屹度寢床の上で往生するにちがひないよ。懺悔僧に、「お前は地獄に落ちると云つて脅かされたゝめにおれがへこたれるやうだつたら、どうしておれが今まで獨立獨歩で生きて來られたか。懺悔僧なんていふ碌でなしが、どんな權力を持つてゐると思ふ？」と云つてゐた。孤島に追放された時にも、彼れの心は怯まなかつた。死に先立つ五年前に、「おれは懺悔僧なしに死にたい」といふ希望を洩らして、傍の者は、「今はあゝ云つても、いよ／＼斷末魔となつたらどうだらうか」と危んでゐたが、實際、息を引取る間際まで、彼れの鐵石の如き心は怯まなかつたさうである。生前強敵の中へ突入した彼れは、暗黑の死の世界へ勇敢に身を投じた。夢心地で口にしたことも、「おれはシピオや、ハンニバルや、シーザーや、大勢の豪傑に會つておれの手柄話を聞かせてやらう」といふやうなことであつた。東洋人なら珍らしくないことかも知れないが、傳統的にキリスト教宗教觀の骨髓に浸んでゐる西洋では、英雄豪傑詩人の類ゐも、最後には、キリストに縋るのを例としてゐる。身心が衰へると、佛心(ほとけごころ)が芽をふくのだ。近來は、宗教排斥の強い傾向が一部に流布してゐるが、婦人觀や民衆觀は、次第に感傷的になつて來た。

ナポレヲンの心は千差萬別に働いたが、人の世に重要な三つの問題についての彼れの根本の考へは右の通りであつた。よくも惡くも徹底してゐたので、ある英雄の面目を私はそこに見るのである。ジョセフィーヌが「誠實(シンセリチー)のない人」と云つたのは當つてゐるかも知れない。しかし、世上の道德の標準から見て誠實がなかつたので、ナポレヲン自身は、世の習慣にごまかされないで、自分に對して誠實であつたのかも知れない。

鬼才スタンダルは、ナポレヲンと同時代に生れて、その行動を直視してゐたのだが、この偉人のことは考へれば考へるほど分らなくなる。「謎だ」と云つてゐる。細緻な批評家として知られてゐる現存のメレヂコフスキーも、「研究すればするほどナポレヲンは分らなくなる」と云つてゐる。この英雄に關する書物は、既に四萬部も世に現はれてゐるさうだが、「英雄の心事」は、誰れにも分らないと云はれてゐる。研究者は水面の月影を捉へんとする猿公に比べられてゐる。

「世界を總括したものがナポレヲンだ」と、ゲーテは最大級の讃辭を呈してゐる。そして、實行界の英雄ナポレヲンと思索界の偉人ゲーテとの會見は、歴史上の興味ある光景として有名である。左右に近臣を侍らせて朝餐を取つてゐたナポレヲンは、ふと戸口に立つた詩人を見つけて側へ招いたが、その人生の風雨に洗錬された風貌たる六十翁に接すると、驚歎して暫く口を噤んでゐた。やがて、"Voila un homme."と、左右を顧みて呟いた。彼れの直感は、この男こそ眞の人間だと一瞥して見破つたのであらう。しかし、この尊敬すべき眞の人間に對して、彼れがひそかに求めてゐたものは、自分の生涯を、詩か戯曲かの形で謳歌させることであつた。「君は何故シーザーの死を題材として大作を試みようとしないのか。……巴里へ來たまへ。あしこではもつと廣い世界が見られるよ。新しい創作の材料が得られる」など、そゝのかしたが、その實、絶世の文豪をも、自分の名聲擴張のために利用しようとしたに過ぎなかつた。

四

彼れは、聖書については、新約よりも舊約を好んだ。舊約のモーゼを人間の模範の一人として認めたが、民衆をなだめつ賺しつして引張り廻したモーゼに憧憬したところにも、彼れの面目が現はれてゐるので、彼れも民衆を引ずり廻した。その休みなき活動の歴史は、神話のやうに超凡的に見ても面白く、講談のやうに取扱つても面白く、「英雄の心事」如何に關はらず、いろ／＼な歴史家傳記作者、戯曲家小說家の題材になつて、世を賑はしたのだが、「阿呆どもが死んで土になり

行くまでの旅行記」の一つとして見ると、この英雄も、そこらにゐる山師の少し桁の大きいくらゐな人間として見られないことはない。

一介の小武官たるに過ぎない、しかし慾の深い彼れは、革命の騷ぎに一儲けしようと思つて首都へ出掛けた。「最初の資本の一萬圓を手に入れるのが六ケしいのだ。そいつが手に入りさへしたら……」と、彼れは舌なめずりしてゐた。しかし、い、運がお膳立てして彼れを待つてゐたのでなかつた。彼れの出世のために、有力な未亡人のジョセフィーヌを手に入れたのは、三年後のことであつた。「下層の民衆運動をやつつけるのには、理屈ぢや駄目だ、砲兵を用ひて打潰すのに限る」と、中流階級本位の革命を煽てゝ、歴史上に有名な言葉となつて殘つてゐる "Whiff of grapeshot" といふ辛辣な警察行爲の行使者として、ナポレヲンの名の知られたあと、間もなく、彼れは、ジョセフィーヌと結婚した。「一萬圓の資本」ともなりさうな、この女を口說き落すためには、青春のナポレヲンは、持前ののろい心臟をも烈しく鼓動させたらしかつた。鬼の目に淚を流したらしかつた。この二人の戀愛は、株屋の手代と化粧品屋の女主人との避暑地に於けるローマンスと云つた趣きがある。お互ひに掛引きを有つてゐたのだ。

兎に角、彼れは新妻のお取り做しで伊太利討伐の指揮者になれた。しかし、革命後の新政府のある有力者に、ジョセフィーヌの勢力のあるのは、年増盛りの色氣たつぷりのためだつて、ナポレヲン自身も、口では豪語しながら、心の底ではこれを認めてゐたのだらう。しかし、彼れは彼女を愛してゐた。最初の戀は、ナポレヲンのやうな男にでも根深く刻まれるものらしく、セントヘレナでの臨終の床で、最後に夢心地の彼れの口から止切れ〱に洩れた言葉は、「フランス、……軍隊、……軍隊の頭、……ジョセフィーヌ」であつた。ナポレヲンが流竄の五六年間に、筆にし口にして世に殘したさまざまの感想には、虛僞の言葉も交つてゐるかも知れないが、臨終の言葉は彼れの心魂から出た自然の聲に違ひない。

若きナポレヲンは、自分の家柄よりも上の階級の婦人を得たことを得意にしたに違ひない。「おれの女房は貴婦人だ、美

人だ、社交界の大物だ—と思つて、ほくそ笑んでゐたので、彼れの趣味はこの程度であつたのだ。しかし、趣味性は問ひでない山師として彼れを見るとしても、彼れを世上一般のぼんくらとは、同一視する譯に行かない。一つでもいゝ機會を見つけると、それを徹底的に利用しないでは置かなかつた。ナポレオンの傳記を冷靜に觀察すると、運命は人並以上に彼れを惠んだのではなかつたので、いゝ機會が頻繁に彼れの前に現はれたのではなかつた。たゞ機會を捉へてそれを目醒ましく生かしたのが、彼れの腕前なのだ。彼れは骨牌(カルタ)遊びにいゝ札を手に持つてゐたのではなかつた。どんなまづい札を持つてもそれを極度に活用した。彼れは、伊太利の戰爭で、殆んど烏合の衆に等しい貧弱な軍隊を率いて強敵を倒した。この空前の成功のため、巴里の總裁政府は、彼れの手腕を認めて、政府の手先として存分に使つてやらうと企てた。それで英國侵入の大任を彼れの双肩におつかぶせた。この大任に堪へるか堪へられぬかゞ、彼れの出世の分れ道であつた。

彼れはこの機會を捉へると、英本國へ軍を向ける代りに、敏速に埃及に向つた。英國の植民地を打つて本國を間接に脅迫しようといふのが政治的口實であつたが、彼れの本心を覗いたら、少年時分から崇拜してゐるアレキサンダーを氣取るつもりでもあつたであらうし、混亂してゐる巴里の政界の渦中を脱して、後日自己の野心を働かせる機會を攫まうとする山氣(やまけ)もあつたのだ。ピラミッドの前に立つて、「四千年前が我等を見てゐる」と士氣を鼓舞する言葉は、大芝居の名臺詞である。この東方征伐が意の如くならなかつたにしろ、彼れの貫目は加はつたのだ。中流階級は自分等の利益保護のために彼れを首領として頂いた。大革命で得たさまざまな實益をも夢をも失はないために、彼れを親分とした。ナポレオンは新ブルヂョア社會の救世主となつたのである。ブルヂョアは、自分達の息子が、名聲赫々たる軍隊から武官任用の辭令書を得ることを望み、主婦は、その娘が、新興の大朝廷から舞踏會の招待狀の贈られることを夢見た。在來の歐洲に類を見ない廣大華美な朝廷が現出されて、肩書や勳章や、新しい制服がきらびやかに燦いた。兵士どもゝ、月々きちんきちんと俸給が支拂はれた。南歐洲の青年は、今日の世にも、なほ、老翁愛顧の青年の樂しい生活を夢見てゐるさうである。ナポレオン

たることを願つてゐるのではない。ナポレヲンのやうな男の部下になることを願つてゐる。そこに、凡人の心理が現はれてゐるので、某英雄だの××黨の首領や會長だのが、この世で幅を利かすやうになる所以である。奈翁が引率した守備隊の生活の面白さは、幾百幾千の小說に書かれて宣傳された。常勝軍の若い士官どもが、その瀟洒たる軍服や天下免許の特權をひけらかせて、異郷の美人を魅了する光景は、若い讀者の心をそゝる通俗小說のいゝ題材であつた。ジャッズ音樂に合せる新兵の步調教練は、あの頃の青年の心を浮立たせたと、時代錯誤の比喩を用ひてもいゝのだ。奈翁の朝廷は、大仕事をし當てた海賊の岩屋のやうであつたといふ批評は少し酷であらうが、氣障で擬者衒しで粗野であつたのに違ひない。出來星の文官の公爵や、年齒二十歲の將軍が、女や衣服や美術や禮儀作法の通を振りまはしてゐたのだから溜らない。

しかし、ナポレヲンが、中流階級に饑ゑ渴いてゐた生の樂みを滿してやつたにしろ、勿論それだけのために彼れは働いたのではなかつた。この冒險的彗星の起す拋物線に、大小幾千の小遊星が引寄せられるのはいゝ。しかし、彗星は小遊星のために空を飛んでゐるのではない。奈翁は、世界を支配するばかりではなくつて、それを樂まんと志してゐたのだ。自分の肉親に領土を分與することも、彼れの趣味の重な一つだつた。アラビアンナイトに出てゐる胃弱のカリフのやうに、奈翁も、仲間の全部を大饗宴に招いた。そればかりではない、自己を第一世として、二世三世から百世にも傳へんために、不姙の妻を去つて新妻を迎へた。彼れは、情婦に兒を產ませてゐて、しかもそれが男子なのだから、東洋流に考へたら後嗣者を問題とする必要は少しもなかつたのだが、正妻の子を必要としたところに、西洋の道德意識があつて、彼れはそれから脫却することが出來なかつた。

新妻によつて、天下晴れての相續者を得た後のナポレヲンは、父親氣質に捉はれだした。勘定高くなり保存慾が强くなり、冒險家の意氣が微らいだ。ロシア戰爭、ライプチッヒ戰爭。次第に彼れの山がはづれて、つひにエルバ島に隱居しなければならなくなつた。そのために、彼れの身内の者も窮迫したが、ひどく衰頽したのではなかつた。依然ボナパルト家

は歐洲の大富豪で名聲もあつたのだ。ナポレヲンは何故この境遇に滿足して、靜かに餘生を送らなかつたのか。ロシヤの皇帝アレキサンドルは、陳腐な理想主義から、「彼れを一島の主人として皇帝の稱號を許す」と、寛大に取扱つたではないか。

しかし、實行の人は、政治家でも實業家でも、隱居して落着いてゐられないのが常例であるらしい。實行界の人ばかりではなくつて、文學者でも俳優でも誰れでもさうのやうだ。どこの社會のボナパルトも、隱居すると、寂しさに堪へられなくなる。周圍のいろ〳〵な事情は枝葉のことで、要するに寂しさが彼等を殺すのだ。誰れも寂しさに追ひやられて、ワーテルローへの道を辿るのだ。エルバのやうな小さな島にでも爲すべきことは充分にあるのだが、人間は見物人のない空つぽの劇場で芝居を演じる氣にはなれない。だから、ナポレヲンがエルバ島を脫出したところに、意氣天を衝く慨が見えなくつて憐れむべき影が差してゐた。株式のブローカーがゴルフに飽いて、兜町へ舞戻つたやうであつた。本土上陸後フランスの兵士に向つて云つた言葉なんか、プルターク傳記中の英雄の言葉ではなくつて、以前の部下に御機嫌を取る支配人の言葉だ。「君等は元の大將を打ちたいか。打ちたければ打て。おれは覺悟してゐる」と、彼れは、グルノーブルの町で芝居がゝりで云つて、自分の胸を突出して見せた。

バルザックの云つてゐる如く、また誰れでもがさう思ふ如く、ワーテルローの敗軍、セントヘレナの流竄は、大帝王の運命悲劇に相應はしいのであるが、脂肪太りの株屋の大將が、自分にやきが廻つてゐるのに氣がつかないで、勝負場へ乘出して、烈しい債權者どもに取つちめられて破產したと云ふ現代劇の題材として見た方が、一層適切なのだ。

五

ナポレヲンが晩年、父親氣質に捉はれて英氣が沮喪したといふのは、少しこじつけのやうであるが、アメリカ版の研究

雄傳などには、神秘な英雄を現實に引おろさうとして、前掲のやうな説が立てられるのである。古來の英雄の假面を剝ぐことも面白いが、逆に現代の活動家を英雄化して見るのも面白くないこともない。今の日本にも、英雄的人物はいくらでもあるらしいが、それ等の人々も、いやに謙遜して、こと更自分を凡庸に見せかけてゐるやうだ。

「全人類は融和統一すべきものだといふ思想は、歐洲人の理想であつて、文明はその理想を基礎として發生した」と、ドストエフキーは「一作家の日記」の中で云つてゐる。「カラマゾフ兄弟」の中でも、「世界統一の希望は、人類最終の悩みである。全體としての人間社會は、統一を根據として組織されたい向上心を持つてゐる。今までにも名譽ある大歴史を有つた大國民が幾つもあつたが、此等の國民は進んだ文明を有つてゐればゐるほど不幸であつた。それは、世界統一の必要を一層痛感したゝめだ」と云つてゐる。神秘性に富んだこのロシアの文豪の大作品の底に流れてゐる思想は、この雄大な夢であつたらしい。

「紀元前二千八百年頃に、バビロン王サルガニザアが世界最初の王國を建設して以來、今日の第三インタナショナルに至るまで、世界史の進行は、打たれても突かれても、統一しようとする要求に基いてゐる。一つの身體の部分々々が散らばつてゐるやうに感じて、元のやうに一つに結びつかうとする人類の悩みが歴史に現はれてゐる」と、メレジコフスキーも云つてゐる。そして、彼れは、人類統一慾の權化はナポレヲンであると云つてゐる。この統一慾は淺くも深くも、貴族的にも平民的にも、人さま〴〵に、時代によつても色取りを異にして解釋し得られるのだが、しかし、私など、短い一生の間に見たところによると、人類は、たとへ統一を夢見るにしても、實際はます〳〵分裂して行くのではないだらうか。ナポレヲンの夢は破れた。新しい英雄がまた何處かに現はれて、ナポレヲンとは違つた方法を取つて、人類世界の統一を試みるかも知れないが、その新英雄の行衛は、つまりは、ワーテルローでありセントヘレナでありさうに思はれる。

大學教授沒落論

青野季吉

一

大學の轉落が唱へられてゐる。つまりいまの大學は謂ゆる最高の學府としても、また學問の自由研究の殿堂としても、最早、その名譽ある名に値しなくなつて居り、まさにその學問の王座から轉落しつゝ在る、と言ふのである。

およそ『科學はたゞ一つしかない、歷史の科學、これである。歷史は二つの方面から觀察せられ、歷史として、自然の歷史と人間の歷史とに分たれる。』(マルクス)ところで、大學の轉落は、その性質として、自然の歷史を取扱ふ科學の方面では、比較的に顯著ではないが、人間の歷史を取扱ふ科學の方面では、全部的にこれを肯定してよいと思ふ。——科學がマルクスの言ふやうに、たゞ一つしかなくて、それに二つの方面がある切りであり、しかも今日の大學が、その一つの方面で完全に轉落してゐるとすれば、彼女は最早、いかなる意味でも科學の泉源ではない譯である。

大學の轉落は、言ふまでもなく、わが名譽ある大學教授の轉落である。

大學教授といふ職名は、慣習的に人々の鼓膜に、崇敬すべきもの、學問的に底の知れない地力を具へたものとして、響いて來る。これは、大學がまだ轉落せず、實際に學問の王座であつた時代の傳統で、當然至極な事柄である。大學教授は確かに、人々から尊敬されてよい時代があつたし、その學問的地力に底の知れないものがあつたのも、儼たる事實である。我々が、我々自身の科學的知識の泉源をたどることは、一寸困難な仕事だが、その尠からぬ部分が、大學教授の學問的努力に負ふところ

のあることは、十分にこれを認めてもよいであらう。

人々が大學教授を學問的に尊敬すべき存在として、實質の如何に到らなくとも、その名によつて爾く受取るについては、そこに尠くとも、次の二つの『資格』が漠然と約束されてゐる。一つは、その學問的討究の自由・獨立性であり、他は、その學問的蓄積の深遠・至高性である。一個の人間としての大學教授に何が無くとも、一個の科學の殉教者としての大學教授には、尠くともその二つの資格の保證にあるものと、一般に考へられてゐる。つまり人々は、科學の使徒としての當爲的な資格、且つ、或る時代には現實に存在した資格を、今日でもそこに變ることなく實在するものと、正直に考へてゐるのである。

學問的討究の自由・獨立性とは、言ふまでもなく、政治的權力、經濟的壓迫、社會的偏見の一切から自由に、獨立に、學問的討究に從事し、その研究的到達に、微塵も「外的な力」の作用を許さぬことである。學問的蓄積の深遠の至高性には、その負擔する科學の分科において、一切にそれまでの科學的獲得があますところなく貯藏され、整備してゐることである。――我々の大學教授がこの資格を完全に具へてゐるとは、勿論、人々も期待してはゐないが、尊敬すべき程度にはそれを把持してゐると考へてゐる。實際また、それが期待されず、それが存在しなかつたならば、學問の使徒たることに絶對に不可能だからで、言はゞそれは、大學教授にたいする最少限要請なのである。

從つて大學教授の轉落は、その自由・獨立性、その深遠・至高性の喪失にその端を發する。言ひ換へると、彼の學問が何等かの外的な力によつて囚はれた學問となり、その内容が、そこから必然に、空隙のあるものとなるところから出發するのである。

ところでこの轉落への出發を、一般的に觀て何等かの個人的原因に求めるのは、間違つてゐる。それは一個の歴史的必然だからである。

そこには直接的に、問題の大學教授を取卷く制度的原因があり、更に基礎的には、彼の全人的存在と、全體としての大學組織そのものを取卷く社會的原因とがある。大學教授の轉落は、まつたくその兩者の必然の綜合的結果に外ならないのである。轉落すべからざるものが、轉落したのではない。轉落すべきものが、餘りに他愛なく、餘りに無摩擦的に、且つ餘りに「非良心的」にではあるが――とにかくその當然の運命の道をたどつたに過ぎないのである。

二

大學の制度なるものは、確かに、或る時代には、大學を眞に

學[illegible]に、[illegible]もので
さる學問討究の自由・獨立性、その討究の深奥性は、大學制
度なる物的の條件の完備を俟つて、始めてそれを望むことが出
來た。我々のところで、維新以後の學問的進歩は、實際、大學
制度に負ふところ大なるものがあつたのである。

勿論、いかなる時代にも、特殊な、極めて『孤立的な』學究
的人格が在るのは、事實である。かゝる人格は、つねに何等か
の組織から離れて、彼獨自の規律と、彼獨自の環境のうちに在
つて、始めてその學問的達成を示し得る存在である。だが、か
かる人格とかゝる條件によつて達成される學問的種類は、極く
狹い範圍に限られてゐる。大學制度の特質的な點はそれによつ
て一切の學問的種類の達成が綜合的にそこに蓄積されるところ
に存する。從つて、學問討究の自由・獨立性は、或は前者に於て、
ヨリ完全に保たれる可能はあるかも知れないが、その多面性・
深奥性は、後者の準備の下に於て、始めて可能なのである。

だがその大學制度も、一定の段階が來ると、こんどは學問の
討究・進歩の拍車ではなくて、その桎梏に轉化する。つまり大
學制度が存在するがために、反つて學問討究の自由・獨立性が
拘束され、その深奥性が失はれることとなるのである、

大學制度によつて保證されてゐる大學教授に、第一に、彼等
制限[illegible]、[illegible]
上の自由が尊重され、[illegible]保障されてゐる[illegible]ものは、
或る時期には確かに彼等の學問討究に有利に作用したものであ
るが、そこにまた自ら、彼等の討究慾を麻痺させる要素が伏在
してゐることは、明らかである。その要素は醗酵されないでは
おらない。而して事實、今日の大學教授は、その要素の醗酵の
故に、かなりにその學問討究慾が麻痺されてゐる。從つて外側
の學究にたいする大學教授の無視・蔑視には、正當な理由が、
在つたのであるが、今日のそれには、一種の『恐怖』が裏附け
られてゐる。それは、彼等の作らざる現實の意識的反映に外な
らないのである。

第二には、大學制度による彼等の地位的保證である。この保
證が在るが故に、從つて彼等は、學問討究の自由性・徹底性を
享受することが出來たのであるが、こんどは、この保證がある
が故に、反つてその討究が固定し、停滯し、その自由が拘束さ
れる。大學教授の知識の全量が、文字も褪れた一册の古ノート
に盡き、それが、十年一日の如く、講壇に持ち出される所以で
あり、××權力の指令によつて、科學の或る部面が大學か
ら放逐される所以である。從つて[illegible]、當然大
學制度が却つて、それに[illegible]して、學生の利益のためでなく、

教師の利益のために、若くは一層妥當に言へば、教師の安易のために工夫されてゐる、と言つたが、それがそのまゝ、いまの場合にも當て嵌るのであつて、一切の制度の必然悪なのである。

最近、例のプリント問題なるものがある。プリントの廢止が、學生の勉學心を誘發するかどうか――それはこゝで問題ではない。プリント勉强の事實、それの問題化は、明らかに大學教授の講義の內容の救ふべからざる固定化を實證してゐる。この問題は、まことに學生の勉學心を對象として論ぜらる可き問題ではなくて、大學教授その人の知識內容を對象として取扱はる可き問題である。

三

制度的原因には、更に一般的なものがある。それは外でもない。その制度の故に、大學が、生きて動いてゐる社會から、次第に隔離・接觸を稀薄にして行つて、遂には一個の學問的僧院化すること、これである。謂はゆる社會は社會、大學は大學で、まさに大學が遊離的、封鎖的存在に化するのである。

そこで學問と實踐との何等からの『統一』を求める大學教授は、この名譽ある地位を、弊履のやうに一擲つて、生きた社會の中へ出て行く。而して、大學の封鎖境に殘留するものに、『學問に一生を捧げ』『浮世を離れて研究室に閉ぢこもる』篤志家のみとなる。――この大學教授社會の分裂は、今日の『轉落』よりはずつと古い現象であるが、尠くとも大學の沒落、大學教授の轉落の先驅的現象だと言つてよい。

たとへば、大學教授から退いて、政治社會に行進する『學者』が、ひと頃輩出した。個人的に見れば、そこに野心的その他の原因が作用してゐるのは事實だが、一般的に見れば、それは大學の學的活動が、すつかり社會的實踐から乖離した結果である。かの帝國主義日本の直接の手先となつた主戰論『七博士』の時代には、大學教授の現職にありながら、積極的に社會的實踐に邁進することが、ともかく可能なのであつたが、その可能は突然失はれてしまつた。そこで多少とも實踐的欲求をもつ大學教授は大學を永久に去るより外になくなつたのである。

また例へば、世界大戰直後の好景氣時代に、大學教授の職を退いて、實業社會に身を投じた『學者』が尠からざる數に上つた。その動機は言ふまでもなく、マンモンの誘惑である。清貧・孤高の學問の使徒であるよりは、潤澤・安逸のマンモンの奉仕者である方が、彼等にとつてより多く生き甲斐のある生活だつたが故である。だが、彼が、その波にさらはれ、マンモンの招きに容易に應じたについては、大學活動における實踐的要素の

[illegible]ち言説た、[illegible]し大學活動のうちに、その要素が保存されてゐたならば、學問使徒としての自己の能力も、正直な見切りをつけた極く特殊な個人の場合は別として、固く「傾向的」に、そのことが起つては來なかつたであらう。

今日では、特に政治社會、實業社會と言はず、社會のあらゆる方面において、大學教授を踏臺として、そこへ進出する者が多い。最近、醫學博士に「基礎」「臨床」の區別を附し、基礎醫學の一細分科で博士となり大學教授となつたものが、翌日直ちに臨床家として社會に行進するの弊を防止しやうとの議があるが、かかる議が出るのもその現れの一つである。——大學教授を踏臺として社會に出ることがよいか悪いか、それは別問題として、前にも言つたやうに、大學教授にたいする人々の漠然たる尊敬は、今日まだ濃厚に殘存してゐる。それを利用することは、たしかに有效には相違ない。たとへば社會運動の舞臺のやうな、批判の無慈悲である可き範圍ですら、謂ゆる移民大學教授は、一種の『特權』をもつて行進して來るの類ひである。社會のあらゆる方面への、大學教授のかゝる行進も、詮ずるに大學の實踐的意義の喪失、大學教授の『轉落』の、一つの濃厚な反映と言つてよいであらう。

四

大學の黄金時代、[illegible]た時代に、言はば自由主義的の時代、社會の階級的對立が、甚く顯著でも、尖鋭でもなかつた時代である。學問の自由・獨立と言つた標語も、實はその時代の遺産なのである。

例へば我國で、これを最も早く高唱したのは、福澤諭吉であるが、彼が自由主義的資本主義の宣傳者であつたことは、いまさら說明するまでもないであらう。彼の眼に正當に、一切の商工業的進步が、自由競爭によつて招致されると映じたやうに、一切の文化的進步も、自由と獨立と競爭との環境にあつて始めて獲得されると映じたのである。

我々の大學制度も、その後に『重大な』變更があつたが、要するに自由主義の基礎に打ち建てられたものであつた。社會的な外側には言ふに及ばず、××權力すらが、學問の神聖を犯すべきでない。この原理が、大學そのものによつて主張されたばかりでなく、××權力すらが立派に認めたのである。それと言ふのは、社會の階級對立が甚く顯著でなく、その限りにおいて××權力にたいする批判的勢力がいまだ表面に表はれず、したがつてそれの有力な[illegible]的反映が、大學に見出されなかつた[illegible]

らである。

例へば後に文相になつて徹底的に無産階級思想を彈壓した岡田良平が、大學の初期に社會主義原理を說いたやうな事實があり、一般に社會主義思想は、極めて初期には大學で『研究』された事實があるが、それにたいして××權力は、何等干涉、壓迫するところは無かつた。つまり當時××權力は、社會の階級對立によつて、何等脅威されてはゐなかつたからである。したがつて、それらの講義や研究も、何等批判的勢力の有力な科學的反映ではなかつたからである。

大學教授が、尊敬すべき程度に學問討究の自由・獨立性を保ち、その研究の深奧性をもつことが出來たのに、この時代——日本では極く短かい期間——であつた。だが、一度びこの時代が經過してしまふと、最早、それを保存することが困難な事情の下におかれた。こゝに大學の轉落、大學教授の沒落が始まるのである。

すなはち當時、顯著でなく、潜在的たるにとどまつてゐた階級對立が、漸次に社會に表面にテヴェロープして來、權力にたいする批判的勢力が、漸次に形成されて來、それの有力な反映が當然に科學的雛型に見出されるやうなり、從つて××權力は從來のやうに大學活動にたいして、レッヒ・フェールの態度でおれなくなつたからである。かくて大學知識に向つて、××權力のネヂ廻しが徐々に動き始めたがためである。

勿論この過程は、摩擦なしには進行しなかつた。大學教授の自由主義的傳統意識に、多かれ尠かれ、それに向つて對抗し、それの科學的破壞性を中和して來たのであつた。——社會の自由主義時代を過ぎて以來の、大學內の斷えざる『問題』『動搖』の根底には、つねにこの摩擦が原因してゐた。既にその當時、大學の暗い展望に目覺めて科學的な見地から、大學を『棄てた』教授も無くはなかつたのである。

だが、まだこの時期には、大學の意義・大學教授の科學的價値が、全然失はれたとは言へない。寧ろ極く短い間ではあるが大學教授は學問討究の自由・獨立性の擁護者として、現はれてゐた。××權力も、この擁護者に抑壓的な方法で臨むことが出來なかつた。××權力にたいする批判思想が、その後の徹底的な彈壓があつたに拘らず、今日なほ、大學の『何處かに』その根を強うしてゐるのは、この時期に正直に蒔かれた種子の生長であると言つて差支へないのである。

しかも沒落は、落下の法則に從つて、加速度的となつて來た。當時の自由主義教授のうち、『純粹』なものは遂に大學を去り、乃至は巧妙な絶縁戰術の犧牲となつた。そのうち『不純』なも

のに、××權力の手先としてだけに、直ちに反動化することに
よつて、大學の組織のうちにとどまつてゐる。

五

大學の轉落、大學教授の沒落が、急激に現象化されたのは、支配階級が社會の一切の現象や施設に向つて決然として帝國主義政策を執り來り、否、執り來たらざるを得なくなつて來てからである。支配階級を政治的に代表する××權力は、最早、一切の躊躇と慢心とを放擲してしまつた。そのまへには勿論、學問研究の自由・獨立性などは、毫末も問題ではない。一般的に社會的に言へば、社會的反對勢力を徹底的に彈壓することが、その政策の基點であり、特殊的に大學に關して言へば、その勢力の科學的反映を、その組織から拔萃することが、それの目標となつたのである。

ところで大學にたいする××權力の帝國主義政策、即ち他方から言へば、大學の轉落、大學教授の沒落は、今日のそれを加へて、これまで二つの樣相を經てゐる。第一段は、大學のクリーニング政策であり、第二段は、大學の利用政策である。

支配階級は、先づ階級的批判思想——マルクス主義——を、大學の科學的組織から全然切離すことに努力した。つまり一赤 [illegible] 思想の名によつて、若へ[illegible]の外に掃き出したことが、それである。この技術は、勿論、大學の「當事者」との協力の下に行はれ、一應成就された——その結果、大學の自治と科學は、正にその領域の半分を削り取られ、大學の教授の學問研究の自由・獨立性は、その殘された半分の範圍においてのみ、認められることとなつた。

だが、支配階級は、勿論、これで滿足するものではない。否滿足してはおれない立場におかれてゐる。そこで現在の大學利用政策が、前面に步み出して來た。

と言ふのは、大學の屋を出で、大學教授のカバンを離れた科學は、社會の實踐の眞つ唯中にあつて、社會の「研究室」において、一層の發展をもつて、發展させられてゐるからである。これは支配階級にとつて、大學の組織内で行はれるよりも、一層「危險」であり、一層脅威的である。そこで、支配階級のまへには、これと鬪ひ、これを克服する必要が、當面の問題として提出された。ところで問題は科學である。しかもそれが、大學の制度的拘束を離れた、社會の樣のなかにおかれて在る。ここでは放校戰術や免職戰術は通用しない。單なる彈壓も、大學の面前では、科學を克服する方法ではない。

そこで支配階級に殘された唯一の道は、大學の機關を運轉させ、大學教授を動員して、『科學的』にそれと闘爭させ、大衆の面前で、立派にそれを克服する方法である。大學當局者の協議會を起して、マルクス主義研究・社會科學研究にたいする對抗策を考究させ、大學教授の物質的援助を與へて、唯物思想、マルクス主義經濟學にたいする反對學說を展開させる等――の方法は、その政策最初の現はれである、この段階では、大學は、正に××權力の階級抑壓の單なる一機關に轉落したのであり、大學教授はその『科學』を××權力に賣渡したユダ的存在に沒落したのである。

　最後に、マルクスが經濟學に關して喝破したところを借用して、大學教授の『科學』の歷史性を要約してこの小稿を結ばう。大學教授の科學は『ブルジョア的である限り、すなはち、資本主義的秩序を史的に過渡的な發展段階としてでなく、反對にこれを社會的生產の絕對的な且つ終局的な姿として、理解してゐる限り、それはたゞ階級闘爭が潛在狀態に止まつてゐるか、或は、たゞ孤立した現象となつて顯はれてゐる間だけ、科學として止まり得るにすぎない。』

　かくて今日の大學教授は、斷然、一個の科學者ではなくて、一個の政治的附屬物に外ならないのである。（六・二）

軍縮「引分け」の審判

伊藤正德

一

ロンドン海軍協定を、日本にとつて大成功であつたと吹聴する人々は甚しく誤つて居るが、同時に、是を大失敗であつたと貶すことも當を得て居らぬ。斯かる兩說は、論爭の末に昂がる激語だ。共に熱して居る。

冷たい判定は其中間にある。しかも、今日の實情は、恰も振子が左右動をして居る最中で中央の定位を發見するに苦しんで居る。早くこの振子の整定を上たせねば、徒らに怪我人を作るのみで、國にとつて此の益する所なく、寧ろ失ふ所の多いことを憂へしめる現情だ。

協定案を靜觀するに、亦その成立經緯を檢討するに、政府―外務―全權は、是を大手柄として觸れ歩くことは許されないが、しかも、軍部が是を失態であると難詰するのも亦過ぎて居る。この案の內容のみを對象として審考すれば、加藤軍令部長が辭めねばならぬ理由はない。いな、却て踏み止まつて戰術缺陷の補正に獻身することを、軍將の大義とせねばならない。財部海相の進退も、敢て問はる可きでなく、或は寧ろ國務大臣としての適宜の裁斷を誇つて宜いのかも知れぬ。

若し夫れ山梨次官に至つては、榮轉を以て報いらるゝを當然とする。七割の正論を以て六割の謬論を包み、穩かに眞直に、國論の整調を成就したに就いては、彼こそ最も獻じた人だからである。國民と政府と軍部との三面を牽視し乍ら、大體不撓の滿一ケ年を送迎し、その苦衷難澁の後に得たる七割弱の形勢を眺めつゝ、尙ほ引責辭職の取沙汰を聞くとは、不思議なる現象と言はざるを得ない。

何の失敗が、海相代理を精勤した次官を退かせ、更に加藤軍令部長や末次同次長の辭職を導き、海相を窮地に陷いれ、政府と樞府間の暗爭を豫想せしめるのか？

二

協定案の内容を一瞥して、何處に、軍部責任者がキングストン、バルブを開けねばならぬ——自沈せねばならぬ——敗戰の深傷があるのか？

試みに問ふ、一九三八年に至れば我が大巡の比率が米國の六割に下落するの危險を豫想した爲か？　或は潛水艦の保有量が、七萬八千噸を主張せるに反して、五萬二千七百噸に減じた爲か？　或は、今後の協定期間に於て、日本の造艦量が減少するに反し、米國のそれが激增し、從つて實勢力の上に著大なる變革を招徠する爲か？　この三者の外には出ない。依て此三者に就いて正確に要領を掲げて見よう。第三の實勢力の點は、次の數字に於て一目瞭然たる如く、米國には新鋭艦が增加して日本には減少し、過去八年の歷史が逆轉する。（單位噸）

	過去八年間に於ける補助艦建造量(A)	一年平均	今後六年間の協定建造量(B)	一年平均
日本	一五二、六四八	一九、〇八一	七八、七八五	一三、一二九
米國	一三二、三六二	一六、五四五	二八二、四八〇	四七、〇八〇
英國	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

註ノ一。(A)は一九三〇年一月までの建造濟噸數にして建造中のものは、日本六萬三千八百噸、米國十二萬噸、英國十萬二千四百噸ある。

註ノ二。(B)は一九三六年末までに完成する噸數にして、着手し得る總量は日本十萬六千六百八十五噸、米國三十萬二千四百七十噸、英國二十九萬二千百六十五噸である。

註ノ三。また(A)の外に、米國は六萬五千二百噸、英國は六萬七千四百噸の主力艦を建造したから、之を加算すると、米國の一年平均量は二四、六九五噸、英國は三三、九三六噸となる。

是に由て觀ると、我國は今日まで毎年三萬噸近くを造艦して居たのが、忽ち半分以下に激減するに反し、米國は一擧二倍に激增するから、比率以外に實勢力の變革と造艦利得とが伴ふ。財政的には米國は大軍擴を犯すけれども、戰術的には明かに優勢を築くのである。

しかし、此不均衡は、條約を短期とした爲に生じた弊害であつて、十年後になると日本の造艦年量が今度は逆になり、利害は十何年目毎に持廻りとなる譯だ。故に、この點は、表面から不滿の理由とするのは當らない。

三

第二は潛水艦だ。潛水艦は世界的、總論的に言へば弱國の

武器ー我が國の立場から言へば、海軍の任務は、戰時に於ては、對米漸減作戰を執るために必須の第一線の單位だ。

勿論、潜水艦のみでは不可い。航空機との協力と共同作戰に依つて敵の主力艦隊を減勢し、それが我が近海に來航する迄の間に、約三割を撃減して「七割」にするのだ。即ち我が近海に於て、彼我の主力が略ゝ對等で會戰し得るように作戰するのである。

斯くて Defensive Parity ――防禦的均勢の戰略が達成される。

敵軍主力を三割も減らすことは容易の業ではあるが、假りに二割を減らし得るとしても、日本の七に對して敵の八ならば戰ひ得るのであろう。七と八との戰に於て、敗けない爲には、日本の各艦の威力係數(K_2)が、敵の各艦の威力係數(K_1)に對して

$$K_2/K_1 = \frac{N_1^2}{N_2^2} = \frac{64}{49} = 1.306$$

即ち三割方優越すれば足る計算である(註―N_1は優勢軍、N_2を劣勢軍とする)。而して此程度の各艦優越は、何とかして遂げようとするのが我が海軍の信念であると見て大過あるまい。若しも豫定通りに、大成功裡に、敵軍を三割も減勢し得るなら、こゝに七對七の對勢を現出し、日本の必勝を豫測し得る計算であろう。

さて斯かる撃減策―漸減作戰―を全うするには、日本は約八萬噸(七萬八千噸)の潜水艦を必要とするのが專門家の公算學の結論なのである。然るにロンドン協定は之を五萬二千七百噸に[illegible]頭に減縮して了つたから、敵の主力[illegible]對等に[illegible]ひもならず、一割も減殺[illegible]、我が海軍の攻略[illegible]安からしめ、日本の將來に一大脅威を孕ましめたのだ。

四

敵軍一割を減じた殘存の九割が我が近海に殺到したとすれば、日本の七割は如何なる苦戰に陷るか? [illegible] の公式に依て算出すれば、日本の各軍艦の個々の戰鬪力は、敵のそれよりも六割五分以上強大なるを要する筈で、然らずんば敗戰を必定とせねばならぬ。然るに各艦悉く六割五分の優越を把持するなどは、神樣の仕事であつて日本の人間業としては出來ない。即ち防禦海軍の國防保安は淡い望と化するのである。

されど、ロンドン協定は、日米英の潜水艦の平等に五萬二千七百噸と規定したもので、このパリチー(均勢)が、外交的に我が主張を貫徹して了つたのである。若し、潜水艦の要求は國情に依つて異なり、現に英國は曾て世界最大量を目ざし、若くは大巡で最大量を保有するのだから、同樣の理由で、日本が潜水艇の最大量を主張するに何の遠慮も要らぬ道理である。

然し、日本の各種艦種に對して、六割か七割かを爭つて來たが、

潜水艦に對して同率を約したと云ふのは、外交的に、確實に歩み寄つた誠意の表明と言ひ得たであろう。最初は米國六萬噸に對し日本四萬噸(六割七分)と切り出したものを、兎に角も五萬二千七百噸平等とまで譲られては、由來好人物の日本人は、モウ此上の増量は到底、口の端にも出し得なかつたこと推察に餘ありと言はねばならぬ。斯うなつては、戰術的七萬八千噸、漸減作戰上の絶對所要兵量と云ふ海軍主張は、政治家や一般人に依つて逸早く棄てられるのが自然の運命だ。

後に書くが、財部全權と雖も、この形勢に面しては、敢て七萬八千噸は繰返さなかつたであらう……。故に、日本の全權が、外交の實勢に察して受諾した五萬二千餘噸は、遺憾ながら之を認める外はなかろう。卽ち此一事に依つて軍部首惱が引責するとは、聊か値せざるの感なきを得ない。いな、彼は却て頑として留まつて後圖を策することこそ奉國の道とさへ考へられるのである。

五

然らば、殘る所は大巡だ。八吋砲の大型巡洋艦のみの問題だ。事實、この問題は最も重大であらう。いまこの艦の效用を縷述して居る紙幅を持たないけれども、近い將來に於ては、この艦が一國海軍の强弱をトするバロメーターである一事は、專門家の一致した見解である。吾々素人から見ても、この艦は小型の巡洋戰艦と銘打つ可き獨特の存在であつて、正攻に、奇襲に、遠洋攻勢に、または其防禦に、速く强く廣く、自由自在の性能を把持する有様は、天晴れ一九三〇年の代表勢力として列强海軍の慾望の焦點を形成するものである。米國は此艦を要求すること最も切にして、――最も切なる權利ある如くに――十八隻十八萬噸を整備するの權利を獲得した。現在は一隻しか無い。建造中のものを合せても十三隻しか無い。それを、議會の協贊と云ふ不渡手形を見せながら、五隻擴張して十八隻の權利を確保して了つた。

之に對して日本は何うかと見れば、現に八隻を持ち、四隻を建造中で合計十二隻を現有するに拘らず、そのまゝ据置と云ふことになつて了つた。素人考へにも、何となく不公平だ。そこで米國は、英國の勸告もあり、氣も差したものか、一九三六年までは――卽ち條約期間中は――十五隻に自制し、殘る三隻は一九三八年末までに造ることに彌縫したものである。玆に日本の朝野を騷がせ、國民を迷はした難問題が生ずるのである。

然らば大巡の比率は何うたるかと云へば、一九三六年までの條約期間中は、表面は、米國の十五萬噸(十五隻)に對して日本

十萬八千噸有餘(十二隻)であるから、比率は日本が七割二分を持つて英米兩國が保有する形だ。しかし、米國は、一九三三年、四年、五年に各一隻を起工する權利を得て居るから、一九三八年末には十八萬噸となり、日本の比率は六割に低落することになる 即ち條約期間中は日本の「大巡七割」の顏を立て、その後は米國の慾望に滿足を與へると云ふ、先の見へた協定である。褒めて言へば苦心の作、惡く言へば胡麻化しである。

六

しかし、此程度の胡麻化しでは、日本の當初の主張を塗り飾る譯には行かぬ。日本も大巡六割では退き込み兼ねる。そこで、一九三五年の會議に於ては、改めて「大巡七割」を主張する權利を保留し、その意思を聲明してロンドン協定に調印したのである。故に若し、その會議で此聲明が實現されるなら、問題は無いのだ。

之に就いては二つの觀測がある。甲は頗る至難であつて寧ろ不可能と悲觀し、乙は可能性を認めて樂觀するのである。ロンドン會議を失敗と評する論者は甲の觀測を唱へ、是を成功と稱する人々は乙論に據る。

思ふに五年後のことであるから、時勢人心の歸向如何に依つて何うなるか判らない。今日でも、[illegible]にも議論の理由に屬することで、無用の業ではないが、[illegible]利に確定され、日本の權利は未定である[illegible]い。それだけ、此次の會議では困難な仕事[illegible]ない。現金と不換紙幣ほどの差は無くとも、債權者と債務者だけの相違はある。問題は、債務者の強味と云ふやつで、日本が具現し得るや否やに在る。「拂へないのだから何うにでもしろ」と落着拂つて——會議の決裂などは驚かぬと構へ得るならば、日本の外交に出來るか何うかの問題であるが、今日は斯かる詮索に興味を述べて居る暇がないから、進んで大局及び本論へと進もう。

七

政府の責任、軍部首腦の責任、または條約の成敗を批評する標準は、日本の三大主張が何處まで通つたか、その程度如何に懸る。即ち(イ)總括的七割、(ロ)大巡の七割、(ハ)潜水艦七萬八千噸(現勢力維持)の三原則が、何處まで成功したかを檢討する事に依て正解されるのだ。

この三大則が、悉く通つて滿點の成績を擧げる事は、日本の外交に於ては容易に望まれない。素より[illegible]。そ

の全部が成立しても敢て過分の收穫ではない。日本は守るだけの保障を得るに過ぎないからである。米國が攻守兩樣の保障を望むのに對比すれば、誠に善人の謙讓に過ぎた要求である。本來、互先で打つ可き碁を、三目も置いて打つのだから、勝つのが當然であり、從つて三大原則は、之を期成して初めて持碁になる計算だ。

然るに、三目を置いた上に、精神的にも置いて居る日本は、幾目かの敗は已むを得ないと云ふ胸算用で盤を圍んだのではないか？　米國の側に英國の助言もあらうと云ふ實戰に臨んでは、幾目のコミを出すかゞ問題であつた。三大原則の一つでも破れたら颯々と引揚げて歸る決心が無い限り――その得失は別問題――幾分缺けても忍ばざるを得ないのが外交の常だ。而して米國の方も、元値には少しも切らないが、言ひ値からは相當の讓歩を見せて曲りなりに纏めたのであつた。いま、その比率交渉の跡を一目瞭然たらしむる爲に、米國の試案（二月四日）、日本の對案（二月十一日）、協定案（三月十五日）とを比較する表を作つて見よう。（比率は厘以下四捨五入す）

艦種	米國案 米國	米國案 日本（比率）	日本案 米國	日本案 日本（比率）	妥協案 米國	妥協案 日本（比率）
大巡	一八〇、〇〇〇	一〇八、四〇〇（六〇）	一八〇、〇〇〇	一二六、〇〇〇（七〇）	一八〇、〇〇〇	一〇八、四〇〇（六〇）
輕巡	一四〇、〇〇〇	九〇、二五五（六一）	一四七、〇〇〇	八一、七〇〇（四七）	一四三、五〇〇	一〇〇、四五〇（七〇）
驅逐	二〇〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇（六〇）	一五〇、〇〇〇	一〇五、〇〇〇（七〇）	一五〇、〇〇〇	一〇五、五〇〇（七〇）
潛水	六〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇（六七）	八一、〇〇〇	七七、九〇〇（九六）	五二、七〇〇	五二、七〇〇（一〇〇）
計	五八七、〇〇〇	三五八、六五五（六一）	五五八、〇〇〇	三九〇、六〇〇（七〇）	五二六、二〇〇	三六七、〇〇〇（七〇）
	我が對米比率――六一％		我が對米比率――七〇％		我が對米比率――七〇％	

この表を靜かに比較研究するならば、讀者は玆に幾多の感想を自得されるであらう。

八

晴曇相半ばして居る。その中で、燦然と耀くものは、何と云つても、「總括的七割」を得た事實である。この一點に在つては、如何なる反對論者も耳を掩ふ譯には行かぬ。日本が十年間、唱へ盡した「七割」は、手に入つたのである。内容を分解すれば、

関連つた回数を比するけれども、七割と十の比は、日英米の両事實として吾等の眼下に示されたのである。寿府会議の六割、華府会議の六割強(規定)に比較して、ロンドン協定の七割が一大躍進である事實は、軍人と雖も拒む譯には行かぬ筈だ。一つの收穫であると大言して少しも過言では無い。

たゞ、内容に疵がある。それは、(イ)大巡七割が條約的に得られず、(ロ)潜水艦の所要量が二萬五千噸不足した二點に外ならぬことと前説の通りである。判り易く言へば、三大原則中の(イ)總括的七割は家屋の總建坪に譬ふべく、(ロ)の大巡七割と(ハ)の潜艦所要量とは、各室の大きさ或は強さに就いての要求なのである。或は亦、(イ)は家の骨組に關する主張、(ロ)と(ハ)とは雑作に關する主張と見ることが出來る。更に亦、(イ)は家の設計及び建坪を示し、(ロ)と(ハ)とは、その柱の強さを示すものに譬へて宜からう。

然らばロンドン協定は、日本の守護の殿堂を建設するに當つて、その建坪を豫定通りに獲得したものである。同時に、不幸にして、各部屋の坪割が半端に出來上つて了つたのである。家は出來たが雑作が不完全と言へるのだ。更に適切に云へば、七割の護國堂」は建つたが、その柱が米材であつて、地震國の日本には多少不安が殘ると鑑定されたのであつて、之が不安と斷定すべき[illegible]は[illegible]協定は成功と許し得るのだ。

要するに、程度は問題に在る。但し、今次の会議は大成功と認めて賛辞する一派と、之を失敗と見做して非難する一派とが、東西に分れて対峙する所以は、協定の成果が、安全と不安との観測を簡単に二分し得るまでに進んだ為である。各論では敗れたが総論で勝つて居るからだ。三大原則中、二つは逸したが、一つは獲得したからだ。即ち、総論——総括的七割——を重しとする論者が之を成功と信ずるのは少しも不思議でない。同時に、各論の方——大巡と潜水艦——を重しとする論者が、之を不成功と信ずるにも亦理由がある。

九

軍配は孰れに揚がるか？　誰が審判するか？　それは一時だ——一九三五年だ。

しかし、私は、今日の審判としては、引分を宣するのが至當だと思ふ。引分は、双方とも不満に決まつて居るが、内容が[illegible]然と[illegible]して後図への協調に認める所に、民意が在り、また正鵠に、国防の正道が拓けるからだ。一九三五年への一致が生ましいからだ。引分では双方承知しまいが、聡明なる人々は[illegible]

わけねばならぬ。

ロンドン協定の形狀的七割、內容的不滿を例へて、『饅頭の餡を拔いたもの』であると評するのも酷評であり、同時に、『饅頭などは小供の食うものだ、米と味噌とはチャンと取つてある』と嘲けるのも酷い……。米國から七割を得たが、內容を見れば六割の弱點がある。卽ち、饅頭を貰つて見ると、皮だけで餡が無いのと同然、須らく叩きつけて返して了へと言うのは、激越である。一方に、大巡一隻半で國防の安否が分れもしまい、夫れ位は國交親善や民力休養で取返してお釣が出ると言ふのも、買ひ言葉の過ぎたものである。

茲に於てか、食べ物に譬へる審判としては、牛鍋の說が出る。七割の鍋は確かに受取つたが、肉は六割で、あとの一割は葱と豆腐であつた……。されど、葱にも豆腐にもカロリーはある、また味もある。須らく全體を食す可しと言うのである。而して日本人は野菜物に飽きて肉のみを要する以上、この次の代りの時に——一九三五年の會議に——肉のみを要求することだ。

先づ此邊が、ロンドン會議の成否の比喩である。私は數字や作戰得失の議論を避けて、なるべく判り易いやうに批判を試みた積りであるが、要するに、この程度の結果であるから、之に對して、責任を取つて辭職する犧牲者を出す程のものではない。

「已むを得なかつた、此次に回復しやう」と、一同勞を慰め合つて一致再起を約するのが常であつて然る可きである。

十

然るに、加藤軍令部長の進退、山梨次官の引責が噂され、さては財部全權も留任が困難との說あり、曰く統帥權、曰く編成大權、曰く政府の運命……と、連日の係蹉に國民を惑はすのは何故か？　兎に角も得たる總括的七割に、微笑の一杯をも祝ひ得ず、殆ど他人の品物の如き取扱を爲さねばならぬ理由は何處に在るか？

その歸する所、實に、軍部の意見が無視されたか否かの事實、並びに、軍部の意見は何處まで條約兵力の決定に與かる可きかの理論——以上の二點に在る。

若しも軍部の意見が尊重された上で、あの條約が出來たとしたら、今日問題は無いのだ。然るに、軍部は其意見が無視されたことを確言し、政府は其意見を尊重したと明言して居る。實に不思議な話だ。無視と尊重とは、罰と賞との差で、常識ある人間の間違へようと思つても間違へられぬ程に明かな相違だ。一體、濱口、幣原、加藤と云ふような諸君が、そんな非常識の人々である筈は無い。然らば、そこに誤解、しかも絶大なる誤

解があつたのか。しかし、誤解ならこれは是れ程の紛糾に起る筈なく、また氷解の術もあらう。何うした譯のものか。

首相は次の通りであらう。恰度、七割の内容的不滿の問題と同じく、形に於ては尊重したが、内容に於て無視したのである。言葉では尊重したが、精神に於て無視したのである。誠意が無かつたのである。在つても足らなかつたのである。

是を分解するに、三月十五日、全權からの請訓(妥協案)が來たとき、それは軍令部へ通ずる以前に、これで滿足だ、と云ふ意見付の宣傳が、外務省の一角から飛ばされて新聞に出て了つた。この一事は二様の大きい意味を持つ。一は外務省内の一部に潜在して居た「七割過大論」が、久しき忍耐沈默の末に、雲雨を得て池の中から飛び出したものである。二は軍令部の三大原則確守の陣に對して否定的宣傳の先手を打つたものである。而して夫れが海外に影響したことは論を俟たない。軍令部は、何時か外務省が米國に腰を折るであらうとの觀測を抱き憂ひて居た矢先、斯かる内爭的宣傳を見て憤り、直ちに應酬のステートメントを發表し、玆に外務省と軍令部との對陣が激成されたのである。一吏員の口から、協調の殿堂を燒く毒火が吐かれた形である。

外相と海軍次官とは、全權の意見を通さうと努めたが、竹火吹きの後の大風に、火焰は猛烈を極め、遂に日比谷、霞ケ關、永田町と一面に擴がつて了つた。その後、十日間の協議(?)は此煙の中で行はれたようなもので、到底滿足を得られる筈がなかつた。

首相は海相事務管理であつたが、しかし、軍令部長との接觸は殆ど無に近かつた。二三回の會見はあつたが、胸襟を開いて語り合つたのではないようだ。軍令部側の印象は、義理で聞いて居たに過ぎぬと云ふ。首相にして見れば、作戰計數のことは解らないので、默つて聞いて居るより外は無かつたのかも知れぬ。或は亦、閣議の後に、軍令部の意見を聞いて貰ひ度いとの申入れが、採用されなかつたと云ふ話もある。いづれにしても、政府が、軍令部の主張に誠意を披瀝する態度が足りなかつたことは想像に難くない。凡ての事情を打ち明けて諒解を求める手續を略したことは爭はれないようだ。また、閣議は既に妥協案に傾いて居て、軍令部の主張を敬遠し、或は回避するが如き印象が認められた。之を要するに、政治家的手腕が無かつたのである。

更に亦、ロンドンに於ても、之に似た意志の疎隔、交通の支障があつたやうだ。專門委員は、松平リード妥協案の戰術的數字に就いて何等與かる所なく、更に財部全權すらも、此案の出來上つた時に初めて御目に懸つたのである。

尤も是は松平リード自由商議(フリートーキング)の性質上已むを得ない數だ。專門家と相談し乍ら話を進めたら、あのやうな妥協案は出來て居らなかつたに相違ない。故に問題は、外交官二人だけで斯かる問題を討議するのが善いか惡いかと云ふ本質論に依て批判されねばならない。しかし、現實には、其妥協案に面接した後の財部海相の態度如何が問題となつたやうだ。

十二

妥協案の內容、その價値の度合は前述の通りである。然らば約一ケ月の暗闇から、忽焉として此光に眼を開いた財部全權は、果して如何なる批評眼を持することを得たか？　海軍大將の彼だから、決して眩惑はされなかつたに相違ない。恐らく活眼を開いて一應檢討したに相違ない。而して傍の若槻、松平兩氏の說を聞き、また前回の會議の經緯を靜觀した結果、先づ此邊なら、と、請訓の調印をしたのであらう。妥協案の形は、海軍省の有力首腦の中にさへ「已むを得ず」と認める人がある程だから、財部全權が之を認めたのは少しも不思議ではない。國務大臣の見識として敢て笑はる可きものではない。然るに其後、專門家から強い質問に會ひ、妥協案修正の意見を提議したと傳へられて居るが、眞僞を詮索する必要も無からう。

而して根本の問題は、依然として本質論に在る。即ち、財部氏が海軍全權として此海軍協定兵量の商議に與からず、出來た後で見せられた其外交法(或は內交法)の是非の問題だ。疎外された形の正曲の問題だ。廣く言へば、軍人を拔きにした軍備の決定が、正當なりや否やの問題だ。軍令部は之を不可として統帥權の獨立を強調し、外交官は、纏める爲の必然の措置として之を辯ずる。況んや、軍人を拔きにしたとて、根本は軍部の作製した要件を、出來るだけ取入れる爲の外交に外ならないのであるから、此の不合理は無い。それで惡ければ、軍人だけが全權になつて交渉して見たら宜からう、纏まるものなら纏めて見るが宜からう、と論ずるのである。

されど、冷たい眞理は其中間に在る。立派な政治家が夫れだ。財部海相の方は國務大臣として纏める術も易いが、軍令部に對しても、親しく語り、熱心に說き、納得に努め、飽くまで承服しないなら、再交渉の一階段を踏んで見る方法もあつたらう。その上で、あの妥協案に歸着したとすれば、國民は之を忍ぶに

相違なかつた。あれで會議が決裂させようとは、恐らく十人に一人も贊成しない極論に決まつて居る。また軍令部と雖も、必らず忍んで善後策へと邁進したに相違ないのである。統帥權の問題などは起らなかつたに相違ないのである。

十三

統帥權の獨立！　若しも、兵量を決するには軍令部の同意を要すと云ふ憲法解釋が確立されたら、理論として容易ならぬ逆轉だ。軍人が國民の租税を決定することを意味するからだ。軍國主義の最惡の方面が發生するからだ。

しかし、參議院會議の統帥權確保の意味は、決して斯かる非常識の理論を信ずるのでは無く、實は兵量の決定を政治家、外交官の專斷に委することを防止し、以て、十分の協議を保障させる爲の善後措置に外ならないのであらう。是れ今回の請訓と回訓とが、軍部を無視したと云ふ印象を深く軍令部に刻んだ證左でもある。即ち軍令部當事者は、今後も斯かる協定法——軍人無視の——が行はれるならば、陛下の海軍の前途誠に深憂に堪へずとの所信に驅たれ、一路統帥權に依て落勢を阻止せんと起つたのである。故に若し、その意見が尊重されて居たなら斯かる問題の生ずる筈なく、而して尊重と同意とは著るしい相違あることは何人の眼にも明白である。[illegible]軍部對政府の内紛は、畢竟の兵量決定に當つて、[illegible]專門的意見を尊重させる爲の保障を、[illegible]しい方法で確保する議論の爭點であると認めて宜からう。

十四

されば速に引分けるが宜い。國民の負擔を伴ふ兵量の決定が、政府の輔弼の責任に於て爲さる可きことは天下の公道、少なくとも政治の常軌である。されど、所謂デフィーチストの政治家が、軍備を等閑にして國防の重要なる一角に間隙を生ぜしめる危險を防止する爲に、憲法は統帥權の保障を設けて適正なる保障を求めて居る。而し歸する所は、政府が軍令部（又は參謀本部）の意思を——想定敵國に對する用兵上の安全率設定を——外交、財政等の内外事情の許す範圍内に於て最大に尊重するの部に外ならない。

即ち尊重、又は誠意ある協調が結論であつて、兵量決定の最後の責任は政府に存する。決して軍令部の同意を絶對要件とす可きではない。而して、政府が軍部の意見を尊重したか何うか、換言すれば決定兵量が、國防の大局上適當であつたか何うかを審判するものは、政府でも軍部でも樞密院でも無くして實に國

民である。國民の、識者の、與論の裁判が海軍國防の兵量を決する最終の手段だ。己れの國を知り、國を高め、國を護る意識の旺なる國民は、自ら適當にして立派なる海軍を常備するであらう。國民が、弱くして凋落しつゝあるならば、海軍のみ強からんとするも、夫れは回天の不可能事である。

顧みるに、ロンドン協定に當つては、最後の幕に於て、政府が軍部を尊重する態度に不足があつた爲に、誠意が足らなかつた爲に、更に適切に言へば、協定を急いだ爲に、將來を憂慮する軍令部の抗爭を刺戟し、必要以上の内紛を激發して國民を惑はすに至つたのである。それが爲に、辛うじて及第點を取つて置き乍ら、正しい批判の遑なしに内爭の騷音に日を送つて居る。

この間に、二つの重大なる教訓は作られた。もう是で澤山だ。國民は、法文解釋の爭や、過去の手續又は誠意の過不足を、何時までも論爭して居ることに飽き／＼した。何よりも、今後の途として事實に於ける誠意の協調を要求するのみだ。國民は比較的最も經濟的にして最も安全たる海軍々備の確立を望んで居る。この意味からも「引分け」を叫ぶ。單に協定の結果に對して、成功と失敗の爭ひを内容的に「引分け」るのみでは無い。私は此斷片的小論文の前半を精讀された讀者が、「引分け」の結論に多く異議なきを信じつゝ、筆を擱く。(六月二日稿)

映畫・イデオロギー

岩崎　昶

1

すべての藝術はイデオロギーの容器である。そして、映畫は、フィルムの姿に於ける卅五ミリ幅のイデオロギーの帶である。

映畫は、十年前、「民衆娛樂」であつた。浪花節。寄席。曲馬團。そして、「活動大寫眞。」小學生は「活動」を見ることを禁じられてゐた。

五年前、映畫は商質であつた。香水製造、賣藥業、紡績工業、鐵工業と同じく、企業であつた。しかも、何よりも利潤率の高い、いゝ商質であつた。

だが、三前年、「藝術」になつた。蒼白い藝術愛好者達が、シネマの魅力、そのスピード、そのリズム、その近代性を論じて、珈琲を冷たくした。

そして、今、映畫は卅五ミリ幅のイデオロギーの帶だ、といふことになつてゐる。映畫資本家、映畫製作者は、意識的に、彼等の階級的利益を生フィルムに感光させる。映畫批評家は、何よりも先に、それ〴〵の作品の持つてゐる階級的意識を洞見し、分析する。あらゆる映畫雜誌の、あらゆる頁に、植字工は組み込む。イデオロギー、イデロオギー、の六字を、十二字を、卅六字を。

（忠勇義烈にして無智曖昧なる某撮影所長が、プロレタリア・イデオロギーを、プログラム・イドロギーと發音したことを、僕等は責めるわけには行かない。僕等は、この所長をして、彼のすべての忠勇義烈と無智曖昧とにもかゝはらず、かゝる「呪ふ可き」單語を發音すべく條件ならしめた許容[illegible]

2

前述した通り、十年前、五年前、それは前に、映畫は「民衆娛樂」であり、「商品」であり、「藝術」であり、その他のあらゆるものであることを容認されたが、ただ、宣傳・煽動の用具であることだけは理解されてゐなかつた。より正確に云へば、理解はされてゐたが、充分に強調され、關心の前面に持ち出されてはゐなかつたのである。

それが、左翼藝術、藝術論の全面的進出に伴つて、映畫界にもプロレタリア映畫論、映畫批評が生れるに至つて、初めてはつきりとした問題になり得た。

この着點からして、僕等は、映畫とイデオロギー・宣傳・煽動の效果との關係を考察し、解明することを、マルクス的な映畫理論確立のための第一歩としなければならない

映畫は、小學校長によつて創造される神話のように、人を眩惑することが出來る。エピキュールの時間のように、人を[illegible]

業主義にすることが出來る。或はまた、裝甲車の上に赤旗を振して立つたレーニンの演說のやうに、人を煽動し、革命に對する熱情を吹き込むことが出來る。

映畫は、大衆を、頽廢させることも、狂信にすることも、軍國主義者にすることも、共産主義にすることも出來る。しかも、說教や演說によるよりも、遙かに直截に、力強く、無意識の中に、である。

現在對立する二つの階級のための、アジ・プロの手段として、映畫は如何に利用されてゐるか。

3

今日の映畫が、その製作の側面に於ても、またその上映の側面に於ても、ソヴエート同盟を除くすべての國々にあつて、全く資本家的生産機構に制約されてゐることは言ふまでもない。

この事實から必然的に抽き出されて來る結論は、今日の映畫が、その九十九パーセントまで、その母胎である處の、資本主義制度に奉仕するといふことである。

支配階級は、映畫の製作に必須な前提である巨大な資本の集積と、優秀な技術的條件と、資本家的イデオロギーとを持つてゐる。また、その上映を規定するための權力、檢閲制度も彼等の掌中から離れてはゐない。

アメリカ映畫をその盟主として仰いでゐる各國のブルジョア映畫は、それ／＼の政治的、社會的、經濟的諸勢に從ひ、またそれ／＼の藝術的特性に從つて、種々雜多な外見、種々雜多な内容を持つてはゐるが、究局の處、唯一つの、最も重大な點に於ては、完全に合致してゐる。即ち、消極的には、大衆を偽瞞し、その不平不滿を眠り込ませ、革命的活動力を痲痺させること。また、積極的には、支配階級への忠實な奴隷根性を植えつけ、愛國主義的デマゴギーによつて萬國のプロレタリアートを分裂せしめ、帝國主義戰爭への道路を開拓すること。

ハインリヒ・エドアルト・ヤコブといふドイツ人が「血とセルロイド」といふ小說の中で論破してゐる通り、

「映畫は世界大戰に當つて極めて有力な武器として役立つた。それは、タンク、潜水艇、大砲、飛行機、毒瓦斯彈、と等しく、今日では怖る可き兵器である。」

「他のあらゆる産業部門と同じく、映畫事業も平時に於ても、不斷に戰爭準備に從事してゐる。それはセルロイドで作られた彈藥である。一秒間に二十發を發射する機關銃である。巧妙に作られた煽動映畫は、觀客の腦裡から、あらゆる正義感を根こそぎにして了ふ。その對社會的害惡は傳染病よりも更に集注的である。」

僕等は、一九一六年――八年にかけて、多くのアメリカ映畫が、國民の間にドイツ人に對する憎惡を植え付ける明白な目的を以て、製作されたことを知つてゐる。アメリカの戰爭參加への輿論の大半は映畫によつて作られた。して見ると、ドイツをして一敗地に塗れしめたものは、アメリカ映畫であつた、と言つても過言ではなささうである。

併し、問題は、決して過ぎ去つてはゐないのである。かつ、アメリカ映畫が東フランスの野原で數百萬の人間を虐殺させたやうに、今、地球上のあらゆる帝國主義列強は、自國の

プロレタリアートの生命を戦場によつて掠奪、低廉によつて、安く買ひ取らうとしてゐる。

僕等は　廿五年前に光輝ある欧戦の時期を獲得したこの國で、「進軍」「戦友」「呼試」等の一聯の戦争映畫を見せられた。嘗つて僕等の父親を殺した支配階級は再び今度は僕等自身の血のいけにえを要求してゐるのである。

（ブルジョワ・アジ・プロの手段としての映畫の役割については、僕は以前「宣傳・煽動手段としての映畫」と題して、稍具體的な叙述を雑誌「新興藝術」（一九二九・一〇——一一）に連載したから、重複を厭れてこゝには繰り返さないことにする。）

4

ブルジョワ映畫が、チフス菌のように兇悪なブルジョワ的なイデオロギーを、大衆の間に撒布して廻ることに對して、僕等はどういふ態度を以て應戰しなければならないか。

ブルジョワジーの武器、タンクであり、毒瓦斯彈であり、機關銃である處の「兵器」を、僕等の手に奪取して、僕等の「兵器」とし、プロレタリア映畫を生産することが一番肝要である。

併し乍ら、それと並行して、主として文化による批評的評論的活動によつて、ブルジョワ映畫の嘘つぱち、反動性、等の本質をあばき出して、大衆にイデオロギー的ワクチン注射を施すこと、更に、それによつて大衆を一つの統制ある觀客の組織體にまで成長させ、あらゆる戦争映畫、愛國映畫、宗教映畫、勞資協調映畫、反革命映畫、等々をボイコットし、撲滅すること、などが實行されなければならない。

5

映畫によるイデオロギー闘争の分野に於て最も特殊的な現象として、所謂「前衛映畫」アヴァンギャルド映畫、が舉げられる。

「ひとで」、「秋の霧」、「坊主と貝殼」、等の代表的作品によつて日本にも紹介された、フランスの「前衛映畫」に就いては、他の多くの場所に於て、言はれる可きことは既に充分に言はれてゐる。

要約して言ふならば、「前衛映畫」は、刻下の社會機構に特徴的な、階級對立の尖鋭化に困惑してゐるところの、中間層的な、イデオロギーの表現である。それは、對立の區につかれ、ことさらに自分の生活の中に隠れた「藝術」といふ防壁だけの城砦に立つた、今ではもう保守できさへもないセルロイド塔の中に身をかくす怯へたインテリゲンツィアである。

「前衛映畫」の製作者、支持者達が誇りとしてゐるその「前衛的」な技術も、要するに何等社會的階級的な裏づけを持たない、單なる技術のカタログであり、觀衆を眩らした商品見本であるにすぎない。

僕等は、この種の映畫、及びその支持者達が、現在の階級社會にあつて、反動的な小市民性を宣傳することによつて果すブルジョワジー擁護の役割を明白に認識し、暴露し、糾彈しなければならないのである。

6

僕はこゝで、所謂「傾向映畫」の問題をとりあげよう。

最近、映畫批評家のうちのイデオロギー的な分の

ものとして存續する考へ方を、一般化し、通俗化した機縁の最大のものは、「傾向映畫」といふ名稱で常識的に呼ばれてゐる處の、左翼的色彩を持つ商品映畫の一群の擡頭である。それは、映畫看客、映畫批評家の間に、イデオロギーと映畫との正しい關係を普及化して理解させたのみでなく、映畫製作者、活動屋、諸君の素朴な端的な合言葉「イデオロギーもの。」――「時代もの。」「戰爭もの。」「エロもの。」等と相並んで――さへをも發生せしめた。

では、「傾向映畫」とは、何であるか。その正體を僕等はどう否なければならないか。

「傾向映畫」とは、絶えず繰り返されてゐるように、「生ける人形。」「緊張劍法。」「斬人斬馬劍。」「何が彼女をさうさせたか。」「都會交響樂。」「都會双曲線。」等、等の、ブルジョワ撮影所で商品として生産され、しかもなほ且つ多少の社會意識、プロレタリア・イデオロギーを含有するもの、若しくは含有するらしいもの、(といつた方が正確であるかも知れない)を指す。

この種のフィルムの製作、上映、そしてその大衆的進出は、明らかに一九二九年度の日本映畫界にあつて特筆すべき事件であつた。それが、僕等の陣營に對して持つ積極的な關係に於ても、又それが出つて來る處の一見奇怪な社會狀勢の矛盾を說明する要素としても。

資本主義によつて運轉され、資本主義社會の守護、妥當化を本來の目的とする可きブルジョワ映畫に、かういふ變り種が現はれたことは確かに外見的な自己矛盾がある。併し乍ら、僕等は「傾向映畫」を偶發的な、突然變異として理解することから遙かに遠いものである。

「傾向映畫」の出現の必然的、客觀的條件として、先づ、大衆の急激な意識化、及び、それに關聯する左翼藝術全般の目醒ましい成長、が擧げられなければならない。この二つの原因からして、プロレタリア文學は當時のブルジョワ・ジャーナリズムの全面に進出した。そして、それと全く同一な條件が、ブルジョワ撮影所に於けるプロレタリア(?)映畫の勃興を促がしたのである。

この極めて單純な、稍公式的にすぎる分析からでも直に見透し得る事實は、映畫資本家が、一つの新らしい商機として、スペキュレーションとして、「イデオロギーもの」に手を出したにすぎないことである。彼等にとつては、それが最高率の利潤を齎らす限り、イデオロギーも、ポルノグラフィーも、鐘紡株も、土地賣買も、一視同仁である。そこで、土地賣買、鐘紡株の買占め、好色小說の出版、そして、「イデオロギー映畫」の製作が行はれるのである。

このようなものが「傾向映畫」の本質であるとしたならば、僕等のそれに對する評價も自ら定まつて來る。

一つの新らしい商機は、また他の新らしい商機によつてとつて代られる。映畫資本家にとつて、イデオロギーの商標價値は決して永續しない。否、大衆の需要のみを目安にする限り、それは永續する。けれども、一方、それが永續することは、彼等の階級としての總體的崩壞のために爆藥を準備することである。彼等は背に腹は換へられないと思ふ。「傾向映畫」絕對反對がブルジョワジーのスローガンになる。また、それは既にさうなつてゐるのである。

古い「[illegible]」等の改訂事件、近くは「維新暗殺史第二篇」の検閲拒否、等、ブルジョワジーの意志は、すでに検閲官、撮影所長の姿に具現されて、「傾向映畫」に對する彈壓に全力を注いでゐる。

7

イデオロギーへの投資の一形式としてのブルジョワ的「プロレタリア映畫」は論外として、百パーセントのプロレタリア映畫が目下の處たゞソヴェート同盟にのみ存在してゐて、その以外に發生し得ないといふ事實は、ブルジョワ國家に於ける映畫生産機構への一瞥が充分に說明する。

ソヴェートの映畫は、單にソヴェート同盟の勞働者農民のためのフィルムであるだけではなく、文字通り全世界のプロレタリアートのためのフィルムである。けれども、この題目に關しては、殆んどすべてのことが紹介されてゐる。僕は、もつと僕等の身近な、現實的な事柄について物語つた方がいゝだらう。

日本プロレタリア映畫同盟、（略稱プロキノ）の近況である。

8

プロキノは、周知の通りに、十一加盟の藝術團體である。

プロキノは、プロレタリア映畫の製作、上映といふことを、最大の、殆んど唯一の、――その他のことはすべてそれに從屬する――目的としてゐる。勿論、それは、ソヴェート同盟に於けるような好適な條件に惠まれてゐないし、その技術的成就に於ても、階級的な影響力に於ても、未だ極めて貧弱であることを免かれない。しかし、注意しなければならないことは、映畫が、プロレタリアートにとつて他の多くの藝術の分野に比して、遙かに扱ひにくい鬪爭形態であつたがために、プロキノはナップの諸團體に比して割合に遅れて進出し、今漸くその最初の一歩を踏み出したにすぎないことである。

しかも、アジ・プロの手段としての映畫の役割が今日の如く重大になつて來て、その生産、發表の機關が一日も早くプロレタリアートの掌中に奪ひ還されなければならず、またその任務が日本に於て僕等のプロキノの肩に懸かつてゐることを思ふとき、僕等はプロキノの現在を決して過大に評價[illegible]の必要もなく卑下することも出來ない。

プロキノは、

a　プロレタリア映畫を工場へ農村へ！

b　映畫同盟プロキノ組織の擴大強化！

c　プロレタリア映畫の製作と配給！

d　プロレタリア映畫發表の自由獲得！

の四個の當面のスローガンを掲げて、そのそれぞれを着々と實行してゐる。

その製作部は、去る四月に持たれたプロキノ全國大會以後約四十日の間に「隅田川」「こども」「田園小景」「プロキノ・ニュース」「第十一回メーデー」、等の五本のフィルムを完成した。それは、現在のプロキノの持つ、財政的、技術的制限に阻まれて、十六ミリ・フィルムによつて撮影されてゐるが、僕等プロキノ同盟員は、恐らく今年秋までには、プロキノ・スタヂオを所有し、延いては卅五ミリの標準型映畫を僕等の劇場の支配の下に持ち得るといふ充分な見透しを持つて精進してゐる。

かうして撮影されたフィルムは、[illegible]

ーガンの線に沿つて、工場・農村へ持ち込み、プロレタリア映畫の眞の意味の大衆化を企てるものが、映寫部である。僕等のフィルムの映寫は、現行檢閲制度、興行法等の二重三重の桎梏にしめつけられ、支配階級、官憲、のあらゆる監視、陰謀の前にさらされてゐるが、それにもかゝはらず、プロキノはすべての障害を精力的にはね飛ばして、作品上映の合法性を戰ひ取つた。五月卅一日の、プロキノ最初の作品公開は、無産市民、勞働者、等の熱狂的な支持を受け、大衆のプロレタリア映畫そのものに對する關心の異常な昂まりを立證した。

9

だが、所謂「イデオロギーもの」に對する斷乎たる彈壓を、ブルジョワ映畫會社代表者を一堂に會して、公然と宣言したと傳へられる內務省は、漸く生長し初めたばかりのプロキノの活動を、萠芽の裡に摘みとらうとして、鉄を磨いでゐる。

僕等はもとより死力をつくしてのプロキノの防衞を誓つてゐる。併し乍ら、僕等の力はことに、財政的方面に於て、可成り不充分であることを遺憾とする。

そこで、今、プロキノを守れ！　のスローガンの下に、この、我國に於けるプロレタリア映畫運動の唯一の擔當者に對する積極的應援を目的とする團體が生れた。

「プロキノ友の會」である。

僕等は、イデオロギーの最も格好な容器としての映畫に關心を持ち、日本のプロレタリア映畫が未だに、幅員十六ミリのイデオロギーの器であることに階級的な不滿と義憤とを感じてゐるであらう。最大多數の人々の「プロキノ友の會」への積極的な參加を切望してゐるものである。

新刊紹介

近松語彙（樋口慶千代著）源氏物語は難解にしても、古來から幾多の註釋書がある。が、近松と西鶴とは、江戸文學中難解第一のものでありながら、それがなかつた。近松が和漢の書を渉獵し、佛典に出入し、故事典故をふんだんに用ひ、上方詞から四國九州等各地特有の言葉訛を驅使し、且は出鱈目な發音までも巧妙に用ひ、俚言俗語を縱橫に慣用してゐるのを、脈路整然と註釋するは中々容易でないから、今日までこれをたちいつて闡明した篤學者がなかつたのであらう。近松研究は徐々盛になりながら、その解釋に異同曖昧の點が多かつた所以だ。著者は隱れた近松研究の權威、獨り近松のみでなく、元祿前後の文學を研鑽し、今回始めて此結晶である語彙と其附錄の諸研究とが、同氏を誘掖指導された上田博士との合著となつて顯はれた。蓋し學界の一大收穫であつて近松研究者の爲に好箇の津梁である。本書は前半の語彙に於てその用語の所在、用例、語義等を考證闡明し後半には典據人名地名の解說、動植物等の名彙及び近松の研究に缺くべからざる年表の類を包含して周匝さを示してゐる。蓋し近時出版界に於ける最も傑出した大著の一であつて、著者が十有餘年寢食を忘れてこの難事業を完成した苦心と努力とには敬歎の念なきを得ない。（新四六倍判、七八二頁、定價金八・五〇、特價七・五〇、九段下富山房）

プロレタリア戀愛觀（今野賢三著）性的危機時代の現代青年にとつて、根本的な示唆を含める書。（四六判二〇二頁、定價八〇、世界社）

現代青年の叛逆性

菊川忠雄

今日の青年の生活の間にはたしかに『現代青年の叛逆性』として總括的に取扱はれてもよい一脈の時代相がある。或者は漠然とではあるが『社會』に對する不滿を持つてゐる。また、或者は宗教に對し、或者は道徳に對し、或者は教育に對し、或者は政治に對しといふ風に、社會の時代思潮と現存制度に何れかの角度に於て對立する態度を持つてゐる。そこには程度と内容の點に於て差異はあるにしても、現代の青年の間に、現狀に滿足し得ない不滿と新鮮な要求のあることは否むことが出來ない。そしてこれらの不滿と要求の或るものは、既に抑壓の障壁にぶつつかつて、消極的にか積極的にか、叛逆の形式をとつて社會の表面に現はれて居ることも否むことが出來ない。

この現代青年の叛逆性に對して一定の體系を與へるものは『學問研究の自由』を中心スローガンとして資本主義教育制度に抗爭しつゝある學生社會科學運動と『同一勞働に對する同一賃銀』及び『凡ての青年に政治的自由』を中心スローガンとする無産青年運動とであるが、更に、かゝる叛逆性の派生的なものには到る所でぶつつかつてゐる。

東京で生活するものは先づ山の手線（省線）でこの叛逆性を見る。恐らく青年インテリゲンチヤであらう若者が、油のにじんだ縁のないナッパ服に身を固めて、なやましく電車の一隅にうづくまつてゐる。彼のオールバックの下には、夜更しと過勞から來たらしい蒼白な顏が神經質に動いてゐる。銀座街頭に立つて見ると、そこには、赤いネクタイに下脹のヅボン、マドロスパイプをくはへたモダンボーイの幾群かゞ流れて行く。だがその顏色は妙に生氣の抜けたものだ。日本橋や神田の商店街の小僧さんの姿は恐らく江戸三百年の昔からそのまゝの前垂れ角帶のそれだが、彼等の手には數々、實業雜誌の代りに『中央公論』や『改造』や稀には左翼文藝ものすらが見られる。

世間では、青年インテリゲンチヤのナッパ服やモダンボーイの反撥的な服裝や小僧さんの思想かぶれには何ら好意を表さない。ただ我々はこの情景に對し好惡を感ずる前に、このうちに漂ふ共通の時代相を直感する。そこにものうく織込まれた不滿や新しいものへの憧れを見出して、さてそれらの若者を見るとき、我々の前には輕快な徴候すら

も察し得ないのだ。

現代の青年といふことを女性の世界にまで擴げて考察する者の眼には、この叛逆性は遙かに端的に映ずるであらう。モダンガール、フラッパー、斷髪――日本の若き女性のかゝる粉飾の裏には現代社會に對するものうい不滿がかくされ、たしかに何等かのはけ口を求めて居るのだ。この日新しい婦人の姿は恐らく強い意志と弱い情緒をかくすための矛盾の表現であり、現代社會に對する嘲笑と叛逆の眼がのぞいて居るのだらう。彼女達のスローガンは『男が自分の趣味から割出した島田や丸まげ姿に嵌め込まれなければならないわけはないぢやないの―』『彦達は彦達の趣味でやつて行けばよい！』――『島田は戀である。丸まげは愛である。斷髪は生活である』といふのだ。彼女達のものうい不滿は、舊式な婦人が眼をみはつて居るときには、反撥的にその新しさを振り廻すのだ。

私は今大阪に居る。勞働組合戰線の統一の上に一大ショックを與へつゝある『全國勞働組合同盟』の結成大會に臨んだのだ。この結成大會は六月一日中央公會堂の上の大ホールで開催された。三千人の勞働者の嵐の如き拍手と歡聲が間歇的に湧き起り、それが階下の大講堂にまで響いて來る。所がこの階下の大講堂には關西學生雄辯大會が今まさに白熱化して居る。野次が飛ぶ聲援が應酬する。だが、その喧騷の間を巧みに縫うて全聽衆の拍手を満場に集めるスローガンがある。若き辯士が『思想研究の自由を與へよ！』『言論集會結社出版の自由を擁護せよ！』と叫ぶとき、この叫びが、ためらいもなく野次と聲援を一つの大きな拍手に合流せしめてゐるのである。

更に私は『帝國大學新聞』を手にして見る。昨年中を通じて全國高等學校に於ける所謂學校騷動なるものは、紛議を加へて、概數二十餘件を算へられる。舊い紛議に次いで新しい紛議が捲き起され、學校騷動は最近數年來、高校・大學、專門學校を通じて、最早慢性狀態を呈してゐると見られる。恐らく之が直接の原因はかの三・一五事件を契機とする學校當局及び政府の彈壓方針に求めることが出來やう。あの事件以來、大學、高等諸學校に於ける學生の思想研究と行動の自由は完全に剝奪せられ、『組織的計畫的なる無知と去勢の教育と訓練』が強制せられてゐる。一切の社會主義的傾向に對しては追放を以て臨み、『改造』『中央公論』の如き所謂社會問題を取扱ふ雜誌は圖書館から追放せられ、學生思想警察たる學生主事の探索とスパイの白眼は學生の個人生活と書店の店頭にまで延び――最近松本高校の生徒主事が生徒の寫眞を市内の書店に配布して思想ものを購讀する生徒の首實驗を企てたことが松本高校讀書會の名によつて暴露されて居る――それにスポーツの強制的獎勵を以て學生の意識を麻痺せしめんとする欺瞞策を加へた『教育と訓練』は、かの三・一五事件以來、凡ての高等諸學校を支配し、是等の諸學校に於ける學生の間に浸潤した『思想と行動の自由』に對する要求は窒息するかに見えた。だが學生の不滿と叛逆は到る所にそのはけ口を求めて休むときがなかつた。過去の學校教育は思想に對するには思想、少くとも『善導』を以て臨んだが、今日の學校教育は思想に對するに禁壓と追放を以て臨んで居るのであるから、學

生の叛逆も、過去の學生社會科學運動が公然と、社會科學研究會の公認』乃至は『學校自治の確立』の如き要求をかゝげて戰つた當時の戰術をとることを許されない。過去の華々しさに比すれば極めて用心深く戰はれて居る。例へば、今日各高等學校の紛擾の中心をなして居る要求事項は『選手制度の撤廢』『對校試合の強制應援廢止』『對校競技の廢止』『思想學生に對する處分緩和』『寄宿寮の自治』『學生消費組合の設置』の如きものであるが之等の要求事項が何故に現代青年學徒の叛逆性の現れであるかを見ることは興味あることゝ言はねばならない。

私は之等の點に就いて嘗て或る大學卒業者の批評なるものを聞いた。彼は『今日の學生が對校競技や選手制度に反感をもつことは何としても了解に苦しむ』といふのであつた。今日の學校教育に於て、否、廣く社會の階級對立のうちに於ても、スポーツが一定の階級性を持つて居ることゝ、更に、高等諸學校に於ては、このスポーツが學生の社會科學運動に對立して、殆ど軍事教練と同樣の反動的役割を演じつゝあることゝ、また更にかゝる學校教育の階級性の露骨なる曝露は、それらの卒業生の學生時代には尚顯現せられてゐなかつたことゝ——これ等を併せ考へるもののみが、この間の事情を了解し得るのである。三・一五事件以來、學内の一切の集合と研究のための結社を禁壓し、その勢に乘じてスポーツを以て強制的に、思想研究に對する興味——然り學校當事者と支配階級は『興味』と見て居る——を抹殺し去らんとする今日の學生生活にあつては、このスポーツが反動的教育制度の尖端であり、從つて、之に對しては常に學生の反感と叛逆が集中され一層

るのである。今日の高等學校の學生は[illegible]然も熱心に反對する[illegible]ればならない。如何なる[illegible]その名はスポーツである。

斯うした青年の叛逆性は必ずしも今日に始つたことではない。明治また、青年のかゝる叛逆性は歴史上の到る所に現はれて居る。特に過去の動亂期に於て、次の新しい時代への轉換の先驅をなした人々の中には多くの青年志士の名が算へられるのを常とする。私共は近く明治維新の歴史にも、斯る青年の叛逆性が織り込まれて居るのを見るのである。また歐羅巴に於ける國民運動の勃興期にあつては、自由主義的な青年の集團的運動が、青年の叛逆性を代表したことを見るのである。

これらの歴史上の青年の叛逆性は、その當時の社會の情勢を背景とするものであるから、一定の歴史的カテゴリーとして説明すべきである。しかし、今假りに、之等の歴史上の叛逆性と現代の青年のもつそれとを比較する順序として、單にそれらのうちに認められる共通性のみを取扱ふことは必ずしも無意義ではない。

それらの歴史上の青年の叛逆性は、恐らくその大部分の根據を青年のもつ特有性乃至は青年のもつ特殊の社會性に求めることが出來やう。青年のもつ特殊の社會性の一つは純眞である。青年は社會現象に對しても只物事をあるがまゝの姿で受け入れやうとする。この純眞さは青年を社會進化に對する一個の急先鋒として活躍せしめる。社會進化は徐々にか急激にか[illegible]青年の純眞さはこの[illegible]社會の

地底遥かに起る地響きをも明瞭にきゝ取ることが出來る。現代に於て既に成熟した人々は、傳統によつて育まれ或は馴致せられて居るので、かゝる異様な響音が地底から聞えるにしても、通常のことゝして顧みることがない。しかし、傳統に對する崇敬者でない青年は、この異様の崩壊の音が聞く毎に目覺され眞直に考へやうとするのである。傳統に無關心に、從つてまた權威に捉はれないで、物事を眞直に考へるといふことは、青年に對して一切を科學的に再批判するといふ特權を賦與することである。十九世紀初期に於けるブルジョアの革命は歐羅巴各國の大學生をその渦中に捲き込んだが、之等の大學生の運動は屢々大學を中心として起された。之は恐らく青年の純眞さから出發した再批判が、當時傳統と權威によつて毒されない初期の大學――そこではブルジョア科學が戰鬪的な歩みを踏み出しつゝあつた――を絶好の温床としたからである。

青年のもつ特殊な社會性の第二は進出的なことである。勿論青年が進出的であるといふことは、必ずしも青年の進出が徹底的であることを意味するものでない。否過去の青年の叛逆性が結果に於て保守と反動に屈服するに至つた事實を否認するものでない。しかしそれにしても尚青年の進出的なることは青年の特殊な社會性として見逃すことの出來ないものである。この特殊性は生理學的には『青春』のもつ本質的なものであるが、同時に社會進化の過程に於ては『青年層』としての特殊性でもある。

元來青年はその成長の過程に於て成年者の與へる保護や監督と衝突するのを普通とするが、これを個々の青年に就いて見れば、彼はその保護者或は監督者の與へた一定の指導に對して一種の苦悶を感ずる段階に到達する。これは或人々によつて青年の『脱皮』と呼ばれる過程である。先づ七八歳にして保護者と監督者の眼をかすめて子供の創造による行動を持たうとする。世間では之を七ツ八ツ時の悪戯だとする。次に二十歳前後の所謂聲變り時から二十四五歳になれば青年は親權に對して獨立を宣言するのである。この過程の存在することは必ずしも親權者の監督を不必要とすることゝはならないが、少くともかゝる監督や保護の有無に拘はらず、青年の『脱皮』は必然の途を必然として歩むことを意味し、その限りに於ては、保護や監督が、青年の立場からは啓蒙と共に批判の内容をもつことを意味し、親權者の立場から見れば、その保護や監督は青年の『脱皮』の過程に應じて進化さすことによつてのみ、或程度の衝突が事實に緩和されることを意味するものである。だが、之等の衝突の緩和は、個々の青年の場合には或程度の成功を收め得るとしても、之を一定の青年層に就て見るときには殆ど成功の餘地がないことゝなる。何故であるか。答は簡單である。この成熟せる親權者によつて青年に與へられる個々の保護と監督はそれ自體が一定の限界を前提とするからである。それらは既に一定の傳統と權威から創出されたものであるから、よし如何に傳來の傳統と權威から青年を『脱皮』させるが如く見えても、實質的には青年がこの傳統と權威を『理解』してその限界内に踏み止まることを要求するものである。個々の青年の場合には、成熟せる成年者の傳統と權威からの脱

道を感ぜす、青年の獨立が自覺し得るかも知れないが、青年層として見られる場合にはかゝる幻影に消されてしまうのである。かゝる保護と監督が統一化され形式化されて教育、宗教、法律及び經濟等の諸制度に對して青年の特殊な社會性は露骨に對立せざるを得なくなる。所が之等の諸制度は一定の傳統から割出され、そこには社會進化の過程に生れたタブーが今度は新なる進化への障碍として依然として存在して居る。既に理想と熱意を缺いた諸制度は死滅の運命にあるのだ。此諸制度の維持には權威の名によることが絶對に必要とされるのである。保護と監督に當るべき成年者は既にこの事を知つて居るのである。

『かくて青年を統治する仕事に於て、我々は合理的協議を通じ、また青年の上に責任を負はせる技を通じた統治と「恐怖」を通じた統治との何れかをとるべき道の分岐點に來たのである。後者は他のことな——もし必要なら窃かにしやうといふ衝動を産み出す。それは青年の全注意を生の消極的方面に釘づけてしまう。それはその消極的方面から強大な暗示をつくる。それはその消極的方面を積極的のものにしやうとする強大な衝動をつくつて、遂に傳統の「すべからず」が近代青年の叛逆的な、理窟拔きの「俺はやる」になつてしまうのである。』かくて『青年は「恐怖」のために、命令に對し外面的服從を提供するかも知れないが、併し彼は思惟する合理的な存在として想へられた例がないのであるから、その命令は彼に合理的には思はれないのである。窃かに彼は他の考へを懷き、反對の往々にして反社會的な類の他の衝動を懷いてゐるのである。かくて外面的一致の手段によつて、彼は彼目ざし、彼と意識する事が新しい成年世界への[illegible]なしげるがこのくクリーンの[illegible]分形成された目的が形を成していこあろ——[illegible]質の影でも捉へたら[illegible]すると思はれるやうな思想と[illegible]——』

ベン・リンゼー著、内山賢次譯「近代青年の叛逆」一二二——一二三頁。

上述の如き青年に特有なる社會性は過去の歴史に於て共通なる青年の叛逆性の要因をなすものである。

我々は過去の動亂期に於て青年層のある部分がその純粹と[illegible]的性質から出發して、反動政府に反抗した例を十九世紀の後半に見ることが出來る。この青年層のある部分の叛逆運動は、先に十九世紀の初期に於て擡頭したブルジョア自由主義に合流した叛逆運動の血を繼承するものであつたが、その演じた役割は結局ブルジョア自由主義を前進せしめる範圍に止つた。

我々はこの代表的なものとしてロシヤ大學生の運動を擧げることが出來る。この運動は從來の青年の叛逆性を檢討して、現代のそれの特徴を明瞭にする上に、生きた教訓を提示するものである。

ロシヤ大學生の當時の運動は、反動政府の[illegible]な大學生活から排除することを直接の動機としたが、究極する所、民衆全体を支配する反動政府の××たるツアーの專制に對して反抗する運動と化した點に於て、ロシヤ社會運動の[illegible]をなすものであつた。この[illegible]にして[illegible]なるエピソードと背景に位する[illegible]と自由[illegible]とは、まさにジノヴィ

エフが言つた如く、一八六〇年代より八〇年代の人類解放運動史中に金文字を以て記載せらるべき壯觀を呈した。當時のロシヤの各大學の學生はツァーの專制治下に於て『學内の自治』『集會結社の自由』を中心とする要求を掲げて戰つたが、この運動は一八七〇年代に於てロシヤの各大學に慢性的紛擾を惹起せしめ、大學内は數々×××と×××によつて嚴戒下におかれ、大學騷動は數々×××に轉化した。一八七八年カルコフ大學の自治要求の示威運動の如き、一八九九年より一九〇一年までの三年間年中行事の如くペトログラード大學を見舞つた學生騷動の如きはその代表的なものであつた。就中、一八九九年ペトログラード大學の示威運動の如きは恰も二月八日の大學創立第五十周年記念日の出來事であつた。大學總長は『當日學校内に於て記念式以外の集會をなし又は騷擾を起したる者は直ちに捕縛せられシベリヤに追放せらるべし』といふ旨の命令を出したが、この恐怖政策は却つて年來鬱積せる大學生の叛逆性を極度に刺戟し、その自然の×××を式場に於て見出した。即ち、當日總長が式辭を述べんとして登壇するや、滿堂の學生は忽ち鬨の聲をあげ式場は一大混亂に陷り、式は有耶無耶のうち閉ぢられた。所がこの學生が校門を出るや否や大學を包圍した××××の一隊は學生の群に突撃したので茲に學生の激昂を買ひ、翌日より暴壓反對の全校ストライキが開始せられ、全國の高等學校程度の學生の同情休校は展開され、三十二校三萬五千を超ゆる男女の大學生の全國的總同盟休校は官憲の重圍と政府や憲兵の強制退去命令と追放とに抗して嚴たる統制を保ち、同年夏迄持久戰が續けられたのである。

『その間大學からは毎日一團の大學生が輕騎兵や巡査に護衞せられて停車場に送られた。停車場ではそれ等の學生を輸送する列車が出る毎に、インテリゲンチヤの感激に滿ちた送別の歌が合唱せられ、萬歳の叫びが擧げられた。その群集の中にゐることを見出された學生は直ちに捕へられて次の列車で同じく遠地に送られる。かくて眼ぼしい學生は殆ど全く追放せられ、學生は段々と反抗の力を失つた。徹底的に大學生を援助する市民はそう多いものではない。血氣な大學生が放逐せられて仕舞ふと大學町は死んだやうにヒッソリとなつた』――吉市春彦氏『ロシヤ大學改革運動史話』より。

また一九〇〇年のそれは二月十九日の農奴解放三十周年記念感謝祭に次いで『共和政府萬歳！』の歡聲と共にあげられ、モスコウ、キエフ・ワルソーの各大學でもこれに應じたが、到る所××と革の鞭で鎭壓せられた。最後の一九〇一年のそれは一女學生（城砦内で一士官のために凌辱せられ、自ら火中に投じて自殺した）追悼會の解散命令に端を發し、××の拔刀隊は大學生と數時間の亂鬪の後、死傷五名を出し、男學生四十一名女學生百二十八名が捕縛された。三月十九日には政府に對する學生の抗議運動が起され、學生三千名の××せる示威運動はコサック兵との間に×××を演じ、次いで三月十四日には之が更に發展して、大學生、勞働者、一般市民約一萬人から成る×××とコザック兵八個中隊步兵五個中隊の間に於ける××××と化し、最後に近衞步兵一聯隊の××を以て學生運を鎭壓することが出來たのである。

我々はこのロシヤ大學生の××××を顧みるとき、コルツオフの言

業を思ひ浮べる。

『ロシヤが遂に待ち望んだ自由の日を迎へその功勞者のために記念碑を建設する時が到來するならば、最高所に最初に建てらるべきものは、身にトウジロウカを纏ひ、しかも全身鮮血を浴びて立てる大學生の像でなければならぬ』

だがそれにもかゝはらず、この大學生の像はソヴエートロシヤには建てられなかつた。それは何故か。ロシヤの大學生のかくも犠牲的な鬪爭も最後に於てはロシヤ資本主義と妥協する逆行をとつたからである。

かくの如く青年は歴史の動亂期に於てはその特有性たる叛逆性を發揮した。しかしまたその動亂期が過ぎ去ると共に保守主義の翼の下に鳴りをひそめるを常とした。事實、青年は過去の時代にあつては、かかる限度を超えてその叛逆性を押し進めることは出來なかつたのである。過去の青年は現實に於て經濟的獨立をもたなかつたからだ。

『併し青年はいまではそれをもつて居る。機械がそれを可能にしたのである。曾て青年は木銃を以て行列をつくり喚き立てた。併し今日武器は××されてゐるのである。この現代青年の叛逆性は別種のものである。それはこの種のものの最初のものである。そしてそれは已れの意志を有效なものとする手段を有して居るのである』——リンジー前掲書一八五頁。

我々は既に最初に於て現代青年の叛逆性を街頭に就いて散見した。若しも現代青年の叛逆性が單に上述の程度に止まるならば、その限りに於ては、過去の歴史の或る時期に於ける青年の叛逆性とその本質に於て何等の差異も[illegible]叛逆性は、過去から引き離された[illegible]の一點で[illegible]さへもある。或はもつと正確に言へば、[illegible]新しい[illegible]への過程——その過程は必然的に[illegible]階級的分化の過程である[illegible]——に於て發生し街頭にこそ現はれた叛逆相である。これらの叛逆相は、この限りに於ては、近代資本主義がラヂオとジャツズと共に齎せて來た一定の流行以上の何物でもない。

そこで我々は最後に眼を勞働青年の生活に轉じなければならない。

そこでは近代青年の叛逆性が何物にも憚る所なく、集團的規模で組織され、ぐん〳〵と底力を以て伸び上りつゝある。そしてこの××の上にこそ『現代青年の叛逆性』は始めてその特徴と基礎を見出すのである。從來の青年の特殊の社會性はこの新しい特徴が加へて始めて社會的な力としての發展性を認められるのである。

近代資本主義は婦人勞働者と共に青年勞働者を登場せしめた。しかし、資本のより容易なる酷使と搾取に適當するといふ條件を前提として迎へられたのである。絶對的服從と殆ど半人前の安價銀と最も不安定な雇傭條件によつて積み上げられた勞働生活の條件に立たせられたのである。しかも資本家階級はこの不安極まる境遇に立つ勞働青年と婦人勞働者を成年勞働者に對立せしめることによつて、成年勞働者の勞働條件の引下げを試み、一石二鳥の效果をねらつてゐるのだ。[illegible]に就て我々は、勞働青年の搾取状態[illegible]

な引用することを便宜と考へる。

工場勞働者年齢別一日平均賃銀表（產勞編『無產者政治必携』三三頁）

總平均	男二・一〇（圓）	女〇・八八（圓）	（男女平均一・四四（圓））
十四歳未滿	男〇・七三	女〇・五九	
十四—十五歳	男〇・八九	女〇・七六	
十六—十七歳	男一・二三	女〇・九〇	
十八—十九歳	男一・五九	女〇・九八	
廿—廿三歳	男二・一一	女一・〇二	
卅—五九歳	男二・五八	女一・〇一	

この表によつて知られる如く、十八才以上の青年勞働者は成年勞働者と同一勞働をしながらその賃銀は著しい懸隔を設けられてゐるのである。こゝに近代資本主義下の青年の經濟的要求の中心をなすスローガン『同一勞働に對する同一賃銀』が叫ばれ、このスローガンを中心として現代青年の叛逆性は、始めて青年運動の心臟を把むことゝなる。何となれば、この『同一勞働に對する同一賃銀』の要求は、それ自體がその出發に於て、從來の社會に於ける傳統と衝突するからだ。從來數百年間法律は二十一歳以下の人間を未成年者として取扱ひ、成年者に對して與へられた權利は、保護と監督の名によつて、青年から剝奪せられてゐた。かゝる傳統は嘗て封建的經濟制度の下にはその合理的基礎をもつたが、近代資本主義は、凡ゆる職場に於ける生產と勞働の過程に於て、かゝる傳統の基礎を崩壞に導いたのである。されはかゝる傳統は最早權威によつてその存續を企てられて居るものであり、この權威に對する青年の叛逆は必然的に高められるのである。

しかしそれのみに止まらない。近代資本主義に××的なる帝國主義戰爭の××は常に勞働青年に幾多の軍國主義的負擔を加重して行く。資本主義の機構に直面して、更に自己の勞働生活から出發して、物事をあるがまゝに思考する勞働青年の意識は急速に高まり、そこに於て、その叛逆性は最高頂に達する。勿論かゝる勞働青年の環境を取り圍む多くの障碍はかゝる叛逆性の生長を阻む事情に富み、加ふるに支配階級側からする官製青年團組織、軍事教訓、修養團、スポーツ其他一聯の××的施設と××教育は積極的にかゝる叛逆性の去勢を企みつゝあるが故に、個々の勞働青年はこの障碍と欺瞞によつてルンペンと化し去る場合が多い。だがこれらの個々の出來事は勞働青年層を舉げて左右することは出來ない。現代青年の叛逆性はこゝに至つて資本主義の內的矛盾と直接に結合して發展するのである。嘗て從來の青年の叛逆性は、社會進化が現存社會制度の土臺を蝕む響きを地底に聞いたが、勞働青年のそれは今や眼前にその××の響きを聞きつゝ成長してゐるのだ。『同一勞働に對する同一賃銀』『十八歳以上の男女に選擧權を與へよ』『一年兵役制の即時實施』『帝國主義戰爭反對』等々の要求は現代青年の叛逆性の××をなすに至つた。特に我國に於いては青年勞働者が全勞働者人口（農民をも含めて）の大部分を占める事實は、この青年の叛逆性の傾向を益々重要ならしめるものである。從來の我國の無產青年運動が所謂學生社會科學運動を主流として形成されてゐたのが、今日に於ては工場職場にその××を移しつゝある傾向と更に所謂×××狩りに連坐する者の大多數が青年勞働者と青年學徒であることは、現代青年の叛逆性の深刻化を物語るものであらう。

統帥權の獨立と帷幄上奏

吉野作造

私は本誌前號に於て「統帥權問題の正體」なる一文を公にした。最後の附記にもことわつて居る通り、身邊の事情に妨げられて殘念ながら十分に委曲をつくすことが出來なかつた。其後該問題は內閣を代表する財部海相と加藤海軍軍令部長との折衝に移り、加藤軍令部長が暗に陸軍側の聲援する所に押されて、結局全軍部を代表するの地位に立たされ今や問題は政府對軍部の綱引と云ふ形に重大化せんとして居る。やがて倫敦條約が樞密院の討議に上るの日には、老人連の無鐵砲な封建思想に累されて事は一層面倒になるだらう。實際政治の問題としてどうせ正しい解決の一擧につく見込のないのは勿論だが、民間輿論の大勢だけは常に正しい方向を指示して居るやうにありたいものだ。有力なる諸新聞の論調は幸にして大體正しい立場に據つて啓蒙の責任を盡して居る。が、また中には少數ながら百年一日の如く頑迷なる軍閥思想を振り廻はすものもないではない。ここに重ねて公にする此の一小篇は、主として統帥權問題の現代政局に在て占むる立場の全貌を描くに努めたもので、必ずしも前論文と重複するものではないが、又格別世上の通論と違つた創見があるのでもない。たゞ紛雜なる論辨を整理し多少之に理路の系統をつけた點に於て、問題の輪廓をいさゝか明瞭ならしめたるの效はあらうと自信する。本問に關する輿論の開拓に幾分でも貢獻し得れば幸である。（五月十八日記）

倫敦條約の締結に關する政府對軍部の確執

兩者確執の原因は政府が軍部の意見を無視したと云ふ事に在

る。倫敦軍縮會議に臨む日本側の固執すべき方針として當初海軍軍令部は一定の意見を提出し政府の承認を得て居つた。後ち在倫敦全權使臣の請訓に對し政府が多少の讓歩を已むを得ずとして所謂妥協案に同意の指令を發せんとするに臨み、軍令部は頑として之に聽從しなかつた。そこで政府は其同意を得るに及ばずして遂に全權の新提議を容るるの回訓を發したのである。政府が何とかして軍部の同意を得ようと頻りに奔走したこと、その爲に請訓より回訓まで半月餘も掛つたこと、而して此上從前として放任すべきに非ずさりとて折角こゝまで進行して來た會議を決裂に導くは種々の點に於て我國の不利なること等を考慮すれば、其間また諒とすべき情誼なきにあらざるも、併し政府が結局に於て軍令部の意見を無視したと云ふ事實に爭ひはない。是に於て軍部は二重の意義に於て政府の態度を不快とすることになる。一は當該問題に付いて自家の意見の顧みられなかつたこと、二は之に由て政府が軍部を輕視するの端がひらかれ從て軍部威信の大に傷けられるの惧あることと是れ。

海軍軍令部條例に依ると、第一條には「海軍軍令部ハ國防用兵ニ關スル事ヲ掌ル所」とあり、第二條には「海軍軍令部長ハ天皇ニ直隷シ帷幄ノ機務ニ參」すとあり、又第三條には「海軍軍令部ハ國防用兵ニ關スルコトヲ參畫シ親裁ノ後之ヲ海軍大臣ニ移ス」とある。同じく國防用兵の事を掌り天皇に直隷して帷幄の軍務に參畫するものに參謀總長がある。故に海軍軍令部の管掌する所は漠然と「國防用兵」とは云ふが專ら海軍に關するものに限るは明白である。而してその海軍に關する限り、海軍軍令部長は廣く國防及用兵の全般に亙り帷幄に參して天皇を輔翼するの職權を有し、その職務の遂行につき何人の容喙をも認むるものでない。此點に於て海軍軍令部は全く政府の外に獨立し寧ろ政府に對立する特殊の國家機關と謂ふべきである。

されば又軍部と政府との關係は樞密院と政府との關係に似て居るとも云へる。樞密院は政府の期待に頓着なく獨自の見識によつて天皇の諮詢に應へる。之と同樣に軍部が國防用兵の事につき帷幄の職務に參畫するに方ては何等政府の意圖を顧慮するの必要はない。樞密院と政府との意思の衝突は必ず後者の辭職を結果にもつことと從來の慣例であり、軍部との確執については夫れ程はッきりした慣行はないが多くの場合重大政變の危機を孕むことに疑ひはない。故に政府としては、政務の圓滿なる進行を圖る爲には、樞密院に對する場合と同じく軍部に對しても亦常に事前の諒解を得るに努むるを要するのである。こゝに所謂軍部威信の維持せらるる根據があるのだ。然るに今度端なくも政府はこの軍部の意思を明かに無視して自家方策の遂行を押

切つた。斯んな事は從來樞密院などに對しては到底政府のやり了うせぬ所である。軍部の快からずとするも怪むに足らない。こゝで負けては部內の衆怨を一身に集むるの恐れありとてか、加藤軍令部長の頑强に初念に執着するのもまた人情として恕すべき所であらう。

統帥權干犯論

一

政府對軍部のもつれの重點は寧ろその政治的意義の方面に在る。之に附隨して倫敦條約の締結は統帥大權を干犯せるの點に於て憲法の條規又は其の趣旨に違反せるものでないかとの議論もある。倫敦條約と帝國憲法との關係も大事な問題ではあるが、併し之が解決されたとて政府對軍部のもつれまでが完全に解決さるると限らない。所謂統帥權干犯を主張する憲法論には、寧ろ軍部の立場を鞏固にする爲に種々に工夫された假作りの說明が多いやうだ。それかあらぬか現代有力の憲法學者は口を揃へて今頃斯んな事の問題になるのを不思議がつて居る。學者の定論に在ては到底統帥大權干犯の問題の起る餘地はない樣である。

併し念の爲に統帥權干犯論の代表的なものの一二を吟味して見よう。

（一）海軍軍令部は國防と用兵とを管掌の範圍とする。國防は兵額編制の事に關し憲法第十二條の所謂編制大權に當り、又用兵は軍機軍令に關し第十一條の統帥大權に該當する。而して軍令部はひとり用兵の事のみならず國防の事をも掌る所なるが故に、倫敦條約の內容は正に軍令部の職權の範圍內に屬し、從て軍令部の意に反して出來上つた倫敦條約は少くとも其手續に於て憲法の趣旨と背いて居ると云ふのである。但しこの論は批准を拒むべしとする論の根據とはなり得ようが、直に條約そのものを無效と主張する理由にならないことは勿論である。さて此說は論者の主張する如く憲法違反の論據となり得るものだらうか。之を肯定する爲には少くとも次の二點を前提せねばなるまい。（一）軍令部長の國防に關する帷幄の參畫は政府の編制大權の輔弼と憲法上同一の效果を有すること、（二）輔弼參畫に關する兩者の意思相扞格する場合には軍令部の意見が政府のそれを壓して重んぜらるべきこと。併し斯の如きは今日の憲法條文竝附屬法規のうちに幾分でも證明さるるを得ることだらうか。私共の觀る所では、斯種の主張の際にはどう探しても「軍事は一切文官に與らしむべからず」との擁護的偏見以外の何物をも見出すことは出來ないのである。

(二)世上には、憲法第十一條の所謂統帥大權は帷幄の機務に專屬するも第十二條の編制大權は全然政府の輔弼すべき事項だとの説がある。此説に依れば軍令部の權限は制度上國防の事に亙つても倫敦條約の内容は所謂編制大權の範圍に屬するが故に、啻に之を軍部專屬の統帥權の干犯と云ふ能はざるのみならず、政府が獨自に之を處理せる事實それ自體に强く文句をつけるわけに行かない。問題はせい〴〵政府にも權限があらう軍部にも權限があると云ふので、詰り政府對軍部の關係如何と云ふことに歸するだらう。之は寧ろ今後に解決せらるるを要する問題で、今のところ海のものとも山のものとも分らない。であるから、今の場合軍部が政府に挑戰する武器として之を採ることは、或る意味に於て頗る損だ。そこで論點を一轉して、倫敦條約の締結は直接に統帥權そのものに觸れると云ふ説を唱へ出したものがある。其説に曰く、同じく編制と云ふも兵備内部の細目的編制はまた統帥權の範圍に屬する、從て倫敦條約の内容は直接に統帥大權に觸れると。軍の編制を内部的と外部的とに分ち前者を以て統帥權の範圍に入るとの説はたしか美濃部博士が唱へられたと記憶する。從來統帥權の範圍に屬するや否やを辨へず永年の慣行に從ひ軍の編制をば政府の容喙を排して漫然專斷し來りし軍部に取て此説はたしかに一種の福音と響いたに相違ない。併しこは美濃部博士の一家の私見であつて、今のところ未だ學界の定説と許さるるまでには至つて居ない。よし此説に據るにしても、倫敦條約の内容たる艦種竝保有量の決定の如きは果して所謂内部的編制に該當するものなりや大に疑はしい。斯う考へると、此の主張も至て根據の薄弱なものだと思はれるのに、議會兩院の論戰に於ては不思議にも頗る重要視され、或は倫敦條約の締結は憲法第十二條に依つたのかの、又は統帥權と編制權とは互に相作用することなきかのと、頻に婉曲にして毒を含んだやうな質問が繰返されて居た。軍部との確執を前にして迂濶に思切つたことを云へぬと云ふ事情があつたにしろ、政府がこの平明にして一點の疑を容れざる愚問に對し徹頭徹尾答辯回避に終始したのは慘めなる醜態であつた。而してその結果實際政治上の問題として此點が遂に曖昧に附されたのは、我々の頗る慊らず思ふ所である。

二

統帥權に關する憲法論上の通説として多くの人に信ぜらるる原則は、憲法第十一條の所謂統帥大權は憲法第五十五條に對する一例外を爲し政府の輔弼範圍の外に在りとする事である。こ

の見解は伊藤公の「憲法義解」以來多くの學者の採る所であつて、恐らく立法の精神もこゝに在つたのであらう。併し此說の當否に付ては輕々に斷じ得ざるものあるを思ふと共に、若し之より推論して帷幄の下に於ける軍部の輔翼範圍は統帥事項に限るなどと考ふるものあらば、それは大なる誤りなるを訂さざるを得ない。之等の點について私の考へて居る事を略記すれば次の如くになる。

(一)單純に憲法の條文からいへば、政府の輔弼範圍は一切の國務に亙り憲法第五十五條には本來例外あるべきものでない。例外を認めず國務施行の絕對的統一を期することが近代政治の最重要の原則でもある。

(二)然るに今日我國の憲政運用の實際に於て、軍務に關し、全然政府に由らざる輔弼の行はるる部面がある。陸海軍大臣參謀總長及び海軍軍令部長の帷幄上奏に由る輔翼が是である。

(三)軍部の帷幄上奏を規定せる制度は或る意味に於て憲法の重要原則に違反するものでないかの問題を起し得ぬと限らない。之を問題とせずして多年文句なしに承認し來りしは、我國の歷史に於て憲法發布以前から既に兵政分離主義が採用されて居つたからだと說く人がある。傳統的慣行は固より憲法解釋上重要なる一元素たるを失はぬも、又時勢の變遷に應じて嚴肅なる再吟味に附せられねばならぬものでもあらう。

(四)軍部の輔翼は政府の輔弼に對して例外の效果を有するものか如何、統帥權に關する世上の通說に據るとすれば、憲法第十一條の事項に付ては問題はない。が、第十二條の事項になると議論の餘地がある。帷幄上奏と云ふ文字に附する意味の厚薄如何に依て自ら見解の相違あるを免れぬが、今次の問題に付て見るに、軍部は優勝とまでは行かなくとも少くとも對等の效果を主張し、政府は表面の態度を曖昧にし乍らも心中では堅く自家の優越を押通さんとするものの如くである。是亦一つには時勢の然らしむる所であらう。

(五)帷幄上奏に由る軍部の輔翼範圍は獨り統帥事項だけではない、憲法の條文に照合して云へばその第十一條と第十二條とに亙るのである。故に憲法規定の所謂統帥大權編制大權の區別を其儘取つて軍部當局の輔翼事項と否らざるものとを分つ標準とするは當らない。統帥事項は大體に於て帷幄の機務に屬せしむるを適當とすべきも、其中に全然國務になるものなしとせぬ。編制事項に關しても、現に美濃部博士が内部的編制權なる項目を立て之を統帥權の一作用と認めて居る如く、之を統帥權の作用と認むるの可否は暫く別として、頃に尚其中にまた帷幄の機務に屬せしむるを可とすべきものがある

は明である。軍部と政府との權限の交錯を論ずるに方りて統帥權と云ふ文字に拘泥し過ぎるは、時に理論の精緻を外れる恐がないでもない。

(六)軍部側では政府を責むるに頻りに統帥權の干犯を以てする。歸京早々の財部海相との會見に於ても加藤軍令部長は熱心に統帥權獨立の保障を求めたとやら。併し此場合の所謂統帥權は、帷幄上奏の途に由て軍部の有する特權の全體を代表する總名であつて、所謂憲法上の統帥權ではないらしい。さうでなければ、軍部乃至加藤軍令部長の折角の主張も意味をなさぬからである。國民的常識が統帥權と云ふ文字に附する特殊の尊嚴さなどが、軍部の人をして自らこの言葉を濫用するに至らしめたのであらうが、本問題に於ける主たる論點は決して單なる統帥權の歸屬如何ではないのである。

猶ほ序ながら一言する。以上海軍軍令部について述べた所は其儘參謀本部にも適用する。今度の問題の解決如何は引いて他日參謀本部の立場にも重大の影響を及ぼすので、陸軍の首腦部は暗に海軍側に聲援して政府對抗の陣容を盛ならしめて居るとやら。要するに今度の問題はその根底に付て觀るに單に海軍のみの問題ではない、謂はば海陸兩者に取ての大問題なのである。從て心ある國民も亦、海陸兩面に跨る所謂軍閥問題の清算の端緒を見得べしとして、今次の紛糾の成行に多大の關心を寄せて居るのである。

帷幄上奏について

一

軍部が政府の外に超越し政府に對抗する獨立の勢力を爲す所以の根據は帷幄上奏である。帷幄上奏は今日の制度の下に於て如何樣に認められて居るか。

(一)內閣官制第七條に曰く「事ノ軍機軍令ニ係リ奏上スルモノハ天皇ノ旨ニ依リ之ヲ內閣ニ下附セラルルノ件ヲ除ク外陸軍大臣海軍大臣ヨリ內閣總理大臣ニ報告スヘシ」と。即ち事の軍機軍令に關するものは閣議の討議に上すを要せず、天皇自ら之を內閣に下附するものの外は陸海軍大臣に於てそれぞれ之を專決し、たゞ內閣總理大臣に報告すればいゝと云ふのである。原則として內閣はその決定に與らない、陸海軍大臣が單獨に帷幄に參して決定に與るのである。

(二)陸海軍大臣は陸軍省官制及び海軍省官制の附表に依り夫れ〲陸海軍大中將を以て任ぜねばならぬことになつて居る。從て內閣總理大臣は事實に於て軍部大臣を監督することが出來ない。軍部のボイコットに依て內閣の瓦解を見又は其

の不成立に終つた例もあるが、少くとも組閣に際し軍部の或種の注文を容認するを條件として軍部大臣の就任を見ると云ふが常である。之等の關係はまた一面に於て帷幄上奏に由る軍部の特權を不當に强むる原因ともなる。

(三)參謀本部條例竝に海軍軍令部條例に依れば、參謀總長及び海軍軍令部長は國防用兵に關する部務を統轄し天皇に直隷し帷幄の機務に參畫すとある。斯くして參謀總長と海軍軍令部長とは陸海軍大臣と共に軍務に關する帷幄の最高輔翼機關を爲すのである。

(四)帷幄の輔翼と政府の輔弼との權限の分界に就ては今日の制度上何等定まる所はない。軍部の獨立又は統帥權の獨立を主張する者は、動もすれば以上の範圍に侵入する政府の越權を苦慮するも、原則として政府の輔弼範圍の廣くして及ばざるなきを信ずる者に取ては、寧ろ軍部の不當なる進出が問題となるであらう。現に今度の紛糾に付ても軍部は統帥權の干犯を呼號して居るのに對し、天下の輿論は却つて軍部を制して正當なる規道に復せしむる爲め何故に濱口內閣がこの好機會に乘ぜぬかを責めて居るではないか。要するに帷幄上奏の制はそれと內閣の輔弼との關係が明に法定されない限り、制度として妥當のものと云ひ難いやうである。

同一の事項を二つの機關に於て決定し得ると云ふは其自體妥當な制度でないが、夫れでも兩者の間に適當な協調さへ付けられれば實際上面倒な事も起らずして濟む。換言すれば軍の行動が適當な範圍內に於て爲されたとすれば事實に於て之の默認を得るに難からず、斯くして期待された事實は有效に成立するを得よう。たゞ何を以て適當の範圍とするか、之に關しては法文上に何等の據りどころがない、さすれば矢張り結局は世上の批判に待つの外はなからう。斯うなると此事に關する事に於て軍部側の立場は殘念ながら頗る分が惡るいと謂はねばならぬ。

二

帷幄上奏の途に由て軍部は從來どれだけの事をなして居つたか。

(一)統帥事項は勿論編制の事に至るまで軍部は之を獨斷專決し政府は全然之を與り知らなかつた。(編制權の一部を政府の手に收めたのは華府會議以來の事である)これは固より制度の上に何等の根據あつての事ではないが、軍部が日本政界に於て居然たる大勢力たりし事の自然の結果、永年の慣行として動かすべからざる不文の原則となつて居たのである。華府會議の如きが無かつたら其儘いつまで續いたか分らない。今日

でも依然として此地位を軍部に維持せんとしてか、頻りに軍部の特權は制度及び慣行に依て定めざるべからずと說くものがある。

(二)海軍軍令部條例の改正第六條には部內參謀の分掌事務として左の四項を擧げて居る、必ずしも政府の輔弼を排斥せざるの趣旨に解すれば大體妥當なものといへる。

一、出師及作戰ノ計畫　艦船ノ配備並其ノ進退役務ニ關スルコト
二、艦隊軍隊ノ編制運動法　運輸通信演習檢閱ニ關スルコト
三、軍港要港防禦港其ノ他軍事上必要ナル地點ノ選定及其ノ防禦計畫に關スルコト
四、軍事諜報飜譯編纂ニ關スルコト

(三)大正十一年二月議會に於て帷幄上奏のことがやかましい問題となつた時、陸軍當局は各新聞紙を通じて「帷幄上奏の範圍」なるものを發表した。之を今日に持ち出すのは或は陸軍部の迷惑かとも思はれぬでないが、其後之を訂正したと云ふ話も聞かないから、姑く之に依て陸軍側の見解を忖度することにしよう。從來どう云ふ見解を執つて居たかを見るには直接の役に立つこと勿論である。さて之に依ると、參謀總長及海軍軍令部長の帷幄上奏を行ふのは「其職責上國防用兵ノ計畫ニ關スル事カ或ハ直接軍隊ノ指揮命令ニ關スルコトデアルカラシテ其ノ內容ハ直接政務ニ關係アルモノデナイ」と斷じ次で「今帷幄上奏ノ事項ニセラレテ居ル所」は次の樣なものだとて十二項目を例示して居る。

一、作戰計畫ニ關スル事項
二、外國ニ軍隊派遣ニ關スル事項
三、地方ノ安寧秩序維持ノ爲メ兵力使用ニ關スル件
四、特別大演習等ニ關スル件
五、動員ニ關スル事項
六、平戰時編制
七、戰時諸規則
八、軍隊ノ配置ニ關スル事項
九、軍令ニ關スル事項
十、特命檢閱ニ關スル事項
十一、將校同相當官ノ平戰時職務ノ命免及轉役
十二、其ノ他軍機軍令ニ關シ臨時允裁ヲ仰クヲ要スル事項

之に由て陸軍側の所謂「直接政務に關係なき統帥事項」の何たるかが略ぼ分るだらう。

(四)明治四十年九月軍令第一號として「軍令ニ關スル件」なるものが發布された。第一條には「陸海軍ノ統帥ニ關シ勅定ヲ經タル規程ハ之ヲ軍令トス」又第二條には「軍令ニシテ公

示ヲ要スルモノニハ上諭ヲ附シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ主任ノ陸軍大臣海軍大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス」とある。美濃部博士の說に依れば、此年二月に發布になつた公式令は總ての勅令に內閣總理大臣の副署を必要としたので、軍機軍令に關するものは一般勅令の例に從はず陸海軍大臣のみの副署を以て足ることにする爲め、軍令と云ふ特別の形式を定めたのだと云ふ。軍機軍令に關するものに付ては內閣の議を經ず主任の軍部大臣が直接に上奏裁可を仰ぐことが出來るのだから、この異例を開いたとて制度上怪むに足らぬ樣だが、之に由て所謂軍令は法制局の審査を免れ、從て軍令其ものの適否に關する外部の批判を絕對に封ずることになつたのは、別の意味に於て穩當を缺くものと云はざるを得ぬ。統帥事項だから軍令の內容になる、軍令として規定せられたるが故に統帥事項なのではない、軍令と云ふ制度の濫用は右の限界を不當に混亂するの恐れなきを得ない。

(五)明治四十年來軍令の形式に於て發布せられたる諸法規を點檢して私のいつも驚くのは、其中に所謂國務に關涉するもののの頗る多いことである。國務にわたる限り之はまた政府の輔弼範圍に屬するものであるが、政府が軍部に對してその權限を爭はざる限り、事實に於て政府の管掌區域は軍令の發布毎にそれだけ縮少されるわけになる。之を以て直に軍部の不當なる進出と云ふ可らずとするも、政府は退嬰を以て當然の事態と甘んずべきにあらざるはまた申すまでもない。

(六)更にモ一つ怪訝に堪へざるは、統帥事項の何たるやに關し陸海軍の間に見解の往々一致せぬことである。例へば海軍大學校令は勅令(大正七年)であり陸軍大學校令は軍令(大正十二年)である。陸軍と海軍とは同一に見られないなどの牽強附會の辯明もあらんが、類似の施設であり乍ら海軍に在て勅令によるものの陸軍に於て軍令の形式を取るものは外にも澤山ある。海軍に在て軍機軍令に關せずと認むるものを、何故に陸軍に於ては統帥事項と認めねばならぬのであるか。是に於て私は疑ふ、軍令の制度あるに依て軍部の特權は不當に擴張されて居るのではあるまいかと。

三

以上私は帷幄上奏の制度は現代憲法政治の系統內に在て其自身根本的に再吟味せらるべきものであり、且つ現制度の下に於てもその運用上に過誤なからしむる爲めには大に矯正せらるるを要するものであることを說いた。併し乍ら近年輿論の俎上に於て帷幄上奏の制度が痛く難詰せられたのは、右の如き理論上の論點からではなくして、寧ろ此制度の濫用に依る軍閥の跋扈といふ事實に基くものであつた。今度の問題にしたところで、

軍閥跋扈と云ふ考が念頭にあればこそ軍部に對する輿論の追究が烈しいのだ。追究があまりに烈しいから軍部も亦馬鹿に頑強にならざるを得ないのであらう。軍部の見解を政府は如何なる程度に尊重すべきかも重要なる問題だが、問題が單にこれだけの事なら、今現に見る程政界に大なる波紋をえがくわけはない。

所謂軍閥の勢力が一時內政にまで喰ひ入つて居たことは今更呶々するまでもなからう。帷幄上奏の制度の濫用に依り政府の最も惱まされたのは外交の方面である。殊に極東の外交に於て、外務省を代表する者と軍部より派遣された者との行動が動もすれば相表裏し、相手方をして日本に二重の政府ありと譏笑するに至らしめたのも我々の耳目に新なる所である。多くを語る代りに、屢々台閣に列したことのある政界の某名士が數年前或雜誌に公表せる論文の一節を次に示さう。「……元來陸軍ハ陸軍ノ必要ノタメニ世界ノ各地ニ特派ノ機關ヲ置イテ居ル。而シテ是等ノ機關カラ來ル所ノ情報ハ參謀本部ニ集中スルノデアル。參謀本部ハ夥多ナル報告ヲ世界ノ各地――殊ニ極東ニ於ケル各方面ヨリ得ツヽアルノデアル。此ノ情報ハ直接ニ參謀本部ニ集マリ、而シテ是等情報ノ發セラレル土地ニ駐在セル外交機關等ヲ經由スル事ハナイノデアル。是等ノ情報コソ、所謂軍閥ナルモノガ外交機關ニ對シテ物言ヒヲ付ケル根據トナルモノデアル。之ニ由ツテ陸軍ノ首腦者ハ其報告ヲ基礎トシテ外務ノ外交機關ヲ壓迫スルノデアル。而シテ外交ノ進行卽チ外交家ノ協調トカ世界ノ大勢トカカラ割出シテ進ムベキ微妙ナル外交作用ヲ制壓シテ、不自然ナル國家機關ノ發動ヲ促ストイフ事ガ往々アルノデアル。斯クノ如キ弊ハ恐ラク歷代ノ外務大臣ニシテ之ヲ經驗セナカツタ者ハ一人モ無イト言ツテ可カラウ。外務大臣ヲ經驗シタル所ノ二三ノ所謂前外相ガ相會シテ往事ヲ語ル場合ニ、常ニ其話頭ニ上ルモノハ、陸軍軍閥ニ壓迫セラレタ苦痛デ持チ切ルトイフノデモ、略ボ其間ノ消息ガ知レルデアラウ。」

右は數年前の所記であるが、最近でも同じ樣な事の屢々繰返されたことは、例へば田中內閣の對支外交の上にも歷然として居る。

いづれにしても帷幄上奏の制度は近代の歷史の上に於て餘りにひどく又餘りにしばしば濫用されて居る。その爲めに如何に政府乃至日本其自體が迷惑をし損をしたか知れない。この苦がい經驗は、假令この制度が本來妥當なものとしても、實際上に於ける改廢廓正を叫ばしむるに十分の理由を提供するものである。況んや軍部それ自らが今日なほ此點に關し些の反省の跡をも示さざるに於てをや。

問題解決の私案

新聞の報ずる所に依れば、財部海相と加藤軍令部長との折衝

はなか〳〵困難で、或は軍令部長の辭職を見るに至るかも知れぬと云ふ。さりとて今更政府は之れまでの立場を一擲しておめ〳〵軍部に降參するわけにも行かぬ、是に於て何とか軍部の面目を立てゝ所謂圓滿に局を結ぶの方案はないかと云ふことになる。面目さへ立てて呉れればと加藤軍令部長の態度も滿更でないと申すものもある。うまく行けば是れも亦政界の策士に取て一つの解決案には相違なからうが、併し斯かる姑息的妥協は一時當面の紛糾を始末するに過ぎずして、軍部對政府の根本問題は依然未解決の儘に殘されるのである。次に掲ぐる解決私案は、右の様な當面の急に役立たせようとするものではない。

解決策について詳細に說述することは別個獨立の一論文を爲す程の紙數を要する。こゝに之を書き續くるは適當でないから、そは別の機會に讓ることにする。次にはたゞ私見の綱目だけを列擧して本小篇の結論に代へようと思ふ。

(一)此際を機として「政府輔弼の範圍は廣くして亘らざるなき」の原則を確立すること

軍事に限つて素人に關係さしていけないとする理窟はない、文人のみに委かすべきだと云ふなら、政治的治外法權區域を爲すべきもの豈ひとり軍事に限らんやだ。殊に軍事を以て天皇の特權なるかに觀じ、之を政黨政治家の蹂躙に附するは國體の尊嚴に關すなどとの說に至つては、かの天皇中心主義を楯として議會中心主義を排擊せんとするの僻論と同じく、現代の今日に横行を許すべき議論ではない。兵馬の事が天皇の大權なるが如く、行政も裁判も敎育産業の事も等しく天皇の大權に屬せざるはない。而して之等すべての大權が大臣宰相の輔弼によるべく且つ其の輔弼機關は常に必ず統一なかるべからずと云ふが、現代政治の最も重要なる根本原則である。輔弼機關の統一と云ふことは必ずしも文人を忌避すると云ふことではない。文人の專門的技能を最も有效に發揮せしむるの方途は、政府監督の下に於ても立派に組織することが出來るのである。

(二)右の原則を完全に確立する爲めには現行制度の上に種々の改革を施す必要がある。

この事も本稿を熟讀せらるれば略ぼ見當がつく筈である。試みに其の重なるものを列擧すれば次の如くである。

(イ)軍部大臣文官任用制の採用　軍部を內閣の監督の下に置く爲め此制の採用は實際上最も有效である。それだけ軍部に取て此制の採用は致命傷であり、從て現行武官專任制をば最後の牙城として彼等の極力死守する所以である。但し文官任用制採用の理由は軍部を內閣監督の下に置く爲めばかりでないことは勿論だ。

(ロ)帷幄上奏制の廢止　政府以外に最高輔弼機關を作り國權の發動を二途に出でしむ可からざるが故である。

(ハ)軍令の廢止　上記二項の成立の當然の結果でもある

が、假りに上記二項の成立なしとするも、軍令の廢止せざるべからざる理由は既に本稿中に詳しく述べた通りである。

猶ほ以上の改革に關連して(イ)新に統帥事項輔翼機關を政府監督の下に設け其の專門的技能を十分に發揮せしむる設備も必要だ。同時に軍部官憲に對しては例へば司法官の場合の如く特に身分上の保障を與へるもよからう。(ロ)又軍事に關する特別の諮詢機關を設くべしとならば、嘗きに發布されたことのある防務會議(大正三年六月)の如きを再興するもよからう。之は內閣總理大臣の監督の下に「陸海軍備ノ施設ニ關シ重要ナル事項ヲ審議ス」るもので、總理大臣の外、外務・大藏・陸軍・海軍の四大臣に參謀總長・海軍軍令部長を加へて組織さるるものであつた。私はその時々の情勢に依ては之に貴衆兩院議長を參加せしめたいと考へて居る。

(三)現行制度の改革が差當り面倒ならば少くとも(イ)軍令審査權を政府に收め(ロ)帷幄上奏に由る輔翼は純然たる軍內部の參畫に止らしむるの二點を確實ならしめたい。

軍令規定の內容が果して正確に統帥事項であるかどうか、之を軍部自身の判斷にまかして置くのは間違つて居る。軍部の承認を得るや否やは別論として、一應政府に之を爭ふの權利はある筈だ。軍機軍令は事秘密に屬すとは云ふものの、既に軍令として發布されたものに付ては最早秘密を云々すべきであるまい。軍令の成立其自體に干與しようと云ふのではない、作られたるものの當否を判定すると云ふのである。政府が之を審査するのは必ずしも軍令の性質を傷けるものではないのである。猶ほ審査の衝に當るものの法制局であるべきは論のない所であらう。

軍部の特權が政府を壓して居たのは一に全く慣行の情勢による、制度の上に根據があるのではない。既に(一)に示した樣に政府がまた軍事に關する自家の輔弼責任を主張すれば、帷幄上奏に由る輔翼は之を支持する諸規程の示す通り自ら純然たる內部の參畫たるに止まらざるを得ない。從て內閣の議を經ずして之を外部に發動せしむることは出來ぬことになる。但し內部の參畫に止まるとしても、既に上奏裁可を得たものなる以上、政府は全然之を無視することは出來なからう。けれども政府の輔弼は性質上本來自由無碍のものである、軍部の輔翼が政府輔弼の條件をなすべきでない。是に於て政府は如何の程度に軍部の意思を顧慮すべきやの問題を生ずるも、併し政府が自由無碍の立場に據つて輔弼の責任を完うすべきだとするの原則には、些の動搖をも許すべきではない。

斯く論じ來ると、殘る所は我が現行國法の系統中に在て政府と軍部との關係を如何に解釋するかの一事である。これは規定の上に明文なく、學說として未だ十分の研究がつくされて居ない。今度の問題を機としてこれから段々諸學者の研究が公にされるだらう。

左翼演劇は何處へ往く

佐々木孝丸

丁度一年前の去年の四月「心座」の左翼化と築地小劇場の分裂、そしてそれに續く兩築地劇團の急進化を機として、我が國の劇壇は一つの大きな斷層地震に見舞はれた。

此の斷層地震はその時まで薄弱な我が國のブルヂョア自由主義の地盤の上に立つて、兎も角も歌舞伎や新派と對抗して細々と存在して來た新劇運動を根こそぎにぶつ倒してしまつた。

そして其の新劇の擔當者であり、代表者であつた諸劇團は他のより堅固な發展性のある地盤、即ちプロレタリア階級の鬪爭の地盤の上にのみ更生する事を許された。

分裂した兩築地劇團が其の分裂に際して互ひに相手方の態度を「反動化」或は「似而非左傾化」を以て難じ其の後の實踐に於て、競つて社會主義的な諸作品を上演し、從來の無定見な藝術至上主義的な態度を棄てゝ、兎も角も、プロレタリア的な見地に立つた社會批判人生批判にまで進み出した事は、劇團自身の眞の意圖の如何に拘らず、其の客觀的條件に依つて課せられた必然的なコースであつた。これまでの獨りよがりの演劇運動の先驅者としての誇りを捨てゝ左翼演劇の佛門に降る以外には、彼等に取つて此の左翼化の道こそは唯一の道であつたのだ。

何が此の客觀的情勢を形作つたかに關しては、既に其の當時多くの人々が論じ盡した。それ等を今約言すれば、先づ第一に日本の資本主義が變則的な發展を遂げた結果、其の薄弱な自由主義の上に自分自身の演劇を築き得なかつた事、そして所謂新劇は何等の確固たる階級的地盤を持ち得ずして、常に氣紛れな小ブルヂョア・インテリゲンチャの壞れ易いおもちやであつた事等である。第二に斯る社會的根據の上に立つた新劇が可成りの永い歴史を有するに拘らず、何等の發展性を持ち得なかつたばかりでなく、最近に於ける社會情勢、即ちいよいよ増大する資本主義の世界的××とつのり行く階級鬪爭の尖鋭化、そしてそれに伴つて此の問題に關して特に重大な意義を持つ小ブルヂョア知識層の左翼化等であつた。築地小劇場が創立された當時、その時分の尖端的なインテリゲンチャの輿望をになつた築地の新人達は、殆ど同時に出來上つた歌舞伎座のばう大な豪華味な其の表玄關を横目でにらんで、「もう直きあの小

居をひ干しにしてやるんだ」と豪語し乍ら、意氣昂然たるものがあつたさうだが、事實は皮肉にも毎晩芝居がはねて歸る道すがら、歌舞伎座の玄關にはこれ見よがしに賣切れの立て看板が突立ち、其のかげから觀客がぞろ〳〵流れ出て來るのに對して、自分の方はどうかと云へば五百人の定員をさへ、滿たすことはまれな有樣であつた。そして此の狀態は其の後の五年間を通じて良くなる所か、分裂の直前頃は毎晩平均二百人が普通だつたとさへ云はれて居る。それはその筈だ。灰色の小屋の外では日に日に激しく階級闘爭は渦卷いて居る。そして其の小屋の中でやられて居る芝居は、是とは何の關係もない陳腐な、其の癖しかつめらしいナンセンスだ。敏感な氣力のあるインテリ達はどん〳〵階級闘爭の渦の中に飛び込んで行くし、仕樣のない馬鹿々々しいボーイやガール達はもつとシックなもつと陽氣な遊び場へ行つてしまふ。築地でさへもが此の有樣だ。他の多少インチキな新劇團なんか推して知る可きのみである。

　そして最後に、初めから明確な階級的基礎の上に立つて苦闘を續けて來たプロレタリア演劇は、そして其の東京に於ける唯一の擔當者である左翼劇場は、自らの闘爭の中から其の獨自の技術を鍛え上げて、益々勞働者及び急進的インテリゲンチヤの支持を昂め、社會的にも其の存在を否み難いものにして行つた。

　以上の樣な原因が一緒になつて、去年の四月に新劇運動を一擧にしてペシヤンコにしたあの斷層地震を惹き起したのである。

　心座、兩築地、そして新劇協會までもが相率ひて「新興階級」を目指して立直らうとした。

　そして其時以來「新劇」といふ言葉は其の現實的な内容を失つて其の代りに「新興演劇」とか「左翼演劇」とか云ふ名稱が「プロレタリア演劇」と同義語の如く、而も一方もつと複雜なそしていさゝか兩階級の側に氣兼ねした樣な意味を以て用ひられ出し、現在未だに用ひられつゝある。

　これは無理からぬ事だ。一應根本方針をプロレタリア演劇の道に向つて定めても新劇から轉向した是等の諸劇團には、餘りに根強い過去のプチブル的殘存物があらゆる點にからみ付いて居る。其の仕事のあらゆる基礎は未だ決して明確にプロレタリアートの上に置かれて居ないし、又今直ぐには置かれ得ない。

　名稱のあいまいさは事實のあいまいさを現はして居る。

　事實是等の諸劇團は一齊に威勢よく看板を掛け代へた。しかし難しい仕事は寧ろ其の後の始末であつた。

　客觀的狀勢は新劇を全く行き詰らせた。そして彼等の前にはプロレタリア演劇の道しか殘されて居なかつた。然し此事は決して彼等がプロレタリア演劇へ進むにいゝ主觀的條件を備へて居る事を意味して居ない。劇團の構成人員のイデオロギー的淸算。非民主々義的なギルド的な劇團組織の改正。祕密主義的な利益配當や經營の方針の變更、等はなさる可くして却々爲し難い仕事である。特に最後の一項は既に職業劇團の形式を備へて居た兩築地劇團に於て困難な問題となる事が豫想された。困難は更にそれ計りではない。我が國のプロレタリアートが如何に文化的に目覺めたとはいへ、又インテリゲンチヤが如何に左翼化したとはいへ、そして又左翼劇場が如何に大衆の支持を得て居るとはいへ、それは

唯一つの左翼劇場の年二三回の公演が辛ふじて滿員になつたに過ぎない。

　プロレタリア演劇の途に轉向したからといつて、其の事は直ちに其の劇團の經濟的存立を安易なものとならしめるものとは考へられない。そして此の事も亦、特に職業劇團或は半職業劇團としてやつて來た築地や新劇協會に於て重大な意義を持つて來る問題である。

　更に又是等の劇團の方向轉換は、右に述べた樣に決して最初から嚴密な階級的見地から爲されたのではなく、止むを得ざる客觀的情勢に押された結果であつた。ともすれば新劇時代の「劇團愛國主義」が、情勢の正しい理解とそれに對する正しい決意とを妨げるのである。而も未だ新しい道に向つて足並の揃はない、各劇團の內部的組織が最も強く、最も容易に結び付き得るのは唯此の一點であつたが爲に、此の事は又新演劇の發展の上の大きな障害となり得るものであつた。

　プロレタリア演劇の途上に於て、是等の新興諸劇團の前に橫へられた大きな障害は、小屋の問題とか脚本や檢閱の問題と云ふ樣な外部に表はれた事と共に又、斯る內部的な問題の上にあつたのだ。それは外からの批判とか時々の技術的の援助とか丈けで、克服される樣な生易しいものではなかつたのだ。

　他の劇團の中に殆んど無理押しにオルガナイザーを派遣したり、左翼的なブロックを作らせたりした左翼劇場のやり方を陰謀主義と非難した人々には、斯る情勢を察知する事は出來なかつた。

　さて以上の樣な數多くの障害を手足にぶらさげて、新興劇團はその「新興大衆への道」にスタートを切つた。

　しかし、それ等の劇團が一と足はせられて居ることなく如何には一般の人々の眼にははいらなかつた。そして其の華々しさが人の眼についた。抜目のない興行資本家は其の食指を動かした。そして劇團築地は松竹の庇護の下に本郷座を根城とし、新築地は其の同じく未だに其の獨立を保つて居た帝劇と提携して其の劇場に出演した。新興劇團のスタートは此の事に依つて一層華々しく彩られた。ゴリキーの「母」や小林多喜二の「蟹工船」がけんらんたる帝劇の舞臺に上せられた。本鄕座の廊下には、あらゆる階級を表すあらゆる服裝の觀客が雜然と蝟集した。

　此の新興演劇の華々しい進出は、既に長十郎や寛猿の心座の運動に依つて腕をむづむづさせられて居た歌舞伎界の新人俳優達をたまらなくした。そして遂に十一月、八百藏、小太夫、福右衞門等に依つて大衆座が結成された。因襲に依つて固められた歌舞伎王國の牙城は遂に其の一角を突き崩された。

　此の樣な狀態は大體今年の一月頃まで續いた。左翼演劇は新劇の轉向の餘勢を驅つて息をも繼がせずに上向の路をたどつた。それは先づ左翼劇場の「全線」の成功に始まつて新築地の「母」「蟹工船」「西部戰線異狀なし」「蜂起」劇團築地の「吼へろ支那」「西部戰線異狀なし」大衆座の「筑波秘錄」そして又左翼劇場の「太陽のない街」まで續いた。

　此の儘で事が進んで行くものなら、プロレタリア演劇の仕事も存外甘いものである。だが、さうは問屋でおろさない。やがて必然に來る可き苦難の時期が徐々に押し寄せて來た。

　先づ第一に、華々しさに釣られて帝劇や本鄕座にやつて來た好奇的な

觀客は、好奇心を充分滿足させて引き退つた。左翼劇場を除く各劇團の從來の支持者達（大部分はインテリゲンチヤ）の多くの部分は勿論段々離れて行つた。そして新しい支持者は未だ充分に獲得されない。料金を三十錢に引下げても、勞働者の觀客は左翼劇場を除いては未だ觀衆の中心的地位を占めて居ない。

第二に脚本難である。さう〳〵ふんだんにいゝ脚本がある譯がない。左翼劇場でさへもが、未だにその事で悩まされて居る。劇團の數がふえても作家の數はふえない。プロレタリア小說の脚色が盛んにやられ出した。だがこれも無盡藏ではない。

第三に政治的壓迫である。

これは一には暴力團、或は直接には官憲の興行資本家に對する干渉脅喝等として表はれ、他方、脚本檢閲のみでなく、更に上演された芝居の演出にまでも傍若無人に下される壓迫の手である。此の事は初めから覺悟されて居る事ではあるが、こちらの力が強くなればなる程、そして大衆の上に及ぼす其の影響の大きくなればなる程、壓迫の手は益々苛酷に、益々周到に、我々を押しつけ様として來るのである。

以上の様な様々な困難と闘ふ爲には、我々は先づ我々自身の陣營を整備しなくてはならない。それには新興諸劇團相互の連絡を緊密にして、個々の劇團、そして其の根本方針をプロレタリア演劇全般の基礎の上に置かしめると同時に、又各劇團の内部に殘存する前述の様な多くの新劇時代の名殘りをたゝき出してしまはなければならない。此の必要に應じて「新興劇團協議會」が結成された。仕事は困難だ。併し愚圖々々しては居られない。そしてその爲には、我々の陣營の精力を最も有効に用ひなければならない。戰線の擴大よりも寧ろ縮小が必要になつて來た。劇團の數の多少よりも運動全體の質の充實が問題となつて來る。

斯う云ふ時機に際して心座が解散を決意した事は、當然の事であり又必要な事であつた。心座は元來長十郎笑猿等の歌舞伎俳優と、實に雜然たる傾向を有する五六人のインテリゲンチヤとの結合より成つて居た。そして、此の同人組織は劇團築地や新築地の職業的新劇團の組織よりも一層プロレタリア演劇の集團主義的様式に順應し難いものであつた。轉向以來急速に組織の改革が行はれたとは云へ、それが實際的な効果を持つには尚ほ永い闘爭の經驗を經なければならなかつた。運動全般の强化の必要は、心座を將來有力な左翼劇團たらしむる事よりも、寧ろ現在其の爲に費される精力を、他のより有力な劇團の充實の爲に振向ける事を必要とした。心座の全員は數回の討議の後、よく此解散の必要と意義とを了解して、殆ど全員一致を以て是を決行した。そして座員の内で種々な事情で演劇運動から身を退いた人々を除いては、それ〴〵左翼劇場、大衆座、新築地等に分屬して有力に活動を續けて居る。心座の解散は文藝戰線派の指導の下に轉向のスタートを切るや否やぶつ倒れて意味なく消滅してしまつた新劇協會の場合とは正反對の内容をもつものである。

さて心座の解散といふ犠牲打も、左翼演劇の危機を直ちに切抜ける事は出來なかつた。職業劇團としての兩築地は其の劇團維持の經濟的條件に縛られて忽ちに仕事の困難さを感じて來た。かてゝ加へて帝劇を買收して興行トラストを完成した松竹は、市内の目星しい大劇場を一手に收

めることに依つて、一時的な左翼的な人々が去つてしまつた新興劇團に對して、其の假面を脱いだ。最初から左翼劇場や新興劇團協議會の忠告を無視して、松竹の庇護を受くる事にのみ汲々として他に何等の對策を準備しなかつた劇團築地は、忽ち途方に暮れてしまつた。そして遂には彼等の興行師的策謀に依つて技術者の一團が引つこ拔かれてしまつた。それでも彼等は目覺むる事なく、ダラ幹北村・土橋等の意の儘にあやつられて事毎に小ブルヂヨア的な馬脚を現はし、遂に「反動」の烙印を押されて協議會を除名されるに至つた。

斯くして心座は解散し、劇團築地は「反動」の泥沼におつこち、殘つたのは新築地と心座解散の直後協議會に加盟して、一層決意を鮮明にした大衆座と、それに左翼劇場の三つである。

新築地は其の內部組織の上に、未だ分裂當時の同人組織的な多少ギルド的な色彩を殘して居るが、左翼劇場と緊密に結ぶ事に依つて、幾多の危機を切り拔けて來た。そして兎も角も左翼劇團としての面目を保つて居る。しかし是には沒落した劇團築地と較べて劇團員の人數が少く、從つて經營の點で割に樂であつた事と、又劇團の統制に便利であつた點も考へなければならない。それに何と云つても築地の小屋を背景に持つて居るのは興行資本家に對しても一つの強味である。此の小屋と劇團とは夫自身連關を持つて居ないが、何と云つても人間的な關係から安んじて自分の根城にきめて居られるのだ。此の小屋が何時まで劇團で使へるのかは當事者にも判然として居ないが、當分腰を据えて居る事になると思はれる。勿論此の小屋は新劇時代は兎も角、今となつては決していい條件を具へて居ない。定員は[illegible]むけではしようがたたない。しかし兎に角自由に使へる小屋を持つて居ることは強味である。

大衆座は座員の殆んど全部が歌舞伎劇の人々であり、松竹の傭優であると云ふ點で、特別な色彩と又歌舞伎演劇の再批判と其のプロレタリア演劇への攝取と云ふ特別な任務を持つて居る。勿論松竹は斯う云ふ人々の左翼的進出を喜ぶ筈がない。あらゆる機會にあらゆる方法でデマが飛ばされ脅迫が加へられる。しかし指導的な地位に居る・八々の結束は、既にそんなもの丶前に閉口たれる様な弱い物ではない。そして旗擧公演の「築波秘錄」の成功の氣を負うて此の六月末、市村座で第一回公演を持つ可く準備中である。

そして左翼劇場はその苦鬪の歷史と益々盛んなる勞働者大衆支持とに依つて常に是等の新興劇團の指導者としての任務を遂行して來た。

今後の社會情勢の××は、左翼演劇の上に決定的な障害をもたらすことを充分豫想せしめる。其の時その運動は一時社會の表面から姿を消さゞるを得ない樣な運命に出會ふであらう事も亦充分に考へられる。しかし其の時、演劇は劇場を出て勞働者農民の間で他の場所を見出すだらう。現在活動して居る一つ一つの劇團が、どんな任務を持つてどう云ふ場所で其の階級的な仕事をするかは、今豫言することは出來ない。唯其の時最もよく活動し得る爲には、現在あらゆる試練に堪へてプロレタリア大衆により近くより廣く接近する事以外に方法はない。

此の最後の時までは、小屋はどこにでも見出し戲曲はどうにもして創作し、我々は我々の仕事を押し通し得る覺悟と自信を持つて居る。

法律の反動化と盗犯防止法

松谷與二郎

一

盗犯防止法が今度の臨時議會に提出せられ殆んど無審査と云つてよい位何等の研究も討議も行はれず、すら／＼と此極惡非道の法律が議會を通過した。實に無法と云はうか、言語同斷沙汰の限りと云ふのは此事である。こんな亂暴な法律が議會に提出せらるゝのに、國民の無關心にも驚くが、之をすら／＼と通過せしむる議會そのものゝ怠慢と反動化に對して、吾人は斷じて之を忍容し假借することが出來ないのである。

私は此議會の反動化と怠慢を責むる前に、如何に此法案が亂暴であり極惡非道であり、盗犯防止に名を藉りて實は勞働運動××の假面を被つた反動的立法であるかを立證して見よう。

二

盗犯防止法第一條に「左の各號の場合に於て自己又は他人の生命身體又は貞操に對する現在の危險を排除するため、犯人を殺傷したるときは刑法第三十六條の防衛行爲にあたるものとす。

一、盗犯を防止し、又は盗贓を取還せんとするとき。

二、兇器を携帶して、又は門戸牆壁等を踰越損壞し、若くは鎖鑰を開きて人の住居又は人の看守する邸宅建造物若くは船舶に侵入せんとするとき。

三、故なく人の住居、又は人の看守する邸宅、建造物若くは船舶に侵入したるもの、又は要求を受けてこれ等の場所より退去せざる者を排斥せんとするとき。

と規定し此條件を具有する場合は正當防衛として之を處罰しないと規定したのである。

於玆疑問となるのは此盗犯防止法と、刑法第三十六條の正當防衛との關係である。刑法第三十六條には「急迫不正の侵害に對し、自己又は他人の權利を防衛する爲め、已を得ざるに出でたる行爲は之を罰せず」と規定しありて、一體本法とどこが違ふのであるか。即(1)刑法第三十六條と本法とは其適用範圍が全然違ふのであるか、換言せば盗犯防止法に規定せられてある事項は刑法第三十六條では全然其適用を拒避せられるのか。(2)又は本法は刑法第三十六條でも適用せらるゝが只其適用

範圍を少し擴張したに過ぎないのか。(3)それとも本法が刑法第三十六條とは全然其適用範圍は同一であるのか。若し前者の1、2の場合とするならば本法が設けたことに意義があるが、後者(3)の場合であるとするならば、それは全く蛇足に過ぎない無用の規定であると言ひ得るのである。依て先づ刑法第三十六條の正當防衛とはどんなものであるかを一應研究する必要がある。刑法第三十六條には「急迫不正の侵害に對し自己又は他人の權利を防衛する爲め已を得ざるに出でたる行爲は之を罰せず」と規定してあつて、侵害者に對し反撃を加へ得る場合は

(一)他人の權利即身體生命自由財産に對し侵害行爲のあつたこと。

(二)其侵害は急迫で、官憲其他の救助を求むる暇なきこと。

(三)其侵害は不正であること。

刑法第三十六條の正當防衛たるには此三條件を具備することが必要とし、此條件を具有する場合は被侵害者は無條件に侵害者を排撃し得るので其者を殺傷することすら出來るのである。從て其侵害が如何に輕微のものであつても之に對し無條件に之を反撃しうるのである。假令ば泥棒が靴片足を持逃げしようとした場合にこれを取還する爲めには其者を殺傷することも出來るし、又他人の身體自由貞操に對し謂れなく之を拘束蹂躙せんとする者に對し、之を反撃殺害することも出來るのであつて、其侵害に依て受ける程度と、反撃者の受くる被害の程度の如きは之を問はない。と同時に又一方其侵害の程度(時間的關係)についても侵害の必然性ある場合には勿論之に對し反撃行爲を敢行しうると云ふことは現今に於ける我國刑法學者の通說であり、判例の一致したる見解であるのである。

三

之が盗犯防止法第一條の

(1)盗犯を防止し又は盗贓を取還せんとし。

(2)兇器を携帶し又は門戸牆壁を踰越損壞し、又は鎖鑰を開きて人の邸宅に侵入せんとする場合に、其時の狀況が自己又は他人の身體生命貞操若くは財産が危險に曝されつゝあるときは、其侵害者に對し反撃を加へ殺傷することも出來ると云ふのが本法の骨子である。

果して然らば、刑法第三十六條は本件の如き場合は全部之を網羅しありて、特に改めて本法を制定する必要がないのである。

之を舊刑法に就て見んか、舊刑法には明に本條と同一の條項ありたるを、新刑法制定當時如斯例示的規定は不必要なりとし、之を削除し、刑法第三十六條の抽象的文字に書き改めたのである。已に舊刑法の本法と同一の規定を必要なしとして之を削除したる以上、立法技術の進歩したる今日、更に古臭き舊刑法の條文其儘の字句を用ひ、更に盗犯防止法と銘打て改めて之を立法する必要何處にあるのであらうか。

此點に關し、衆議院に於ける本法の特別委員會に於て、政府委員たりし泉二博士は私の質問に對し「要するに本條第一項は現行刑法第三十六條の解釋をしたものであります」と明言し、更に本法は刑法三十六條と何等變りなく、只三十六條を一般大衆に分り易く解釋說明したに過ぎない旨を力說して居るのである。

何と驚き入つたる答辯であらう。法律は大學の教授ではない、況んや
教科書でもない、法律を一般大衆に分り易くする爲めならば他に幾多
の方法がある、世人は說教强盜に怖(おぢ)へて居る時司法省よりして刑法第
三十六條の趣旨を解說說明して之を發表するも可なりである。又他の
學者の名を以て其見解を一般大衆に示すもよいではないか、然るに政
府は全然此種の手段に依らず、已に學說判例の一定したる刑法三十六
條の解釋を、新に立法の手段を採り之を一般大衆に教示するが如きは
愚も甚だしく、如斯は全く立法を愚弄し、法律の神聖を汚するの甚だ
しきものと言はざるをえないのである。政府は何故に如此愚を敢てし
てまで本法を立案したのであらうか。

茲が政府の――敵本主義――驅引の存する所で、世人が說教强盜に
怖へて居る心理狀態を巧みに捕へ、表面盜犯防止の爲めの正當防衛の
規定の如く見せかけて、其裏には勞働運動××の反動的立法を潜めて
置いたのである。

何と云ふ巧妙にして横着なる遣り方であらう。以下少しく其面皮を
剝き其正體を曝露して見よう。

四

盜犯防止法第一條第一項の三には「故なく人の住居又は看守する邸
宅建造物若くは船舶に侵入したる者、又は要求を受けてこれ等の場所
より退去せざる者を排斥せんとするとき」と規定しあつて盜犯以外の
住居侵入者にも盜犯侵入者同樣、正當防衛權の行使が出來ると云ふ規
定である。何と云ふ無茶な法律であらう。更に不都合なるは同條第二項
の規定である「前項各號の場合に於て、身體又は貞操に對する危險あ
るに非ずと雖ども、行爲者が恐怖、驚愕、興奮、又は狼狽に因り、現場
に於て犯人を殺傷するに至りたる時は之を罰せず」との規定である。何
と云ふ極惡無道の法律であらう。是れが勞働運動××の規定でなくて
何であらう。假りに一例を示せば鐘紡が戰爭當時は十割以上の配當し
て居た。其後も七割乃至三割五分の配當を續けて來た、處が今度の不景
氣で今迄の三割五分の配當が出來ない、依て職工の賃金を四割値下す
ると職工側に申渡した。驚いたのは職工で、一割や五分の減給ならば
仕方がないが、四割とは非道過ぎる――と云ふので代表者を選定して
會社重役に面會を求めた。處が重役は面會を拒否した。そこで職工側
と二三押問答した、此場合に重役が興奮、狼狽、恐怖、驚愕した場合
に机の抽斗からピストルを出してドンと一發、職工を射殺してよいと
云ふ規定である、何と云ふ無茶な法律であらう、此位反動的な極惡非
道の法律が又とあらうか。政府では此點に關し、最近司法省の名を以
て盜犯防止法の立法精神と題し、極力此點に關し、辯明之れ努めて居
るのみならず、泉二博士談として此點に論及し、「勿論行爲者が恐怖驚
愕興奮狼狽よつて爲された爲でなくてはならない、私は狼狽して居ま
したと云ふ人があるかも知れぬが、それを其儘信用する譯に行かぬ、そ
れには裁判官の判斷が必要である。周圍の事情が適合しなければ如何
に口實を設けてもそれは駄目で。正當防衛とは認められぬ」と云ひ、極
力此點の非難に對し辯明をして居る。成程それは泉二博士の言ふ通り

だ。併しながら此處に爭鬪の餘り職工が射殺したと稱する事件が起ると假定する。處がソウでないと主張すべき地位にある職工は死んで居るのである、死人に口なしである、而して其處に居る證人は皆會社の使用人斗りである、此場合に、其射殺は正當防衞でないと主張する者が果して居るであらうか、況んや狼狽したとか、せぬとか、興奮恐怖と云ふ様なことは、射殺者の心理現象ではないが、而も此心理狀態を解剖すべき官憲は、本法を制定した當局者ではないか其判斷の結果や知るべきである。況んや、其心理狀態を解剖して立證し之を提訴するが如きは、其證據力の點より見て殆んど不可能で、結局私は狼狽しました興奮しましたと云ふ、一應の辯解が何れの場合に於ても、無條件に肯定せられざるを得ざるに於ておやである。

何れの點から見ても、此法律位無茶で反動的な規定はないのである。觀方に依つては治安維持法以上の惡法とも云ひ得る。治安維持法は善かれ惡かれ、其適用は國家の權力で執行するのである、然るに此法律は資本家の反動性を煽り、資本家自身をして勝手に私刑の執行を爲さしむるものであつて、此位殘酷にして無法な法律はないからである。

是れは丁度昔の斬捨御免と何等異なる處がないのである。否なそれ以上である。昔の斬捨御免には一定の規範があつた、町人が武士に對して喧嘩を賣掛け無法の振舞をしたとか、家名に關はる侮辱を與へたとか、其他已むに已まれぬ原因の有することを必要とした。只一時の感情や、私怨や、興奮狼狽の餘り、殺傷した様な場合は、嚴重な處罰を免れなかつた、況んや恐怖驚愕に依り、相手方を殺傷した様な場合は、切腹させられたのである。然るに本法の場合には恐怖驚愕したれば況としては逃走し會合に闘はせなかつたと云ふ様な事柄と、本人の興奮、恐怖、驚愕、狼狽と云つた様な主觀的な條件用のみで、他人を殺傷することすら出來るとふのであるから、斬捨御免を通り越した、實に非人道的な惡法であり、資本家に取つて是位有效な便利な武器はないのである。

之と反對に勞働者側に採つて此位恐しい、危險な法律がないのである。今後の勞働運動は此法律が起點として、更に深刻化し、勞資の抗爭は一層の激甚を極むるであらう。

五

本案が政府から最初貴族院に提案せられ、採決の上衆議院に回附せられたのは會期も半ばを過ぎる頃であつた。資本家と貴族の集合團體たる貴族院が、殆んど無審査と云つてよい位に此案を通過せしめたことは、當然過ぎる程當然のこととして暫く措くも、國民の代表として選出せられた四百名の代議士が、只形式一片の審査で、無條件にすら〳〵と之を通過せしむるに到つては沙汰の限りと云ふべく、議會の九割九分を占むる政友會と民政黨が、如何にブルジョアジーの手先であり、資本家の前衞隊であるかを、雄辯に物語て居るのである。然らば無產黨議員五名は、果して如何なる行動を採つたか。當時無產黨議員中大山郁夫氏は、自己分擔の質問演說が終るや其名演說に陶醉し、其後は殆んど議會に出席せず、又西尾末廣氏は當時錦鷄問題で[illegible]

め居る爲め出席不可能の狀態となり、當時の出席者は淺原健三氏、片山哲氏と、私の三人のみであつた。而して此法案が第一讀會を終了し委員附託となるや、其委員の選定についても何等發言權なき無產黨は一人の委員すら割當られず、淺原氏は他の委員會に出席し居り、私と片山氏と兩名丈けは、漸く許されて右委員會に出席し各委員の發言權漸く質問の機會を得たに過ぎない。而も其質問に對しても、委員長は再三再四之を阻止制限し、十分其意を盡す能はざりしことは、吾々の遺憾に堪へざる所にして、此一事よりするも、吾々無產黨が議會に於て如何に蔑視せらるゝかは想像に餘りある處である。右の如くにして吾々無產黨員は孤立無援、敵の重圍にありながら、比較的善戰したるに拘らず、僅か一日間に委員會を終了し、本會議に掛け、すら〳〵と之を通過せしめたことは（政友會は形式上反對したに過ぎない）吾々の憤滿禁ずる能はざる處にして、如何に既成政黨が横暴であり、資本家の前衞であるかを如實に暴露せるものである。吾々は此法律の反動化に對し、徹底的に抗爭し、其徹回に全力を盡すべきである。

六

最後に私は勞働運動者諸君に告げなければならない重要なる報告がある。それは何であらうか、人を咀はゞ穴二つと云ふ諺がある、政府は此法案提出の目的は勞働運動××が唯一の目的であつた、處が此法案に依て自分自身の手足を縛る結果となつたことである、それは人を逮捕監禁拘束拘留し得る強大の權力を持つ××に對しても、此盜犯防止法が適用せらると云ふ奇現象を呈する場合あることである。憲法第二十三條には日本臣民は法律に依るに非ずして逮捕監禁審問處罰を受くることなしと規定し、身體の自由を保障して居る。而して人を逮捕監禁檢束するには必ずや拘引狀、拘留狀によるか、若くは現行犯の場合に限るのである、此形式を採らず、不法に人を逮捕し、檢束せんとする無法者がある場合には、國民は容赦なく之に對して此盜犯防止法を適用して可なりである。此點に關し議會の本法特別委員會に於ける私の質問に對し、泉二政府委員は明白に答辯して居る、其速記錄の要點を摘記すれば、

松谷　もう一つ御聞きして置きたいのですが、例へば警官が人を逮捕監禁するとか、檢束をするには夫々の法律規定に依らなければならないのであるが、全然そんな法律に基かず、拘引狀も持たず、勝手に他人の家に飛込んで社會運動家などを逮捕して行く、そしてそれに對し警察では、何處彼處の地先を徘徊して道路を妨害をしたから、檢束するとか拘留すると云ふ處分をして居るのである、こう云ふ場合に其警官に對し、恐怖、驚愕、興奮の餘り之を射殺した場合に、本條の適用があると云ふ御考へですか、ないと云ふ御考へですか、念の爲めに一應伺つて置きます。

答　そう云ふ問題は一寸假定に過ぐると思ひます、アナタの御考へでは表面では夜間徘徊したとか何とか云つて、法律に觸れるやうなことを云ふけれども、實は感情的に檢束なり拘留をやるのだ、サウ云ふことはアナタの御判斷が正しいか私は分らぬのであります、若し裁判に

擲けて見て、ソレは警察官は職務を施行したのではなくして、不法に逮捕したのだと云ふことになりますれば、ソレに對して正當防衛をなし得たのでありますから、其正當防衛は正當であると云ふことになるのであります。」

と明快に答辯し、本場合には正當防衛であることを是認して居るのである。換言せば泉二博士の答辯は其檢束拘留が正當なりや、否やは結局裁判上の判断を俟たなければならない、而して裁判所が不當であると判断したならば、其不當の檢束施行官に對して正當防衛を行使し得るのは當爲であると云ふのである。而して前述の如く人を逮捕監禁檢束するには、必ず現行犯の場合か、拘引狀拘留狀に基かなければならないのである、此手續を經ず、他人の身體に拘束を加ふることは憲法違反である、不法の侵害である、若し本件が法廷に現はれ裁判官の判断を受けることになれば當然其不法は認定せられ、此侵害者に對して正當防衛權の行使が出來る、結果となるのである、換言せば法律に基かずして不法に人を逮捕檢束したる場合には何時も本法が適用せらるるのである。如此は恐らくは政府の豫期せざる所であつたらう。勞働爭議の場合に資本家に與へた××が却て政府の手足に××を使はしむる結果となつたとは、何たる皮肉な現象であらう、因果應報とはこう云ふ場合に使用するに最もふさはしき言葉ではなからうか。

私は信ずる、勞働者が、資本家に×へた此鋭利なる武器の奪還を政府に迫る前に、政府自ら此法律の徹回を、餘儀なくせらるゝ日の近き將來にあることを私は改めて玆に斷言するものである。

『文壇アンデパンダン』締切

世界最初の試みである我社の『文壇アンデパンダン』は俄然異常の反響を呼んだ。發表以來此所に壹百日、滿天下注視の下に今十五日を以て締切る。

（やむを得ざる事情のため二三日遲れるが……と特に照會ありし人々の分に限り、便宜、締切後も受附けることにした。）

應募原稿すべて千六百餘篇、更に今〆切日の最終便を加算すれば優に二千を突破する見込である。

原稿は先着順によりすでに豫選進行中である。來々九月號（八月十九日發行）には採用篇を決定發表する運びに到るであらう。惠まれざる作家群出せよ、新人輩出せよ、此の吾等の切願をしてよき實に採り當らしめよ。山の如く積み上げられた原稿を前にして、一同涓ぐましき緊張に支配されてゐる事を特にお傳へする。

一九三〇、六、一五、本誌校了の日

中央公論社出版部

獄中私信

佐野學

拜啓、先日はヘーゲル論理學及び御葉書有難く頂戴致しました。色々御好意を感謝致します。先般のヘーゲル歴史哲學は以前白揚社で見た、クノー・フィッシャーの反譯かと思ひのほか、ヘーゲル自身の著作の反譯で一層結構に思ひました。歴史哲學の方は譯文がスラ〳〵してゐますね、あの本は私も以前少し讀んだから、一層愉快に讀了しました。論理學の方はまだ讀みません。ヘーゲルには隨分古くなつたところ、又吾々と正反對の所が澤山ありますが、なほ吾々を動かすのは、歴史的に見て、彼がマルクスの一歩手前であつたことばかりでなく、彼の思惟方法や發展概念から、吾々がまだ多くを學び得るからでせう、ヘーゲルは歴史は人間の自由の發展過程だと考へてゐますね、彼はこのことを熱病患者の言ひそうな唯心論の立場から言つて居るのですが、吾々の立場からは、これを自然法則の發見、それに從つて自然力の征服又は利用、生産力の發展による人間社會の壓迫制度からの人間の解放といふ風に言ひ直すことも可能です、たゞヘーゲルは極端な觀念論者で、たとへば、ギリシャ人の若干人にしか、自由の意識がなかつたから、若干人しか自由でなかつたと言つてゐるが如き、福本君流の思惟方法の本家です、しかし私等が學校を出た頃にはマルクスのものの反譯すら丸でなかつたのに、今はマルクス・エンゲルス・レーニンの反譯が殆んど有り、更にヘーゲルまで邦譯が出る有樣で、之からマルクス主義理論の研究にかゝる若い人は好都合のわけですね、たゞヘーゲルには克服されねばならぬ方面が非常に多いのですから、それにはやはりヘーゲルを克服したフォイエルバッハ、また其他ヘーゲル左黨の一二人の著作の反譯が必要となるでせう。とにかくマルクス主義理論の研究便宜だけでも世界的

水準に列するのは喜ばしいことです。……刑務所にも春が來て昨日まで三日間は雜煮の御馳走がありました。もう吾々側の人の檢擧のさわぎもなく世間は靜かなことでせう。…………………………御健康を祈ります。先づはお禮まで

草々

一月四日　佐野學

西たい子様

拜啓其の後お變りはありませんか、

小生の獄中生活は相變らず健康で何等變りがないから、まあ御安心を乞ふ。仕殘して來た山の如き仕事を思へば、思はず腕を扼す氣持になるが、愚痴っぽい氣持は更にない。吾々の中からの沒落した者どもの味ふ悲慘な氣持は勿論少しもない。小生は外國で「支那通信」「政治學テーゼ斷片」其他を書いたが、これを入手することは絶望であると思ふ。

ブハーリンの「金利生活者の經濟」の反譯が發行されたら一部差入れてくれませんか、今度きて見ると以前に比べて、よほど差入書籍の制限がある。小生は支那語の原書を大いに讀破するつもりであつたが、既決となつた時にそれに集中することにし、今の中はなるべく、讀み得るものを讀んでおきたいと、考へてゐる、なほ小生は色々の本――哲學、歷史、人類學など――を讀んでおかうと思つてゐるが、一々買ふことは出來ないから知友諸君に拜借する樣にし度いと思ふ。

次に、エッチ・ジー・ウエルズの「歷史の大綱」をずつと以前に僕のほか數人で反譯し「世界文化史大系」といふ名で出版したことがあるし、又この本を北川三郎といふ人が改譯して大鐙閣から豫約で出したのがあるが、その舊い譯の分でも、新しい譯の分でもかまはないが、若し借りられるならと思つてのことだが、これは多分差入可能の本だから救援會あたりに有りはしないかと思ふのです。一度問ひ合せて頂ければ結構です。僕は英氣勃々としてゐます。そのうち裁判もはじまるだらうと思つてゐます。小生は昨年以來、革命家として、恥かしくなく働いて來たし、××主義の旗の下に斃れる事を喜んでゐるので、中々元氣ですし、吾々が法廷に於て何を欲したか、何を欲するかを述べて廷外の大衆に向つて明かにし度ひと思つてゐます。胸の奥に燃ゆる火を守りつゝ悠々暮らして居りますから御安心下さい。こゝからの手紙は東京市内でも二十日以上かゝるらしい。東京からロンドンへは十五日、ニウヨークへは十六日間ときい

てゐるが、中々それどころではない、それに手の穗だくさせた てしまつてゐて、醜々書けもしない。中々緊縮してゐるわけであらうが、手紙を書くことを楽しみの一つにしてゐる吾々には堪つたものでない、なほ小生は頗る頑健、四十近くになつて、次第に底力の出ることを感じる事切です。

佐野學

××××様

其の後御無沙汰しました。御變りありませんか、御健勝にて御活動のことでせう。三・一五も早くも二週年を迎ふること〻て感慨淺からずです。裁判も段々に始まるでせう。

日本の資本主義はなほ上向線にありや否やは具體的な面白い問題ですネエ、生産力は益々高まつて行くが、此れは資本家どもにとつては必ずしも、資本主義の上向を意味しません、他方に於て此の高まり行く生産力は社會主義の物質的條件の益々大きくなるのを意味するが、資本主義に一番大事の利潤は、この頃ひどく低下しつゝある。殊に利潤率の低下を補つてゐた超過剩利潤も支那革命のために、相對的に落下して行く傾向にある。一定程度に必要なる過剩人口は必要以上になつてゐる、大衆の中の食へなくなる層が増えてゐるし、農業恐慌は益々慢性的である。資本の生活は益々困難的であるやうだ、今また會社を刻々にやつて行けば、生産力はなほ躍進し、利潤の低下も一定程度には喰ひとめられるから、益々制限的な意味で日本資本主義はなほ「上向」線上にあると言へるだらうけれど、内部的矛盾は益々激化する、日本の不賢明なるブルジョア共がこの歴史の演じ出す場面に、どう動くか、プロレタリアートが如何に戰ふか——遺憾ながら、こゝではこの見物すらもよくできない。

……下らない理窟をならべてしまつたが、今日お願ひし度いと思つたのは貴兄又は他の方で西洋歴史及び東洋歴史の邦文書をお持ちだつたら、拜借し度いと思つたのです、若し都合がよくて、拜借できませんか——御健康を祈ります、こゝには變心者も居るらしいが、元氣な人は元氣であるらしい、僕亦後者に屬す。

三月四日　佐野學拜

高山兄侍史

拜啓暖くなりました、御壯健の事でせう。先日は世界文化史大系二册、支那文化史講話、中國歴史研究法御差入れ下され誠

に有難く存じました。御厚情を感謝します。中國歴史研究法は以前北京で一度讀んだが、今度讀み返して見て、中々面白く思つております。ヘーゲルは雜多な智識を體系なしに並列することを支那式學問と呼んだことがあるさうですが、支那の浩瀚な歴史書には、その嘆があります。梁啓超はそういふ根本的な缺陷を克服する新しい歴史研究法を提唱するのですが、まだ是れだけでは駄目だろうと思ひましたが、これも支那式學問の模型の一つで體系が何もありません。日本人の支那史研究は、それ自身支那式になつてしまふと見えます。

しかし個々の問題に關しては、日本人式のコマメな研究もあることだらうと思ひます。何れモツト／＼支那關係の書物を讀み度く考へて居ります。若しもそういふ書物について、御便宜があるなら御願ひ致しておきます。僕等の調べも段々進捗しました。その結果僕の接見禁止は昨日から解除されました、御序もあらば御立寄り下さい。御健康を深く／＼祈ります、先づは御禮まで　草々

三月二十九日　佐野學

高山兄

其の後は御無沙汰しました。御變りありませんか、あなたが病氣で出られたことは聞いて居ました、御病氣は如何ですか、御快復を祈つて居ます。今更返らぬ事ですが、政君は殘念なことを致しました。あなたの氣持をお察しします。同君と協力した時期は、僕にとつて貴い記憶となりました。こちらでは大抵みな達者らしい、先日對質で鍋さん、球さん其他に逢ひましたがみな元氣です、豫審も終結するが、裁判にはまだ中々間が有ることでせう。あなたは體を先づ第一に丈夫にして下さい、世間では失業者が洪水の如くである由、この問題を××し得るものはブルジョア政府でも、有象無象の「無產黨」でもなく、やはり吾々に外ならない……僕は本の差入のことその他お願ひし度いことがあるので一度おひまのとき面會にきてくれませんか、今何か仕事がお有りですか、今日の吾々の屈辱を雪ぎ、××の負ふて居る大事の任務を果たす日のために、あなたの健康を深く／＼祈る。

四月五日　佐野學

丹野せつ子様

御はがき有難く拜見しました、二十二史劄記、御買ひ求め下

されし由、有難く御禮申します、まだ通知がありませんがすぐ有るでせう。當刑務所の近くの鶴川屋といふ差入やにまで受取人をあなたとして金五圓さけておきましたから、又當方へ御いでのとき御受取り下さい、郵便で送るのは面倒らしいから失禮ですがそうしました、あと少し殘りますが、若し文求堂に次の書籍のうち何れか有らば御買ひ求め下さい、なほ御使ひになつた郵送費など御差引き下さい。

廣四十家小說　一圓二十錢（文求堂カタログ「支那書籍目錄」三十四頁所載）
今古奇觀　一圓二十錢（同三十五頁所載）
花月痕　一圓二十錢（同三十八頁）
牡丹亭還魂記　一圓（同　）

右のうちどれでも一つでよいのです、右は小說類で、品切れのものが多いとおもつて四つ並べたのです、みないるわけでありません、支那の小說はノンキで面白いですよ、たゞ支那の本は冊數が多くて弱るのです、右のうち廣四十家小說と云ふのは六冊らしいから、若し有らば御とぢ下さらば幸甚です。かういふ事を一々お願ひして全く恐縮です、僕の家内はかういふ事がよく分りません、僕は今迄自分の仕事にばかり熱中して居て家事を餘り顧みず、家内に對する敎育など少しもしなかつたから色々矛盾が生ずるのです、しかしいつ出るか見當が付かないから爲め家内の思想のまゝに行動させる積りです、自分出さないかも知れないが慾を言へば限りのないこと、今までやつてきたたけでも無駄ではなかつたと大に安んじて居ます、しかし家内や子供たちは可哀相に思つて居ます、色々敎へてやつて頂ければ幸甚です、先日二十二史箚記のことを（拜借の以前に）お願する手紙を出しましたが到着したでせうか、御序のとき御一報下さい、「日本歷史」は急ぎませんがそのうち御願申します、同書の改稿を許して貰ひ度いと思つて居るのです、御健康を祈ります

四月十九日　　佐野學

西たい子様

暖くなりました、お變りありませんか、御差入れ下さつたウエルスの世界文化史大系を大變面白く、拜見中です、北川君の翻譯も中々見事です、この本を五月一杯拜借して居てよろしいですか。

メーデーが近くなりましたネエ、失業者の續出する際ですから、眞劍なメーデーが行はれるでせうし、又それを心から望んで居ます、これから日本史を少し勉強して見ようと思つて居ますが、次の樣な本をお持ちになりませんか、又御友人から一時拜

借願へる便宜はないでせうか。

西村眞次　古代日本の社會
金澤庄三郎　日鮮同祖論
鳥居龍藏　東西古代の諸民族(?題目不確)
瀧川政次郎　日本法制史
牧野信之助　武家社會の研究
德富蘇峰　日本國民史の「波理來航」(?)等の幕末に關する部分

僕は日本書記だとか、吾妻鏡だとか、色々のオリヂナルのものを調べて見たいが、こゝではとても駄目、日本の歷史家は考古學者ですらも排外主義的で全く恐入るけれど、彼等の言分の反對のことを考へると、中々本當のことが發見される、しかし支那史に較ぶれば、餘程日本史の方がよく分つて居ると思ひます。支那史の文獻は讀みかけが大分ありますが、日本史を八、九月頃まで讀んで、其の後にやるつもりです、こゝでは時間がタップリすぎるので、色々讀書の計畫を立てゝ居ます、支那史については氏族制社會や土地共有の時代のことが殆んど分らないので、發展段階の觀察には頗る不都合です、希望閣から村山君の何とかといふ本が出版されたそうですが、ドンナ本ですか、……………もう一つ御願ひがあります、一つの本屋のでなくよく小賣店で客にやるような圖書目錄が手に入るなら、一冊郵送して頂けませんか、御健康を祈ります。

四月二十四日　佐野學

高山兄

拜啓十七日付の御手紙を有難く拜見、貴方も御無事で結構です、御病氣は大事にして早く壯健におなり下さい、今は吾々の臥薪嘗膽の時期です。やがて目ざましい×××がくるでせう、それは辨證法の法則です、僕はどこまでも希望を失ひません、兎に角體だけは丈夫にしておいて下さい、何れウント働かねばならぬから、前の手紙で一度面會においで下さいと書きましたが、あなたは今一寸具合が悪いだらうと後から考へ付いた次第です、だからその御依賴は取消します、時々手紙を下さい、もう四五日でメーデーですね、失業者が益々多くなるようだからメーデーも眞劍でせう、おもてでは隨分吾々の仕事が多いだらうと思つて時々腕を撫する次第です。實際的仕事を辛抱強くやつて行く事が今何より大事でせう。……僕は今歷史の書物を讀み耽つて居ます、歷史を過去のことばかりだと考へるのはまちがひです、人間が歷史上に獲得したものは現在まで形を變へ

つゝ續いてゐる、新しいものがアト〳〵から付け加はつて行く、これが發展だ。今の時代にこの歴史の發展を推しすゝめる役割をするのが吾々です、だからお互に大に自愛しませう。御健康を祈る。私の知つてゐるあなたの友人諸君によろしく。

四月二十六日　　　　佐野學

丹野せつ子様

拜啓先日は兄様態々お尋ね下され、よい本を御差入下さつて誠に有難う、兄さんは始めて、刑務所を訪問された由、少々驚かれたでせう、よろしく御禮申上げて下さい、貴兄が益々御壯健であることを伺ひ嬉しく思ひます。

産業調査時報などの表紙だけを拜見しましたが、立派な記事が満載されて居るらしく、殊に小生も、そこでちよつと働いた西歐局の決議文の翻譯の目次などを見て大いに愉快な感慨を感じた次第でした。この前の手紙でお願ひした諸書は、若し出來るならお願ひしたいと思つてゐるのですが、大概揃ひ得るとの御話し、感謝の至りです、御友人にて日本史、東洋史を研究して居られる方の藏書を拜借出來るとかのことも有難く思ひます、若しカタログ様のものを拜見出來れば幸甚です。時代にできた姓氏録といふのを今讀んで居ますが、句讀點なしの、漢字の書き流しなので、明細が解らず、讀んで居ますが、その代り心中をよい本にて間接な時間の中に色々の氏族を考へ浮ぶことが出來ます。當時の社會的機制がどういふ形をとつたかといふことが歴史を理解する根本點だと思ふが、支那の歴史殊に古代史にはさつぱりそれが分つて居らぬ様で頗る焦れつたく思はれます（日本史の方がよつぽど分つて居る。たとへば氏族制だとか、部曲だとか）しかし世界史的見地から頗る面白い國ですねェ支那は、——僕等の豫審も終結したので、其決定が世間にも發表されたことでせう。決定書がすべてこの眞相を明かにして居るとは言ひ得ないが、それは追々公判などで明かになるでせう。吾々のあらゆる仕事は、大衆に結びつかねば全く無意味なので、したがつて吾々のしてきたことは大衆から理解されねば甚だ困ると思つて居ます、とにかく今は屈辱期です、雪辱期は××に來るでせう。其日のために先づ〳〵健康を重んじてゐる次第です。——古文書、歴史のはじまる前後の諸状態に關するものを讀みたいのですが邦文で。ギリシャだとか、バビロンだとか、埃及だとかの古代史や、現代の野蠻人に關する本のよいのを二三冊若し拜借の便宜を得れば幸甚です、エンゲルスの家族の起源を讀む便宜を與へられたので精讀してる

ます。御健康を祈ります、御令閨によろしく。

五月五日　佐野學

高山兄

メーデは盛大でしたか

拜啓先般二十二史劄記、今古奇觀、御差入れ下されて、御禮申します、面白く讀了しました。先日僕等の豫審の決定したのは御承知の如くです、僕は捕へられた時から言へば四・一六の組に入るべきですが、一九二五年一月の上海會議以來のことのため三・一五の分に入らねば都合が悪いとかで、その方に入れられて了ひました。どちらでも構ひません。四・一六の分にも出ることを主張致すつもりです、兩方の法廷で所信を述べたいと思つて居ます、去年結審した人たちと一緒に裁判されることを望んで居ますが、どうなるか見當が付きません。勞働者が吾々の事件と裁判をよく理解してくれることを何よりも望んで居ます。それが何よりも大きい希望です。ヒイキのヒキ倒しみたいなのは、餘り有難くないと思つて居ます、又、本のお願ひ致しますが、例の文求堂で、

捜神記（六十錢又は九十錢）

大宋宣和遺事（五十錢又は八十錢）

唐宋傳奇集（一圓五十錢）

牡丹亭還魂記（一圓）

を買つて頂けませんか、うすい本はおとぢ下さい。お金は差入店福田屋に宅下げして置きます（右の本の有無を御一報下さい）、この頃は漢文を讀むのも少し上達したらしく、早く讀んでしまふので困つて居ます。漢字は中々含蓄があつて面白いが、大衆の文字ではありませんね、支那の國家組織は漢代に至るまで、猶ほ多分に古代大國家型のところが殘つて居て、其の文化も農奴的勞働の搾取に生きる士大夫の文化に外ならなかつたから、商業文明的な、また大衆的な、アルハベット文字のいくらかでも興らなかつたのも、そういふ社會的、政治的基礎があるのだなどと、考へたりして居ます。この頃はお天氣がよくて、暖くて、牢屋住ひにも中々よい時候です、今日丹野せつ子さんが面會に來て下さつて色々話しをきゝました。あなたもおひまの時に一度面會に來て下されば幸甚です、御健康を祈ります。

草々

五月七日　佐野學

西たい子様

御葉書拝見しました。色々御世話下されて感謝します、先日僕からさしあげたのは不許可でした。前川さんの「日本歴史」はまだ通知がないので、尋ねて見て居ます。高山君に色々書物の御世話になつて居ます、若し同君にお逢ひになる時が有つたら、喜んでるとお傳へ下さい。又書物の名前を一所に知らせておいて下さいとお傳へ下さい、でないと、ドンナ本がきたかよく分りませんから。小川信一氏には手紙をくれるよう御傳へ下さい、僕はあの「日本歴史」を書いた後に、色々考へ直したところも有ります。日本、支那、西洋を含む世界歴史年表を一冊買ひ度いと思ひますが、ドンナ本が有るか、おひまの時に調べて御一報下さいませんか。僕は益々壮健ですから御安心下さい、御健康を祈ります。

五月九日

佐野學

西たい子様

拝啓世界史年表（又その前には支那書二冊）御送り下されて有難う存じました、お金は二圓五十錢（世界史年表代價この前の支那書の殘額、送料等）稲田屋へ宅下けしますから御序の時

御受取り下さい、稲田さんへも日本歴史を送つて上げます、前川さんの御住所を知らないので御請求下さらなくてはなりません、御面倒ながらあなたから禮を言つて頂けませんか、日本歴史は私の出版社に出版されたもので、今度はじめて手にとつて見ましたが、誤植やふりがなのまちがひや頁の組みちがへなど多く少々呆れました。先般（本月はじめ）高山君から本を差入れてくれましたが、どういふ本だかハッキリした通知がないので何かまちがひが有ると困ると思ひますから、同君にどんな本を差入れて下されたか御きき合せ下さいませんか、目下、讀む本が中々豐富で勉強して居ます、又本のことですが、

ビュヒャー 權田保之助譯 經濟的文明史論

マックスウェバー 黒正巖譯 社會經濟史原論

米田庄太郎 リッケルトの歴史哲學

を誰れか持つて居ないでせうか、若しないなら、古本屋でいくらするか聞いて……その値段をお知らせ下さいませんか、すぐ御買ひ下されては困ります、ブルジョア學者の本は安くなくては買ひません、これらの本はみな高いらしいのです。

御健康を祈ります、先は右まで。

五月二十一日

佐野學

西 た い 子 様

あなたからのハガキは大抵順よく御受取りして居ます。

御病氣追々御快方の由、何より喜ばしいことです、此の上御油斷なく御加養下さい。雜誌の「エコノミスト」など讀むと不景氣が甚だしいらしい、御友人にも失業する人多きことでせう。數年前僕等のやつた失業手當法要求の運動を思ひ出すが、こういふ要求は今日特に必要と思ふ。何にしろ西洋にも失業者が街頭にウヨノ\居るが、とにかく毎週いくらかづつ、生活費を給されてゐる。日本ぢや食はずに我慢せねばならぬのだから土臺、話が違ふ、かういふ要求は普遍的な要素たり得ると思ふ。オハツチヤン其他御達者ですか、此の頃は反動がひどいそうですネエ、然し大衆は益々戰鬪的になつて行つてゐることでせう、大衆の中から、又勞働者がなくとも大衆の間にもまれてよい經驗を積んで、よいリーダーが澤山出て貰ひ度いものです。僕は相變らず壯健です、御健康を深く深く祈る。

五月三十日

佐 野 學

山 田 文 子 様

御變りありませんか、五月はじめに御差入れ下されし書物の名がハツキリと分らなかつたが、この頃やつと知らせてくれて分りました。「幕末史之研究」「幕末史概論」の二册ですね、早速拜讀します。書物に關することを先づ、一、先般お願ひした中に西村眞次「日本古代社會」同「萬葉集の文化史的研究」太田亮「日韓古代史資料」金澤庄三郎「日鮮同祖論」が有つたかどうか失念して居ますが右は猶差入れくれましたから若しお願ひしてあつたら取消します、二、若し書物拜借できれば幸甚です

太　田　亮　日本古代史新研究　磯部甲陽堂

鳥居龍藏　有史以前の日本　同

同　極東アジヤの諸民族(?)　同

牧野信之助　武家時代社會の研究　刀江書院

特に飛鳥時代から奈良朝までを扱つたよい本三、拜借してる分は六月から七月へかけて御返送します。

× × × ×

日本の古代史について何か目のさめるようなよい本はないでせうか、久米邦武といふ明治時代の歷史家の書いた古代史が有る筈ですが、若し内容がよいようだつたら入れて頂けないですか、僕はこの久米といふ人は隨分立派な史家だと考へて居ます、先日、滄田靑陵「東亞文明の黎明」といふのを買つて讀みました

が、仲々面白かつた、この人の見地は相當古くさくなくつてよいですね、考古學は人間本來の世界人的、社會人的傾向を發生的に示すところが有つて、國家中心の文明期に養はれた偏見を打破する作用をするとおもふが、鳥居だとか西村だとかいふ人たちの書いたものの中には、往々、支那、朝鮮、シベリア、蒙古に胸をこがす帝國主義的イデオロギーがほの見えてるから全くおどろく、右の濱田博士の書いた別の著書を御入手できるなら拜借したいものです、――日本に渡米した征服種族は匈奴の一系であるといふテーゼをボンヤリ久しく考へてるが（匈奴をトルコ族、シベリア族、蒙古族等の遊牧族の政治的體系と考ふれば必ずしも不合理でないとおもふ）何か匈奴を研究した日本書はありませんか、そんな說明が出來れば日本の有史以前は頗る世界史的意義を帶びてくると思ふのです（匈奴は世界史的種族ですから）

×　×　×　×

先日春秋文庫のなかの小林良正君「經濟史論考」を讀み仲々面白かつたが面白くなかつたところも有る、附錄に石濱知行氏の明白に社會民主々義的な經濟史をなほ取柄の有る様な批判をして居るが社會民主々義に對する憎惡の薄弱であるのは不可。全體に福本イスト的なところが有る、福本イズムはプロレタリア化の前におかれてゐるかぎりに於て [illegible] とに復活するだらう」從つてもつと克服されねばならぬとおもへてゐますが如何？

…………………………

×　×　×　×

世上、反動甚しきよし、緊縮と賠償を以て不景氣に失業を救ふつもりならんか？

御健康を祈ります　草々

六月二日

佐野學

高山兄

先日は、面會においで下され有難う、そのせつお話したことに僕の言葉の足りない所が有つたらしく、恐縮でした　××さんに其後おはなし致し又同氏あての手紙を×××氣付で出しましたから同氏にお逢ひの時おきゝとり下さい。一般の大衆運動は益々進展して居ることゝ思ひます、僕等はそれを確信して居ます。それについて別に何も思ふことは有りません。心に常に浮ぶものは僕等の惱した××のことです、それも亦勿論××し

て居るだらうと考へて居て別に悲観なぞしません、勞働者的な大衆的なものとして××してゆくだらうし、又して貰ひ度いと思つて居ます、そのようなことを無關係のあなた方に、それも斷片的に、頭にうかんだまゝをおはなしするのですから御分りにくかつたと思ひます、これから何かお話しするときはもつとよくお話しします。

×　×　×　×

×××に次の傳言をして頂けませんか。

一、「日本歴史」(南宋書院本)の十二頁の末行に括弧をして「日本書紀の紀年では六百六十年ほど……」云々と書いてありますがこれは僕にも意味不明です、この括弧内の字を校正でとるよう御傳へ下さい。

二、若しすでに第一卷發刊されたのなら、一册差入れてくれるようお傳へ下さい――今日×××に手紙出せないから右御迷惑乍らお願ひします。

×　×　×　×

先般お願ひした本のうち黑正巌「社會經濟史原論」といふのをどこかで借りられないでせうか、又古本であまり高價でなくば買ふつもりです……この頃は本の發賣禁止がひどいよし、又中々反動のよし、緊縮と壓迫とで不景氣と失業問題を解決するツモリらしい、中々頭のエヽことやと哀れに思つて居ます。

御身大切に祈ります、　　草々

六月三日　　佐野學

西たい子様

編輯者附記――日本無産黨の指導者佐野學氏は、昨年上海に於て日本官憲のために捕へられ、今は東京の××××監獄にゐられる。編者は今、同氏が獄窓から知人に宛てゝ書かれた私信若干を集め、強いて佐野氏及び同氏の知人諸氏の了解を得てこゝに收錄するのであるが、短時日匆忙の裡に集めねばならなかつた事情を先づお斷りしておく。然し、それにも拘らず、吾々は、×××な監獄制度と檢閲制度との中をくゞつてきたこの僅かばかりの私信の中からも、同氏の林の如き靜かな心事、勞働者大衆に對する熱烈なる信頼、ブルジョアジー及びその手先社會民主々義に對する燃ゆる如き憎惡を見、同氏の風貌に接する思ひをするのである。佐野氏及び同氏の知人諸氏に深く感謝する。

M・N・E 怪談

奇怪な經驗

淺原六朗

八重と云ふ女ですが、この女は私とホテルに行くことを承諾してゐたのです。

雨のふつてゐる夜で、ヘッドライトが、アスフアルトの雨を、絶えまなく走らせてゐました。八重に對する私の新鮮な愛情のやうに……。

八重は薄い唇をしてゐたけれど、腕のまろさは、物を抱擁するに、充分なほどの厚さをもつてゐたのです。

自動車のクッションで、八重は太い二の腕を、私になでさせ、

「ホクロがあるでせう、こゝに。」

ホクロは二の腕のどこにも見えないのです

「いゝえ、ある筈よ、ホクロが。亡くなつたお母さまが、いつも私にさう仰言つてゐた。」

ホクロの代りに、八重の二の腕の奥には、黒い地帶にそよぐものが見えたのである。青草のやうにそよぐもの、私は、このそよぐものの二筋ほどを××つてみた。

「まあ、しどい。」

だが、嬌媚なもので、八重は眼をひからせてくれるのです。

「あのホテルに着いて、お茶をのんだら、すぐに、私たちは帰ることにするかれ。」

「な、もちろん、帰りたくなつたら、帰ることにしようね。」

女たちは、すべて新しい男性に對して、出女らしいアフエクテエションを使ふことを好むものです。この習慣を、日本の女の特有なものとして、私は愛してゐました。

で、ホテルは、八重の住居の近くだと云ふので、それに行つたのですが、場末も裏街の古い建物なのです。

リノリユムの廣い廊下は、私たちがあゆむたびに、きしきしと音をたてる。燭光の薄い電燈が影を描いてゐる。この濕氣にみちたトンネルを、小さな男が、鼠のやうにちよこちよこと案内するのです。

ダブル・ベッドと、椅子が二脚の室なのです。壁の一方に、タアナアの複製が、黝んだ血液の色をしてゐるのです、

八重はこの室に入つてからさへも、罪を知らない生娘のやうな顔をしてゐるのです。
「少し、さびしい室ね。」
「さびしかないよ。二人でゐるのだから。」
八重は紅茶をのまうとも云はず、眼を片方にして笑ひだしてゐる。笑ひだしながら、いかにも自分の家の居間にでもゐるやうに、落着いてゐる八重なのです。
私は激しく××しました。そして、十分間ほど××をかわしてみたのです。八重は、人形のやうにそれらのものに應じてゐるのです。人形以外ではないのです。
「何んと、莫迦莫迦しいことだ。」
效果のないのに對して、私は腹のなかで舌うちをして、更に、この女を極度の情熱のなかに追ひこまうと努力してみたのです。煽情についてのあらゆる技術も應用してみたのです。けれど、八重は、私のなすまゝのなかに、柔順な姿態はとつてゐるけれど、その皮膚は少しも、昂奮の症狀を示めさないのです。水のやうに冷靜で、眼は相變らず處女のやうに見開いてゐるのです。
「眼をつぶりなさい。眼を。」
そのときです。がちやり、扉に音がして、身長の低い、傴僂を連想させる男が、顔をだしてゐたのです。
「何か用かね？」
「いや、何んにも用事はないッ」
扉はそのまゝ足音のない廊下でしめられたのですが、私の情慾は、これをピリウオドにして、ピンを刺されたやうに減退してしまつたのです。
今度はあきらかに舌うちをして、私は室のなかを歩きまはり、猛獸のやうに顔を歪め、またぐるぐると室のなかを歩き廻つたのですが、その間、八重はシミーズのまゝで、ベッドに腰をかけて私を見てゐるのです。相變らず、大きな美しい眼で—
「八重、お酒をのまうかね、お酒を。」
暫くして、私がしたしげにそばによつて行くと、
「えゝいいわ。」
そう云つて、また媚嫵なもので、唇をひろげて笑ふのです。その形に刺激され、私はまた新鮮に近よつて、×しい愛撫をあたえたのです。
「八重、どうしてお前の唇は、お前の體は、もつと×しくならないのだ。」
と、その瞬間に、また扉ががちりつと開らかれて、傴僂の顏がのぞいたのです。
「何か用かね？」
低くさびた聲が、その男のくぼんだ眼のなかから出てくるやうに想はれたのです。私はいきなり跳びあがつて、怒鳴りつけてゐました。
「どうしたんだ。馬鹿ッ。」
が、その男は私の怒鳴り聲の影響をうけない顏で、にやりにやり室のなかを見廻してゐるのです。これは私にとつて、むしろ恐怖に近いものでした。
午前一時のことで、窓ガラスにはまだ雨が光つてゐる。
ぢりぢりと追ひすくめられた感情で、その男を見つめてゐると、間もなくふつと扉はしめられて、男の顔は消えてしまつたのです。
扉はしめられてしまつたが、私の視覺は、

この瞳にはつきりと茶色な眼のくぼんだ顔を見てゐるのです。

にやり、にやり、室を見廻す眼。

て、私は急に歸らうとしたのですが、こんどは八重がきかないのです。私を抱きしめ、八重の情熱は、漸次能動的に、私を貪りはじめたのです。それは不思議な蜘蛛のやうな赤い氾濫でした。この氾濫のなかで、何んと私の體は無氣味な寒さを覺えてゐたか。

やがて、疲勞のなかで、私は濁い水のやうな眠りをとつたのです。

午前三時頃、私は眠りからさめ、便所に立つたのです。こゝの便所は、洗面所に接續して、かなりな廣さをもつてゐたのですが、その洗面所の中ほどに、二つの影が立つてゐるのを私は、トイレツトから出た瞬間に見出しました。

ぼそぼそと話をしてゐる二つの影が、不意に私の方を向いたとき、私は全く蒼ざめてしまつたのです。八重の白い顔と、先刻の黄色の顔のくぼんだ眼が、私をぢつと見つめたからです。そして笑ひかけようとしたからです。

そのとき、そのホテルから、私が逃亡したのはもちろんのことです。そして八重にも、五年間にわたる都會の變化のなかで、逢ふ機會をもたなかつたのです。八重はその酒場に通ふのもやめてしまつたのですから。

不思議な經驗！ それを五年間もちこしてある晩。偶然に私は新橋演舞場で八重に逢つたのです。貴婦人のやうな盛装の八重は、しかし五年前と同じやうに私に笑ひかけたのです。

演舞場のプロムナアドを歩いて、私は不意に八重に奇怪な經驗について、訊ねかけてみたのです。

と、八重は瞳をまげて笑ひだしてゐるのです。そして、私にからかつてきかせてゐたのです。

「まあ、あなたはお坊ちやんでしたのね。あのホテルは私の家だつたのよ。そしてあの小さな男は私の父だつたのよ。」

私は顔を赧くして、五年前の奇怪な經驗をナンセンスにされたことを、口惜しがりました。しかしそれはもう追ひつかないことでした。

留置場の幽靈

サトウ・ハチロー

A、留置場の幽靈

「おい政戸、政戸、どうした又うなされてゐるじやないか」

丸い猫と豚とをプラスしたやうな看守の巡査が僕の隣りに寝てゐる政戸を起こした。

「ひどくうなされてゐるな、おいどうしたんだい」

僕も、起こしてやつた。額に油汗がにじんで、枕の上にかぶせた臨時枕かけの、落し紙

がぐつしよりしてゐる。
「どうかしたのか？」
「夢か、やつぱり」
　政戸は、呼吸(いき)をついて起き上つた。
「惡いことをしてゐるから夢をみるんだ」
　看守の、僕達稱ふるところトン・キャット(豚猫か翻譯するとかうなる)が、金(かな)あみ越(ごし)にどなつた。
「へい、すみません、同じ夢を三晩も見るもんですから、旦那すみません、便所へやらして下さい」
「仕樣のない奴だな」
　留置場では、便所は二時間をき三時間をきと定まつてゐる。夜中といへども、さしてはくれない。ところが政戸なんかは、巡査の顔色とすきを巧みにみる。
「僕も行つてよござんすか」
「いくら關東の連小便でも、つきあはなくてもいゝぞ」
　と、言ひながらも僕をも出してくれた。ひやめし草履が、なまじ六月なので、じつとりして氣持ちが惡い。政戸はと、小便所をのぞいてみると、窓から少しばかり見える空を見ながらやつてゐる。
　僕は、街であばれたので十五日食つて、三日目なのだ。警察のシャリ(めし)もそろ／＼腹になじまうといふ頃だ。政戸は、もとからの知りあひでも何でもない。サギをして共犯と二人つかまつて一昨日からごやつかいになつてゐるのだ。共犯の太田といふ爺いは、ひとつ置いた隅の留置場にゐる。
「小便終つたか」
　トン・キャットが、ガチャンと扉をあけた。
「旦那、お手數ですが、あつしもいゝ氣持ちにさして下さい」
　隅の部屋から聲がかつた。太田だ。
「よし、早くしろ」
　太田が、小便をすまして部屋に這入ると、くひこむやうに留置場は、しづかになつた。
　僕は毛布をかぶつて、毛のないケバを無理にむしつた。トン・キャットが小聲で、さつまびわをうなつてゐる。まづい節まはしだ。
「おい、寢たか」
　となりの政戸が僕の毛布に首をつゝこんだ
「何だい」
「この部屋は氣持ちのいゝ部屋じや無えな、どうもうなされていけ無えや。何だか、色の黑い男が胸を押しつけるんだ。これで三晩だよ」
　言はれてみると氣持ちがよくない部屋にも思へる。だいたい留置場が氣持ちがいゝ筈もないが。……
　翌日の晩の食事のとき政戸は、僕にシャリを全部くれた。
「食ひたくない、何だか氣持ちが惡い」
　と、そつくりくれたのだ。ありがてえと、いたゞいてしまつた。布團を敷いて寢るとき、
「變にどす黑い男が、胸を押しつけるんだ」
　と、政戸は、又言つた。四日ぶりでたらふく食つたので僕はすぐ寢ついてしまつた。
「おい、サトウ、サトウ、どうした、うなされてゐるじやないか」
　起こされたのは僕である。夢か？！　と目をこすつたが、まさしく見たのは黑い男とその腕が押しつけるさまであつた。
「へい、氣味の惡い夢をみまして」

その晩はトン・キャフトの川ではなかつた。

その翌晩、僕は又政戸から、そつくりシャリをちようだいして眠つた。又もや、その夢。うなされて起こされた。トン・キャットが笑ひながら、

「サトウにうつつたかな」

翌晩もうなされた。その翌晩も起こされた。一週間ばかりしたある晩。十二時頃だつたらう。

「みな起きろ」

と、たゝき起こされた。政戸は、すぐにとび起きて、金あみのそばに寄つた。

「たゝきらしい。しめた」

政戸は、小聲でかう言つた。強盗がつかまつたのだ。

「おい、サトウと辻村と福山、お前達は隣の部屋へ行け、政戸貴様だけは太田の共犯だから隣りの部屋だ。手ごわいのが一人這入つて來たから部屋をあけてくれ」

強盗は獨房だ。僕達三下(さんした)は、追ひやられるのだ。

「さあ、紙を持つて行け」

「はい」

そのとき政戸が小聲で耳もとで言つた。

「太田に言つて下さいよ。あれは一八〇〇だつてね」

僕は隣の部屋へうつされた。政戸の言葉通り太田につたへた。太田は、ありがとうと言つた。僕は、その晩からうなされることなく助かつた。その留置場を出てから、僕は逢ふ人ごとにあの留置場は幽靈が出ると言ひふらした。ところが十年ばかりたつたこのあひだ。ばつたり政戸に淺草で逢つた。ひさしぶりのあひさつと、同じ、よたものの心安さから一杯つきあつた。そのとき政戸が

「大きくなりましたな、あのときあなたの胸を押さへた黒い男位になりましたな」

と笑ひながら言葉をついで、

「あのときの幽靈はあれは嘘ですよ、わたしが太田と何とかして口をあはせたいとトリックにかけたのですよ、黒い大きな男とアンジをかけてをいて、シャリをたらふく食はせてれてからわたしが足をあなたの胸にあげたのでさ。さうやりや大抵夢をみますからね。」

B 雷が落ちてはゐませんか。

そのインバイ婦は黒いふちにたつてゐた。

その女は、目が片つぽとんでゐた。僕はその女を發見した晩から、妙にその氣味の惡い顔を愛した。目が片つぽとんでゐるばかりに、味噌齒だつた。おまけに首が赤坊みたいにぐらぐらしてゐた。いつしよに寢てゐて抱き起こすと、がくんがくんと首がゆれた。そのたびに安油の匂ひが僕の胃にしみた。おまけにその女は一人しかゐなかつた。インバイ婦にはよく一人でゐて、七八千圓小金をためてゐる女がゐるものだ。たいていそんな女は變な面だ。僕はその女を、そんな風に想像した。借りやうと思つたのじやない。

「あたいは、安いよ、安いけれどマリシはとるよ」

その女は、さう言つて僕の渡した五十錢玉の匂ひを嗅いだ。僕は、出されたお茶の茶カスをよけてのみほした。

その晩は雨が降つてゐた。

雨の夜は僕はたいへん××的である。僕は

その女のところへ行つた。一圓二十錢かなかつた。女はそれでも、とめてくれた。けれどいままで寢たことのない、一疊半の部屋だ。二疊だけれど半疊の押入があるからだ。電氣もない。かびくさい。臆病な僕は、××××を首に女を待つた。女はやがて來た。

「いそがしいんだよ、こゝで我慢をしよ」

一時間程して女は下へ降りて行つた。僕ねむけをもよほしてうとうととした。

「一寸、お前さん、お前さん」

目をさますと、障子をほそめにあけて女がたつてゐる。首が、ガクンとゆれてゐる。時間は三時頃らしい。

「何だい」と僕、

「ねえ、お前さん、そこらへんに首が落ちてゐないかい」

「えツ」

僕は、ギクンと飛び起きた。着物と帽子をつかんだ。

「何だ、首だつて?!」

「さうよ、さつき寢たとき落としたらしいんだよ、カンザシの首なんだよ」

電氣機關車

水谷　準

第一景

『ミサ、今晩帝劇のジムバリストを二枚買つたんだが、勿論行くだらうね？』

『あーら、何故早くさう云つてくれなかつた？　折角だけど、先約があるわ。』

『おやさうかい、お前の方の先約も早く云つて欲しかつたものだね。』

『約束を一々御報告してゐた日には、きりがないぢやないの。』

『それもさうだ。ところで、その幸福な先約者はどこのどなただい？』

『どなた？　あたしの友達で、ほら、いつか家へ來たぢやないの、痩せた人。』

『うん、あれは何とか云つたつけ。細山ではなし、長谷川でもなし……と。』

『小杉八重子さん。八重さんとこへ遊びに行くのよ。』

『八重子さんに會つたら、宜しく云つとくれよ、義理が惡くて顏が出せないわけでもあるまいからツて。』

第二景

ミサの奴、たうとう結婚生活に倦きてしまつたのだ。昔のウエトレス時代が戀しくなつたと見える。

庄吉は今朝、ミサの虛榮袋から皺くちやになつた手紙を見つけだした。意外の獲物である。ミサがどんな虛榮の品々を集めてゐるのかと思つて、鳥渡檢査するつもりだつただけたんだけれど。

その手紙は確かに香水の匂ひがした。虛榮

袋の移り香ではない、恰度その手紙の字に似つかはしい丸つちい鈍角的な匂ひだ。

明日の晩十時頃、例の如く東洋二五六でお目にかゝりたいと思ひます。N・K・

それだけで庄吉は一切をはゝーんと思つた。やつてる、やつてる。ミサの得意は東洋ホテルだ。しかも二五六號室と云へば、四階南向きのあの部屋だ、窓から東海道線の電氣機關車が走るのが見える。庄吉も何度となくその壁の機關車を眺めたものだ、窓際にミサと竝んで。

N・Kといふ男は一體どんな男だらう。事によるとミサが女給だつた時の客の一人かも知れないぞ。だつたら、顔を見たら思ひだすかも知れない。二人でゐるところへ、ひよつこり行つてやつたら面白いだらうな。

『あれ、御らんなさい。電氣機關車よ。むつつりして、あんた見たいだわね。』

『さうかな、僕はそんなにむつつりしてゐるか知らん。』

なんて、庄吉が曾つてさう云はれて心中秘かに讃められてもしたやうな快感に浸つたやうに、N・Kもまた嗅いでゐるところへ、忍びに行つてやつたら、さぞかし面白いだらう。

そこで、ちよいとジムパリストを二枚、とやつたら、忽ちミサは小杉八重子を持ちだしたので、庄吉はしめたとばかり決心した。

第三景

『今晩は、今晩は。』

『どなた、お這入りなさい。』

『やあ、ミサ、お前一人かい。鳥渡お邪魔しても構はないだらうか?』

『えゝ、どうぞ。』

『馬鹿につんつんしてるぢやないか。それにどうしたのさ、そんな軽装姿で。まだ十時になつたばかりだよ。背つ張りなお前にも似合はないやうだな。』

『このはうがサパサパして楽なのよ。あなたも軽装になつたらどう? 恰度こゝにあるわよ。』

『おや、でもそれを俺が着てしまつたら、裸かでまごまごする人が出来たりしちや大變だな』

『悔やしかつたら、こ[illegible]時計に一人で[illegible]らおやしないんだもの』

『さうか、さうだつたね。それぢや、忍ばすることしようか。』

第四景

『もしもし、二五六號のかた、もしもし。』

『どなた? どうぞお這入りください。』

『やあ、これはお寝みのところを甚だお騒がせして何ですが、實は我々警察のものですがね。』

『はあはあ、サーベルがあるので多分さうで御座いませうとも。』

『その何です。このホテルに警察で眼をつけてゐる喫茶姉が入り込んでゐますのでな。念のために、こちらの住所姓名、身元證明をお調べしたいのです。』

『お背勢さまですわね。それぢや、これは大の名刺で御座います。あなた、胡ぢなくつてもいゝのよ。こちらはあたしの名刺ですわ。少し汚れてゐますけど、構ひませんか?』

『いやいや、ふむふむ、で、何處か旅行のお

歸りでても?』

『えゝまあ、散歩に疲れただけなんですけれど。』

『ほう、散歩に―』

『えゝ。もう他に御用はありませんでせうか? こんな姿で、少し寒くなつて參りましたわ。』

『あ、いや、どうぞお休み下さい。これはどうも飛んだ失禮を。』

第五景

『なかなかいゝ氣分だわ。』

『どう、あたしの發明は? 手紙のN・Kなんかうまいもんでしよ? それに、あんなお巡りさんのお景物があつたし……』

『ジムバリストのテクニック以上と、今晩だけは折紙をつけてやる。』

『うふふ、あなた、ほら、終列車の電氣機關車よ。』

エロスの片足

石濱金作

どうせ怪談ですから、諸君も一つ襟を合はせて、膝を掻き立てて、居ずまゐを正して、そして一つゾッとする心構へで――だがしかし、ところによつては少し位ニヤリ/\と怪しい笑ひを、お浮べになつたからと云つて、一向にそれは、またそれとしてお差支へはございませぬ。

さて――と。

或る初夏の清々しい夕方の事でした。銀座の街のペイブメントも、晝間の白々しい乾き切つた索漠さに較べて、夕方からは何んとなく打水でもしたやうに、妙にしつとりとしたしめり氣を帶びて、これからが散歩の人の出さかるといふものなのでした。

店々の飾窓には灯がつきました。懐しい灯の光―洋菓子屋コロンバンの窓硝子の中の眞白な菓子の塔の砂糖までが、なんとなく人懐かし氣な優しい表情で、チラ/\と街を眺めて客を待つてをります。

ネオンサインの光といふものは、あれはパーと、それからそこの女給さんのお化粧とを、妖しく美しく見せる爲めにきつと發明されたものに違ひありません。化粧を終つて、今はただ客を待つばかりの女給さんの髮の上で、深い藍色の光が、今宵はここが戀の巣――とでも云ふかのやうな、妙に暗示深い光で瞬いてゐます。

街にはそろ/\戀人達が出て參りました。今ではもはや十五六歳の幼い娘が、既に戀を語ります。戀とスポーツ、そして散歩、だから日本の新しい時代の娘の脚は誰に氣がねもなく美しくスク/\とのびます。

藝者を呼んで、青疊の上で、チクリ/\と杯を傾けるのは――そんな事はもう古や、今のブルジヨアの息子には何の魅力もないのです。

色の黒いフイリッピン人、紳士オリンピツク選手の合宿所には、夜になるとサインを求めて遊びに來る日本の女學生が、キヤツ／＼とハシヤイで戀と異國と肉體に憬れる、歡樂の交響樂を奏するのださうで——

さて、話が本筋に戻つて、初夏の夕べの銀座の街で、そろ／＼と散歩の客が出盛つてきた頃、尾張町交叉點近くの、河北電氣モーター會社の明るいシヤンデリアの輝く四ツ角に——そこに一つの自働電話のボツクスがありますが——その自働電話のボツクスの陰からヒヨコリと一つ現れたのは、背の低い——背の低いのは當り前ですが、一本の股から下の義足です。

その一本の義足が、四ツ角を曲ると賑やかな散歩の人中をヒヨコリ／＼と、立つて舗道の上を、トブやうに歩いてゆくのです。

諸君は小人の一團を見た事がありますか。妙に小さくて——小さいのは當り前ですが、それがそれで小さいなりにちやんと完成してあの小人が歩いてゐるのは、珍らしくこそあれ、別にさうグロテスクだとか氣味が惡いといふ氣持は起きません。それは一人一人小人といふもの、小さいながらもちやんとして完成して、人間並みに何も缺けた所がないからなのです。

今一本の義足が、怪しい氣な歩き方で、ヒヨン／＼と人の出盛る銀座の街を歩いてゐるのですが、初め人々は、別段それに目を惹かれるといふのでもなく、またそれを見た人も、一向に奇怪な恐ろしい事のやうにも考へなかつたらしいのです。それはその一本の義足が——義足ですから勿論目もなく、鼻もなく口もない、太股の中途あたりから下だけの奇怪此上もない姿なのですが、その義足の歩いてゆく姿が、餘りにも人間らしい、恰度切斷された太股の上部の所に、ちやんと目もあり鼻もあり口もある、何一つ缺けた所のない立派な人間のやうな歩き振りで、只、それだけが一つ奇妙なのですが、ヒヨン／＼とトンで歩いてゆくのです。

しかしやがて、人々は氣がつきました。

『オヤ！』

『あれは一本の義足ではないか。生命のない[illegible]ぢやないか。[illegible]歩いてゐる[illegible]。しかも人の出盛る銀座の街の眞中を……』

『……』

『……』

急に人々は恐れ出しました。最前の人がサツと道をよけると、次の人は何が現れたのかそれを見ようとして一歩前に進み出しましたが、するとサツと顔色を變へて、身體にゾツと寒氣を浴びるのです。

一本の義足！　土で作つた生命のない一本の義足！　その義足が歩いてくる！

やがて叫喚が起りました。人々は狼狽して辻々に逃げ込み、店は急いで窓の灯を消さうとしました。しかしその時もはや、その一本の義足は遠く新橋千疋屋の明るい果物屋の店の前を、ヒヨコリ／＼と小さく歩いてゐました。——

話はそれだけの事なのです。只しかし、それだけでは野暮な皆様方には——オヤ、これは失禮——あんまり飽氣なくつて、なんの事

やらおわかりになりますまいから、一言私がここでその辯解を申し上げますが、ごく簡單に――

一人の男がありました。まだ若いのです。しかし足が片足ないので、いつも義足をしてゐましたが、足のない人間には、人間の足が何よりも一番羨ましいものなのです。

いつか一度は、自分も明るい銀座の街を歩いてみたいと思ひましたが、名にし負ふそこはいづれも美事な足の濶歩場です。シルクスタツキングの艶やかな足、白リンネルの清々しいズボンと白靴――その靴の中には、どんなに健康な足が生き〳〵と指をそろへてゐるでありませう。

足のない自分は一生、どうしてもあの晴れがましい銀座は歩けない――歩けない、歩けない――

醜い義足！　しかしいつか一度は、此地上に、人間の足よりも美しい義足の流行する時が來ないだらうか――その時には自分は初めて一つ堂々と胸を張つて、あの明るい陽氣な銀座を歩いてやりたいものだ！

或る夕方その男の部屋の中から、一本の義足が行方不明になりました。行方不明になつたその一本の義足は、彼の部屋を出ると、早身街の裏通りを逃げるやうに走つて、明るい銀座に急いだのです。

勿論あの時銀座の街を歩いて、人々を驚ろかせたあの一本の義足は、この足のない男の歎きを哀んで、主人の身代りに明るい銀座へ出かけた、忠實な義足なのです。

きつとその男も、その夕べには心に朗らかな滿足を覺えた事でせう。――

だが――私はまだもう一つお話しなければならぬ事がのこつてをります。さて――

あの晩銀座で一本の義足が立つて歩いてゐるのを見た若い戀人達は――若い人といふものは、得て敏感なものですが――たとへ義足でも、太股の中途から切斷された、ムキ出しにされた一本の足が、人の出盛る街の眞ん中を歩いてゐるのを見てからといふものは――どういふものか、戀のかたらひの最中にも、ふと裸の足と太股をチラと目に思ひ浮べるのです。

すると――今戀を語つてゐるこの自分の身體にも、あゝいふ白い足と太股がある！

若い戀人達は、瞬間、口で美しい戀を語り乍ら、互に銘々自分の身體に白い太股と足とを感じ乍ら、そつと何氣なくスカートとズボンを輕るくすりつけ合ふのでした。

勅任官

深尾須磨子

タク・タク・タク・タク、タク・タク・タク・タク、地球の脈膊がはつきりと聽きとれるのでした。

市ケ谷から神樂坂の方へ、長い長い、それ

もじくざくの真暗な路を、マダム・Pとその連れの男二人とは、だんまりで、蜥蜴よりもしづかに、歩いて行くのでした。

右左に、折れたり、曲つたり、愚痴話のやうなぐるぐる廻りを、しづかに続けるのでした。

一體、暗がりと云つても、あの裏通りほど暗い路は、東京中でも一寸珍らしいでせう。

暗闇、黒牛の背中みたいな闇、それは、云はば光の東京の押入れか、戸棚かでした。

鼠か、蜘蛛か、そんなものばかりの棲んでゐさうな、そして、ごたごた積み重ねられた古箱や古行李などが、めいめいに、不平や呪ひをぶつぶつとやつてゐさうな……。

マダム・P一行のだまりやう、それはまた、三匹の魚そつくりでした。まるで足音さへたてぬ位に、ふはりふはりと異動して行くではありませんか。

タク・タク・タク、タク・タク・タク、

地球の脈搏は、非常に小きざみです。

一きは黒いシルエツトの、寺の墓地らしいところでは、らんらんと光る怪物の眼が、マダム・P一行の通路を、それこそ[illegible]て現[illegible]ました。

うつかり振り向きでもしたが最後、一行は人は、忽ちずたずたに食ひ裂かれなければならないのです。

——ミイや、ミイや、

壊れた手風琴のやうな聲が、どこからともなく聞えて来ました。

——おや、海王星のとなりに発見されたと云ふ星だ。たしかにあれだ。

だしぬけに降つて来た大声の方に、マダム・Pは首をあげました。

円錐形の巨木の頂きから、セントエルモの火が、ぼんやりと発散してゐます。

パツ、連れの男の一人が、燐寸をすりました。

初夏の夜、燐寸をする男。

小さな円光に照し出された世界は、日焼けのあとが一層目立つて、ことに彫像的な美しさでした。

タク・タク……・タク、

地球の脈搏が断絶しました。そして、しばらく[illegible]

[illegible]がた[illegible]を形作りました。何ものの[illegible]に[illegible]腕手が、マダム・Pの胸を、十重二十重にしめつけました。マダム・Pは、[illegible]窒息しさうでした。

だしぬけに、一行は神楽坂に出ました。まるでだしぬけです。光らしいものが、すこしも横町に照り込んでゐなかつたので、大通りに出る瞬間などは、誰もが持合せてゐなかつたのです。それだけに、その明るさは格別でした。六つの目が、同時に線を引きました。

マダム・Pの一行は、やはり無言の儘に、ミハフ屋のテイルウムの一隅に、小さな卓を囲みました。

プルルン、首ふり人形のやうなバネ仕掛の卓が、ほんの一押しにも烈しく上下して、それを合図に、天井から下つたシャンデエルが真赤な舌をペロリと出しました。

白服を着たロボツトが、あつらへのソルウツ・ポンチを三つ、そつと一行の前にならべました。しかし、ならべるが否や、バネ仕掛の

卓が、忽ちそれを天井にはね上げました。天井が大口をぱくりと開いて、フルカツ・ポンチをグラスごと呑み込んでしまひました。

やがて、マダム・Pの一行は、玩具の銀貨を三つばかり投げ出して、ミハラ屋を出ましたそして、再び横町の闇に消えました。

タク・タク・タク、タク……

地球が、また脈膊を打ち始めました。

一行は、江戸金の前に立止りましたが、何か不吉なことでもあるらしく、中はひつそりとして、ぴたりと閉つた表戸には、白紙が一枚、小さな長方形に、闇を區切つてゐました。

キモノを著た女らが、一行とすれすれに、しかも、遠くの遠くの方を通つて行きました。

しばらくして、一行は、青い瓢簞を看板にした小さな家の、祕密箱の蓋に似た入口の格子戸を開けました。

中は人いきれでむつとする位なのですが、そのくせ、いやにしんかんとして、おまけに長方形の食卓と、ところどころに光つた人間の目らしいものを除くほかは、どこもかしこも眞暗なのです。

ところで、演技最中の大劇場の舞臺とでも云ひませうか、強烈な光の放射を集めた、その卓上の明るさと、その光景の不思議さに、マダム・P一行は、思はず入口のところに立ちすくみました。そして固唾を呑みました。

花粉にまみれた蜜蜂のやうに、一人の男が光のただ中に溺れて、怪しげな身ぶり手ぶりに、しきりに獨白を續けてゐます。

白裝束、目だけ殘して塗りつぶした顏、先の尖つた帽子、兩手に抱へたギタル、と、これだけでは、ああ、例のピエロか、と、云ふことになりますが、これはまた、ピエロもピエロ、すこしばかり風がはりの、フロツクコオトのピエロなのです。

見たところ、でつぷりと太つた五十恰好の首すぢと下腹とに、過去の贅澤とふしだらのありつたけが、いやと云ふほどに脂肪をくつ著けてゐる。と、まあさう云つたよくある風體の、おこぼれの一人らしいのです。どこかにさうした大集團があつて、押し合ひへし合ひの揚句の果に、この男が總代とでもいつた格で、この卓上につき出されたかも知れないのですが、何はさておき、以下、その男の演じた獨白だけは、是非とも御紹介しなければなりません。

——エ、オイ、酒だ。酒だ。酒を持つて來い。

いやしい舌なめずりのまにまに、男は自棄に吹鳴りました。

——酒だ。酒だ。プロプロと、一にも二にもプロプロプロぬかしやがつて、來るなら役所までやつて來い。いいか、役所だぞ。アハハハハ。役所までは來られまいが、ざまあ見ろだ。プロプロと威張りやがつたつて、俺だつてプロの本家樣だ。正×位、勅任官か、アハハハハハ、俺が獨逸にゐた時には、ベルリンのそれに、何、それつたらそれよ、それに、いいか、それに、とてもとても持てたもんだ。Ich liebe dich か、それに、あの有名な音樂家の村田金作は、彼奴とも飲み仲間で、おたがひに、よくもこれをやつたもんさ。これだよ。いいかい。これこれ、カイツ……。

男は、臆面もなく、右手の握りこぶしを言語道斷な形にして、振りまはしました。

——エ、オイ、酒だ。酒だ。青瓢簞のおばあちやん、面を見せろ。エヘヘヘヘ、おたがひに古いもんだれ。まあいいや、さあ××××だ。××××だ。××××に××××か、藝者はをらんか、コラツ、藝者を呼べ、藝者を。何だ、手前らはけちな奴ばかりだな。若い女なんか連れやがつて、さては村田金作の弟子か、どうだ、當らずと雖も遠からずか、ヘン白狀しろ。ああ××××、××××、だけが本當なんだ。プロもくそもあるかい。な、俺は偉いんだ。勅任官だぞ。おまけにプロなんだぞ。會社の偉い奴なんか俺にかかつたらペコペコだ。世話がして貰ひたかつたら酒を飲ませろ。そこの若いの、いいか、さあ藝者を呼ぶんだ。オイ、青瓢簞のおばあちやん。……來いつたら、さあ××××だ。××××だ。

愈々いでて愈々淺ましい素振りに、男はたうとうパンツを脱ぎはじめました。そのはずみに、この小さな舞臺の照明係は、皮肉にもパチリと、觀客席に通ずるスヰツチをひねりました。

さあ、あたりは忽ち明るくなつて、そこにもここにも顏々々です。その顏々々が、一せいにふき出しました。哄笑、哄笑の爆發です。

キユロツトを丸出しにした卓上の男は、それこそ血を見た猛獸でした。廻らぬろれつはますます廻らなくなりました。

——何だ、俺を馬鹿にする氣か、されるならして見ろ。役所へ來て見ろ。役所だぞ。あの大きな門をくぐつて、玄關に立つて見ろ。そして、俺の名前を云つて見ろ。はばかりながら勅任官だ、勅任官だ。勅任官だ。

半ばおろおろ聲で叫びながら、上著のかくしからとり出した紙入れから、大形の名刺をつかみ出しました。そして、顏々々を目がけて投げつけました。

さて、その名刺には、肩書もいかめしい×部省×務局長×原××が、大威張りをしてゐました。(本名の知りたい物好きな人は、青瓢簞のおばあちやんにお尋ねなさい。知つてゐること請合です。)

マダム・Pの一行は、依然として空氣のやうに、そつと闇の中に消えました。

タク・タク・タク・タク、タク・タク・タク、地球の脈膊が、また聞え始めました。

皆さん、何だくだらない、不都合千萬な、などと、おつしやつてはいけません。もともと、これは、嘘かも知れないし、また本當かも知れぬ、話なんですから。

Onoto the Pen

向上の一路

卓上のアルペン・ストックー
オノトの前に難關なし！
＊　＊　＊　＊
使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆　七圓五十錢以上
アテナ萬年筆　三圓五十錢以上

萬年筆にはアテナインキを御使用下さい

送料各十八錢（カタログ進呈）



¥1.20

"VALET"
AutoStrop
Safety Razor

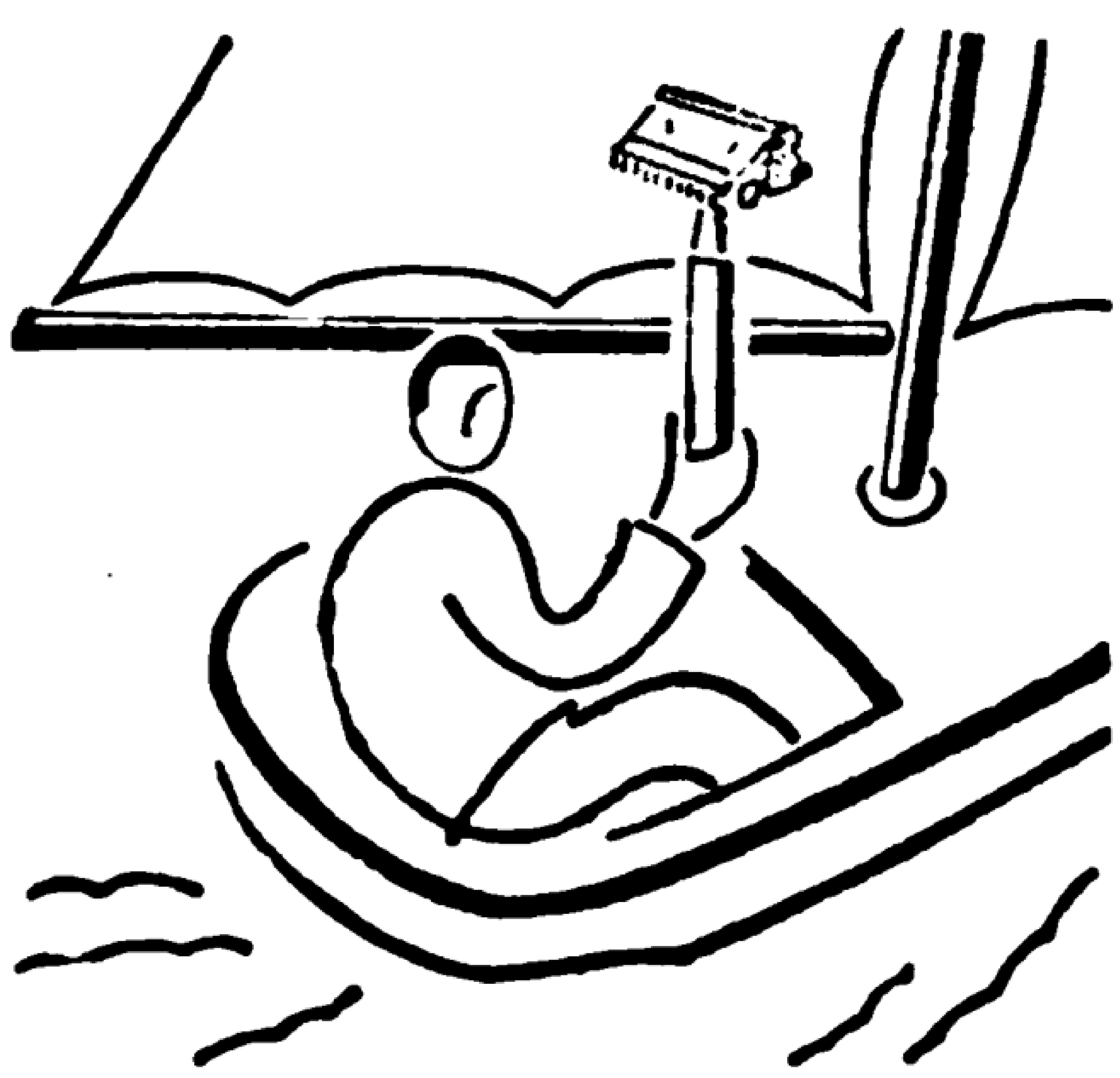
頰上の競漕

海の微風さその爽かさを競ふ
バレイ號の競漕！
＊　＊　＊　＊
剃刀で研器を使れ一枚の刃が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

B型　一三・五〇　以上各種
C型　一・二〇　一・七〇　三・三〇　四・八〇
替刃利用ナイフ（刃一枚付）・八〇

販賣所　大百貨店著名洋物雑貨金物店等
取次所　中央公論社代理部



（カタログ進呈）

東京日本橋通
丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋　横濱　福岡　仙臺　札幌

東京―神田・芝三田・早稲田・丸ビル

マルクス陣營攻防戰雜觀

住谷悅治

一　プレリュード

明治十四年にキリスト敎信者小崎弘道氏によつて、はじめてカール・マルクスの名がわが國に紹介されて『六合雜誌』第七號「近世社會黨ノ原因ヲ論ズ」以來、彼の思想を卷し挾んで幾多論爭の渦卷きが現出せしめてきた。マルクス主義は一方では感激の泉であり、他方では憎惡の的である。まことマルクス主義は日常生活において强力なる實踐的活力を有してゐるものゝ如く、さればこそ讃仰する人もあり憎惡する人もある。マルクス陣營の擁護と排擊。その駁擊と防衞。生きとし生ける社會の人々は、政治家も軍人も會社員も學者も學校敎師も暴力團も等々、マルクス主義が現代社會を最も正確に理解する鍵鑰であると思へるが故か思はざるが故か、默殺することを得ずして必ず何れかの陣營に投ぜざるを得なくなる。よし投ぜずとしても投ぜぬ理由を示さずしてはおさまらぬ。行くにも戻るにも、右するも左するも、社會的人間の眼の前に、もの凄くうろつきまわるのは、げにマルクス主義の妖怪である。

今やマルクス派、反マルクス派の對立は、學問的領域においてもいよいよ尖銳化して來たようだ。傍觀者、同情者であつた學者・論客も、その假面を脫きすてゝ、多かれ少なかれマルクス功防戰に參加せざるを得なくなつた。もちろんイデオロギーの對立の尖銳化はその基底たる現代社會の階級對立の深刻化、そこで衝突して散り閃めく火花の反映にすぎぬものではあるが。

さてマルキシズムはこの國に於ても批評、排擊をもつて始められてゐるとは、マルクス

といふ男もよくよくの因果な生れつき。小崎弘道氏が前掲論文で「社會黨ノ如キ暴戾ナル黨與ヲ釀生シ」ては「政府顚覆ノ危ヲ釀シ」、「社會紊亂ノ禍ヲ萠シ」、「歐洲ノ慘毒ヲ復タ我國ニ流スコトアランカ」などと憂慮されたにかゝはらず、マルキシズムはいよ〳〵流布宣傳され、大正八・九年頃からはわが國の社會思想界の主流を形成するに至つてしまつた。かうした情勢を豫期してか否かはしらないが明治二十九年頃孤々の聲を擧げた『日本社會政策學會』は、いち早く社會主義に反對して立つた。かくて、同學會創立者の一人、博士桑田熊藏氏はドイツ新歴史學派直輸入の理論を以て、共產主義の實現不可能性と、マルクス勞働者窮乏説の誤謬なることを論述した。(明治三十二年『社會主義の謬妄』)。次いで、博士藤井健次郎氏は、雜誌『中央公論』(第二十四年第三號以下)に堂々四回も『唯物史觀』を論じ、結局「マルクスの思想は取るに足らぬ説である」として一蹴された。藤井博士は、ヘーゲル、フォイエルバッハ、唯心論、唯物論、階級鬪爭説、剩餘價値説、唯物史觀等々、多岐に亘つて論述してをり、同時に多くの誤解に充ちてはゐるが、それが明治四十二年の所產であることよりして高く買つてやるべきであらう。マルクス陣營に向つての一騎打の勇士としてもう一つ古るい所を擧げると、明治四十五年の山路愛山氏である。氏の言ひ分にいはく「マルクス派の史觀は、たとへその論陣の外觀は如何に堂々たるにもせよ、畢竟するにダルウヰニズムの敎ふる生存競爭の理法が直ちに人間の世界に行はれつゝありと斷ずるもののみ」と。そして氏は「この如き人生觀に對して本能的反感を有す」といひ、「その氷より冷たき史觀は、無數史上の英雄を誤り些き、無數史上の高き、深き、濕き思想を抹殺せんとするものにして、誠に恐怖すべき謬論なり」としてゐる。これらマルクスを讀まざるマルクス攻擊、ないしはセリグマンあたりを種本とした唯物史觀の批判に對しては、社會主義者も默つてはゐられず、早速『國民雜誌』上で堺利彦氏が應戰し、唯物史觀の初歩から、噛んで含んでやる程の叮嚀さで説述した。

もうその頃は、幸德秋水の『社會主義神髓』も出てをり(明治三十九年)、『共產黨宣言』も出版されてをり(明治四十一年)、その他等、マルクス主義に關する著述も澤山あつたようだが、(大原社會問題研究所版『日本社會主義文獻』を參照)、これと云つてとりたてゝ云ふほどの攻防戰はなかつたようだ。筆者が評論雜誌でも讀まうといふ殊勝な心掛けになつた頃の印象の一つは、大正七年、北昤吉氏がものしたとか、ものしないとかいふ雜誌『中外』の『近世社會主義の檢討』なる一文である。これに對して山川均氏と河上肇氏とが、それぞれ痛烈に駁擊を加へた。兩氏とも名だたる名文家であり、學者であり、大の皮肉屋であるから觀戰者の興味をいやが上にも湧き立たせたものだ。

世の中には、辛辣な皮肉や、多少の荒らい言葉や煽情的の文句が這入つたものは學問的業蹟ではないかのように考へてゐる人が多い。尤ものことだ。だが同時に、こゝに展開される一連の論戰において敵陣と相對して勢餘つて出た言葉の故に、それが學問的にみてよろしくないとは言へまい。かのマルクスの『神聖家族』や『哲學の貧困』や、エンゲルスの『反デューリング論』やレーニンの『唯物論と經驗

批評集』や等々の論戰的著書を見るがよい。（これだつて猛烈な皮肉な荒い言葉の喧嘩的のものがなければ更らに學問的價値が大であつたらうと。然り？否？）それはとも角、山川河上兩氏の北氏駁論は、傍目から見てもマルクス陣營の容易に拔くべからざる強固さを窺はしめたようだ。この堅城を拔く雄者は誰れ。守るものは誰れ。

二　社會民主主義論——福田博士對河上博士——

福田徳三博士がわが國における稀に見る偉大な經濟學者であつたことは今更喋々を要しない、と同時に、日本におけるマルクス研究の率先者であり、マルクス全集の反譯事業の最初の計劃者であることも隠れもない事實である。そして、しかも彼は階級鬪爭否認論者であつた。華々しい第一期論戰はこゝに由來する。

河上肇博士は人も知るマルクス陣營の權威的鬪士。博士は一世を風靡したその『社會問題研究』の、大正八年十月（第九冊）において福田博士に對する論戰の火蓋を切つた。『福田博士の社會民主々義論を評す』で、すなはちこれで、これは福田博士が同年五月、例の『黎明講演集』第二冊に發表した『如何に改造するか』の一文に對する批判である。福田博士の言ひ分によれば、自分は社會民主主義に對抗すべしとは言つたが、それを撲滅すべしなどとは言はなかつた。それを河上博士は、自分が撲滅しろと言つたと言つたのは怪しからぬ、といふにある。河上博士は、『社會問題研究』第一冊に書いた『撲滅云云』をばこゝでおとなしく取消したが、『しかし、何故福田博士が對抗と撲滅との間に、しかく重大な區別を認めらるるや』と突きこんだ。さらに河上博士は、福田博士の『社會主義學説打破の必要』といふ論文を探しだしてきて、對抗と打破とは必要だが撲滅はいけないのは何故かと切り込んだ。その上、福田博士が社會民主主義を『極力非なりとする』理由を吟味した。結局、この論爭は階級鬪爭説に對する福田博士の非論と河上博士の是論との對立となり、福田博士のソシアル・デモクラシーの主張は、階級鬪爭ヌキの曖昧なものであることを明かにした。

その後大正十一年三月より、河上博士は、『社會問題研究』第二十一冊[illegible]三十四冊）に於て[illegible]を評す、と題してよく[illegible]問明した。それは福田博士の『資本増殖の理法と資本主義の崩壊』（大正十年改造十月號、十一月號所載）に對する批評であるが、福田博士によると、資本主義の下では、生産せられた物の消費は増加しなくとも、物の生産は、無限に行はれて行くと云ふ。すなはち「人間の消費の代りに、物の蓄積が限界なく擴張して行く」といふのである。

しかしこれは當時問題になつたやうに、ずつと以前にロシアのツガン・バラノウスキーの唱へ出した所説で、福田博士はツガン・バラノウスキーを種本として論じたのだと言はれ。これを駁撃した河上博士は、西歐に於てツガンを駁撃したローザ・ルクセンブルグに據つたと言はれる。河上博士は意地悪るく（ツ）ツガンの原書と福田博士の論文とを幾多の頁を擧げてその相似なスッパ抜き『福田博士の説、從つてまたツガンの説は……』などと揶揄しつゝ駁論をものされてゐる。河上博士は、その頃大學教授であつたためか、實際

の鬪爭場裡に這入り込んでゐなかつたゝめかごく物柔らかな、チク〳〵肌を刺すほどの、しかし含蓄ある皮肉を以て應酬され、最近の對土方博士、對土田杏村氏におけるが如き當りの強さは見えなかつた。この論戰において、學界ではツガンの所說（從つて福田博士のそれ）の誤謬であることが認められてゐるとのこと。

三　勞働價値說と平均利潤——小泉教授對山川均氏——

これにも優つて堂々たる・內容の豐富な・そして火の出るような論戰は、福田門下より出て出藍の譽れある經濟學界の權威、そして慶大の寶、小泉信三教授と、社會主義の元老株であり、マルクス主義理論家であり、當時運動の隱然たる指導者であつた山川均氏との間に交はされた『勞働價値說と平均利潤の問題』についてゞある。共に溫厚の君子人ではあるが、論爭の度重るにつれ、お互ひに皮肉の投げやりも相當荒くもなつたやうだつた。優しき樂器も當りがつよければ荒き音も出る喩へ山川氏が小泉氏を指して「ボエム・バワアクの竹馬に乘つた若武者が、手に反マルクス主義の銀紙の太刀を振りかざして戰場を驅けめぐる姿」などと評したり、「ボエム・バワアクの債權取立人として、古證文の皺を引きのばして吾々の前につきつける」などと辛辣な皮肉を飛ばせば、小泉氏も、山川氏がブディンの『マルクス學說體系』を飜譯し、引用することを亞流趣味なりとし、或はこれに當てつけて、ブディンを以て山川氏の常備の秘書官なりとし、「山川氏からブディンを差し引くと跡に何物も殘らぬものと假定すれば、その方程式は $A-B=0$ であつて……」などと諧謔を弄しつゝ剩餘價値論を論じたりして讀者を興がらせた。

最初小泉教授が大正十一年二月の『改造』に『勞働價値說と平均利潤』の一論を寄せて、（第一）マルクス說の價値と生產價格との間には、何らの關係がない、價値は究極においても、生產價格を支配して居らぬこと、換言すれば『資本論』第一卷と第三卷に矛盾があること。（第二）マルクスが推究に用ひた論證方法は誤つてゐる、といふ批判をしたのに對し、山川氏は『社會主義研究』五月號に『小泉教授のマルクス批評を讀む』と題してこれを駁したマルクスが『資本論』第三卷で、「商品が價値から離れた價格で賣られる事は決して偶發的、一時的の現象ではなくて、資本の有機的組織に異同があるところで、利潤率平均の一事を認める以上は必然的・永續的に起らなければならぬ現象である。否な却つて一商品の生產價格は、例外的にのみ其價値と一致するものであつて、最も發達せる工業上の生產においては價値は生產價格以下にあるのが通則である」と云つてゐるが、この一句は、價格は引力中心點たる價値に一致しようとするものである、と解すべきだ。しかし、この傾向は、然らざるべからざる理由によつて、常に阻止されてゐる。價格は然らざるべからざる理由により然らざるべからざる距離だけ引力中心點から離れてゐる。そして、平均利潤の高さは、直接に、價格と價値との離れる距離を決定するものである。『資本論』第一卷と第三卷に矛盾があるなどとは、飛んでもないことだといふ。第二に、何らかの假定から出發して、一つの原則を立て、現實が或る「然らざるべからざる理由によつて」一定の距離だけ此の原則か

に隠れて居ることを發見することによつて、與つて先きの假定を再閲することは、人間が宇宙を理解するために常に用ひて居る方法であつて、すべての科學において、多かれ少かれ此の方法が用ひられて居るのは人間の理解の能力は、かくの如き形式で働くようにできてゐるからである。マルクスの用ひた推論方法も、畢竟その一例だといふ。そして、山川氏は、「マルクスの說明が、資本主義經濟組織のすべてゞあるとは思はぬ。恐らくマルクスの解剖刀の屆かぬ箇所もあるに相違ないし、マルクスの解剖刀の使ひ廻し以上に、一層巧妙な使ひ廻しが、ある箇所についてはできたかもしらぬ。けれど、それにも拘らず、全體としてのマルクスの學說が、最もよく資本主義的經濟組織に當て嵌り、最もよくその動態を說明してゐる一事は、マルクス說の健全な證明する最も有力な證據と信ずる」と云はれる。

然し小泉氏はあくまでマルクス說の矛盾・誤謬を理論的に指摘したと言ひ、山川氏はその然らざるを主張して左右に引き上げた。結局は事實が勝敗を決してくれるに違ひない。氣永く待たう。

四 價値論 河上博士對小泉教授・高田博士―櫛田民藏氏の出現

小泉說に對しては高畠素之氏も十一月の『解放』誌上に『マルクス價値說の矛盾』と題して批評を試みたが、いやが上にも、この論爭を賑かなものにしてしまつた學者は河上博士であつた。『社會問題研究』第三十九冊以下三回に亙つて(大正十一年十一月―大正十二年一月)ものした長篇『マルクスの勞働價値說(小泉教授の之に對する批評について)』がそれで、仄かに漏れきくに、同誌の賣れゆきは、これがために驚くべきものであつたとか―河上博士は、平素の蘊蓄を傾けて、マルクスの商品の價値とは何か?より諄々として說き來り說き去つて、『勞働價値說と利潤平均說とが矛盾せりと認むるはマルクスの價値說の誤解に基づく』と斷じ小泉教授に根本的誤謬ありとした。小泉教授は、『改造』の大正十四年四月號、および十一月號に詳細なる議論を以て應酬したが、遂に昭和二年十月の『改造』で『河上博士とマルクス論爭』なる一文を投じ、博士の所論の甚だしく『感情的』であり[illegible]ものゝ如くいきへきと思ふ人[illegible]鉾を引き下げてしまつた。

ところがこゝに河上博士にとつてはやゝ出れにくい論敵が出現した。それは社會學者として學界に令名をほしいまゝにし、また短歌『明星』の同人としては歌人としても認められてゐる高田保馬博士その人である。河上博士がやり切れぬといふ意味は何も議論に負けるのどうのといふのではなく、高田博士の精力絶倫な、あくまで學者的辛抱づよさでコチ〳〵と重箱の隅を楊子でホジクリ廻すが如く、事こまかな攻撃を以て、往年與謝野晶子女史が「青白き情熱家」と評したといふその言葉にも似て、寸分の隙きも見せじとネチ〳〵と詰め寄るその執拗さ、驚くべき多岐に亘る質疑條項、第一、何々につき示教を俟つ、第二、何々につき示教を俟つ、第三何々につき示教を俟つ、第四何々につき示教を俟つ、第五、何々……而も高田博士は「今後とも自ら明かならざれば三たび四たび博士(河上)に啓蒙の勞を煩はさむとするものである」と言つてゐる如き執拗さがそれである。これには河上博士も[illegible]

と閉口したらしい。

高田博士は大正十二年二月『解放』誌上に『河上博士の剩餘價値論』を論じ、河上博士は直ちに三月の『研究』誌上においてこれに答へた。高田博士が河上博士に「その剩餘價値說を撤回し、その學說を全然建て直せ」とまで切言し攻擊した河上博士の論文は、實は、その時から遡つて五箇年前の大正七年七月の舊稿、『剩餘價値の成立』といふのであつた。河上博士は、自ら吳下の阿蒙であるにしても、この間、多少の進步を經驗したから、とおとなしく竹篦返しをした。ソンナことで承知する高田博士ではない。早速七月の『解放』に『剩餘價格に關し再び教を河上博士に請ふ』といふ前後十一節、約五十頁の長論文を寄せ、數々の「示教を俟」つた。折しも盛夏八月の酷暑の砌、河上博士は、少なからず閉口し、一々應戰してゐると自分の勉强ができかねるとて、重要な點を二三答へてサッサと旗を卷いて引き上げてしまつた。高田博士が切齒、扼腕した時はすでに遲く、問題の中心は、もう外の方へ移つてゐた。この間、慶大の加田哲二教授が小泉、高田の諸雄に聲援して『解放』四月號に『マルクス價値論と河上博士の解釋』と題する流散彈をうちかけ、河上博士またよくこれに應戰してマルクス城砦を守護したが、大正十四年一月になつて、突如としてこの論爭を買つて出たのが、人も知る大原社會問題研究所のマルクス學の權威、櫛田民藏氏であつた。その後においてもしばしば見らるゝが如く、櫛田氏の論爭振りは、まことに鮮やかなもので、敵をも、味方をも後へに瞠若たらしめてしまつた。

氏の『大原社會問題研究所雜誌』第三卷第一號に發表した『マルクス價値槪念に關する一考察――河上博士の價値人類犧牲說に對する若干の疑問』は、遂に櫛田氏をわが國マルクス學界の王座に引き据えてしまつたかの觀があつた。氏は、河上・小泉兩氏をさんざん喧嘩させておいて、疲れ切つたところへ飛び出していきなり二人の首をチョン切つてしまつた形である。曰く、今更ら價値人類犧牲說などとホザくのは何事ぞと。かくて氏はマルクス價値法則の歷史的現實性を主張し、價値法則を理論的假定なりとする河上博士および小泉教授は、ともに未だマルクスを語るに足らず、兩者の相違は、河上博士はそれによつてマルクス說を支持せんとするに反し、小泉教授はこれを否認せんとする點に存するのみ。その誤れる點において差異あるなしと。兩客は、はじめてわれに返つた。そして「マルクス價値法則の歷史的現實性」なるものをしみじみと顧みたのであつた。

櫛田氏のこの一論こそ、わが國價値論爭史上のエポック・メーキングな勞作であつた。きくならく、後學、マルクス價値論の研究に志すもの、先づ氏のこの一論より始むべきであるといふ。それはさて措き、つゞいて氏は『我等』第七卷第六號(大正十四年六月)に『資本論劈頭の文句とマルクスの價値法則』を發表し、これを差し挾んで、またもや河上・小泉・櫛田の三雄が、まんじ巴と入り亂れて論戰をつゞけ、河上博士は、自らの誤解せる點を素直に清算し、櫛田氏と共同戰線を張つて小泉氏に立向つた。孤壘奮鬪の小泉氏は『三度』(大正十四年四月『改造』)『四度』(大正十四年十一月『勞働費用と平均利潤の問題を論じ』てマルクス陣營に肉迫したが、共同防衛の城砦、牢として拔くべからず、つゞいて櫛田氏の放

つた巨彈『學說の矛盾と事實の矛盾』(大正十四年六月『改造』)および『マルクスを克服するもの』(大正十五年四月)は、小泉氏に可成りの深手を負はせたものと見るのは、觀戰者の僻目か？

この猛烈な論戰は、大正十五年五月『改造』における小泉氏の『櫛田氏に答ふ』と、櫛田氏の、昭和二年二月『我等』の『小泉氏の答辯』との二文、相當に辛辣な皮肉の投げ合ひも見えつゝ相下らずして一ト先づ休戰した。

五　勞働價値說と配分史觀——土方博士・舞出教授・大森義太郎氏

大正が昭和と改まるとともに兩陣營にもそれぞれ新銳の鬪士が送られ、參加し來つた。その一例は、東京帝國大學經濟學部教授經濟學博士・土方成美氏と同じく同學部教授舞出長五郎學士との對陣である。

土方博士の名はすでにこの節、餘りに著名である。博士號請求論文たるその『財政學の基礎概念』といふ六百頁を超す大著を皮切りに、『我國民經濟と財政』やら『經濟生活の理論』やら『財政學講義』やら、千七百頁もある『日本新制研究』やら、最近の『金融經濟論』等々に至る驚くべき造作多産の學者として周く知られてゐる東大經濟學部の、言ふまでもなく花形。舞出學士の名は、これに反し、土方博士のポピュラーなるに比べて、一般社會の人々には餘り知られてゐない。氏は深く藏して語らざるの類ひ。しかし學問的造詣は俗社會(？)の云々の外にあるといふもの。その論議にかけて博士に讓るものでない。否な、さらに氏の論議の滔々としてよどみなきに敬服した多くの人があるといふ。

氏は昭和二年春三月、東大經濟學部の機關雜誌『經濟學論集』に『土方博士の經濟價値論に關する考察』を發表し、博士の著『經濟生活の理論』上卷中の「マルクス勞働價値說の批判」を批判し、博士の見解の誤謬を指摘し、併せて博士の全體系の據て以て立つ基礎たる配分概念を駁撃した。そこらのマルクス・ボーイの便衣隊などを、てんで相手にせずして、左右田博士や小川博士や高垣教授や河上博士等々學界の御歷々と渡り合ふを快しとする矜恃をもつ博士のことだから、堂々と正面からこれを受けて立ち上がるに堪い筈だ。その當時日本のトト、左右田博士のかの有名な論爭を惹起するに至り、これはまた近頃問題のマルクスかぶれ一派人士の論爭だから、學內、學外の視聽をあつめたこと、かれに劣らぬものがあつた。

土方博士は直ちに『勞働價値說批判』(『社會科學』一卷二號)、『生產關係と配分關係』(『經濟往來』一卷六號)、『マルクス價値論を批判す』(『經濟研究』四卷三號)の諸勞作を以てこれに應酬した。マルクスのいふ「商品の價値は、その生產に必要なる勞働量によつて決せられる」といふことは、公理でなく證明を俟つて始めて承認しうべきもの。しかるに此が證明法としてのマルクスの蒸溜法は、すなはち交換される商品の相方から異質的な使用價値を抽象して殘る所は等質な一般的・人間的勞働であると云ふ。かゝる論理よりすれば、價値の價値は抽象的使用價値一般であるともいへるではないか、と總論しマルクスを論難する。舞出氏は、あなたがソンなことを仰言るのは要するに博士がマルクスの所謂商品價値の社會性歷史性を認識せざるに基づく誤謬であると一蹴する。

剩餘價値論において博士が「資本家が勞働者の剩餘價値を搾取すると言ふことを證明する爲に、機械その他の生産手段は剩餘價値を作出しないとの證明が必要である。……生産手段を使用した時は、使用しない場合に比し一層多く作出し得るは事實ではないか」とつめよる。舞出氏は、マルクスの價値法則が商品勞働力の存在を前提とし、一般に價値の實體が勞働なりとするとは說くまでもない。……博士は生産手段の物理的生産力を以て利潤の淵源と解せられるのであるかと逆襲する。ざつとこんなものだが、何れが、グロテスクの議論を云々してゐるか？　後は略さう。

もう一つ重大なことは博士の獨創にかゝる配分概念であるが、配分とは、博士によれば、人が何らかの價値ありと思ふもの――すなはち評價客體の支配を、人――すなはち評價主體に分つことで、この概念は、人間社會の如何なる時代にも、資本主義・共産主義經濟を通じて通用するものであると。これに對し、舞出氏は、かゝる非歴史的永久概念は歴史的・社會科學としての經濟學の中心概念としてとるべきものでないと斥けられる。かくて『土方博士の經濟價値論再論』『續々・配分經濟學批判』等の長篇を公けにして應酬幾度、互に譲らず、舞出氏は遂に博士を目して「措辭巧遲の弊に陷れず、其の内容に至つてはいよ〳〵ます〳〵問題に關する博士の無理解乃至獨斷は勿論、殆んど全く混亂そのものの表白にして、更にこれを考察するの價値ありや否やさへ本來疑はるべきもの」とし、論爭の鋒を納める。さらに納めるに當つて「論爭の必要とはいへ言辭動もすれば粗野非禮に流れんとするに至ることを衷心慚れつゝあつたが、……これに對する土方博士の態度を見るに、遺憾ながら忠實に問題を理解せんとする風に乏しく、その研究の進展より寧ろ文字を弄び、更に文字より寧ろ空論に傾き、甚しきは無用の陳辯乃至揶揄を以て問題の解決とせられるかの概あり」などゝ言はれてゐるが、舞出氏中々お口が惡るいとの京童の噂。

土方博士がカッとするのも無理はない。十月の『經濟研究』に『マルクスに對する無理解とは何か』を公けにして居丈高になつてマルクス學の支持者に挑戰された。當時成つた大森『マルクス價値論の排撃』の序文に見よ。「學問を徒に神秘化して崇拜するのは偶像崇拜である。經濟學の如き經驗科學は斷じて神秘の殿堂の奥深く祭り込まるべきものではない」。「事物を正しく見るためには、力の限り戰はなければならない。理由を示さずしてマルクスを排し、危險視するものや、徒らにマルクスを偶像視して之が理論を多數の壁によつて強要せんとする學問上の暴力團は、皆共に排すべきである」と。まことに尤も至極のことである。學者たるべきものよろしくかゝる心懸けをこそ持つべけれ。

さてこゝに特記すべきは、櫛田民藏氏と大森義太郎氏とである。といふのは、前者は、同年九月の『我等』に『マルクス價値論の排撃――土方成美君の排撃を讀む』と題して、排撃者は排撃の對象を知つてゐないとて、博士・土方氏をまるで子供扱ひにして、しかも例によつて例の如く克明に、批判・反駁し、後者は十二月の『改造』に名論文『まてりありすむす・みりたんす』を寄せ、驚くべき明快さにおいて、配分史觀に立脚する博士・土方氏の全體系を根本的に反駁し去つた。作者寡聞、その後土方博士が、右の二論に答へたのであるか

どうかをしらぬ。到底答へられぬのだ、などと評する人があるが。それでは土方博士に對するあんまり禮を失した言ひ方でないか。土方門下には逸材多しと聞く。誰れか立つて恩師と共にマルクスの壁壘を抜くものぞ。そしてそれが土方博士に係つてゐる限りは、まづ最後のこの兩氏の論文の克服より初めねばならないのではないかと思ふ。

六 人口論論戰——高田博士對河上博士および向阪逸郎氏

そもそも人口理論の論戰のキッカケは大正十五年の昔に遡る。同年四月の『中央公論』に東大の神川彦松教授が『人口問題の見地より我が外交政策の基調を論ず』なる一文を發表し、同年七・八月號の『經濟往來』に、鈴木文治、北澤新次郎、田川大吉郎、氣賀勘重、高田保馬氏等「權威ある諸大家」(『經濟往來』誌の言)が人口問題に關する斷想を述べたのに對し、河上博士が、その『社會問題研究』(第七十三冊、七十四冊)にこれら諸氏のブルジョア的見解を撫で切りしたことに端を發す。河上氏は高田・氣賀二博士の意見をば、「資本主義的擁護論の現象形態の一つとしての御用的粉裝」たりとし、マルクス的人口理論を以てこれに對立せしめたのに對し、唯物史觀の確立以來、社會學より經濟學に鞍替へしていよいよ自信を持つて來た高田博士は、往年の怨みもあることから、敢然として立つて河上博士に對し、白刃を鞘走らせた。この論爭は、後に河上博士の『人口問題批判』、高田博士の『人口と貧乏』なる表題でそれぞれ公刊され、高田派は河上說(マルクス說)に誤ありとし、マルクス派は高田說採るに足らずと評し、世人はいまだになほその勝敗を未知の行程におくのだといふ!

高田博士の見解を『經濟往來』の隨筆「産めよ殖えよ」に聽こう。曰く、わが國の人口が年々七八十萬人づつ殖えて行くとて騷ぐにあたらぬ、たゞ産めよ殖えよだ、姑息なる救濟策などに頼らなくてもすむ、窮すれば即ち通ぜん、と。殊に經濟的活動が盛んになり、商工業立國の基礎が確立すれば、なほなほ多數の人口を養ふ充分の餘地がある。今日生活難の原因は人口の激增にあるのではなく、歐洲大戰時の景氣につれて國民の生活標準が上昇しすぎたのに、最低い[illegible]化してゐてもこの生活標準が下らないからだ。生活標準さへ下げれば食へないことなんかないのだから、人口増加など問題はない。それどころか、人口増加こそは唯一の「有色人種の白人に對抗しうる武器である!」と。河上博士ならずとも大抵の人はこれをきいてはおどろいてしまふだらうが、高田博士は事實さう云つてゐるのだ。その後發表したややこしい、難解な理論は、要するにこれを理論的粉裝の下に辯解したにすぎぬ。帝國主義的・反動思想家はこゝによい理論的支持者を得て大喜びだといふ噂。

河上博士はこれを批判して曰く、高田博士の所說は要するに、人口がもつと殖え(産めよ殖えよだから)、勞働者の生活がもつと低下せられねばならぬ(生活費が不相當に高いといふから)、そして勞働時間が引き伸され、勞働能率が高められ(國民の努力が足らぬといふから)、結局、資本家的生産の基礎が確立せられゝば憂ふべき何ものもなくなるといふことになる。資本家萬々歲であると。

高田博士たるものこう云はれては何條もつて默すべき。九月および十月の「改造」に、人

口問題反批判』なる一大反駁論を連載し(單行本に採錄されて五十四頁)て河上博士を駁し、複雜なる理論の展開となつた。論爭の要點は結局、マルクス人口法則の妥當性がその一つ、商工業の振興がわが過剩人口の對策として有效なりや否やといふことがその二。河上博士はマルクスの人口法則は資本主義社會に妥當する歷史的法則であること、「商工業の振作は之を現代に具體化すれば資本家的生產の發展といふことになり、この資本家的生產が、今や相對的過剩人口を出して居るのだから、商工業の振作を過剩人口の對策とするは如何にも滑稽である」(『人口問題批判』三〇頁)とするのに對し、高田博士は、マルクス人口法則は、前期資本主義社會(生長期)のみを視野に置けるもので、しかも、この前期の現象をすらも完全に說明するに足らない(『改造』二年九月號、『經濟往來』九月號)、況んや資本主義社會の後期に對して全然妥當せずと。そして河上博士が改造の外、人口過剩救濟の途なしとするのに、高田博士は、獨得の理論を基礎として、生活費の低下、商工業の振興、出生率の遞減、可變資本の減少率の遞減等は、現在經濟組織をそのまゝにしておいても、なほよく、過剩人口を吸收しうるに至るものであるといふのだから、互に相容れる筈がない。

『經濟往來』(三年九月)の茫閑學人(こは土方成美博士の隱れたる筆名であるとの推測をなす人もあるが、その眞僞をしらぬ)の批評によると、高田博士のこの反駁こそ河上博士の誤解を完全に摘出したものであり、またマルクスの人口理論に對して可なり急所を衝いてゐるものだといふ?—

かゝる間、學界において兩博士の論爭を批判したものも度々見られたが、特にこゝに擧げたいのは、**那須皓**博士の『經濟往來』(昭和二年十二月)、に寄せた論文『河上・高田兩博士の人口論を評す』である。同氏は至つて學者的冷靜さを以て兩博士の見解を批判し、その何れとも所見を異にするとて、自らの見解を開陳された。氏の見解は、その著『人口食糧問題』に詳し。それから人口論爭におけるマルキシズムの陣營に現はれた力強き理論的闘士のあることを忘れてはならないと思ふ。それは雜誌『社會科學』(五卷一號、四年三月)に『貧乏と人口——高田教授「人口と貧乏」を讀む』を發表した**向坂逸郎**氏である。氏はおとなしく高田博士の人口理論の內在的批判より始め、博士の抽象的な人口方程式$D \cdot P = B \cdot C$(生產力Pに分配系數Dを乘じたる積は、生活標準Sに人口數Bを乘じたる積に等しい)に出發する人口理論は、歷史性をもち、階級的構成たる資本家的社會の人口理論たり得ざる旨を明快に斷じてをらるゝ。向坂氏はその後、著書『マルクス經濟學說の發展』(改造社『經濟學全集』第二十六卷)の『人口理論』中において、右、高田博士の人口理論の外、現在における人口理論の名著として學界に定評ある**矢內原忠雄**教授の『人口問題』、**那須皓**教授の『人口食糧問題』をも併せ批判された。向坂氏は言ふ。矢內原教授は、少くとも資本主義的社會形態についてはマルクスの理論を採用され、その生產方法の解剖を始められ、マルクスの資本組成高度化による產業豫備軍の成立を說明される。がしかし抽象的・一般的個人の責任を高調して、何時しかマルサスを生かさんとする所に誤謬があるといふ。那須教授の人口理論の前提はロビンソンの孤島物語であり、資本主義社會の構成に對する正當な

る認識を缺いてをり、結局マルサスに陷溺してゐるといふ。マルクス陣營の人に言はせるとこれら三教授は、いまなほ、向坂氏に對して「支拂ふべき借りがある。この借金を返濟しなければならない」のだと。

高田博士に關してもう一つ附記すべきは、左翼陣營よりの一批判で、『新興科學の旗の下に』(二卷七號、四年七月)に吉田秀夫氏のものされた『高田博士とマルサス』の一文である。氏は高田博士が「私の主張せむとする人口理論又は人口法則はマルサスのそれを否定し、またマルクスのそれを否定する」(『經濟往來』三卷九號『私の人口論』)といふのに對し、「その正體を洗つて見れば、僧侶マルサスの代辯者に過ぎぬ」ことを證明し、向坂氏によつて博士の人口論が積極的に成立し得ないことが明かにされるとともに、こゝでは消極的にも博士のマルサス批判が成立しないことを詳細に論じてゐられる。博士は、今や學問的精進に至つて多忙の身、四面に起つたこうした論議をば笑つて過ごされるのであらうかしら？

七　辨證法論戰その一
――土田杏村氏對河上肇博士

京都の一角に蟄居してゐて大いに氣を吐いてゐる評論家に土田杏村氏がある。氏は畫家麥僊氏の令弟、西田門下の逸才、哲學、社會學、文學、藝術、法律、經濟、等々、複雜な社會問題から更らに演劇映畫に至るまで、評論の筆を執る。幾多のその著書論文によつて知らるゝが如く、その古今東西に亙る氏の學識の廣さは、まことに當代の偉觀である。

氏はすでに早くからマルキシズムに對する批評家としての特殊の存在である。一般にお上品な文化主義の哲學者として知られてゐるが、世間並みの化石的哲學者ではなくて、實に潑剌たる生氣を有してゐる街頭の哲學者である。一度筆を執るや辛辣なる皮肉と相當に荒らい文句が口をついて迸り出るので、マルクス陣營の論客にとつては隨分嫌に觸る存在と見え、氏の論文は從來しつきりなしに論爭の種となつてきた。最近においては、何と云つても昨年八月の『中央公論』における『河上博論』の中の辨證法に關する河上博士との論戰であらう。舞出、土方、櫛田、河上、高田諸氏の價値論爭を經つた後のやゝ寂寞の論壇に一寸生氣を吹き込んだ形である。河上肇博士は、これに對し、十月の『中央公論』において「駁論、辨證法的唯物論について――土田杏村氏に答ふ――」といふ一文を公開し、彼は少からずの皮肉まぢりの論戰をつゞけた。土田氏は土田氏で更らに、十一月の『經濟往來』に、『河上氏の唯物辨證法論難』と題して、一層鋭力のかかつた皮肉と揶揄とを以つてそれに答へた。土田氏が、『河上氏の存在形態の辨證法的批判』などといふ奇抜な議論を述べたてれば、河上博士は、「土田氏は河上の收入源を問題とされ、人の思想をがまぐちの規準において批判する」から、土田氏の方法は「がまぐち式辨證法」であるなどと痛烈を飛ばす。兩氏にとつての眞劍な論爭もわれわれ讀者にとつては甚だしく理論外の興味を湧き立たせた。

土田氏は、『河上博論』において、(一)河上氏の存在形態の辨證法的批判、(二)河上氏の唯物辨證法の理解批判、(三)河上氏經濟學の方法論的批判、(四)河上氏經濟學の內容批判といふ區分の下に問題を提出した。そして問題の中心は唯物辨證法であることはいふまでもない。唯物辨證法は、私の主張のいふま

でもなく、世界(社會と自然)の運動法則、その反映たる思惟の法則であり、この一般的な唯物辨證法が社會の領域に適用されたとき唯物史觀であり、自然の領域においては自然辨證法であることは、斯學の先輩土田氏のよく存じてゐる所。が、しかし、これが社會と自然とに適用されて、より具體的に、より特殊的になつたとは言へ、一個人「河上肇氏の存在形態の辯證法的批判」といふのは何のことだらう？　そんな唯物辯證法があるのかしら？

それから次に、「思惟」と「存在」との關係についての兩氏の論爭において、河上博士の唯物的立場は、よく解る。がしかし、河上博士が「かくて現代社會の改造は、言はば地球の改造と同じである」と云つたため、土田氏をして「この場合河上氏が社會科學の科學的性質を自然科學のそれと同一のものだと考へ、社會科學の科學としての特異性が無視せられるならば、それは誤謬であらう」と詰問せしめてゐるのは、「地球の改造」云々を述べた河上博士の表現に罪なしとはしない。

河上博士の辨證法論で、よく問題になるのは例の命題――「日本人は、長掌筋等々においては、西洋人に劣つた人種であるが、長蹠筋等々においては、西洋人に優つた人種である」といふ命題であるが、これに對し、土田氏がこれが果して正しい唯物辨證法的の命題であるか？　とつめよつてならるゝのは當然ではあるまいか。土田氏の言はるゝ如く、「優る」「劣る」は對立して相矛盾するものになり得ない。よし河上博士の言はるゝ如くであつたとしても「日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優つてゐると云ふ矛盾を含んだ一の辨證法的結論」なるものは、そこに何ら事物の過程的、發展的な認識を含んでゐない。單なる矛盾を含むといふことを以て、直ちに辨證法的命題とすることはできまいと思ふ。更にまた、長掌筋と長蹠筋に關する日本人と西洋人との優劣の問題が、辨證法的發展進化をもたらすところの如何なる「對立物の直接の統一」を結果してゐるであらうか？　河上博士の辨證法論にはかゝる弱點があるように思はれる。と同時に、土田氏が唯物辨證法的命題の説明として、「それは矛盾に充ちた、排斥し合ふ、對立した諸傾向を含み、肯定はその反對物たる否定に轉化するものでなければならぬ」と言はれる時、對立した諸傾向において、一が、直ちに他に轉化するといふだけで正しき表現になるであらうか？　唯物辨證法の命題たるためには、事物の過程的な、發展的な認識を含むとともに、その發展を生み出す動力たる對立、矛盾をも認識せねばならないのではあるまいか。資本主義社會において、その中に育くまれつゝある社會主義社會との對立矛盾を認識すると共に、それへの發展的推進力としてのブルジョアジーとプロレタリアートとの對立矛盾を同時に認識せねばならぬのは周知のことであるのだから。兩氏の論戰は一勝一敗か？

何れにしろ兩氏の唯物辨證法論爭に對して、われわれは、それぞれ批判の餘地を與へられてゐるように思ふ。これにつき、河野密氏が昨年十二月の雜誌『大衆解放』に發表した『河上、土田辨證法論戰批判』なる一文は、傾聽に値するものではなからうか。河野氏は右一文を發表するいはれを次の如く記してゐる。

「この短い論文に依つて土田氏の肩を持つて河上博士をやつつけやうといふのではない。唯物辨證法的立場を採らるゝが如くして、然

かも理想主義的立場に逆轉せられてゐる土田氏の立場には多くの非難を入るべきものがあるにも拘らず、河上土田の對戰に於て、屢々河上博士の旗色が惡いからである。マルクス主義と言へば一手專賣の如く世間から思はれてゐる河上博士が、こんな所でボロを出すのは、傍から見てゐても、ハラハラさせられるからである、頭領が下手なあげ足をとられたりすると我々末輩が困つてしまふ。マルキシズムの陣營のために御奮鬪をねがふ意味において敢て拙文を草したわけ」であると。この論爭は河野氏によつて留めを刺された形である。

土田氏についてもう一言附記せねばならぬのは、氏が昨年五月の『中央公論』に發表した『暴力と輿論』であるが、これに對して、新進の奈良正路氏が同年六月の『新興科學の旗の下に』の中で『土田氏のマルクスの曲解の批判』なるサブ・タイトルで痛烈極まる反批判をした。流石の土田氏もこれには傍目も吃驚するほどの荒い言葉の投げやりになつてしまつた。『新興科學』の七月號に寄せた土田氏の『批評へのお答へ』に見よ。それと共に、また奈良氏の『土田杏村氏の哲學を讀む』を見よ。思ひ半ばに過ぐるであらう。私は兩氏の名譽のために、こゝで兩氏が投げやりした皮肉、罵詈嘲笑罵評の數々を列擧するのを差し控へようが、それにしても傍で見ざる如何に多くの凄文句の並べられてあつたことよ！ しかしどちらが先きに惡るい？ そんなことを問ふのは、鐘が鳴つたか、撞木が鳴つたか、の詮議立てをするといふもの。

土田氏は、つとにマルキシズムに對する批判者として知られてをり、多忙の中をよく誰でも相手にせられる。古るくは大正十一年三月の雜誌『文化』の中で「唯物史觀の中に含まれてゐる深山の矛盾」なるものを指摘したが、これは、例の阿部次郎氏とリップスの人格主義について論爭した夭折した秀才竹内仁氏の鋭い批判を受け、更らに竹内氏の發表した『パリサイ人の復活』（『新潮』同年七月號）を中にさし挾んでマルキシスト竹内と論爭を交へた。竹内氏の「土田氏唯物史觀批判」には聽くべき多くのものがあつたように記憶する。土田氏はその後、『現代哲學概論』、『社會哲學』『思想問題』、『現代思想研究』、『Contemporary Thought of Japan and China』などの中で屢々マルキシズムの批判をものしておられる。マルキシストは、徒らに一言半句の皮肉や嘲笑で罵り去るようなことをせず、あくまで堂々と正面から土田氏の批評を爲すべきだと思ふ。それは土田氏の望むところであらう。殊に土田氏は、本年一月の『法律春秋』で、『余は結局マルキシストと何處で思想を相違せしめるか』と題し、（一）唯物論に對して、（二）唯物史觀の原理性に關して、（三）辨證法について、（四）必然論について、（五）實踐的社會理想について、（六）マルクス經濟學について、の六ヶ條を擧げ大手を擴げて待つてゐるのだから。そしてマルキシストが完全に氏を克服し得るならば、マルキシズムの理論的展開が、更らに一步進展するであらうことは疑ひのないことであらうから。

八　辨證法論戰その二

――土方・河上・三木の三氏

序に辨證法についての論戰をもう一言附加しておきたい。反マルクス派の陣營で、第一の勇者と許される土方博士が、その著『經濟學總論』（日本評論社、昭和三年秋）第一章第二

項で「唯物辨證法」を批判し、エンゲルス、プレハノフ、デボーリンに評言を加へたことである。これに對しては最近ますます鬪爭的になつた河上博士が早速『第二貧乏物語』(『改造』四年四月)で「東京帝國大學教授、土方成美氏は、日本經濟學界における第一の勇者である。氏はしばしば極めて不用意なる準備のもとに、マルクス主義の排撃に突進され、その度毎に、至極の勇者でなければできない藝當を、吾々の眼前で演出される」などと凄い書き出しで駁撃された。そして土方博士は「辨證法によれば、物はその對立物に轉化してゆく。……辨證法における對立物は不特定のものである。例へば机の對立物としては、机にあらざるあらゆる物が考へられる」(前書七一頁)と云はれたが、河上博士はそれをば目して「辨證法に對する根本的の無理解を證明する」として、自らの積極的見解を主張された。

ところが同月の『中央公論』に土方博士は『經濟學と辨證學』なる一文を寄せ、辨證法を「經濟現象へ適用することによつて、どれだけ吾々の理解を深めるであらうか」を問題とされ、哲學者「田邊元博士の所說に從つて」これが否定的立場に立つた。田邊博士が『哲學研究』(百四十六號)に發表された『辯證法の論理』を助け船として、ともかく田邊博士が「辨證法は意志の體驗に基づく精神生活の論理に外ならぬ」と言はれたからとて、土方氏は後生大事に辨證法を人間の意思・意欲に依存せしめつゝ、蜜柑を欲するとか欲しないとか、左を欲するとか右を欲するとか、資本主義を欲するとか、社會主義を欲するとか、いろいろの形態で博士の謂ゆる素朴なる疑問の開陳を企てられた。これに對して河上博士は五月の『改造』の『第二貧乏物語』の中でまたまた辛辣なる批判を加へ、土方博士が辨證法を根本的に批判する能力のないことを自ら率直に告白したものであるとし、「蔽ふべくもなき科學的無力の感じ」が「その論文の各行毎にあらはれてゐる」などと痛烈な駁撃を放つてしまつた。土方博士たるもの、これでは全くやり切れまいと推察するが、河上博士に言はせると、ブルジョア經濟學者は、一般的理論の領域を避けて、特殊的な領域に於ける事實的研究に籠城せざるかぎり、氣の毒ながら、辨證法批判などといふ難事業に科學的無力を自ら告白しなければならないのだといふ。(『改造』八八頁)

わたしは、こゝでは、大體同一陣營内の論爭と見らるべきものは、一切無視してゐるのであるが、問題が重要であるが故に、ちよつと附記しておくが、河上博士の理解してゐる辨證法については、三木清氏が、本年一月の『經濟往來』で『辯證法とその俗流化』といふ一文で批判を加へてゐるし、またその三木清氏の輝ける理論に對しては、更らに左翼陣營よりの有力な批判があるが、これらも、もちろんマルキシズムをその純粹性において保持しようとする論戰に相違ないが、この陣營内での理論鬪爭となると問題は更らに甚だしく複雜、多岐になるから左に特に三木哲學批判に關して主なる文獻を擧げておく。

一、佐伯峻平(服部之總)氏「唯物辨證法と唯物史觀」(昭和三年十一月、マルクス主義講座、第十一、第十二)

二、三木清氏「唯物論の現實形態」(昭和四年二月、「新興科學の旗の下に」)

三、土田杏村氏「人間學的唯物論と其の批判」(三木清氏の所說に就て)(昭和五

五四月、「思想」、唯物論研究)

四、加藤正氏「エンゲルスの自然辯證法」邦譯序文(岩波文庫)

五、服部之總氏「觀念論の粉飾形態」(三木哲學の再批判)(昭和五年五月「思想」)

九　ロビンソン的マルクス主義と資本論の冒瀆

——大熊氏對藤井氏、二木氏對猪俣・三木兩氏——

マルクス主義の流行時代を潮に、新發見を公開して大向ふの喝采を博さうとした、のかどうか、その邊のことはこの筆者などの窺ひ知るところでないが、「およそあらゆるマルクス祖述者及びマルクス研究者が、そのいかなる側からなりとも當然手を觸るべくして手を觸れずにゐたところの一點」、そしてそれが「資本論の全建築の根底にうづめられてゐる一つの奇體な柱、誰れも手を觸れたことのない、觸れても氣のつかない柱」と號するものを披露に及んだところのものに、小樽高商教授大熊信行といふ方がゐる。マルクス主義の極祕を公開しようといふのだから、マルクス陣營の人々の駭耳をおどろかしたのも無理はない。昭和四年六月のことだ。雜誌「改造」に載つた「マルクスのロビンソン物語——價値法則の背後に在るもの」。

「資本論の全建築が據て以て立つ根本的な、靈驗あらたかな柱とは何? ——それは一箇のロビンソン物語だ」と。これにはマルクス陣營の總兵一時にアッと叫んだといふ。しかしその「アッ!」は、大熊氏の豫期した「アッ!」とは「アッ!」の意味が大分違ふのだといふ。大熊氏の新發見によると「マルクスにおいては、各各の歷史的時代はそれに特有な法則を有してゐるといふ意味の歷史的法則以外に、人間生活のあるところに必ず廢除すべからざる他のもう一つの自然法則の存在が考へられてゐる」。この法則は非歷史的な「恒久な人間の欲望を基礎とする配分法則」であるといふ。太初にロビンソンありき。そしてその非歷史的ロビンソン生活が、歷史的な生活に移り、その昔の非歷史的時代の人間生活の法則が、人間生活のあるところ必ず、從つてもちろん歷史的なる人間生活にも行はれてゐる! と。かくて配分學說! かくて配分原理の把握! かくて價値法則の背後にあるものをしつかりと把握せよ!

マルクス陣營からは猪俣津南雄氏が新しい武器——[illegible]わけは簡單だと云つたかどうか知らぬが、さ揚げて「新興科學の旗の下に」六月に立つて『ロビンソン的マルクス主義』を論駁した。氏は「ドンキホーテ式マルクス主義排撃者もゐないが賢明な修正論者もたへない。修正論者のやり口は批判的・學究的・同情的・教訓的等々鮮やかさをもつてゐる如くであるが、つねにマルクス主義の階級性・歷史性を抹殺してゐると述べ、大熊氏もその一人として目指してゐる。そしてマルクスはロビンソン物語を大熊氏の如き意味に言つてゐない。ロビンソンを想定したのはマルクスでなくて、ブルジョア經濟學者だ。だからマルクスは「經濟學者はロビンソン物語を好むから、先づロビンソンの島の生活を見よう」と書き出してゐるのだ。そしてマルクスが「しかもこれらの諸關係のうちには價値のあらゆる本質的な規定が含まれてゐる」と結んでゐるのは、ロビンソン生活と雖もそれがわれわれの生活する資本家的社會にまで發展したとするから、われ

われの社會の價値法則を成立せしめないような先行者であつてはならぬのだからである、と反駁してゐる。

氏はまた曰く「マルクスは大熊氏の考へる如き非歷史的な法則を經濟學の最奥理論だとは斷じて考へなかつた。マルクスは非歷史的な抽象的一般を否定しないが、しかしそれが科學的に成立の意味を有するのは、現實の歷史關係に關連せしめられる限りに於てである。……（「經濟學批判序說」河上・宮川譯五六頁を見よ――筆者）……ロビンソンによつて資本主義經濟が說明される以前に、資本主義經濟の理論によつてロビンソンが說明されてのみ、ロビンソン的抽象の意味があるのだ」と。氏はかく輕機關銃で射擊しておいて、敵が再び進擊する姿を見て「マルクス主義修正の意圖は稚氣がある。愛すべきだ。だが今後は少し考へてほしい。新發見などはよして、まじめに經濟學を研究してほしい。稚氣が高まつたらラスキン・モリス論位で氣焰をあげたまへ。罪がなくてよい。追々暑さに向ふ。インテリゲンチヤの銷夏の讀物としてよさそうだ。マルクスを讀むならば ロビンソン 物語などに上氣して、ラスキンと同じく甘いと云ふ了見を起さないで。第一頁から眞劍にこつこつ讀みたまへ」と一握の毒ガスを投げかけて、さつさと歸營してしまつた。

＊　　＊　　＊

各方面に戰塵うづまき、亂射亂擊雨霰と飛び交ふ巷に、年も暮れようとする十二月、早大教授・經濟哲學者として令名かくれなき二木保幾氏が躍り出でた。『中央公論』に「マルクスの價値論に於ける平均觀察と限界原理との矛盾」といふ一論文を提げた雄姿。敵も味方も片唾を飮む。しかしマルクス陣營には、莞爾としてこれに對する鬪士に事かかさぬが如くである。早速、五年一月の『中央公論』においてこれを駁擊した。その一つは、久しくマルクス陣營内にその人ありと知られてゐる理論鬪爭の鬪士、猪俣津南雄氏の『誰れがマルクスを矛盾させたか――一つの反批判、並びに地代論への一寄與として――』（他は例の三木清氏の『資本論の目的――二木保幾教授の論說を讀みて――』である。

猪俣氏も云はれてゐるように、二木氏の「この論文もまた、資本論の矛盾を指摘せんがためにに書かれたものだが、資本論の矛盾指摘の新人として登場された二木氏は、氏の先輩に比すればたしかに一つの進步を示してゐる。ボェム・バヴェルク＝小泉信三＝土方成美の諸氏が、資本論の矛盾として書き立てたところの荒唐無稽なその矛盾は、二木氏によつてはもはや矛盾に非ずと卒直に公言されてゐる」。と即ち二木氏の言ふには、資本論第三卷に於て生產價格と一致しない價値、即ち生產價格以上或は以下であるやうな個々の商品の價値は、第一卷に於ける社會的平均的に必要なる勞働量に依つて決定される價値でなければならぬ。勿論これは矛盾を意味する關係ではない」（二木氏論文一四頁）と。猪俣氏によれば、「だが、此矛盾ならざるものを矛盾と誣ひた學者、論客に對する理論鬪爭は、二木氏の出現に先立つてすでにマルキストによつて徹底的に戰ひぬかれたのであつた（なかんづく日本では櫛田民藏氏の諸論文によつて代表される）。從つて、二木氏に見らるゝ一進步は、反マルキスト陣營全體の公然の一步退却に過ぎないことは言ふまでもない」といふ。二木氏の進步的形態において看取さる、反マルキストの公然

なる一か否か？

二木氏は如何なる矛盾を「資本論」に見出したか？ 二木氏によれば、「要するに資本論第一卷から第三卷の前半まで、平均觀察を一貫させて來たマルクスの價値論は、第三卷の後半における較差地代論に於て、市場價値は最劣等地卽ち限界耕作地の個別的な生產價格卽ち限界生產價格或は限界價値に統制されると說かれるに至つて、竟に較差地代を剩餘價値の分野以外に押しやらざるを得ないといふ一の矛盾に陷つた。此の矛盾は、畢竟平均觀察と限界原理との矛盾に外ならない」（十九頁）。二木氏の分析は難解を極めてゐるが猪俣氏は、「平均觀察と限界原理との矛盾」といふ二木氏の提出された問題より發足し、よくその跡を辿つて一々批判し、二木氏の謂ゆる矛盾を解消せしめ、「平均的觀點と限界的觀點との統一」、「價値法則と地代法則との統一」を導き出し、それを以て「資本論の現實の姿」なりとした。誰れが資本論を矛盾させたか？ それはマルクスでなくて二木氏の翳膜であるーと。

三木氏も猪俣氏と同じ點を中心的論點として取り上げ、マルクス學說における「平均」の[illegible]し、資本論は今[illegible]貫いてゐるものが、要するにかの平衡の法則といふ一つの方法論的なものであることを認めずにはゐられないとし、いはゆる限界原理が、これに抵抗しうるものでないことを示した。そして二木教授の疑問なるものは、すべて教授のマルクス理解の罪なる不淸潔から來てゐるやうに思はれる」と云はれる。今や反マルクス派の陣營よりの攻勢（猪俣氏の言によれば絕望的逆襲）に對するマルキストの理論的進出（猪俣氏によれば暴風雨的な征服過程）が如何に展開されてゆくであらうか。新論爭はいまわれわれの眼前に闘はれつゝある。

十　大學の顚落・非顚落論
——森戶・河合兩氏の論爭——

昨年より本年にかけての論壇に最も華々しい論爭の火花を散らせた一つは森戶辰男、河合榮次郞兩氏の間に交はされた「大學の顚落」の問題である。片や、大原社會問題硏究所にその人ありと知られてゐる森戶氏、曾て東大の講壇に立たれた學者であり、片や現東大の教授中、最も溌溂たる社會思想家としても隱れもなき論客である。兩者共に人も許し己れも許す論壇の雄、非常學生時代より口も八丁手も八丁、[illegible]いた間から、一歲[illegible]下い人が[illegible]兩人である。しかも問題は「大學は顚落した」「イヤ顚落せぬ」、「大學に於ての自由はない」、「イヤある、現にマルクス主義教授もゐるではないか」といふ興味タップリの題目である。その論爭が觀衆を唸らせぬ筈はない。

しかし、この興味あるテーマが最初ハッキリと論壇に投げかけた人は、實は大森義太郞氏ではなかつたか。大正三年、氏が東大の教職を弊履の如く抛つて間もなく、六月の雜誌『改造』に發表した一論「大學の顚落」がそれである。大森氏の筆の冴えが、その歯切れのいゝ、銳い皮肉を盛つた明快な文章が、問題の興味をイヤが上にもそそつたらしい。同年七月の『中央公論』には室伏高信氏の「大學無用論」が出るし、十一月の雜誌『經濟往來』には、社民の赤松克麿氏の「帝大教育の破綻時代」といふ一文が載つた。追て昭和四年九月の『改造』には森戶辰男氏のあの有名な「大學の顚落」といふ長篇が現はれ、十月の『改造』には、帝野本吉氏の『東京帝國大學論』が載つた。いづれも大學の顚落を論じてゐるが、たゞ赤松氏の議論は、曾て氏が[illegible]

れ〳〵なアジッタ頃の生氣は微塵もなくたゞ大學の教育年限の短縮、教育方針を職業教育へ轉化せしむること、帝大の特權廢止、これに關聯して文官任用令の改正等々三四の大改革によつて大學の沒落を救濟しうるかの樣に當局に警告を與へてゐるにすぎない。もちろん、氏は、そこで國家の役人を作る目的で創設された大學から共產主義者が出たり、氣位ひの高い、特權意識の拔けぬ職業的に無能な高等浪人群が輩出したりすることは帝大敎育の破綻であると云つてはゐるが、大學の頽落に對する認識は、他の論者に比して著るしく薄弱である。

さて餘り戸口が長いと、支關に差しかゝつて欠伸が出る。頽落論の本題に入らう。そもそも今度の論爭の起りは、昭和四年九月九日の『東京帝國大學新聞』に揭載された教授矢内原忠雄氏の一論『大學の使命』と、河合榮次郎氏の同年十月の『改造』に寄せた一文『嫌惡すべき學界の一傾向』とに對し、森戸氏が、右兩氏の論文を批判した一論を、十月十四日の『東京帝國大學新聞』に發表したのに初まる。森戸氏の論題は『大學の運命と使命　矢内原・河合兩教授の大學に關する論文にふれて』といふ。森戸氏が本論を草するゆえんは、矢内原、河合兩氏が共に、森戸氏のものした『大學の頽落』に關說してゐるが故であると。（矢内原氏は言外にある程度の肯定を含蓄し、河合氏は森戸氏に反對を示すものゝ如く）。

低級な野次や卑しい中傷や、荒らい皮肉や鬪爭やを蛇蝎の如く嫌ひ、學界にかうした嫌惡すべき低劣さの侵入することを極度に排し身をば高潔に保たんとする河合氏であるから正面から堂々と批判され、戰を挑まれて尻込みするやうなケチなことは斷じてしない。殊に相手にとつては寸毫も不足のない森戸氏である。早速十二月二日、および九日の二回に亙つて、同新聞に『大學の運命と使命　森戸辰男氏に答ふ』といふ長論文を寄せた。森戸氏のマルキシズムの立場よりする大學の本質論大學の必然的頽落論に對立して、河合氏は自由主義の大旆を振りかざし、大學本來の理想主義的使命なるものを設置して大學の頽落を否定し、その存在と意義とを揭揚し、森戸氏の所論を痛烈に駁擊した。しかし森戸氏もさるもの、更らに、筆硯を新たにして、本年一月二十七日の同新聞に『大學の復興――河合教授に答へつゝ』と題して、河合氏のそれを克明に反駁した。兩氏の該博なる知識と多岐に亙る內容とを一々引用記述する暇もない餘白もないが、論點を窺ふに、（第一）自由主義哲學＝理想主義哲學よりする河合氏の、マルクス主義哲學の論駁。これに對する森戸氏の河合氏が據る觀念論的立場の排擊。（第二）研究の自由に卽して見た大學の現狀の認識ならびにこれが對策に關する論議。（これが論爭の重點で河合氏は研究の自由ありと云ひ、森戸氏はそれを否定する）（第三）自由主義に關する所說（英國派社會主義者としての河合氏の主張と森戸氏のこれが批判）等が主なる題目である。

マルキシズムの批判に當つて、その哲學的根據を根本的に批判せねばならぬのは理の當然で、河合氏が、これを企てられたのは正しい態度であり、方法である。これに反し森戸氏が、哲學的論議の生產的意義を疑ひ、河合氏の挑みにも拘らず回避してゐるが如き態度は、味方の陣營からも批難されるのを免れないやうである。しかし、森戸氏の言ひ分にも一應理由のないわけではないやうだ。『河合氏は、時間、空間、必然、自由、理性、悟性、理想、當爲、認識の目的、條件等々、數多

くいかに理性が必然に關係することかにせよ、主觀捨々と一因果必然の關係の支配する領域は唯現象の世界にのみ限局された。理性も現象の世界に臨せず、從つて必然の系列の外に立つ。故に必然の關係の認識は使命の實現に容喙しうる權能はない」と結論される。しかしこのカント的理想主義哲學の武器は丁度十年前、かの左右田博士によつて――ここでは哲學者の權威を以て――我國の社會思想界に移植せられて以來、すでに幾度となく、マルクス主義に向つて、あるひは巧妙に、あるひは拙劣に、用ひられ來つたものであり、その效果についてもほゞ試驗ずみのものである。すなはち、それは俗流化されたマルクス主義に對して幾許かの痛手を與へた以外、マルクス主義の本質には何ら重要なる傷を與へなかつたのだ」と。だから、今更ら河合氏が、この古色蒼然たるカント的理想主義哲學でふ大刀をふりかざしてマルクス主義につめ寄られても、そんなのは默殺してよいといふ。一應は尤もである。

なぜならば讀者の多くもまた河合氏のわづらはしい觀念哲學の論議にはたびたび閉口されてゐるであらうから。しかし、一定のシステム[illegible]でないらしい河合氏の議論と、同じく本人の說となほ長々哲學的論爭を交へることが如何に不生產的であらうか」と一蹴し、論難する森戶氏の躊躇と回避的態度には、敵も味方も不服であらう。だから河合氏をして最後の論文で「私のえた收穫は絶無ではなかつた。その一つは哲學に素人なマルクス學徒があり得ることを發見したことである」と凱歌を奏せしめてゐる。かうしたことは恐らく森戶氏の本意ではあるまい。かつて大森義太郎氏によつてでありすむす、みりたんなる一論で土方博士を批判克服した後で「もし土方博士が答辯されたならば、わたしは幾たびたりと筆を執つてこれを粉碎するであらう」と述べられたことがあるが、それが眞に戰鬪的マルキシストの態度ではないであらうか。

さて、本筋に返らう。森戶氏は、河合氏の觀念的立場を一蹴し、當面の問題たるものは河合氏の論ずるやうな「當然あるべき大學」でなくて、飽まで「現實の大學」であり、河合氏の言ふ抽象的な「學問の研究および教育の機關」でなくて、わが國法に規定せられ、所轄官廳の監督の下に立ち、その費用を資本家國[illegible]て資本家國家の支配者に從屬させられてゐるやうな「學問の研究および教育機關」についてゞある、としてゐること、又河合氏が一般に言から遊離した思想家に人間の本性の立場から抽象的に大學の獨立性と研究の自由を高唱してゐるの誤れるのに反し、森戶氏があくまで社會的見地から具體的に論じ、大學が文化的指導的地位より顛落したこと、大學に於ける社會科學研究の自由なきことを指摘してゐる事は明らかに正當であると言はねばなるまい。

河合氏は躍起となつて、大學は現に自由である。數名のマルクス主義教授もゐるではないか。森戶氏が大學の不自由を主張するならその證據を擧げよとつめ寄られる。森戶氏は之に對してアッサリと、すでに何人かの大學教授が、マルクス主義者たるが故に――表面の口實はともあれ――大學よりの退出をよぎなくされたこと。彼らが退出に方つて一樣に大學における研究の不自由を聲明してゐること、更らに、教師任命に關する文部省の干渉の承認は學無人物よりも、マルクス主義者か

否かに懸つてゐることが略々明瞭になつてゐること、マルクス主義者をば、その學識如何に拘らず助手、助教授、教授に採用しないことが教授會における有力教授間の暗默の諒解がなつてゐるかに思はれること等を擧げて、「さうした今日、河合氏が現在の大學が自由であると見えを切られるの不當をなぢつてをられる。河合氏がこの見解に對して不滿であるのは言ふまでもあるまいが、しかしマルクス主義の克服をその使命と感ぜられつゝある河合教授の「研究自由の主張」よりも、自由の被害者たる退出または學内マルクス主義者の有言、無言の證言に據られるといふ森戸氏の主張がより實證的であり、より根據のあるものであり、讀者がより承服するであらうことは言をまたないと思ふ。

また河合氏はマルクス主義者が大學頽落の必然の運命を強調するなら「その歸結は、大學を放擲して旗を卷いて引き揚げるか、あるひはあるがまゝに大學を放任せよといふことになる。誠にマルクス主義者の必然の運命の歸結は一個の宿命論に墮し終る」といふ。森戸氏は言ふ。イヤ違ふ。「現在の大學を頽落に運命づけたものが一定の社會的存在である以上、大學復興の道はこの社會的存在を一定の方向に向つて變革することで、大學の復興を希ふものは、社會的存在の變革に努力すべきだ。自然的必然性と社會的乃至は歷史的必然性とを混同してはいけない」と竹箆返しをしてのち、マルクス主義大學政策を開陳してゐる。

序に河合氏の自由主義に對しては、昭和四年六月の『思想』誌上で、矢内原忠雄氏が克明な批判をしてゐる。それは『自由と自由主義』と題したもので、筆者の寡聞、未だ河合氏の是・に對する答辯を聞かぬ。答辯できぬ等と推量する事は甚だしく河合氏に禮を失する言ひ分であるが、讀者をしてかく推量せしむる程それほど、矢内原氏の批判は適切なもののやうに思はれた。森戸氏は曰ふ「河合教授の自由主義觀の根本缺陷はそれが、その下部構造としての社會的存在ぬきの自由主義たることに存する。その社會的背景として新興資本家階級を持たず、經濟的・社會的自由主義とは何等必然の連絡を持たぬところの、理想主義の無限の展開性から導出せられた對立的社會思想たる社會政策とも社會主義とも一體系内に仲好くへい立しうる所の思想體系としての自由主義！　それは猿首、虎身、蛇尾、鳥翼のかの怪物を想起せしめないであらうか」と、河合氏にとつては少々痛い皮肉ではあるが、多くの讀者の肯綮に當つたものではなからうか。

河合氏もまたさる者、本年二月以降帝大新聞、三二八號から四回に亙つて『大學の運命と使命――再び森戸氏に答ふ』と題しいづれ劣らぬ長篇を以てこれに應酬した。それにはもちろん傾聽に値する多くのものがあるが、「大學頽落論」の限りにおいては、依然として（河合氏にとつては不服であるに相違ないし、マルクス陣營内よりして森戸氏の頽落論の方法論的根據に重要な批判の餘地はあらうが）森戸氏に軍配扇の上るのは僻目か。筆者らの收穫は、河合氏の立場が、この論爭に於て愈々明瞭になつたことである。氏は公言される。

「私有財産制度の撤廢を主張する意味においては、私は社會主義者である。……私がマルクス主義者と異るところは、その思想の下部構造に唯物辯證法、唯物史觀を排して理想主義を取る、これその一。無産者獨裁を排して言論自由主義を取る、これその二。暴力革命主義を排して議會主義を取る、これその三」と、なるほどかうした社會主義はマルクス主義と相容れぬ筈。

森戸氏は四回に亙つて長文をものし、結局

ま[illegible]適當！と[illegible]にもまれて[illegible]く
して東西に缺た[illegible]つたのまれるに[illegible]。『以上の論述によつてほゞ推斷せられ得るやうに、河合教授に論駁さるべき私の所論もマルクス主義も十分理解せられずに勝手な思ひなしを掲げてこれに論駁を加へ、また社會的事實を正視して如實にこれを確定把握する代りに抽象的觀念よりの演繹をもつてこれにかへられてゐる。もし眞理性の基準が現實への照應にありとせば思想上の現實にも實社會上の現實にも適應しない河合教授の提説はそれが何者であれ少くとも上記の眞理性より相距たる極めて遠いといはなければならぬ。河合教授は卓拔な理想主義者でもあらう、「その判斷はその道の專門家にこれを讓る」また有能な大學政策家でもあらう「これについては後世の大學史の筆者が適當に評價するに違ひない」が、教授が社會科學者として、少くとも大學顛落の問題に關聯して私と交渉を持たれる限りにおいては――私の確信しうるのはまさにこの範圍においてのみであるが――遺憾ながら私は教授の社會的認識において、かの卓拔をもかの有能をも見出すことができなかつた。たゞ私は[illegible]ことによつて[illegible]個人的學殖學才に關して何事をいはんとするのではない。反對に私は教授の豐富なる學殖と惠まれた學才とにいつも敬服してゐる者だ。故に私はいふ。この學殖と學才とをもつてして、なほ教授をして社會科學上の認識において、吾人をしてかの多くの「卓拔」と「有能」を見失はしめた所以は、實に教授の學問的立場にある、と。……次に個人的には多くの恩こそあれ、唯一つの怨のない畏友河合教授に向つて、多くの非禮を陳謝せねばならぬ。思想と生活態度の對立と眞理の忠誠が是をよぎなくせしめた。なほこの問題に關してはいふべき重要事はほゞ盡したと信ずるので、今後この問題に關して三度論陣を張る意志はない』と。

これに對して河合氏も四回に亘る同樣に長い論文を結んで曰く。

『森戸氏は三度論陣を張る意圖はないといはれた。私はいふべき諸點を尙殘してゐる。然し私の攻學の豫定もまたこの種の論爭に永く囚はることを許さない。私もまたこれをもつて打切りとしたいと思ふ。

答辯の回避と論點の引き外し、誤解と曲[illegible]らず、私はここに深い[illegible]を[illegible]して、森戸氏の[illegible]を閉じることが出來ると思ふ。それて「大學を顛落させてはならぬ」といふことであり、「自由的精神」への信仰である。私は氏の胸の鼓動を感ずることが出來る。氏と別れて十年餘、この一點において氏の懐らざるを喜ぶ。行徑の異なるに拘らず、目標は必ずしも異らない。この一事思ひ來れば我れこの生の倚捨て難きを思ふ。往[illegible]を惡意に解する理由は私にごうもない。公人としても、私人としても、今後も永久に君よ幸に指教を惜しみ給ふことなかれ」と。

筆者は、必要よりして兩氏の論爭を再三繰返し掲讀したが、讀み來つて一度この結論に至るや、森戸氏の理解ある態度と、河合氏の純眞なる心根とを想ひ、不覺のうちに眼底の熱くなるのを覺えた。互に相容れざる堂々の論陣を張り、勢ひ除つて相當に當りの強い言葉も投げやつたやうであるが、兩氏のかゝる學者としての、また私人としての[illegible]情と風[illegible]しい態度とは、敵・味方の陣營よりそれぞれ稱はれるゆえんであらう、それは兎も角、大學顛落論は、われわれ觀客にとつて近頃にな

い有益にして興味ある論爭であつた。

十一　フイナーレ

思ひ出づるがまゝに、手元にある僅かな材料を探し出して書きつづつてゐるうちに、何時しか豫定の紙數をとうに超過してしまつた。重要なそして興味ある攻防の戰が、あちらこちらで盛んに火花を散らし、血煙りをたてゝゐるのを見やりながら、わたしはもうペンを擱かねばならぬ。

當然書くべくして書き遁れてしまつたものが澤山ある。例へば河上肇氏が『反動學派の陣營における窮餘の一戰術としての事實の虚構』と題して、福田博士が『改造』（昭和二年、十二月）に「アリストテレースの流通の正義―附、河上博士等譯資本論中或重要なる不正確又は誤譯について」に對する反駁、土方教授の『地代論より見たるマルクス價値說の崩壞』（『經濟學論集』六卷四號、三年四月）なるマルクス說の攻擊。これに對する河上博士の『マルクスの絕對地代論』（『社會問題研究』八十六冊、三年七月）、および『勞働價値說に對する異論の分析』（『資本論入門』一卷、四分冊、三年七月）における防衛と反マルクス主義への反擊。高田博士の『剩餘價値第三論』（大正十三年十二月『改造』）を中心に、河上博士と高田博士の資本蓄積論に關する長き論爭。（河上博士『生產手段と消費手段とにつき高田博士に答ふ』（『社會問題研究』六十九冊、七十冊、大正十五年三月、四月）、高田博士『資本蓄積論に關する第二論』（昭和四年一月『改造』）等、何れも長論文白熱の論爭である。更らに河上博士の『經濟と權力―高田教授の「勢力說」の批判』（昭和四年四月『中央公論』）。また河上博士のかの『マルクス主義經濟學のために―土方教授の謂ゆる「盲信的マルクス主義の克服」について』は、土方博士が、經濟學全集刊行の計劃に際して「こゝ數年來我國の讀書界はマルクス學說の洪水であつた、その結果かの忌むべき共產黨事件を生んだのである」と宣言（放言？）されたのに對し、燃ゆるが如き階級的意識と學者的良心とを以て「此の如きは、：：共產黨事件に關する一般民衆の漠然たる恐怖を利用してマルクス學の普及を妨害せんとする意圖に出でたるものと解釋するの外ない」（『マルクス主義批判者の批判』六四頁）とて斷然立つてマルクス學を防衛したものや「不偏不黨」の理論と「眞に學者的な態度」とで（本庄榮治郞博士の言）學界に乘り出した京都帝大の本庄博士、黑正巖博士等歷史學派のマルクス陣營への肉迫（本庄博士『日本經濟史概說』―一九二八年四月。本庄・黑正兩氏共著『日本經濟史』―一九二九年七月）。これに對する反擊として、小林良正氏の『歷史學派はどこへ行く―本庄氏の近業を讀む』（『經濟往來』三卷、七號）、瀧川某氏の『史學方法論に於ける維新的折衷論―本庄・黑正兩氏共著「日本經濟史」における史學方法論』（『新興科學の旗の下に』二卷十一號、四年十一月）殊に新銳なる東大助教授土屋喬雄氏の發表した『中央公論』（五年三月）における一論「本庄博士の見解を克服す―日本經濟史の諸問題」等何れもよき論爭の所產であらう。

またマルキシズム攻擊の最近の理論戰に登場し、たゞ何んとなくその勇ましい感じに微笑んでやりたい學者に九大教授藤澤親雄氏と慶大教授の氣賀勘重氏とがゐる。前者は『共產主義排擊の根據』の著者、後者の特徵は、文書戰よりも寧ろ辯論戰へ參加されることである。といふわけは、氏はいつぞやはるばる京都まで遠征し、京都大學では河上博士の理論を駁擊し新銳の京大學生の追及に惱んだとか惱まぬとかし、府立一中の講堂ではトラックで運

發された勞働者の前でマルクス・レーニニズムの要義を講演されたよし、もれ承つてゐるから――が、四年十一月の『法律春秋』で『河上博士のマルクス無理解と資本論誤譯』と題してマルクス征伐の砲彈が放たれた。その彈丸は命中したか、せぬか、京都邊には落ちたと見え、これに對して同誌十二月號に『櫛田教授の『資本論』無理解』といふ逆襲があらはれた。力餘つて相手欲しさに悩んでゐるとかいふ櫛田教授は得たりかしこしと、更により長論文を草して本年一月の同誌に寄せた。が櫛田教授との論戰は得らるべき學問的效果より、失はるべき犧牲が遙かに大であるからとかで、中止したといふ噂がある。マルクス陣營の誰かよ。さう默殺しないで、この藤澤・櫛田兩氏を、まじめに相手にしてやつてはどうか。

それはさて措き、最近における評壇の傾向を一瞥しておかう。今や唯物辨證法の高度な論爭を經て、科學の階級性が甚だしく論議の的となつてゐる。マルキシストの側からは史的唯物論の立場から、歷史的・社會的諸科學、一般の階級性が強く主張されたが、自然科學については餘り問題にしなかつた。ところが、最近數學の方面から小倉金之助博士が、『階級社會の數學』(『思想』四年八月)、『數學の社會性』(『改造』四年九月)といふことを唱へ、同時に三木清氏は『社會と自然』(『思想』四年八月)『近代科學と唯物辨證法』(『プロレタリア科學』五年三月)に於て自然科學について、その社會的規定を主張して多大の反響を喚起した。恩師西田博士の『一般者の自覺的體系』を批判して立つたかの輝ける哲學者田邊元氏は、『所謂科學の階級性に就いて』(『改造』五年一月)において、小倉、三木兩氏の主張されるが如き階級性・社會性を數學自然科學に認めるが、それは、社會科學の場合における階級性・社會性とは重要なる點で意味を殊にする。換言すれば社會科學の階級性と同じ意味においては數學自然科學の階級性を語ることはできないといふことを主張された。

これに對してマルクス主義を純粹に保たんがために、その陣營から二つの有力な批判が現はれてゐる。その一つは、佐々弘雄氏の『社會科學及政治學の一般的問題――田邊元博士の「科學における階級性」を讀みて』(『經濟往來』昭和五年二月)、他の一つは寺島一夫氏の『科學の階級性と自然辨證法――田邊元の「所謂科學の階級性について」を批判す』(『プロレタリア科學』昭和五年[illegible]月)、[illegible]において、自然科學の超階級的[illegible]性についての論據を失ふ所以を說述したものである。同時京都大學教授法學博士田村徳治氏は『學問の階級性は超越せられ得る』(『法律春秋』五月)および『學問の階級性の問題』(『法學論叢』六月)において、眞理は超階級性を有する。此の眞理の究明を任務とする學問の、たとひその端緒において階級性を帶びやうとしても時代の進展と共に、漸次に其の階級性の反映を稀薄にすべきものであるといふ見解を發表せられてゐる。

これら諸論の詳細はこゝに說述し得べくもないが、マルクス陣營の攻防戰は、今後これらの諸論をめぐつて白熱化してゆき、社會科學は、さらに高度の理論に展開してゆくのではなからうか。しかし、その戰場の眞只中に立ちふさがれてゐる妖怪は依然として次の如く叫んでゐるに違ひない。

『社會科學の最後の言葉は常にかうあるべきだ。――戰ひか然らずんば死か。血みどろの鬪爭か然らずんば無。かくて問題はいづれかに決すべく嚴として課せられてゐる』(ジョルジュ・サンド)と　(昭和五年六月一日)

伊東巳代治論

馬場恒吾

伊東巳代治伯が盆栽を愛するのは有名な話である。其所等の縁日に買つて來たやうな鉢植が暫らく彼れの手に懸つてゐると何百圓かのものになる。其所に妙技神に入ると云ふべき藝術があるのであらう。だが、盆栽の美は植物の性を矯めた、ひねくれた美である。野に置けば見上げる許りの大木になるものを、床の間の植木鉢に入れて、之を萎縮せしめ、痛め、苦しめ、くねらしめる。玆に植物の苦惱の形相が現はれ、奇妙な形になり、生きんが爲めに鬪爭の姿が生れる。それには一種の崇嚴な、變態な、陰欝な美がある。政治家としての伊東の姿がそれに似てゐる。

政治家としての經歷から云へば、彼れは現代生きてゐる連中の中にあつては第一流である。其智惠と才幹に於ては名物男とせられてゐる。然るに彼れは三十三年前に一度短期の農商務大臣になつた以來政治の表面には出でず、隱居役の樞密院に立籠つた儘で居る。其樞密院に於ても、彼れの後輩が議長、副議長になつて彼れの上に立つ。彼れは樞密院のぬしと云ふ恰好で歷代の內閣を窘める。それ故に彼れは意地惡るき姑の如く厭がられ恐れられてゐる。併しそれが、せめてもの彼れの欝憤晴らしであるのだと思ふと、それを責めるのも聊か慘酷な氣がする。伊藤博文、山縣有朋と云つた如き、日本の政治を捏ね上げた園藝師が、伊東の如き畸形の政治家を作つたのだとも云へるからだ。

盆栽は床の間の置物になつて滿足する。だが、伊東は置物になつて滿足してゐない。彼れは頑張る、怒鳴る、活躍する。樞密院の憲法上の權限を楯に取つて、若槻內閣を潰した。田中政友會內閣を不戰條約で半死半生の目に遇はした。今の濱口內閣を

[illegible]軍縮問題で、[illegible]に遇はずして、現在皆なが非常な興味を以て注目してゐる。

世上の噂に依れば、伊東は今度の海軍問題では乘り出さないと云ふ。兎も角も靜なる事林の如しと云ふのは事實である。併し軍縮會議が初まつて以來、伊東は自分の邸内に居る請願巡査を斷はつた。それは自分の處へ出入する政客の顔振れを、政府に知らさない用意周到の處置だと思はれる。樞密院が政府と大衝突をするか否か、其豫斷は出來ないが、今は嵐の前の靜けさと云ふところである。

然し、此所は大衝突を歡迎すべき汎べての理由がある。政府は兵力量は内閣が決定すると云ふ立場を取つてゐる。そしてそれを以て軍部を壓伏せんとしてゐる。此立場は憲法の明文では差支ないやうだが、今迄の政府の慣例には反してゐる。政府は今迄の慣例は時代に適さないからそれを改めると云ふ。玆に樞密院が干渉すべき機會が生ずる。樞密院は憲法の制定者として、政府の解釋、從つて政府の採つた處置は憲法違反であると上奏するかもしれぬ、すると政府は憲法違反でないと反對上奏をする。陛下が若し政府の見解を御採用にならなければ政府は辭職する。若し政府の意見が御採用にならば、反政府の樞密顧問官は總辭職をして、玆に時代に適應する新らたなる樞密院が作られる。[illegible]、若し[illegible]てゐる事が判ると、樞密院の方が却つて衝突を避ける態度に出でるかもしれない。そして樞密院の態度は大體伊東の意向に依つて決定されると云つても差支ない。

伊東が今の政治に於て一方の威力である事は爭はれない。此威力が政治の順當なる發達の爲めに用ひられるものとして見られずして、寧ろ政府に對する脅威としてのみ視られる事は、彼れ自身の爲めにも不幸せである。彼れが一代の拗ね者になつた徑路は研究さるべき價値を有つ。

若し彼れの生涯が順當に行つてゐたならば、彼れは現在に於ける政界の第一人者となつてゐる筈であつた。例へば彼れを西園寺公に比較して見る。西園寺は元老として汎べての政治家の崇敬の的となつてゐる。伊東は恐がられ、厭がられる。其地位が大に異る。だが昔しは同輩であつた。伊東自身は或人に向つて、西園寺とは一緒に博奕を打つたり、女を買つたと云つた事がある。かうした斷片的な言葉の中にも彼れの皮肉と毒舌さが含蓄されてゐる。併し西園寺と遊び仲間であつた事は事實である。彼等がまだ若かつた時代に、彼等は一緒に清元を稽古してゐた。築地二丁目にあつた或料亭に師匠の彌生太夫を呼んで、二人で黄色な聲を絞つて清元を歌つてゐた。其座敷に案内もな

く入つて來たのが彼等の共同の親分伊藤博文であつた。二人は飛んでもない所を見られたと思つて恐縮してゐると、伊藤は
「清元を稽古するのを悪いとは云はない。我輩だつて新内を習つた事もある。だが、貴公等の穿いてゐる履物は、あれは何だ」
と云ふのである。二人は其當時東京に流行してゐた突掛け草履を穿いてゐたのである。それを偶々伊藤に見られたものだ。伊藤はおつかぶせるやうに
「貴公等天下の志を抱きながら、身なり迄幇間の眞似をするとは何事だ」
とさんざんに油を絞られた。清元以上に汗をかいたと彼等の一人の思ひ出話しである。さうした遊び仲間も段々地位が違つて來た。

大正七年原敬内閣が成立する前に、西園寺は伊香保の木暮旅館に避暑に行つてゐた。寺内々閣は將さに潰れんとしてゐる。各派の政客が例に依つて西園寺の處に往く。其中に西園寺の言葉を藉りて云へば萬綠叢中、紅一點と云ふべき訪問客があつた。取次がれたる名刺には川上貞奴とある。前に會つた事もあるので西園寺は會つた。すると貞奴は後繼内閣の首に伊東巳代治を推薦するのである。彼女は云つた。
「今度はあなたが内閣組織の大命を拜されるけれども、あなたは御辭退なされると承ります。就いては後繼内閣の總理としては、伊東子（當時は子爵）を御推薦遊ばすやうに御願に參りました。と申しますは、政友會創立の歴史から申しますと、初代が伊藤公、次ぎがあなた。三代目の嫡流は伊東子と順序にならうかと思ひます」
と云つて滔々として伊東の功德を述べた。西園寺は端然たる様子で
「さうすると初代の家康が伊藤公、秀忠が私、三代の家光が伊東子爵と云ふ事になるが、私はさう思はん。政友會三代目の總裁には原敬が已に直つてゐる。嫡流と云へば原の事である。それに、自分は元老としては誠に微力であつて、自分には伊東子爵を推薦する力はない。若しどうしても伊東子爵をと云ふならば、それは山縣公を說いた方が有效である。山縣公に是非一度會つて御覧なさい」
と云つた。後に西園寺が山縣に逢つた時、貞奴が伊東の運動に來た。誰れが彼女を使ひに寄越したか、サッパリ見當が付ない。山縣に心當りがあるかと聞いた。山縣は暫く考へてゐたが
「それは後藤新平だ。後藤が福澤桃介に旨を含めて、貞奴を使者に立てたのだ。それに違ひない」
と云ふのであつた。彼等はそれ以上、影武者を詮索しなかつ

た、又[illegible]面目に関係するやうな事とも思はなかつた。それほどに、此時は西園寺と伊東の地位が隔つてゐる。伊東が昔しは同僚であつたと残念がるのも無理でない。

伊東の全盛時代は日清戦争当時の伊藤博文内閣の書記官長をしてゐた時である。彼れは只の書記官長であつたが、其勢力は他の大臣以上であつた。大臣が閣議に提出すべき何んな案を出しても、伊東がつむじを曲げると、何日迄経つても閣議に提出しない。大臣は伊東の處に百度詣りをして頼む。伊東は大臣を呼び付けて説明を聞く。其時から彼れは世に憚られる憎まれ児であつた。

彼れが世に出る初めは兵庫県で下つ端の官吏をしてゐた時県知事の伊藤博文に見出された事に依つて機會が作られた。尤も大隈重信は、伊東は長崎で通譯をしてゐたのを我輩が連れて來たのだと云つてゐた。大隈は維新の際に、佐賀藩の代長となつて長崎に出張してゐた事があるから、伊東を手引きした位の事はあるだらう。だが、伊東を重用したのは伊藤博文であつた。總理大臣秘書官、樞密院書記官長、内閣書記官長、後に大臣に迄なつたのである。伊藤が明治十五年に憲法取調への為めに洋行した時は西園寺、伊東共に一行の中に加つた。憲法制定の仕事には井上毅、伊東巳代治、金子堅太郎が實務を取つた。伊東は[illegible]法、[illegible]に[illegible]。[illegible]、人[illegible]に習つて、憲法の番人のやうな顔をしてゐるのは世間人の知る通りである。

彼れの一生一代の仕事は日清戦争後の批准交換の使に行つた事であらう。此戦争で、日本は折角勝ちながら、露獨佛の三國干渉で遼東半島を支那に還さなければならぬ破目になつた。政府は三國干渉に屈服するとは決心してゐたが、それはそれ、支那との條約は條約と、別々に極りを付けんとした。それで支那をして約束通りに明治廿八年五月八日に條約の批准交換をなさしめんとしたのである。然るに支那は日本が三國干渉に屈服すると云ふ内兜を見透かしてゐるが故に、此批准交換が素直に行はれるか否かゞ危ぶまれた。此困難な使に、伊東は選ばれたのである

伊東は旅順迄は軍艦に乗つて行つたが、旅順から芝罘へは商船の横濱丸で往つた。それは七日の午後三時であつた。三國の軍艦が集つてゐる所へ、日本の艦隊に護衛されて行くよりは、却つて此方が此方の度胸を示す方法になつた。これが伊東式の外交であつた。

其日の會見で支那の代表伍廷芳は果して批准交換の延期を求めた。伊東は

で今更批准交換を延期せんとするのは支那に誠意がない事を示す。自分は直ちに旅順に歸つて、戰鬪開始を號令する」と云つて脅かした。伍廷芳は慌てゝ翌日迄待つて吳れと云ふのであつた。翌朝になると、伍廷芳は其夜九時に批准交換をすると云ひに來た。然るに其夕方、伊東が隨員と祝宴を開いてゐる際に、外務大臣陸奥宗光から、政府は批准交換延期に同意したから其儘歸れと云ふ電報が來た。伊東は手に持つてゐたシャンペン、グラスをストウブに叩き付けて懦夫國を誤ると叫んだ。そして、批准交換の延期は條約の廢棄を意味し、從つて卽時開戰を意味するものと諒解して、必要の處置を取ると返電した。

（此項、伊東が小松緑氏に語つた直話に依る。）

北京政府が批准交換の延期を企てゝゐる間に、駐支米國公使デンビーと李鴻章の顧問フォスターが極力運動して支那政府の意志を批准交換に纏めた。卽ち伍廷芳は約束通り伊東を訪ねて批准交換を濟ました。これは伊東の功績として歷史に殘る。そして日淸戰爭を一轉機として、伊東と政黨の交渉が始まるのである。

戰爭中は政黨は擧國一致的に伊藤博文内閣を支持してゐた。然るに戰後に於ては遼東半島還附に對して國論が沸騰して來た。大隈の改進黨が政府攻擊の急先鋒となつてゐた。戰爭中は誰れも戰勝の熱に浮かれてゐたが、愈々三國干涉になると、日本人全體が鐵棒で頭を毆られた氣持になつた。茲に世界に於ける日本の慘めな地位を見せ付けられて、無念の涙に咽ぶのであつた。其中に臥薪嘗膽と云ふ言葉が常識になつた。

戰爭前は當時の政黨であつた自由黨、改進黨は聯合して藩閥政府に衝突してゐた。其政爭は戰爭の爲めに休戰となつたが、戰爭が濟むと此爭ひが復活すべき順序になる。下ノ關で講和談判が開かれてゐる頃は多くの政客が其所に集つてゐた。自由黨からは河野廣中、岡崎邦輔などが來た。初めは政府の談判を監視して、政爭の材料にでもする積りであつたであらうが、三國干涉が來て、日本が打ちのめされると、彼等も考へさせられた。何日迄同じやうな政爭を繰り返へしても面白くない。臥薪嘗膽、此恨みを晴らさなければならぬと考へた。河野、岡崎は他の自由黨の連中と其事を語つた。だが政府の大臣は大概馬關から引揚げた後であつたから、別に具體的な方針は生れなかつた。

外務大臣陸奥宗光は岡崎の從兄であつた。病氣で大磯で養生をしてゐる。岡崎はそれを訪ねて、政府は戰後の經營をなすべき難局に面してゐる。それに今迄のやうに政黨と喧嘩ばかりしてゐては何も出來ない。政府に其意志があるならば、自由黨は政府を扶けて、共に此難局に當つてもよいと云つた。すると陸

鬼は

「君等自由黨が政府が扶けると云つても、君等に何の値ひりかあるのだ。自由黨は尺の足らない反物見たやうなものだ。着物に仕立てゝも片袖か兩袖か足らぬと云ふ譯で、どうにもならぬではないか」

と云つて取り合はなかつた。だが岡崎はこれは寧ろ首相の伊藤博文に直接に話す方がよいと思つた。然るに伊藤に話すには先づ書記官長の伊東巳代治に話す必要がある。巳代治に邪魔をされると出來るものも出來なくなる。だから巳代治に話さなければならぬが、此方から巳代治に會見を申込み度くない。巳代治の方から會見を求めるやうに仕向け度いと考へた。幾日か苦心した結果、岡崎は彼等共通の飲み仲間である所の、內務省の局長をしてゐる阿部浩がある事を思ひ出した。岡崎は一日柳橋の料理屋へ阿部を呼び出した。それはまだ單物を着てゐる時候であると云ふから、二十八年の夏の末であつた。岡崎は自分は伊藤內閣と自由黨の提携を考へてゐるが、此方から賣り込みに行くべき筋合でない。だから、伊東巳代治から會見を求めると云ふ工合にはならないものだらうかと云つた。阿部は

「それは譯もない事だ。政府も大に助かる。巳代治は喜んで會見を求めるだらう。」と云ふのはあれは近頃伊藤總理と工合が惡いのだ。だから此際何か功を樹てたいと思つてゐる矢先だ、丁度機會が良い。僕が巳代治に話して見やう」

と請合つた。伊藤博文は伊東を重用したに相違なかつた。況して厭やな役廻りを伊東に押付けた。だが、其結果として、伊東が親分の急所をすつかり握つて居て、伊藤に對しても我儘を云ひ得る立場を作つた。だから伊藤は表面伊東を重用してゐながら、陰では散々に惡口を云つた。その呼吸が阿部に感付かれてゐたのであらう。

、此所で岡崎は伊東の用意周到に呆れもし、感心もした事がある。阿部の話しを聞くと、伊東は直ちに岡崎に會はうと云ふかと思へば仲々さうは云はない。伊東は

「自分は折角國家の爲めだと思つて骨を折つても、おやじ（伊藤總理）が何んと云ふか判らない。巳代治が餘計な事をすると云はれたりなどすると引き合はない。君がおやじに會つて、意向を探つて見給へ、おやじが贊成なら、僕も働かう」

と云ふ。阿部は其足で伊藤首相を訪ねて、其事を話した。すると伊藤は即座に

「自由黨の援助は我輩の願ふ所ろだ。巳代治は馬鹿な遠慮をするものだ。サッサと事を運んだらい、」

と云ふのであつた。それから、伊東と岡崎との會見になると、

伊東は

「何故君はこれを陸奥に話さないか。陸奥は君の親戚ではないか」

と云ふのである。陸奥と伊東は犬と猿ほど仲が悪るかつた。其原因の一つは馬關講和會議の時に陸奥が極端に伊東を冷遇した爲めらしい。陸奥は伊東に外交上の機密を知らせると、伊東がそれを材料にして相場をすると疑つた。それ故に伊東には機密文書を見せず、講和會議に際しては外務省の飜譯官と同列に、只文書の作製位の仕事しか與へなかつた。伊東は之を根に有つた。芝罘で、陸奥の事を懦夫國を誤ると罵つたのも其余憤が發したのであらう。後に馬關に講和記念碑が出來て、伊東が其碑文を書いた中に、伊藤博文を講和全權として賞揚して、陸奥の事は名前すら書かなかつた。恐ろしく執念の深い男である。今も其性格は殘つてゐる。岡崎は

自由黨が政府を扶けやうと云ふのは、伊藤總理を目標としてゞある。陸奥に話しても、伊藤が承諾せねば何にもならん。だから先づ總理大臣と交渉しやうと云ふのである。」

其所で伊東が手引きして、岡崎と河野を伊藤に會はせ、政府と自由黨の提携が成立した。一議會を無事に通過した後、此提携のお禮として、伊藤内閣は自由黨の總理板垣退助を内務大臣として入閣せしめた。伊藤が後に自由黨と合體して政友會を作るに至る緣は此時に結ばれ、伊東巳代治は其仲人役を勤めたのである。從つて彼れと自由黨との因緣も深くなつて行つた。

板垣が入閣すると間もなく伊藤内閣が潰れ、其後を引受けたのが松方、大隈の聯立内閣であつた。これも薩派と大隈派の喧嘩の爲めに一年有餘の壽命で潰れた。然かも其潰れる時は松方首相は議會を解散し放しにして辭職したのであるから、其後を引受けた伊藤第三次内閣は就任早々總選擧を行はなければならなかつた。伊東巳代治は此内閣に農商務大臣となつて初めて入閣したのである。それは明治三十一年一月十二日、彼れが四十二歳の時であつた。其時、前の伊藤内閣が自由黨と提携してゐた事の延長として、板垣を入閣せしめる話しがあつた。だけれど、此内閣には大藏大臣として自由黨を毛蟲の如く嫌ふ井上馨が入閣してゐた。井上が自由黨を嫌ひになつたのは、それより四五年前自由黨の齋藤珪次が井上馨と藤田組の關係を議會で素破抜いてからである。井上が内閣に居る時は板垣を入閣せしめる事は困難であつた。併し伊藤はさう云はなかつた。總選擧を行ふに際して一黨一派の首領を内閣に入れるのは穩當でない。板垣の入閣問題は總選擧の後にして見れと云ふのであつた。それで此問題は選擧後に延ばされた。

選擧後になつて自由黨は板垣の入閣を要求した。伊東は其尻押しをした。併し伊藤は井上に氣兼ねをして板垣の入閣を肯じない。結局斷然として拒絶した。伊東は自分の立場がないと云つて農商務大臣を辭職して了つた。其間の心持ちは、此内閣の陸軍大臣であつた桂太郎が卅一年四月十七日山縣元帥に送つた手紙に出てゐる。桂の手紙の中に

總選擧の結果、自由黨又々板垣の入閣問題を提出し、終に一昨日に於て首相より斷然の回答に及び、目下の形勢にては所謂提携も分離の有樣と相成申候。此事たる彼の巳代治が關係有之、内に於ては巳代治辭表提出仕申候。此病氣は内閣組織の始より何の日か起り可申と概ね覺悟も致候へども、今日臨時議會の目前に差掛り居り候にもかゝはらず、此の如き事を惹起し候事は遺憾此事に候。之と申候も畢竟板垣等が黨派の統御六ケ敷よりの事より、苦情を内閣へ持出し、夫れへ巳代治が尻押しをなすには相違有之間敷候間、矢張斷然聞届難きの返答は今後の形勢を一變せしむるの良藥と相考へ申候(中略)、小子は總理に向ひ自由黨とも手を分つべし、巳代治も辭表聞届けられたし、政府に我が信ずる所の方針と手段を以て、單身獨歩議會に出會するの止を得ざることと意見申述置申候。目下の所にては總理も小子の意見に異らず、此先如何可相成哉、難計候へ共、右の次第に候故御含迄申上置候。尤の中も武治に相談に相成、其全く總が感慨に堪へず候、前陳巳代治辭表提出の事に付ては將來、目小子も一應同僚の徳義としては、本日中に面會、留任丈けは論談仕るべき心組に御座候。今後の情況は追々御内報申上べく候

と云つて居る。伊東を巳代治々々々々と呼び捨てにしてゐるのも可笑しいが、それを一應留任の勸告に行くと云ふのも桂流の八方美人主義を現はしてゐる。

兎も角も伊東の辭職は自由黨への心中立てと見られる。それならば、伊藤博文が二年後に自由黨を土臺として政友會を組織した時に際しては、伊東は當然それに參加すべきであつた。然るに彼れは表面それに參加しなかつた。裏面に於ては伊藤の爲めに宣言綱領などを作つて、政友會創立の爲めに働いたけれども、それは畢竟するに椽の下の力持ちであつて、彼れの名は創立委員の顔振れの中にもなく、亦伊藤が政友會總裁として初めて組織した政友會内閣に入らなかつた。若し彼れの如く自由黨に盡くした經歷を以て居り、そして伊藤の關係として政友會に身を投じてゐたならば、彼れは伊藤の後繼者として、例へ西園寺には後れたとしても、原には先んじたであらう。然るに彼れは政友會の人となり切らなかつた。それが今日彼れをして政界の

本流とは懸け離れたる樞密院に隱居するに至らしめた。何が彼れをして黨人生活に突貫して入るのを躊躇せしめたか、それは今尚充分に解けざる謎である。併し私の聞いた中で、一番尤らしき解釋はかうである。伊東は其時は伊藤の政黨に全身を投ずるには、餘りに深く山縣と關係してゐたからだと。

伊藤と山縣は共に維新の元勳で、共に長州出身の政治家である。だから表面は相扶けて國家の爲めに働いて居るのであつたが、內實は勢力抗爭に苦心してゐた。山縣は伊藤の勢力を殺ぐ爲めに、伊藤の片腕たる伊東巳代治を自分の藥籠中のものにせんと企てた。そして或程度迄それに成功したのである。

第三次伊藤內閣は板垣の入閣を拒絕する。すると今迄喧嘩をしてゐた自由黨と改進黨は忽ち仲直りをして、憲政黨として合同して了つた。伊藤は此合同した政黨に政權を讓つた。大隈板垣の聯立內閣がそれである。然るに此內閣は四ヶ月の存命で潰れた。星亨が米國から歸つて、憲政黨を元の自由黨と改進黨に分裂せしめた結果である。尤もこれは星許りの仕事ではなかつた。自由黨の幹部の中には隈板內閣が永く續くと、大隈の勢力ばかりが增して、自由黨系は自然消滅になる事を心配したものがある。現に松田正久、杉田定一の如き自由黨の長老株にさへ、大隈に心醉しさうな樣子があつた。それが人情の弱點であつた。自由黨精神を維持する爲めに、何んでもかでも、早く隈板內閣を潰す必要があつた。其結果が星の活躍になつたのである。

隈板內閣の次ぎに出來たのが山縣內閣である（三十一年十一月）。此內閣の出來る時、山縣は伊東巳代治を內閣に入らしめんとした。其交渉に往つたのが、前に巳代治、巳代治と手紙に書いた桂太郎であつた。伊東が自由黨卽ち其時の憲政黨と親密な關係であると云ふのを理由として入閣を勸めてゐる。伊東は親分の伊藤博文が支那漫遊中であつた。其留守中に獨斷で進退は決せられぬと云つて斷はつた。

然るに伊東は前に自由黨をして伊藤內閣と提携する手引きをした如く、今度は亦自由黨の後身である憲政黨をして山縣內閣と提携する手引きをした。內閣組織の當初に於て山縣は攝河泉の大演習に行つてゐた。大阪の藤田傳三郎邸に於て、憲政黨の板垣、星等と會見した。これが大阪會議と稱せられる。山縣の方でも憲政黨の援助を得たい意志はあつた。併し憲政黨の方では黨から入閣せしめると云ふ要求をしたので、此會議は不成功に了つた。其結果、憲政黨は東京に幹部會を開いて、超然主義の山縣內閣に反對すると云ふ決議をした。それが十一月廿四日であつた。

其日岡崎邦輔は伊東巳代治の家へ遊びに往つてゐた。其所へ

其時憲政黨の幹部であつた末松謙澄が來て、困つた困つたと云ふ。何に、困つたかと聞くと、黨幹部は今内閣反對の決議をした。これではどうにも動きが取れないではないかと云ふ。岡崎は

「そんな事、困る事はないではないか、何んとでも方法は付く」

「何んな方法があるのだ」

「それを君等に話したつて何の役にも立たない。政府は山縣が持つてゐるのだから、山縣が聞き度ければ話す」

と云つた。實は岡崎だつて何の腹案もなかつたのであるが、少壯氣鋭の時であるから、出鱈目の氣焔を吐いたのである。夜になると岡崎の家へ山縣から電話がかゝつた。電話に出ると、秘書官の安廣伴一郎が出てゐて、今日伊東巳代治と末松謙澄が來ての話しに貴下が時局を展開する妙案を有つてゐるとの話だ。それで總理が至急御目にかゝり度いと云ふ。今夜でも首相官邸に來て呉れないかと云ふのである。

其夜十時頃岡崎は山縣に會つた。畢竟するに政見は大した相違はない。政府の方は露西亞が東方に來る。日本は臥薪嘗膽の政策を取らねばならぬ。と云ふ意見である。それを賛成するのは自由黨が伊藤内閣と提携した方針の延長である。只山縣が裃を着て、城塞に立籠るやうな態度を取るから、大阪では話しが纏らなかつたのである。腹を割つて、意見が同じであれば提携は困難であるまいと云ふ事になつた。岡崎は其夜、十二時過ぎに眠たがる星をたゝき起して、政府と提携の相談を持ち掛けた。それから話が急轉直下に進んで、政黨員が内閣に入る代りに、閣員で政黨に入る事が出來るものはそれを奬勵しやうと云ふ事で提携が成立した。伊東は其間政府と憲政黨の間に立つて斡旋した。十一月三十日山縣は憲政黨員を官邸に招いて茶話會を開き、其席上で「大體に於て憲政黨と所見を同ふするを知り、相倚り相扶けて、以て進取の宏謨を賛襄せん事を期す」と演説した。此演説の草稿は伊東が書いたものである。

彼れは翌年山縣の推薦に依つて、樞密顧問官になつた。其所に彼れは安住の地を見出したと思つたのであらう。翌年伊藤が政友會を組織した時にも、彼れは表面には乘り出さなかつた。爾來三十一年彼れは樞密院に蟄居する身になつた。彼れが政友會に入らなかつたのは必ずしも樞密顧問の地位が惜しかつた爲めでなく、寧ろ山縣と伊藤の間に板挾みになつて身動きが出來なかつたのであらう。

世間一般からは、伊東は樞密院に立籠つて歴代の内閣を苦めて得意がつてゐるやうに思はれた。蓋しこれは誤解であらう。伊東は得意よりは寧ろ失意の餘生をそれで紛らしてゐるのには

あるまいか。

彼れが一代の才人である事に疑ひはない。併し果して彼れが眞の智者と云へるか否かも疑はしい。彼れに機鋒當るべからずと云ふべき智慧のある事は事實だ。たけれども、其智慧を韜晦するすべを知らない。小猫が爪をかくすを知らないと同じ事である。樞密院に入る迄の彼れは、中るに任かせて、殆んど汎べての人と喧嘩をした。先輩のみならず、同輩、後輩とも爭つた。餘りに斬れ味を見せたので、遂に山縣の捕虜になつて、樞密院に入るの已むを得ざる事になつた。若しそれを彼れが得意とするならば、彼れは見かけ程賢くないのである。

併し彼れはそれほどの愚物ではあるまい。彼れの才幹、機略、精悍の氣象を以て、樞密院に隱れてゐる事は確かに所を得ない。其個々の情が内閣窘めになり、盆栽いぢりになり、其他目に餘る諸種の道樂になる。畢竟するに彼れは政界のすね者だ。盆栽の松だ。さうひねくれたのは、彼自身の責任でもあらうが、同時に又彼れの先輩の伊藤、山縣の責任でもある。

淺草宿屋の世間學

武田麟太郎

1

日本堤、象潟、菊屋橋——淺草公園の內外にある宿屋は、この三つの警察の統制に置かれてゐる。どちらも、——ケイサツも宿屋も暗いところだ。この二つのものの關係から、ぼくはのべて行かうと思ふ。夕暮。公園は紺色に染り、すべての公園人が活氣づいて來る時、宿屋の前に立ちませう。のぞくと何が見えるか。そこにはもう古い感傷詩のやうな青白い吐息はなく、もつとギスギスした現實關係が見られる。かうだ。暗い宿屋に刑事が入つて來る。制服巡査も來る。衞生檢査だぞ。防疫だ！ 命令はキビシイ。帳場は、宿泊人の名簿を、朝晩にとどけなければならぬ。左翼のお尋ねものの取締りの嚴重な今日日頃は、刑事も保安係だけではない。それら二人と別に腕ききの特高が一人、毎日出入する。保安係は大抵、ハンテンを着、カーキ色のズボンをはき、鳥打ちをかぶつて來る。默つて入つて來るのだ。店さきに人がゐないと、まつさきに下駄箱に眼をつける。下駄箱にはたくさんの履物がつまつてゐる。下駄はいろいろなところを歩いて來た。赤い鼻緒のフエルト草履。柾のよく通つたやつ。ちびた日和下駄。都會人の足をのせて來たのも、黑い土の匂ひのまだくつついてゐる田舍もののも、見れば分ると云ふものだ。それから、下駄の齒がへらぬやうに、裏にゴムをはつてあるやつは、きつとそのゴムを剝がして、我らの刑事はシヤーロック・ホームズのやうな表情で、ためつ、すがめつするで探偵學は何か、そのゴムから讀みとるやうなことを教へてゐるのだらうが、ぼくは知らぬ。——そして、帳場にどつかと坐つて、帳簿を調べる。住所を東京市——と書くお客は決してないこ

とは、すでにこの前に書いた。(本誌三月號、拙稿「淺草、餘りに淺草的な」參照) 東京に住んでゐるものが、同じ東京の宿屋に泊る必要は恐らくないだらうからだ。だが、東京の人間も泊るのだから、問題がムツカシクなる。いくら住所はゴマかしても言葉づかひは嘘をつけぬ。そこで、東京言葉より使へぬ人たちは、近縣――たとへば、埼玉とか千葉とかをデタラメに書くのだ。帳面には風采を記さねばならぬ。これは番頭がうまくやる。目立つやうな特徴は決して書かないから安心できる。人は特徴で動くものだから。手配狀はしよつちゆう廻つて來る。ひまな時には刑事も話しこんで行く。(ついでだが、宿屋の人たちは刑事のことをデカとは云はぬ、ジケイと云ふ。もう一つついでだが、淺草を普通のやうにエンコとは云はずに、クサと云ふ) その×××は新聞や雜誌にのせてはならんと命令されてゐる色々なはなしをぺらぺらしてくれる。某重大事件。例へば……。これらの犯人を探してゐるわけだ。茶をのみ、菓子を食べて、刑事は憂鬱な顏をして歸つて行く。これらのやうな犯人がある以上、彼の御主人さまも彼も面白くないのである。だが、彼らにとつて×××ないことは、我らにとつて×××ことである。――巡査がやつて來た。サーベルをならして。(このサーベルと云ふものの音は實際よくひびくものだ) 臨檢である! 宿帳を調べる。宿帳は記してゐる。木山キヨ、十七歳。ひとりで泊つてゐる。ふん。彼は番頭にたづねる。ええ、斷髮なんでして。斷髮の流行しはじめた頃だ。ふん、斷髮の女が獨りでか。彼は考へる。これは見るべきである。そこで彼は「こいつは臭いぞ」と云ふ。そして梯子段を昇つた。女を中に隱して、白い障子。彼は障子に手をかけた。彼は見た。少女は男の子のやうな肩をつぼめて蒲團の中に寢てゐた。彼はうしろに障子をしめきり、矢庭にはサアベルを×××、×××を――。とにかく、これではどちらが××か分らぬ。これは嘘ではない。彼は今出世してゐる。××××になつた。――宿屋の前に××でもできると大へんな眼にあふ。第一に、××が建つからと金をとられる。金を出さなければ、どんな眼にあふか知れぬ、とある宿屋はしみじみと云つた。それだけではない。家の前に、イカメシイ××のつつ立つてゐる宿屋へ、他の土地なら知らず、淺草で、どうしてお客が入つてくるだらう。誰も來ぬ。商賣はダメになる。これでは滅亡するよりしかたがない。ある宿屋は、××の建つた翌日、引越しの支度をはじめた。――××の××がまたおとなしくない。×をのませろ。茶を持つて來い、と云ふ。めし時にはお茶を貰ひに來る。たまつたものぢやないが、考へて見ると、彼らも薄給で××使はれてゐるのだ。貧しいのだ。無理もないのだらう。千束町の宿屋で、

新時、夜が更けると、彼らは宿屋につかりに來るので、迷惑してゐるのがある。彼らにして見れば、これで五錢の湯錢がたすかると云ふものだ。かう云ふ仲間の一人で××××をはじめたのがゐる。この男は××××にゐたので、色々と便利があつた。夜の十二時前に泊つた二人づれの客でも、十二時以後に泊つたことにさへすれば、その日の届けに出さずにすむと云ふものだ。これは帳面の上の×事である。今日と明日との境の上で、この宿屋は膨れる。公園を彷徨する小僧を警察はつれて行つて保護する。保護とは留置場にほうり込むことである。もしも、かう云ふ小僧が何らかの事情で金を持つてゐたら、彼は××××と、この××へ廻される。以前の××の配慮は何とありがたいではないか。そこで、この宿屋は儲ける。翌朝、役人はやつて來て、小僧をひつぱつて行く。罪名は公金拐帯である。もう一つ挿話。この同じ宿屋の裏口に、××してゐるやうに、髪結ひさんの家がある。髪結ひさんの家にはたくさんの女がゐる。梳き手や弟子や。女の髪を結つてゐる女には、強い女の匂ひがあらう。前述の××の男客は一人一人この髪結ひさんの門××××になつてゐる。そして、強烈な女の匂ひの中に埋まるのだ。――女と云へば、ここに、老齢すでに七十を越え、しかもかくしやくとして二人の妻を抱き得る宿屋の主人がある。この老人は布袋のやうに肥えてはゐない。若い。顔面には一筋でもれない。これで稼ぎたい以上でものを云ふ。この男が一人とする宿屋とは、淺草でもいとも知れた名前を持つ宿屋の樹木に似てゐる。介いましたか。――大體以上のやうに淺草の宿屋と××××との關係は、淺草にあるどんなもののよりも密接だ。關係あるところ、必ず損と得とが生れる。そして、どんなことを××××××つて得をしてゐるやつは、――そいつは、いつでもきまつてゐるのだ。

2

朝日平吾が、あのテロリズムの一ヶ月ほど前に、妹娘をつれてふらりと遊びに來た宿屋がまだ淺草に存在してゐる。その他重大犯人の宿泊人にはピス健、大西性次郎、日本共産黨被告、三田村四郎など。――ここでは、宿屋の種類にも等級がある。おもての店。うらの店。指定宿の區別である。この區別で客種（ネタ）も自らきまつてゐる。指定宿とは、信徒や職人などをとめる。表に東本願寺御用などと書いた看板のかかつてゐるのがさうだ。おもての店は「モクサン」とか「ゾーコ」とかと云ふ。うらの店は「おそなへ」。モクサンとは田舎もののことだ。くの名稱をラムコー、モジコーと云ふ。ゾーコとは小僧の略で以

前はこのドにドモコ(子供)と云ふ階級を作つて、年齢で區別したものだ。「おそなへ」とはつれこみのこと。一名、ガマピンとも云ふと前に書いたことがあるが、ある番頭(ドヤバン)の説によると、ガマピンとは女獨りのことださうだ。最近の說故、以前のを取消します。そこで、男獨りならば、ピンと云はれる。

——宿屋は菊屋橋、象潟、日本堤管内の順に、だんだん暗くなる。日本堤のは木賃宿だ。旅館取締り規則の三級に該當する。泊り人は野師(テキヤ)が多い。このあたりの宿屋の符牒がテキヤのと相通じてるのは、このせいである。象潟を抜けて菊屋橋管内に來ると、車夫(ゲンシ)の符牒が通用する。昔からゲンジと緣が深いからだ。——日本堤管内の玉姫町に、H——館と云ふのがある。云ふまでもなく木賃だ。泊りますよ。どうぞ。宿賃は、三十錢と五十錢と。どちらにしますか。ここは三階作りで、中央の谷底が庭園になつてゐて、珍らしく青い樹がある。お神さんは肥えてゐて、美少年が大好きだ。部屋はもちろん、コミで一人が疊一枚は占領できるだらう。汚いのは、ガマンしなければならぬ。客は大體、固定してゐる。辻音樂師。文化的な大道似顔ゑかき。(これも最近は公園で隨分とふえた。そしてサクラを使つてゐる)聯珠屋。春畫賣り。(ついでだが、淺草に出没する春畫賣りには二色ある。實に醜惡な瘦せた女をモデルに使ひ、すでに一枚の厚板から何百枚ともなく燒きまししたやうな黑い斑點のある寫眞やら、古い下手な繪を複寫したのを四枚五十錢ばかりの云ひ値で、通行人にピタリと寄りそひ、手の中でそれらをチヨイチヨイと見せながら、如何です、如何ですと、おつかない顏で押し賣り的にやるのと——もう一つはインチキのと。後者のネタをバイする時には、原料は百枚が二十錢位で親方がわけてくれる。それを五枚二十錢か十錢で賣るのである。幾ら儲るか。仲々いい商賣だ。四つ角で、近頃は日本館附近が實に多いが、そこで商賣をはじめる。何とかかんとか巧い美辭麗句を並べて挑發的に見物に見せびらかす。すぐと人だかりする。その時、見張りが合圖した。ガチヤだ。逃げろ。春畫賣りの一人は逃げる。ガチヤが追つかける。群集はぽかんとして見送る。その時、その中からスバシコイ男が出て來て、まだ殘つてゐる人の輪の眞中に立ち、御らんの通り危い商賣です。何故危いか。內容がロコツすぎるからである、と懷中のれいのネタを出して、すかさず商賣をやる手もある。かうなると賣れるから不思議だ。この場合、たとへ捕つても二十九日を食はない。話はちがふが、組合協議會のビラ一枚もつてゐたために勞働者が二十九日のムシ返へしを食ふのと、大へんな相違である。懷中にマヤカシの輪がいくらはいつてゐても別に危險ではないからだ。もちろん、そいつは沒收される。だが、親方、わけておくんなさい、と二十錢出せば、又百枚手に入れることはできるのである。內容は——云はぬが花)H館は汚いと云つた。だが奇妙なことは、ここでヤケにキレイなものが二つある。そ

れは若い女中の首と、便所だ。この便所が、汚ならしい宿屋の暗い中でどんなにサンランと美しく見えることか。一圓の金がこの便所の中で使用されると、三日も四日もの××な××を約束するとすれば、美しい女中の存在の謎もとけるだらう。——この附近には、勞働者專門の木賃もある。朝になると一齊に街に押し出される。働き場所をこれから求めに行く自由勞働者が多い。仕事があればいいが、近頃はめつたにそいつは見つからぬ。一日でも二日でも、仕事がなければめしは食へぬ。——近所にめし屋がある。めしやの釜の底には、温かいめしの粒がキラリキラリと光つてゐる。大盛り一ぱい五錢。小盛りは三錢だ。朝つぱなから、ここでは喧嘩が見られる。それも味噌しるの實のことからと云つたのが多い。一人はその實のかぶが好きと云ひ、他は嫌と云ひ、それから、何を！と摑み合ひがはじまるのである。しかし、かぶについての喧嘩はかぶについての喧嘩にすぎぬ。仲よくする必要がある。割引電車はシヤカリキに（うんとと云ふ意）詰め込んだ彼らを運ぶ。——コミ部屋は日本堤だけではない。菊屋橋の管内にもある。御一泊、五十錢。蒲代不要。こちらのコミ部屋には色んな種類の人間が集つて來る。中には、比較的金を持つたのもゐる。ないやつの方が多いが、この稀に持つてゐるのは、鹽せんべいなぞを買つて、みんなにおごる。せんべいを中心にみんな輪をつくつて寢ころんで、各々の話を展開する。このおしやべりは本當に面白い。彼らは短い今までの生活のうちに語りつくせぬ程の豐富な世間の經驗を積んで來てゐるからだ。すべての話が、飢を前提にして生じたものならば、どうして人を打たぬと云ふことがあらう。ここでは學問ができる。最近できた下手くそなマヤカシものの新興藝術派の諸君たちよりも、それこそ生活の疲れを解し、鼓舞したりしてくれる點では、うまい語り手であり、多種多樣な色彩に於て實のあることを話してくれるのだ。——だが、暗い過去の生活が、このブルジョア個人主義の世界に根ざしてゐる故に、彼らは時々知らぬ間に、自分の小さな殼を用心深く守らうと眼を光らせる時もある。これは社會が責を負ふべきやいなや、因循な氣持だ。だが、彼らがケタオチ（下等の客）である點では完全に一致して、一致したものが、彼らに共通な感情を教へ、かすかにも集團の意味を吹きこんでゐるのも事實だ。部屋に女中が入つて來る時なぞは、みんなは騷がしいおしやべりをピタリととめて、默々のうちに女中にからかふ。舌打ちをする。ここで彼らは新しい友だちを作る。またこの新しい友だちにひつかかり、大に困るのもある。犯罪も生れるのだ。あるコミ部屋でこんなことがあつた。老人と小僧とがコミ部屋で親しくなつた。老

人はモジョーだ。郷里の家は相當裕からしかつた。小僧はそれに氣がつくと、すぐにそこを飛び出して他の宿屋をとつた。そしてここから、老人の名前で郷里に電報を打つた。カネオクレ。これで、老人は五百圓まんまとしてやられた。最近の詐僞の方法である。この手は犯人をあげるのにムツカシイと刑事がこぼしてゐる。日本堤管内の宿屋は大抵、番頭はシロトで用がすむ。ポン引きは使はない。ポン引きを一番使用するのは、象潟管内の宿屋だ。公園のポン引きの出沒地點は、花屋敷の角、日本館附近、雷門、千束通りなど。キサガタのポン引きは腕がいいので、以前、菊屋橋管内の宿屋では大に問題にし、亭主たちが團結して、ポン引き狩りを企てたことがある。だが、失敗した。客の奪ひあひから番頭同志の喧嘩はよく流行した。兩眼をつぶされて、相手の指を嚙み切つたと云ふサンタンたる光景もある。喧嘩と云へば、宿屋では番頭(ドヤバン)と女中(チューヂョ)がよく喧嘩する。女中が番頭に分配すべきウチ(茶代)をマゲた(横取る)とかマゲないとか云つて。チューヂョに美しい人は殆んどゐない。美しいと、その家の番頭同志が鞘當をする。美しくもない女中に可愛がられて、梯子の頂上から突き落され、なぐられたドヤバンのことをぼくは聞いて知つてゐる。これではどうも仕方がない。田原町の角の釣松月と云ふ菓子店から雷門へ行く道に、下屋と云ふ旅館がある。ここの女中さんたちは宿屋のチユージョとしての訓練が行き屆いて、しかも仲々美しい、とある宿屋の主人がほめてゐた。どんな訓練かと云ふと、彼は笑つて答へぬ。——番頭にも種類がある。中ばん。門ばん。バチヨー。中ばんとは家の中をしきる番頭、門ばんとは軒に立つて客を呼ぶもの、バチヨーとは帳場に坐るもの。——中ばんは客が入つて來ると、帳面を取りに行く。ヂロリと風采を睨んでから、宿泊料の協定をする。特等七圓。一等六圓。二等五圓。三等四圓。四等三圓。團體は二圓。旅館組合の紙がどこにも懸つてゐる。だがこいつは規則にすぎぬ。融通があるはずだ。二人で五圓も出せば銘仙の蒲團に寢かせてくれます。三圓なら木綿だ。淺草の宿屋に泊つたら、氣に食はぬところはどんどん主張してガンバルこと。これは第一の祕訣である。優しい顏は禁物。よく文句を云ふ客のことを、符牒でネキブツと云ふ。そして、このネキブツは仲々大切にされるのである。——番頭のなかにも、えらい番頭、幹部級のがあつて、これを金すじ番頭と稱す。多くの插話を淺草の宿屋人の中に殘し、今も語り草となつてゐる近年の金すじ番頭をあげて見れば——長谷川、せきの、丸橋、青木、安藤、齋藤、さじせい、畑善之助、きりばし安藤、鶴川、大川、大島、高橋、のんとら、藤井・松井など。彼らを

語れば淺草の空氣を諸君に感じさせることができるになつた。以下、少しく――

3

番頭はみな無智だ。放蕩する。肺病になる。アルコホル中毒。根强い淋病にかゝる。それから死んで行く。――長谷川と云ふドヤバンは兵隊に持つて行かれた。中野工兵隊。草の中だ。殘して來た女――そいつはチユージヨだが、それが戀しくてたまらぬ。脱け出して、女に逢ひに來た。ところが變化してゐた。女は伊勢に行つてゐた。彼はたうとう決心して脱營し、伊勢へ走つた。そこで、女は娼妓に賣られてゐたのだ。遊廓と云ふところで、不合理な借金のシツポをひきづり乍ら、彼女は肉體を働かせてゐた。伊勢で彼らは逢ふ。女は滑稽な髮に結つてゐた。だが、笑へない。段々逢へなくなるだらう。二人は相談した。古風な話だが、彼らは火を放けた。日本の政府の統計によると、全國の火事總數のうちで、放火が最も多く、モノスゴイ數字を示してゐる。この數字のうちには、きつと多くの不幸な人間事を含んでゐるのにちがひない。だが、古風なつけ火をやつた二人はどうなつたか。女は行方不明。男はつかまつた。行くべきところは他にない、彼は今、カンゴクで何を考へてゐるだらう。

生活の保障にいい話題だつた。酒と女とばくちで、バクチがとても惡だつた。彼は金を貯めると、ある宿屋に出資した。主人がもと刑事だつたと云ふ宿屋である。これで、そこの家は共同經營と云ふことになつた。番頭をやめた後、彼はその宿屋へしよつちゆう上つた金を取りに來て、刑事あがりの强者を苦しめてゐるさうだ。――丸橋と云ふ男は、中學卒業の履歴を持つてゐた。打つ、買ふ、飮むと云ふドヤバンの癖の中で、彼は盜む。上つた金をゴマかすのだ。二年ほど前にこの「學問のある」男と佐野策次郎と云ふ、これも番頭とが主唱者になつて、旅館從業員組合ができかかつたことがあつたが、もちろんいい加減なものだつたので、うまく行かずにつぶれた。丸橋は肺が惡かつた。今は旅に出てゐる。旅で病んでゐるにちがひない。――靑木の前身は旅廻りの女形である。顏は黑くて怖ろしいが、うしろ姿は、今でもほつそりと痩せて優しい。バクチに勝つときつと着物と下駄とを買ふ、女らしい癖を持つてゐる。それに奇妙なことには、光つたキモノは綺麗にたたんで、七圓の下駄は神棚に祭りあげて、煌々とお燈明をあけて拜むのである。情婦には、若い女は持たない。シヤリヤ(めしたきの婆さん)を三人持つてゐる。――安藤は背が低くてポン引き專門にやつてゐる。この男の大の仲好しが、これは又大兵な僧勝

である。齋藤は名前はコウと云つて今下野にゐる。顔に鮮かな傷痕があるから、すぐ分る。――さじせいは名番頭とうたはれてこの仲間では清らかな男だつたが、肺で死んだ。――畑善之助は京都もので、禿げ頭をして居り、女好きでケチン坊だ。聞くて小さいから、大きな女に好かれる。彼を可愛がつてゐたチューヂョに、おタキさん(假名)と云ふのがあつた。おタキはしつかりした顔をしてはゐるが、馬のやうに大きな肢體を持つてゐた。彼女は善之助を愛しながらも、ある請負師を好いてゐた。その請負師の家に遊びに行つた時、彼女は五六人の若いものにひどい眼にあはされた。その日から白痴みたいになつて、宿屋をやめると、魚河岸で女中奉公をはじめた。だが、もう女中の仕事ができなくなつてゐる。子守りをするのだ。背中に赤ん坊をくくりつけられ、終日、歌をうたふ。赤ん坊は涙をたらして泣き、おタキは困るのである。そして、いつも善之助のことばかり思つてゐる。お給金を貰ふと、これをそつくりそのまま封筒に入れて書く、ぜん之助さま、と。これからさき、いつ頃まで寛大な主人が彼女を子守として雇つて置いてくれるか。それは疑問だ。だが、お給金の貰へる限り、彼女はぜん之助に送りつづけるだらう。そして善之助は――その善之助は、もう他の女をこしらへて、面白くやつてゐる。これが、淺草宿屋のチユーヂョとドヤバンとの戀愛觀である。――須川は色眼鏡をかけた自稱金すじ番頭である。宿屋では色眼鏡を嫌ふ。客がつかないからである。色眼鏡でものを見るやつにロクなものはない。色眼鏡は眞質を隠す。宿屋では色眼鏡の他にもう一つ嫌ふものがある。それは身體の大きい番頭だ。何故かと云ふと、こいつは宿屋の店構へを小さく、お客に印象させるからである。前述の善之助の如きは、禿げで小さいから、もつとも、この條件に適ふものであらう。――宿屋と云ふ商賣にはよく、お家騒動がある。この裏面に、いつも暗中飛躍をしてゐるのが大川だ。陰謀家を監視せよ。――大島は喧嘩好きで、眼をつぶされてから相手の指を嚙み切つたのはこの男だ。――高橋は通稱チビタカと云はれて琵琶が巧い。この男は「旅ばん」である。丸橋が旅で肺を病んでゐるやうにこの男は、旅で琵琶を彈いてゐることだらう。「旅ばん」と云ふのは、旅廻り番頭のことである。番頭は夏になると、よく動き出す。勝浦、北條、江の島。温泉ならば、伊香保、鹽原。春ならば關西。秋と夏には日光へ出かけて行く。日光へは「日光番頭」と云はれるほど、續々と繰り出す。その時季には穴を見つけるために、二つの往來がはげしくなる。時をきめずに一年の半ばづつを、日光と東京で暮して行くのもある。――のんとらと云ふのは、のんべいの寅の

略稱で、醉つては管を卷き、管をまいては、俺は高島裁判所の書記をしてゐたと云ふのが、この男の一生の自慢である。本當ださうだ。だが、本當でも自慢の種になるのは如何かと誰にも分らん。――松井は柔道二段で、英語をしやべつて、字が巧い。何故つて、彼の前身は看板屋だ。彼は、數多い街頭の中で人から敬稱を使はれてゐる。曰く「松井さん」と。顔ききである。――藤井も飲むのでは誰にも負けはとらぬ。夜が更けて、醉ふと軒なみに酒を貰つて歩いて、盃の數の重なるのを樂しみにしてゐたこの男も、酒のためにポックリ死んだ。本望だらう。以上。淺草のドヤバンは、生きてゐるうちは人間の隙の中で生活し、それから人間の隙の中で死んで行く。

4

夜が明ける。淺草の宿屋は、時間でちがつた活動をはじめる。朝は――お神さんが子供をつれて、汽車で疲れた身體でやつて來る。子供をつれた客(ネタ)はコブツキと云ふ。お神さんはコーモリ傘一本持つて來る。甲府から來たのだ。子供に東京を見せてやりませう。はつきりと見せてやらねばならぬ。東京は生き馬の眼を拔くと云ふが、搾られるものも大仕掛けにやられてゐるのだ。おひるすぎには、ちよんの間の連れ込み客。日暮れに[illegible]つて行く。晝間は本當の[illegible]として、[illegible]などとなる。使はれては寄いて行くから、宿屋などは[illegible]はれて好適である。つれ込みの賢い方法である。ドヤ[illegible](御休憩)のは[illegible]た時間には、キネマで昂奮したつれこみとゾーコ。主人にイビメラレて家を飛び出したゾーコは、宿屋から父警察へふたれに行かねばならぬ。時間すぎにはクレたつれこみと、家に歸りそこなつた藝人。夜のつれこみには「バッカリ」(泊るだけ)と「ハン」(御飯つき)の二つがある。もちろん、ハンの方が儲かるから、宿屋の方ではこれを歡迎する。つれこみの部屋とゾーコのとはすつかり待遇がちがふ。部屋と部屋との境は唐紙で、開けられぬやうに差し鍵がついてゐる。以前は障子のところもあつたがこれはダメだ。つれこみの部屋は床の間つきで軸がある。東郷大將の筆で石版刷りの「忠孝」と云ふ字がぶらさがつてゐるのだ。――淺草の宿屋は大抵つれこみ専門だが、その六割はカフエーの女給だ。そして、この中には淺草の女は少い、と川端康成氏は云つてゐる。殘りの四割の女は何だらう。ここに淺草の匂ひがあるかないかは知らないが、ある宿屋の人の話にきくと、その四割のうち女藝人と酌婦とが二割を占めて、そのあとが町娘、人妻、料理屋の女中、職業的賣春婦などであるとのことだ。これらの人間の組合せは色々な話を呼ぶ。――その[illegible]

つ、髭をはやした男。彼は紋つきがよく似合ふ。宿屋の主人はすぐと睨んだ。浪花節語りにちがひない。女は――女房は女房だが、こいつの女房ではない。宿帳を見ると、妹になつてゐる。臨檢が廻つて來た。浪花節は頑張つた。妹だ、妹だと云つてゐるうちに、その妹が泣き出した。かんべんして下さい。私が惡かつた。不心得をあやまりはじめたのでしかたない。二人とも連れて行かれた。暫くして、浪花節だけが歸つて來、チューチョに散々どなつた。そして、どつかへ荷物をもつて行つて了つた。あとには、部屋の眞中に、扇子が一本置き忘れられてゐる。商賣道具を忘れては！　彼は德川某と云ふ浪花節語りだつた。――その二。若い臨檢が來た。宿帳を見、これをちよつと呼んでくれ給へ、とある名前を指さす。彼は若いので羞しくて踏みこんで行けないのだ。女中が梯子を登つて行くと、すぐに、年輩の男が悠々と下りて來た。怪しいものでは決してありません。部屋にお通り下さい、と云ふ。そこで、臨檢は部屋に入つた。床が二つ離ればなれに敷いてある。女中の細工だ。彼女は客に抱きこまれたのだ。だが、若い臨檢はダマされた。彼は、これはしまつたと思ふと、年輩の男が膝をのり出した。怪しいものなら、何もこんなに床を二つ列べる必要はありますまい。そこで臨檢も負けては居られなかつた。きみも見るところによると紳士らしいが、その紳士が、こんなチイマイ宿に來るのはおかしい。そこで男は實はと云ひ出す。何が實は――だ。だが、この男は、嘘をあたかも眞實のやうにシャベルことにかけては實に巧みな技術を持つてゐる階級に屬してゐた。彼は立派な鞄を見せた。その中からかう云ふ書類が――と云つて重要なものを見せるのである。誰れが、こんな重要書類を持つてつれこみなんぞに來るものか、とどなる。名刺を見せ、きみの名は、と橫柄に出る。臨檢は次第に負け、遂には恐縮し、最後に、若い彼はこの男のために謝らされた。――その三。ある宿屋で壁を塗りかへた。夜半近く、少女が男のうしろについてやつて來た。支那ではまだ年齡に達しない少女が、ある種の訓練によつて、奇妙な器官を備へるやうになると云ふが、この少女にそんなものがあらうとは思はれなかつた。彼女は聰明さうな口の形を示してゐる。白粉はつけてゐず、神經質な色が眉のあたりに漾つてゐた。風呂からあがると、臭い臭いと眉をしかめて、その新しい壁の匂ひを苦しがつてゐた。あたしこれをかぐと、何だか眠れさうもないわ、と呟いたと云ふので、女中部屋では、生意氣だとおかしがつた。そして、すつかり夜は更けみんな寢についた。誰も彼も疲れてゐるのでよく眠る。突然、その眠りをさまされた。聲が遠くきこえて來、それは安來節を

うたつてゐるのである。病んだ若々しい安來節が廊下を渡つて來る。それは少女だと分つた。彼女は男の横で小さく寢てゐた。そして、覺りかへたばかりの生々しい淺草じみた壁の匂ひが彼女に夢のうちで、安來節を思ひ出させ、歌はせたわけだつた。少女は眼をつぶつたまま、口を動かしてゐた。これは昭和五年五月の可憐な物語である。彼女は安來節の踊り子だつたのだ。

——その四。稀に、宿屋にも男色事件がある。どこでも一年に二回位はあるさうだ。宿屋の男色のつれこみはどちらがどちらか分らぬほど汚い顔をし、風采をしてゐるさうだ。宿屋のチューヂョは、商賣を思つて、どんな變な格好のお客に出合つても笑はぬさうだが、こいつだけには何の遠慮もなく、大笑ひすると云ふ。

——その五。雨がシトシト降つてゐた。來た。女はキンシヤの羽織をひつかけてゐる。ゲタはよかつた。(上等の客だ)優遇され、朝になると歸つた。三日目に、その客がまた來た。だが、今度は女だけだつた。ピンが見えねえぢやねえか。男はあとから來ると云ふ。ゲタがいいので泊めて、朝になる。男は來なかつた。女はその日、終日引きこもつてゐた。一日は暮れ女は酒をのみ出した。日が經ち、勘定が積る。いつか男は來るだらう。ゲタのいいネタだもんだから、宿屋ぢや、催促しなかつた。だが、ついに、四日たつと女は勘定書を受取つた。お金はありません」。[illegible]食つて行く美しさはあつた。はげしく疲れた時に酔いしてゐる女は、最初の晩の男の家へ電話をかけた。男は上野の洋食屋でコックを働いてゐる。電話へはそこの主人が出て、女の聲をきいてすぐ切つて了つた。しかたないので、番頭がその家に出かけて行くと、コックは店にゐたが、奥に隠れて了ひ、それきり出て來なかつた。こちらでは、女は酒で荒くなりながら、三木三木三木——三木の手紙をかいた。使ひが走つた。そして、二人の昔の男にあてられた三木の手紙とともに空しい返事をしかよこさなかつた。困つた。すると、隣りの部屋から朝鮮の老人が出て來た。これはコブツキの客だ。係らしい。金を拂ひませう。五十三圓だ。この仕末に誰もダマつて見てゐるよりしかたない。老人は金を拂つてやると、あはてて荷物をまとめ出した。宿屋おや驚いた。だが、もう東京も見物したから朝鮮へ歸ると云ふのだ。自動車が來る。そして行つて了つた。すると、醉つた若い女はその自動車のあとを追駆けた。——だつて、お金を拂つてもらつたんですもの。おぢいさんは、そりや、何もいやな方へからしてドすつたんぢやないでしよけれど、わたしついてかなきや、氣がすまない、彼女はづつと金に從屬して、すべての生活を動かして來たわけだ。今もその習慣通り、彼女のために惜し

氣なく、五十二圓をくれた朝鮮の老人のあとを追ふのである。そのあとへ、コックと二人の男はやつて來た。だが、もう遅く、女の噂だけしか宿屋には殘つてゐなかつた。その六。略。

5

最後に淺草宿屋中の變りもの、五一郎アパートについて述べ筆を擱かう。松竹座の前、千惠藏後援會のあるタバコやの通りを行き、若松屋旅館のところを左に折れ、少し行つて右に曲がるとすぐある。三階建てのバラツクだ。ここには淺草の藝人並びに藝術家がたくさん巣食つてゐる。喜劇の、今は三友館に出てゐる五一郎の經營だ。ガラス障子の入口を入ると土間には下駄が散亂して居り、「美しいゲタはいて行くべからず」の掲示がある。入口の横に流し場があつて、水道栓がならんで、共同炊事場になつてゐる。自炊生活者が多いのである。ここの掃除婦の小母さんと稱する女と、カジノ・フオリイズの文藝部のM氏と、やはりカジノのH孃との間に戀愛の爭鬪があつたときいた。(何れも特に假名) H孃は今音羽館に出て踊つてゐる。「あすこ(音羽館)の舞臺ね、トテも滑んので、お客さんの頭の上へ足が飛んぢやうのよ」と云つてゐる。M氏の他に、ここの三階に、同じカジノ・メンバーの林葉三、守田進、坪井乙彦などがゐる。だから三階の階段の踊り場には、カジノのポスターを張り大に氣エンをあげてゐる。四疊半で部屋代一月十二圓から十四圓。ガスが部屋の中にあるので仲々便利である。三尺から四尺ぐらゐの釣り戸棚が天井から垂れてゐて奇觀である。壁には「十二時以后はお互ひに靜粛にしませう」とはり紙がある。だが、もう夜は朝に近かつたが、どつかでヂヤズのレコオドが大へんやかましかつた。こゝではバクチが盛に行はれてゐると云ふ噂が出て、最近、ヤタラに××がウロツク。みんな、うるさがり、引越して行く寄席藝人の夫婦ものもゐる。以上、淺草宿屋の項、終り。(五月三十日、朝)

謹告

本誌五月號編輯後記及四月十九日附東日紙上の本誌廣告貴族院論の説明文中特殊部落なる表現を用ひたるを遺憾とし茲に全國水平社東京支部の注意により特殊 存在 と訂正す。

中央公論編輯部

大學

師氏名

文學……正宗白鳥
文藝……青野季吉
新聞學……馬場恒吾
演劇……高田保
地震氣象……國富信一
精神分析學……正木不如丘
法醫學……三田定則

略規

▲聽講資格制限なし▲會費五圓▲その他詳細規定時間割演題等は別に印刷物ある故、希望者は郵劵二錢同封申込まれたし。收容人員に限りある故早きを要す。

申込所 東京驛前 丸ビル五階 **中央公論社**



の勃興する時期に取材し、猶太人の資力が如何に歐洲の政治を支配したかと云ふのが眼目で、從來の歴史小說の型を全然ブチ壞し、新しい社會的經濟的の觀點から描破した革命的大衆文藝だ。其の機構の豪壯雄烈なることモンテクリストの比ではなく、偉大なる世界の町人として亂倫の暴君を克服し百千の美姫を征掠する、執拗慘忍な金と色との物語は思はず讀者を三嘆せしめるであらう。若しそれ譯者谷讓次の才筆に至つては、なんと諸君之こそ絕讚窒息ものだ。

四六判八〇〇頁、函入美本

定價二圓八十錢
送料內地十三錢

發賣・七月中旬・（特に配本の公平を期するため發賣期を變更しました。今暫くお待ち下さい）

贈賄秘訣

辰野九紫

リレーの要領

賄賂を贈る秘傳の公開——斯んな篦棒なものを臆面もなく誌上に發表して、世道人心を害ふ虞れなきや否や、僕は大分前から躊躇してゐた。ところが最近頻發するモロ〳〵の疑獄事件の内幕話を仄聞するに及んで、僕は餘程時世遅れの人間であることを痛感したのである。昔は阿堵物なんて輕蔑して、欲しくないやうな顔色をした爲め、之を捧呈するには相當苦しんだものだ。果してこのやうな汚らはしいものを御笑納下さるかと、菓子箱の底にずッしり重みを附けて、ビク〳〵しながら逃ぐるが如く置いて來たのに、太平の御代の有難さには、貰ふ方から先きに口火を切つて掛合ひに來る圖々しさに、事情だ簡單にして要領を得てゐる。

若しその授受が少しでも遅れやうものなら電話速達電報と矢繼早やの催促に贈り主が面喰ひ、やつと工面した何萬圓かを仲介者に手渡しすると、その新聞包みを掴んで飛ばす自動車の行先きは東京驛——由良之助はまだかと特急の「富士」に首を長くしてゐた名士、發車のベルと共鳴してヂリ〳〵の腹立ち紛れ、さては謀られしよなと、疑心暗鬼を生ぜし無念の形相凄まじき折柄、バタ〳〵バタと靴音高く駈付けたグツド・モーニング！　增の褄に殘す煙も見えず音もなく、捲き出した假氏の密を指して一目散のリレー・レース！に つこり笑つて眼に合圖、崇業的運動精神を發揮して演ずるバトン・タッチの鮮かさ……その黄金臭紛々たる紙幣束のテープを切るゴールが、多分便所の中だらうもちと駄洒落に過ぎて恐縮だが、由來、臭いものに蓋の賄賂と何等と云ふ[illegible]門に於かて[illegible]か、議場[illegible]の取引に、自然[illegible]の同所に於て行はれ、東京市役所の便所も亦市議諸氏の商談交換所として財名天下に高かりしこと、諸君も先刻御承知であらう。

いきなり話が妙な所へ逸れたから、事の序に市會議員を槍玉に擧げやうか。現在は淨化運動の效顯いやちこで、人格の士ばかりお揃ひのやうだから結構だが、以前は殆んど問題にならなかつた。尤も人格とかいふものは、お天氣や腹工合で如何にでもなる人間に宿るだけあつて、アテにならぬこと夥しい。市議綾塚太郎は黑連館中學の經營者であり校長でもあつた。その岳父も亦某女學校長にして校主である。母子共に健全にして高潔なる人格者たる亦同じく、息子自慢のお婆さんは妙齢のお茶ッピイ共を一堂に集めて、お修身の教材にわが子の生ひたちを語ることが好きであつた。

「皆さんもお仕合はせですが、太郎のやうな校長に薫陶される中學生は幸福といはねばなりませんね」

それまた校長先生の十八番が始つたと、一

同諳聽しながら悲しい小説を愛讀したり、チヨコレートを頬張つたりした。然るに間もなく、市議太郎は來客が座布團の下に置き忘れて行つた新聞包みの八百圓を、うつかりして返すのを忘れたばかりに、某疑獄の會員と見られて、地位も名譽も共に捨てゝ不遇の裡に親不孝なサヨナラをしたのであつた。

『どうぞ、これをお納め下さい。』

と差出したら、人格者の彼は斷乎として峻拒したらうに、罪な忘れ方をしたものではないか。

だから、お利口な電氣局の幹部で、一時は走る電車を止める程に威勢のよかつた円田理事は、押寄せる商人共の請託を鼻であしらつて、

『問題が小さいぢやありませんか。』

と突き放し、御自分では小さな借家住居に清廉振りを示してゐた。ところが豈に圖らんや彼には第三夫人まであつて、別宅はいづれも彼が設計した贅澤好みの特別建築も器用なことだが、更に要領のいゝのは利權に狂奔する市議達とのリレーである。卽ち彼は決して直接商人と關與せず、背後に潛んで巧に亡者を操つる傀儡師であつた。

もつと大きい人物で地位もぐつと高い所へ出入りして、何がなポロい仕事にありつかうと、焦慮する連中をいゝ鴨にして贅澤三昧に世を渡る奴がある。例へば極東鐵道總裁が若い頃の弱點を握り、愚圖々々吐せば古疵をあばくぞといはんばかりに牽制すると共に、

『いや、彼は昔からの親友で、何でも俺の我儘だけは通して呉れますぢや。はッはッは。』

なんて煙に卷いて相當の紹介料を申受けた上で、紛れ當りに成功すれば、その利權の大半をせしめて遠慮がない。

『こりや俺ばかりがえゝとするんぢやない。あんたも大抵お察しの通り、俺一人頂いたことにしとかんと、萬一の場合彼が困るでの……』

眞實彼の言葉を濁す通り、ポロ儲けの九十パーセントは總裁閣下のお手元に遞し、更に何處やらの政黨への奉納金とならうとも、一切不平がましきことを申上げないのが天下の定法である。

招待の好機

昭和五大疑獄の一である越後鐵道事件で、上下兩院議員は勿論、當時の政務次官事務次官以下相當モノのわかるお役人を、數十回に亙つて築地の珍菩樂に招待して、專ら諒解運動に精進した同社長の豪遊振りに、檢察當局も今更の如く呆れてゐるさうだが、蓋しそれは粹も甘いも心得て表裏に通じたお兄さんの紳士的な言葉の綾で、別に驚く程桁外れの御亂行でもなからう。

あれでお役所には存外神經の太い豪傑がゐて、官廳用の自動車を夜遲くまで待合の前に待たせて平氣の連中がある。それも新橋なら何處、赤坂なら何處と大抵相場が定まつてゐて、内部では官民合同の無禮講騷ぎ、解禁前の鮎が食膳に供されて何の不思議もなく、怪奇極まる七つのヴエール・ダンスが演ぜられやうと、取締規則を忘れたかの如く、にやにやしてゐるんだから、主人側から見れば當夜の招待に一人前百圓かゝらうと、隔意なき協調は百パーセントの效果を現はしてゐる。

さういふ吞舟の魚の饗應はそれでいゝとして、下ッ端の諸君はどの位まで御馳走されて、萬一問題の起つた場合お口こぼしの恩惠に浴

するかといふに、お役人だつて腹は空るんだから、飯時に人民と食卓を共にしてもいゝ筈だ。但し身分不相應の眞似をすると困る。藝妓なんてものは何人お代りをしたつて、食慾を滿足させる榮養價値はないのだから先づ以て不必要――若し僕が恐い小父さんの役であつたら、盆暮れの御挨拶だつて現ナマでない限り、×圓までの品物はまアく\といつて上げたい。

それにつけても思ひ出されるのは、ずつと昔のことだが、商人から金時計を贈られたばかりに、あつたら前途を棒に振つた農商務省の某局長である。その後日本の物價指數も隨分高まつたが、綱紀肅正の水準も相當上つたやうだ。これは決して悪いことではない。大に融通を利かせて貰はないと、民間の事業は萎縮する一方だ。現に政友と民政と、天下を取つた時の景氣の差異を見るがいゝ――など仰しやるのは何處の何奴だ!!

さうはいふものゝ、現今でも役柄によつては、嚴格過ぎないかと思はれる程なのもある。先般辭めた破産係として令名嘖々たりし某判事の如きは、學校以來友人關係の一辯護士と酒も飲み交はすこと兩三度、これだけでも嫌疑濃厚高踏勇退しなければならなかつたとはお氣の毒千萬な話ではないか。

茲に唯一つ、どんな嚴めしいお役人でも意を安んじて招待に應じ、自由歡樂を倶にすることの出來るものがある。――それは角力だ。御意の儘にお出掛け遊ばして一向に怪しまれない。多分男らしい觀物として昔から歡迎されてゐるからであらうが、洵に調法な催し物である。春夏兩場所の國技館は大角力協會の稼ぎ時であると共に、金儲けの蔓を摑まうと念ずる連中にとつても絶好の機會である。されば氣の利いた商店や會社には買切つた棧敷があつて、興行十一日間は專任の角力係を臨時に設け、招待客の割振りやら御見物中の奉仕に相當頭腦をなやます。

お客亦然り。殊に土曜日曜には是非手前共への申出でが多く、衆人環視の場所柄だけに、甲商店の棧敷も乙會社の附席もお互に公開されてあるから、招待される方でも偏頗なことは出來ない。そこで此方もお客樣になつて行く日割に可成り神經を使ふといふ寸法。――殊にこの惱みは銀行信託會社の幹部連に多いとは、へゝ可笑な！

ところで角力のハネは興味の通な方である。これだけできつちと自宅へ眞直ぐお歸りになつて、我で切るよたトンカツ料理でも召上つた方が無難なのだが、どツこい、それでは主人側が不承で御座る。この儘サヨナラされたんでは、佛作つて魂を忘れたやうなものだ。――民謠手唄つて曰く、

送りましよかよ、送られましよか
せめて夕食の料理屋までも

お斷りするまでもなく、これは感傷的にして素朴な村謠を作り替へて、峠の茶屋を文字つたもので、それから先き主客胸襟を開いて如何なる情景にまで發展するかを説いては野暮であらう。

人の悪い虚業家はこの現象を逆に解釋して國技館に於ける棧敷客の顔觸れを、ずらりと一渡り見渡した後で、各商店會社の評勢を卜して大過なきに等しい。

氣はア、株屋の強氣商會は實業信託の後援があるのか。……潰れさうで仲々潰れないのも不思議に思つたら、角丸鐵工には四ツ目銀行が附いてやがる。……ふん、成程、富士造

船に景氣が出るかな。年度替りになると乾度大きな注文が入るぞ。……』

近頃は芝居も大分利用されて來たが、私用の點が到底お話しにならない。食事は都合ひを利用して食堂で事足りる。夜遅くなつてからの閉場に、更に歩を枉げて頂かうとすれば、初めてのお客には斷られ易い。正直なところ、主人側の身になれば芝居や角力は如何だつていゝんだから助からない。但し角力では年二圓と制限されるし、金がかゝつてやり切れない。そして大勢の御招待には不便であるといふ點で、時節柄芝居といふことになつたらしいが、效果は依然として無駄費ひの金額に比例するやうだ。

そこで僕が豫言する——までもなく、拔目のない連中は既に實行してゐるが、今後角力に代つて力瘤を入れるのは野球である。それかあらぬか、神宮外苑野球場の指定席には大分その方面の手が伸びて、これにも權利が附きさうだ。そんな上等な場席ならずとも、早慶戰の切符なら外野の芝生だつて相當感謝されるだらう。而も野球は必ず日沒には終了するし、汗や埃にまみれた身體を、『簡單にお湯に入つて麥酒でも一杯飲みませうか。』と誘はれて、否といふ馬鹿が何處にあらうか。……

ボロい役德

銀行の末路はよくいふ。——貸付係でたいから些も面白くないと、或は然らん乎。大切な預金を運用するのだから愼重に善處したければならないのに、無責任な貸出し方をするものが尠くない。それも全然自分の見込み違ひなら幾分恕すべき點もあるが、初めから情實因緣づくで不良固定貸付を作るに至つては論外である。それでも個人としての收入が多ければ、敢て何をか謂はん哉と毀譽褒貶を度外視されては堪らない。

彼等わかりのいゝ銀行の貸付係は余禄れの賞與——ではない、所謂附屆けが山を爲し、商品券の厚さ正味無慮一寸も萬更誇張の言ではあるまい。さもしい話だが一枚最低五圓と踏んでも可成りの總額に上り、五分引きで現金に代へたら相當息がつけやう。その他毎月ちよいく折に觸れ時に臨んで、斯んな幸運の紙が舞込む。かるが故に彼等は親の遺產があるやうに世間態を繕ひたがら、月給と同額の家賃を拂つて涼しい顏も出來るのである。稱して之を役德といふ。

而して現代社會には驚くべき役德の主が實にうよく〳〵してる。某貯蓄銀行が例の帳簿整理の爲め三週間臨時休業を發表し大戶を下してその旨書いた貼札を、不良手形のやうに何遍貼替へても一向に埒あかず、零細な預金者一同途方に暮れた時、銀行側の整理委員が私利私慾に眩んでゐるから駄目なんだと、大會の決議を以て不信任の意を表し、預金者側で選定した委員の手で更生の意氣凄まじく、貸出先きを片ッ端しから怒鳴りつけて歩いたことがある。

彼等は滯り貸の中でも大口、某工業會社の社長の邸宅へどやく〳〵押掛けたが、不得要領で誠意がないのに業を煮やした委員中での最硬派、應接室から令夫人の縮こまつてゐるでもあらう茶の間までも響けとばかり大音聲を張上げて、

『貴樣達は××する時の×まで銀行の金で買やがつた癖に……』

吉原の親方だけにいふことが汚い。流石臨

業的精神で鍛錬された社長もこの一言には閉口頓首、後刻會社から具體的の御回答申上げるからと三拜九拜して歸つて頂いた。

夫人は顔を顰めて苦り切つてゐる。あの調子で毎日やつて來られては堪らぬと、社長は彼の輪に輪を掛けたやうな惡辣な男を代理に、のらりくらりとお相手をさせた。この男が銀行の預取部屋に納つてゐる親方を訪問したこと勿論であるが、更に時間過ぎには吉原の何とか樓の御内證に敬意を表することも忘らなかつたので、御兩人お茶挽き女郎の酌で大に共鳴し出した。――如何に預金者一同の爲めとはいへ、無報酬の手辨當で一日歩き廻つたんでは面白い事もあるまい。この際會社の借金五十萬圓を三十萬圓負けて呉れゝば、お前の手柄にして即金で解決をつけやうではないかと、他人の金だけに大ざつぱな掛合ひ方をすると、斯んな大きな算盤を彈いたことのない横丁の親方は眼を丸くして、

『ナニ、三十萬に負ける?』

『いや、さうぢやない。會社で二十萬だけ返すんだ。剩餘は打切りと……』

『そいつア、俺の一存でもいゝかねえが、骨折賃を出すなら何とか考へやう』

それを切出させたいばかりに、小兒性の内證部屋で生れて初めての經驗をしたのである。斯くて棒引き金額の三分を提供しやうといふスケール附きの密約が成立した。

『早い話が、お前さんのいふ通り銀行で三十萬負けたら、三三が九千圓呉れるといふんだね。』

とダメを押して奮闘した。それが爲めか否か、會社では負けて貰つただけの金額を、同期の決算に利益金として計上したさうな。

更にこの役徳が常習的になると、子供にまで恐るべき影響を及ぼすやうである。――ひどく威張り散らして下役には餘り評判の芳しからぬ仁、何かにつけて押寄せる記者諸君には愛嬌を振り撒くので、新聞を通じて世間的に名物男として聞えてゐたが、非常な取込み屋さんであつた。この頃のやうに圓タクの横行しない時のこと、すらりと官舍ばかり建ち並んだ閑靜な所へ、高級車が入つて來るのを見た坊ちやん、下僚の家の子に向つて、いともほがらかに叫んだのである。

『あの自動車何處へ行く? あたいの家へ……そすれ叔宅、何か持つて來て呉れたんだよ。お菓子なんかちく一まんないなア……』

頑是なき子供の分際として、お菓子をつまらないとは何事ぞや。

厚意の押賣

扨、今年もはや七月、例によつて中元附屆品流行の季節とはなつた。虚禮廢止とか何とか思ひ出したやうに、生活改善同志會邊で御骨折りだが、又一方、百貨店では此處が大切な書入れ時とばかりに、心を砕いて宣傳する中にも、御進物用品を澤山お買上げになりさうな商店會社には、丁寧な石版刷りの書面に半紙の一枚も差上して、何分御用命をと御願ひに伺候する。それにしたところで、得意先きへの配り物なんか狙つたんではタカが知れてゐる。目的は銀行の幹部やお役人のコンマ以上への音物でなければならぬ。

堂々たる一流の會社、銀行の方から利息を勉強するから是非使つて頂きたいと、わざわざ行員が特派して勧誘されるやうな基礎鞏固な所には不向きであるが、二流以下、日歩十錢といへば年三割六分五厘の高利につく

が、それでも結構と背に腹は代へられぬ會社では、どんなヒド工面してもお遣ひ物も買はなければ、今後の金繰りが怪しくなる。平常何でもない時に差上げると、貰ふ方でも氣がさして穏かでなからう。製品買込み先きの幹部連に對しても亦然り。手巾の一打や烟草の一函なら問題でもあるまいと受取つたが最後、蛇の如く執拗にじりじり侵入して行く。そして抜き差しならぬ因縁を結んで終ふ。——七月と十二月は正に善良なる諸君の警戒を要すべき二大厄月である。

これは主人だけが謹直に頑張つても駄目だ。トテモ貰つて呉れさうもないやうな硬骨漢の家へは、當人のゐない留守を見込んで品物を持込む。

『では、主人の歸りますまでお預り致します。』

と保留したら百年目、滅多に返せるものではない。尤も、初めから貰ふ心算で、巧妙なるいひ廻しとしてこの挨拶を心得て御座る賢夫人もあるから、ムキになつては野暮かも知れない。就中、玄關先へ子供が指を啣えたがらちよこちよこ出て來る家は大抵大丈夫、殊に芳香馥郁たる果物籠でも置いて來たら、夕方主人御歸宅までには必ずお手が付いてゐる。老猾なる融業の投手は先づ第一球にこの釣り球を出すさうな。諸君以上に善良なる細君はこの手に御用心遊ばすこと肝要である。

もう少し上流夫人の虚を衝く巧妙な掛引きは、主人を訪問して賛木いらずの座談に敬意を表しながら、彼女が紅茶でも入れて御挨拶に罷出た時、何氣ない顔で百貨店評判記を一席辯じ上げ、何店の常連であるかを察知してその儘引下がる。そして彼女御贔屓の店に行けば、何番の賣り場で何某が御用承はつてゐるか調べるのは造作もないことだ。然る後そのお名指しの店員に、彼女の嗜好に適したものの乃至は錦上花を加へるやうなものを見立てさせる。斯くて——まア、いゝ柄だとか、丁度買はうと思案してゐた矢先だとか、頗る時宜に適した贈物が出來た。矢は既に放たれて先づ馬を射たのである。

次の日主人公を私邸に訪ねて談金融に及べば、

『あなた、そんな頑固なことを仰しやるものぢやありませんわ。どうせ御自分のぢやなし、みんな銀行から出るんでせう。ね、私に免じてお貸し遊ばせ。』

彼女がさう明瞭にいはないまでも、結果に於て思ふ壺に嵌まる。そのお禮として商品券が追加される。——借入金の期日が迫れば更に倍額のものが遅くも前々日位までには屆く。この筆法で書替へやら新規別口やら、何が何だかわからない程錯綜して來ると、一々商品券では贈るに不便、貰つて不利——百貨店の標語が逆になつて、お互ひに面倒臭く、ナマ現送が最も重寶なことに進展する。その貸付金がどんな焦げつきになるかは説くまでもあるまい。

若しさういふ寛大な金融業者の家に不幸でもあつたら、お氣の毒だが災禍は當分屋の棟を去るまい。——日頃御恩借に生きてゐる連中は晝夜からお通夜見舞ひなど親戚よりも遙かに奮發して、配下の二三人は徹夜でお手傳ひさせる。そして自分は葬儀委員となり濟まし、何くれとなく采配を揮る。凡て冠婚葬祭は厚意の押賣りをするに絶好の機會ではないか。先年、某銀行頭取の家で令息が逝くなつた時、われもわれもとこの手を用ゐたので、告

列式にずらりと並んだ報償委員の嚴粛な姿を眺めて、口の悪い奴が借金帯附と冷評を放つた。然り、同行不良貸付金額の多い人間程出娑婆つて、尤もらしく黒装束の絹帽片手に頭を光らせ、萬年筆のやうに硬直してゐたのである。

螢の光、窓の雪

然らば、もつと、もつと上流の金に目の眩まない階級の人物に取入るには、何を以て為すべきであらうか。彼等こそは何一つ不自由のない身分だから、下手に商品券なんか進呈したら、却つて無禮者として目通り叶はぬ、下れッと首尾を惡くして龍蛇に終るに相違ない。反之、巧に御機嫌奉伺が出來たなら、直接間接の有形無形に受ける利益は莫大なものである。そこで實業界の智慧者は某元老別莊の隣地を買入れて、其處に自分も第二號を住はせ、人知れず裏庭傳ひに交通の便を開いて、茶道に風流を装ひながら虎視眈々、ひよつとしたお聲がゝりで大きな利權を一つでも獲れば、十年計畫で目論見ても充分算盤に乗る勘定であらう。

さういふ榮耀榮華に耽つてゐる御仁に敬意を表し、うい奴とお賞めの印象を深からしめるには、可成り頭腦を痛めなければならない！

震災前の某年初夏の頃、朝顔日記の昔より螢の名所として、世俗にも謳はれる宇治から東京驛長室留置きの特別扱ひで、二十數萬匹の螢が一萬二萬と小分けにされて、當時の顯官高爵宛に屆いたことがある。珍らしく奇拔な着想として好評を博して、贈り主は豫期以上の面目を施し、爾來仕事にかけて多大の便宜を得たのであつたが、この宣傳費僅か二千四五百圓で事足りた。

そんな階級の人々は一反百圓の上布を呈上しても、一向に有難がらない。彼はその生きた實例を前年體驗してゐた。——二人連れで某老公が熱海の別莊先きへお見舞に參上した。彼は紅白の羽二重數疋、他はメロン數個——値段は到底比べ物にならぬ相異であるにも拘らず、公は前者に眼もくれず、子供のやうな無邪氣な顔をして、

『こりや甘さうぢや。』

とメロンを令孫の頭のやうに愛撫した。

これに悟る所あつた彼は、智嚢を絞つて螢大枚な出費をした、一匹一錢に附けるといふので、同情した年寄は其金を惜まぬだけの餞別と云ひ、大々的な運動員を行つたさうな。一萬匹といふと大層なもののだが、その實反物一反の値段。而も贈物の效果は断然ダンチではないか。——それからといふものは、すつかり公のお氣に入りとなつて、何か話したいことがあると、近侍の者に向つて、

『螢のあれを呼べ。』と仰せられたとか。……

こゝで一つの笑話落ちが許されるならば、その光榮に感佩した彼も今や初老の域を過ぎ、禿頭照る稀にして逆螢の異名に轉化せんとしてゐる。

斯の如く贈物の選定は苦心に苦心を累ねなければ、折角金をかけても佛作つて魂の入らない無駄になる虞れがある。昨今少し下り坂のやうだが、關係會社の多いことではベスト・ファイヴに入る一重役業者は、銀行關係の最高幹部に對する敬意を表する方法として、好んで小判を使用した。成程、これも珍らしい。殊に慶長の大判でもあらうものなら、一枚五圓なんて時價を超越した立派な美術工藝品であらう。又、彼は誰れしも評價に苦しむやう

なものを贈つた。例へば高貴のお方が御使ひ捨てに遊ばした鐔入りのお茶碗とか、雲の上の御料に選擇された殘りの生魚とか、民間では普通手に入らない點が、頂くものも有難かつたに相違ない。

勿體ないお話はこの程度に止めて、大衆的な品物となれば、神茂のはんぺんなどを十枚ばかり包ませて、文字通りの手土産にするのも仲々オツだが、それよりも氣の利いたお遣ひ物としては、根岸名物「笹の雪」の豆腐三丁一舟、金七十五錢也を隨一としやう。豆腐が一丁二十五錢かなんて眼を丸くするやうでは倶に贈賄を談ずる資格なしだ。但しこれは貰ふ人も吟味する鑑賞力がなければ、矢張り山吹色の方に手が出るだらう。

尙、書畫骨董を贈物にする人があるが、これは昨今頂載する方で敬遠する傾向を生じて來た。――といふのは、貰井各兵衞といはれた程に何でも取入れた仁が事業に失敗して、いざ整理と倉一杯の到來物を處分する段に及ぶと、眞贋の比率が極東大會に於ける日華陸上競技の點數程の大差で、而も二束三文の評價に再度吃驚といふ噂が、蛇の道は何とやらで忽ち彼等仲間に傳播されて以來、折角の御芳志がいゝ顏をして迎へられなくなつた。

以上、生半可な知つたか振りを御披露に及んで聊か冷汗ものだが、賄賂必ずしも現ナマと限らず、最初からそれを臭はせるやうな奴は、やる方も貰ふ方も、仕事師の風上に置けぬケダモノとして蔑視される。而して、一度でも受渡しが成立すれば、後の續きは誰れにだつて出來やう。要はそれまでの苦心である。

如何に懐が寒くとも賄賂の賄は取らぬ。斷然いやだと頑張つてゐる善良なる紳士に對して、手を代へ品を換へて近付き、現ナマの一歩手前まで引寄せて、恥しさうにもぢ／＼するのを見ると可愛氣があるが、一旦純潔性を失つてから態度を急にがらりと變へて、玄冶店もどきの啖呵を切られると、自分が邪道に陥れて置きながら餘りの圖々しさに、愛想が盡き果てるとは贈賄者にも三分位な理はあらう。

悲しき女優の生涯

丸木砂土

聖なるヂウゼ

今日の日本劇壇に女優はゐるか。僕は確信して、ゐないと答へる。少くとも今日日本にゐる女優は、役者としては餘りに假面を缺き、人間としては餘りに凡俗であり、女としては餘りに性格を持つてゐない。今日の日本の女優は、その技藝から考へても、生活から見ても、西洋劇壇の女優と比較しては、餘り小娘過ぎ、令孃過ぎ、淡過ぎる。一世を惱殺する美貌もなければ、一代を風靡する人氣もない。今日の日本劇壇寂寥の一つの重大原因は、名女優の現はれてこない事である。

これは然し決して日本ばかりではない。今日の歐洲劇壇でもサラ・ベルナアル死し、エレオノラ・ヂウゼ世を去つてから、僅に女優として名を輝かしてゐるものは、巴里のピトエフ夫人一人であらう。他は恐く映畫女優として、舞臺の人ではない。モスカウ藝術座のチエホフ夫人も、「櫻の園」や「三人姉妹」以外に新作でどれ丈成功するか、これも疑問だ。それにもう寄る年波である。獨逸でも若い女優としてはベルグネル一人がゐるが、これも小さ過ぎる。僅に巴里のピトエフを數へるに過ぎないが、然しこれも佛蘭西の人氣を奪ふ程度のものではない。かうして今日の歐米名女優は、恐く映畫の人の中に擧げられても、舞臺の人では殆ど滅亡しきつてゐる。もう舞臺の人としての名女優は、世に現れてはこないのではなからうか。

僕はこの歐洲の最後の女優として「聖なるヂウゼ」とまで呼ばれた伊太利悲劇女優エレオノラ・ヂウゼを、偶またつた一度だけ伊太利旅行の途で舞臺の上に見た。これは僕にも最後であつたと同時に、歐洲人にも最後のものであつた。それからヂウ

ゼは倫敦に去り、續いて米國の興行に渉つて、その異國の旅路で死んでしまつたからである。歐洲近代の名女優として擧げられるサラ・ベルナアルの華麗なる藝風とは全く反對に、南歐の女としてダヌンチオの戀愛悲曲の女主人公を得意としてゐ乍らも、ヂウゼの心を捉へたものは、北歐イプセンの「海の女」の悲みであつた。近代歐洲劇壇で、イプセン女優としては、遂にヂウゼの右に出づるものはない。恐らくヂウゼは歐洲演劇史に於けるイプセンの最後の女優であらう。同時に歐洲女優史に於ける最後の女であるかも知れない。ヂウゼの姿は遂に映畫にも殘らず、花やかな前半生に比べて、慘憺たる晩年を僅に聖母を念じて、貧乏と藝術の苦みの欝憤を抑へ、遂に北米の客興行中に、犯されてゐた呼吸器の病氣は、六十五歲の老女優を寒さと疲勞の中に倒したのである。

僕はイプセンの名と共に傳はるべく、しかも忘れられてゆくこの女優の一生を、化粧さへせずに舞臺に立つた老婦人の生涯を、もう一度振返つて見たい。

貧窮の少女

一家一族の者を擧げて、悉く芝居の人であるといふ例は、日本の歌舞伎役者には甚だ多過ぎる位だ。伊太利ではかういふ一家を「芝居の子」とも「役者の子」とも呼ぶが、「聖なるヂウゼ」の一家も、この一つの例である。ヂウゼ家で初めて役者となつたのは、祖父のルウアギ・ヂウゼで、エネチアに役者となつて、伊太利の名喜劇作者ゴルドニイの作を演じては誰も敵はぬと褒められた程の座頭であつた。その頃の習慣で、幕がしまると、舞臺の下へ出て、次の晩の下題を呼び上げ、續いて言葉巧みに自分の家の災難や困窮を述べ立て、見物の喜捨を仰ぐと、盛に金が集つたといふ人氣者であつた。辮髪にした黑い鬘をつけ、眉の上には大きな黑い星を二つつけ、顎には白い布を捲き、暗藍色の胴衣に花の刺繡をしたチョッキを着て、紅い半ズボン、白の靴下、銀のしめ金の靴といふ、エネチア風の衣裳は、このぢいさんの意匠である。このぢいさんの息子のアレッサンドロも立役であつたが、役者よりは繪の方が好きであつた。

その娘エレオノラは、千八百五十九年（安政六年）十月三日に、エネチアから餘り遠くない汽車の中で生れた。父親はこの娘に洗禮を受けさせる爲に、硝子で張つた金色の函に入れてお寺へ連れて行く途中で、墺太利の兵隊が之を見て捧げ銃をした。金色の函をお寺の寶物と間違へたのである。初めて舞臺に立つたのは四つの時で、ユウゴオの「噫無情」を脚色した中のコゼツタになつた。小さい時分のヂウゼは、ジプシイの娘のや

うに、顔は瘦せ、體は小さく、見るからに哀れないぢけた姿であつた。母親は病氣で入院してゐながらも、自分のスウプをヂウゼの爲に殘してやつて、これを驅け寄る娘に與へた位である。十四の時に母に死に別れても、黒い布を買ふ僅な金もなかつた。

十四の時に、初めてヱロナでジユリエットを演じた時、見物の何者もこの哀れな少女から、後世の「美しき手を持てる」女優ヂウゼを想像したものはない。その舞臺姿はいかにも壓迫されたやうで、その仕草は半ば眠つてゐるやうに、臺詞も唯つぶやくやうに聞えて、見物には寧ろ痛々しい心持を起させた。唯ヂウゼはこの頃に好んで古い立像の前に立つて、何時もそれを見上げ乍ら、姿勢や形を習つてゐた。斯くして二十の娘盛りを、ヂウゼは憂欝と刻苦と寂寥の中に送つたのである。



（フランチエスカ）

花の動機

唯この貧しい少女ヂウゼは、殆ど一生を通じて捨てなかつた、一つの舞臺技巧を考へついたのである。それは「花の動機（モチイフ）」であつた。ヂウゼは最も花を愛した女であつた。ヂウゼはいかなる舞臺でも殆ど花を持たなかつた事はない。ヂウゼにとつて花は等しく相手の役者であつた。「椿姫」の椿の花、「故鄕」の花束は勿論、後年「ヘッダ・ガアブレル」の時には、自ら花の動機を自ら考案した。例へば序幕でこの女優はいつもテエブルの上に菫の花籠を置いて、時々三四本の花を引拔いては、顔に押し當てて匂ひを嗅いだ。イプセンの思ひもつかなかつた、菫を愛す

るへッダが出來上つたのである。

ヂウゼが初めてこの花の動機を作り出したのは、十四の時の「ロメオとジユリエツト」の舞臺である。ヂウゼは貧しい貯蓄の中から、軟な蔭を隠した蒼白い薔薇と、紅い薔薇の花を買つてきた。そしてこの花を顔に近附けて、匂ひを嗅ぎ乍ら舞臺に現れたのである。やがてロメオが現れて、二人の熱い眼が出會ふと、ジユリエツトの手の薔薇は震へて、一つの花が男の足許にこぼれ落ちた。ヂウゼが靜にかゞむと、男は近寄つて薔薇を拾ひ上げ、言葉もなく女の瞳を見入り乍ら渡した。こんな仕草はもとより沙翁の考へてゐた場面ではない。又有名な露臺の場では、ヂウゼは兩手に一杯の薔薇の花を抱いて、窓際に立つてゐた。ロメオが近付いて、露臺の下にくると、ヂウゼはその花束のあらゆる薔薇をむしりとつて、男の額に投げ落したのである。ジユリエツトの寢床は勿論薔薇の花で埋められてあつた。

出世藝

この哀な少女が一躍して盛名を擅にするに至つたのは、千八百七十九年（明治十二年）代である。ナポリのフイオレンチニ座で、二十一の娘は「テレエズ、ラカン」を演じ、ツウリンのツアリニアノ座で「バグダツドの王女」を演じたのが出世藝とされてゐる。テレエズを演じた時、ヂウゼは伊太利第一の女優チアチンタ・ペツツアナの下にゐた。このテレエズを批評家エドアルド・ブウテエが記して「私等はあの晩の勝利を決して忘れる事は出來ない。私の目の前のヂウゼは、短い黑い服を着て、低い窓に倚りかゝり、うつけ心の取り止めもない顔をして、僞と罪と愛と驚きと憎みと厭はしさの中に生きてゐる姿であつた。又白い花嫁の被衣をつけて、恐怖に襲はれ乍らひしとロレンツオに身を寄せた時、殺されたカミロの肖像を凝然と見詰めた時……之等の時見物はすべて戰慄した。見物の魂はその不思儀な所作に全く囚はれて、敢て喝采する事さへ出來なかつた」と書いてゐる。

ヂウゼの名はこの時忽ち全伊太利に擴がつて、役者組合頭取チエエザレ・ロツシイはヂウゼを傭つてワキ役とし、シテ役にはその師匠の女優ペツツアナを振り當てて、ロツシイ一座は旅興行に出た。エネチアではサルドウの「フエルヂナンド」を出した。師匠ペツツアナの古典風な藝に對して、ヂウゼの自然主義的舞臺は、まるで一座のものとかけ離れた藝風を見せたものである。嫉妬の嘆息の中に聞える纖細な諷刺、滑稽な不平の中に交ぜた銀のやうに淸しい小さい叫び、目ばたきや手の動かし方よりも雄辯を示す沈默、その時代から現れてきた持役の中に

個性を現さうとする努力は、遂に伊太利劇壇に新しい自然主義的技藝を開拓し、テレエズ役から二三ヶ月たたぬ内に、ロッシイ一座のプリマ・ドンナ・アッソルタになつた。

この一座がツウリンのツァリニャノ座へ移つた時、千八百八十一年の九月である、ヂウゼは一座の役者のツェチイとフィレンツェで結婚した。尤もこの時既に腹には子供が出來てゐた。

女優サラ・ベルナアル

このツウリンの旅興行中である。同じく此處へやつて來たのが、近代歐洲に於ける最大の佛蘭西女優サラ・ベルナアルであつた。「女優サラの如く泣け」とは、有名なユウゴウの言葉である。さすがに座頭ロッシイも、このサラの興行に會つては、手も足も出なかつた。ところが生れて初めてこの名優の藝を見物したヂウゼは何と思つたであらう。ヂウゼはサラを見乍ら、わたしにも出來ると叫ばないばかりに興奮した。さうしてサラの興行が過ぎて、まだ幾日もたたない内に、ヂウゼはサラと同じ出物の「バグダッドの王女」を演じたのである。アレキサンドル・ヂウマはこの時の劇評を特に全集新版の傍註に記して、「レオネッタ夫に向ひ、わたくしには罪が御座いませぬお誓ひ申しまするると言ひて夫之を信ぜざると見るや、立ち上り我子の

頭の上に手を置き三度お誓ひ申しさするといふ。この時の俳優諸肉たる明暗の藝は、未だ巴里に於ても演ぜられたる事なし。然るに余等はこの驚嘆すべき伊太利女優ヂウゼに、その美しき靈感を感謝する處なり。よつてこの全集中に記して以て、この女優に對する榮譽と功勞を頌せんとす……唯余は佛國藝術の爲に惜む、この非凡なる女優の佛人に非るを」とまで激賞してゐる。

二十一歲のヂウゼの人氣は、伊太利全國を壓した。少女達の間には、わざと頭の髪をくしやくしやにして、ピンを嚙んだり、腰かけて足をぶらぶらさせたり、或は襟へたぼのやうに出した髪へ、二三本の光つた釵を挿すヂウゼの眞似が流行し初めた。

旅興行

續いて千八百九十一年にはペテルスブルクに招かれ、九十二年二月に維納に赴いた頃から、ヂウゼはもう歐羅巴劇壇を風靡した。ヂウゼは之等の旅興行の間に、最力めたのは、讀書と美術の研究であり、行く先々の美術館記念碑圖書館で、ヂウゼの出掛けなかつた處は、一つもなかつた。好きな作家はボッチヒリであり、好んで讀んだものは、マンテニヤ、エロッシオ、デシデリオの作であつた。

維納へ行つてカアル座で「椿姫」を出した初には、大きな成

告もしなかつたので、見物はひどい不入であつた。處が二日目から切符は朝の内に賣切れた。キシイ溫泉場で同じく「椿姬」を出した時である。序幕の幕切れに、手違ひから幕が少し早く下りてしまつた。ところが見物は狂氣のやうに拍手して、もう一度幕を上げさせた。ヂウゼに挨拶させる爲であつた。ところがもう一度幕が上ると、ヂウゼはまだ前の續きの椿姬が一人で物思ひに沈む處をやつてゐた。見物はそれを挨拶だと思つて、更に狂喜した。

千八百九十三年十二月四日には、ヂウゼは伯林で「故鄕」のマグダに扮して、作者ズウデルマンに手紙を書いて曰く、

「あなたのマグダは十年間働きました。あなたにかうしてお手紙を書いてをりますマグダは、二十年來働いてをります。この女はマグダとは大違ひで、芝居から離れる日を數へてゐるばかりで御座います。マグダは十七年間兩親の家で暮しました。あなたにお手紙を書いてをりますマグダは、何にもさういふ經驗が御座いません云々」

クレオパトラ

けれどもヂウゼが眞に獨逸人を驚異せしめたのは、後年の千八百九十九年九月二十六日伯林レッシング座で出した「クレオパトラ」としなければならない。スチユムケはその劇評集「第四の壁」の中に「ロッシイのオセロ以來、獨逸劇壇はかくの如くに最後の一線に至る迄眞に放たれたる熱情の奔騰を見たる事なし」と激賞してゐる。恐怖絕望戀愛歡樂やがて驚愕憎惡憤怒と、すべてのものがこの舞臺にあつた、唯恥辱だけがなかつたとまで稱せられた。

ヂウゼの「クレオパトラ」で、最凄艶を盡したのは、使者との場面に次いで、有名な蛇の場面であつた。この場はいかなる名女優が演じても、多くの場合滑稽に近くなると看做されてゐる。氣の小さい舞臺監督は、この場を大概見物に背中を見せてさせるのが多いのである。それをヂウゼは女王の裝飾をつけて、舞臺の眞中に置いた床の上に横たはり、やがて葉で蔽ふた、籠の中から毒蛇を摑み出し、胸の上にレエスをかけ、小聲で毒蛇を愛撫するやうに抑へ乍ら、無限の死の歡樂に身を任せて最後の呼吸をした。ヂウゼの悲劇的技藝は殆どこの場で絕頂に達した。勿論蛇は本物を使つた譯ではない。生きた鰻を使つたのである。

伯林興行の最後の晚に、ヂウゼは湧き返る歡呼の聲に、どうしても舞臺を下りる事が出來なかつた。するとレッシング座の頭取ノイマンホオフエルが大きな月桂樹の冠を持つて現れて、見

物に向つて短い演説をした。

「もしヂウゼさんが自分の故國はどこかとお尋ねでしたら、それはあなたを驚嘆し尊敬する所は、すべてあなたの故國で御座いませう、とかう御返事しなければなりません」

かう言つてヂウゼの手を握つた。ヂウゼは微笑した。ヂウゼが受取つた大きな桂の冠の飾りの紐には、右側に「レッシングは藝術と自然の一ならん事を希へり。かのレッシングの名を冠せる我劇場は、正に詩人の希望を實現せるエレオノラ・ヂウゼの天才の前に謹んで尊敬の意を表す」と書いてあつた。左側には千八百九十九年九月十六日から十月五日までのヂウゼの出し物の曲名があつた。これが今日の伯林の好劇家に、恰も團菊左の大芝居を追憶するやうに物語られる、有名なヂウゼの客興行であつた。



(椿姫)

ルウマニアの旅

伯林をたつたヂウゼの一座は、すぐにブカレストに向つたが、汽車がルウマニア國境のイツカニイ停車場へ着くと、旅券檢査の役人は、ヂウゼをジプシイの女だと思つて、初め國境通過を許さなかつた。

ヂウゼはブカレストの國民劇場で「椿姫」を出した。三幕目の「私は死にまする、死ねば神樣は私をお許し下さるで御座いませうね」の長い臺詞を、ヂウゼは小聲で靜に絶望して、凝然と自分の前を見つめ乍ら言つた。この時涙を流したのは、舞臺の人ばかりではない、見物は一人として涙を抑へないものはなかつ

た。この場のヂウゼは、役者としての天才の有らん限りを示したと稱せられ、歌劇作家ヱルヂィは「せめて私が『トラヰァタ』を書く前に、この可哀いいヂウゼの聲を聞いたら、私もこのアルマンドのクレセンドに、どれ程おもしろい終曲の作曲が出來たたらう」と嘆息した。

ルウマニアの女皇で詩人のカルメン・シルワは、特にヂウゼに勳章を贈つた。

ブダペストにて

ブカレストから十月二十一日にブダペストへ向け、夕方の汽車で立つた。蜿々たるカアバシアン山脈を月光の中で見た。目的地へ着いたのは、一時であつた。

十月二十六日初日の「椿姬」では、十二度も幕外に呼び出され、平土間にゐたある婦人は、三幕目から絶え間なく泣いて、ヂウゼが出てくる毎に、氣違ひのやうにハンケチを振つた。二十八日の夜の「クレオパトラ」の時には、ヂウゼは見物に向つて、子供らしい調子で齒痛に惱んでゐるお詫を述べた。

「けれども本當にお恥しい病氣で御座います。人間が死ぬ前にもう蟲に喰べられるので御座いますからね、皆樣はさう思召しになりませんか？ 骨が腐つて參るので御座いますもの、生き乍ら私達を蟲が喰べてゆくので御座いますもの」と無邪氣に珍しく笑つた。

十月三十一日夜の小ヂウマの「ジエオルジ王女」の二幕目で、苦しい躊躇の瞬間の後に、伯爵が啞聲でいふ「それからあの男の名を」の臺詞にすぐかぶせて、「お尋ねなさいますの」と言つたのは、有名な近代演劇史の型になつた。

薔薇の雨

ブダペストから眞直に獨逸の田舍の都ブレスラウへ來た。更に維納へ進んだ。氣管枝炎に犯されて、ホテルで起きられなかつたが、病氣が薄らいでから推して舞臺に出た。維納はヂウゼにとつて思出の深い都である。この頃の維納劇壇といへば、殆ど歐洲近代演劇史の記錄的時代だ。カインツ、バウマイステル、レヰレスキイ、ペトリ等がゐて、實に盛觀を盡してゐた。ヂウゼはこの大事な維納興行を、殆ど風邪と氣管枝炎と鬪ひ乍ら舞臺へ出てゐた。この呼吸器の病氣こそ、實は後年等しく寒氣に犯されて突發して、この女優の命を奪つた禍根になつた。ヂウゼは幕間に來た見舞客の手を握つて、自分の手の冷さを見せたといふ事である。

維納の出し物は、「故鄕」、「第二タンカレエ夫人」から「クロ

オドの女」になつた。その晩の事である。一座のアントニイヌの役者が、大詰の舞臺へ出る時、金庫の鍵を間違へて、衣裳部屋の鍵を隠しへ入れて登場した。やがて金庫を開けようとしても開かない。そこでこの役者は途方に暮れた。ほかの役者は小聲でしまつたと言つた。するとヂウゼは忽ちテエブルの上から新聞紙を執り、それをいら／＼した様子で揉み丸めて、やがて金庫に近付いて、その中から秘密の紙を取り出した風をして、何事もなく舞臺を濟ませた。大詰が終ると、いつものやうに見物の叫喚に促されて幕が上つた。するとこの時四方から舞臺の上に、色彩と種類を盡した薔薇の葉と花が降り注いだ。花びらは幻の如くにヂウゼの髮に散りかゝり、體に降りめぐつた。忽ち舞臺は薔薇で一ぱいになつた。この時ヂウゼはつと身をかゞめて、その花を拾ひ上げ、手早く花輪を拵へて、舞臺にあつたベエトオフエンの胸像にかけた。ヂウゼは二十度も呼び出され、ある可憐な詩人は、「ベエトオフエンとヂウゼ」といふ詩を書いた。

ダヌンチオと共に

「春の曙の夢」から初まつて、「死の町」に「ジオコンダ」に、幾度となく最愛の「美しき手を持てる聖なるヂウゼ」の面影を寫して來た詩人ガブリエル・ダヌンチオは、更に千九百一年の初秋の一夜、この女優の爲に「フランチエスカ・ダ・リミニ」の曲を書き終へた。ダヌンチオとヂウゼとの戀愛關係の詳細は、殘念ながら僕には分らない。知り得る程度はダヌンチオの小説「火」を讀むだけである。けれども知らぬ人もない、この詩人と女優との戀愛は、最好くダヌンチオの劇作に現れてゐる。この詩人の名作の女主人公が、ヂウゼを目がけて書いてゐる間、二人の關係は最熱烈なものであつたと見る外はない。僕は寧ろこのダヌンチオの傑作「フランチエスカ」を以て、二人の戀愛の最後の作と見てゐる。遂に二人はこれから二十年も近く額を合はす事なくして相別れたからである。

千九百一年十二月九日ダヌンチオは自らこの曲を羅馬市コンスタンチ座に上場した。作者がこの曲の準備の爲に費した努力と、之に應じて稽古を勵む女優ヂウゼの熱心とは、多くの周圍の人を驚かした。ダヌンチオはこの長篇戯曲の構想に殆ど一年を費した。既に筆を執らんとするや、數ヶ月の間散文と詩歌と歴史の研究に沒頭した。曲成つて、漸く愛するヂウゼの手に渡さるるや、ダヌンチオは自ら繪筆を執つて舞臺の裝置圖を描き、材料を選擇し、衣裳を注文し、特殊な軍器を探し、群集を指揮し、立廻りの陣形を整へ、小道具を手造りさへ初めた。稽

古が初まるや、ダヌンチオは多くの人夫を督勵して、稽古場へ夥しい書籍、花緞子、毛皮、楯、弓、兜、武器、投槍、太刀を運び込ませた。けれどもこの熱心な作者の稽古も、實は何度も邪魔になる事が多かつた。今日はビザンチン風の箱に決まるかと思へば、明日は木彫の器になる。銀のランプが、希臘式の油壺となる。稽古の舞臺では、役者の臺詞よりも、衣裳屋鬘屋靴屋の聲の方が喧しい位であつた。大道具小道具が決まると、次にダヌンチオを惱ましたのは、役者の型であつた。ヂウゼは殆ど作者の言ふが儘に、一の物語、一の臺詞、一の言葉を、ヂウゼは何度でも繰返した。しかもその間に目下の女優を優しく勵まして稽古を勵んだ。十月六日の稽古の時ワリニィといふ女優はどうしても四幕目の最後がうまくゆかなかつた。ヂウゼはワリニィの腹を立てさせまいとして、母の如くに暫くこの女優をじつと抱いてやつた。或る時は手に散步杖を持つて、パオロとの場を稽古したが、どうしても巧くゆかない。ヂウゼは三四度繰返して、忽ちその杖を側へ投げすてて「あ、この杖が悪いんですわ」と何氣なく言つた。

かういふ騷ぎの中で初日が近付いた。十二月九日の羅馬の夜は、星ばかり耀いた初冬の晩であつた。ところがこの初日は、何といふ情ない結果に終つたらう。ダヌンチオとヂウゼの戀愛と藝術を象徴した名曲「フランチエスカ」の初演は、見事に失敗したのである。餘り寫實に傾いた劍劇と煙硝と投石機のきしる音が、柔な情緒の深い濡れ場よりも強く印象され、役者も餘り力を入れ過ぎて陰影を缺き、一晩中見物席からは口笛を吹かれ嘲笑を送られて喧騷を極めた。作者ダヌンチオは大道具の陰からこの樣子を見て、傍にゐる者に「ユウゴオのエルナニの初演の時も、こんな騷ぎでしたよ」と洩らした。哀れなヂウゼ。幾十日の身を碎くばかりの努力は、見物に見向きもされなかつた。

この混亂と騷擾の一夜を經て、曲は二三の場面を書き直され、冗長を省かれ、遂に第二回の上場をした。見物は遂に敗けた。「フランチエスカ」は永遠の名作となり、この詩人と女優との戀愛の最高點を築き上げたのである。然しこの二人の戀は、この時に行き盡す處まで來てしまつた。

舞臺を去る

僕はヂウゼの旅興行の模樣を窺ふ爲に、ほんのその一部を擧げたに過ぎない。この間にヂウゼの名は歐洲を越えて、倫敦紐育南米にまで招かれて行つた。巴里の舞臺に初めて出たのは千八百九十七年であり、後に千九百五年と六年とに二度出たが、

巴里はヂウゼの最好む町であり、毎年巴里には出掛けて行つた。唯千九百年以後に於て、ヂウゼは痼疾の氣管支炎に肉體の惱みを苦み、幾多の戀愛を離れて宗教に近付かうとする心の苦悶に押されて、千九百九年伯林に於ける「海の夫人」の上演と共に舞臺を去つて、この年以後十二年間はヂウゼの最愛する伊太利の田舎アソロの寂しい家に引込んでしまつたのである。それは伊太利風に窓に鐵の小さい露臺があり、狹い靜かな道路に面してゐた。その往來の傍に小さい聖母マリアの像があつた。老ひたる伊太利亞女ヂウゼはこの十二年間に毎日このマリアの前に跪拜して、缺かさず薔薇の花を捧げ、夜は燈明を點じた。

なぜヂウゼは舞臺を捨てたか。それはヂウゼがダヌンチオを離れて、次第にイプセンに近付いて行つた過程の結果に過ぎない。そしてイプセンから更に宗教に深入りして行つた爲に外ならない。ダヌンチオの「春の曙の夢」の狂女、「ヂオコンダ」のシルヴィア、「死の町」のアンナから、ヂウゼは次第にルナン、メエテルリンクに移り、更にイプセンの「ヘッダ・ガアブレル」に、「ロスメルスホルム」のレベッカに、「幽靈」のアルヰング夫人に、そして最後に最好んだのは、沈痛な「海の夫人」であつた。



ロンドンに於けるヂウゼ

この花やかなりしヂウゼは、次第に基督敎的に、しかも神祕的に成つて來た。新福音書、パスカル、アウグスチヌスを耽讀し初めた。劇場から僧院へ逃れんとし、この世の中の生活を甚しく嫌厭し初めた事は、ヂウゼの手紙によく現れてゐる。ある評論家がヂウゼの生涯を論じて、この女優の生涯と藝術は、死の準備であつたとさへ言つてゐるのも過言ではあるまい。唯ヂウゼの深入りして來た宗教は、決して莊大な寺院に求めるのではなくして、誰もゐない小さな寺で捧げる祈禱であつた。「私は基督の單純さこそ自分の心に適つた宗教

だと思つてをります。聖パウロは基督ではありません」と言つて、羅馬のあの莊嚴な寺院を嫌つた。

此十二年間のヂウゼの生活は、忍從と慈悲の尼の如きものであつたに違ひない。此二つのものをこそヂウゼは十二年間守り通した。忍從と慈悲によつて、ヂウゼは人間に近付かうとした。見捨てられたる少女を救ひ、貧しき藝術家を助けても、其を全くひた隱しに隱した。そして心の中には唯聖母マリアのみを念じた。

けれどもこの十二年の間ヂウゼは決して樂な生活をしてゐたのではない。寄る年波は決していかなる女優も涙なしに考へられる事ではあるまい。ヂウゼが思はず「私は二十年前に死ぬべきであつた」といふ言葉を洩らしてゐるのでも分らう。殊にこの引退後のヂウゼを最苦めたものは、病氣と、苦痛と、熱望であつた。病氣とは持病の氣管支炎から來た喘息であつた。苦痛とはこの間に起つた歐洲大戰による生活の變動であつた。熱望とはまだ舞臺に對する未練であつた。殊にヂウゼの宿願は、自分の劇場を持ちたいといふ事であつた。

伊太利戰線へは、自ら出掛けて行つて、慰問に看護に手を盡した事は言ふまでもない。けれども大戰による生活難は、人知れぬ慈悲の行爲に費す支出と共に、さすがのヂウゼも田舍住ひとは言ひ乍ら困窮に迫られて來た。病氣は老年と共に次第に募つてきたものらしい。殊にヂウゼの生來の神經質は、老年に及んで決して衰へなかつた。ヂウゼの神經質は、その心持を光と影の如く變へた。この變化は舞臺に於けるヂウゼを最潑溂たらしめ、多くの新技巧を創作せしめ、その表情を美しからしめたと同時に、日常生活の上でも毎日のやうに室内の道具の位置を變へ、寢室の場所を移した事にも現れてゐる。この神經質は喘息と共に愈々嵩じて、この老體に益々不安を感ぜしめたものに相違ない。最後にこの引退に拘らず、猶ヂウゼの胸中を去らなかつたものは、藝術と生活とを一致させようとする年來の宿望であつて、その爲には自分の劇場を持つ事であつた。もとより十二年の引退によつて、伊太利劇壇はヂウゼを全く顧みず、之に近付かなくなつた事は無理もあるまい。然しヂウゼにしてみれば、やはり之は不滿であり、しかも偶々再度の舞臺を勸誘にくる興行師は、全くヂウゼの希望を無視した商賣としての興行に外ならない。ヂウゼにとつて藝術は絶對であつた。ある時巴里の一興行師がヂウゼに向つて「あなたはまださうして藝術を信じておいでなのですか」と訊くと、この老女優は歯を食ひ縛つて「この非人間め」と一喝したさうであつた。

經濟的に、肉體的に全く見捨てられかけたヂウゼは、遂に六十の老體で再び舞臺に出る事を餘儀なくされたのである。それは千九百二十一年ツウリンのバルボ座で演じた「海の夫人」であつた。その藝は十二年前に比べて、愈々沈潛し、驚くべき錆びを帶びたさうである。

ムソリニイとダヌンチオ

この晩年の老軀と貧窮に對して、伊太利政府はどんな態度を執つたか。チウゼは自ら率ゐる一座の役者に、給料も拂へなくなつたものらしい。この老女優は總理大臣ムソリニイに手紙でこの窮狀を訴へた。ムソリニイは自らチウゼを訪問して「チウゼ夫人よ、我輩はいかなる事でもお望み通り叶へてさし上げませう」と言つた。然しチウゼの死後發表された處によると、ムソリニイはチウゼに對して一種の名譽給與といふものを與へようとしたらしいが、その金額は如何にも僅で、さすがのチウゼも侮辱を感じて拒絶した。「どうぞ私の一座の弟子達の給料を拂つてやつて下さいまし。私の自分のものは何も入りませぬ。唯一座の者達だけの分です。私は雇つておき乍ら、給金が拂つてやれないので御座います」と自ら苦痛を述べてゐた位であるから、餘程困つたものであらう。「けれどムソリニイは何もしては呉れませんでした」と流石にチウゼも秘に嘆息を洩らしてゐる。

「ヒウメの指揮官」はこの老女優の窮狀を救つたか。チウゼはあの華やかな時代の戀人ダヌンチオを、晩年は「ヒウメの指揮官」とばかり呼んでゐた。曾ては幾度か相共に旅をし、その書く戲曲は常にチウゼの爲のみであつたダヌンチオとも、相見ざる事十八年に及んだが、ダヌンチオがミラノ市廳の露臺から、群集の青年に向つてした熱烈なる祖國愛の演説の聽衆の中には、この老女優も既に交つてゐた。この哀れなる老婦人の姿は、さすがにチウゼの胸に[illegible]らしい。ダヌンチオはこの昔の戀人の窮狀を聞いて、早速之に同情の手紙を新聞に發表した。「ダヌンチオは私がこの祖國の爲に盡した事の多い處を述べ、今こそ伊太利は私の爲に何かしてもよいと書いたのです。この手紙は實に立派な有難いものでしたが、然しそれはそれ丈のものでした。それが「ヒウメの指揮官」です。成程いろ／＼の事を考へてゐられます。又それを口にも言ひ、紙にも書いてゐます。さうして考へに一つの形式を與へ、之を文學的に世の中に發表もします。然しそれでもう濟んでしまふのです。それがあの人の仕事で、それ以上は何もないのです。成程あの人は私の事を多くの友達にも書きました。私の困つてゐる事を耳に入れたさうです。然し私の爲には何もしては呉れませんでした」と長々とチウゼは愚痴を述べてゐる處を見ると、胸中の悶々たる心情は、老ひの氣短さと共に堪えられないものであつたらう。「私はムソリニイとダヌンチオの前に頭を下げるやうに見えるか、又はさうしてこの二人から施物を貰はうとする樣に見えさうな事を、少しでもするのは厭です。どんな事があつても厭です」と迄言つて、終に偶々一人の英婦人の義俠によつて、有名なる千九百二十三年の倫敦客興行に出掛けたのである。

米國の死

倫敦の成功は、更に米國からの招聘となつた。ヂウゼがこの米國からの招聘を承諾したのは、恐らく金の爲ばかりではあるまい。大戰後の息詰つた歐洲を逃れて、海の彼方の自由を求めたに相違ない。千九百二十三年の秋ヂウゼは維納に於ける歐洲最後の舞臺を終へて、九月シェルブウル港から紐育に渡つた。

米國に於けるヂウゼは、紐育、ヒラデルフィアから殆ど大都市を巡業した。けれどもこの東奔西走の忙しさに、ヂウゼは健康を害して、殊に喘息に對する心配から、最寒氣に逢ふのを恐れ、桑港に來た時には殆ど此處を動かうとしなかつた。それから無理に汽車でアリゾナを通る時に、例の細い砂塵が二重窓から飛び込んで、ヂウゼの氣管を餘程痛めたものらしい。遂に流行性感冒をも引込んで、ピッツバアグに來た時は肺炎を發し、千九百二十四年四月二十日から二十一日に至る夜、あの古い歐羅巴から遠く離れたペンシルバニアの一都會のホテルの一室で、この「聖なるヂウゼ」は六十五歲の一生を終へたのである。

ヂウゼの死骸は紐育から船に載せられた。その船の出帆する時には、紐育に住む伊太利移民は悉く波止場に集つて、岩壁に膝まづき、帽子を脫いで、遙に母國に歸つてゆく一人の女の死骸の爲に祈つた。

死骸は伊太利政府の意思に反して、最愛した隱棲の場所のアソロに、小さい墓となつて埋められた。墓にはモンテ・グラッパの花崗岩に、上に名前を彫りつけ、下の隅に生れた年月と死んだ日附とだけ刻んだ。墓地の東はアソロの岡で、絲杉に吹く風と鐘の音だけしか聞えない寂しい附近である。

腿と手

ヂウゼは化粧をしない女優であつた。その顏は著しく蒼ざめて見えた。しかもそこには心の底からの優しさと、變化の多い表情と、無限な炎の情緒を藏してゐる事は、晩年と雖變らなかつた。特徴と言つたら下腿の强く張つた線であらうか。有名なのはその美しい手であつた。それこそダヌンチオを愛撫した手であつた。

晩年の舞臺を見た人は、昔に比べてその餘りに白くなつた髮に目をそむけずにはゐられなかつたらしい。唯驚くべき事は、その聲であつた。それこそ永遠に若く軟い女の聲であつた。「わたしのやりたいものは、今はもう母親ばかりです。年と時とを超越した女ばかりです」と呟いたのはこの老女優である。若い美しい役ばかり欲しがるのは、今の世界の女優である。僕はかういふ若く美しい女優を見るにつけて、近代女優の最後の一人として、恐らくはもう二度と現れてこないイプセン女優として、幸ひにも偶々一度見る事の出來たこの「美しき手を持てる聖なるヂウゼ」を想ふに堪えない。僕は薄れてゆく歐洲記憶の一つとして、急いで之を認めておいた。（昭和五年六月）

「さまよへる猶太人」

前田河廣一郎

私は、アメリカにゐる時分は、かなり澤山の猶太人と知り合ひになつてゐた。

アメリカ中にだけでも、四百二十二萬八千二十九人の猶太人が居ると云ふから、私達貧乏移民の置かれた社會境遇で、彼等と日常肩と肩を擦り合はせなかつたとすれば、それは何かのまちがひであるのである。

煙草屋へ行つても、映畫館へ行つても猶太人、洋服屋、古着屋は彼等の獨占、古本屋に、工場に、そして私達の棲む貧民窟にはいつも彼等の魚臭い大群がゐて、私達を取り圍むのである。それから、すこし飛び離れて小市民住宅區域の、御座式社會主義者のテー・パーテーへでも出ようものなら、堤防のやうな偉大なる鼻の列から、わづかに二三の非猶太人系鼻の隆起を認めて、それが純然たるシオニズムの會合でなかつたことを知るのである。

私の知つてゐる社會主義畫家の一人に、ブラーバーマンといふ醜い男がゐた。古代の石斧を、人間の胴體へくつつけたやうな孔だらけな、鼻だけ大きい、實に偏平な顏の男で、それが人一倍の癇持ちであり、おまけに或る婦人と戀をしてゐたのであつた。その戀愛たるや狼藉無盡の極で、その婦人のところへ原稿を賴まれて持つて行つた私達をも邪魔扱にすると云つた程度のものだつた。

「なんだい、あの九一の野郎！　いゝいゝきしよくの惡るい野郎だなア！……」

私達は、よくこんなことを云つたものだ。「九一」とは、洒落に聰明な讀者は、もう賢察されたことであらうが、ごく簡單な數學的相言葉であつて、（九＋一＝10）即ち「十」は、「猶太人」と

同じ音響を樂しむと云つた、アメリカ在住の日本人の大部分に共通する、アンチ・セミテズム的用語なのである。

一方、同じグループの間に、私達は、エスター某といふロシア系ユダヤ人の娘をも知つてゐた。黒い眼の持主で、中背中肉鼻背もさほど脅威的に發達して居らず、肉感的な唇と、チエストナツト色の髪、しかも日本人が好きで、日本人の好きなロシア作家が好きで、社會主義婦人としての理想と志望も持つてゐるといふ『猶太人街(ゲツトオ)の花』であつたのである。

彼女とツルゲネーフの一卷を携へて、公園の散歩からの歸へりに、私は、はたして、

『あの九一の娘は、何てきしよくの惡りい奴だらう!……』

と云つたであらうか?

千度も否! である。

その反對に、彼女に誘はれるままに、洋服屋である彼女の一家を訪問し、サモワールから注いで貰ふコツプのお茶に、レモンに、角砂糖に、小猫のやうに舌打ちしながら、昨年の五月二十三日、猶太人ブラオンの招待で二千人の猶太人達と一夕の宴を張つたヘンリ・フオードのやうに、

『偉大な民族で――』

などとまで世辭つたのである。

フオードも猶太人排斥者の一人でありながら、特殊な場合でもこの通りであり、私達もやはりその通りである。

この矛盾は、一體、どうしたことか?

その矛盾は、世の中に、『特殊な場合』などといふものがないといふことによつて、わけもなく解決されるのである。

私が、猶太人を傭主としたことが、三度や四度ではない。

一番先きに猶太人一家族を知つたのは、ゼンケンスといふシカゴの相當な洋服屋の主人にコツク兼給仕兼雜夫として傭はれた時である。この一家族は、猶太人としても中流以上の生活をしてゐるので、普通のアメリカ人よりもアメリカナイズされて居り、決して沙翁劇の『シャイロツク』みたいな吸血鬼的メークアツプはしてゐなかつた。その十七八になる娘は、すこし猿に似てゐたが、その廿歳ばかりの長男の『ディツケンス全集』や『デユーマ全集』は、私の愛讀するローマンスであつた。主人ゼンケンスは、白い河馬のやうな肥大漢で、アメリカの成功主義自由思想家エルバード・ハツバードの愛讀者であつた。

次には、私が家内勞働といふ職業に叛旗をひるがへした時、最初に私を茶及び珈琲の註文取りとして傭つてくれたヨセフ・グマイナーといふハンヴリア系猶太人がある。この男は、たし

かに『九一一』の範疇に屬しても敗けを取らぬ人物で、よくあの多彩的な人間の個性を選り別けたディッケンスが、その浩瀚な著作中に取入れなかつたと怪まれ、惜まれるタイプである。

背は低く、いや、實際は駝背（せむし）であつて、鼻は北歐の建築のやうに顔を二つに分割し、それを直角に受け留めた唇はステッキのにぎりほどの厚みを帶びてゐた。總じて、あまり感じの良くないところへ持つて來て、私の傭主であり、我利々々の小商人であつたのである。その男と、私は一ケ月もいつしよに仕事をしたかどうか、終ひに贋註文などを帳面にぬたくつて、結局支拂つてくれぬコムミッションの腹癒せにしたことは記憶してゐる。

次の猶太人主人は『九一様』の方であつた。やはり同じ商賣であつたが、これには二人の兄弟がゐて、瘠せたのは兄貴、でない方が弟、その弟が若い私を可なり可愛がつて搾取した。『何とかブラザース』と云つて、名前は忘れたが、取つて來た註文は、きちんとそのコムミッションをよこしたし、前借は斷じてゆるさなかつたが、ぶらぶら病ひで、二三日圖書館や芝居小屋などを遊び廻つて、又のこのこ出勤しても笑つて使つてくれた。

『日本人は聰明（スマート）だからな！』

その弟は、いつも肥つた手の裏で、私の胸を叩いては、盛んにおだてたから、使ふ時には合理的にコキ使つた。

次に、私がニュー・ヨークへ行つて最初に面會した、ジョージ・ゼーン・ネーッアンといふ男がある。この男は、小柄な猶太人で、インテリゲンツィア・タイプの、尖がつた鼻と大きいロイド眼鏡が際立つて、他人の注意を惹いた。もつと際立つて他人の注意を惹いたことは、この男こそは、アメリカ一流の劇批評家であつて、現に、誰かしらも、この男の劇評集を翻譯してゐる筈である。この男と、エッチ・エル・メンケンとが、殆ど私の訪問した用件のある雜誌社の主腦幹部で、そこで私は一定の用件をすまして、種々な雜談に耽つたものである。――その當時の私は、メンケンが、ネーッアンが、後日、それほど有名にならうとは思つても居らず、唯一人のドイツ系メリケン人メンケンと、猶太系メリケン人ネーッアンと識じたと云つただけである。雜誌『スマート・セット』とは、二度ばかり原稿の取引をした。そして、かういふ仕事に、シカゴでは變なところでだけ出會つてゐた猶太人が、どしどし幅を利かしてゐることを、ニュー・ヨークの一つの特徴だと思つた。一九二九年始めの猶太人社會調査局の調べた、ニュー・ヨーク在住猶太人の數は百八十三萬五千人であつた。

それから、ずうつと後になつて、しがない文筆業を投り出し

て、私は或る大きなチョコレート會社の職工をしたことがある。其の會社は、市内でもかなり大仕掛な、最新式なもので、そこで拵へるチョコレート菓子、ボンボン、その他の糖菓は、大部分世界大戰の戰場へ輸出されてゐて、會社はアメリカ政府とコントラクトして、工場から直接軍需品運輸船へ積み込まれたのであつた。

その會社の主人といふのは、私の見たうちでも最も猶太人らしくない猶太人で、恐らく英國人の血が混じつてゐはしないかと思はれるほど、痩せた、神經質な、鼻のさほど高からぬ胡麻鹽頭の老人であつた。その主人は私達何百人といふ職工が、せつせとチョコレートのレッテル卷きをしてゐる工場へ、日に一度は必らず臨檢にやつて來て、仔細に私達の作業を見廻はつて歩るいた。

『あれでも九一かな?』

『あのタイムキーパーの九一とはくらべものにならんね。』

働いてゐる日本人達はこんなことを云つた。それほど、この主人は、タイムキーパーの猶太人や、會計課にゐる猶太人と、際立つてちがつたやうに見えた。

これらは、多くのほかの知り合ひの猶太人のうちから、範圍を狹めて、稍代表的な人達を擧げて來たのであるが、もつと代表的な猶太人を擧げて見ると、イングトシュ・ワーリングといふ百萬長者社會主義者の妻君のアンナ夫人などは、猶太人らしい猶太女で、しかも、『ジャック・ロンドンとの文通』といふ本を著はして、私に一册分配してくれたりしたのも居り、一方、レニンの死後、固くコムインターンの封緘物となつてゐた遺言を發表したために、一躍『トロツカイエト』となつて、その『レニン死後』の一パンクンツトで、アメリカ共產黨を眞二つに分裂させた強か者のマックス・イーストマンも猶太人である。それから、現在、アメリカの左翼社會民主々義首領となつてゐるLovestone——これも、猶太人の本名『ラヴスタイン』と呼ぶ人間であり、私が最近『ミチエール・ゴールド』と發音してユダヤ語讀みでは『マイクル・ゴールド』であるとアメリカから訂正された、プロレタリア作家マイクも、ちやきちやきの猶太人である。

一度、これをソヴエート・ロシアの、今ならば、レーニン章と赤星章とを貰つて、無賃乘車の特權をも得るであらうと思はれる革命元勳達に見んか、トロツキーが、或る新聞記者に語つたやうに、

『人民委員中には、三人の猶太人がゐる。遞信委員のドブガレ

ブスキーと、財政委員のソコルニコフと私だ」
そして、同じ口吻で、トロツキーは「俺の父親は、極く例外の一人で、貧しい猶太人の百姓だつた。南ロシアには、ほんのすこしの猶太人しか土地を持つことが許されなかつたものだ。」と告白してゐる。

一と頃の財政委員をしたソコルエコフは、有力な銀行家であつた。次には、リトヴィノフ、ワインスタイン、ロスタイン、電氣産業界の重鎭ゴルツマン、それからニユー・ヨークの洋服屋で、ソヴエート・ロシアの洋服シンヂケートの支配人となつたボゴラチヨフ、次には、カメネフ、ジイノヴイフ、ラテツク、ヨツフエ、それからクルプスカヤ夫人も猶太人だと云はれてゐる。

もつと廣く舞臺を世界にとると、カール・マルクスがさうであり、フエルデナンド・ラツサールも猶太人、コツホ醫學博士も、アインシユタインも、青年トルコ黨のジヤウイツト・パシヤも、ベラ・クーンも猶太人である。

しかし、これらの猶太人は、私達が「九一二」と呼んだ種類の猶太人よりも、多かれ尠かれ國際的であり、それぞれの國や社會に順應して、テオドル・ヘルツルの唱へたやうなパレスタイン猶太國民としての宗教的色彩を帶びた民族主義者達ではないのである。この一八〇〇年代にヘルツルによつて唱へられ、一九一七年、英國の猶太人金融王ロツスチヤイルド男爵によつて「祖國建設宣言書」が發表され、一九二〇年サン・レモ會議を通過し、一九二三年英國の委任統治となつたシオン・オルガニゼーシヨンは、現在八萬三千七百九十四人の猶太人を持つてゐるのである。このこちこちの建國主義者達に對抗して、世界に散在する大部分の猶太人は、一方國際的金融ブルジヨアジーの大元締であると同時に、一方ではフランス革命以來の國際的革命運動に從事するインターナシヨナリストなのである。

今、少し數字が古いが、世界に分布した猶太人の總數を擧げると、前記のアメリカ、その他、ポーランド三百五十萬人、アジア三十八萬人、ソウエート・ロシア三百二十六萬人、シリア十萬人、カナダ十二萬六千人、アルゼンチーナ十一萬人、それからパレスタインの猶太人人口を加へて總計千二百三十萬人以上に達してゐる。しかも、各自の國々や社會に雜居雜婚して雜種となつた猶太人を擧ければ、恐らくこの數字はとてつもなく膨脹することだらう。

ソウエート・ロシアの猶太人は、一方ネツプ的傾向が多いと共に、革命運動の間にもかなり勢力があつて、殆んど中和的な

狀態にあると云つてもよからう。

事實上、革命後のロシアでは、猶太人と非猶太人との人種的差別は全然中和的狀態にあつて、誰が猶太人であり、誰が猶太人でないなどと、革命當時の猶太人名簿などをひつくりかへしてゐるのは、世界の猶太禍的妄想に囚はれた、頭の古い日本の軍人ぐらゐなものであらう。最近のソウエート・ロシアのどんな旅行案內、年鑑などを見ても、ロシア人と猶太人の人種別が示されてゐないことは、夫自身で、この國にはそういふ狹苦しい『九一』的差別觀がないことを示して居るではないか。

一例をとると、ここに勞働組合の組織がある。『その組合長は、大柄な單純そのものの、素朴なロシア人である。ムジイク・タイプで何十年も原始的なロシアの耕作に從事して來たお百姓。すると、その傍らには、神經質な、近眼の、きびきびした猶太人のタイピストが坐つてゐる。タイプライターにかけてはこの娘は實に天才であつた。お百姓の頭には、考へが成熟して來るまで、かなりの時間が經つ。しかし、その傍らの小娘に、何かものを訊ねるとなると、その返答は機關銃よりも早く連發された。彼女の緊張ぶりは、今にもこの勞働組合をずたずたに分裂させさうにも思へたのであつたが、さうするには度胸がない。すると、一方のお百姓には、彼女のテンポがない。』(『歷史て最初の出來事』一九二四年、アンナ・ルイス・ストロング博士)

到る處で、猶太人はロシア人と協力して革命を完成させた。赤衞軍のどの一兵卒だつて、その頃のトロツキーを『九一』などとは考へなかつた。時に、猶太人の青年共產黨員でこんなことを云つた者もあつた。

『俺は、猶太人といふ人種は反對だ、彼等は社會主義にとつての危險な存在である。個人の幸福や、富の蓄積ばかりを考へ過ぎてゐる。一般に、彼等は基本的な勞働を拒んで、勞働者の搾取に從事してゐる。人類の進步のために、この人種は寧ろ有害であるから、よろしく他の人種と一緒になる必要がある。』(前揭書)

これなどは、かなり客觀的な見方であるが、ソヴエート・ロシアでは、猶太人に政權獲得の自由を解放してゐる。從つてその國にある猶太人には、何等の人種的差別觀を起さないのである。英國のコルヤーといふ男が、アメリカへ行つて感じたことは、アメリカが『世界の凡ゆる人種の坩堝』であるといふ云ひ觸らしに對する、幻滅であつたといふ。それによれば、アメリカニゼーションといふのは、決して凡ゆる人種の結合でも、或ひはすべての構成メンバーの長所を結晶したものではなくて、單にいろいろな違つた國民の子孫を持つて來て、『共同の無智と、

共同の體に對する信仰と、すべての精神的な、そしてもつとデリケートな想像力や認識の力などを共同に犧牲させる」一つの軍隊式捺印法に過ぎないと云つてゐる。そして、彼はアメリカに育つたフィンランド人も、アメリカに育つた猶太人も、何等そこには本質的な差別といふものはないといふことを述べてゐる。

元來、猶太人は、あのギリシア哲學を研究したフィロや、ジヨセフアスなどのやうに、共産主義的精神を以つてその道德律の根本としたものである。例へば、フィロの物語つてゐるエッセネス部落の記述を讀めば、凡ゆる國家から迫害に迫害を加へられた「さまよへる猶太人」の間にも、或ひは、その間であつたからこそ、かういふ尊い本能が發達したものと思はれる。ここに、哲學者ジヨセフアスの書いた、エッセネス生活記の一節を持つて來ると、こんなことが書いてある。

『彼等は、富を輕蔑し、その日常の生活は實に驚くべきものがある。彼等の間には、私有財産で自分を偉くしようと思ふ人間を發見することは不可能であつた。何となれば、このエッセネス派に屬したものは、己が私有財産はその派の敎義へ忠實に、集團へ返すべきものとされてゐたから、その結果として、そこには貧困もなければ、贅澤も、有り餘るほどの財産といふものもなかつたのである』

このエッセネス派の特長は、古代猶太人の歷史を通じて、最も猶太人らしさを發揮した政治からの回避、社會道德と社會經濟とだけを各個人の道德的基本としたといふ點にあるのである。紀元前一〇〇〇年、隣國ギリシアでは政治紛爭の絕えなかつた當時、イスラエル民族は、かうして部落組織から國家組織に移り、王を戴いたのである。それから、次第に彼等の間には舊約聖書『サミユル記』に現はれたやうな、凡ゆる強權政治に對する呪咀の思想が發達したものと傳へられてゐる。

猶太人の別口の聖書と唱へられる『タルマッド』には、こんなことが書いてある。

『この下(地上)に於て、如何なるものといへども國家の役人となるものは、この上(天上)に於ては、惡事を行ふものとして罰せらるべし。』

かういふ古いところを穿鑿しただけでも、私達には、猶太人の本能的な平和主義思想といふものが解る。そして、その發見と同時に、他のどんな人種でも、やはり猶太人種と同じ境遇に置かれて、いつも強權國家の侵略に遇ひ、行く先々でそこの土着民に迫害され、虐殺され、追放されて、それらの土着民の持

つ國家主義觀念と相容れない思想を持つようになれば、當然アメリカナイズされたフィンランド人も、アメリカナイズされた猶太人も、本質的には何等の相違のない平和主義者であることを思ひ浮べるのである。何となれば、世に、アメリカ合衆國の民族同化政策ほど表面的で、形式的で、强制的で、且つ人間の精神的融合を度外視した同化政策はないのだから。

これに反して、ソヴエート・ロシアの同化政策がどういふものであるかは、すでに述べたところである。

私は、アメリカへ行つて、始めて『九一』といふ數學的符號を習ひ、その符號から出發して、いろいろな猶太人を、いろいろな社會的地位に於て觀察した。そして、結局私の觀た猶太人は、アメリカ人の『シイニイ』と呼んだり、或ひは、

『God damn Jew!』

と罵つたりする、何等の人種的根據のあるものではなくて、そこには與へられたる境遇の下に發展した、それぞれの個人がどれほどの敎養を持ち、どれほどの仕事をしてゐたか――資本主義の組織に於けるお坐なりな個人の發展系體を見たといふことに止まるのである。

（了）

アナウン沙語

松内則三

◇

何時の世にも茶氣のある人はなか〳〵多いもので、こんな人達が、時々放送局へやつて來ては、アナウンサーを見せろの、松内を見せろなどゝ、妙な注文を出して、平氣なのだから恐れ入る。此間も或る方面の婦人連がやつて來て言ふことが振つて居る、「アラいやだ、松内つてあんな人なの、隨分色が黒いのね、妙な顏ね、妾がッかりしたわ」だつて、何がガッカリだ、こんなのはこちらでガッカリしてしまう。色が黒からうが、顏が妙だらうが、餘計なお世話だ。顏の妙なのは生れつきで今更どうにもならないし、外へ出て二時間も三時間も、炎天で喋らされゝば陽に燒けて黒くなるのは當り前だ。こんな人に限つて、食堂でも覗いたら「アラ生意氣ね、アナウンサーが、白い御飯を食べてるわよ、お箸を持つてさ！」位は言ひかねない口だ。そうかと思ふと、どう間違へたのか、私事長年便秘質斯にて困入候、何とか療治の方法無之ものに候哉とか、妾こと結婚して三年になりますが昨年秋頃から夫が急につれなくなり近頃では時々泊り歩きもされ困つて居ります、妾を憫み給ひて夫の不身持ちの直ります樣御力添え下さいませ、などゝ來ては兎てもアナウンサーの微力、如何ともする能はず候といふより外はない。

又相當智識階級の人が或る放送局員に、アナウンサーは毎晩さぞアチラ、コチラからお座敷がかゝつて忙しいことだろうねと言つたとのことを其人から聞いたが、馬鹿々々しくて喋り立てない、實際に聴いてもアナウンサーといふものを如何様に聽いて居るのだらう、現在ラヂオの聽取者の數は約七十萬、その七十萬の加入者の中で眞實アナウンサーといふものゝ仕事に對して理解を持つて居る人は果して幾人位あるだろう。恐らく其大部分は然かく口上言ひ位に輕く取り扱つて居るに違ひない。

曾て四年許り前に放送部長とアナウンサーと丈で一寸集會を開いたことがあつたがその席上で私は、將來アナウンサーといふ仕事がどう變化して行くか、少くとも現在の樣に何時迄も口上言ひといつた風のものであるべきだらうか、將來も唯口上言ひに終るのなら、私は今の内に考へなければならない、といふ意味の意見を吐いたところが、可成りこれが問題となつて、或る一人の先輩が、僅に私の意見に贊同して呉れた外は、どうやら私の意見が敗北に終つた。即ち或人は、アナウンサーは單なる口上言ひで結構である、奇麗な言葉で然も標準語を話して、地方の人を導いて行けば、それでアナウンサーの職分は全うしたことになるではないか、といふ意見がどうや

ら勝ちを制して、結局はアナウンサーは單に口上言ひであるといふことに一致してしまつたが、どうしても私には合點が行かなかつた。抑もアナウンサーが標準語を話し得るといふことなどは、その職分ではなく當然アナウンサーたり得べき、資格に他ならないのであるまいか。ラヂオといふものは決して現在の樣に娯樂が主で報道が從といつた樣なものではない、將來はモット報道が主になつてやがて現在の新聞に代り得べき時代が來るのではあるまいか。卽ち現在の新聞は日刊の雜誌となり、ラヂオが刻々に出來事を報じ得べき、所謂新聞となり得る時が、何時かは來るに違ひない。然る時に何その發表をなすアナウンサーといふものが、人の作つた原稿丈を讀み上げる、所謂口上言ひの任務の範圍を出で得ないものとは、どうしても思へないと、その時の他の人の意見には、どうしても肯定が出來なかつた。

其後間もなく一高三高の野球試合となり、續いて玉川プールから二日間に渉つての、約五時間宛の汎太平洋水泳競技大會の實況放送となつた。この放送は殆ど兩日を通じて十時間の間その大部分は場内のスケッチ、競泳の實況、感想など殆ど休みなしに發表し、不完全ながらも新聞記者のニュース作製と些かも異るところがなかつた。歸つて來てから遞信省の監督者から、あまりに放送がニュース本位だとヒドク叱られた、こと程左樣に新聞記者の仕事と選ぶところがなかつた譯である。その後マイクロフオンのスタヂオから野外への進出が段々と多くなつて來て、少しもとらはれない自由なアナウンサーの創意から出る放送が日を追ふて益々多くなつて來た。

其處で私の言ふラヂオの新聞化であるが、その後、年移り現在のラヂオ放送のプログラムを見るに、可成り報道本位のものになりつゝある傾向が顯著になつて來て、例へば先帝陛下の御不例に際しての、深夜となく晝となく、刻々に御容態をラヂオによつて發表したるが如き、又ＳＯＳ難破船の信號あるや、直に總ての娯樂放送を抛つて之れにあたつた如き、本年、並に先々年の總選擧に際しては、刻々にその狀況、當落などを發表したるが如き、又時に戰時に際し敵飛行機の襲來を豫想し燈下管制に備へたるが如き、僅かにラジオ放送の一端に過ぎない。モット將來簡單にマイクロフオンの街頭進出が容易に出來る樣になつて來て、時事萬端總てのものを、其場から實況を、刻々に、放送し得る樣になつたとしたら、卽ち今のラヂオは、現在の新聞、否モット尖端を行くものではあるまいか、と言つてこれを直に砂上樓閣を築く態の、夢想とは誰も言ひ得まい。然し私はラヂオの新聞化を高唱するものではあるが、そうかと言つて現在の新聞紙の使命を、毛頭たりとも、否定するものではない。

◇

段々世の中が繁忙になればなる程、人はラヂオ許りを聞いて居らるゝものではない、結局は新聞紙に依らねばならないのである。新聞紙は今の樣に日に二回なり或は三回なり刊行し、然も寫眞をもつと澤山に掲載して、一目瞭然、其日の出來事を綜合的に報道する。こう言つた風に其日の出來事を刻々に時を移さずに知り得るには、ラヂオの放送に待ち、日に一度なり、二度なり時事を綜合的に知り得るといふには、どうしても現在の新聞紙に

待たねばならないのである。卽ち一はニユースなラヂオが通じて聲に依り或はテレビジヨンに依つて發表し、一はニユースが、紙をかつて、紙に依つて發表するに他ならないのである。斯くして私の言ふ、ラヂオは所謂現在の新聞となり、現在の新聞紙は、所謂日刊の雜誌となるのではあるまいか。果して然る時に、このニユースの發表が擔當するアナウンサーの職務がどう變化して行くか、興味のある宿題であらねばならない。私の如き前途このアナウンスの仕事にたづさはることもあと半歲か、一歲に止るであらうものには、前記の樣な問題に直面する機會も來まいが、もつと前途のあるアナウンサー、或はこれからアナウンサーたらんとする人達に取つては、可成り興味のあることであつて、又多少今から考慮に置かねばならない宿題である。

尠くとも現在のアナウンスメントが、追々創意的のものとなりつゝ、ラヂオの新聞化に向つての夫れに竝行しつゝある今日、尙アナウンサーが一嬌娘から色の黑きが故に疎んぜられたり、或はアナウンサーの所謂お口數の多寡が問はるゝ程にさまでに現在に於ては、まだ、アナウンサーといふ仕事に對して理解が持つ人は少いと言はねばなるまい。

◇

私は放送に當つて、仕方がない、與へられた仕事だから、懸命にやらねばならないといふ苦勞はあるが、どうしてその放送が生かそうか、といふ風な苦心といふものは微塵もない。從つて何ごとにも、豫備的の準備といつたものなど殆どなく、何でも當つて碎けろ主義、刹那々々にたゞぶつかつたことを、處理して行くといふ工合に、總てのもの、總ての放送にも白紙で當る。こんな工合であるから、いざマイクロフオンに向つて、いきなり出た處勝負で放送に當る。であるからそのマイクロフオンに向つた瞬間、その氣持ちがスムースに行けば、まことに調子がうまく行つて、ユーモアの一つも出やうといふ譯であるが、マイクロフオンに向つた一瞬ハツト出鼻が折られたが最後、一向に調子に行かず、何を喋つて好いのやら頭と口から出て來ないといつた工合で、全部は失敗に終ることが多い樣であるが、御方便なもので偶然取りつくろはない自由な氣持の放送には時に、人間味といふものが現はれて、放送にも思はない嚙かみといふか、感じといふか、味といふか、そう言つたものが出て來て、思はない拾ひものをすることもないではないが、こういふ行き方には始終は失敗が多い樣である。ところで何の放送でも左樣であるが特に野球の放送、それが早慶戰にでもなると、こちらでは、何も意味のない、取りつくろはないことが、恐ろしく聞く人の神經を尖らし、興奮された結果が、放送上何かと色眼鏡で見られて、まことに思ひ設けないことで困ることがある。

さすがに試合が早慶戰などになると、自然私自身もエキサイトされて、只眞面目に試合に當る。從つて早稻田とか、慶應とか、何れが勝てば好いの、何れが敗かしたいの、などの考へなど毛頭も起つて來るものではない。只そ

れが職業意識とでもいふのだらうが、どうかして試合が立派であれば好い、接戰を演じて與れば好い、然も成るべくは、第三回戰の決勝まで持つて行つて貰ひ度い、然すれば放送効果が、どんなに大きいだらうか、など念ずることはあつても、何れが勝たうが、敗け様が放送中は一切無關心で、只放送効果と、それから試合其ものから受ける感激丈で一杯である。あの様な大試合に際して試合そのものにエキサイトされずに、客觀的の立場にのみアナウンサーが立つて居たとしたら、決して聽く人の心持ちを、心行く許りに力強く引きつけ得るものではない。或る程度迄は技巧で、聽く人の心持を引きつけ得ることもあろうが、それは限りのあることで、始終は失敗に終るのではあるまいか。これには種々議論もあらうが、畢竟、何ごとに限らず、その渦中に飛び込んで、夫れに同化されたものでなければ、力強い大きな收獲は得られまい。

私が始めて、この實況放送に當つた時に考へたことは何でもゲームが高潮に達して、見物がエキサイトされて場内の空氣が興奮して來たら、これと反對にアナウンサーは坦々乎として冷かに、靜かに、落付いて、行かねばならぬものとのみ思つて居つたが、結局はこれが失敗で、それは餘りに聞く人の氣持ちと離反することであつて、些かでも、聽く人をエキサイトして行くには矢張り、ゲームの波に乘つて、場内の雰圍氣そのまゝに、熱する時には共に熱し、感激する時には共に感激して、而して聽く人の感興を惹きつけて、場内の雰圍氣そのまゝに、ピタリと並行をして行かねばならぬものである。

◇

例へば昨年秋の早慶戰だが、御承知の通り第一回戰は早稻田が勝つたが翌朝放送局へ行つて見ると自分宛或は放送局宛で松内はどうも早稻田贔負でいかぬ、放送は公平であれの神聖であれの今までは好きだつたが今日から君が嫌になつて來たのと隨分思ひ切つたことを書いた投書が山と積まれてあつたが、扨また其日の第二回戰がことだ、七對〇かで今度は慶應が勝つた。これで一勝一敗、どうやら、三回戰の決勝まであつて、先づ放送價値萬歳と歸局して見ると、その前既にあちらこちらから電話が頻々とかゝつて、今度は急に慶應贔負とあつての攻撃、こうなつてはいくら呑氣なアナウンサーでも、どうして好いのか頓と分らないでいさゝか氣にやむ。無論翌朝はまた例の投書の山、中には、早稻田方面の相當の知名の人だが、わざ／＼放送部長を電話口に引張り出して、强談判といふ、まことに御念の入つた人もあつて、可笑しいやら、情けないやら當人どうしてよいのか、益々判斷に苦しむといふもの。それで、いよ／＼三回戰、今日が決勝といふ日、放送部長も今日は一つウンと調子を下げて、熱を上げずに、放送をして見ては如何かといふ、委細尤もと、自分でも其氣になつて神宮球場へ、驅けつけて見たものゝ、さて考へて見ると、まことに面白くない。馬鹿々々しくてたまらない。第一それでは、何百萬何千萬といふ、折角今日

の早慶戰の放送を、待つて下さる聽き手に濟まない。どうしても私の良心が許さない。まゝよ、どうなるものか、何とでも言ふ人は言へ、自分の信ずることを言ひ、見たまゝの實況を放送すればそれでよいのだと、考へたので、平常通り平氣で放送を續けた。處が試合は、御承知の通り、佐藤君のホームランなどがあつて、それ迄殆ど負けたとのみ思はれた、早稻田は忽然として慶應を敗るといふ、劇的の場面があつて、時のキャプテン伊丹君は泣き出す。市岡監督は佐藤君を抱擁して離さない、兎角感激し易い私は、これに泣かされて、涙でこの一場面は放送してしまつた。ところが昨日の慶應贔負は、忽ち變じて早稻田贔負となつて今度はそれこそ私の口辯ではないが、俄然形勢一變、立處に松内は早稻田贔負で怪しからんと、來たものだ、かうなると、松内の立場はどうして好いのか分らなくなる。

◇

凡て聽く人の色眼鏡といふものは、こんな類のものである。つまりに、アナウンサーは只機械的に、水の様に淡かに、放送を續けたら、最も無難であるといふことに落着するらしいが、それでは肝腎聞く人の氣持にピッタリ迎向して行くことは出來ない、ニュースで、野球放送の經過を、知らせるのと何等選ぶところがない、それでは恐らく、聞く人に何等の感興も何等の感激も與へ得るものではない、私は何時の場合でも、そこに人間松内をさらけ出して居る積りである。

今度はこの間の春の早慶戰に就て、聽く人に依つて種々考へ方が違ふといふことを投書を其儘載せて大方の御批判を仰いで見よう。

慶應黨なりといつて攻撃されたもの。

君の慶應愛校者たるは汎くファンの知る事ながら、アナウンサーといふ大役を演ずる君は絕對公平なるべきに早慶野球第二回戰の紹介は實に言語に絕するものがあつた。(中略)早稻田黨の僕ばかりでなく慶應黨のファンも冷靜で聞いたら、心よい說明ではないと思ふから亂筆で一言ふ。(名前は略す)

もう一つ、

松内と云ふ男は慶應に雇はれたアナウンサーか、いやしくも公平であるべきアナウンサーが早稻田の敗北を喜び、慶應の贔負ばかりするとは何事だ、インフォールドフライの場合の生意氣な說明等、けしからん奴だ、あんな者を今後絕對に首切れ、然らずんば吾人ファン一同で彼に自決をせまつてやる心算だ。(ファン十二名同盟)

早稻田贔負だといつて攻撃されたもの、

滿天下の熱狂を喚起した早慶戰は3A——2、4A——2の戰蹟で強剛早大軍を屠り慶大軍は終に凱歌を揚げた。第一回戰、第二回戰共アナウンサー松内の明快な放送に依つて刻々變化し熱狂して行く戰況をどれだけ興味深くして吳れたか知れない。上京出來ず地方にあつてラヂオで滿足しなければならない自分達は此で隨分助かると云つてよい。然しこのアナ

ウンサー松内氏もやはり人間なのだ。試合にエキサイトしない以前にあつては冷靜と賢明と公平とを失はない彼も、いざ滿場總立ちとなつて熱狂して來るとやはり一個のファンに過ぎない。而かも可成り露骨な早大贔負のファンが出現してしまふ。早大チャンスとなるや彼は意氣浩然として早大機至るとなし、早大終に好機を逸したとなると沈痛失意の響が惻々として放送される。此は自分達に取つては可成りやり切れない、慶應が勝つたからよさ相なものの、若し敗慘の憂目を見たとしたらアナウンサー松内氏を可成り恨んだかも知れない。松内氏よ冷性賢明な名アナウンサーに戻れ。それでこそスポーツマン・シップだ。（姓名略す）

若し慶應が負けたらモット露骨に攻擊されたらうと思ふ。次に文中の賛辭はいさゝか恐縮するが最も公平に聞いて呉れた人のものなも載せて御參考に供しよう。

全國否海外のファンにも壓倒的興味と昂奮とをもつて迎えられた春の早慶野球戰此の熱戰を目前に見る事の出來ない我々に手に取るように野球に對する感情の總てを把握して時に熱せしめ時に泣かしめ時に固唾を飲ましめ刻々に移り變る情景をあるがまゝに聽かして下さつた貴下に敬意を表し升。

春のシーズンに總てに惠れなかつた早大軍特に第二回戰開始前に早大小川投手の涙ぐましい挿話には私共スピーカ前に集つたファンの目にも涙が誘はれました。これこそ責任投手の小川君とアナウンサーたる貴下とファンたる聽取者との三重奏とでも申すものでしようか（狂球生）

もう一つ

（前略）最近いろんな勝手な註文を云ふ人があるやうに聞きますが決して氣を惡くしないで下さい、一面には君の理解者が數萬の集團を形成して居ることを御記憶願ひ度い。早慶戰放送に際して定めて色んな氣苦勞をされた事とお察しします、よく吾々には判つてゐます。何卒御安心の程を。今日當り咽を少々痛められたのではありませんか、無理をなさらず御自愛の程を願います、甚だ簡單で濟みませんがいろんな事をいふ奴の多いに憤慨して一言申上げた迄です。（無名生）

◇

早慶戰の放送の裏面には何時もこの樣な笑はれない喜劇といつた風のものがあるが、これに就ても可笑しいのはこの間の極東オリンピックの放送だ、水泳とか陸上競技などは流石にゲームそのものが、總て瞬間に決まるものであるから、そんな懸念もないが、野球の樣に、可成りの長時間に、然も相當點の開きなどがあつた場合、國際的に、其處は何とか放送上の言葉にも多少の色をつけなければならない。さあこれが相當苦勞の種であつた。

日本對中華の野球第一回は確か二十一對三點で日本の大勝であつたが、近頃この試合の放送程、閉口したものはなかつた。何しろ點

の間きは大きくなる、中華軍のエラーに續出する、試合は面白くなくて頓とアナウンスの調子が出て來ない。それが前に言つた、國際親善の放送といふのだから、アナウンサーだつて可成りの苦心だ。何處かで中華軍を持ち上げ樣と思ふのだが、肝腎の選手はエラーの續出、賞める處がない。仕方がないから、遊擊の前へ普通の緩いゴロが行く、遊擊がこれを取つて一壘へ投げる、これを待つてたとばかりにファインプレーといふ、これを亦私の聲が兎角大きいので、廻りの見物が手をたゝいてアナウンサーを彌次る。次に左翼へ飛球が飛ぶ、大した球でない、無論左翼手がこれを待ち構へて捕へる、これを左翼手見事に捕へました、まことにファインプレーとやる。見物がドット來る。といつた調子で實際少しもエキサイトされずに、まことにノンビリとした間に、こんな馬鹿々々しい苦勞があつた。それから最後の日本對比律賓の試合、この日は馬鹿に暑かつたので、暑さに調子が出たのか、比律賓の出來が馬鹿に好い、日本が一向當らずに一點二點とリードされて、もう立直るか、今度こそはと思つて居る內に、どうしても日本軍が這入らない。至極呑氣に構へて、さすが國際的に、盛に比律賓に應援して居つた見物も、何だか雲行きが變になつて來たので、默りこんでしまう。結局八回に至つて比律賓は五點、日本は九回の最後のインニングに至つて一點、然も日本の最後の攻擊は先づ一死、處が一死後村尾君が打つた遊擊ゴロを遊擊手のエチエム君がタイムリーにエラーしたのが因で、それから四球の連發、楠見、桝、富武などの快打があつて、一擧七點、悲壯の走馬燈は忽焉として旋回、結局は八對五で日本辛じて勝つたといふ譯だが、この試合誰しも最初から、日本がこう苦しむとは思はなかつたらう。アナウンサーだつて、どうせ日本軍の勝つものと、まことに美事に、まことに盛に、例の國際的に美辭麗句を投げて、これは僞だが、兎も角國際的に何とか比律賓を持ち上げてアナウンスして居つたが、さて段々雲行きが危くなつてきて、とう〳〵八回を終り、日本ラスト・インニング、こうなると兎角アナウンサーも人間松內に、日本人松內に戻り相で戻の相に戻らなかつた。やがて戰終つて中堅の後方に高く、ポールに日の旗がスラ〳〵と揚つて、君が代の奏樂は起る、見物は靜かに起立して頭を下げる、日本・比律賓の選手が入り交つて握手を交はす、互に三々五々談笑して、今迄の熱戰を忘れたかの樣に親善振りを發揮する。私も何だか一寸救はれた氣持ちになつて晴れ〳〵しい氣持ちがした。而して、この時には既に私も完全に善良なるアナウンサーの良心に立戻つて、總ての場面を感激そのものの樣な、アナウンスで國際親善振りを發揮して居つたことは勿論である。

再び言ふが早慶戰の樣に、試合そのものが既に人の心をエキサイトする試合には、さすがに少しも間隙といふものがないので、終始アナウンサーも緊張させられて、いさゝかたりとも、邪念とか、技巧とかいふものは起つてない、然し非常に點數の離れた凡試合とか、見て居てもつまらない試合などにぶつかつたとしたら、時に技巧といふ風のものを交へて放送することもないではない、時々見るより

ラヂオで聞く方が、面白いといふことを耳にすることもあるが、いさゝかでもそれが本當のことであるとしたら、恐らくこうした時のことをいふのではあるまいか。見て居てつまらない位の試合なら決して聞いたとて面白い譯はない。こんな場合アナウンサーとても、放送に氣が乘つて來ないで、いやになる。然しそこが仕事の辛い處で、アナウンサーが氣が乘らないといつて、放送を投げてしまへば益々聞く人は飽きて來る。こんな時に限つてアナウンサーたるもの平素に倍して、馬力をかける。そうして聞く人の氣持ちを、惹きつけて行くといふ、言はゞ放送上の技巧(?)を用ゐることになるのである。

この場合アナウンサーの十の馬力は、漸く聞く人に、四か、五位の放送價値しか與へ得るものではない。これに反して、試合そのものが面白ければ面白い程、幾分放送が不出來でもそれ以上に聞く人には實感を與へて、心持をピタリと惹きつけ得るものである。

◇

聞く人から見たら呑氣相な放送の裏面にもこうした笑ひ度くも、笑ひ得ない、淡い悲哀をもつた、喜劇役者が、マイクロフォン前で眞赤になつて動いて居るのである。

探偵小説

女は戀を食べて生きてゐる

瀬下耽

一

榛新一郎を、その夏中三月以上といふもの、島の美登璃荘の女主人公みとりに縛りつけて置いたものは、云はば「空虚な青春」のさせた業に過ぎなかつた。彼等の悪因縁にやがて終止符が打たれるであらう事は、既にその冒頭から彼には豫想された事だつた。

「この女は、私の情戀の中間寄生主に過ぎないのだ。」

そして、或夜、彼が、きぬたを雨に濡れたペイヴメントの上から拾ひ上げた瞬間から、彼の生活線は急激な曲線を描いて轉回する事になつたのだつた。二人が同棲する事になつた時、新居の門柱に掲げられた名札を見上げて、彼女は言つた。

「ハシバミ。難しい字だこと。榛つてどんな花が咲くんでせう。」

その質問が、新一郎をかへつて微笑させた。きぬたは貧しい花賣娘だつたのだから。

新一郎は、みとりに最後のお別れを言ひに行くべき時だと知つた。何故ならば、僅か一週間に滿たぬ新生活のうちに、きぬたの悉くが彼を滿足させてくれたから……。二人の女。年齢こそ四つと隔りは無かつたが、きぬたの青春はこれから燃え盛らうといふ炎に似てゐた。一方みとりのは、はや燃え心を過ぎた衰へが感ぜらるゝものだつた。彼は、その選擇を間違へはしなかつた。

新一郎は、秋立ちそめた一日、初めて大びらに町端れの渡し場に出かけて行つて、椿島への舟を雇つた。

「今日を限りに、あの男にも氣兼ねをしないですむのだ。」

遙か二浬の波の上に、シーズンが終つて、今は都人の引上げ盡した椿島が、寂しい姿で浮んでゐるのを眺めながら、彼は呟

くのだつた。舟の近づくにつれて、懸崖の鼻に、盛り上つた椿の黒ずんだ茂みと強く對象して、くつきりと白い美登璃莊の半貌が覗き出してきた。新一郎は、不圖、この年の春、初めてこの港の町にある支店に轉勤して來た折の事、別莊地として有名な對岸にあたる椿島への遊行、偶然の機會からそこで始まつたみとりとの交渉を想ふのだつた。伊達な造りの美登璃莊は、このN市の大きな罐詰業者、毛谷伍助の持物だつた。みとりは、この立派な籠の中に不自由なく飼はれながら、退屈な日々を過してゐたのだつた。若い心は老ひた心を樂ます事は出來ても、老ひた心は所詮若い心を飽和させる事は出來ないのだつた。彼の出現は適時だつた。で、女は、餓えた章魚のやうな執拗さで彼を搦め取つて離さなかつた。臆病な彼は、月に二三度づゝ島に訪ねてくる筈の女の旦那の眼を恐れながらも、熟れた木の實の持つ重厚な香味を忘れかねて、幾んど二日置き位に通ひつめた。彼等の關係は、直きに毛谷に感付かれたらしかつた。

「爺さんはね。それでも鼻だけは未だ達者だとみえて、どうやら嗅ぎつけたらしいの。渡し場には全部手が廻してあるらしいから、これから舟ぢや駄目……。」

泳ぎの手練だつた新一郎は、次から女のもとへ泳いで通ふ事にしたのだつた。女は、そのひどく浪漫的な密會の方法に雀躍さへしてみせた。首尾のよい時には、美登璃莊の並んだ二つの窓に映る洋燈の燈が合圖だつた。夜になると、彼は、濱に下りて行つて、沖の島を窺つた。そして脱いだ單衣ものを帶でしつかりと頭上に縛りつけると、海豚のやうに活潑に夜の海を泳ぎ渡るのだつた。内海は、いつも靜かだつた。海は、もう充分に生暖かゝつた。水を掻く毎に、足を蹴るにつれて、無數の夜光蟲が、彼の全身をそのほの白い燐光でイルミネーションに飾つた。女は、きつと波打際まで出迎へてゐてくれた。彼は、水から上つた海神の姿のまゝで、歡樂の床に躍りこむのだつた。臍の邊りにうつかり長い海草の一筋を纏はらした彼の裸身を眺めて、女は手を打つて笑つたりした。彼等の密會の間の休止が少し長過ぎた場合などには、女は、激しい戀情に堪へかねて、齒を鳴らしながら飛びかゝつてきた。こんな折に、最初の情夫に噛みちぎられたとか云ふ、右の乳首の小さな火傷に似た瘢痕が、みとりの體を殊に淺間しくも又凄じいものに見せるのだつた。

――みんな終りだ。あの唇の傍にてんとう蟲のやうに點ぜられた黒子にも、樣々の素晴らしい戀の技巧にも、みとりの持つてゐる總てのものにおさらばだ。

舟は、島に着いた。彼は、この眞晝間の公然の振舞ひを、どんな風にしてみとりが迎へるだらうかと、半ば樂むやうな氣持

で岸の道を登つて行つた」――みどりは、然し、彼のかうした來訪を待ちうけてゐたもの、やうだつた。

「とう／＼來たのね。萬歲！　どうして爺さんの話そんなに早く知れて？　これから愈々私達の極樂が始まるのだわ。可愛がつて。新さん、うんと可愛がつてちようだい。」

さう言つて無暗にはしやぎ廻る女を、強ひて落着かせながら、聞き糺してみると、旦那の毛谷は、二日前に急病で死んでしまつた事、生前の契約通り、この美登璃莊と相當の手當金が彼女に殘された事、それで、みとりが都合のよい空想に有頂天になつてゐる事が分つた。新一郎は、一寸當惑してしまつた。切り出すきつかけを挫かれてしまつた彼は、これ迄に進んできた彼等の關係を、餘りにも簡單なものにあしらひ過ぎてゐた事を覺つた。直ぐに結末をつけらるゝものと高をくゝつて、不用意にも適當な口實一つすら持たずに出かけて來た事を後悔した。

果して、彼が澁りながら別れ話を切り出すと、みとりは、忽ち蒼白に變じながら、彼の口を自分の唇で遮二無二塞がうと焦るのだつた。彼女は、最初は涙を流して哀願した。彼は、而し動かなかつた。女は、次に狂躁な言動で威さうとした。彼は、而し斷はず續けた。女は彼の魂を痲痺させるやうな仕方で、直ぐに展かれるであらう甘美な夢を描いて陷しいれやうと試みた。さうした女の醜く狼狽する姿が、反つて彼を不合理な冷靜さに引きこむばかりだつた。

「これは、弱氣なお前獨りで打てる芝居ではない。私にはお前を盜んだのはどんな女だ。お前は、未だ私のほんとうのいゝ點に觸れてみたいからそんな事を言ふのだらう。」

みとりは、常の彼女らしくもない取り亂し方で、そんな風に掻口說いては、海綿を絞るやうに泣くのだつた。新一郎は、持て餘し氣味に殆んど一方的に話を結ぶと、さつさと立ち上つた。業を失つた女は、奧の部屋に走りこんでいつて、赤いリボンで十字(クロス)掛けにした彼からの戀文の一束を持ち出してきた。

「これ返してやらないからいゝ。薄情者。私がどんなに怖い女だかきつと思ひ知らせてやるから……どうせお前の上にいゝ目は照らないよ。」

新一郎は、丁寧に一つお辭儀をすると、危ないものから逃れるように美登璃莊を後にした。一度振り返つてみると、寢室の窓硝子にほつれ髮をきつと嚙みしめながら、絕望と憤然の奇妙に錯雜したみとりの顏が、冷たく張りついてゐるのが見えた。

――歸りの舟の中に坐つた頃には、もう女に對する憐憫や未練がましいもの等は、微塵も殘つてゐない彼だつた。自分は、女の言ふ通り、ほんとうに薄情者なのかも知れない、と、新一郎

は微苦笑さへするのだつた。

二

新一郎ときぬたとの新生活は、幸福といふ事を除いては何の起伏もない足取(ステツプ)で過ぎていつた。きぬたは、彼の愛情を滿喫して、その豊麗な美しさを益々肥してゆくらしく見えた。たつた一度、(それが彼等の最も激しい夫婦喧嘩の型とみられるのだつたが、)それは或日の夕餉の後の樂しい物語の時間の事、彼の肩の上に輕く乘つてゐたきぬたの顔が、そつと立ち直ると、

「あなた。あたしを騙してらつしやるやうな事はなくて?」

と、甘やかに詰(なじ)るやうに囁くのだつた。

「どうして。」

「これからあつちや大變よ。……でも、今迄にはあつたでせう。どう? 白状なさいな。」

「僕が、そんな果報者に見えるかね。」

新一郎は、不圖、みとりの事を正直にぶちまけやうかと思つたが、お互に過去の秘密を冗談まぎれに打明け合つて、反つて氣まづい状態に陥ちいつた愚かな蜜月旅行者の或挿話(エピソード)を思ひ出したので、そんな風にまぎらしてしまつた。——一番仲のいゝ瞬間が一番危險だからな……。きぬたは、彼の巧みな避け方に對して、子供つぽい憤りの色を頰に見せながら、如何にも新妻らしいすね方で、彼の接吻に冷く應へるばかりだつた。が、翌日には、もうその上天氣と共に彼女の心も爽やかに晴れてゐるのだつた。椿新一郎を極度に怯やかした奇怪な事件の口火は、それから一週間も經た或日、何氣ない一通の封書の形で卓子の上に現はれたのだつた。幾通かの手紙と共にそのありふれた澁茶色のハトロン紙の封筒を取り上げた彼は、別に氣にもとめずに封を切つてみたのだつた。内容は、一枚の美濃半紙に大形な字で記された僅か一行かつきりの文句だつた。

チヨコレートに注意なさい。

何かの廣告ビラめいたその紙片を見た瞬間、彼は、馬鹿らしいユーモアさへ感じて、直ぐ苦茶〱に丸めてしまつた。が、その書體のどこかに、幽かながら彼の記憶を鋭く揺するものがあるのに氣付いた。念のために封筒を裏返へしてみたが、差出人の住所姓名は愚か、暗示的なものさへ見當らなかつた。宛名は確かに新一郎自身になつてゐた。唯、それは誰かゞ門内の郵便受箱に放りこんでいつたものらしく、切手や消印(スタンプ)の跡さへ無い事だつた。

「みとりの字に違ひないが……いや少くとも非常によく似てゐる。」

彼の漠然たる一時的な不安も、煙草の火を點けながら、ついでにそれを燒き棄てゝしまふと同時に影をひそめてしまつた。

翌日、社から歸宅した新一郎は、いつもいそ／＼と門口まで出迎へてくれる筈のきぬたの姿が見えないのを訝つた。靴を脱いで上らうとしてゐると、小女の松があわたゞしく迎へて、

「さき程から奥様はお加減が惡いとおつしやつて臥つてゐらつしやいます。」

と、告げるのだつた。彼は直ぐに奥の寢間に行つてみた。

「どうしたんだね。」

きぬたは、血の氣の失せた顔を、物憂げに紅の夜具襟から覗かせて、それでも懸命に歪んだやうな笑顔を作つてみせた。

「お留守にとゞいたチョコレートを撮んだの。そしたら、暫くして急に嘔吐氣がついて……そして變になつちやつた。ごめんなさい。」

「何？　チョコレートだつて。」

「えゝ。お机の上に乘つてますわ。お晝頃とゞいたの。あなたの親切だと思つたのに。」

彼は、自分の書齋にあてられた一室に引きとつて、着更へながら、小型の菓子の化粧箱が開かれたまゝ机上に乘つてゐるのを見た。それには、色附きの錫紙にくるまつたクリーム入りのチョコレート玉がぎつしり詰まつてゐた。端の方に四つ五つ空隙があいてゐるのは、きぬたが食べたものらしかつた。驚いた事には、銀色の玉の間を縫つて、金色の玉がスペードの1を畫いて象嵌されてある事だつた。——それは市内の何處かの郵便局から發送された小包である事を、その消印が語つてゐた。新一郎は、何か毒物が混じてあるらしい、その怪しげな菓子箱を中味諸共燒き棄てる事を松に命じながら、この危險な惡戲の犯人を鮮やかに想像せざるを得なかつた。——私が、どんなに怖い女だか必ず思ひ知らせてやるから。さう叫んだみとりの眞劍な顔が、ぽつかりと腦裡に大寫されて浮んできた。

「こんな突飛な冗談は止めさせなくてはならない。」

幸に、きぬたは、大した事もないらしく、翌朝には遅れずに起きて、臺所の方で家庭的な物音を立てゝゐた。彼は、その日の午後、會社を早目に切り上げると、直ぐに椿島に出かけて行つた。所が、思ひもかけず、美登璃莊はぴつしりと鎧戸に立て籠められてゐて人氣も無い事だつた。崖下に一軒、始終別莊に出入りしてゐた筈の漁師の家があつたのを思ひ出して、歸りがけに立ち寄つて尋ねてみると、みとりは、どうやら新らしい相手

を見つけたらしく、美登璃莊を殆んど放りつぱなしにして何處かへ出かけて行つてしまつたとの事だつた。

「殊に由ると、上のお邸だつて誰かい、買手に渡してしまつて、のんきな道行きとしやれこんだのかも知れませんぜ。旦那。」

漁師は、さう言つて屈託なさゝうに笑つてみせた。彼は、それ以上詮索の手段も無くて、ぼんやり歸つてきたのだつた。

その日を限りに、新一郎は、變に神經質に陷つてゆく自分を感ずるのだつた。不可ない傾向だ。と、彼は、強ひて笑ひを求めようと努力するのだつた。その不自然な振舞ひが、きぬたには鋭感に映るものとみえて、

「あなた、近頃妙におふさぎね。何か御心配事がおあるんぢやなくて。」

と、時々彼の手を甘へるやうにゆすりながら、勵ますやうに質すのだつた。彼は、かたくなに首を振つてみせるきりだつた。

第二の警告は、それから十日程經た或日、同じ形式でさりげなく郵便物の中に交つてゐた。

美しい花には棘があります。

これが例の一行の文字だつた。この嘲弄したような女文字の一句に對して、而し新一郎は、もうユーモアを感ずる所ではなかつた。文句の單純である事が、よけいにその裏にひそむ陰謀の底知れぬ兇惡さゝへ想はせて無氣味だつた。彼は、明らさまの事實をこそ告げなかつたが、きぬたにも松にも、自分の留守中にとゞけられるであらうものには、無斷で手をつけては不可ないと嚴重に申し渡したのだつた。事情を知らぬ女達は、彼のトゲ〳〵しい程の口吻を、唯不思議がる風に見えた。

豫想通り、いや手紙の警告通り、翌日、彼の机上には細長い紙函がとゞけられてあつた。それも同樣に市内の何處かゝら無名の人によつて發送されたものだつた。彼は、「怖いもの見たさ」の心理にかられて、ともかくも要心深く包みを解いてみた。美事な薔薇の花の一束が、パラピン紙に餘りにも丁寧に包まれた儘はひつてゐた。といふのは、全體をくるりと包みこんだ紙が、嚴重に糊付けされてある事だつた。花枝全體が、云はゞ漏斗形のパラピン紙製の袋の中に封じこめられたといふ形だつた。どんなに不趣味な田舍の花屋だつて、今時こんな間の抜けたやり方をするものではなかつた。——秘密がそこにあるのだ、と、彼は思つた。多分青酸加里でも塗附された鋭い棘が、自分を愛でる者を裏切らうと待ち構へてゐるのでもあらう。彼は、自分の想像に滿足した。けれども、何かもつと意表外なトリックがそ

の内容に盛られてあるさうに思はれて、怯え易くなつてゐた彼は、それ以上驗してみるのが怖ぢられた。——で、薔薇は葉毎火中されて終つた。

一日間を置いて、奇怪な手紙は、又彼の臆病さを見舞つた。

先日は失禮。つゝがが蟲のお土産は確かに受取つて下さつたでせう。もつといゝお土産がいりませんか。

こんな調子の文句だつた。つゝが蟲!? 彼は、冷えぐ\としたものが、後頭部を起點に背筋を這ひ下るのを覺えた。何といふ思ひ付きだ。あの洋紅色をした微細な擴大鏡的毒蟲が、犧牲者を待つて、あの薔薇の葉裏に點々とこびりついてゐたといふのか。彼は、或友人の郷里にあたる、信濃川の上流地方で、年々この「地獄の蟲」の猛毒に奪はれる幾つかの人命の事を噂さに聞き知つてゐた。

新一郎は、明らかに、みとりが自分の生命を弄んでゐる事を認めない譯にゆかなかつた。ともかくも、女に、豫告するといふ好意? が殘されてあるから逃れられはするもの丶、もしもそれがなかつたとしたら……或はどうにかして手にはひらない場合があつたとしたら……。彼は、人間一箇の生命といふものが、如何に不安定な位置に縣つてゐるものかといふ事を、改めて痛感さへするのだつた。そして、彼の憂鬱な表情は、益々深く皺ばんでゆくのだつた。

彼には、けれども、みとりが最後のものを覗つてゐるのではないと信じられた。これは要するに余梅念のいつた惡戯の程度であるだらう。自分の狼狽と不安がる有様を何處かで想像しながら、情夫の膝によつて、冷笑と共に盃をあけてゐるのでもあらうか。さうだ。わざ/\豫告するといふやり方が、云はゞ罠に一種の精神的報復である事を裏書きしてゐるではないか。だが、これは、自信のあるに任せて、子供の頭上に乘せた林檎を覗ひ射ちしてゐる男の態度にも似て、度外れた狂行の類なのだ。試さるゝものにとつては、その一矢づゝが、新らしい死に相當する恐怖であるのだ。死といふものが必ずしも極刑とはなり得ない。最後の一歩手前の恐怖に常に曝されてあるやうな方法こそ最も慘酷に效果的なものと言はねばならない。きぬたは、總てを心得てゐるらしいのだつた。彼は、そして、急速に落着きを失つてゆくのだつた。

「あなた、打ち明けてちやうだい。何かかくしてらつしやる事をね。樂しみだけを分ち合ふのがほんとうの愛し方といふものぢやないわ。」

きぬたは、表面的にもせよ、自然彼女をうとましくするやうになつた彼の近頃を感じてか、さう訴へかけるのだつたが、彼は、愛するだけに、きぬたをこの精神的刑罰の巻添へにする事を好まなかつた。で、徒らに騒々しい空虚な笑ひと共に、事もなげに否定してみせるのだつた。

三

新一郎は、何か異狀に衝動的な事實の突發するのを、びくびくしながらも期待するやうな、變に矛盾した精神狀態にとりつかれてしまつた。「惡意ある好意」を秘めた書狀は、然しその後一月近くにもなるのに、忘れたやうに姿を見せぬのだつた。わざと間を引き延ばして置く事によつて、相手の恐怖心を鋭敏に尖らせてやらうといふ計劃なのか。さう自覺してゐながら、みすみす女の思ふ壺にはまりこんでゆく自分が、獨り腑甲斐なくも歯痒い思ひだつた。然し、事件の輪廓は大體明らかなものだつたし、みとりの復讐も、云はゞ底の知れた、非常に遊戯的分子の濃いものである事がそのうちにも彼を多分に氣易くさせてゐた事は事實だつた。彼をいらだゝせるものは、女のたくらみそのものではなくて、不斷に神經を疲れさすこの種の惡戯が、何時まで續けられる事だらうといふ點にあると云つてよかつた。

さて、新一郎の頭を混亂させてしまつた次の出來事は、全く偶然の機會からだつた。

二日ばかり九州の方に出張を命ぜられた彼は、社用を終へたその日、歸旅の心易さで車中にあつた。久し振りに味はへる家庭の食卓等を想ひながら、漫然と窓外に轉展する山姿水容に眼をやつてゐるうちに、丁度晝過ぎになる頃列車はO驛に着いた。四つの幹線を結ぶこの乘換驛は恐ろしく雜沓してゐた。彼も、中形のスーツケースを一つぶら下げてブリッヂを渡ると、待つてゐたN行きの箱に乘り換へたのだつた。發車迄には未だ五分近くもあつたらう。彼は、何氣なく今構内にはひつてきたばかりの列車の吞吐する群集を眺めてゐたのだが、不意に突かれたやうに立ち上つた。丁度彼の向ひ合ひにあたるその客車の窓の一つから、二人の男女が竝んで上半身を乘り出すやうにして、何か愉快さうに談笑してゐるのを見つけたからであつた。男は、玉蜀黍に生えてゐるやうな茶褐色の縮れ毛に、黑さびた皮膚を持つた異國人だつた。それが藝人のやうに飛びはなれて派手なネクタイを着けてゐるので著しく注意を喚んだのだつた。その連れらしく思はれる、割合に地味な裝ひをした、而も若々しい

美人を見つけた時、新一郎は、あつ！と小聲で叫びさへした。みとりだ。みとりに違ひない。彼は、この發見が餘りに突然だつたので、暫く呆然とした形で眺めてゐるきりだつた。さうだ！と、はつと、自分の爲す可き事に思ひ付いた彼は、あたふたと車を降りやうとしたのだが、何時の間にか、修學旅行の一團らしい中學生が殆んどその一箱全部を占領した形で、席のとれなかつた連中が通路まで蟠つてゐたので、押ぎ分け／＼漸くホームに降り立つた時には、向ふの列車は既にゆるぎ出してゐた。一人の驛員が、周章て丶、關はず飛び乘らうとする彼を支へてしまつた。――仕方なくもとの車に乘りこんだ新一郎は、さうして滿されぬ氣持で、約六時間の退屈な旅をN市に着いたのだつた。

タクシーで家の門口まで乘りつけた新一郎は、偶然にも、傭へつけの郵便受箱の口に、爪立ち氣味に何かを放りこまふとしてゐる、貧しいなりの男の子をいち早く見つけたのだつた。

「おい。一寸待て。」

彼は、少年を呼びとめた。相手は、別に惡びれもせず振り向きながら、彼を見上げたのだつた。少年の手にしてゐるものが、例の封筒だと知つた時、彼は、その少年の口から、聞き出せるだけの事を引き出さうと試みた。――少年は、K町（貧民窟と呼ばれてゐるN市の一劃だつた）の餓鬼大將の一人だつた。その日の晝過ぎの事、（近くにあるチヤチのパンドが、流行のリオ・リタをやつてゐたといふから時間に間違ひはなかつた）停車場附近の廣場でケンゲキごつこをやつてゐると、一人の女の人がやつて來て、この手紙を夕方になつてから、この箱にいれてくれるやうにといつて、五拾錢玉を一つ吳れた事、それは若くて美しい人だつた事、襟卷で顏を半分以上もかくすやうにしてゐた事等が分明した。けれども、その女の精しい描寫となると注意力の散漫な少年の記憶は殆んど空虚だつた。

「今度から、よう覺えときます。」

少年は、彼からの拾錢玉にほく／＼しながら、そんな愛想な言ひ殘して走り去つてしまつた。

禁酒。

半紙の上には、小學生の習字のやうに大きな文字が二つだけ、角ばつてひかへてゐた。

新一郎は、四五日ぶりでできぬたの新鮮な笑顏に迎へられながら、妙に考へこみ勝ちだつた。その夜も寢に就きながら、彼はその矛盾を解決しようと焦つた。O驛でみとりを見たと殆んど

同じ時間に、汽車で六時間以上も隔てたこのN市に彼女が現はれてゐる事になるのだ。O驛での女は、では、みとりではなかつたのだらうか。いや、あれだけ愛撫した女を間違へる筈はない。彼女の肉體の如何なる一部分を以てもそれと言ひ當て得る程の自分ではないか。さうすると、あの手紙の渡し主は、即ちこのヒステリックな「異狀浪漫的嗜好癖患者」の正體は、みとりではないといふ事になるが……彼の疑惑は、夜の沈默と共に跳梁してゆくのだつた。が、そのうちに旅の疲勞が漸く彼を重苦しい眠りに誘ひこんでいつたのだつた。

翌朝、彼の出勤間際になつて、例の如く無記名の小包がとゞいた。開けてみると、それは佛蘭西もの、白葡萄酒の一瓶だつた。禁酒か。彼は、それを机の引出しの奧深く藏ひこんで、嚴重に鍵をドろすと、社に出かけて行つた。――その日一日中、彼は仕事がしんみり手につかなかつた。そして、うつかりと筆をとめてはその事に考へ耽るのだつた。チョコレート。薔薇の花。白葡萄酒。それ等は皆自分の特別な好みに合つたものばかりだつた。充分これを心得てゐるやうに、選んでそれ等の物ばかり贈つてよこす點から察すると、みとりの仕業とも思へるが、然し、自分の嗜好に通じてゐる女といへば、少くとももう一人はゐるのだ。小包の發送が三つ共市内からである事實、それに如何にも不趣味な半紙、封筒等を使用してゐる理由は、「特別なもの」を用ひる事によつて簡單に秘密の絲口を嗅ぎつけられまいとする警戒に違ひないのだが、既に自分の正體をわざ〳〵暗示する程の手段さへとつてゐるみとりが、何故それを韜晦するやうな矛盾した要心を必要とするのか。これは、唯たくらみを完全に遂行しとげる迄、自分のかくれ場所を曉かれまいとするだけの配慮としか思はれぬではないか。これ等の事實が漠然とながら指さすところは、自然、愛するきぬたがその女ではないかといふ事だつた。この推理に逢着した時、彼は自分の割り出した計算に自ら愕く(おどろ)のだつた。さう思へば、この事件には、最初から何處かにシイリヤスな所が缺けてゐる事が思ひ合はされるのだつた。――然し、きぬたがその正體だとしたら、自分をこんなに「眞劍な惡戯」で苦しめる理由は何であらう。これが一番大きな疑問であつた。きぬたが、自分とみとりとの關係を耳にしてゐたとしたら……そんな所に原因があるのでもあらうか。が、彼女は、あの最後の苦々しい別れ場に演じられた自分達の口論を知つてゐる筈はなかつた。知らぬものを利用するといふ事は考へられぬ事だつた。――思ひ惑ひながらも、ともかくも、彼の立てた犯罪方程式は、二つの平方根を持つてゐるのだつた。みとりか、でなかつたら、きぬたか。彼は、驗してみ

る事に出つて、疑惑を一掃出來ると信じた。幸に今日は誂へ向きの機會だ。きぬたは、自分で例の手紙を彼の机上に揃へて置く事に出つて、間違ひを絕對に防ぎ得ると知ればこそ、こんなにも危險な芝居を平然と打つてゐられるのだ。今度は、偶然のいゝきつかけから、その豫告が、彼の手にはひつたといふ事を知らない。(彼を愛する限り、彼女は、今ひどくそれを氣づかつてゐる事だらうが。)だから、彼は、今夜にも、如何にも無頓着な様子で、あの怪しい酒を彼女にもすゝめてみるのだ。瞬間に事實は明白にされるだらう。――彼は、自分の計劃に獨りで陶醉しながら、歸途、わざ〳〵遠まはりをして、送られたものと全く同一の一本を購つて、素知らぬ顔で歸宅したのだつた。きぬたは何も氣付かぬ様子だつた。彼は、早速、例の包箱の中味を秘かに取り換へると、それを持つて夕食の用意の整へられてある奥の六疊に出かけて行つた。

「今朝僕の好きなものを貰つたからあげようや。」

何氣なく言ひながら、新一郎は、箱から取り出した瓶の栓を拔いた。

「珍らしいから、お前達も一口お上り。」

彼は、きぬたと松の爲めに用意された二つのワイン・カップに注いでやつた。(この小女だつて驗して置く可きだつた。)その瞬間、氣の故か、彼は、きぬたの顔色が幽かに動搖したやうに思つた。彼は、内心それみたかと思ひながら、わざと自分のカップには仲々に口を觸れなかつた。(彼が先に味つてみせる事は、云はゞ毒味の形で、トリックに感付いたかも知れぬ相手を、充分安心させてしまふ事になるからだつた。)

彼を、失望? させた事には、きぬたは、美味しさうにそのカップを空けてしまつた事だつた。女主人の後から、松も、追隨がちに味ひ終つたのだつた。――この實驗の結果は、反つて彼のみとりに對する恐怖をはつきりさせるに役立つたばかりだつた。チョコレート中毒事件も、きぬたの巧妙な技巧ではなかつたのだ。――然し、例の葡萄酒は、初めから恐怖の假面を冠つたゞけのものに過ぎないとしたら、きぬたの振舞ひも當然な事になるのだが……。不圖、さう疑はれた彼は、翌日の休みを幸ひに、市營公園に出かけて行つて、番人の隙を窺ひながら、一隅の大金網の中に戯むれてゐる猿に、少量の例の葡萄酒を盛つた容器をあてがつてみたのだつた。暫く様子を伺つてゐるうちに、甘く調味されたその液を甜め盡した一匹は、やがて中央にある木を登りかけたが、中途で、手足を痲痺患者のやうにわななかすと見る間に、大きな石塊のやうにぽろりと地上に轉落して果てたのだつた。――少くとも道具立てだけは頭物たつたの

だ。彼は、今更に慄然とした。

四

今や、あらゆる事實が、先の推理を助けた事實迄が、彼の耳にみどりの名を密告するのだつた。Ｏ驛での女は、他人の空似であつたのかも知れない。さうでなかつたら、みどりが、誰かもう一人の影武者（無意識的な補助者であるかも知れないが、）を、Ｎ市附近に持つてゐるものと思はれた。次々の事件に直面しながら、新一郎の心には、未だ、嵐の危險に遭遇しながらも暗礁の在り場所を悉皆知り盡してゐる船員のやうなゆとりが殘つてゐた。次の驚愕すべき手紙が、彼の平靜を根底から覆へしてしまふ迄は。

それは、白葡萄酒事件から一月餘り後の日曜日の午後の事だつた。

「見慣れない子供が、女關で旦那樣にお目にかゝり度いと言つて居りますが……。」

といふ松の言葉に、新一郎は、煙草を銜へたまゝ、出て見ると、それはいつかの子供ではなかつたが、矢張りさうした巷の餓鬼大將らしい少年だつた。

「どつかの叔母さんが、これ持つてけば駄賃をくれるだらうからつて言ひました。」

少年は、ずるさうな眼付で彼の顔色を伺ひながら、多少慣れつこになつてゐる例の封筒を差し出したのだつた。――それは綺麗な若い女の人だつた事、脣の傍に黒子（ほくろ）のあつた事、その手紙を手渡す折に見たその人の指には、白い髑髏のついた指輪が嵌つてゐた事等、その少年の記憶は割合ひにしつかりしてゐた。それは朝の事であつたが、午後になつてからとゞけてくれと賴んで、停車場の方へ行つてしまつたといふ事實が、いつかの少年の場合とそつくりな事だつた。みどりは、何處からか汽車で漂然と來て又漂然と戻つて行くらしかつた。而も、手紙のとゞけらるゝ迄の間に、行方を晦ますだけの時間を、充分勘定にいれて置くといふ細心さだつた。――心づけを與へて少年をかへした新一郎は、もうそれがみどりである事を確信した。髑髏の指輪といふのは、いつか女がさうした趣味のものを欲しがつてゐたので、わざ〳〵細工師に依賴して造らしたものを贈つてやつた彼だつた。あの女以外の誰が、そんな物好きな裝飾品を身につけてゐよう。

私は、今迄、死を賭けた遊戲を續けてきました。お前は、私の豫告によつて、少し甘やかされ過ぎてゐたのです。それは、

私に未だお前の血の要求が湧かなかつたからです。私は、充分前味を樂しみたかつたのです。お前は、これが眞劍な遊戲である事を信じまいとして、自分を騙す事に懸命だつたでせう。私は、今こそ女の執念の深さの程を思ひ知らせてあげます。幸に(?)私は、もうこんな生活にくたびれきつてしまひました。そして、死の歡喜を切に思ふやうになつてきました。私に生きる慾望の續く限り、お前への遊戲は續けられた事でせう。けれども、私は、餘りに早く遊び飽きてしまつたのです。私は、何故か、憎らしいお前と一緒に死んで行きたい。私は、それをこの二十日の午後十時迄に決行します。無理情死です。私は、そして、私の戀の報復と成就とを一時に得らるゝ事になるでせう。私は、氣まぐれから一緒になつてゐる今の男（曲馬團の猛獸使ひをしてゐる印度人です）から、效めの確かな印度産の或植物性の毒物を貰ひました。お前は、どんなに跪いても、私の手から逃れる事は不可能です。何時？　何處で？　今度こそ豫告は拔きです。

この斷章的な、そして事實だけを飾りつけなく叩きつけたやうな一文を見た新一郎は、瞬間、地獄の底をちらと覗いたやうにさへ思つた。幽かに豫感しない事ではなかつたが、とう／＼その時が來たのだ。二十日の午後十時……もう數日しか殘されてゐない。然し、全然絶望ではないのだ。案外容易な所に逃避の道が發見されないとも言へぬ。植物性の毒物と書かれてあるのは、言はゞ不用意な豫告ではないか。厳重に口を注意して、逃れられるだけはやつてみよう。――みどりよ。俺の卑怯さを笑ふか。どうせ生に執着する姿は醜いものなのだ。新一郎は、その日から、家では勿論、會社に出かけても、湯一杯、煙草一本とらうとはしなかつた。空腹に堪へられなくなると、ふら／＼と町に出ては、出鱈目に思ひ付いた小料理店に立ち寄つて食事をしたゝめた。が、決して二度と同一の家にはよらなかつた。彼には、會社の繁雜な仕事に追はれて機械的に働いてゐる間だけが、反つてありがたく感じられた。歸宅して書齋に落着くと共に解放された頭は、今度は全能力的に脅迫觀念を層一層と積み重ねてゆくばかりだつた。極度の精神的な怯えと肉體的な忍從とが重なつて、二三日のうちに、彼の形相は凄まじく陰暗なものに變じてしまつた。

「みどり、そりやあんまりに勝手な振舞ひといふものだぞ。」

彼は、夜中になど、魘はれたやうに飛び起きて呟いたりした。黒髮を食ひしめ、ヒステリックに歪んだ北叟笑みを浮べた女の映像が、彼の夢を夜毎に亂すのだつた。慰めようとして反つて

彼の神經過敏になつた毒視に追ひやられるきぬたの様子は、一層みぢめなものに見られた。彼は、その筋に訴へて保護を求める事を考へてもみた。が、この餘りにも架空的な事實は、直ちに一笑に附されてしまふであらう。下手をすると、自分は、一種の精神病者としての取扱ひを受けぬとも限らぬ。――いや、自分はこの數日の懊惱の結果、もうほんとうの精神病的徴候を具へてしまつてゐるかも知れないのだ。こゝでまづく蠢く事は、もつと恐ろしい結果に自分を導きはすまいか、そして、小心な彼は、自身の行動を制御するのが大きな努力でさへあつた。

五

かうして煉獄の幾日かは過ぎて行つた。丁度、呪はれた二十日の日の夕方であつた。新一郎は、病上りのやうに力無い足どりで、よろめくやうに歸宅すると、さつさと書齋に引上げて、その中央にどつかり坐りこんだ儘動かうともしなかつた。彼は机上の時計の針が約束された最後の時間に近づくのを、食ひつくやうな熱心さで眺めた。

九時が過ぎた。新一郎は、幽かに微笑した。丁度その時、松が、一通の手紙を持つて、をづ／＼とはひつてきた。

「持參した男が玄關で待つて居ります。」

それは、「至急必親展」と記された物々しい一封だつた。

私は、この最後の時が近づくにつれて、やつぱりお前を愛してゐるのだと言ふ事を知りました。お前は、今日の午後、N軒でオムレツをとつたでせう。あれを運んだ斷髪の女給は、私の指圖で、恐ろしいものをお前に食べさせた筈です。直ぐにこの手紙持參の船頭と一緒に來て下さい。約束の時間を餘り遅れては間に合はぬかも知れません。奧さんも待つてゐます。

美登璃莊より。

新一郎は、鳩尾の邊が、じんと疼いてくるのを覺えた。そんな所に迄陷穽が設けられてあつたのか。奧さんも？　彼は、初めてきぬたの姿の見えなかつたのに氣付くと、性急に松に尋ねてみた。きぬたは、彼の歸宅少し前に、やはり船頭風の男の出迎へを受けて出かけたといふ事だつた。彼は、新たな不安を掻き立てられた。で、そのまゝあわたゞしく玄關に待つてゐた船頭と行を共にした。――舟が榛島に着く迄の間、自分の生命は既に時間的なものに豫約されてゐるのだといふ自覺が、加速度的に彼を訶むのだつた。

舟を棄てた新一郎は、闇の道を夢中で美登璃莊まで驅け上つ

た。案内を乞ふ暇もなく、知り盡したみどりの部屋に躍りこんで行つた。

洋燈の覺束ない光に照らし出された部屋の中央には、粗末な卓子が一つ附つてゐるきりだつた。建物の内部は不氣味な迄に靜かだつた。幽かな波の音が、その沈默を際立たせてゐた。新一郎は、絶へず神經的な身震ひを續けながら、多少上釣つた眼で、その卓子の上に置かれたカップを、そして一包みの藥らしいものを見つけた。急いで近よつてみると、カップの下敷きにされた一枚の紙に、簡單に「あなたへの愛の爲に。」と書かれてあるのを發見した。――解毒劑に違ひないと氣付いた彼は、瞬時のためらひもなく、その白い散藥を、カップの水と共に一呼吸に飲みこんだのだつた。それで、思はず深い嘆息と共にやゝ落着きを取りもどした彼は、見覺えのある自分の戀文の一束が同じ卓上に殘されてあるのを見た。――これで總てのいさこざの大團圓がくる事になるのだらうか。けれども、來てゐる筈のきぬたは、そしてみどりは？ 彼は、思ひ切つて、重い帳で區切られた次の寢室に踏みこんでみた。壁際の豪奢な寢臺の上には、蠟燭の神祕めいた圓光の中に、見慣れた寢衣をまとつたみどりが、壁の方に顔を外向けたしどけない姿で長々と仰臥してゐるのが浮び出てゐるのだつた。この場合、餘りにも人を食つた女の態度に呆れながらも、彼は、みどりの髮の一本たり無く寢臺の緣から垂れ落ち、例の翡翠の指輪をつけたまゝの指が、しつかりと一葉の紙片を握りしめてゐるのを、異樣に見た。或事を稻妻のやうに感じながら、彼は、戰のく手でその紙片を拔き取つてみた。

私の勝利です。

しまつた！ みどりは死んでゐるのだつた。彼は、殆んど無意識に腕時計を透してみた。十時二分前！ 俺は、N軒で毒物を食はされてなどゐなかつたのだ。早計にも解毒劑だと信じて今飲んだものこそそれだつたのだ。おゝ、無理情死か。女の罠に見事かゝつてしまつたのだ！ 畜生！ 彼は、思はずへたくと崩折れながら、譯もなくみどりの屍に突進した。けれども、次の瞬間、彼は、もう一度恐ろしい叫聲と共に飛び退いてゐた。みどりの屍だと信じたものは、實は愛するきぬたの冷い骸だつたのだ。しどけなく着せかけた寢衣が、するりと辷つたとたん露出しにされた女の胸には、みどりの凄しい乳房の代りに、未熟の苺のやうに新鮮な色を帶びた娘の乳があつた。一まはりぐるりと頸部に纏つた緋縮緬のしごきの端が、わざと光から外向

けられた彼女の半顔にはらりと懸つてゐたので、彼は、それ迄氣付かなかつたのだつた。——これが俺を待つてゐるきぬたの姿だつたのか。可愛想な運命的犧牲。あの女みとりの報復は、これで悪魔の仕事のやうに完全なものになつたのだ。新一郎は、涙のない歔欷と共に、空しくはなつても尙美くし過ぎるきぬたの骸の上に頽れ落ちるやうに、どうと倒れた。

不意に、生暖く柔らかな二本の腕が、しつかりと熱心に彼のうなぢを引き寄せるのを感じて、彼は、もう一度愕然とした。きぬたは、やはり生きてゐたのだ。

「どうしたといふのだ。そして、みとりは何處にゐる。」

鈍感な新一郎は、未だそんな事を尋ねるのだつた。

「みんなお芝居よ。ね。驚いた？」

きぬたは、寢臺の上で世にも妖艶に笑ひながら言ふのだつた。

「みとりつて人、死んぢまつたの。あの人、あなたがお考へのやうに怖い人ぢやなかつたのよ。ほんとうは。あの人の復讐つてのは、いつだつたかわざ／＼あたしをこゝに招待して、あなたのお手紙の束を見せつける位の事だつたのでした。それからあの人つたら、『新さんを別に怕んでやしない。お互に幸福にね』つて、それをあたしに殘して何處かへ出かけてしまつたのでした。あたし、あなたをすつかり信じてはゐましたが、その折にあつたといふ口爭ひを利用して、ふいとこんな悪戯をもくろむ氣になつたの。あたしの氣持分つて下さる？ あなたが、あの人との過去をかくしてゐらつしやるのが怕らしかつたから……それに甘く見くびられたお返へしの氣持も手傳つてねえ。それを、あたしに打ち明けようといふ氣持になつて下すつた時直ぐに許してあげようと思つてゐたのに……それに、あたし達の生活は少し退屈過ぎましたわね。（何といふ言ひ草だと彼は思つた）あの人、あれから旅藝人の仲間にはひつて、印度人の旦那を持つたんですつて。一月程前の事でした。獅子の檻の内で踊つてゐる時に、油斷して大變ひどい傷を受けてしまつたんです。この美登璃莊から、最後に一目あなたに會ひ度いからつて來たお手紙を、あたし無斷で見ちまつたの。そしてあたしがあの人に會ひに出かけました。あの人は、死ぬ迄あなたの事を忘れなかつたのですわ。それを知つた時、あたし少し嫉けてさへきましたわ。でも、もう大丈夫。——あの人は、あたし達のために、いゝえ、あなた一人のためにかも知れないけれど、この美登璃莊からこんな指輪のこま／＼したもの迄、お片見に殘したんですわ。あたしの嫉妬交りのお芝居も、だから、この最後の一幕で兎にする事にしたんです。ね。怒つて？ あたし、ほんとうにあなたを愛してゐればこそ、こんな詩もない悪戯もし

なければならなかつたのです。あたしが、ほんとうはどんな類のなだかを思ひ知らせておけて、これからあたしを裏切るやうな事をなさらないやうに……あなたをあたしから逃がさぬ要心にね。分つて？ でも、あたしも隨分、自分自身の芝居に苦しめられました。あの白葡萄酒の時などね。流石に困つたわ。でも、割合ひに平氣でした。何故つて、あなたには、あたしをみすく見殺しにするやうな眞似は到底出來ないと分つてゐましたから……（何といふ信じ方だ。と、彼は思ふのだつた）手管が狂つて、ほんとうにうつかりあなたがおあがりになつた時はつて。勿論直ぐにあたしも追つかけ飲み干す覺悟でゐました。どの場合にもね。（これがこの女の愛し方なのだ。彼は、變に眼頭に塞くものを感じだした）みんなこれ切りでお仕舞ひ。これからこのお城で、ほんとうにい、あたし達だけの生活が始まる譯ですわねえ。」

新一郎は、初め、大聲あげて言ひたい事がこみ上げてくるのを感じた。が、仕舞ひには、きぬたの言葉を、甘やかなお伽噺に聞きほれる子供のやうな快さで樂しむ程になつてゐた。彼はさうして興奮が落着いてゆくにつれて、自分が完全にきぬたに克服させられた事を自認せざるを得なかつた。それは、寧ろ一種幸福な被征服感でさへあつた。——俺は、もう一生この女を離れられないのだ。俺は、小羊の皮を被つた豹を飼つてゐたのか。そして、今はしみぐと女を可愛くさへ覺えながら、激しい緊張の後の不可思議な恍惚感と共に、きぬたの燒けるやうな抱擁のうちに溺れこんでいつたのだつた。

完。

——五年六月作——

日本特殊會社論

鈴木茂三郎

一

金融資本支配の現段階の下に於ては、會社と呼び、銀行と稱え、これを法律的規定の下に、類別するは不可能だと言つて好い。また、類別してはならないのである。これを端的に言ふなら金融資本とは、銀行資本と産業との融合、統一されたものだからである。

こゝに東洋拓殖株式會社がある。會社法による會社ではあるが、土地の經營、管理と同時に不動産金融銀行たる職能を果しつゝある。また、こゝに日本興業銀行、臺灣銀行がある。興銀法規、臺銀法規による銀行ではあるが、銀行一般の職能を果たすと同時に、多くの産業を、經營、管理しつゝあるのである。

日本銀行、日本興業、横濱正金、朝鮮、臺灣、北海道拓殖、朝鮮殖産等は、特殊銀行と呼ばれ、滿鐵、東拓等は特殊會社と言はれ、我々はさうした俗惡的な呼稱に慣らされて來たのではあるが、特殊會社であれ、特殊銀行であれ、國家資本――特殊銀行資本と一般的な國家資本――と産業との融合、統一されたものであつて、國家資本から切り離して、斯く類別することは出來ない。

從つて、私のこの小論を、日本特殊會社論と題したのは、たゞ單に用語の便宜に從つたまでのことで、これを日本特殊銀行論と改題するも或は又、國家資本トラスト論と變改するも何等支障をかもさないのである。

さて、其れは其れとして、特殊會社には次ぎのやうなものがある。

「銀行」　日本銀行、日本興業銀行、横濱正金銀行、勸業銀

行、朝鮮銀行、朝鮮殖産銀行、臺灣銀行、北海道拓殖銀行、農工銀行（東京等廿四行）。

「會社」　南滿洲鐵道、東洋拓殖、日本無電、臺灣電力。

特殊會社とは、日本資本主義の發達期に於て、特異的なそれぐの職能のために、國家の權力と信用の、直接的な保護と支持の下に、特殊權利卽ち特權を附與されたもの、これが特殊會社である。

特殊會社は日本資本主義の發達期に於ける所産物であつて、從つて金融資本主義の成熟につれて、一般的には萎縮、凋萎、解消さる可き歷史的必然性を多分に條件づけられてゐる。鮮銀、東拓、臺銀の破綻による凋萎は、金融資本主義發達の妨害をなしたからであり、爲替に於ける正金、産業資本融資に於ける興銀も、すでに、三井、三菱、住友、安田との對立的な存在とさへなつてゐる。

また、特異的なそれぐの職能を遂行するために、國家の直接的な保護と支持による特權を附與されたもので、一般の銀行、會社は一般的「國法」によつて設立されたものだが、特殊會社は特殊的な法令、例へば日銀は日銀法、興銀は興銀法によつて國家の直接的な支配と直接的な保護、支持の下に特設されたものである。

「直接的」なることが特殊會社たる條件である。日本石油、大倉、久原、三菱の共同出資による北樺太石油、三菱、三井、大倉、淺野、住友の共同出資による北樺太鑛業は、數億圓の戰費と生靈を投げ込んだ戰利品たる日露の石油、石炭利權契約を基礎に、政府の斡旋によつて成立したものであるが、これは特殊會社ではない。六千萬圓の預金部資金を基礎とする復興助成會社も然りである。國家との直接的支配の結びつきが無いからである。

また、「直接的」なることは、日本資本主義の發達期においては、國家權力の保護、國家信用の支持が特異的な職能を課せられた銀行、産業にはその發展の上に、絶對的な必要を爲したばかりでなく、損害の危險を負擔させるためにも、國庫に轉嫁することがブルジョアジーにとつては必要だつたのである。

帝國主義政策の尖端をいつた滿蒙に於ける滿鐵、正金、興銀、滿蒙と朝鮮に於ける鮮銀、東拓、臺灣南洋に於ける臺銀等の事業は、日本資本主義の興廢を賭した囘天の事業であつただけに、膨大な損失と多大の危險をおかさざるを得なかつたことは事明で、わがブルジョアジーが、かゝる損失と危險を「豫算外の國庫負擔」に於て爲したことは賢明な處置だつたのである。

然らば、特殊會社をして「特殊」たらしめる特權は何にか。

特殊權利の最大なるものは、兌換券と債券の發券利權である。

昭和四年期末現在高

(備考、農工債券は三年末)

日本銀行	日銀券(日本)	一、六四一、八五二(千圓)
朝鮮銀行	鮮銀券(鮮満)	一一八、七〇二
臺灣銀行	臺銀券(臺灣)	四九、二四一
正金銀行	鈔票(満蒙)	五、九三八
勧業銀行	債券(日本)	八三三、九三九
興業銀行	〃(同)	二七八、五七五
北海拓銀	〃(北海道)	九六、九三八
朝鮮殖産	〃(朝鮮)	一九九、七六六
農工銀行	〃(日本)	四五九、七九一

「特殊會社は特權だけで義務が無い」と、ブルジョアグループに於てさへ、非難の砲火を特權に集中しつゝあるほど、大小の特權が無限大にある。大體が國家の信用と保護、そのものがすでに特權であるのだが、次ぎに特權のもう一とつのものを指摘すれば、政府自から出資者として株主なることである。滿鐵の如きは五割、臺灣電力は四割、日本無電は一割一分の大株主である。

	政府特株所有者別	持株數	總株數	比率%
南滿洲鐵道	大藏省	二、二〇〇、〇〇〇	四、四〇〇、〇〇〇	五〇・〇
東洋拓殖	同	六〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	六・〇
日本無電	同	四六、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	一一・〇
北海拓銀	大藏省	二〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	五・〇
朝鮮銀行	朝鮮總督	一五、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	三・七
朝鮮殖産	同	六、五九八	六〇〇、〇〇〇	—
臺灣電力	臺灣總督	二四〇、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇	四〇・〇
臺灣銀行	大藏大臣	二、五〇〇	一五〇、〇〇〇	一・六

(備考、株數は昭和四年末現在、以下同じ。)

二

特殊會社の特權に次いで、特殊會社の特殊的位置を宣揚するためにも、我々は先づ、×××の特殊會社に有する×××としての位置を、はつきりと數量的に確めて置きたい。

それによると左表の如く特殊會社一〇社に對する所有株數は實に四十四萬七千株に達するのである。

宮内省の株式所有高

	舊株	新株	合計	各社總株數に對する比率
日本銀行	七〇、六七六	七〇、一七六	一四〇、八五二	四六・九五
日本興業	三、七二五	—	三、七二五	二・二七
横濱正金	三六、四一二	—	三六、四一二	三・六四
臺灣銀行	七、五六六	—	七、五六六	—
勧業銀行	七、七五〇	—	七、七五〇	二八
北海拓殖	一六八	一六八	三三六	・一三
朝鮮殖産	三、〇〇〇	六、〇〇〇	九、〇〇〇	一・五〇
朝鮮銀行	六〇〇	二、〇〇〇	二、六〇〇	・六五

南滿洲鐵道	一〇、〇〇〇	一、五〇〇	一一、五〇〇	・八
東洋拓殖	一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	二五、〇〇〇	二・九〇
特殊會社小計	三五八、九九七	九五、九四二	四四七、三七九	
東京電燈	一三、九七二	—	一三、九七二	・二九
大阪商船	六、七五〇	六、〇七五	一二、八二五	・六四
日本郵船	一六一、一〇〇	—	一六一、一〇〇	七・五八
富士製紙	一九、六二五	一九、六二五	三九、二五〇	二六・五三
臺灣製糖	一九、八〇〇	一九、八〇〇	三九、六〇〇	三〇・一四
帝國ホテル	一一、〇〇〇	一一、〇〇〇	二二、〇〇〇	一八・三五
東京瓦斯	一二、一七五	—	一二、一七五	・五六
北海炭礦	二六、六七〇	五三、二一八	七九、八八八	五・七〇
三菱銀行	三、〇〇〇	一、五〇〇	四、五〇〇	・四五
三菱信託	五、〇〇〇	—	五、〇〇〇	・八三
住友銀行	三、〇〇〇	—	三、〇〇〇	・四一
三井銀行	—	四、五〇〇	四、五〇〇	・四五
第一銀行	五、〇〇〇	—	五、〇〇〇	・四三
十五銀行	一五、一二七（新舊）	—	一五、一二七	一・五三
其他主要會社特殊	三一、四六九	一五、七一八	四七、一八七	
合計	五七〇、四六六	二二一、六六二	八七四、五六二	—

備考、鮮銀に對する一萬五千株、朝鮮郵船に對する二千四百八〇株の李王家、又久邇宮その他宮家の所有株を略す、株數は昭和四年末現在、以下同じ

次ぎには特殊會社の株主會に占有する華族の勢威が注目されねばならぬ。

特殊會社は日本資本主義發展期を特徴づける「國家資本」の特殊形態をとつた所産であつて、明治維新後より金融資本支配の決定的確立さるるまで、さらに、國家資本が[illegible]、さらに自ら國家資本トラストに發展するまでに於ける、政府と[illegible]を獨占せる華族、藩閥、長州、軍閥、高級官吏等一切の「國家官僚」の經濟的地盤たりし事を想へば、特殊會社の株主會に華族が威權を張つてゐるは強ち驚くに足る事實ではなく、かゝる殘滓は日本資本主義そのもののうちに含まれる發展期を特徴づけたる一個の歴史的存在である。

しかも亦、歴史的存在たると同時に、彼等自からも、國家資本產業の發展につれて、蟬が殼を脫ぐやうに、時代と共に舊衣を脫ぎすてゝ本質的な發展を遂げてゐるのである。第一には地代に依存する大地主から、株式に投資して金利取得資本家となり、第二には金利取得資本家から產業資本家となり、また、政治機關の貴族層に於ける金融資本の政治代表になりすましてゐるのである。

古河、久原財閥には男爵中島久萬吉（公正會）久原には男爵伊藤文吉（公正會）がある。三井財閥には伯爵樺山愛輔（研究會）福原俊丸（公正會）安田財閥には子爵前田利定（研究會）男爵長松篤棐があるほか、日本石油には伯爵牧野忠篤（研究會）、ボルネオ護謨その他早稻田系產業には侯爵大隈信常、舊鈴木系の日本教育、大正生命には伯爵柳原義光（研究會）太平生命（安田系）には

伯爵二荒芳德(研究會)、東京電燈には伊東三郞（伯爵伊東巳代治の倅)、十五銀行には子爵西尾忠方(研究會)男爵小畑大太郞(公正會)等が重役席にゐる。

特殊會社には日銀監事として研究會の巨頭伯爵松平賴壽と公爵伊藤博邦(火曜會)鮮銀監事として伯爵奥平昌恭(研究會)興銀監査役として子爵八條隆正(研究會)臺銀監査役として子爵曾我祐邦、北海拓銀監査役として男爵三浦英太郞がゐる。

か丶る特殊會社の重役は、そのこと直接には華族資本家の利害を代表するのではなく、と言つて金融資本の利害をも代表するのではない。華族資本家それ自體としては、今日、現實的には何處に、か丶るほどの資本力があるか。十五銀行の破綻によつて、政治的、經濟的勢力は決定的にまで金融資本のために覆沒されたのである。これは十五銀行破綻前後に於ける貴族院を支配せる研究會の勢力を比較し、靜觀するならば明瞭である。

それにもか丶はらず封建的特權階級が、金融資本支配の特權會社の重役席の一部を占有し得るのは、金融資本の貴族院操縱政策の恩重に負ふところが多い。

重役賞與と重役の榮譽は、貴族院に對するまたとなき政治的利權である。

・華族資本家の大株主

		日本銀行	興銀	正金	滿鐵
侯爵	前田　利爲	二、三四〇株	四、五六〇株	九、一六〇株	—株
・	鍋島　直映	三、六〇〇	—	一、三〇〇	四、〇二〇
公爵	德川　圀順	二、〇〇〇	—	六二二	—
伯爵	松平　賴壽	一、四二〇	—	二、三五八	二、〇〇〇
男爵	川田　龍吉	一、二〇〇	—	一、三〇〇	—
公爵	島津　忠承	一、一〇〇	四五〇	二、四〇〇	—
侯爵	淺野　長勳	四六六	二、二五〇	八〇〇	—
子爵	秋元　春朝	—	一、二〇〇	二〇〇	—
伯爵	酒井　忠克	—	二、八五〇	五、〇〇〇	二、八五〇
侯爵	細川　護立	二〇〇	—	一、三〇八	—
公爵	島津　忠重	—	—	四、八〇〇	—
・	毛利　元昭	三〇〇	—	二、二〇〇	—

だが、日銀、正金に於ける×××、滿鐵、臺灣電力に於ける政府を除くなら、片手ほどの財閥とブルジョア群の持株が、株主會では壓倒的な勢力がある。が、しかし、國家資本トラストに迄、自からを形成せる特殊會社は、株式の數量などで支配し得るのではなくて、之れを支配し得るものは財閥金融資本群の政治勢力である。

例へばだ、重役制度の構成を見よ、總裁制度は政府任命で、頭取制度は株主會の推薦者から政府が認可するのである――例外として臺銀の頭取がある――總裁は法規上の獨裁官で、理事會の官制さへ必要としないのである。或る特殊會社の理事は不

當た後用にサインすることに、横を向いて判を捺したといふ挿話さへあるが、さうした理事の端役に至るまで、實際的には政府の内示によつて選出されるのである。

拓務省が拓殖局時代の滿鐵監督官で、突如として滿鐵理事に榮轉の任命を受けたものがあるが、これなどは川村滿鐵總裁が北京の競馬會社の發起人に署名した違法を摘發したために、政友會の政治勢力の支持と政友系樞密院顧問官の推挽で、口塞ぎの代償として滿鐵入りが出來たのである。監督官から特殊會社入りしたものには、臺銀總裁島田茂、東拓理事岡田信、北海拓銀頭取松本修、鮮銀理事色部貢等が現に在る。臺銀の銀行資本と鈴木商店の産業を結合せしめた中川小十郎なども元老の支持と鈴木商店の番頭の推薦によつて臺銀頭取たり得たのである。

かく總裁、頭取以下重役の任免は、政治勢力を支配する金融資本の、顎のしやくり方一とつで、黒幕のトバリのなかで決するのである。

特殊會社の總裁、頭取は、政權の移動、卽ち財閥金融資本團、個々の支配する政治勢力間に於ける政權のたらひ廻はしによつて任免しないと聲明せる濱口政府の下でさへ、政治的色彩のない五十嵐直三が、井上藏相のために正金を追放されたではないか。

外國爲替取組み高の六、七割を獨占する正金と、三井、住友、三菱銀行爲替係との市場鬪爭の激化しつゝある折柄、金輸解禁を控えて、これらの金融資本と、正金の五十嵐との間に、爲替政策に關して方針の對立をおこしたことは誰れでもが知つてゐることで、何にが、誰れが、五十嵐をさうさせたかは、明らかである。

特殊會社大株主一覽表

會社	總株數	株數	大株主
日本銀行	三〇〇、〇〇〇株	一四〇、八五二	内藏頭
		五、一六〇	安田財閥系
		三、六〇〇	侯爵鍋島直映
		二、二四〇	子爵前田利爲
		一、五四〇	三菱合名
		三、七六三	三井合名
		二、六八二	住友合名
		一、五三〇	野村合名
		一、八二〇	十五銀行
日本興業	一、〇〇〇、〇〇〇	二三、七五九	内藏頭
		六、九五〇	塚本同族
		五、〇〇〇	岡崎銀行
		四、六八〇	三菱信託
		四、五〇二	川崎貯蓄
		三、〇〇〇	日本産業
		四、五五〇	侯爵前田利爲
		六、九〇〇	共保生命
		五、〇〇〇	富國徴兵
		四、五二〇	帝國生命
		四、三七五	第一銀行
		一、五五〇	服部金太郎
		二、五五〇	淺野長勳
橫濱正金	一、〇〇〇、〇〇〇	一六、四一二	内藏頭
		二〇、〇〇〇	三井財閥
		九、二〇〇	東京貯藏
		七、七四七	東京川崎系
		七、〇〇〇	日本生命
		一一、〇〇〇	堀越角次郎
		八、九七〇	安田財閥
		六、一〇〇	若尾系
		五、五〇〇	愛國生命

		七、〇〇〇	塚本同族	三、五四二	侯爵池田仲博
		五、〇〇〇	第一銀行	二、〇〇〇	日本棉花
勧業銀行	一、〇〇〇、〇〇〇	七、七五〇	内藏頭		
		一六、九四四	侯爵鍋島直映	一三、一五〇	東洋生命
		一二、七〇〇	塚本同族	九、五八六	堀越角次郎
		八、一〇〇	侯爵前田利爲	八、〇〇〇	安田銀行
		五、〇〇〇	塚本保全	三、五〇〇	東京海上
		八、〇〇〇	和歌山縣	六、六九〇	熊本縣
		一、八八七	三井信託	一、五三六	三菱信託
北海拓殖	四〇〇、〇〇〇	五三六	内藏頭		
		八、九七五	北門貯藏	六、〇〇四	大倉系
		四、〇〇八	長谷川平内	一、六七二	帝國生命
朝鮮殖産	六〇〇、〇〇〇	九、〇〇〇	内藏頭		
		九、〇〇〇	岡山農工	七、二〇〇	西崎鶴之助
		四、二八〇	仁川米取	三、七五五	有賀光豊
		三、三〇〇	北門貯藏	元、一〇一	朝鮮貯蓄
		一七、七五四	朝鮮商銀	三〇、〇〇〇	漢城銀行
朝鮮銀行	四〇〇、〇〇〇	二、六〇〇	内藏頭		
		八、七〇〇	伊藤紀兵衛	二、〇〇〇	塚本同族
		二、〇〇〇	伯爵酒井忠克	二、三二〇	前川太郎兵衛
南滿洲鐵道	四、四〇〇、〇〇〇	二三、五〇〇	内藏頭		
		一四一、九六二	安田財閥	五三、八八九	三井財閥
		三七、四四〇	日本信託	三三、九三八	第一生命
		三六、〇〇〇	原財閥	三〇、〇〇〇	朝鮮銀行
		三三、八一五	正隆銀行	一九、八三〇	第一徴兵
		一七、一三一	早川ビル	一五、〇〇〇	第一銀行
		一五、〇〇〇	第一相互	一三、〇〇〇	服部金太郎
		一三、〇五〇	有隣生命	一〇、九二〇	大倉財閥
東洋拓殖	一、〇〇〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	内藏頭		
		九、一一〇	菱川合名	八、四四二	黒川商店
		七、四六〇	中谷庄兵衛	七、一五〇	高橋幸三

三

所謂「特銀」の諸貸高は昨年末三四億八千萬圓、株式、社債所有高一億五千三百萬圓である。所謂「特殊會社」なる東拓の直營産業資本は五千萬圓、貸付一億八千萬圓、社債、株券投資一千七百九十萬圓、滿鐵は直營産業の事業資本六億五千八百萬圓、培養線その他の貸付七千二百萬圓、有價證券投資五千七百萬圓に達する。これを以つても國家資本による特殊會社産業の規模のいかに廣大なるかを想見し得るのである。

このうち株式、社債投資高を表示しやう。

▲第一表 昭和四年末現在

		内、株式拂込高	同評價高
滿鐵	五七、六一四千圓	—	—
東拓	一七、九五二	—	—
興銀	四三、二五四	一二、三六	七、三三八
正金	五、五二〇	—	—
勧銀	五、四五三	一五九	一五九
臺銀	四七、八二九	六三、一五〇	三〇、八三〇
鮮銀	二九、八五七	三、七四九	六、八六二
殖銀	一、〇四三	—	—

備考、株式拂込、同評價高は昭和三年末の數字による、鮮銀、臺銀、東拓の整理會社は拂込みと評價の差額を絶對に公表しないために、四年度分は未だ入手出來な

い。右の整理會社は、從來名簿を一々發表しないやうである。一例であるかーを、ここに問ふ必要はあるまい。

▲第二表　主要なる子會社の株式所有高

		總株數	所有高
興銀	日興證券	二〇〇,〇〇〇	二九,六九〇
	白山水力	四〇〇,〇〇〇	八,〇〇〇
	國際汽船	一,六〇〇,〇〇〇	七六,七〇四
	東亞興業	四〇〇,〇〇〇	五四,〇〇〇
	共同汽船	—	—
臺銀	帝國人絹	四五〇,〇〇〇	二三〇,六八五
	朝鮮鐵道	一,〇九〇,〇〇〇	三八,九九〇
	日本製粉	三三一,五〇〇	六四,〇〇〇
	大日本鹽業	八〇,〇〇〇	四,〇六八
	神戸製鋼所	四〇〇,〇〇〇	約三五〇,〇〇〇
	華南銀行	五〇,〇〇〇	四,八〇〇
	鹽水港製糖	一,七〇〇,〇〇〇	—
	昭和製糖	—	—
鮮銀	朝鮮鐵道	一,〇九〇,〇〇〇	四九,七九一
	南滿鐵道	四,四〇〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇
正金	大日本鹽業	八〇,〇〇〇	三九,九六九
	日本火藥	五〇,〇〇〇	七,九〇〇

南滿洲鐵道

	總資本金(萬圓)	拂込高(萬圓)	總株數(萬株)	株式所有高(株)
南滿洲瓦斯	一,〇〇〇	九三〇	二〇	一〇〇,〇〇〇
同旅館	八〇〇	五五六	一六	一六〇,〇〇〇
同電氣	二五〇〇	二,二〇〇	五〇	四九七,〇〇〇
滿洲製糖	一,〇〇〇	八五〇	二〇	—
四平街取引所	五〇	三	一	四,九五〇
營口水道	二〇	一〇	四	六,九四
滿蒙毛織	三〇〇	一九五	六	[illegible]
滿洲紡績	五〇〇	一七九	一〇	一四,七〇〇
大連汽船	二,五〇〇	一,三七九	五〇	四九六,八〇〇
大連工業	五〇	二五	一	四,七八〇
大連火災	二〇〇	五〇	四	一三,七〇〇
東亞土木	五〇〇	一二五	一〇	四七,九五〇
日本精蠟	二〇〇	一二〇	四	三九,三〇〇
山東鑛業	五〇〇	一二五	一〇	四二,七八〇

東洋拓殖

	總資本金(萬圓)	拂込高(萬圓)	總株數	東拓所有株
鴻業公司	五〇	五〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
東省實業	一五〇	一五〇	三〇,〇〇〇	一四,六三五
北滿電氣	三〇〇	八〇	一四〇,〇〇〇	三三,三二五
山東起業	三二五	三二五	五〇,〇〇〇	二七,七七〇
滿蒙毛織	三〇〇	一九〇	六〇,〇〇〇	一三,五〇〇
南洋興發	二〇〇	一二〇	四〇,〇〇〇	四二,〇〇〇
海外興業	九〇〇	三六五	一〇〇,〇〇〇	二七,一〇七
朝鮮電興	五〇〇	一五〇	一〇〇,〇〇〇	四八,六〇〇
計	三,三二五	一,九六五	四三二,〇〇〇	二〇六,九六五

備考、東拓の所有株數は鴻業、東省、國華興業、海外興業の如きは全部、北滿、山東起業、朝鮮電興、滿蒙毛織の四分の一內外を占めてゐる。

第一表の興銀、臺銀の所有株は、その拂込資本高と評價された市場價格との間に興銀は六割七分、臺銀は四割九分の値下りだけの開きがある。

かゝる開きは、その後、鉄形に擴大されてゐる。

第二表に於て、興銀の日興證券、國際汽船、正金の大日本鹽

業、臺銀の帝國人絹、神戸製鋼、滿鐵の電氣、瓦斯、旅館、四平街取引所、營口水道、大連汽船、日本精蠟、東拓の海外興業、南洋興發、鴻業公司、東省實業等は、大株主としても壓倒的だが、事實上、管理、經營の實權を掌握してゐる。

然しながら金融資本の産業支配は、親會社、子會社の支配關係が、株式所得の方面からのみ、からみ合つてゐるのではない。

さきに述べた「特銀」の諸貸高三四億八千萬圓の大部分は、あらゆる産業線を脈搏つて流動しつゝある。勸銀、農工は、その特異的使命にもよるが、土地、建物に對して一〇億圓、勸銀、興銀は財團――興銀は工場財團が多い――に對して一億七千萬圓、貿易資金を供給する正金、鮮銀は工場製品、原料に對して七千五百萬圓、船舶に對して興銀は五千萬圓を、それぞれ貸付けて、産業支配網を擴げ、深めてゐる。これらは有擔保貸付だが、保證、信用による貸付はもとよりのことで、一般的な貸付の手段は、事實上の手形貸付であつて、利潤のうちから天引きに高歩な金利を搾りあげつゝ、また三ケ月毎に手形を切り替えつゝ、かくしてその産業の息詰るをまつて管理、經營の實權を奪ひ上げるのである。

我々は東電問題にからまる二たつの事實を指摘して置かふ。

三井銀行は東電の株主ではない。然るに池田成彬は何故に、東電の管理に「斷乎たる方針」を強要したか。井上藏相は東電から頼まれたのではない。然るに井上藏相は何故に、一私設會社の「減配」に斡旋努力を爲したか。

三井の東電株を擔保とする貸附金の株數は一八〇萬株だと世俗には推測されてゐるが、これは明らかに三井の所有株式ではない。だが、東電重役の産業管理權を充分脅やかすに、あまりある實勢力を、現實に示したのである。他方井上藏相は、國際金利の外資公債借換を控へて、東電の社債々權者たる英米の金融資本トラストから、これは又、池田とは反對に、脅やかされて、減配を斡旋せしめられたのである。

「金融資本は支配を要求する」それ故にこそ、井上が動き、池田がのさばり出たのである。

特殊會社の産業支配も、支配の廣さと深さは、擴大され、深化されゆくばかりで、臺銀の鹽水港、昭和製糖、興銀の日本共同汽船、正金の日本棉花の如きなど、貸付資本によつてそれへの支配が確立されたのである。

滿鐵の如きも、株式所有手段による支配産業より、七千二百萬圓に足りない培養線鐵路の借款による管理こそが重要である。これこそは、現在滿鐵王國の主體勢力の一基礎をなすものである。

滿鐵王國
- 本社
  - 鑛業
    - 撫順炭礦―投資一億〇五百萬圓
    - 鞍山製鐵―投資二千百萬圓
  - 鐵道
    - 委任線―安東―蘇家屯―一六一M
    - 支線―四線―五七
    - 本線―大連―寛城子―四三八
    - 借款鐵路
      - 四洮線―二五九
      - 吉長線―七七
      - 洮昂線―一四五
  - 附屬
    - 附屬事業―港灣、工場―投資八千萬圓
    - 傍系會社―五一社―投資七千萬圓

四

國家資本による産業支配の擴大、深化の過程には、必然にコゲついた不良貸を隨作する。已むなき犧牲であらう。

東拓は朝鮮肥料を大倉、東亞勸業を滿鐵に讓り、裕繁公司を解散した上に、北海道のブリ大臣日高榮三郎に對する九〇萬圓大阪の平林甚助に對する五〇萬圓を整理したが、鮮銀、臺銀の爆破的な整理は、すでに諸君の知るところである。

だが、前期末の鮮銀の株主總會に於ては、鮮銀と八千代生命、堤請六、小寺謙吉、久原財閥、佐賀炭鑛問題等の不良貸が問題とされ、なかにはその後の新たな問題さへ、頭をもたげたやうで、正金には日本棉花、その他新たにおこらんとする波頭が、

あるやうでもあり、無いやうにも見られることである。が、しかし、それに觸れることは、財界爆彈第一の障子穴に落ち込むことである。××資本トラストの傘の下には、××權力による保護の特權が儼然として、今日、最も露骨に、市場と言論を抑壓してゐる。

それ故に、ここでは特殊會社の一般的內容をその擬制資本價値の上に、露骨に、鋭敏に反映せしめる株式市場の現物値段を指表することにしやう。

指表に從へば、興銀、鮮銀、臺銀は、拂込みを遙かに割つて日銀の見返り擔保資格を喪失してゐる。正金は前年度の最低値段より一割安い。

また、この指表によつて特殊會社と財閥金融資本の三井、安田、第一の諸銀行との擬制資本價値との對比をなすは興味あることである。

	昭和四年度(十月迄) 最高	最低	昭和五年六月四日調
正金(百圓)	一二七・〇圓	一〇六・三圓	一〇六・七圓
勸銀(五十圓)	五六・六	四四・三	三七・六
興銀(五十圓)	四〇・〇	三三・六	三三・六
鮮銀(百圓)	五五・五	四五・五	四九・五
臺銀(百圓)	六〇・〇	三八・七	四〇・五

滿鐵(五十圓)	六九・〇	六六・〇	六三・五
三井(五十圓)	一〇八・九	八八・八	八七・八
安田(五十圓)	六七・三	五七・〇	五五・〇
第一(五十圓)	九七・八	八六・七	八〇・四

もちろん、かゝる株式に於ける擬制資本價値は、他愛もなく膨脹し、收縮もするが、工場、土地、原料等の現實資本は、生産の無政府的な擴大、增設によつて過剩資本として一定の限度、死滅すべく縮命的な運命にある。この死滅資本が、所謂、整理さる可き不良貸とされるもので、擬制資本とは本質的には相違する。

而してさうした不良貸とは違つて蓄積された現實的資本を、政治運動資金に引き出して、そうした死滅資本をそのまゝ内包させてをいたり、また、社債、預金部資金の一部を、政治運動資金に貢納して、さうした死産した資本のまゝを、現實資本のうちにぶち込んでをいたり、さうした最初から死滅資本なることの明白なる「不良貸」も亦、斷じて少くない。

政治支配を指導する金融資本は能ふ限り「××資本」から政治運動資金を捻出させやうとすることが、今日までの常識的な經驗である。選擧費用のよき源泉が、××資本トラストであつたことも、××資本トラストの產業に、かうした不良貸が過剩資本整理の機會に、最も多く吐き出されたことも事實である。

井上藏相の支出した選擧費百萬圓は、興銀と三井の貢納金だとされてゐるが、滿鐵と東拓はその「よき源泉」だつたのである。

議會に現れた東拓に關する質問

東拓會社は大正九年衆議院議員選擧に際し政府より選擧費用として四百五拾萬圓の提出を命ぜられ、土地買收の名目の下に之を支出したり、卽ち第四十二回議會の解散となるや、原首相は田中陸相、高橋藏相、野田遞相と共に選擧費の調達のため東拓に紙て陸軍間諜をなし居る支那人の名義の形式をとり、牧場用地として内蒙古中無人の地東ザロトカ、カイロ地方の何等價値なき土地百八十町歩を前記四百五拾萬圓にて買收したるが如き形式を取らしめて之を政友會の選擧費に充當したり、然も該土地たるや經濟的に使用する能はざる不毛の地にして此處に金參千萬圓の事業を計畫するが如き目論見書を實地調査の爲派遣したる陸軍中將吉田平太郎に作成せしめながら關東廳補助金五百萬圓の豫算削除を理由として該計畫を中止し東拓は前記四百五拾萬圓を全然損失したる。會社監督の任にある政府の此事實に對する所見如何。（大正十一年質問者、橋本喜造）

滿鐵の前總裁山本条太郎が東京で政府に之れも百萬圓を手渡さんとして、反對黨のスパイのために追ひしたはれ、果し得ないで別府で手交したといふ挿話さへあるくらひで、一々あばき立てる煩はしさに耐えないのだが、生産の無政府的增設、擴張からおこる過剩資本の整理、政治的不良貸からおこる死滅資本の整理、これに要する整理資本はそもく誰れが負擔せしめら

れるか。未だ曾つて國家資本トラスト企業の蓄積された剰餘利潤から一度だつて支出されたためしがあるか。トラスト利潤の「甘汁」は、トラストを構成する資本閥に配分してをいて、さて整理となると、國庫豫算外の負擔による國費が、集中された郵便貯金の預金部資金から、惜し氣もなく放出されるのである。

支那大陸にコゲついた特殊會社の西原借款は、一億四千三百萬圓の政府保證による興銀債權へ振り替えて、國民の負擔する國庫に背負はせ、また臺銀は一億〇三百萬圓、鮮銀は七千〇廿萬圓の預金部資金を現に只のやうに借り受けてゐるのである。

かく、特殊會社の整理は、××の名に於て、負擔するものこそは國民――一般民衆である。

五

一般民衆が、その双肩に重荷された特殊會社救濟のために濫費された國費は、日銀の損失補償のための五億圓、臺銀救濟のための二億圓、鮮銀、臺銀の震手損害補償のための一億二千萬圓の、震災と金融の恐慌克服のために支辨された整理資金である。

ブルジョア黨でさへ、これを、斯くあばいたのである。（傍點筆者）

「噫ニ聞キマスレバ、某々特殊銀行ヲ救濟スル爲ニ震災手形ノ美名ヲ藉リ、大穴ノアル長イ間ノ懸案デアッタ、震災ガナクテモ當然ニ整理ヲ要スベキ銀行、或ハ其銀行ヲ借款トシテ居ル某々ノ銀行ノ整理ヲナサルト言フコトハ、即チ震災ノ美名ヲ藉リテ之ヲナサルモノデアリマスカラ、吾々洵ニ不審ニ堪ヘナイ。私共ハドウセ係ガアル限リデアルナラバ徹底的ニヤリタイト思フ。何モ震災ト言フ名ヲ藉リナイデ特殊銀行整理法案デモ出サレタナラバ、誠心誠意協贊スルノデアリマス。唯々震災ノ名前ヲ藉リマシテ、パラツト之ヲ胡麻化シテ行クト言フコトハ政治ノ公明ヲ唱ヘル現内閣ノ仕振トモ見エナイノデアリマス。次ニ私ハ今回ノ所謂整理法案ト言ヒマスカ、其内面的背景ガ所謂大資本家ノ擁護トナリ、特殊銀行ノ擁護トナッテ、一般罹災者タル庶民階級ニハ洵ニ縁遠イモノデアリマス」（一月三十日、第五十二議會の速記錄――政友會、星島二郎）

「例ヘバ神戸アタリニアル所ノ大キナ會社、鈴木商店トカ言フヤウナ者ガ、數千萬圓ノ手形ヲ發行シテ居ル（「八千萬圓」ト呼ブ者アリ）八千萬圓デアリマスカ、サウ言フ手形ヲ持ッテ居ル、其八千萬圓ノ手形ヲ、是デ以テ割引ヲシテヤラウ、之ヲ帳消ニシテヤラウト言フノガ、此案ノ骨子デアルト言フヤウナコトハ、世間ガ言ッテ居ルノデアル、是ガ即チ此議會ヲ解散スルコトガ出來ナカッタ一ツノ原因ダナドト世ノ中デモ言ハレテ居ルノデアル、斯ク致シマシテサウ言フノヤウナ大商店ニ非常ナ利害關係ガアル、ソレデアルカラ其支配人トカ顧問トカ目サレルヤウナ人々モ、既ニ東京ノ一角ニ陣取ッテ、サウシテ一部ノ連中ヲ指揮シテ居ルト言フコトデアル、或ハ議員アタリモ關係ヲ有セラレルトカ聞イテ居ッタ」（三月四日、同速記錄――政友會、高橋熊次郎）

彼等の暴露は、「特殊銀行整理法案ならば誠心誠意協贊するの

であります」との立場から僞されてゐる。彼等はかゝる立場を斷じて踏みはづすことはない。政府と政府黨を支配する財閥金融資本圏に對する反對黨の他の財閥金融資本圏の利害の立場から「厭やがらせ」の曝露をなすにとどめて、だからこそ、結局のところは滿場一致だつたのだ。

特殊會社の整理、救濟は、ひつきようするところ、特殊會社の金融資本の浸透しつゝある産業を、國家資本トラストへ、召し上げ、没收する、産業の征服を意味する。そして結果はかゝる「支配を要求する金融資本」の意圖がまさに實現されたのである。そして又、かくて規模を擴大せる國家資本トラストは、金融資本の指導する××權力の直接的な支配の下にある、さうした特殊地位こそ、それは、金融資本支配のブルジョア政黨をして、政府黨たると在野黨たるを問はず××資本トラストの強化、擴大のために僞される特殊會社の整理、救濟に、徹底的な反對と曝露を遂行し能はないのである。

特殊會社は國家資本トラストのものであり、國家資本トラストは金融資本のものである。

國家資本トラストと特殊會社



初任給調べ

小汀利得

一

初任給を通して社會を見る。學校生活を振り返る。初任給と景氣不景氣、初任給と洋服代、最初に手にした月給の袋等々、初任給にからむロマンスは今日各學校の學生と、その卒業生とにハンドレッド・パーセントの興味を與へる。

初任給は明治の末期から今日まで、およそ三十年ばかり常に一着の洋服代に當るものとされて、冬服が二十五圓で出來る時には、學校出の事務員の初任給の相場は二十五圓であり、其後三十圓となり、世界大戰中に一躍八十圓となり、今日では大抵六十圓乃至七十圓であつて、彼の一月の働きは普通の洋服二着に化けてしまふのを常とする。

尤も洋服代に有りつき得るのは、學校出の何割かに過ぎないので、實はその初任給の袋を手にすることさへも、多くの羨望の的になる。

二

何しろ全國大學專門學校卒業生の就職割合を見ると

年次	卒業生數に對する採用申込數の割合	就職率
大正十二年	一一〇・〇%	七九・八%
同十三年	九五・〇	七五・七
同十四年	八〇・〇	六六・六
同十五年	六二・〇	五九・〇
昭和二年	六八・三	六四・七
同三年	五四・二	五三・九
同四年	四六・二	五〇・二

そして之れを更に學校の種別に從つて見ると、昭和四年度で理工學校の七十六パーセントが最高で、次は師範學校の七十パーセント九、醫藥及び齒科の七十パーセント五で、政治、法律、經濟及文學は三十八パーセント一で僅かに女子專門學校の三十一パーセント九の上に居るに過ぎない。

（ニ）大學專門學校卒業生就職率

學校別／年次	大正十二年	同十三年	同十四年	同十五年	昭和二年	同三年	同四年
法經文	七〇・〇%	六六・〇%	五五・〇%	五二・〇%	六五・七%	四六・五%	三八・一%
理工	八〇・〇	八六・〇	八〇・〇	七九・〇	七六・三	七五・五	七六・〇
農林	七〇・〇	七〇・〇	五八・〇	六一・九	六〇・七	四九・五	五八・六
醫藥齒	九〇・〇	八五・〇	七六・〇	五九・〇	七五・一	六九・一	七〇・五
師範	一〇〇・〇	一〇〇・〇	九七・〇	八〇・〇	八九・五	八六・〇	七〇・九
技藝	—	—	四九・〇	三九・〇	三二・三	五三・〇	四〇・三
雜種	五五・〇	四一・〇	—	—	五六・八	五三・六	六八・五
女子專門	一〇〇・〇	一〇〇・〇	三三・〇	四八・〇	七七・六	五六・〇	三一・九
合計	七九・八	七五・七	六六・六	五九・〇	六四・七	五三・九	五〇・二

右の中で昭和四年度の卒業生の就職先について見ると、會社が三十二パーセント七で最高位を占め、第二位が學校の二十二パーセント二、官公署の十九パーセント四、病院の十パーセント七、個人商店工場五パーセント七、銀行四パーセント八、新聞雜誌社一パーセント三であつたが、今年の卒業生については外のところは、まだ判らないが官公署の就職率は十パーセント四と去年に較べて一擧九パーセント方減つて居つて、内閣、宮内省、文部省、海軍省、會計檢査院、關東廳及び樺太廳の七官廳は一人も採用しなかつた位だから、他の學部科はいざ知らず政治法律、經濟、文學方面の就職率は二十パーセント前後に落ちて居るだらう。

◇官廳高等官見習者採用狀況

官廳名	本年採用 申込者數	本年採用 採用決定數	前年採用 申込者數	前年採用 採用決定數
大藏省	一四五	七	二四〇	三三
農林省	八八	六	二五七	七九
商工省	一八七	八	三三四	二五
遞信省	一六五	六	一九三	五二
鐵道省	三九八	一〇	七八五	二六
朝鮮總督府	一二五	一七	一九七	一二
臺灣總督府	四四	八	—	—
司法省	三六八	一〇八	—	—
陸軍省	一三	一	四〇	二
外務省	一五七	八	—	—
內務省	四四〇	五五	四八	四三

去年と較べても今年の採用者數は激減して居る。右採用決定者の內譯は官立大學卒業生は百八十九名、私立大學同三十六名、大學以外九名である。

三

そこでいよ〳〵初任給調べに入るが、近頃は方々に資本家團體が出來て、他の振合といふことを研究するやうになつたので、段々接近して來たが、それでも千差萬別、官廳は相變らず官學偏重の弊が改まらず、同じ年限勉强をし、そして高等試驗を何等のハンデキヤツプなしにパスし、その上に前の表に現はれたやうに十人に一人宛で、しかも採用の割合も特に私學が辛いのだから、公平なる第三者から見れば、あべこべに私學出身者を高くしてもいゝと考へられるのが普通である。

◇官廳採用者官私大學別初任給

學部		最高（圓）	最低（圓）	普通（圓）
法學部	官立	一三三	六〇	七五
	私立	八五	三三	六五
經濟學部	官立	一二〇	五〇	七五
	私立	七五	四五	五五
文學部	官立	一三五	六二	—
	私立	一二〇	三五	—
工學部	官立	一三〇	八〇	一〇〇
	私立	八四	六七	八五
理學部	官立	一〇〇	八五	—
	私立	—	—	—
農學部	官立	一〇〇	七〇	—
	私立	七五	五〇	—
醫學部	官立	二〇〇	五〇	一〇〇
	私立	—	—	八五

これは昭和四年の統計であるから、今年はこれより幾分低下して居るものと見なければなるまい。

そして私學出身者に對して鐵道省で特に差別待遇を與へようとして、局長會議の議題にまでなつたことは、當時各新聞に報導されたところである。

しかし同じ官廳でも司法省だけは、官私によつて初任給の差別をしない。

尤もそれは大正七年十二月二十日以來のこ

とに區し、それまでは官私に極端な差別待遇をして居た。すなはち明治四十三年三月二十六日の勅令百五十二號に依り、前の勅令が改正されて、豫備判檢事には七百圓以内の年俸を給することを得となり、實際はその範圍内で年俸六百圓を給していゝこととなつたが、實際の初任給は帝大出の試補には年俸四百二十圓、私學出には年俸三百圓を給して居つた。これは全然俸給令に基づくものでなく、大臣の自由裁量で差別をつけて居たのである。

この差別待遇が大正七年十二月二十日に、全然撤廢されて官私大學一樣に年俸五百四十圓となり、次ぎに大正八九兩年中は、世界大戰による好景氣で臨時手當を給して居たのを九年十二月勅令五百六十九號によつて本俸に繰入れ、司法官試補には千百圓以内の年俸を給するを得としたが、實際は千圓宛の初任給を出して居た、それが今年からは百圓下つて九百圓となつた。

今年から九百圓に下げたのは、去年檢事連に反對されて引込めた、官吏一割減俸案をその儘實施して居る。これは恐らく今年採用者は減俸でなく、最初から標準を低下したのだから交付さ[illegible]いと云ふのだつたらうが、試入の試補諸が一割減らされたのを見て、去年の秋反對運動のトップを切つた先輩檢事連が苦笑して居る。

餘談はさて措き、司法省が大正七年十二月に、官私出身者の初任給に差別待遇を廢したのは、一寸考へると餘程の英斷のやうだが、實は英斷でもなんでもなく、單なる經濟上の理由から來て居ることは面白い現象だ。それはもと〳〵司法官は行政官に較べて、待遇が惡いので希望者が少いところへ持つて來て、世界大戰當時の好景氣時代、各銀行會社が大學卒業生を、待合へ連れて御馳走をしたり、同窓の先輩を通じて二年も前から學費を出してやつたり、入社と同時に洋行を約束したりして、頻りに誘惑を試みて居る時期であつたので、羽振りのいゝ官學の出身者はもとよりのこと、私學出身と雖も餘つ程の木念仁でなければ、いきなり司法官試補なんてものに、ならうとは考へなくなつた。

すなはち浮世の好景氣は、閑寂廳司法省に人材拂底の恐怖時代を出現した。そこで何等根據のない官私差別待遇を廢して、せめて私[illegible]は入れたら[illegible]動機なつた。

四

民間はどうか？まづ重なる時間、銀行、會社について一應調べて見る。

◇三菱財閥全部

(一)官私大學、專門學校出身者は技術事務の別なく一切　七十圓

(二)中等程度の學校は甲種乙種を問はず又農工商業、中學一切無差別に　三十五圓

外に　月五圓の宅料と一年に三ヶ月位の手當がある。

◇三井銀行

(一)大學令による大學　七十五圓

(二)專門學校令によるもの　六十五圓

外に普通賞與一年約四ヶ月、生命保險料金の補助等がある。

◇三井信託

(一)慶應、商大、帝大　九十圓

(二)早稻田　八十圓

外に半期三ヶ月の手當があるから、帝商慶の出身者の初任給は百三十五圓になり、日本銀

行と共に、法經學部出身者初任給の旗頭である。その代り昇給は二年に一回だから、必ずしもさきへ行つて他會社とそれ丈の開きがあるかどうか判らない。

◇三井物産

(一)帝大工學部藥學科　八十七圓
(二)帝大他學部　七十三圓
(三)商大　同　上
(四)私立大學工學部　同　上
(五)私大本科(工學部を除く)　六十九圓
(六)官公立高商、高工、外語、官公立商大專門部　五十八圓
(七)私大專門部　四十八圓
(八)甲種商業　三十七圓以内

物産には有名な一錢三厘の普通賞與がある。これは銀行その他三井系事業に、大體共通だが、月給一圓につき一日出勤賞與一錢三厘の割で支給されるので、一年中缺勤なしで出ると恰度三ケ月九分某で、かれこれ四ケ月分が貰へる。月給の上りつ振りは入社の翌年からで、月給百五十圓未滿は年一回一割以内で、百五十圓を超えると一年置きに月給の一割以内あがる。

◇日本銀行

(一)帝大、商大　年收月額　百三十五圓
(二)私大、高商　同　上　百十五圓
(三)私大專門部　同　上　九十五圓
(四)甲種商業　同上　六十四圓―七十四圓

日本銀行は、いやしくも日本銀行の行員として採用した以上、生活に顧慮させないといふので、之れに匹敵するものは三井信託あるのみだ、同行の初任給の勘定はなか〳〵兇倒で右表中第一項の帝大、商大が月收百三十五圓で、月給は七十二、三圓といふところだ。何でも日本銀行は月給が百圓ならば、之れに臨時手當が四十圓、毎決算期の半期手當が月八十圓、これ等は八月と二月との總會のあとで貰ふので、年末には年越の手當として月給本俸の百五十パーセント、すなはち百圓の月給取りに百五十圓の年末手當を出す。

◇横濱正金銀行

(一)帝大、商大　五十九圓
(二)商大專門部　四十九圓
(三)早大、慶應、官立高商　四十五圓
(四)他の私大　三十五圓
(五)私大專門部　三十一圓
(六)六年制甲種商業　三十圓
(七)五年制甲種商業　二十六圓

正金銀行といへば、外交官と共に外國を飛び廻つてロンドン、ニユーヨーク等世界社交界の花形のやうだが、それは千人に一人、之等支店の支配人となつた曉のことで、正金の支店は世界の田舍たるアジヤ、アフリカ、南米等の港に多く、ロンドンやニユーヨークへは幾人も行けるものでない。おまけに年來の希望が實現してロンドンやニユーヨークへ行けても、月給が安いので場末の家根裏に下宿して、月に二度宛故郷に殘した新妻から『君戀し』と綿々の情を訴へて來る、本人が忽ち猛烈なホーム・シツクになつて、極度の神經衰弱、語學の勉強どころか、晝間の銀行の事務も漸やく追つつけて行くやうになつて、支配人から『君近頃どうかしてるね』と恐い眼をされるやうになる。

其點では反つて、田舍町へやられた方が呑氣で勉強も出來る。現に頭取の兒玉謙次氏や、最近惜まれながら、常務の地位を去つた五十嵐直三氏は、上海やボンベイで後年の基礎を築き上げた。

一體爲替銀行といふ奴は、世界中を廻らされるから、家庭的には極めて惠まれない、現にイギリスの爲替銀行たる、ホンコン・シヤンハイ銀行や、チヤーターード銀行では、特に行員の採用に當つて十年間妻帶しないことを條件とする位だ、もつともイギリスでは大部分小僧から取るから、採用の時は十八位で十年間妻君を貰はなくても困ることはない、ところが日本では大學出が多いから二十五六でこの上十年女房が持てないと來ては、爲替銀行は久米仙以上の仙人でなければ入れないことになる。

◇日本勸業銀行

(一)大學令による大學(官私無差別)　七十圓
(二)專門學校　五十五圓
(三)各種中等學校　三十五圓

資格は(一)(二)が採用と同時に書記、(三)が書記補で、外に書記は一年に七ヶ月分の賞與があり、書記補は同じく五ヶ月の賞與がある。

◇住友財閥全部

(一)帝大・商大　八十圓
(二)早稻田、慶應　六十五圓
(三)地方高商　六十圓
(四)中等學校　三十五圓

住友も三菱と同じやうに、事務員も技術者も差別はない、賞與は月給の四割で、昇給は採用の翌年は一齊に五圓、次ぎの年は十圓で、百圓を超えると一年に十五圓上る。

住友は御大湯川寛吉氏が官僚出身であるので、極端な官僚風、今でも月給が減る程度まで行くと、住友家の紋付の羽織を下し置かれるのだから、つまらないことだが骨のある人間はこんな昔ながらの家來見たいな取扱は受けたくないから、結局人材が集まらない。

尚ほ職員には官吏見たいに等級があつて、

(一)四等職員　三十圓—百二十圓
(二)三等職員　七十一圓—二百二十圓
(三)二等職員　百六十圓—四百五十圓
(但し特に七百圓まで昇進の途がある)
(四)一等職員　四百五十圓—一千圓
(五)高等職員　八百圓以上

右の中一等職員といふのは、住友全事業中で三十何人しかなく、高等職員となると現在八人しか居ない。だから合資會社、銀行、信託、保險、鑛山に居並ぶ澤山の重役でも高等職員てのは一社に一人も居ない場合もある。

◇野村銀行證券會社

(一)官立大學　八十五圓
(二)私大・高商　八十圓
(三)甲種商業　四十圓

手當は半期三ヶ月だから、一年には月給の半分、昇給は平均十圓位特別賞與がある。

◇安田財閥全部

(一)帝大商大　七十圓
(二)早大慶應　六十圓
(三)地方高商　五十圓
(四)甲種商業　三十五圓

賞與は年二回で八ヶ月、その外晝飯を給したり、一年一回夏冬交互に先代善次郎翁以來傳統の紺サージの洋服を出したりするから、かれこれ月給の倍になつて、初任給としては割は惡くない方だ。

たゞ例の智慧の輪のバッヂを、紺サージの服につけて居ては、一見してハハア安田か？と判るし、又鐵道省の下つ端役人見たいに、夏冬紺サージと來ては洒落者は少からず參るらしい。

◇鐘淵紡績會社

(A)工務員月收

(一)帝大工學部　百圓強
(二)高工、高等蠶糸六十四圓―七十六圓強
(三)府縣立工業　五十圓　五十八圓強

(B)事務員月收
(一)官公私各大學　七十三圓強
(二)同各專門學校　六十四圓強
(三)甲種商業　四十二圓強

◇東京電燈會社

(一)帝大、商大　七十圓
(二)早大、慶應　六十五圓
(三)大學令による他大學　六十圓
(四)商大、專門部、高商　五十五圓
(五)早大專門部、慶應高等科、私立高商　五十五圓
(六)早慶以外の專門部及早大附屬
專門學校　四十五圓

以上が事務員で書記、技術科出身者は
(一)帝大工學部　八十圓
(二)早大理工學部　七十五圓
(三)高工　六十五圓

◇東京瓦斯會社

(一)官立大學　七十五圓―八十五圓
(二)私立大學　六十圓―七十五圓
(三)官立專門學校　六十圓―七十五圓
(四)私立專門學校　五十圓―五十六圓
(五)中等學校　四十五圓內外

待遇は官立大學、專門學校、慶應早稻田出身が職員、その他は雇員、昇給は入社の翌年からで職員六七圓、雇員三四圓

◇東邦電力會社

(A)事務員
(一)大學令による大學　六十五圓
(二)私大專門部(四年制)　五十五圓
(三)地方高商(三年制)　五十圓
(四)中等學校　三十四圓―四十圓
(五)高等女學校　二十三圓―三十二圓

(B)工務員
(一)帝　大　七十圓
(二)早　大　六十五圓
(三)高　工　五十五圓

東邦は今年から五圓宛初任給を引下げた。

◇三　越

(一)帝大商大　七十五圓
(二)早大、慶應　六十五圓
(三)高商　五十五圓
(四)甲種商業日給一圓五十錢(月四十五圓)
(五)高女　同上一圓二十錢(月三十六圓)

日給と云つても、缺勤しなければ公休日の分は貰れる。

五

民間で全然官私の差別をして居ないのは、三菱と三井銀行と勸業銀行だけだが、三菱が事務員技術者を通じて專門學校以上全部を劃一にしたのは、二年前で社長岩崎小彌太男がこの制度を創め、廣く人材を天下に求める爲めにやつた時には、帝大出身の技術者は非常に反對したが、先輩の下に情實で入ることを欲するやうな意氣地なしは、烈しい三菱の試驗には通らないので、一昨年は反つて有爲の士が多く集まり、しかもその中からたつた一割餘りを採用した丈だつたので、さきに官學から人材が來なくなるといつて、反對した技術家出身の重役連は、社長の前に頭が上らなかつたさうだ。

又差別撤廢してる勸業銀行では現在官立大學出身者と私立大學出身者が、百六十人ばかりでほゞ同數だが、年々の採用數を見ると昭和二年までは官立八十七人、私立三十八人で

あつたのが、三年度には官立六十八人、私立六十七人となり、同數となつた。三井銀行は、官立の二百八人に對して、私立二百四十七人が現在職員數で、鐘紡も官立の二十九人に對して、私立百二十九人であるのは、池田成彬、武藤山治、兩氏が私學たる慶應の先輩である關係からであらう。

初任給は如何によくとも、日本銀行の行員となつて、同行の高等官たる調査役になり損つたら、これ位慘めなものはない、けだし日本銀行では登龍門は洋行で、それから歸つて調査役となればもう占めたもので、年收も直ちに五千圓位になるが、不幸にして調査役になれなかつた者は、クラス・メートが總裁となり大臣となつて居る時に、年收三千圓位の書記で暮し、一生をそれで終らなければならない。しかも食堂まで書記のは調査役以上のそれとは違ふから、情ない。もつとも洋行しないでも極めて稀れには調査役になれる。現在唯一のその例が理事の清水賢一郎氏であるが、之れは絶後で、決して先例にはならない。だから初任給だけに眼くらんで日銀に入つて、そこで三四年の中に『ロンドン（若しくはニユーヨーク）へ出張を命す』の辭令が頂へなかつたらばもう一生は眞暗である。

『失業體驗記』原稿募集

世界の地圖面は、殆んど眞黑だ。
失業氾濫の怒濤は高い。

この世界的不景氣風の吹きまくる眞只中にあつて、現代我國に於ける暗黑なる生活層は、刻々とその重みを加へて行く。

肌をつんざく寒風は、茅葺のあばらやを以ても防ぎ得るが、防ぎ得ぬは今の世に吹き荒ぶこの不景氣暴風だ。

本誌乃ち茲に見る所あり、失業地獄の諸相を具體的に世に示さんがために、將又救濟策への積極的暗示のために、普くその體驗記を募集す。
奮つて投稿せられんことを待望する。

◇投稿規定

一、四百字詰原稿紙十枚
一、〆切七月五日
一、發表本誌八月號
一、宛名は中央公論編輯部、必ず「失業體驗記原稿」と傍書されたきこと。
一、原稿は返附せず、但し返送希望者は返送料封入されたきこと。
一、掲載の分には、薄謝金五拾圓を呈す。以上

六月十日

中央公論編輯部

貧富戰と男女戰

三十版

堺利彦著

四六判紙裝 三百二十頁 定價一圓二十錢 送料内地十二錢

此書の主眼とするところは、現時の社會組織の缺陷と生活不安の原因を摑み出して親切にこれが禍根を糺明し批判したところにある。ともすれば頑くなゝ理論闘爭に終始しようとする社會問題も、此の人の卓拔な識見と老練な筆致によつて痒いところに手の届く名醫の診斷書となつた。誰が讀んでもよくわかり、誰が讀んでもなるほどと肯づかしめられる。

文學的戰術論

廿五版

大宅壯一著

■定價一圓五十錢■ ■送料内地十二錢■

四六判上製 總布裝函入 四百八十頁

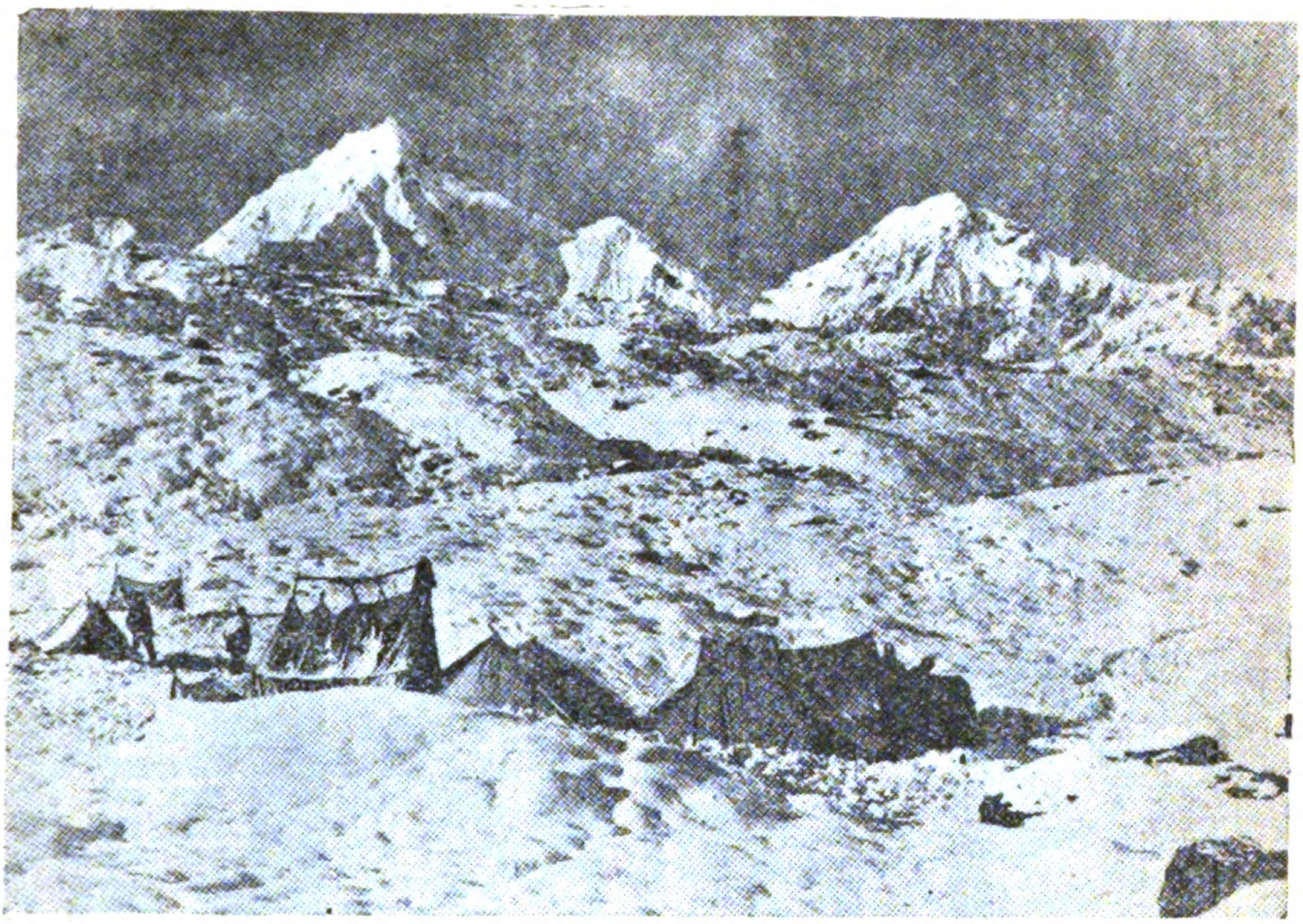
何等の豫備智識なくして資本主義社會のカラクリを不合理をハッキリと理解させる、嚙んで含めるやうな無產者讀本だ。

これは文學の戰野に於ける階級的技師を以って任ずる彼の處女論說集、戰鬪的文藝批評の指針だ。朝に一城を拔き夕に一壘を屠り僅一年にして文壇を席捲し、今日の批評壇に大宅壯一の旗の飜つてゐない所はない。階級戰裡に文筆を以て戰はんとする者は讀め

東京驛前丸ビル

中央公論社

振替東京三四番



カンチエンジユンガ（二萬八千百五十フヰート）東方ヅエム氷河より望む・左方のピークはシニオルチユム

アルプスからヒマラヤへ

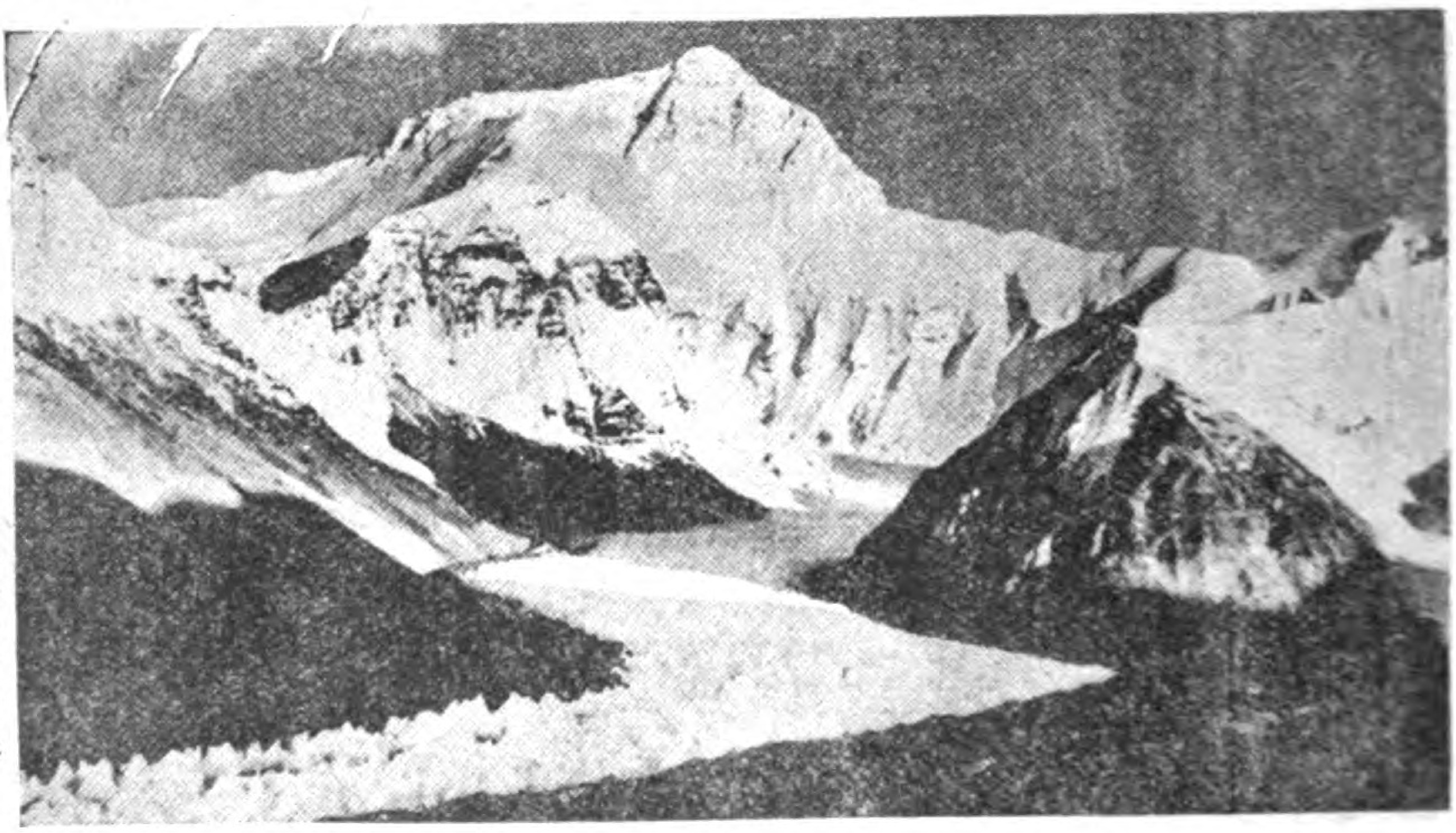
藤木九三

一

南北の兩極地が到達せられた今日において、わが地球上に殘された最大な謎——未知の領域——とされてゐるブラック・スポットは、いふまでもなく『世界の屋根』と呼ばれるヒマラヤの大山岳地帶である。そこには他の大陸の何處にも見出し得ない二萬四千フヰート以上の標高を有する山岳が五十座以上に達してをり、更に二萬フヰート以上のものに至つてはおそらく一千座を超ゆると云はれてゐる。そしてこれらの高山群に向つての登高は、千八百十八年にキヤプテン・ゲラルドがレオ・ポルギユル峰を攀ぢて一萬九千四百フヰートに到達したのを濫觴とし、爾來一世紀を經過しながら未だに二萬五千フヰート以上の高峰は一座も登頂を許してゐないのである。この間、前後三回に亘つて行はれたマウント・エヴエレスト（二萬九千二フヰート）の登攀は、第一回遠征に際しケラス博士が途上病を得て殪れた外、第二回には大雪崩のために七人の強力が命を斷ち、最後に行はれた千九百二十四年にはマロリー、アーヴインの二氏が酸素吸入裝置を携行して二萬八千二百三十フヰートに達し、頂上まで餘すところ僅かに七百フヰートの地

點において、折柄吹き起つた吹雪に包まれて姿を消した儘遂に不歸の客となつて終つた。爾來エヴエレストの登攀はマロリー、アーヴイン兩氏を初め幾多の犧牲者に對する復讐の意味——といふよりは人類の本然的な意志の表徵として——においても是非とも敢行せらるべく期待されてゐた。しかるに拘らずエヴエレストの第四回遠征が實現される以前において、突然、世界の視聽を集めてツーリツヒ大學教授デイレンフルト氏をリーダーとする瑞西、獨逸、墺太利、英吉利の四ケ國人より成る國際登山隊が組織され、カンチエンジユンガ（二萬八千百五十フキート）の登攀を企て今や『世界の屋根』において人と自然との激しい爭鬪の場面を展開しつつあるのである。

カンチエンジユンガ登攀の意義といつた風の精神的、または學術上の問題は別として、これをスポーツ的な登山の立場からして最も興趣をそそるものは、謂はゆる『アルプスからヒマラヤへ』向つて進出し展開せんとする傾向の最尖端の一表示であり、同時にアルプスを舞臺として幾多の歲月と、貴い犧牲や經驗を積んで發達した雪、岩、氷に對する登山



マウント・エヴエレスト（二萬九千二呎）
ロンブク氷河より九哩を距てた遠望

技術の精髓が、今こそ「時」を得てその眞價を發揮すべき時期が到來したといふ點に存するとも見られる。

二

カンチエンジユンガの登攀といはず、今日行はれる一般ヒマラヤの登山にあつては、これを單にスポーツ的登山と解する事は多くの誤解や矛盾が生じる。また事實において、それは登山といふよりは各種の學術的研究を附隨した「探檢」の濃厚な雰圍氣を伴はつて行はれなければならない。そして今日のカンチエンジユンガ遠征隊の中にも錚々たる登山家の令名を有すると共に、地質學者として知られてゐるシユナイダーおよびマルセル・クルツの兩氏が參加してゐる。前者は千九百二十九年のアライ・パミール遠征に參加してをり、後者は雪、氷および雪崩に關する權威者であると同時に現代の有する最も優秀な登山家として、殊に冬期登山においてはニユージーランドの最高峰マウント・クツク、およびタスマンの兩峰を初め幾多の顯著な記錄を有してゐる。

由來山岳は、平面的な緯度の關係を立體的に置き直したものと見ることが出來る。で、ヒマラヤ探檢と極地探檢とは多くの相關、または共通性を有することは當然である。しかしながら、其の半面において平面と立體との根本的な相違が存在することも肯定せられねばならぬ。その最も著しいものは高處における稀薄な空氣の人體に及ぼす各種の影響である。そして當然考へられることは酸素吸入裝置の携行といふ問題であり、同時にそれを非難する意味において陳べられるマロリー、アーヴィン二氏の危難の原因についての推測である。すなはち、エヴエレストの最後の峰頂を目と鼻の間に仰ぎながら二氏が行衞不明となつたのは、かゝる高處における危險な登攀に際し過重な酸素吸入裝置を荷負つてゐたがために足を滑らしたのではないか、といふ疑問が投げられた事である。そして最近の學説と經驗からして、登攀の行路において適當な馴致(アックリマタイゼーション)を行つて徐ろに登高する時は、酸素吸入裝置を携行せずとも二萬八千フキート以上に到達する事は不可能でない事が證明された。その事實は第三回のエヴエレスト遠征に際しノルトン中佐、ソマーヴエル氏の二人は、共に酸素を用ふることなく頂上を距る一千フキート以内にまで迫つた。そしてソマーヴエル氏は自らの作つた貴重な記錄と經驗からして次のやうな斷定的意見を述べてゐる。

『酸素吸入裝置を携行することなくとも、人は好くマウント・エヴエレストの頂を極め得ることを信じる。最初自分は、酸素の補吸なくしては二萬五千呎以上の登高は不可能だと考へてゐたが、高度馴致の事實を體驗して以來、むしろ酸素裝置を携行しない方がより多く登頂の可能性があることを信じるやうになつた。』

今度のカンチエンジユンガ登攀隊が果して酸素吸入裝置を携行するや否やは、過去のエヴエレスト遠征における經驗と暗示に徴して可成り重大な注意を惹く問題であつた。もちろん登攀隊は酸素補吸の著しい效果を否定するものでは勿論なかつたが、如何にしてもその裝置を携行する過重負擔に堪えられない。しかも、それは單に勞力問題といふよりは、時と場合却つて生命を脅かす危難の原因――マロリー、アーヴィン二氏の運命に徴して――であり得るからである。すなはち必要は認めるが携行が困難だといふ結論に到着したのである。そこで、デイレンフルト教授は種々研究の結果、パテントを得たある種の化學製劑を携行することとなつた。それは直接登行に際して使用するものではなく、休憩時または就眠に際してテント内で是れを熱すれば多量の酸素が發生し、登攀者はそれを吸入することによつて安眠を得、または速かに氣力を恢復し得るとされてゐる。何れにしてもこの化學製劑の效果如何は、今回のカンチエンジユンガ登攀にあたつて初めて經驗される興味ある實驗の一つである。

三

更に裝備(equipment)の問題となると、劇しい寒冷、ことに高い山稜傳ひにおける風の狂暴を顧慮して精密な防寒と防風の裝置が施こされねばならない。ヒマラヤの吹き曝らしの高い尾根筋の登行に際しては、人はしばしば肉體的、精神的にほとんど精力が消耗し、夢遊病者か痴呆性のやうに記憶が朦朧となり魂の抜けた形骸のやうに無神經になるといは

れる。そして登行者はたえず錯覺に惱まされ、時には自分が登つて來た方向や位置をさえあやまる。そして、かうした際の唯一の避難場處の所在を索める氣力すらもなく、またはテントに歸るべきをも忘れて茫然と立ちつくすなどの怖るべき危難が待ち伏せするといはれる。中でも、もつとも現實的な脅威としては雪、岩、氷の「なだれ」や吹雪がある。エヴエレストの第二次登攀に際しては、ノース・コルの氷壁下において七人の擔夫が犧牲となつたのはこの怖ろしいヒマラヤの「なだれ」であつた。今度のカンチエンジユンガで起つた最初の犧牲も、絕壁の登攀に際して襲ひかかつた氷の「なだれ」にシユナイダー氏および擔夫チエタンの兩名が浚はれ、遂にチエタンは命を斷つたのである。そしてまた、かのマロリー、アーヴイン二氏がエヴエレスト二萬八千二百三十フヰートの位置において、永遠界なる天上への登行の最後の英姿を掻き消したのは、あだかも頂稜をかすめて吹き起つた一陣の吹雪であつた。



K₂（二八・二七八フィート）サヴイア氷河から望む

かうした自然力の狂暴に堪えて登頂を企てるには、あらゆる科學的な智識と、經驗の合理的研究により萬全を期して敢行されねばならない。と同時に服裝や登山用具についても嚴密な顧慮が必要とされる。例へば凍傷に關する一事について考へて見ても、單に一本の指先に輕微な凍傷をうけたにしても、それが全身靈の緊張を必要とするが如き場合にあつては、取りかへしのつかない重大な故障となる。そして手袋の一部に、眼に見えないほどの微かな孔があつたにしても、それが直ちにパーテイ全部の意氣に影響し、登攀の成否に關する重大性を持つこととなる。この裝備の點に關し、今回カンチエンジユンガ登攀隊のリーダーであるデイレンフルト教授は、あらゆる自己の經驗と研究を基礎として萬全を期して準備してゐる。氏は恰も歐洲大戰に際してはスヰスの山案內者達から組織されたアルプス守備隊の隊長であつた關係から、冬期における高山岳地方に於ける服裝や給養に關する特殊な研究を積み、一方過去に行はれたヒマラヤ登攀者の經驗を參考して遺憾なきを期したのであつた。そして

氷の山稜にテントを張るための爆破用ダイナマイトや、氷と岩の絶壁を攀じる際の支持として千フォート以上のロープ、およびロープをからますために三種類のピトン（環の付いた登山用金具）などを用意してゐる。

四

私は今ここで、アルプスやヒマラヤの探險時代に關するパイオニーヤ・ワークの業績を說くことを罷め、登山の對照としてのヒマラヤとアルプスの持つ特質といつた風のことを比較して述べてみたい。元來アルプスは『歐洲の心臟』と呼ばれてゐるやうに伊、佛、瑞、獨、墺の五ケ國にまたがり、そして地形上ヨーロッパ大陸の中央部を占めて一大塊狀をなした山岳群（massief）である。そして大陸そのものは、アルプスの高山岳群に倚りかゝつた形で四方に擴がつてゐる。もちろん、これ等のマッシーフも考へ方によつては山脈（range）の連亙交錯であるとも見られるが、ヒマラヤの大連亙と比較して考へると、この二つの間には明らかにマッシーフとランジの特異性が發見される。しかもヒマラヤは、古くからアラビヤ人の間で『地球の石帶』（The Stony Girdle of the Earth）と呼んでゐる事實も、たしかにこの山脈的形狀を說明した適切な言葉である。そしてアルプスは、東方ハンガリーに起つて地中海に終るまで約六百マイルの長さであるに對し、ヒマラヤは印度とチベットの國境を走つて、それ自身のみで延長千五百マイルに達し、更に西方ヒンズ・クーシュ山脈を加へると二千マイル以上に及び、その幅においても三百マイルを占めてゐると云はれる。更に有名な地質學者 Mackay 氏によると、ヒマラヤの一支脈と見られるコンロン山脈は支那大陸を橫切り、海を越えて臺灣にまで及び、西はヒンズ・クーシュからカウカサスに連り、更にアルプスからピレネーに及んでゐると說き、眞に『地球の石帶』である事實を承認してゐる。

五

ヒマラヤの本體そのものは、地球の胴中を繞る石帶の『結び目』に相當する。そしてその領域中には二萬四千フォート以上の高峰が百座近くも聳え、さらに二萬二千フォートを拔くものは恐らく三百座以上に達するといはれ、それらの氷岳峻嶺は「石塊中の寶珠」として天を摩して群聳してゐる。そして二萬八千フォート以上の高度を持つマウント・エヴエレスト、K2、カンチエンジユンガの三峰は、ことごとくこの山域に蟠起するのである。

普通ヒマラヤを三つに區分して呼んでゐる。すなはち西部はカラコラムの別名で呼ばれ、K2峰（またはゴトウイン・オースチンと呼ぶ）を盟主としてカシユミールの北部を掠めて南東に走るものであり、中央ヒマラヤはチベットとネパールの國境を占めるもので、マウント・エヴェレストおよびシツキム・ヒマラヤと呼んでゐるカンチエンジユンガ山群を含むものである。そしてまたシツキムとブータンの國境から以東に連るものを東部ヒマラヤと區別してゐる。

更にこの大山脈の西方にはヒンズ・クーシユが介在し、北方には多くの平行山脈を越えてパミール高原があり、此處を中心としてアライ山脈、天山山脈などが派出し、さらにアルタイに連嶺などを起し、名實共に『世界の屋根』としての大ヒマラヤを形成してゐる。ヒ

マラヤはかうした大山脈があり、印度と中央アジヤとを隔離する大側壁でありながら、それが完全な分水嶺の形勢してゐないことは、最も著しい地質學上の異例だとされてゐる。すなはち印度の二大河流といはれるブラマプートラ河は東部ヒマラヤの側壁を突破して、遠くチベット國内に源を發し、西方インダス河谷もまたヒマラヤを横斷してチベット領土内の水を導いてゐる。

六

ヒマラヤは、また一般に南方印度側において概して急峻であり、北方チベットに向つて斜度が緩漫であることも特長とされてゐる。それは氷雪の削磨、風化作用などにも依ることであり、また山岳そのものゝ構成にも關することである。そして北方には「アジヤの心臓」と呼ばれる一萬フキートから二萬フキートのパミール高原を擁してゐる。この南に向つて急峻である特質は、かのエヴエレスト登攀隊がネパール側からの攻撃を不可能なりとして、わざ〳〵勞苦の多い廻り路をして一旦ヒマラヤを横斷してチベットに入り、ロンブク氷河からする北方の登路によつた事實がそれを說明してゐる。もつとも、一般的と見られるこの習性にも除外例があることは當然である。そしてカイラス峰の如きは北方に向つて絶壁をなし、またアクアンは殆んど針を束ねたやうな峻銳を呈すると云はれる。

殊に、ヒマラヤを繞る幾多の地方的特質として最も興味ある問題は、雪線（Snow-line）の高度が南側において低く、北側において高位置に在るといふ現象である。普通常識からすれば、——殊に日本の氣候風土から考へると——北方はパミールの高原からシベリヤに連る關係から寒氣鋭く、したがつて多量の降雪を降らすかに考へられるに反し、南は熱帶圏内である印度の平野に近つてゐるので暑氣甚だしく、同時に降雪も少いやうに考へられる。もちろん、寒暑に關する事實は常識通りであるが、北方が高くしかも殆んどステップと呼ばれる廣漠たる地域であるため、空氣は甚だしく乾燥し、從つて降雨降雪の量が少い。反對に南方には印度洋が介在して、それが熱帶地域の暑氣と共に、空氣は多量の水蒸氣を含み、それが季節風（モンスーン）に驅られて南西風を起し、常にヒマラヤの南面に向つて吹きつける。このモンスーンが齎らした水蒸氣は、殆んどその大部分がヒマラヤの高峻な大側壁にぶつかり、その結果南面の斜面や峽谷に多量の雪を降らし、前述のやうな雪線に關する特殊な地方的コンディションが生ずるのである。

このヒマラヤの雪線に關する特殊狀況に關し、久しく同地方の探險に從事したシユラギントワイト兄弟の調査によると、カシユミールからブータンに到る南斜面にあつては、平均溫度華氏三十三度で、雪線の高度は一萬六千二百フキートの低位置にまで擴がつてゐるが、北斜面では平均溫度二十五度を示してゐるに拘らず、雪線は一萬八千六百フキートの高位置にとどまつてゐる。これをアルプスやアンデスに比較して見ると、前者の雪線は南北双方とも九千百フキートであり、後者は東側において一萬五千九百フキートであるに對し、西方では一萬八千五百フキートを示してゐるといはれる。もつとも山岳地では、雪線以上であつても雪の積らない山稜や斜面があり、同時にスノー・ライン以下においても、

七八月の候なほ一萬フイートより下方に降雪があることは說くまでもない。

七

アルプスからヒマラヤへ！——登山意識の進展は、もつとも自然な過程を辿つて地上の最後の壘壁に向つて敢て戰ひを挑んでゐる。それは大自然を侵さんとする人間のはかない征服慾に過ぎないであらうか？ そして登山は、人が生命を賭けてまで敢てなすべきものでないとするのが至當であらうか。彼のエヴエレスト登攀の支持者であり、ヒマラヤの權威者であるヤングハズバンド氏はその著 "Epic of Mount Everest" の中に、次のやうに述べてゐる。

『人が初めて山を仰いだとすれば、その人は必らず何時かはその頂に立つて見たいと考へる。すると登高の一念は、もはや我慢が出來なくなる。それは頂上における景觀にあこがれると云ふ事も一因ではあるが、更に主要なる動機的存在は、山が、吾々に戰ひを挑むにより、吾々も亦身を挺して山と果し合ひを試み、その山頂を極めねば置かないと決意する。』

と云つてゐる。それは單なる征服慾、または優越感として排擊せらるべきものではない。人が生きんとする魂の問題である。物質と精神との限りなき爭鬪である。そして氏は更に哲學的な理論を進めて次のやうな意味で高調していふ。

『登山の前途に困難が過大に豫想されれば、される程、その人の勇氣は揮ひ立つ。……人は常に餘りにも機械力の前に頭を下げ過ぎてゐる。山は素より地上における一つの物質的存在である。それは如何に高く、如何に銳く聳ゆるとも、吾々の精神力は、何時かはその頂に足跡を印しないでは置かない』と。

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルヂング五九〇區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五三三五番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

最も經濟的な 實用替ズボン

本社代理部の替ズボンは、價格に品質に已に定評あるもので、何れも地方在住の愛讀者諸君のために、特選したものばかりであります。

上等純白絹セル	(ヒザ裏付)	六圓
優等純白絹セル	(ヒザ裏付)	七圓三十五錢
上等純白ギヤバヂン	(ヒザ裏付)	六圓
優等純白ギヤバヂン	(ヒザ裏付)	七圓三十五錢
上等黒絹セル	(ヒザ裏付)	六圓
優等黒絹セル	(ヒザ裏付)	七圓
薄ラシヤ・フラノ	(薄茶、灰、紺)	五圓

◆夏季特價提供品◆

スポーツ用白ギヤバヂン	一圓六十五錢
厚地茶褐スレン(園藝用)	一圓六十五錢

寸法	腰廻	股下
大	腰廻約二・四尺	股下一・九尺
中	同　二・二尺	同　一・八尺
小	同　二・一尺	同　一・七尺

御註文には大中小の別と參考に全身長も御記入下さい。(股下はクルブシ迄を計つたもの)

送料内地十八錢　　領十四十五錢

古書賣買のお取次

「古書案内」は従來古文書、和本、錦繪等も扱品中に加えてをりましたが、右の中には思はぬ高價な内容を持つものがあり、再び求め難いものを含む場合さへ少くありませんので、今後はこれ等の類に屬するものは一切お受けしない事に致します。要するに賣買共に普通の古書のみをお扱ひ致します譯ですから、左の規定を御一讀の上どしどし御遠慮なく御利用を願ひます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。
B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。
C、送品は着金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後御註文までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。随つて價格等も時には變更する場合が生ずる事も豫め御承知なさる事を願ひます。
D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、刊行の程度等詳細にお書添へを願ひます。時には、現品を拝見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。
E、御紹介の宛名は、中央公論社代理部古書案内係、と明記して下さい。

直ぐ申込まぬと遅れます

オーダーメード夏服

上下 特價三十圓均一 (三ツ揃は七圓増)

◆理想的な夏生地、ポーラー、フレスコ、トロピカル等の上等品が多量に用意出來ました。

◆只今代理部には、南方温暖地方の夏服と北方樺太、千島方面の春着註文とが、錯雜してゐます。各需用期によくある時間的に無理な註文は、從來の通り出來る限り御要求に應じますが、註文殺到の場合には**絕對に御註文順を嚴守**しますから、お早くお申込み下さい。

◆**特に二回に分割拂込みのお便宜も計ります。**

◆從來の嫌やな流行の支配を受けず、一番紳士的な、而も明るい感じの洋服を求められるなら、どんなに不便な地方からでも居ながらにして、徒らに外國かぶれのしない眞に東京型の洋服を求められるなら、本社代理部を利用するに限ります。

◆先づ生地見本を御一覧の上、代理部考案の用紙に寸法を書入れて送れば、思ひ通りの型、思ひ通りの寸法の服が約二週間位でお手に入る譯です。

◆特に裁縫の入念と、品質の確實な事は、代理部で責任を持つもの丈に、世上にありふれた謂所通信販賣洋服と類を同ふするものではありません。

◆**お持ち合せの洋服をお送りになれば、その通りの寸法の**服も作ります。

◆**見本ノ請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添付ノ事。**

◆尙特別高級品のお註文は、見本請求の時に大體の御希望價格をお申越しになれば出來る限り御要求に應じます。



◇洋服の生地見本は、御承知の通り種類多く全部取揃へる事は經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ずお希望の品、例へば「夏服見本」「夏服何圓程度」と云ふ風に御指定の上、お忘れなくお年齢をお申開け願ひます。

◇代理部では直ちに御指定の種類の、お年齢向きなものを見立てゝ、明確な圖入りの寸法書と共にお送りしますから、これに各部分のお寸法が記載してお送り下されば、約二週間で居ながらにしてシックリと體に合つた洋服がお手に入る譯でございます。

中央公論社代理部洋裁係

振替東京七八四七五番

最新除毛劑

タキーは、手足、腋の下、襟、髭等任意の所に塗つて、三分乃至十分後に水で洗ふだけで、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり除毛する事が出來、繰返して使用するにつれて次第に毛が發生しなくなり加ふるに皮膚の美を增すと云ふ重寶な藥は、タキー只一つです。用法は至極簡單、添附の説明書に反せざる限り、全く無害で效果は一層確實です。



定價（マムクリーム付）　二圓二十錢
送料東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

萬能艶出布

漆器類、殊に蒔繪の器具、置物から、樂器、自動車まで、これ（原名**フレツシユマン・ダスト・アブソーバー**）の用途は廣く、殊に蓄音器のレコードを拭へば壽命を長くし音を非常に美しく致します。

定價　（金屬製容器入）　一圓
送料　東京市内六錢　内地十二錢
領土四十五錢

スマドレ、シャンプー　ヘヤトニック

シャンプーは洗髮液、ヘヤトニックは美髮液、前者でキレイに汚れを落し、後者で毛を養ひ天來の美を增すと云ふ仕組は流石にパリー、ニューヨーク、ロンドン等で賣出してゐるものだけあります。

殊にこのシャンプーでの洗髮は實に手輕で、日々忙しい社會に立つて、男子の髮を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、數滴スマドレシャンプーの用意さえあれば、僅かな時間で每もさつぱりとした髮で、自他共に氣持ちよく會談する事が出來ます。

定價　特大瓶　二圓



而も朝夕スマドレヘヤトニックを用ひて輕くマッサージする事で、一日の能率を高め、芳香邊りを包み毛髮は絹の樣に軟く日々漆黑の美を增します。

定價　婦人用　紳士用　特大瓶各二圓五十錢
送料各東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

新産兒調節器

獨逸製オクルサトルは、海綿樣纖維質の部分と、絕對に水液の通過を妨げるゴム障壁と把柄からなる新發明產兒調節器で、他の從來品の生理的損失を一掃した良品です。

本器は永久的の使用に堪え、眼覺めたる新しき家庭の實際問題の上に輝く大いなる光明燈であるとまで多大の賞讚を受けてゐます。

一回經產婦までは　〇番
三回經產婦までは　一番
四回以上の方は、　二番を使用

定價（錠劑十二錠付）　六圓
錠劑のみ十二錠　二圓
送料　内地十八錢　領土　四十五錢

草津溫泉の精

本劑約二〇乃至五〇瓦は居ながらに約一石の新鮮な溫泉となり、常用者は皮膚が美しくなり、色を白くします。



定價　小瓶　一圓　大瓶　二圓
特大瓶（一〇〇回用）六圓
送料　内地二十七錢　領土五十五錢
特大は　送料　先拂

浩壯

（無臭ニンニク錠）

ニンニクの效力は世人のよく知る所然し臭氣は十人が九人まで嫌やがる。

效力は認めるが服むのは嫌や、服み度いが服めないと云ふ人は、このニンニク錠を召上れ。本劑は、ニンニクの原質をそのまゝ用ひながら、服後口中に臭氣を殘さないのが特長です。

肺結核、肋膜炎、氣管枝カタル、胃腸弱、神經衰弱、貧血症及寄生蟲の驅除には驚くばかりの效果があります。

藥價　十日分二圓　三十五日分五圓
送料　内地十八錢　領土　四十五錢

サユリ　ヨウモトニック

藥で有名な三共の新製品です。每朝脫脂綿につけて、頭の地肌に塗れば、所謂若禿を防ぐ事受合ひです。

〇頭の痒い人、脫毛する人、〇壯年禿髮の人、遺傳禿髮の憂ある人、〇若白髮の人、〇大病後薄毛の人、〇日常ポマードを多量に使用せらるゝ人、〇病床にあつて洗髮の出來ぬ人、特に婦人では〇產後薄毛の人、〇常に日本髷の人、〇大きな添へ毛、髢を用ふる人、〇赤毛が苦になる人はお用ひ下さい。

定價　大　二圓　小　一圓二十錢
送料　東京市内六錢　内地　十二錢
領土四十五錢

贈答用品案内

千夜一夜ブツクカバー

艶麗な圖案微妙な色彩は、ポプリン地裏打の堅牢さ。實用裝飾兼備　一部五十錢

中央公論社圖書券

この圖書券は中央公論、婦人公論、本社出版物の購讀は勿論、代理部の何品のお註文にも應じます。五十錢一圓、五圓、十圓の四種。

コーリンス・ホワイトナー

夏の化粧料として日焦止めに妙、婦人令孃への贈答品に最適、海水浴には是非用意すべき品。定價一圓廿錢

コーリンス・リクイドホワイトナー

夏の婦人の美は、本品によつて保たれます、洋裝婦人の手に、襟に、日に焦けぬ事妙。奧樣同志の贈物に第一等、定價一圓。

夏の香水（スヾラン）

本社四季の香水の一つ。佛蘭西製に優る本社特製品、紳士淑女の愛用品。二圓。其他四季一揃又は四個註文は七圓半

◆此の外、近親又は親友の壯年の方に**サツポーター**を、新家庭には**昭和文庫**を、學生には**アテナ萬年筆**を、少年には**野球競技盤**を或ひは何にでも利用の廣い本社圖書券を、分により度に隨ひ自由に選んでお用命下さい。遠方から遠方へのお用も承ります。

誰にも愉快な
野球競技盤

盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、球にあてた指の力一つに、直球、曲球、獄球、闘球を自由自在に出す投手と選手がボックスに立つた氣持もて立向ふ打手との興味ある緊張した氣分は、この野球競技盤ならでは、味はへぬ所です。

選手はもとより、春秋のシーヅン毎に野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戲として、一盤の家庭におすゝめ致します。

定價　小型一圓三十錢大型三圓八十錢

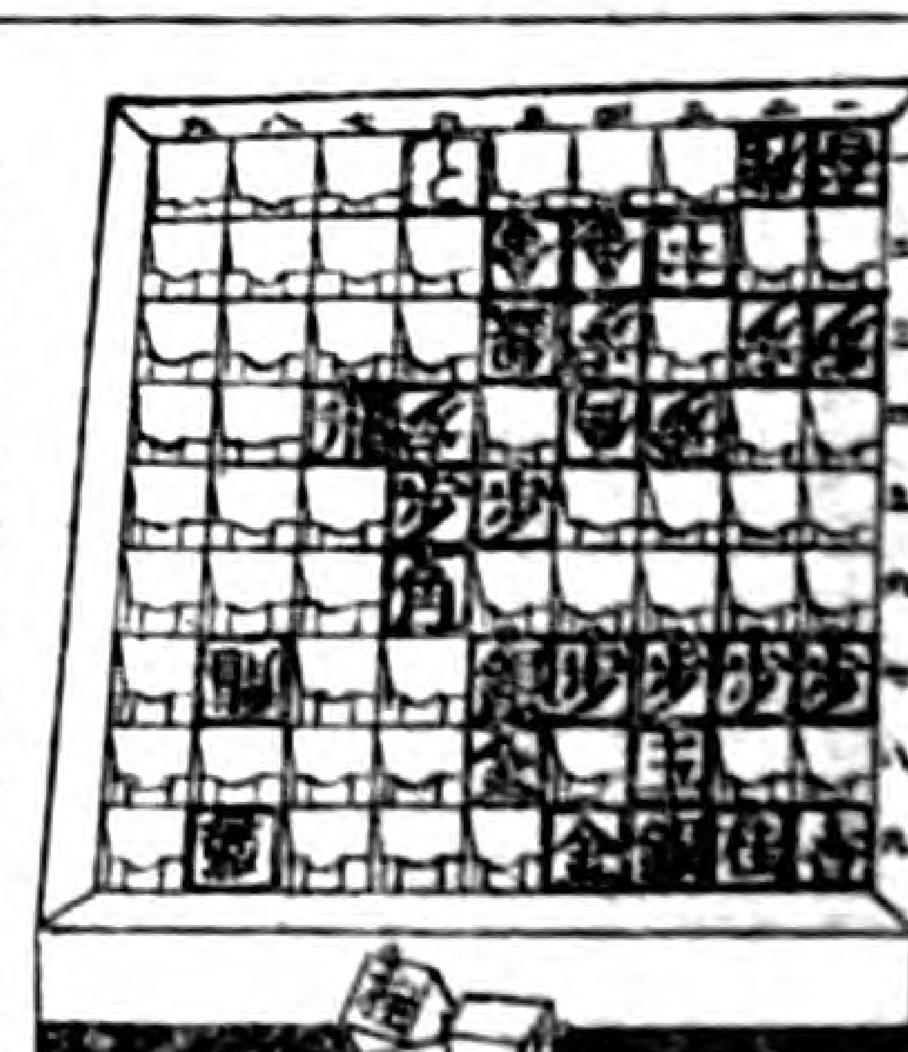
送料　内地小型は十二錢　中型は二十七錢　領土小型は四十五錢　中型は五十五錢



最小型將棋盤

縱三寸七分橫三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棊盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから。ポケツトに入れて少しも重く感じる事なく。駒には一個一個裁針が附けてある等。婦女子の間にも可愛らしい程のものです



駒は標準文字を用ひ、盤には縱橫に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。

其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定　價（駒全部附）　一圓八十錢

送料　東京市内十二錢、内地十八錢

領土　四十五錢

御注意

◇御送金には**振替**の御利用が一番安全ですが、地方により普通便より四日乃至十日間以上遲れますから、御註文はそれ丈一層お早くお出し下さい。

◇爲替での御送金は、必ず**書留郵便**に願ひます。

中央公論社代理部

圍碁を語る

エフ・デューバル

僅か一週日をしか日本で過さない私は、此の美しい國土についてのほんの少しばかりの觀察からのみ物語らう。

旣に私達の船「箱崎丸」が下關から日本の內海に進んだとき、國土の美しさは早くも理解されることが出來た。一千の島嶼から成る國、日本は純美である――到る處山が海から見え、また屢々山と海とが同時に見られる。都市を訪れるにつれて、日本には一の大なる變化が起りつゝあることがわかつて來た。純粹に日本的な家屋とならんで、歐羅巴風な建築が益々多く見出される。石造家屋の方が實用的ではあるが、併し日本的な建築樣式に於ける日本の美の一部分が消去つたことは遺憾とせねばならぬと思はれる。喜ばしいことには、着衣に於ける變化はなほ完全ではない。今なほ多くの男女が、古風な且つ似つかはしい衣裳をつけてゐるのが見られる、然もそれは狹窄な歐風の衣服よりも遙かに衛生的だ。屢々云はれてゐるとほり、日本人は明晰・清潔、鄭重そのものである。私が單に一人の研究者として來たものであるのにも拘らず、私に對して終始與へられた歡待を、私は決して忘れることはないであらう。即ち、私は日本の碁戯を完全に自己のものにすることを望んでゐるのである。此の遊戯は私の考へによれば、日本の國民性に非常によく適合してゐる。このことは、規則の單純性と盤及び石の同形性との爲に、外面的には明かでない。それは一見したところでは將棋――これは歐洲では「帝王戯（ケーニッヒスシュピール）」と名づけられてゐるが――よりも遙かに好處を持たないやうに見える。併し乍ら、若し圍碁により親しみ學ぶならば、ひとはそれを將棋よりもより高く位置せしめないわけにゆかない。このことは多數の歐羅巴人も認めてゐるところであつて、例へば二十五年の間將棋（西洋將棋（チェス）を指す――譯者）界の巨匠であつたエミール・ラスカー博士の如き、現在では圍碁にのみ耽つてゐる人すらあるのである。圍碁には將棋よりもより深くまたより趣味のある組合せがある。例へば、ひとは一つの失はれた（死んだ）目を、なほ「劫」によつて、他の場所で利益を得んが爲に利用することが出來るのである。

日本に於て圍碁が、歐羅巴や亞米利加に於ける如何なる「盤技（ブレットシュピール）」よりも普及してゐると云ふ事實は、東洋人が瞑想的傾向を有してゐることゝ關聯がある。歐羅巴人は、より以上にまた亞米利加人は、このやうな「飯の種にならない」ことに費す時間を持たない、彼等はたゞもう實務に赴かねばならないのだ。

圍碁が支那で發見されたものであるにも拘らず、日本人はこの遊戯に於て支那人を凌駕してゐる。このことは主として日本が統一的國家であることから來てゐる。支那では圍碁は主として僧院に於て行はれた。が、これらの僧院は相互には殆ど全く連絡を持たなかつた。然るに日本に於ては、ある一人の名人が一の良き「定跡」を發見するや、忽ちに總ての大家たちがこれを知ることが出來たのである。日本人の圍碁戯に對する愛著は、今日莫大な金額が才能ある碁客への補助として捧げられてゐることによつても明かに知られる。

最後に私は私の今回の日本旅行に際し日本棋院から與へられた懇篤な招待に對して、心からの感謝の意を表する。

アメリカ通信

「白人恐怖」

米國に於ける黒人私刑と人種戰

在ニューヨーク本誌特派員　清澤洌

1

黒人ヒユズは『婦人を襲撃(アサツク)した』といふので、裁判所にひき立てられた。

『襲撃(アサツク)』の意味は誰にも明らかではなかつた。黒人が白人の婦人を強姦でもしたといふのか、それとも何か卑(いや)かいことでもして、あの眞黒(まつくろ)い手で頬の一つも毆つたといふのか、それを誰も聞かうとはしなかつた。

『黒奴(ニガー)が白婦人を襲撃したさうだ』

彼等にはその言葉だけで充分であつた。テキサス州シヤーマンの市民は、たゞもう逆上して、手に手に兇器を持つて

『黒奴(ニガー)を私刑(リンチ)せよ、黒奴(ニガー)を引き出せ』

と潮のやうに裁判所の方に押しよせた。本年五月半ばのことで、この地方を有名にしてゐるカウボーイの牧場には、もう青草が一面に春の陽に笑つてゐた。

この種の裁判があると、何かの形式において白人恐怖があることは、この邊の動かない例になつてゐる。故に裁判所の側でも豫じめ相當に備えるところがあつて、建物は地方の巡査と自衛團で取圍まれてゐたし、裁判所の内部には、關係者以外に、絶對に入場を禁止してゐた。

被告ヒユズが捕へられたのは五月六日であつたが、その晩以來、犯人を掠奪するためにたえず襲撃して來る暴徒の一團は、この官憲の力で撃退して來た。

いよ／＼裁判の日が來た。被告の黒人は、自分の生命をねらふ大衆が、建物の外にゐることを知つて、もう脅えきつてゐた。この白人團に對して自己を辯護することの無益なことを知つたのか、かれは『有罪』であることを認めた。而してテキサス州の法律によれば犯人が有

罪を認めても、その刑を決定するために、陪審に附することが必要としてゐるのである。

第一の證人が證言臺にある時であつた。暴徒の一團は、外部の圍を突破して裁判所構内になだれ込んで來た。この報を聞いて裁判長カーターは陪審人を避難せしめると同時に、黒人ヒュズにいつた。

『お前は生命を賭して外部に出るか、それとも大金庫の中に這入るか』

一人の生命を藏して二階にある大金庫は外から鍵がかけられた。

構内の騷動は續いた。自衞團は盛んに泥彈を投げた。裁判所に働いてゐる婦人などは窓から飛び出ようとして、消防夫の梯子で救はれた。

一回、二回、三回。暴徒の襲撃は益々激しくなつた。警官側で水道を利用しようとすると、そのホースを端から切つていつた。暴徒は石や空瓶を盛んに投げて應戰した。

出兵を求めた電報に對して州知事から返電が來た。

『黒人を保護せよ、併しながら何人をも射撃するなかれ』

投票權なき黒奴を保護するために、白人の人氣を害するには、この州知事は餘りに政治家であつた。大金庫の中の黒人は、保護する意志なき官憲に、その保護を依頼してゐたのである。

2

この頃になると暴徒の數は數千人に達してゐて、中には女もゐた。と見ると、まだ二十歳にも達せぬであらう三人の青年が、はやぶさのやうに裁判所の窓に這ひあがつた。そして黒人の監禁されてゐる大金庫の下側にトガラン罐のガソリンを投げかけた。

忽ち猛々たる煙が立ちあがつて、裁判所は煙に包まれた。群衆からは喝采の動揺めきが起つた。消防隊は職務上消火に盡力したが、ホースは次ぎ次ぎと切斷されて、少しも用をなさなかつた。

州知事から送られた軍隊が到着したのは、裁判所の建物が燃えてしまつた後であつた。かれ等は大金庫を眞中に陣形を造つた。

『黒奴を引き渡せ。』

暴徒はさう叫びながら、石や木を投げた。軍人で負傷したものもあつた。軍隊は自己防衞のために發火して、十名餘りのものが傷を負ふた。

市民と軍隊との大衝突が免かれないかに見えた。市民のある者は家庭に鐵砲をとりに行つたものもあつた。併しこの『同志討ち』の無意味なのをかれ等も知つてゐた。軍隊は自から他に退いた。

白人暴徒は黒人の骸を自分達のものとせねば承知しなかつた。二重の鐵とコンクリートからなつてゐるこの大金庫には、何回も何回もダイナマイトがかけられた。いよいよそれの爆破に成功したのは晩の十一時すぎであつた。

この時の實見者――テキサス州ゲーンズビル新聞の編輯長――の話しによると、黒人ヒュズは火事中強烈な熱度にも關せず生きて居つたといふのである。その證據には熱を消すために、中にあつたバケツの水を使つた事實が明らかである。かれが死んだのは最後のダイナマイトの爆破により、屋根が落ちて來たによるといつてゐる。

ダイナマイトで開けた口から這入つて、黒人の屍體を引き出した青年に對して群衆からは、英雄を迎へるやうな大熱狂があがつた。屍體はまだ息を引きとり切らないやうに、ピク／＼さえしてゐた。その屍體を引きづつて、この小英雄は二階の階段から地下に投げ下した。

さすがに子供を抱いた女などは酷たらしい情況に聲をあげた。

待ち構へてゐた地上の青年達は、この屍體に繩を卷きつけて、自動車の後にくつつけた。

『黒人町へ！』

さういつてこの屍體を引きづり乍ら自動車行列は黒人町へ續いた。

黒人町は、このシャーマン市の隅の方にある。白人暴徒はこの區域の眞中の藥店の前に自動車を止めた。

『屍體をあの木の上につるしあげろ』

一人が音頭をとると、みんな寄つてたかつてこれに從つた。屍體は直ちに地上を放れた。かれ等はこの下に枯木をつんで、火を放つた。深夜の朧月が上から力なく照つてゐて、人肉の燒ける臭ひが四方に擴がつた。

かれ等は、併しこれで滿足してはゐなかつた。その前の藥屋にまづ火をつけた。そして三丁四方を燒き拂つた。そればかりではない、黒人の商店と私宅には、場處を選ばずに踏み込んで、荒したり、破壞しつくしたりした。

午前二時頃になると、人の影はやゝ少なくなつたが、他の黒人區域から、新らしい火の手があがつた。町の辻には二三十の一團がゐて、消火をしようとする者を妨害した。

警官はどうしたか――始め暴徒を靜めようとしたが、この後では道を整理するために先頭にたつた。他の黒人はどうしたか――白人恐怖を前にして、多くはその前の晩に、他に逃げた。

3

黒人リンチのことを舉げれば幾らでもある。併しそれから丁度一週間後で、その近くで起つた同じ事件は、筆の序でに報導してをかねばならぬ。

同じ州にホネーグローヴといふ町がある。こゝに百姓をしてゐるジヨンソンといふ黒人の小屋に、白人地主のフオンテンベリーが顏を出して、地代を請求した。見ると小作人の黒人ジヨンソンは荷物を片づけてゐるのだ。

『お前は移轉するのではないだらうね』

さういふと黒人は默つてピストルで對手を射ち殺した――これはその時同行した地主の友人の證言だ。質問されて直ぐピストルを出して殺す者があるかどうかは、直き分るわけだが、その時の證人としては同人がゐるだけだから、さう書くより外はない。五月十六日のことだ。

この事が知れ渡ると、白人達は何百人となくやつて來て、かれの小屋を取卷いた。小屋の中には二丁のピストルがあつて、黒人はこれを武器に抵抗した。一時間餘りのピストル戰が續いた。中からの發砲が少なくなると、一人が原田が玄武門を破る時のやうな勇敢さで中に入

つた、多數のピストルの口は無論一齊にその方にむけられてゐた。中に這入つてみると、黑人は幾つもの砲彈に打ち貫かれて死んでゐた。

この勇士は死んだ黑人の屍體を窓の外へ投げ出した。群衆はその足に繩をかけ、それを自動車の後にしばりつけて、同じく黑人區域を引き廻した。

かれらは二マイル、といふもの、血のしたゝる屍體を引きづつた。そして黑人教會の前のところにある木にそれを釣るしあげ、その下に火をつけて屍體を燒いた。暴徒はこれを心地よげに見てゐた。群衆が四散したのは數時間後に雷雨があつた時である。

この雷雨の間を、その屍體を漁る人間の影がゐた。それは死んだ黑人の友人である。かれ等はその骨を拾つて型ばかりの埋葬をした。黑人達は白人の襲撃が何時來るか分らないので、みんな扉を閉ぢて安き心もなかつた。

前の黑人犧牲者は年齡四十一歲、後ののは三十歲であつた。

4

私は白人恐怖の、も一つの例を書いてみよう。例をあげれば無限にあつて、簡單につくせるものではない。これはアーカンソー州の話しである。

同州のミシシッピー郡にローリー（Lowry）といふ黑人が、妻君と六歲になる娘と住んでゐた。同族のものが多くそうであるやうに、かれもクレイグといふ白人地主の農園に働いてゐた。クレイグは地方の有力な政治家であり、また地主でもあつた。

クリスマスが近づいたので、黑人ローリーは主人のクレイグに『私の勘定はどうなつてゐませうか』と聞いた。かれはこの農園と關係を斷つて、他へ移轉するつもりであつたらしい。話の最中にクレイグの息子は、かれの頭を毆つて『外の時に來い』と追ひ歸した。

クリスマスの日に、黑人ローリーは再び主人の家に行つた。丁度、主人一家は夕食最中であつたが、料理人のベシーがこの事をクレイグに告げると、かれは椽側に出て來た。『今頃なんに來た』『お勘定のことをお聞きに參りました』『今頃來る奴があるか』。そういつて、主人は近くにあつた薪を投げつけて退去を命じた。

その内に、家から息子が出て來た。かれは亂暴で有名な男であつた。おどすつもりであつたのか、ピストルを打つた。この後である、ローリーもピストルを出して主人クレイグと娘を殺し、一人の息子に負傷さしたのは。

ローリーはその場から逃げたが、テキサス州のエルパソで捕えられた。アーカンソー州からは犯人引取りのために二人の警官が同地に出張した。

汽車がミシシッピーのサーディスに到着する頃、十臺近くの自動車がこの町に入つた。一九二一年一月廿六日のメンフイスプレスにはかういふ記事がある。

『數名の人がその自動車から下りて、イリノイ中央停車場に行つた。「私達の來たのはあの黑人をアーカンソー州ウイルソンに連れて行

きたいからだ。」一行の頭目らしい男が、府の警察部長ジョンソンにいつた。「こゝでは餘りお世話をかけたくありませんがネ」

汽車が停車場に停ると、各人はピストルを出して、黒人の乘つてゐる汽車に行つた。誰も一言も喋べるものはない。

ローリーは手錠をはめられ、警官グリアーにつながれ、それを警官ザクソンが立つて番をしてゐた。後ろから近づいた一行は、かれ等の武器を奪ひ、手早くこの二人の警官に手錠をはめて、黒人を奪つてしまつた。そしてこれを自動車に乘せてかれ等は引きあげた』

一行は黒人囚人を得て意氣揚々とその町に歸つて來た。

5

始めに書いた二つの私刑にはやゝ言動的なところがある。併し多くの場合に、私刑は公然新聞に發表されて行はれるのだ。その時が正にそれであつた。

水曜日午後のメンフイス・ニユズ・シミター紙(夕刊)には、その大きな標題に、『ローレー私刑者プログラムを發表す、黒人は犯罪に對して私刑を支拂ふ』と書いてゐた。またメンフイス・ニユズも全段拔きの標題で『今夕、三人乃至六人の黒人私刑に處せられん』とあり、小標題には『ローリー私刑にさるべき樹に近づきつゝあり、本日メンフイス市を通過せん』と書いて、本記事がある——

『一行の内五名は殺人犯人ローリーを自動車にのせてメンフイスを廻道してゐるが、その内の他の者は既に今朝當地に來たり、ホテル、ピーボデーにて食事をした。黒人は今晩ノデナにて私刑に處さるゝ筈である』

見るべし、私刑にすることも、何人が犯人を捕へたかも、すべて新聞に發表されるほど公然な事實なのである。

その翌日(木曜日)のメンフイス・プレス紙の記事は、そのリンチの光景を傳へて遺憾のないものがある。試みにこれを忠實に飜譯してみよう——

『五百名以上の人が、そこに立つて、黒人が漸次燒けて、油紙のやうになるのを眺めてゐた。これはアーカンソーの農家の白人がクレイグとその娘ウイリアムソン夫人の死に對する復讐の手段として行はれたものであるが、その群衆の中には、あちこちに婦人もゐた。

被害者はこの世で想像しうる最も懼るべき死の苦しみを受けてゐるに拘はらず、一回も悲みを乞はなかつた。黒人を木の幹につないでをいて、暴徒の者は少しの柴を積んでかれの足の下にをいた。この上にガソリンはまかれた、死刑の實行はかうして刻々に進行して行くのである。

一インチづゝ、黒人は死に料理されて行つた。二三分毎に新しい柴を持つて來ては、火炬の炎を燃やした。その火がかれの胸のところに行つた。炎がかれの下腹部のあたりを舐めつくす頃になると、かれ等の一人は前に出てガソリンを、その頭部にかけた。二三分にしてかれの頭髪は灰になつた。

かれの肉が足から解けて落ち、炎がかれの顔をかすむる頃になつて

も、ローリーは意識を失なはなかつた。かれは一回も惠みを乞ひはしなかつた。一回、二回、かれはその手から熱い灰を拾つて、それを口のところに持つて行つた。それは死を早めんがための努力であつた……』

その日に、他の黒人が私刑に處される筈であつたのが、道路が惡かつたので沙汰やみになつたのであることは、他の報告によつて明らかである。この標的とされたのは、ローリーを逃がした嫌疑を受けた人々である。

然らばこの白人暴力團は罰せられるか。今回の事件においても新聞は『大檢擧を始めた』といふやうに傳へては居る。併し過去において罰せられたのは極めて僅かで、罰せられてもその罪は輕い。國民的傾向を背後にする罪惡――例へば國粹團體とか愛國主義の團體とかの犯罪が、裁判官により同情されるのは、例を遠くにとるまでもない筈だ。

6

以上は個人の場合だ。これに黒白兩人種が相對峙して、人種爭亂（レース・ライオット）を起した事件を附記しなければ問題の重要性は分るまい。

話しは戰爭が終つて暫らく後、シカゴで起つたことである。シカゴは黒人人口からいへば約百十萬（一九二〇年度の調査）で、總人口の百分の四・一しかないが、經濟力も比較的に強く、黒人の中央議會代議士を出してをるのはこゝばかりである。

一九一九年七月廿七日の日曜に、ミシガン湖で泳いで居つた黒人四人が、白人の水泳區域に行つた。元來、この邊のミシガン湖では黒白兩人種の水泳場は截然分れて居つて、北部は白人、南部は黒人の領分とし、法律や市令ではないが、不文の諒解が、さう決定させてゐた。

『たゞこちらへ來るのだ』

白人はさういつて黒人を追ひ返さうとした。相互の間に激しい口論があつて投石も交換された。黒人は一度自分の領分に歸つたが、多勢を連れて來て威勢を示した。

その時、十七才になる黒人の少年が、黒人區域を出て白人區域を泳いで行つた。白人はこれを見て石を投げ始めた。その黒人少年は石に驚いたか、自己の區域に歸つて來ることを忘れて、近くにあつた材木を拾ひ、それを持つて石の屆かない沖合に行つた。

一人の白人が、かれの方に泳いで行つて捕えようとした。黒人少年はガブリと水をくぐつた。これを見てゐた黒人達は、その少年が投石されて溺れたと思つた。石が當つたといふ證據は、その後も發見されなかつたけれども、黒人達はその白人を指して、巡査に拘引を命じた。白人巡査はこれを拒絶した。

黒人と白人とは、その少年を捕えるべくその方に泳いで行つた。兩者の感情は自然に激しくなつた。そこに巡査も來て、黒人巡査は群衆の一人――黒人を射つた。

『白人が黒人の少年を石を打ちつけて殺したさうだ』

さういふ風説が、黒人社會にそれからそれと傳へられた。兩者の戰闘心は說明や諒解では、どうにもならないものとなつた。それから數

日に亙つて人種戰爭は始まつた。この戰爭において、殺されたもの（その内十五名は白人）が三十八名、負傷者が五百三十七人（白人百七十八人）、家庭を失なつたものが一千名近くあつた。

白人團は自動車にのつて、黑人區域に行つて誰にでも發砲した。これを知つた黑人は、自動車だと見ると同じく發砲した。シカゴ市長はやむを得ず戒嚴令をしいて、それが八月八日まで續いた。

戰爭は總べての暴力を刺激する。白黑人種戰があつたのは、世界大戰直後が最も多かつたが、その後と雖も絶無に歸したわけではない、そしてこれは兩者の間にわだかまる深い敵視感情の前衞戰に過ぎないものだ。

7

『米國は黑人を解放したことにより、大過誤を行ひました。黑人は決して解放すべきものでなかつた』

加州における排日運動の巨頭――併し最近においては日本人に對して公平であらうとするかに見えるマクラッチー君に逢つた時に、かれは私にそう話した。かれ等の目からは、米國で最も大きな間違ひをしたのは、誰でもない、アブラハム・リンコルンだつたのである。

『黑人はかれ等の意志によつて米國に來たのではありません。嫌がるのを無理に輸入したのが諸君の先祖だつたのだ。親の罪が子に報ゐるといふわけですか』

私は少し皮肉になつて、そう調子を合せた。世の中に噓も多いけれども、米國が黑人を解放したといふほどの大噓は餘りないからである。

いかにも黑人を解放問題のために南北戰爭は行はれた。その結果、米國憲法に第十五條改正憲法が加へられて、黑人は白人と同等の投票權がある筈にはなつてゐる。併し南部諸州は一八九〇年から（黑人奴隷解放の憲法は一八七〇年）既に黑人選擧權制限のために、法律を造つて、これを實行してゐる。この法律は各州によつて異なるけれども、財產、智識、納稅、就職の有無、評判、グランド・ファーザース・クローで（黑人解放以前に選擧權を有して居た者か、その子孫のみが投票權ありとする條項）といふやうな制限條項を挿入して、黑人が選擧權を行使することを妨害して居り、これに適應しないものは暴力的威脅で押えつけてゐる。

この結果、黑人にして重要な公職を有する者は、南部諸州の關する限り一人もない。黑人が大多數を占めて居る町にすら、一人の黑人町長もなければ、町會議員もない。無論判事も、陪審官も、選擧立會人もないのは當然として、巡査すらもないといふ狀態である。（Garner, Southern Politics since the Civil War. P. [illegible]）。これに燃ゆるやうな人種的嫌惡の背景があるのだ。黑人がどうして公平な待遇を得られよう。

政治機關と經濟機關が全部自分達の手にある以上は、白人達が勝手な法律を造るのは當然である。南部諸州にはジム・クロー・ロース（Jim Crow Laws）といふがあつて、黑人は電車や汽車の後方の一區劃に乘らねばならぬし、學校も停車場の待合室も區別されてある。ある黑人が劇場に這入つて白人席に坐らうとしたが故に、私刑に處せられた

例もある。

サウス・カロライナ州はその人口において黒人が五割一分で、白人が四割九分である。然るにその教育費は黒人に對しては僅かに一割一分しか支出しない。衛生費の如きもその通りで、それがために黒人の死亡率は非常に多く、一九二二年において白人のそれは一千人に對し一二・一であつたが、黒人は二〇・五である。

神の愛を說く教會人も、人類愛を說く人道主義者も、黒人を虐待することに、かつて疑問を持つたことはない。それは白人の特權と信じ切つてゐる。かれ等は必らずしも黒人に親切でないことはない――白人優越に犬のやうに柔順である間は。

8

世界大戰の世界に與へた影響は、各國を巡遊してどこでも痛感することであるが、アメリカにおいてこれによつて進出した階級が少なくとも二つある。一つは婦人で他は黒人である。

米國の大景氣と、勞働者の不足が、南部諸州の黒人の北上をうながした。黒人はなだれのやうに米國北部の産業組織の中に流れ込んだ。從來、黒人問題といへば南部に決つてゐたものだが、大戰後問題は二つに分れた。一つは前述の南部の黒人問題、も一つは北部の産業都市における人種問題である。

南部における黒人の重なる職業は農業である。一九二五年の農業調査によると南部における獨立農園の數は三百十三萬あつた。この內、黒人經營のものが八十三萬で、白人が二百三十萬である。農業における經濟勢力が白人に屬してゐることを知るべきである。更に黒人小作人は同年において六十三萬人あり、また黒人農園勞働者は一九二〇年の國勢調査において百二十萬であるが、この土地所有者も雇主も殆んど總べて白人である。

こゝでその給料その他の統計を示す餘裕はないが、極めて低廉なる給料と生活に甘んじてゐる黒人に、暴力的壓力を加えてまで搾取しつつあるのが、白人の地主であり、資本家である。黒人の農業者の十分の八乃至九までは直接に白人に頼つてゐる。世界に被搾取階級の標本を求めるならば、まづ黒人農家をあげるべきである。故に白人は黒人を迫害嫌惡しながら、それがかれ等の膝下から逃げ去ることを好まない。私は黒人問題についてブッカー・ワシントンの後を襲ふたモートン博士その他の黒人に會見して、その意見を聞いたが、ある若い黒人の話しが耳に殘つてゐる。

『私は大戰の頃、紐育に來たものですが、その頃、白人達は私達が他に引き移ることを好まない。晩に停車場に見張りをしてゐて私共の汽車に乘るのを妨害したものです、私達はその間を逃げて來たのです』

米國の農業は、今なほ米國の産業を二分してその一に居る。その農業の重要な生産者が黒人である。昔し、ローマの文明が奴隷の上に礎かれたといふやうに、米國のデモクラッシーと繁榮は、肺病と貧苦と戰ひつゝある黒人の上に片足を置くといつて過言ではないのである。

北部の産業市に這入り込んだ黒人は、同じくその皮膚の色から來る

激しい壓迫と鬪つた。白人支配の下にある經濟殿堂の中にあつて、かれ等は白人勞働者の落穗を拾ふにすぎなかつた。ある黒人が私に話したやうに『仕事を得るのは最後で、解雇されるのは最初です』といふ狀態である。經濟的變動が來る時に、最も初めに仕事を失なうのは、現在でも黒人である。

その上に皮膚の色から、工場などにおいて責任ある地位――たかだかがフオーマンにすらなれない。かれ等は産業組織の最下部の番兵をつとめるにすぎず、從つてその經濟的位置も決して優れては居らぬ。

紐育の黒人區域を案内して、その狀態を見せてくれた日本研究家のメーソン君は私に云つた。

『御覽なさい。これだけ黒人區域が廣いのに、黒人の店といふものが殆んどないでせう。みんな白人が經營してゐるのです。それがかれ等の經濟實力を語つてゐませう。智的能力ですか、優秀ではありません。人間は大體正直ですが、人の家に洗濯などに行つて、赤い色や青い色のものがあると、その誘惑に抗しかねて盜むことが多いさうです』

黒人の經濟實力を略記すると左のやうである。

一、米國の商業家はブラッドストリートによると二百二十六萬戸である。黒人々口は白人の一割を占めて居るのに、その經營の商業は三分にすぎない。

二、その七萬の商家も重に小賣とか、人事に關するもので、黒人を對手にするものだ。

三、その中には基礎的産業(石炭、鐵、化學、鐵道、自動車、機械、食料、纖物等)が含まない。

四、殆んど總べての黒人の商賣は、小商賣でビック・ビジネスは白人の獨占だ。

これによつてみても今のところ、黒人の力は白人の經濟力の何千分の一に當るか分明しないことを知るであらう(Black America, p. 245)。

9

アメリカにおける黒人問題はどうなるのだ。私刑があるごとに、人種戰が起るごとに、常に白人の神經を刺激してゐるのはこの問題である。

第一に明らかなことは、黒人種族はアメリカから姿を消さないであらうことである。黒人は現在米國白人總數の一割を占めてゐる。この比率は昔より減少したのは事實である。一八六〇年には一割四分一厘を占めてゐたのが、一九二〇年には九分九厘になつて居る。それに生産率は多いけれども(千人に對し白人二二・二、黒人二五・三)、死亡率も多いから(白人一一・六、黒人一六・三)、全體的には減少して居る。併し一千二百萬近くの生命が、失くなるであらうことは、元より想像されない。

中には白人社會の壓迫をのがれて、アフリカに黒人國を建設しようとするガーヴエーなどの運動もある。けれども金と實力に事缺かない猶太人のザイオニスト運動でさへあれであるから、かゝる運動は一種のユートピアにすぎぬ。

第二には黒人の經濟力が、徐々としてゞはあるけれども堆積しつゝあることである。白人が黒人との交渉を拒絶し、それを一隅に押し込めて居る間は、自己の生存のためだけでも、獨立の商業は起らざるをえない。始めに黒人奴隷に反對した北部が、同じ態度を示し始めたのは、黒人の競爭をかれ等が感じ出したからである。

第三には黒人が智識の果實を食ふと同時に、階級意識乃至は人種意識が生れつゝあることである。元來、米國黒人はアフリカの同種族の内、最も柔順なものを選んで奴隷として輸入して來たものである。故にかれ等は特質として柔順溫和ではあるが、併し物(もの)には極限がある。かれ等は漸次自己主張に目覺めつゝある。

たゞこの點については程度の判斷が困難である。私が語つた黒人識者は、階級意識は尚比較的薄いといつたものが多かつた。いづれにしてもそれは時の問題である。

これ等の事實を前にして白人はどうするかである。南部諸州の現在の狀勢からすれば、かれ等はその「白人恐怖」の手段を毫末も緩和する意志はない。かれ等は一寸の讓歩は全局の敗北を意味することを感じてゐる。併しそれと同時に、昔戰爭種族が敗北者を征服したやうに、永遠に一千數百萬の人間を膝下に押えつけることの不可能も考えねばならぬ。

考へて來るとジーグフリードがいつたやうに『われ等はこの問題について北を見るも、南を見るも、そこに解決策はないやうに見える。色(カラー)の問題(プロブレム)はわれ等が、たゞ恐怖を以て見下す深淵である』(Siegfried: "America Comes of Age" p. 108)

行きつく道はたゞ二つある。

一はタスケギー大學の一派、教會聯合派の人々がいふやうに、黒人の社會的進歩と、白人の反省により、兩人種が共存共榮の道に進んで、そこに融和が出來るからである。

第二はスコット・ニアリングが論ずるやうに『米國黒人の解放は、資本主義組織の下に在る如何なる被支配階級もがそうであるやうに、黒人勞働大衆が、白人勞働大衆と手を握つて、個人及び階級搾取の上にたてられた經濟、社會組織を破壊し、勞働者支配の下に共同的經濟的組織を以てこれに代へる時にのみ來る』かである。(昭和五・五・二〇)

人肉の腸詰

——世界怪奇實話VII——

牧逸馬

1

「こら、何故お前はそんな所に寝てゐるんだ。」

フリッツ・ハアルマンが斯う聲を掛けると、古着を叩き付けたやうに腰掛けに長くなつて眠つてゐた子供が、むつくり起き上つた。獨逸サクソニィ州ハノウヴァ市の停車場待合室は、電力の節約で、巨大な土窖のやうに暗い。ハアルマンは透かすやうにして子供の顔を見た。一九一八年十一月廿三日の眞夜中だつた。霙を混へた氷雨が、煤煙を溶かして、停車場の窓硝子を黒く撫でてゐる。大戰後間もなくのことで、廣い構内には、火の氣一つないのだが、それでも、拾ひ集めた襤褸片や紙屑等で身體を圍つて、ベンチにぐつすり寝込んでゐたフリイデル・ロッテは、突然呶鳴り付けられて喫驚撥ね起き乍ら、は、あ、刑事だな。警察へ引つ張られて保護とか言ふ五月蠅い目に遭はないやうに、例ものやうに此處で謝罪つて終はふと、十二歳の少年だつたが、浮浪兒に特徴の卑屈な、そして、既う職業的になつてゐる笑顔を作つて、その、自分を覗き込んでゐる男を見上げた。それは、少年の微笑と言ふよりも、娼婦が、誰にも敎へられずに何時の間にか體得する、手法的な媚びに近かつた。それ程、フリイデル・ロッテは、惱殺と言つて好い位の美少年だつたので、起したフリッツ・ハアルマンの方が驚いた。

「何うしたんだ。お前家はないのか。」

彼は少年の肩を掴んで荒々しく搖すぶりながら、顔はにやにや笑つてゐた。この、本篇の主人公、ハノウヴァ市の肉屋フリッツ・ハアルマン——Fritz Haarmann——は、まづ何よりも先に稀代の男色漢だつたのだ。

Saxony の Hanover 市からライプツイヒの方へ少し南下した所に Weetzer といふ小都會がある。Friedel Rothe は、このウヰッツエル町のピアノ調律師ラインハルト・ロッテの息子だつた。其の珍しい美貌が禍して、性來少からず不良性を帶びてゐたかも知れないが、この十二歳の少年の性格を破壞したのは、矢張りあの大戰だつた。町の壯青年は全部出征する。フリイデルの父親もその一人だ。戰爭といふ國家興亡の非常時に際して、日常の德律は些少しか云爲されない。フリイデルは何時しか不良少年の群に投じて、ハノウヴアを中心に放浪生活を續けてゐた。ハノウヴアは、地圖で見ても判る通り、伯林、ハンブルグ、ブレメン、ドユツセルドルフ、ケルン、フランクフルト、ライプツイヒ等、四通八達の鐵道線路が網の目のやうに集つてゐる中點である。歐洲大戰の直後、此市の停車場のプラツトフオウムと待合室は、日に何囘となく各方面からの列車によつて吐き出される避難民と浮浪者の大群で、名狀す可からざる混雜を呈してゐた。或る者は炊事道具を持ち込んで停車場で生活してゐる。或る者は遊牧の民に還元して、停車場を足溜りに家族を引き伴れて食を漁る。そしてその大部分は、全國的な食糧不足、家庭の離散、社會的不安、それらの肉體的及び精神的飢餓に追ひ立てられて町から町を浮動してゐる、十代の少年だつたといふことは、想像に難くない。彼等は、仔犬のやうに互ひの體溫で煖め合つて、空貨車や無蓋車の中、プラツトフオウムの隅、待合室の腰掛けなどで夜を明かすのだが、フリイデル・ロッテもその一人だつた。

同市ツエラルストラツセ廿七番――27 Cellarstrasse は、停車場と公設市場の中程にある、赤煉瓦の煉んだ、低い建物で、愛嬌者の肉屋フリツツ・ハアルマンの店として附近に知れてゐた。ハアルマンといふ男は、寫眞で見ると、丸顏にちよび髯を生やして、快活な圓い眼をした、中肉中背、と言ふより、幾らか脊が低くて小肥りの、呑氣さうな人物である。附近の公設市場をぶらぶらして、仲買人の手を經ずに、肉類を協定價額以下にこつそり仕入れて來て賣るのが、このハアルマンの商賣で、ツエラルストラツセの店には、一通り牛豚鳥類の肉が置いてあるのは勿論、冷藏庫、賣臺、計量器、肉切臺、各種の庖丁等、備品も立派に整ひ、裏街の小店ながら、普通の肉屋の體裁を備へてゐた。ハアルマンは三十三歳。獨身だつた。店員も置かず、身の周りから店の事まで、萬事獨りで遣つてゐた。勿論、人を置く必要のない程小さな商賣だつたが、それよりも、他に人を置けない理由があつたのだつた。

このツエラルストラツセ廿七番の肉屋の店に立つて、「血だら

けな前掛け」をして襯衣の腕まくりをしたフリッツ・ハアルマンは、毎日緋ら顔をにこにこさせて、肉を切つたり腸詰を作つたりしてゐる。肉屋の「血だらけな前掛け」は、人の注意を惹く可く餘りに普通事である。傍らの鐵力罐に、大小の白い骨が一杯詰つてゐるのも、肉屋であつてみれば異とするに足らない。近處のお神さん連が肉を買ひに來る。町内の人が前を通る。時には立寄つて、煙草の烟りと雜談を殘して行く。平和且つ平凡なる裏町風景の一つである。ハアルマンは其の誰とも愛想よく應對して、斯うして「ツエラルストラッセの肉屋さん」は、界隈の人氣者だつた。店で肉を小賣りしてゐた許りでなく、行商にも出たといふ。御用聞きのやうなことをしたり、品物を擔いでお顧客を廻つたりしたのだらう。

知れてゐる限り、このフリイデル・ロッテ少年がハアルマンの最初の犧牲者といふことになつてゐるが、犯人は刑死に先立つて犯行の全部を自白した譯ではないし、何しろ、大戰直後のことで、人別、人の動き等平時には想像だも出來ない程混亂を極めた時代だから、少年の失踪、搜索願ひなどは各地の警察に徒らに山積して、その内幾割かが正式に受理されて法の發動を見たに過ぎない狀態なので、勿論確實な事は判明してゐない。が、兎に角、この第一のロッテ事件に因つて、肉屋ハアルマンの正體の何分の一かゞ其筋に知れて、當然其の意味での注意人物――變態性慾者――として或る程度の看視を受けるに到つた。と言ふのは、今もいふ通り、少年少女とのみ言はず、行衞不明の屆や搜査願ひは、ハノウヴァの警察にも氾濫してゐたけれど、もつと根本的な、一般的秩序の樹て直しに忙殺されてゐて、それらの比較的小さな事件には、殆ど、顧も拂はない、と言ふより、正確には、拂ふ暇のない有樣だつたのが、何ういふものか、このフリイデル・ロッテの搜索願ひだけは取上げになつて、しかも不思議にも、まるで針で指示するやうに、搜査の手は直ちに伸びてツエラルストラッセの肉商フリッツ・ハアルマン方を襲つてゐる。これでハアルマンといふ男に、烏渡ハノウヴァ市民の視線が集まつて、近處では大評判にもなつたのだが、併しそれは、皮肉にも、この人鬼の本然の姿を曝露したものではなかつた。單に鶏姦常習者として、寧ろ異常者に對する多分の憐憫と滑稽の眼を以て視られたに過ぎなかつた。

斯うである。

ウヰイツエル町のロッテの家で、母のゲルトルウト・ロッテ夫人が、家出した息子の身の上を心配して狂氣のやうになつてゐると、少年が失踪した二日目に、既に平和が回復してゐたので良人のピアノ調律師ラインハルト・ロッテが事務を解かれて

歸つて來た。そこで夫婦は相談して、近接各市の警察へフリィデルの搜索願ひを出したのだが、あの、フリッツ・ハアルマンがハノウヴァの停車場待合室でフリィデル少年に近づいてゐた頃、何う言ふ風の吹廻しか、其の搜索願の一つに動かされて、既に同市警察は腰を上げつ、あつたのだ。

ベンチに眠つてゐる所を叩き起されたフリィデル・ロッテは、ハアルマンを警察の旦那と許り思ひ込んで、專心哀訴歎願し始めた。事實また、このハアルマンは、勿論刑事ではなかつたが、その下働きのやうな格で、警察の仕事を手傳つてもゐた。所謂民間密偵(ストゥールピジョン)——囮鳩(おとりばと)——といふやつで、島渡妙な話しだが、これは後で説明する。が、日本で言へば、丁度江戸時代の岡つ引きに相當する役柄だから、好い事にして、署の者だ位言つたに相違ない。相手は、幾ら不良でも十二の子供である。許されないと知つて、頭へ上つてゐる美少年を急き立て、、肚に一物あるハアルマンは變態的な情炎を燃やし乍ら停車場を出た。その、二人伴れ立つて停車場を出る所を、同じ不良で放浪仲間の猶太人少年エリヒ・ホルトハウゼンが見てゐたのだが、ハアルマンは氣が付かない。

その後ツエラルストラッセの店の二階へフリィデルを連れ歸つて、其の夜は美食と暖い寢床を與へて休養させた後、翌朝少年に暴行を加へようとすると——以下は一九二四年七月三十日以後の公判廷に於ける犯人ハアルマンの得々たる陳述である——既に年長の惡友に依つてさういふ事を知つてゐたらしいフリィデル少年は、恐怖困迷等の色なく、却つて薄化粧までして大いにハアルマンの意を迎へ、その都度彼の慾望を滿足せしめたとある。斯うしてハアルマンは、十一月廿三日から四日間、この美少年と奇怪な生活を持つたのだが、その間(かん)、近處の者は、誰もハアルマンの家に少年の泊り客があること等は氣が付かなかつた。自白に依ると、冬の事で、高溫を保つた寢室に裸體にして監禁し、連日連夜弄んだと言つてゐる。が、廿七日に到つて、その寢室にも、少年の姿は見られなくなつた。

そして、翌日八日朝、ハアルマンは例によつて、「血だらけな前掛」をして、狹い店でせつせと「何か」の肉を切つてゐた。肉屋に「血だらけな前掛」は附き物である。傍らの鐵力鑵に大小の骨片が投げ込まれてあるのも、肉屋の店では見慣れた景色だ。近處のお神さん達が買出しに來る。ハアルマンの背後の壁に、釘(くぎ)に差さつて血の垂れてゐる大きな肉片は、「今朝早く屠殺した犢」である。軟かいこと請合だと言ふ。おまけに破格に安價い。仲買の手を通さないからだと説明し乍ら、ハアルマンは其の肉を切つて賣る。古くなると腸詰にするのだ。さうすると

又素晴しく美味く食べられるぞ——そんな事を言つて、愛想よく客に應對してゐると、店の前を町内の人が通る。

「お早う！」

「お早う！」

大盤の朝の挨拶、快活な冗談が投げ交はされる。時には、若い衆など店へ這入つて來て、喫煙と雜談で油を賣つて行く。平和で平凡な裏町スナップの一つだ。斯うしてツエラルストラッセの肉屋さんは、「威勢の好い兄哥」、「面白い小父さん」として、依然として界隈の人氣者だ。

2

地震で、大洋の海底が陥沒したとする。すると其處から、今迄吾れわれの識らなかつた、一見嘔吐を催すやうな、醜怪極まりない形態を備へた巨生物が這ひ出すかも知れない。丁度それと同じやうに、大戰は、一時完全に社會生活の秩序と常識を倒壞して、其の餘震最中に、茲に、普通時には現れることを許されない、正に嘔吐を催すやうな、人道的に醜怪極まりない一匹の人鬼を追ひ出したのだ。この、社會規約の弛緩した割目から頭を出した怪物——それは、ハノウヴァ市の、一人の陽氣な老の肉屋」の形を採つて、血だらけな前掛けをしてにこにこ顔で暴利を貪つてゐた。

肉屋に化けた人鬼 Fritz Haarmann の潜んでゐたハノウヴァ市は、大戰の餘炎を最も多く被むつた都會の一つだつた。戰時して取つ組み合つてゐる時は、疲勞も傷害の痛苦も餘り感じないが、いざ喧嘩が濟んで昂奮が收まつてみると、疲勞と痛苦が一時に襲ひ掛つて來るやうに、あの大戰に參加した各國は、平和克復と同時に、今更のやうに國内の疲弊困憊を痛感して、公安の樹立に向つて即時第二の開戰を餘儀なくされたと言つてい〻。その最も慘狀を呈したのが、戰敗國の獨逸だつたことは勿論である。物資の缺乏は全國を掩いて、洪水のやうな避難民の大群は、蝗蟲が襲來したやうに視野に入る凡ての物を食ひ盡し、食糧の切符制度など、此の急場に際しては燒石に水だ。都部を通じて、現實に饑餓に迫つてゐた。この時に當つて、フリッツ・ハアルマンの「商品」が、何らの疑問を受ける暇もなく、それ所か、市民の歡迎と感謝の下に、吸はれるやうに捌けて往つたに不思議はない。

警察は無力だつた。戰爭によつて人員と能率に大打撃を受けてゐる。しかも、其の覺束ない警察力で、戰前の穩良な、固定的な市民群に對したと同じやうに、この過渡時代の跳梁を抑さへやうと言ふのだから、初めから出來ない相談に決つてゐる。而

に當時のハノウヴァ市の公序を保つて往く爲には、その三倍の警察力を必要としたと言はれてゐる。斯かる致命的に不可能な狀態だつたから、當局は好い加減に、そして形式的に警察事務を管掌してゐたに過ぎない。暗黑、恐怖の無政府狀態が、完全にハノウヴァ市を包み去つてゐた。尤も、この人事的な理由以外に、この都會に特有な風土的理由が、一層當時の警察をして手も足も出なくしてゐたと言ふのは、元來ハノウヴァは、歐羅巴に於ける最も古い町の一つである。單に古い歷史を持つ許りでなく、今だに古い外貌を持つてゐて、鳥渡街を步いてみても、旅行者の驚異にまで、所謂近代味の侵蝕が甚だ尠いのを發見する。筆者は、外遊の砌、此市に小閑を偸んで數日遊覽の機を得たが、市街の一部は、何世紀前其儘の姿を殘してゐて、人氣の荒い、物淒い細民街を形作つてゐる。始終濡れてゐる、不氣味な暗い露地、影の深い小廣場、曲りくねつた細い橫丁、其處では、住民が一度結束して警察に背中を向けたが最後、兇惡な犯罪者の一個旅團が、極く僅少の發見の可能性の下に、長期に亙つて安全に生棲出來ると言ふのだ。今でさへ此の點で有名な都會だから、あの、凡ゆる窮乏、不潔、淫行、犯罪が公然と橫行した、大戰後の一九一八——二〇年頃の狀態は想像に餘りある。警察は有名無實、完全に封じ込まれた形だつた。

Cellarstrasse は、この恐怖區域を走つてゐる小さな往來である。ハアルマンの肉屋のあつたのは廿七番で、店といふより土穴の感じの、暗い、濕つた建物だ。前に言つたやうに、市場こぼれの肉を賣り乍ら、一方警察の券といふ、犯罪の巢窟に設置された特報機關、早く言へばスパイだ。英米で俗に謂ふ Stool-pigeon, 本朝では手先、あれを稼いでゐたと言ふが、これは、當時の獨逸では珍しい事ではなく、ハノウヴァにも、この種の其筋と密かに機脈を通ずる市民が無數に散らばつてゐて、フリッツ・ハアルマンはその一人に過ぎない。上記のやうな市の情況に直面して、窮餘の對應策として當局が案出した一種の補助機關で、これによつて極左團體と浮游人口の犯罪計畫を未然に嗅ぎ出さうといふ、その百鬼晝行時代の一つの必要から發生した制度だつたが、この、密告者として警察に接近してゐる筈のフリッツ・ハアルマンが、其の眼下で、あの言語に絕した犯行を職業的に繼續したのは、正に皮肉以上である。

尤もハアルマンは、初めから利用する心算で、カモフラアジユとしてスパイの役を買つたに相違ない。だからこそ、あれ程の犯罪があ、長く知れずに過ぎたのだ。それと言ふのが警察とハアルマンのやうな常傭間諜との間には、暗默の了解が成立してゐて、何うせスパイを稼ぐやうな奴だから、碌な事はしない

に決まつてゐるが、其處はお上御用の役に免じて微罪はお眼こぼしと言ふ事になつてゐた。つまり大の蟲を殺す爲に小の蟲に眼を瞑るのだ。餘り表面に出ない限り、大概の事は不問に附して與れる。土臺、警察としては、必要に迫られて遣つてゐることで、さうでなくても、小事件を顧みる時間も人手も無いのだから、その茫洋たる犯罪の大波の前に、內輪の者に等しいスパイの行動など、何ら注意されなかつたのである。斯う言ふ何から何まで快適な四圍の條件に乘つて、その狂暴な慾望が、フリッツ・ハアルマンを自在に推進させたのだ。武骨な、そして元氣な、人當りの好い「町の男」で、さう言へば、變質者によくある、きいきい引つ搔くやうな、高調子の、女性的な聲をしてゐた。

表看板の肉類は、附近の公設市場から、拾ふやうにして仕入れて來る。もう一つの肉は、これも附近の停車場で釣つて來て、其の食糧缺乏の日に、ハアルマンだけはストックに困らなかつた。流行る譯だ。相變らずにこにこして、誰彼となく輕い冗談口を叩き乍ら、「血だらけな前掛」をして肉を切つてゐる。自慢の腸詰を作つてゐる。この腸詰がまた評判物で、實によく賣れた。

さて、ロッテ夫婦のフリイデル少年搜索願を受理したハノウヴァ警察である。放浪少年の集まる場處と言へば停車場に決つてゐるから、私かに此の方面に眼を付けてゐると、漸て一つの聞込みが揚つた。失踪中のフリイデルの惡友で、エリヒ・ボルトハウゼンと言ふ猶太人の少年が、「フリイデルの奴は刑事に引つ張られて停車場を出て行つたきり歸らない」と言つてゐるのを、ちらと耳にしたのだ。停車場に張込む刑事若しくはスパイと言へば、警察には判つてゐる。何んな人相の刑事だつたかとボルトハウゼンに就いて訊問すると、其の供述はスパイのフリッツ・ハアルマンに、そしてハアルマンにだけ該當して來る。眞逆あのお人好しの肉屋が——とは思つたが、それでも、何が手懸りになるか判らないから、そこで刑事の一隊が、友人の家にでも遊びに行くやうな氣易さで、然し深夜不意に、ツェラルストラッセの店を訪れた。

警察の連中はよく來て皆勝手を知つてゐる家だし、それに、相手が獨身者の呑氣屋の事だからと、別に案內も乞はずに、のこのこ二階へ押し上つて、突然ハアルマンの寢室を開けると、一同は他氣に取られて終つた。

床に倒した椅子の脊と脚に、××の少年の××を縛して、ハアルマンが醜態を演じてゐる最中だつた。が、少年は既に目的のフリイデル・ロッテではなかつた。「ミミ」といふ十四

歳の矢張り美少年で、同じく浮浪兒だつたが、これは停車場で發見したのではなく、ツエラルストラツセの街上で會つて、甘言をもつて伴れ込んだのだつた。このレオン・グルンツは、斯うして警察の手に落ちて、××された許りで「犢の肉」にも腸詰にもならずに、危い所で助かつてゐる。フリツツ・ハアルマンは、現行犯だから仕方がない。この事件で猥褻罪として隣町ウンストルフの刑務所に九個月食らひ込んだ。警察を始めツエラルストラツセの人々が呆れ返つた事は、言ふ迄もない。が、玆に最も奇怪なのは、幾ら混亂時代の犯罪都市ハノウヴァだからと言つて、これで警察が、宛も滿足したかのやうに、當初の對象である筈のフリイデル・ロツチ少年の捜査をきつぱり打ち切つたことである。無證據として斷念す可きどころか、容疑者ハアルマンが意外な少年愛好者と判明した以上、勇躍してフリイデルの其後に關して一層追究しさうなものなのが、何ういふ意味かフリイデル事件はこれで一先づ立ち消えになつてゐる。この點は未だに說明されてゐないのみか、其の時、ハアルマン方の家宅搜索は愚か、醜行現場の寢室内さへ碌すつぽ檢分しなかつた證據には、寢臺傍に小卓が据えてある。その中段に、無造作に新聞に包んだ圓い物が置いてあつたのだが、それこそは、一行が探し求めてゐたフリイデルの生首だつた。後で裁判の時、ハアルマンがさう證言した。

3

獨逸腸詰の一種にフランクフルトと言ふのがある。一名ウヰユイとも謂つて、亞米利加邊りでは俗に hot dog と稱する。何故この腸詰を熱い犬(ホツト・ドツグ)などと變な名で呼ぶかと言ふと、一體腸詰なる物には、何の肉が這入つてゐるか知れたものではないとなつてゐて、このフランクフルトは犬の肉で出來てゐると言ふのだ。勿論滑稽めかした惡口に過ぎないが、野犬か何か撲殺した、其の肉を詰め込んだのが此のフランクフルト腸詰(ソオセイヂ)で、だから犬(ドツグ)だと言ふ。この妄說から出て、次ぎのやうな笑ひ話がある。

子供が、長いこと肉屋の前を往つたり來たりして、頻りに店の奥を覗くので、肉屋の主人が五月蠅がつて、到頭怒り出した。

「おい、小僧、何だつてそんな所に立つて見てゐるんだ。」

すると子供は濟まして、

「僕の犬が居なくなつちやつた。」

「なに? お前の犬が居なくなつたつて、何も俺の知つたことぢやないぢやないか。」

「さうかも知れないけど、でも、變だなあ。僕が此邊で口笛を吹くと、あの、向うにぶら下がつてる腸詰がひらひら動くよ。」

と言ふのだが、これは犬の肉だから笑ひ話しで濟む。

一九一九年の九年にウンストルフを出獄したフリッツ・ハァルマンは、其の足でハノウヴァへ歸つたが、ツエラルストラッセの古巢へは這入らなかつた。直ぐ近處の横丁で、103 Neuestrasse に新居をトして、矢張り肉屋を始めた。ハアルマンが異例の活動に入つて、四十八人の少年を××し虐殺した其の大部分の犯行は、實に此のノイエストラッセ一〇三番の家と、後に移轉したロッテ・ライルの古い猶太區(ゲットウ)に於て爲されたものである。

この四十八人と言ふ數は、公判でハアルマン自身が豪語したところで、裁判記錄には、左の廿八名だけが犠牲者表として登載されてゐる。

一、Friedel Rothe 十二歲。ウヰイツエル在。
二、Fritz Franke 十七歲。伯林。
三、Wilhelm Schulze 十一歲。伯林。
四、Roland Huch 十五歲。オスナブルック市。
五、Hans Sennenfeld 廿歲。伯林。
六、Ernst Ehrenberg 十三歲。ミユンステル。
七、Heinrich Struss 年齡不詳前住所。
八、Paul Bronischewski 十五歲。Boehum在。
九、Richard Graf 十七歲。ハノウヴァ市。
十、Wilhelm Erdner 十七歲。
十一、Hermann Wolf 十六歲。ミンデン町。
十二、Heinz Brinkmann 十三歲。ハノウヴァ。
十三、Adolf Hennies 十七歲。ポッダム。
十四、Hans Keimes 十七歲。ドレスデン。
十五、Ernst Spiecker 十七歲。伯林。
十六、Heinrich Koch 十八歲。前住地不詳。
十七、Willi Senger 廿歲。ヘルツベルヒ在。
十八、Hermann Speichert 十五歲。ミンデン近郊。
十九、Alfred Hogrefe 十七歲。伯林。
廿、Robert Witzel 十七歲。伯林。
廿一、Hermann Bock 廿三歲。ミユンステル。
廿二、Wilhelm Apel 十六歲。ヒルデシャイム。
廿三、Heinz Martin 十六歲。ハノウヴァ。
廿四、Fritz Wittig 十七歲。ハノウヴァ。
廿五、Friedrich Abeling 十歲。ラレンドルフ町。
廿六、Friedrich Koch 十六歲。前住地不詳。
廿七、Erich de Vries 十七歲。ハノウヴァ。
廿八、Adolf Hannappel 年齡前住所不詳。

ハアルマンは前科者で、一九一八年に出獄して、ツェラルス

トラッセ廿七番に落着いたのだつたが、それから最後に捕縛されるまで、本人は四十八人の少年を、誘拐、監禁、暴行、殺害、人肉賣り、腸詰製造の順序で「處分」したと誇稱してゐるが、人間一人の生死等何方へ轉んでも大した問題にならなかつた。ごたごたの最中の事だから、勿論正確な數は判つてゐない。が、フリイデル・ロッテ事件から起算して、大體二週間に一人の割りで殺したことになつてゐる。

これらの少年は凡て戰爭の生んだ浮浪兒で、當てもなく家出して來たハノウヴァの停車場内外に乞食同然の生活をしてゐたものだ。闇黑に呑まれ去つたやうに消息が斷ち切れて、發見の可能性もなく、警察へ屆け出ても眞劍に動いては呉れず、兩親達は何うすることも出來ない。常に何十人の、時として百に餘る此の家出少年の群が、殊に夜になるとハノウヴァの街上から停車場に集つて來て、明日の食を獲る眼當てもなく、待合室の腰掛けに重なり合つて眠つてゐた。其處へ、刑事を裝つたフリッツ・ハアルマンが毎夜のやうに現れて、少年を起して廻る。

斯うして彼は、其の變態性を唆る美少年を物色したのだ。疲れ切つて慾も得も無くなつてゐる子供達の上に、警察を仄めかすハアルマンの脅しは利いたに相違ない。眠りこけてゐる少年等の顏を覗き廻つて、これと思ふのを發見すると、彼は威猛高に起しに掛る。

「こら、何故お前はそんな所に寢てゐるんだ。」

この聲は、それに依つて呼び起された少年にとつて、正に運命的なものだつた。死刑の宣告にも等しかつた。眼を覺ましてみると、私服らしい赫ら顏の男が、叱るやうに睨み付けて突つ立つてゐる。が、その少年が相當愛くるしい容貌の所有主であれば、漸てハアルマンはにやにやし出して、幾分次ぎの言語を和らげるのだ。

「お前家はないのか。」

そして、少年の型と出樣によつて、或る者は本署へ連行すると稱し、或ひは、飯を食はしてゆつくり休ませてやると誘つて難なく停車場から伴れ出してツエラルストラッセや、後には、ノイエストラッセの肉店の二階へ街へ上げる。固い冷い脚掛けよりは警察のはうが好いと考へるのもあらうし、兎に角食事にありつけると言ふので、皆いそいそとハアルマンに從つて停車場を出てゐる。そして、出たきり歸らない。其の内誰も、生きて再び見られた者はなかつた。

が、依然としてフリッツ・ハアルマンは、愛嬌者の「街の肉屋」だつた。朝早くから快活に仕事に就いて、せつせと肉を切つてゐる。「血だらけな前掛け」をして、鼻唄混りに肉を叩い

てゐる。大きな骨から、肉を引き離してゐる。骨は、足許の鑪力鑪へ山のやうに投げ込まれる。肉は肉で、血の垂れた儘、背後の壁の釘に刺して下げて置く。新鮮な犢の肉だ。少し古くなると、腸詰に拵へる。フリッツ・ハアルマンの店は、何時來て見ても、ストックが豐富だつた。冷藏庫には、小さく切つた肉片が、各段にきちんと竝べてあつた。血と肉と骨は、肉屋の店の日常の光景である。人は少しも奇異の感を抱かないし、店主ハアルマンは日増しに血色好く、陽氣に、呑氣に、小肥りに、界限の道化者になつて往つた。若い衆が入り交り立ち代り店へ這入つて來て、馬鹿話をして往く。前を通る町内の誰れかれにハアルマンは肉の上から大聲の挨拶だ。

日が經つた。

この「肉屋に化けた人鬼」フリッツ・ハアルマンの逮捕となつた直接の證據は、一枚の外套だつた。それは、犧牲者中の最年少者、廿五番に出てゐるフリイドリッヒ・アベリング——十歳。ラレンドルフ町——の外套だつた。が、これより先、丁度其の頃、ハノウヴァ市クロステルストラッセ二二一番に、Hebrert Grans といふ圖書館員が住んでゐた。息子を Hans Grans といつて、廿四になる。

——本稿次號完結——

新著月評

改造社版　社會科學大辭典

林要

今度、改造社から出た『社會科學大辭典』を批評せよといふ命令を、ツイ返事をしないでゐるうちに斷るにも義理のわるいハメになつてしまつたが、考へてみると、右『辭典』の編輯委員に名前をつらねてゐる私が、『批評』を書くべき筋合ではない。賞めれば提灯と見られ、貶せば無責任の譏をまぬがれぬ。委員としては、事實、全く無爲無能だつた私に、出來榮へについての名譽を頒つべき資格は毛頭ないが、責任は囘避しえないであらう。だから、かやうな私の立場を明言した上で、私はこの『辭典』を前にして私の思ふところを率直にのべることにしよう。

◇

社會諸科學はむしろ新らしい學問であるがその重要性は今日著しく増しつゝある。しかし、それらの全分野をふり返つてみるとき、それらは新たに讀みなほされ、書きなほされ、そして今一度、全的關聯のもとに見なほされねばならぬ必要に迫られてゐる。

ひところ、谷崎潤一郎氏などが、口を揃へて、"わが國語の墮落を歎じてゐられたやうであるが、しかし、それは、要するに、世相の變遷の反映でしかない。この正月のこと、だしぬけに『君はドイツ語と日本語とどつちが讀みいゝか?』と、教養ある一老牧師に尋ねられて、私は一寸返答に窮したが、それほど今日の日本語はわかりにくいといふのであつた。――が、ほんとに解りにくゝなつたのは、言葉ではなくて、今までの言葉では言ひ現はせなくなつた社會生活そのものなのである。太初に言葉があつたか行爲があつたかは別として、言葉は少なくとも思想の道具であり、意識の表示者である。さうして意識は社會的に決定されるから、『社會』の全表情に敏感なものでなければ、とうてい生きた言葉を話すことなどはできない。國語の頽落を悲しむ前に、われわれは、ぜひ今日の『社會』の風丰をとらへねばならぬ。この全風丰を示さうとするのが、この『辭典』の抱負の一端でもある。

◇

社會科學辭典としては、まづドイツの『國家科學辭典』(Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4 Auflage) が有名である。また先頃アメリカのセリグマンの監輯のもとに第一分冊を刊行した『社會諸科學百科辭典』(Encyclopaedia of Social Sciences)は、五ケ年計畫で今後毎年三冊づゝ發行し十五册をもつて完結する豫定だといふ。――前者は、各項目につきハンドブック的に詳論した一種の叢書とも見るべきものである。したがつて、項目數は少なく、諸科學の綜合的理解の何らの用意もない。のみならず、普通の辭書類と同じく、批判的な理論や運動にたいしては極めて排外的である。――セリグマンのものは、その序文によると諸科學の關聯に盡分努力しようとしてゐるやうであるが、第一冊によつて察すると、それも社會科學の概念やその發達史を劈頭に概說するだけに終るのではないかと危ぶまれる。――わが國にも小さなものが一二あるが、今日の知識と經驗との水準に充分滿足を與へることはできないであらう。

本『辭典』は、社會情勢の進展と社會科學との關聯、したがつてまた多樣化せる是れら諸科學の綜合理解、といふことを第一に努める。それは結局、發展史的見方を基礎とするものであつて、各國別に『資本主義の發達』や、諸產業の歷史や、『社會主義運動史』などのごとき動態的記述を要する項目の多いのは、これがためである。

かゝる意圖は、項目の種別や配合のうちにも認められるであらう。けだし、社會構成の基本的關係は經濟であり、この經濟關係の矛盾の發展は社會運動や勞働運動を必然的ならしめ、やがて政治的な形態にも進み、つひには哲學、倫理、宗教、自然科學などにも影響するのであるが、いま項目數の振りあてを見るに、總數二、四二四のうち、七百餘の人名を別にすれば、經濟に關するものは七百餘、社會運動、勞働運動に關するものは四百、政治に關するものは三百五十、そして哲學、論理、心理、倫理、美學、宗教、自然科學などに關するものは一括して三百であり、最後に法律に關するものは五十である。

◇

生きた社會を生きた言葉で捉へようとする此の『辭典』は、勢ひ、社會の進展において批判的地位にある理論や實踐についても、其のよしあしはともあれ、正確な概念を與へることに努める。これは全般にわたる特徵であるが、一二の例を示せば、『マルキシズム』や『レーニニズム』は素より、『社會主義』『社會思想史』や諸種の『インタナショナル』をはじめ、『唯物史觀』『唯物辯證法』などの項目は、できるだけ網羅してある。また、歷史上特殊な地位を占めるロシアの事情についても、おそらく他の類書に比し誇るに足る豐かな材料を提供してゐるであらう。

◇

次に、この『辭典』は、われ／＼に最も關心の多い日本や支那に關する正確な知識を與へようとする善き意圖をもつてゐる。日本について特に詳しいのは當然であるが、一般的な諸項目のほか、『日本恐慌史』や『日本思想史』等をはじめ、『日本婦人運動史』『日本學生運動史』、『明治維新史』『日本新聞發達史』等々から、進んで『三井』や『三菱』があるか、思へば、『樞密院』、『赤旗事件』、『米騷動』。さては『大逆事件』、『虎の門事件』があり、また人物には『有島武郎』、『大杉榮』、『安部磯雄』があるかと思へば、『西園寺公望』や『小村壽太郎』があり、『石川啄木』もあれば『大[illegible]八郎』もある。

支那は今や日本にとつてのみでなく、まさに世界注視の的であるが、これに關しては普通、適當な資料や文獻さへも手に入れがたく、多くの識者の間にさへも甚だしい知識の缺乏が支配してゐる。このとき、その正しい理解を喚起することは、『辭典』の一つの使命であつた。人物では、今日支那動亂の立役者たる『蔣介石』や、反蔣側の『閻錫山』および『馮玉祥』などの顏ぶれも見え、『孫文』や『袁世凱』は言ふまでもない。――さらに一般支那の經濟に關する諸項目や、『支那の幣制』『支那關稅問題』等々をはじめとして『支那におけるプロ文學戰線と其人物』から、進んで社會運動方面では、『中國共產黨』や『中國學生運動』等があり、さらに『五卅事件』、『五四運動』から、『土豪劣紳』や『紅槍會』の說明にまでわたつてゐる。

◇

この『辭典』の今一つの特徵は記述の新しいことである。『京大學生事件』があり、『三・一五事件』があり、『福本イズム』があり、『山本

宣治』があり、『武漢政府』があり、『便衣隊』がある。その他の記述も、必要と可能なかぎり、一九二八年末ないし二九年九月原稿締切までの事實に關說されてゐる。

なほ、近時の一主要論題たる帝國主義に關聯しては、各國の『帝國主義』や、また特に吾々に關係の深い朝鮮、臺灣、印度などにたいして比較的多くの紙幅が割かれてゐる。

その他、すべての項目には、英、獨、佛の三ケ國語、また必要に應じては、ロシア語、イタリー語、ラテン語、ギリシヤ語が挿入され、支那人名については索引において英字で發音が示されてゐる。たとへば『蔣介石(Chiang Chich-shih 北京音—Chiang Kai-shih 上海音—Chiang Kaishek 廣東音)』のごとし。——各項目の終りには參考書を揭げて一層の研究に便し、卷末には約一萬(九、八九〇)の詳細な和文索引と、別に詳しい歐文索引とが添へてある。——四六倍版、全部六號三段組、本文一二六九頁、索引一三一頁。

◇

今日、社會科學に關する辭典は、事の性質上、單に專門家や一部學徒の書架に獨占さるべきものではない。いまや一般大衆の日常經驗は大いに高められ、たゞ惜むらくは正しい全體的な物の見方の訓練を缺いてゐるのである。たとへば三面記事や小說欄にも刻々展開される一々の出來事が、いまや單に偶然的な其の場かぎりのものとしてゞはなく、全社會的な關聯と意味とにおいて正確に理解されんことを、吾々に求めてゐるのである。この理解の鍵を全體的見透しの上から與へようとする時、もはや辭典なるものは日常生活に緣遠い乾燥無味なものでなく、どのページを開いても興味のつきない一の生きた讀みものでなければならぬ。かゝる『讀みもの』たらうとすることも、此『辭典』の願ひの一つではある。

◇

私は以上主として形式的に項目の上から判斷し、內容については『辭典』の編纂方針が示現してゐると思はれる意圖だけにしか觸れなかつた。社會思想社『創立以來の宿案』(序文)たる此の共同事業が、それ〴〵、わが一流の諸家約百名の熱心なる援助のもとに完成されたことを竊かに喜ぶとはいへ、編輯上の不備缺陷も素より少なくないであらう。私自身の目にふれた一二の點について言つても、まづ目次に『言論自由』が『亡論自由』と誤植さ

新刊紹介

財界巡禮記(神長倉眞氏著) 過去六十年間に於ける我實業界の異常な發達の因由を討ねあはせて其將來をトせんとせるもの、奉仕主義人道主義にたつ產業哲學で全篇が貫かれ終始樂觀的である態度が目につく。(四六判三二〇頁、定價一・五〇 千倉書房)

ナンセンス・ジヤパン(報知新聞調査部編) 洗煉された愉快なナンセンスな笑話二百餘編を收む。最近報知新聞に連載されて絕大な好評を博せるもの。(四六判三一七頁、定價一・五〇 千倉書房)

藝術學研究 その第二輯、クロオチエの「純粹直觀と藝術の抒情性」石井漠の「舞踊論」、林武の「繪畫論」等を收む。(菊判一四五頁、定價二・〇〇、第一書房)

沙上の足跡(グウルモン著、堀口大學譯) 久しく絕版であつた本書の出來を喜ぶ。(菊判三〇〇頁、定價一・八〇、第一書房)

めでたき風景(小出楢重著) 鮮新な感覺、澄明な敍述を持てる感想の斷片を收む(四六判二七五頁、定價一五〇、創元社)

小型映畫の研究 北尾鐐之助、鈴木陽著) 近い將來に於て私たちの近代生活を色々に彩るであらう所の小型映畫に關する親切な入門的概論(四六判四七頁、定價三・五〇創元社)

夢の註釋(フロイド著、大槻憲二譯) フロイド精神分析學全集の第一卷、譯は主としてフロイドの著書中最も重要浩翰なるDie Tr

れ、『五卅事件』の說明には事件發生の年の記入が洩ちてゐた。なほ、日本や支那の年號には一々西曆を挿入して世界史的關聯に便せしむべきであつたらうし、また『モツプル』と、もに『ナツプ』のごとき項目も當然加へらるべきであつたらう。等々。――もしそれ內容上の詮索に入るならば、加工すべき點は少なくあるまい。たゞ、適當に範とすべき此の種辭典の缺けてゐるとき、理論と實踐との發展的統一の視角のもとに全社會事象の把握を出來るだけ『體系』づけようとする最初の試みとして、一應の成功に、與が自ら慰めるところがないではないが、しかし、今日の社會情勢において、此の種社會科學辭典のもつ意義の重大性に鑑み、われ〳〵は今後とも大方の峻嚴な批判のもとに、責任をもつて、その加工、改善、追補を怠らないつもりである。(六月五日)

アメリカ資本主義發達史

石濱知行著

佐々　弘雄

1

「經濟史概論」で一般理論の研究を試みた著者が最近千倉書房から「アメリカ資本主義發達史」を上梓された。讀後の第一印象は、それが決して際物的のものでなくガツチリした學問的研究であることだ。同時に其の暢達の運筆はよく一般讀書子にもむく所以であらう。

端的に、本書の目的は「アメリカ文化の基礎をなす經濟制度變革の歷史の鳥瞰的觀察」にあり、それで資本主義發達史の題名が生れた。資本主義發達に作ふ勞働運動社會運動の歷史は割愛してゐるが、資本主義最近の相たる帝國主義研究については近く「アメリカ帝國主義論」によつて試みられようとしてゐる。

この帝國主義研究と本書を併せて、著者のアメリカ經濟史が完成されるわけであらう。そしてこのアメリカ研究は惟ふに「經濟史概論」の各論的部分或ひはまた具體的研究の第一着手を意味するであらう。

本書が偶々アメリカ研究の風潮に際會しそのトツプを切るの感があるが、著者にとつては實はかゝる經濟史體系完成途上の一輛に外ならざるものと推察される。

2

アメリカは今日では資本主義の先頭に立つてゐる。從つて今日の資本主義的經濟組織段階に於ける諸相はアメリカ經濟のうちに、模

[illegible]に由つて居る。（四六判三〇六頁、定價一・五〇、作品社）

靈と人生（小林敏滋著）　趣味、食品及び治療の對象としての靈を科學的にとく。（四六判一一七頁、定價八〇、栗田書店）

續財界太平記（白柳秀湖著）　明治大正昭和の六十餘年間を一貫して、資本主義經濟組織の軌道上を進行しきたれる既成政黨の政權爭奪史である。本書に於ては、日露役戰役以後大正六年迄を取扱ひ興味深甚。蓋し高次性を持つ大衆的讀物として推薦さるべく、「續々財界太平記」の一日も早く世に出でんことを待つ。（四六判四五九頁、定價二・〇〇、日本評論社）

貝寛さま（相馬御風著）　子供のために書かれた良寛ものとして隨一であらう。（四六判二〇二頁、定價一五〇、實業之日本社）

人類は祈る（宮川本悠著）　滯歐米二ケ年間の見聞記で、魂の窓から覗いた歐米社會を批判に見ることができる。筆者のオープン・マインドな筆には百パアセントの魅力がある。（四六判三六二頁、定價二・〇〇、小京堂）

聯想の異風（久野豐彥著）　新興藝術派叢書の一「月で鮒が釣れたら」外十二篇を收む。（四六判二五〇頁、定價五〇、新潮社）

失業問題と景氣恢復（上田貞村著）　失業及不景氣の問題と金融經濟との關係を研究せんとする試み。「失業問題と金融理論の研究」「景氣恢復と金融理論の研究」の二篇よりなり、著者の努力と博學とを覗ふに足る。（菊判二九六頁、定價二・五〇、第一書房）

同時に表現されてゐる。從つてまた、資本主義末期が包含する諸矛盾も亦そこにすでに發生してゐる。かゝる意味に於て今日のアメリカは、全世界經濟の中核かつ尖端を示すもので、その經濟的發展は最も研究されなければならぬところのものである。……かう云ふ著者の見解がアメリカ研究の動機と方法とを形成してゐるのだ。それで當然にアメリカと對蹠的地位に立つところのソヴエートイズムとアメリカニズムの相剋を基礎に置いてその研究を展開してゐる。この事は序論に於ても、結論に於てもハツキリと論じてある。

だから、一面に於てかゝる資本主義の現代相を起點として問題されたるアメリカ經濟史ともなるわけである。

南北戰爭——北部の工業および商業資本主義は南部の農業貴族主義に打克ち、ブルジヨアジーの勝利・躍進が十九世紀に於けるアメリカ資本主義爛熟期の發端をなしてゐる。この爛熟期の研究（第七章）と、それに引きつゞいて、世界大戰前後のアメリカ（第八章）に可成りの重點を置いてあるのは現代的關心に於て把握されたアメリカ經濟史と評し得る所以である。だから資本主義爛熟期にあつて、その帝國主義的形相の時代に立つてアメリカ資本主義の鳥瞰圖が展開されてゐるわけである。

3

だからと言つて、決して古き時代が割愛されてゐるわけではない。資本主義以前たるアメリカ革命、植民地時代のアメリカ、アメリカ發見へとその研究は溯及してゐる。歷史以前のアメリカ・インディアンの民族制度にさへその研究は及んでゐる。

だから一面に於てレーア・ブーフとしての知識をも提供して吳れるのである。殊に引用を明瞭にし、參考書を擧げ、且つ索引を添付してあるので頗る便宜である。

アメリカニズムの世界的制覇の時代に於て、合理化運動の基礎がアメリカ化であり、軍縮の方向がアメリカ・フアーストであり、國際政治がフーヴエリズムにより引きまはされるのは寧ろ當然であらう。そしてアメリカニズムの理解はその基礎の解剖によつて、はじめて可能である。アメリカ資本主義研究はこの意味に於て、現代を知らんとするものの不可缺の條件である。この條件を本書はある程度よく充たして吳れる。それで、かゝる社會的知識の一般的レーア・ブーフでもあり得るのだ。（千倉書房）　（1930・5・28記）

音樂藝術史（大田黒元雄譯）　一般好樂家乃至讀書人を目當てにかかれた音樂史全野の概觀、グレゴリイ聖歌より最近のロシヤ樂派に至るまで要領よくまとめられて居る。（菊判三五五頁、定價二・八〇、第一書房）

直觀の自然科學（酒井市郎著）　著者はアインシタインの相對性原理に反對して絕對性原理を主張する。本書は自然科學的認識の體系樹立の試みで數學上及物理學上の基礎を直觀の直接的確實性に置き、遂に一種の神祕論に踏入して居る。（菊判二一四頁、定價二・〇〇、白揚社）

能率祕話（上野陽一著）「事業失敗の祕訣十二ヶ條」「暦の合理化運動」「ロシア勞働研究所をみる」「支配人性の發見と敎養」等趣味多き項目十六篇を收む。（四六判三〇四頁、定價一・五〇、千倉書房）

借家人のための法律と戰術（武藤運十郎著）　家賃値下げの戰術、立退き拒否の戰術等を敎へ、借家に關する一連の法律の正體を曝露して居る。（四六判一八五頁、定價八〇・希望閣）

女優生活二十年（森律子著）　明治の末所謂新女優の募集されたとき、それに應じて帝劇第一期生となれる著者が、過去二十年間の喜び苦みを描き樂屋裏を覗かせて、女優生活の半面を傳へたもの。興味の深い書だ（四六判三二〇頁、定價二・〇〇、實業之日本社）

文藝時評

正宗白鳥

樋口一葉の日記と國木田獨歩の日記とには、明治時代に文學に志した若い男女の實生活と心境とがよく現はれてゐて、小説以上に興味のあるものだが、これ等の作家が如何に貧乏であつたかといふことが、ことに我々の心を打つのである。明治時代の文學者は多く夭逝した。その重な原因は貧乏であつたと云つてもいゝ。あの頃に比べると、近年は概して豐かになつた。たゞ、あの頃は、一切平等に貧乏で、作品の通俗性に於ても文壇の名聲に於ても第一位を占めてゐた紅葉山人でさへ、讀賣新聞から與へられてゐた月給は、百圓が頂上であつたと云はれるほどだつたが、この頃は、流行作家と不流行作家との收入に、非常の差が生じて來た。他の社會と同樣に貧富の懸隔が烈しくなつた。從つて、豐かな者の得意な振舞と、乏しき者の不平の色は、自から目立つやうになつた。同じ貧乏にしても、衆とゝもに貧乏なのは忍び易いが、他の驕奢な生活振りを見せつけられたり聞かされたりしながら、陋巷に窮してゐるのは苦しいに違ひない。假りに、作家自身は境遇に安んじるとしても、妻子は甘んじてゐないだらう。物質に成功した知人に比して、自分の夫を甲斐性なしとして侮蔑する妻があるかも知れない。それで、そろ〳〵明治文學を復習してゐる私は、あの時代と今日とでは、作家の心構へが違つてゐることに氣づくのだ。

私などが文壇に出た時には、明治も末期となつてゐたのだが、その時分にでも、發表機關はさう多くはなかつた。私など、當時の新進作家として歡迎されてゐたが、中央公論の增大號に少し長いものを書くくらゐを主要な仕事としてそれを書

いてしまふと、一月二月ぼんやりして暮すのを例としてゐた。原稿料だつて、一枚一圓五十錢が頂上で、とても贅澤な生活なんかしてゐられなかつた。プロレタリアといふ言葉が流行しない時分に、大抵の作家はプロレタリアの生活を體驗してゐたのだ。だから、十年ほど前から、原稿料が鰻上りに騰貴しだすと、不思議な感じがした。書く場所が多くなつたので、自然濫作するやうになつた。作家全體を通じて見ても、概して、大正の作家は明治の作家よりも、製作に苦心してゐなかつたことが、私の目につくのである。二葉亭紅葉一葉綠雨、その他明治の作家は、酬ひられるところが少かつたに關はらず、おろそかに筆を取らなかつた。貧乏は作家の宿命であると感じたやうに、他日、自分達の著書から巨額な印税が入ることなんか夢想もしなかつたに違ひない。

しかし、私は、明治の作品が必しも大正の作品よりも勝れてゐると思ふのではない。何事でも新たに道を拓く人は、いろ／＼な無駄をして、勞多くして功少き結果に陷るのが常例で、明治の作家が文體に苦心したことも骨折損の草臥儲けだつたかも知れなかつた。大正の文學はずつと自由になつた。昭和時代となると、一層自由になつた。明治文學を讀馴れてゐる私には、今日のいろ／＼な雜誌に出てゐる新作家の小說の書き振りが、屢々拙惡に思はれてならないが、好意をもつて見れば、そこに、型に捉はれない自由があると云つてもいゝ。神代種亮氏編輯の「校正往來」といふ特種の雜誌に、坪內博士の「文字と用語」に關する談話が揭げられてゐるが、その中に、「若い人の作品には、感心するものもある。私なぞの及び難い文章が有る。旨いと思ふものが有る。併し論文には感服しない文章が多い。更に飜譯に至つては、泣いていゝのか笑つていゝのか解らないやうな文章が有る。一體同じ時代の若い人の書いたものを、相當の學識ある老年者が讀んで、內容は兎も角も、其の文章の意味を解し得ないと云ふやうなことが有るべきものだらうか。」と云つて、博士は、拙惡な用語の實例を幾つか示され、「方言を對話の中に用ゐることは有るけれども、地の文は作者の言葉であるから、標準語を用ゐるべきものであると思ふ。總じて辭書に無い言葉を使ふことは私は不贊成だ。今のまゝでは、日本の國語辭書と云ふ

ものは永久に出來ないことになる。そもく字引の無い文化國が世界の何處に在るだらうか。文學は文字の藝術である。一字一語、動かすべからざるものであると共に、言葉の調和と云ふものを考へねばならぬのであるが、今の人は之を何う考へてゐるだらう」と、所論を結ばれてゐる。明治文學最初の開拓者であつた博士がさう思はれるのは當然である。明治の重なる文學者は博士と同樣に、文學は文字の藝術であるといふ考へを抱いてゐて、そのために苦心してゐた。自然主義の勃興した頃から、この考へは衰へ、マルクス主義文學が幅を利かせてから、文字に對する尊重心は一層乏しくなつた。乏しくなつたと云つても、文學は文學である。西洋の文體を眞似たりして、清新な表現法は、自然主義時代にも試みられた。私のやうな文章の下手な者も、相當に努力した。如何に書くかといふことは、絶えず心に掛つてゐた。本當に自分の心にあることを生きくと現はしたのなら、自分に取つては、一字一語動かすべからざるものでなければならぬので、それが動かされてもいゝものなら、現はさうとした考へもどうでもいゝアヤフヤなものなのだ。明治の文學には、粉本によつて描いた繪のやうに、生氣のない美辭麗句が羅列されて、言葉の調和も死語の調和になつてゐるものが少くないので、自然主義以來、その死語の調和は蔑視され、美辭麗句も顧みられなくなつたが、それでも、修辭の工夫や文章の調和が全然沒却されたのではなかつた。近代歐洲の文體の變遷は、私にはよく分らないが、二葉亭や美妙の言文一致體創始以來、現今までの、小說の文體の變遷は、新日本の精神活動や趣味性の慌たゞしい動搖を如實に現はしてゐる。個々の作家の文章にその作家の人と爲りが現はれてゐるやうに、明治大正昭和の文章史に、新日本の風格が現はれてゐる。

殆んど同じ時代に作られた一葉と獨步との作品を比べて見ると、前者の文章は、源氏や西鶴の系統をひいた傳統的の[illegible]趣のあるもので、後者の文章には、傳統を脫した素朴な新らしさがある。「秋の空は晴れに晴れて、いゝ景色である」といつた調子で、物足らない感じがするが、直截な齒切れのいゝ言ひまわしに、今までの文章に見られない味ひが出てゐる。中央公論六月號所載の岩藤雪夫氏の「屍の海」を讀むと、この獨步調が思出される。獨步の素朴な文章も、人生の經驗が次

第に深まると、もに、含蓄の妙味を發揮して來たが、岩藤氏のには、噛みしめて味の出るやうな語句はない。直截で斷切れはいゝが、「晴れに晴れて、いゝ景色である」といふのと同樣な調子で、文章に陰影がない。文章に陰影のないのは、思想や人生觀察に陰影のないことをも示してゐる。しかし、この作家の文章は、今のプロレタリア系統の作家のうちでは、上手な部に屬するのぢやないかと、私には思はれる。この系統の作家は、この頃、西洋に起つた事件を屢ゝ題材としてゐるやうであるが、さういふものは、大抵借り物のやうで、よつぽど上手でないと、讀者の心にぴつたり來ないのである。この「屍の海」も、頻りに激しい言葉を用ひて、この借り物を生かさうとしてゐるが、それに脅かされるのは、幼稚な讀者である。明治文學の舊臭を帶びた美辭麗句も、この頃競つて用ひられる「激しい言葉」も、文章道から云ふと、同樣の死語であつて、作者の心に燃えてゐない感じを、刺戟的な文辭によつてさう見せかけるだけの者となつてゐると、私は思ふ。

刺戟的な文字の濫用は、プロレタリア系統の作家に限らないので、「新興藝術派」とか云はれる作家も、異つた意味で、刺戟的な文字を濫用してゐる。現今の世相がこゝに見られる。改造六月號の龍膽寺雄氏の「階段を降りる」も、その一例だ。自然主義時代の肉感描寫には、作家に氣が差して、露骨に言出すのを躊躇した趣きがあつた。享樂派の首領永井荷風氏などでも、淫靡な情緒を巧みに描寫しながら、わざと戲作者氣取りの言譯をよくしてゐた。この頃の新作家は、何の顧慮するところもなく、刺戟的な文字を喜んで用ひてゐる。西鶴のやうに技巧でひねくつた色慾描寫なんか無駄なことで、今は一切自由になつた。坪内博士の氣にせられた「方言」の濫用くらゐ、現代作家に取つては問題ではなくなつてゐる。外國語の濫用も流行してゐるが、自國語の尊重心は、國家意識の盛んな時に起るもので、國家意識の衰へた時には、國語の統一調和なんかどうでもいゝものとなるのではなからうか。先頃、村山知義氏の「日清戰爭」を題材とした戲曲を速讀したが、それによると、我々が少年時代に日本國民全體の血を湧かせた筈の戰爭が、本當は日本の人類のために誇らないものであつたらしい。あの時生命を犧牲にした將校や、兵士は、無意味な努力をしたと、作者は看破してゐる譯だ。新日本を極東に建設するためのあの日清戰爭が無意味だつたとすると、新日本の文學を作り出さうとした明治の作家の努力も

無意味であつたと云つてい〻だらう。今はすべてが混亂時代で、それを反映してゐる文學に調和の美なんかは缺けてゐるのは當然なのかも知れない。「日本の國語辭書といふものは永久に出ないことになる」といふ坪內博士の憂ひは、文學に關する憂ひであるが、それは國家についての憂ひとして解してもい〻と、私は思ふ。

生活難の痛切に感じられてゐる今日、作家もそれを問題として、社會制度の不備を憤つてゐるのであるが、明治の文學者は、あんなに貧乏してゐながら、そのうちのある人は餓死したと云つてもい〻くらゐに貧乏してゐながら、一方で藝術に精進してゐた。今日から見ると、少し間が拔けてゐたやうでもあり、そこに尊さが現はれてゐるやうでもある。私は、明治文學者の日常生活を知るために、數種の日記を讀んだが、そのうちでは、正岡子規の「仰臥漫錄」に、最も心を惹かれた。重患に苦しみ、生活費にも窮しながら、一方で藝術に對する意氣は旺盛であつた。死に面した病者の心理が鋭くいきいきと現はれてゐる。岩藤氏の「屍の海」などを讀んでも、我々は、對社會の義憤をそんなに痛切に覺えないのに關はらず、子規が、「その枕頭に置いた土佐半紙綴の帳に自由に認められたもので、生前熟懇な友にも示さず、勿論、新聞雜誌へ發表せられなかつた」といふ「仰臥漫錄」には、心が打たれるのである。少しの芝居氣もない眞實そのま〻の文章の力強さを思ふ。子規も、健かな時分には、「曼珠沙華」とか、「月の都」とかいふ、明治時代相應の文章で小說を書いてゐるが、それと、病中日記とには、雲泥の相違がある。小說の方はいくら文章に工夫してゐてもふやけて居り、日記の方は、毎日の食物や狹い見聞や感想を、秩序なく書いたゞけなので、文章が兩刄の劍と云つたやうに鋭い。

病める子規に取つては、藝術は宗教のやうであつた。肉體の苦痛も藝術によつて慰められてゐた。人間はいつの世にもこの二つのものを要求してゐるのであらう。病みて且つ貧しき子規も、宗教は斥けたが、藝術は最後まで離さなかつた。

內村鑑三氏は、病氣の重い發作の過ぎた後に、「青年時代から宗教文學殊に佛教で死といふ事を餘り細かく聞かされたことの害を知つた」といふ意味の言葉を、一二度口に出されたと、「聖書の研究」終刊號の追憶記の中に書かれてゐる。宗教は人の心を救ふと〻もに、人に無用の惱みを與へることもあつた。藝術にさういふ弊害がないかもしれない。ユゴーの云

つてゐる如く、我々人間は皆死刑の宣言を受けてゐて、たゞある期間だけ、刑の執行を猶豫されてゐるに過ぎない。その期間をどうして過すかと云ふと、最も賢い者は藝術によつて過す」と、ウォルターペーターは云つてゐる。今日の日本にも藝術によつて過さうと心掛けてゐる人が跡を絶つた譯でもあるまい。

時節柄、經濟界の議論や調査記事が、諸雜誌によく現はれてゐるが、そのうちで、私は、「文藝春秋」連載の石山賢吉氏の「財界人事漫錄」を、いつも面白く讀んでゐる。小理窟を捏ね廻したり、神經を尖らせたりしないで、悠然として說去り說來り、それで、氣の利いた觀察をしてゐる。六月號の、東京と大阪の財界人の口論も面白かつた。年々百萬圓の收入のある遺產を受繼いだ青年が、女遊びや旅行や食道樂や、贅の限りを盡くしても、一度も滿足を感じたことがなく、巨產を擁して詰らない日を送つてゐたが、ふと學生時代の運動を思出した。資本主義社會の世俗輕薄にあきた彼れは、學校の餘戯の中に潜んでゐた眞劍さを思出したのであつた。そこで、自邸の中に道場を建てゝ、近所の者を集めて盛んに擊劍をやりだしたのださうだ。「忠直公行狀記」の飜案見たやうだが、實際に有りさうなことにも思はれる。これを讀んで私は、アメリカで聞いた話を思出した。シカゴの富家の子が、金で得られるあらゆる遊びをやり盡したが、何をしても心に刺戟が得られなくなつたので、ついに、殺人をやりだしたさうである。アメリカでは殺人であり、日本では擊劍である。

私の所へもをり〳〵新作家の文集が寄贈される。どれも讀みたいとは思ひながら、實際はいくつも讀んでゐない。先日、偶然そのうちの一つを拔出して讀んだのが、「一番美しく」と題された、德田戯二氏の創作集であつて、これは、面白かつたので略々讀盡くした。私などに緣の遠い「モダーン」な趣味が發揮されてゐても、まだすれつ枯らしでない若さが快かつた。中にはキザなものもあるが、べた〳〵した惡趣味には陷つてゐなかつた。「民衆劇學校」や、未完の「略圖を行く紳士」などの、稍々長い物に、世間が、あつさりした情趣に包まれてよく浮んでゐるのに、私は、ことに興味を寄せた。

それから、文藝春秋所載の、近松秋江氏の「春陰」を讀んだ。筆力は何となく衰へてゐると思つたが、どうにもなら な

い生活苦の一端は出てゐる。ここに書かれてゐるやうな事相は、世間によくあることで、珍らしくないと〻もに突飛でない。机上でつくられたプロレタリア學說小說よりも、かういふ小說の方が、本當のプロレタリア小說であるかも知れない。

勝本清一郎氏が、朝日新聞などに寄せた通信に、在歐洲の日本人に對して現實暴露叙述を試みようとしてゐるのは、あり來りの歐洲見聞錄なんかよりは面白い。たゞ「ロシア主義」といふロマンチシズムを奉じて、これを尺度としてすべての批判を試みようとしてゐるところに、氏の現實暴露の弱さがある。「ロシア主義」に對しても、大膽に現實暴露をやつて見たらいゝぢやないか。

「改造」の中條百合子の「ロンドン一九二九年」は、三週間未滿の短い滯在で、この大都會のいろ／＼な實景の大要をよく掴んで書いてゐるところに、筆者の頭のよさが察せられる。私など一ヶ月半も滯在してゐたのに拘はらず、これだけのハッキリした印象を得てゐない。老若の頭腦の相違が感ぜられる。しかし、私はこの女作者の觀察態度には感心しない。ロンドンに對し、間違つた觀察、人に笑はれさうな見解を筆で現はすことを憚つて、型の如きロンドン描寫をしてゐるのに飽足りない。ロンドン通の日本人によく訊ねるか、米人か獨佛人か、あるひはロシア人かの英國旅行記でもよく讀むかして、その助けによつて見物をもし、記事をも書いたと云つたやうな感じのする旅行記である。顏の黃ろい、足の短かい日本の女――武士的教養の遺傳を有ちながら、新來のモダン趣味に羽ぐゝまれた日本の現代女――が、歷史の古い歐洲の大都會に直接にぶつゝかつて、身心に受けた印象を率直に露出したところがない。私など、ロンドンでもベルリンでも、パリでも、歐洲大都會の實相を、精確に知らうとしたら、それ等に關する西洋の本を讀めばいゝ。日本人の外國旅行記に興味があるのは、「日本人としての」觀察や印象を知りたいためである。久米正雄氏の「英京二題」には、さすがに、久米氏らしい感じ方がよく出てゐた。私も、あの日、偶然ハイドパークの一端で、ジョージ五世兩陛下を奉迎して、はじめて西洋のキングとクヰンとの風丰を目睹して、感慨を催したのであつた。感じ方は無論久米氏のとは違つてゐたが、違つてゐるために尙更氏の印象記を面白いと思つた。

六十歳で逝去した田山花袋氏は、青年中年老年の三期に渡つて、體驗した人生を、思ふ存分に作品に於て表現した。世間から受けた毀譽褒貶はどうであらうとも、文學者として遺憾なき譯である。自然主義といふ言葉は、殺風景な感じを傳へるが、氏は「詩」と「酒」と「女」との、人生の趣味の本原とも云ふべき三つのものを享樂した人である。自然主義勃興當時の三巨頭たる藤村、獨歩、花袋の三氏は、みな、詩から小説に筆を轉じたので、自然主義の末流や、今日のマルクス主義作家とはちがつて、その作品にはいつも詩趣があつた。花袋氏は、氏一流の覺醒を試みてから、その詩人的情緒を脱却しようと努めたのだが、人間が自己の有つてゐるものを全然破壞することの出來ないのは、氏の一生の文學經路がそれを證明してゐる。「無慈悲なる解剖」を志しながら、氏の作品には、自づから詠歎的叙情味が浸み出るのである。「再び草の野に」なんかは、氏の長い抒情詩である。晩年になると、在來の日本の文人趣味が、氏の心にも豐かに浮んでゐたやうである。いかに西洋の感化を受けても、西洋を模倣しても、年を取ると、祖先の影が差して來るのだ。

氏の沒後諸新聞に現はれた諸家の追憶記を讀むと、文學史上の氏の地位、作品の特色など、衆目の認むるところが、略々一定してゐる。隱れたるものを新たに見つける餘地はないかも知れない。

私が、氏の沒後、特に知りたいと感じたことは、「ある僧の奇蹟」のやうな神秘性のある超俗の小説を書いたあと、死に直面するまでの氏の心境である。獨歩が壯年で病死した時、花袋氏は私に向つて、「國木田が云つてゐたよ。死の近さを知つてからいろ／＼なことが考へられる。それを書きたいけれど書けないと云つてゐたが、國木田がそれを書くとよかつたのだがね」と、感慨を寄せて話した。

花袋氏も、小説に於いて「死んで行く人」について、いろ／＼書いたやうだが、「死んで行く自己」については、何も書殘さなかつたやうである。子規の「仰臥漫錄」のやうなものでも、花袋氏が書殘してゐて吳れたらと私は遺憾に思つた。

編輯者雜記

×

田山花袋氏遂に逝く。自然主義文學漸く衰へても氏の業蹟は永久に消えない。文壇の一角頓に暗黒を加ふるを覺えるは氏の存在が遙かに大きな存在であつたからだ。嘗て編輯子は德田秋聲氏に從つて氏を病院に見舞うたとき、氏の眼には泪が光つてゐた。思へばそれが最後であつた。本誌と因緣淺からず、終始渝らざる好意を寄せられた氏のために、茲に生前の厚義を謝して、謹んで哀悼の意を表する。

×

二ヶ月程以前のことであつた。氏が病篤き床に直言記者を招して語つたといふ言葉の中に、「……中央公論社も出版が大當りで結構だが、いつもとんとん拍子に行くものではないから、よく注意してやつて行くやうに。」といふ親切な傳言があつた。僕はそれを讀んで早速人を介して敬意と謝意を表しておいたのだが、こんな事になると知つたら、何を措いてもあの時に飛んで行つてお目にかゝつておくのだつたに。

×

「猶太人ジユス」の飜譯がおくれて豫定の發行日に間に合はない。註文殺到で何とも恐縮してゐる。が、その代り、この方は稍おくれたが、問題の「眞理の春」をお先きに出版して讀者の熱望に應ずることにした。寬恕を乞ふ。

×

花袋氏逝いたけれど藤村氏益々健在、筆益々冴えて巨篇一段の光を放つてゐる。下村千秋氏の大作、稿料豐富にして、今までにこれほど苦心した作はないとのことだ。近松秋江氏の身邊小說、また珍らしいものだ。「大陸」は作者病氣のため休載。

×

殘念なのは、大谷崎氏の「戀愛論」が脫稿に至らなかつたことだ。來月にはキツト間に合はせて貰ふことにする。その代りに正宗白鳥氏の「英雄論」を得たのはせめてもの欣びだ。

×

日本××黨の巨頭佐野學氏の獄中の此頃やいかに？「獄中私信」は氏の最近の動靜と、靜かなること林の如き心事とを語つて明快。而も飽くまでも勞働大衆を信頼して飽くまでもブルヂヨワ民主主義を排擊する熱烈な氏の

姿こそは、知ると知らざるとに拘らず、その好むと好まざるとに拘らず、讀者の胸に一種の衝撃を感ぜしめるものがあるだらう。それで、本誌記者の數ヶ月に亘る努力も酬はれるといふものだ。

×

「失業體驗記」を募集しておいた。必ず深酷な記錄が得られるだらうと信ずる。失業對策は實に一日一刻も忽諸にすべからざる重大事だ。本號猪俣氏の所謂「對策」批判を併せ熟讀されたい。

×

經濟界の行詰り、再び金輸出禁止か？　蓋し高橋龜吉氏の獨擅場。

×

今度結成された「全國勞働組合同盟」は我國勞働組合運動のフオーカスだ。森戸辰男氏の珍らしい寄稿を得て本誌の精彩を新たにした感がある。加ふるに「醫學の階級性」「盜犯防止法」「軍縮審判」「左翼劇場論」等、等、等。

×

統帥權問題樞密院の諮詢を殘して、嵐の前の靜けさをつゞけてゐる。此時、此際、怪物「伊東巳代治論」は、どつちにしても大きな讀物たるを失はないであらう。

×

良い讀物が集まれば雜誌は良くなる、雜誌が良くなれば益々良い物が集まる。だが、編輯者の苦心も買つていたゞきたい。「マルクス陣營攻防戰記」を初め、「淺草宿屋社會學」「初任給調べ」「賭博秘訣」「アナウンサー錄」、とさうして怪奇實話。一として吾等の讀者への忠實なる奉仕ならざるはない。

×

八月には中央公論大學の夏季大學をやる。中央公論式に最も選ばれたるオーソリタチブな講師を選定して此方でも異色を發揮するつもりだ。誘ひ合はされて參加されたい。

×

七八月は出版界の夏枯れだといふ。それは常套的出版屋の泣言だ。夏は寧ろ讀書期だ。値打のない本を出すから賣れないので、價値のある本なら讀まれない筈はない。吾等はこの信條の下にどし／＼出版して行く。刮目して待たれよ。



夜明け前（第一篇）

島崎藤村

第五章

一

宮川寛齋が萬屋の主人と手代とを神奈川に殘して置いて歸國の途に上つたことは、早く美濃の方へ知れた。中津川も狹い土地だから、それがすぐ弟子の香藏や景藏の耳に入り、半藏はまた三里ほど離れた木曾の馬籠の方で、舊い師匠が板橋方面から木曾街道を歸つて來ることを知つた。

横濱開港の影響は諸國の街道筋にまであらはれて來る頃だ。半藏は馬籠の本陣にゐて、既に幾度か錢相場引上げの聲を聞き、更にまた小判買の聲を聞くやうになつた。古二朱金、保字金などの當時に殘存した古い金貨の買占めは地方でも始まつた。きのふは馬籠桝田屋へ江州邊の買手が來て貯へ置きの保金小判を一兩につき一兩三分までに買ひ入れて行つたとか、けふは中津川大和屋で百枚の保金小判を出して當時通用の新小判二百二十五兩を請取つたとか、そんな噂が毎日のやうに半藏の耳を打つた。金一兩で二兩一分づゝの賣買だ。それどころか、二兩二分にも、三兩にも買ひ求めるものがあらはれて來た。半藏が家の隣に住んで昔氣質で聞えた伏見屋金兵衛なぞは驚いてしまつて、まことに心ならぬ浮世ではある、こんな姿で子孫が繁昌するならそれこそ大慶の至りだと皮肉を言つたり、この上どうなつて行く世の中だらうと不安な語氣を洩らしたりした。

半藏が横濱貿易から歸つて來る舊師を心待ちに待ち受けたのは、この地方の動搖の中だ。

旅人を親切にもてなすことは、古い街道筋の住民が一朝一夕に養ひ得た氣風でもない。椎の葉に飯を盛ると言つた昔の人の旅情は彼等の忘れ得ぬ歌であり、路傍に立つ古い道祖神は子供の時分から彼等に旅人愛護の精神をさゝやいてゐる。到るところに山嶽は重なり合ひ、河川は溢れ易い木曾のやうな土地に住むものは、殊にその心が深い。當時に於ける旅行の困難を最もよく知るものは、さういふ彼等自身なのだ。まして半藏にして見れば、以前に師匠と頼んだ人、平田入門の紹介までして呉れた人が神奈川から百里の道を踏んで、誰でも暗いやうな木曾の森林の間を遠く疲れて歸つて來ようといふ旅だ。

半藏は舊師を待ち受ける心で、毎日のやうに街道へ出て見た。彼も隣宿妻籠本陣の壽平次と一緒に、江戸から横須賀へか

けての旅を終つて歸つて來てから、最早足掛け二年になる。過ぐる年の大火の後をうけて馬籠の宿もちやうど復興の最中であつた。幸ひに彼の家や隣家の伏見屋は類燒をまぬかれたが、町の向ふ側はすつかり燒けて、眞先に普請の出來た問屋九太夫の家も眼に新しい。

舊師の横濱出稼ぎに就いては、これまでとても弟子達の間に問題とされて來たことだ。どうかして晩節を全うするやうに、とは年老いた師匠のために半藏等の願ひとするところで、最初横濱行の噂を耳にした時に、弟子達の間には寄り〳〵その話が出た。わざ〳〵斷つて行く必要もなかつたと師匠に言はれゝば、それまでゞ、往きにその沙汰がなかつたにしても、歸りには何とか話があらうと語り合つてゐた。すくなくも半藏の心には、あの舊師が自分の家には立ち寄つて呉れてせめて弟子だけにはいろ〳〵な打明け話があるものと思つてゐた。

四月の二十二日には、寛齋も例の馬荷一駄に宰領の附添ひで、片側に新しい家の並んだ馬籠の坂道を峠の方から下つて來た。寛齋は伏見屋の門口に馬を停め、懇意な金兵衛方に亡くなつた鶴松の悔みを言ひ入れ、今度横濱を引揚げるについては二千四百兩からの金を預かつて來たこと、萬屋安兵衛等の歸國は多分六月にならうといふこと、生糸賣揚げも多分の利得のあること、開港場での小判の相場は三兩二朱ぐらゐには商ひの出來ること、そんな話を金兵衛のところに殘して置いて、折角待ち受けてゐる半藏の家へは立ち寄らずに、そこ〳〵に中津川の方へ通り過ぎて行つた。

このことは後になつて隣家から知れて來た。それを知つた時の半藏の手持無沙汰もなかつた。舊師を信ずる心の深いだけ、彼の失望も深かつた。

二

「どうも小判買の入り込んで來るには驚きますね。今もわたしは馬籠へ來る途中で、落合でもその噂を聞いて來ました

よ。」

こんな話をもつて、中津川の香藏が馬籠本陣を訪ねるために、落合から十曲峠の山道を登つて來た。

香藏は、まだ家督相續もせずにゐる半藏と違ひ、すでに中津川の方の新しい問屋の主人である。十何年も前に弟子として寛齋の家に通つた頃から見ると、彼も今は男のさかりだ。三人の友達の中でも、景藏は年長で、香藏はそれに次ぎ、半藏が一番若かつた。その半藏が最早三十にもなる。

舊師の寛齋も今は成金だと戯れて見せるやうな友達を前に置いて、半藏は自分の居間としてゐる本陣の店座敷で話した。

錢相場引上げに續いて急激な諸物價騰貴を引き起した横濱貿易の取沙汰ほど半藏等の心をいら〳〵させるものもない。當時、國内に流通する小判、一分判などの異常に良質なことは、米國領事ハリスですら幕府に注意したくらゐで、それらの古い金貨を輸出するものは法外な利を得た。幕府で新小判を鑄造し、その品質を落したのは、外國貨幣と釣合を取るための應急手段であつたが、それが反つて財界混亂の結果を招いたとも言へる。さういふ幕府には市場に流通する一切の古い金貨を蒐集して、それを改鑄するだけの能力も信用もなかつたからで。新舊小判は同時に市場に行はれるやうな日がやつて來た。目先の利に走る内地商人と、この機會を捉へずには置かない外國商人とがしきりにその間に跳梁し始めた。純粹な小判はどし〳〵海の外へ出て行つて、そのかはりに輸入せらるゝものは多少の米幣銀貨はあるとしても、多くは悪質な洋銀であると言はれる。

『半藏さん、君はあの小判買の聲をどう思ひます。』と香藏は言つた。『今までに君、九十萬兩ぐらゐの小判は外國へ流れ出したと言ひますよ。さうです、輕く見積つても九十萬兩ですとさ。驚くぢやありませんか。まさか幕府の役人だつて、異人の言ふなりになつてる譯でもありますまいがね、支度も何もなしに、いきなり港を開かせられてしまつて、その結果はと言ふと非常な物價騰貴です。そりや一部の人達は横濱開港で儲けたかも知れませんが、一般の人民はこんなに生活に苦

しむやうになつて來ましたぜ。」

近づいて來る六月二日、その横濱開港一周年の紀念日をむしろ屈辱の紀念日として考へるものもあるやうな、さかんな排外熱は全國に捲き起つて來た。眼のあたりに多くのもの丶苦しみを見る半藏等は、一概にそれを偏狹頑固なもの丶所爲とは考へられなかつた。

『宮川先生のことは、もう何も言ひますまい。』と半藏が言ひ出した。『わたしたちの衷情としては、今迄通りの簡素清貧に甘んじてゐて頂きたかつたけれど。』

『國學者には君、國學者の立場もあらうぢやありませんか、それを捨てゝ、たゞ儲けさへすれば好いといふものでもないでせう。』と言ふのは香藏だ。

『一體、先生が横濱なぞへ出掛けられる前に、相談して下さると好かつた。こんなにわたしたちを避けなくても好ささうなものです。』

『出稼ぎの問題には觸れて呉れるなと言ふんでせう。』

俄かな雨で、二人の話は途切れた。半藏は店座敷の雨戸を繰つて、それを一枚ほど閉めずに置き、しばらく友達と二人で表庭にふりそゝぐ強い雨を眺めてゐた。そのうちに雨は座敷へ吹き込んで來る。しまひには雨戸もあけて置かれないやうになつた。

『お民。』

と半藏は妻を呼んだ。燈火なしには話も見えないほど座敷の内は暗かつた。お民も最早二十四で、二人子持の若い母だ。

奥から行燈を運んで來る彼女の後には、座敷の入口までついて來て客の方をのぞく幼いものもある。

時ならぬ行燈のかげで、半藏と香藏の二人は風雨の音をきゝながら舊師のことを語り合つた。話せば話すほど二人はいろ〳〵な心持を引き出されて行つた。半藏にしても香藏にしても、はじめて古學といふものに眼をあけて貰つた寛齋の溫情を忘れずにゐる。舊師も老いたとは考へても、その態度を責めるやうな心は二人とも持たなかつた。飯田の在への隱退が舊師の晩年のためとあるなら、その人の幸福を亂したくないと言ふのが半藏だ。それよりも舊師から離れて行かうと言ひ出すのが香藏だ。

國學者としての大きな先輩、本居宣長の遺した仕事はこの半藏等に一層光つて見えるやうになつて來た。何と言つても言葉の鍵を握つたことはあの大人の强味で、それが古事記の研究ともなり、健全な國民性を古代に發見する端緒ともなつた。儒教といふ形であらはれて來てゐる北方支那の道德、禪宗や道教の形であらはれて來てゐる南方支那の宗教――それらの異國の借り物をかなぐり捨て、一切の「漢ごゝろ」をかなぐり捨てゝ、言擧げといふことも更になかつた神ながらのいにしへの代に歸れと教へたのが大人だ。大人から見ると、何の道かの道といふことは異國の沙汰で、所謂仁義禮讓孝悌忠信などゝいふ片腹痛い名をくさ〴〵作り設けて、きびしく人間を縛りつけてしまつた人達のことを、もろこしの方では聖人と呼んでゐる。それを笑ふために出て來た人があの大人だ。大人が古代の探求から見つけて來たものは、「直毘の靈」の精神で、その言ふところを約めて見ると、「自然に歸れ」と教へたことになる。より明るい世界への啓示も、古代復歸の夢想も、中世の否定も、人間の解放も、又は大人のあの戀愛觀も、物のあはれの說も、すべてそこから出發してゐる。伊勢の國、飯高郡の民として、天明寛政の年代にこんな人が生きてゐたといふことすら、半藏等の心には一つの驚きである。早く夜明けを告げに生れて來たやうな大人は、暗いこの世を後から歩いて來るものゝ探るに任せて置いて、新しい世紀のやがてめぐつて來る享和元年の秋頃には既に過去の人であつた。半藏等に言はせると、あの鈴の屋の翁こそ、「近つ代の

人一の父とも呼ばるべき人であつた。

香蔵は半蔵に言つた。

『今になつて、想ひ當る。宮川先生も君、あれで中津川あたりぢや國學者の牛耳を執ると言はれて來た人ですがね、年をとればとるほど漢學の方へ戻つて行かれるやうな氣がする。先生には、まだ〳〵「漢ごゝろ」のぬけ切らないところがあるんですね。』

『香蔵さん、さう君に言はれると、わたしなぞは何と言つていゝか分らない。四書五經から習ひ初めたものに、なか〳〵儒教の殼はとれませんよ。』

強雨は止まないばかりか、しきりに雲が騒いで、夕方まで休みなしに吹き通すやうな強風も出て來た。名古屋から福島行の客で止むを得ず半蔵の家に一宿させて呉れと言つて來た人さへもある。

香蔵もその晩は中津川の方へ歸れなかつた。翌朝になつて見ると、風は沈まつたが、天氣は容易に回復しなかつた。思ひの外の大荒れで、峠筋の道や橋は損じ、福島の毛附け（馬市）も日延べになつたとの通知があるくらゐだ。

ちやうど半蔵の父、吉左衛門は尾張藩から御勝手仕法立ての件を頼まれて、名古屋出張中の留守の時であつた。半蔵は家の囲爐裏ばたに香蔵を殘して置いて、ちよつと會所の見廻りに行つたが、街道には旅人の通行もないと言つて戻つて來た。そこへ下男の佐吉も簑と笠とで田圃の見廻りから歸つて來て、中津川の大橋が流れ失せたとの噂を傳へた。

『香蔵さん、大橋が落ちたと言ひますぜ。もうすこし見合せてゐたらどうです。』

『この雨にどうなりませう。』と半蔵が繼母のおまんも囲爐裏ばたへ來て言つた。『いつれ中津川からお迎への人も見えませ

うに、それまで見合せていらつしやるがいゝ。まあ、さうなさい。」

雨のために止むなく逗留する友達を慰めようとして、やがて半藏は囲爐裏ばたから奥の部屋の方へ香藏を誘つた。北の坪庭に向いたところまで行つて、雨戸をすこし繰つて見せると、そこに本陣の上段の間がある。白地に黒く雲形を織出した高麗縁の疊の上には、雨の日の薄暗い光線が射し入つてゐる。木曾路を通る諸大名が客間に宛てゝあるのもそこだ。半藏が横須賀の旅以來、過ぐる三年間の意味ある通行を數へて見ると、彦根よりする井伊掃部頭、江戸よりする老中間部下總守、林大學頭、監察岩瀬肥後守、等、等――それらの既に横死したり病死したり又は現存する幕府の人物で、あるひは大老就職のため江戸の任地へ赴かうとし、あるひは神奈川條約上奏のため京都へ急がうとして、その客間に足をとゞめて行つたことが、あり〳〵とそこに辿られる。半藏はそんな隠れたところにある部屋を友達に覗かせて、眼まぐるしい「時」の歩みをちよつと振り返つて見る氣になつた。

その時、半藏は唐紙の側に立つてゐた。わざと友達が上段の間の床に注意するのを待つてゐた。相州三浦、横須賀在、公郷村の方に住む山上七郎左衛門から旅の紀念にと贈られた光琳の軸がその暗い壁ところに隠れてゐたのだ。

「香藏さん、これがわたしの横須賀土産ですよ。」

「さう言へば、君の話にはよく横須賀が出る。これを贈つた方がその御本家なんですね。」

「妻籠の本陣ぢや無銘の刀を貰ふ、わたしの家へはこの掛物を貰つて來ました。まつたく、あの旅は忘れられない。吾家へ歸つて來た日には、わたしはもう別の人でしたよ――まあ、自分のつもりぢや、全く新規な生活を始めましたよ。」

半日でも多く友達を引き留めたくてゐる半藏には、その日の雨はやらずの雨と言つてよかつた。彼はその足で、繼母や妻の仕事部屋となつてゐる仲の間の側の廊下を通りぬけて、もう一度店座敷の方に友達の席をつくり直した。

「どれ、香藏さんに一つわたしのまづい歌をお目にかけますか。」

と言つて半藏が友達の前に取り出したのは、時事を詠じた歌の草稿だ。まだ若々しい筆で書いて、人にも見せずにしまつて置いてあるものだ。

あめりかのどるを御國のしろかねにひとしき品とさだめしや誰
しろかねにかけておよばぬどるらるをひとしと思ひし人は誰ぞも
國つ物たかくうるともそのしろのいとやすかるを思ひはからで
百八十の物のことごとたかくうりてわれを富ますとおもひけるかな
土のごと山と掘りくるどるらるに御國のたからかへまく惜しも
どるらるにかふるも悲し御國の人のいとなみ造れるものを
どるらるの品のさだめは大八島國中あまねく問ふべかりしを
しろかねにいたくおとれるどるらるを知りてさておく世こそつたなき
國つ物足らずなりなばどるらるは山とつむとも何にかはせむ

これらの歌に『どる』とか『どるらる』とかあるのは、外國商人の手によりて輸入せらるゝ惡質なメキシコ弗、香港弗などの洋銀を指す。それは民間に流通するよりも多く徳川政府の手に入つて、一分銀に改鑄せらるゝといふものである。

『わたしがこんな歌をつくつたのはめづらしいでせう。』と半藏が言ひ出した。

『しかし、宮川先生の舊い弟子仲間では、半藏さんは歌の讀める人だと思つてゐましたよ。』と香藏が答へる。

『それがです、自分でも物になるかと思ひ初めたのは、横須賀の旅からです。あの旅が歌を引き出したんですね。讀んで見たら、自分にも讀める。』

『ほら、君が横須賀の旅から贈つて下すつたのがあるぢやありませんか。』

『でも、香藏さん、吾家の阿爺が俳諧を樂むのと、わたしが和歌を讀んで見たいと思ふのとでは、だいぶその心持に相違があるんです。わたしは矢張、本居先生の教にもとづいて、いくらかでも古の人の素直な心に歸つて行くために、歌を讀むと考へたいんです。それほど今の時世に生れたものは、自然なものを失つてると思ふんですが、どうでせう。』

半藏等はすべてこの調子で踏み出して行かうとした。あの本居宣長の遺した教を祖述するばかりでなく、それを實行にまで持つて行かうとしたところに、日頃半藏等が畏敬する平田篤胤の不屈な氣魄がある。半藏等に言はせると、鈴の屋の翁には何と言つても天明寛政年代の人の寛濶さがある。『そこへ行くと、伊吹の舍大人は狹い人かも知れないが、しかしその迫りに迫つて行つた追求心が彼等の時代の人の心に近い。そこが平田派の學問の世に誤解され易いところで、篤胤大人の著書は幕府から絶板を命ぜられたことがあり、大人その人も晩年には郷里の秋田へ隱退を餘儀なくされたが、しかし大人は六十八歳の生涯を終るまで決して屈してはゐなかつた。同時代を見渡したところ、平田篤胤に比ぶべきほどの必死な學者は半藏等の眼に映つて來なかつた。

五月も十日過ぎのことで、安政大獄當時に極刑に處せられたもの丶うち、あるもの丶忌日がやつて來るやうな日を迎へて見ると、亡き梅田雲濱、吉田松陰、頼鴨崖なぞの記憶がまた眼前の青葉と共に世人の胸に活き返つて來る。半藏や香藏は平田篤胤沒後の門人として、あの先輩から學び得た心を抱いて、互ひに革新潮流の渦の中へ行かうとこゝろざしてゐた。

降りつゞける五月の雨は友達の足をとゞめさせたばかりでなく、親しみを増させるなかだちともなつた。半藏には新たに一人の弟子が出來て、今は仕込みでこの本陣に來てゐることも香藏をよろこばせた。隣宿落合の稻葉屋の子息、林勝重といふのがその少年の名だ。學問する機運に促されてか、馬籠本陣へ通つて來る少年も多くある中で、勝重ほど末頼母し

いものを見ない、と友達に言つて見せるのも半藏だ。時には、勝重は勉強部屋の方から通つて來て、半藏と香藏とが二人で話しつゞけてゐるところへ用をきゝに顔を出す。短い袴、淺黄色の襦絆の襟、前髮をとつた額越しにこちらを見る少年らしい眼付の若々しさは、半藏等にもありし日のことを思ひ出させずには置かなかつた。

「さうかなあ。自分等もあんなだつたかなあ。わたしが辨當持ちで、宮川先生の家へ通ひ初めたのは、ちやうど今の勝重さんの年でしたよ。」

と半藏は友達に言つて見せた。

そろ／＼香藏は中津川の家の方のことを心配し出した。強風強雨が來た後の樣子が追々分つて見ると、荒町には風のために吹き潰された家もある。峠の村にも半潰れの家があり、棟に打たれて即死した馬さへある。そこいらの畠の麥が殘らず倒れたなぞは、風あたりの強い馬籠峠の上にしてもめづらしいことだ。

おまんは店座敷へ來て、

「香藏さん、お宅の方でも御心配なすつていらつしやるでせうが、今日お歸し申したんぢや、わたしどもが心配です。家の佐吉に風呂でも焚かせますに、もう一日御逗留なすつて下さい。年寄の言ふこともきいて下さい。」

と言つて勸めた。この繼母が入つて來ると、半藏は急に座り直した。おまんの前では、崩してゐる膝でも座り直すのが半藏の癖のやうになつてゐた。

「ごめん下さい。」

と子供に言つて見せる聲がして、部屋の敷居をまたがうとする幼いものを助けながら、そこへ入つて來たのは半藏の妻だ。娘のお粂は五つになるが、下に宗太といふ弟が出來てから、にはかに姉さんらしい顔付で、お民に連れられながら、客のところへ茶を運んで來た。一心に客の方をめがけて、茶をこぼすまいとしながら歩いて來るその樣子も子供らしい。

『この兒が自分で持つて行くと言つて、きかないんですもの。』とお民が笑つた。
『まあ、香藏さん、見てやつて下さい。』とおまんもそれを引き取つて、『お粂があなたのところへお茶を持つてまゐりましたよ。』

半藏の家では子供まで來て、雨に逗留する客をもてなした。

到頭香藏は二晩も馬籠に泊つた。東美濃から伊那の谷へかけての平田門人等とも互ひに連絡を取ること、場合によつては京都、名古屋にある同志のものを應援することを半藏に約して置いて、三日目には香藏は馬籠の本陣を辭した。友達が歸つて行つた後になつて見ると、半藏は一層わびしい雨の日を山の上に送つた。四日目になつても雨は降り續き、風もすこし吹いて、橋の損所や舞臺の屋根を修繕するために村中一軒に一人づゝは出た。雨間といふものがすこしもなく、雲行きは悪く、荒れ氣味で安心がならなかつた。村には長雨のために、壁がいたんだり、土の落ちたりした土藏もある。五日目も雨、その日になると、崖になつた鹽澤あたりの道がぬける。香藏が歸つて行つた中津川の方の大橋附近では三軒の人家が流失するといふ騒ぎだ。日にく\木曾川の水は増し、橋の通行もない。街道も往來止めだ。

漸く五月の十七日頃になつて、上り下りの旅人が動き出した。尾張藩の勘定奉行、普請役御目附、綿織の代官、いづれも江戸城本丸の建築用材を見分のためとあつて、この森林地帶へ入り込んで來る。美濃地方が風雨のために延引となつてゐた長崎御目附の通行がその後に續く。

『黒船騒ぎも、もう澤山だ。』

さう思つてゐる半藏は、また木曾人足百人、伊那の助郷二百人を用意するほどの長崎御目附の通行を見せつけられた。一遠く長崎の港の方には、新たに獨逸の船が入つて來て、先者の歐羅巴諸國と同じやうな通商貿易の許しを求めるために港内に碇泊してゐるとの噂もある。

三

七月を迎へる頃には、寛齋は中津川の家を養子に讓り、住み慣れた美濃の盆地も見捨て、かねて老後の隱棲の地と定めて置いた信州伊那の谷の方へ移つて行つた。馬籠にはさびしく師匠を見送る半藏が殘つた。

「いよ〳〵先生ともお別れか。」

と半藏は考へて、本陣の店座敷の戸に倚りながら、寛齋が引移つて行つた谷の方へ思ひを馳せた。隣宿妻籠から伊那への通路にあたる淸内路には、平田門人として半藏から見れば先輩の原信好がある。御坂峠、風越峠なぞの惠那山脈一帶の地勢を隔てた伊那の谷の方には、飯田にも、大川原にも、山吹にも、座光寺にも平田同門の熱心な先輩を數へることが出來る。その中には、篤胤大人畢生の大著でまだ世に出なかつた『古史傳』三十二卷の上木を思ひ立つ座光寺の北原稻雄のやうな人がある。古學研究の筵を開いて、先師遺著の輪講を思ひ立つ山吹の片桐春一のやうな人がある。年々寒露の節に入る日を會日と定め、金二分とか、金半分とかの會費を持ち寄つて、地方にゐて書籍を購讀するための書籍講といふものを思ひ立つものもある。

半藏の周圍には、驚くばかり急激な勢ひで、平田派の學問が伊那地方の人達の間に傳播し初めた。飯田の在の伴野といふ村には、五十歲を迎へてから先師歿後の門人に加はり、婦人ながらに勤王の運動に身を投じようとする松尾多勢子のやうな人も出て來た。おまけに、江戸には篤胤大人の祖述者をもつて任ずる平田鐵胤のやうな好い相續者があつて、地方にある門人等を指導することを忘れてゐなかつた。一切の入門者がみな篤胤歿後の門人として取り扱はれた。決して鐵胤の門人とは見做されなかつた。半藏にして見ると、彼はこの伊那地方の人達を東美濃の同志に結びつける中央の位置に自分を見出したのである。賀茂眞淵から本居宣長、本居宣長から平田篤胤と、諸大人の承け繼ぎ承け繼ぎして來たものを消えな

い學問の燈火(ともしび)に譬へるなら、彼は木曾のやうな深い山の中に住みながらも、一方には伊那の谷の方を望み、一方には親しい友達のゐる中津川から、落合、附智(つけち)、久々里、大井、岩村、苗木なぞの美濃の方にまで、あそこにも、こゝにもと、その燈火を數へて見ることが出來た。

當時の民間にある本陣、問屋、庄屋なぞの人達は、次第にその位置を自覺し始めた。さしあたり半藏としては、父吉左衛門から馬籠本陣を讓られる日のことを考へて見て、その心支度(こゝろじたく)をする必要があつた。吉左衛門と、隣家の金兵衛とが、二人とも揃つて木曾福島の役所宛に退役願を申し出たのも、その年、萬延元年の夏のはじめであつたからで。

長いこと地方自治の一單位とも言ふべき村方の世話から、交通輸送の要路にあたる街道一切の面倒まで見て、本陣問屋庄屋の三役を兼ねた吉左衛門と、年寄役の金兵衛とが二人とも漸く隱退を思ふ頃は、吉左衛門はすでに六十二歳、金兵衛は六十四歳に達してゐた。尤も、父の退役願がすぐに聞き屆けられるか、どうかは、半藏にも分らなかつたが。

時には、半藏は村の見廻りに行つて、そこいらを出歩く父や金兵衛に逢ふ。吉左衛門も最早杖なぞを手にして、新たに養子を迎へたお喜佐(半藏の異母妹)の新宅を見廻りに行くやうな人だ。金兵衛は、と見ると、この隣人は袂に珠數を入れ、曾ては半藏の教へ子でもあつた亡き鶴松のことを忘れかねるといふ風で。位牌所を建立するとか、木魚を寄附するとかに、何かにつけて村の寺道の方へ足を運ばうとするやうな人だ。問屋の九太夫にも逢ふ。

『九太夫さんも年を取つたなあ。』

さう想つて見ると、金兵衛の家には美濃の大井から迎へた伊之助といふ養子が出來、九太夫の家にはすでに九郎兵衛といふ後繼(あとつぎ)がある。

半藏は家に戻つてからも、よく周圍を見廻した。妻を見て言つた。

『お民、ことしか來年のうちには、お前も本陣の姉さんだぜ。』

『分つてゐますよ。』

『お前にこの家がやれるかい。』

『そりや、わたしだつて、やれないことはないと思ひますよ。』

先代の隱居半六から四十二歳で家督を讓られた父吉左衞門に比べると、半藏の方はまだ十二年も若い。それでも最早彼の側には、お民のふところに子供らしい手をさし入れて、乳房を探らうとする宗太がゐる。朴の葉に包んでお民の與へた熱い鹽結飯をうまさうに頰張るやうな年頃のお粂がゐる。

半藏は思ひ出したやうに、

『御覽、吾家の阿爺はことしで勤續二十一年だ、見習ひとして働いた年を入れると、實際は三十七八年にもなるだらう。あれで祖父さんもなかなか頑張つてゐて、本陣庄屋の仕事を阿爺に任せていゝとは容易に言はなかつた。それほど大事を取る必要もあるんだね。俺なぞは、お前、十七の歳から見習ひだぜ。しかし、俺はお前の兄さん（壽平次）のやうに事務の取れる人間ぢやない。お大名を泊めた時の人數から、旅籠賃がいくらで、燭臺が何本と事細かに書き留めて置くやうな、さういふことに適した人間ぢやない――俺は、こんな馬鹿な男だ。』

『どうしてそんなことを言ふんでせう。』

『だからさ。今からそれをお前に斷つて置く。お前の兄さんも面白いことを言つたよ。庄屋としては民意を代表するし、本陣問屋としては諸街道の交通事業に參加すると想つて見たまへ、とさ。しかし、俺も庄屋の子だ。平田先生の門人の一人だ。まあ、俺は俺で、やれるところまでやつて見る。』

『半藏さま。福島から御差紙（呼び出し狀）よなし。こゝはどうしても、お前さまに出て頂かんけりやならん。』
村方のものがそんなことを言つて、半藏のところへやつて來た。
村民同志の草山の爭ひだ。到るところに森林を見る山間の地勢で、草刈る場所も少い土地を爭ふところから起つて來る境界のごた〴〵だ。草山口論といふことを約めて『山論』といふ言葉で通つて來たほど、これまでとてもその紛擾は木曾山に絕へなかつた。

錢相場引上げ、小判買、横濱交易なぞの聲につれて、一方には財界變動の機會に乘じ全盛を唄はるゝ成金もあると同時に、細民の苦しむこともおびただしい。米も高い。兩に四斗五升もした。大豆一駄二兩三分、酒一升二百三十二文、豆腐一丁四十二文もした。諸色がこの通りだ。世間一統動搖して來てゐる中で、村民の心がさう靜かにしてゐられる筈もなかつた。山論までが露骨になつて來た。

しかし半藏に取つて、大袈裟に言へば血で血を洗ふやうな、かうした百姓同志の爭ひほど彼の心に深い悲しみを覺えさせるものもなかつた。不自由な山の中に生れて、年若な時分からどうかして自分を育てようとするばかりでなく、同時に無學な村の子供を敎へることから始めたやうな彼——その彼が、下民百姓の眼ざめを期待し、又、それを信じて行かうとするやうになつたのは、一朝一夕に思ひ立つたことでもない。

福島役所への訴訟沙汰にまでなつた山論は、この半藏の前にあらはれて來た。訴へた方は隣村湯舟澤の村民、訴へられた方は馬籠宿内の一部落にあたる峠村の百姓仲間である。山論が喧嘩になつて、峠村のものが鎌十五挺ほど奪ひ取られたのは過ぐる年の夏のことで、一旦は馬籠の宿役人が仲裁に入り、示談になつた筈の一年越しの事件だ。この爭ひは去年の二百

二十日から九月の二十日頃まで、およそ二ヶ月にも亙つた。その折には隣宿妻籠脇本陣の扇屋得右衛門から、山口村の組頭まで立合に來て、草山の境界を見分するために一同辨當持參で山登りをしたほどであつた。ところが、湯舟澤村のものから不服が出て、その結果は福島の役所にまで持ち出されるほど紛れたのである。

二人の百姓總代は峠村からも馬籠の下町からも福島に呼び出された。兩人のものが役所に出頭して見ると、直ちに入牢を仰せ付けられて、八澤送りとなつた。福島からは別に差紙が來て、年寄役附添の上、馬籠の庄屋に出頭せよとある。今は、半藏も躊躇すべき時でない。

『お民、俺はお父さんの名代に、福島まで行つて來る。』

と妻に言つて、彼は役所に出頭する時の袴の用意なぞをさせた。自分でも着物を改めて、堅く帶をしめにかゝつた。

『どうも人氣が穩かでない。』

父、吉左衛門はそれを半藏に言つて、福島行の支度の出來るのを待つた。

この父は自分の退役も近づいたといふ顔付で、本陣の圍爐裏ばたに續いた寛ぎの間の方へ行つて、その部屋の用箪笥から馬籠湯舟澤兩村の古い繪圖なぞを取り出して來た。

『半藏、これも一つの參考だ。』

と言つて子の前に置いた。

『双方入合の草刈場所といふものは、むづかしいよ。山論、山論で、そりや今迄だつても隨分ごたごたしたが、大抵は示談で濟んで來たものだ。』

とまた吉左衛門は輕く言つて、早く不幸な入牢者を救へといふ意味を通はせた。

湯舟澤の方の百姓は、組頭とも、都合八人のものが福島の役所に呼び出された。馬籠では、年寄役の儀助、同役與次衛門、それに峠の組頭平助がすでに福島へ向けて立つて行つた。猶、年寄役金兵衛の名代として、隣家の養子伊之助も半藏の後から出掛けることになつてゐる。草山口論も今は公(おほやけ)の場處に出て爭はうとする御用の山論一條だ。これらの年寄役は互ひに代り合つて、半藏の附添ひとして行くことになつたのだ。

『俺も限役願を出したくらゐだから、今度は顏を出すまいよ。』

と父が言葉を添へる頃には、峠の組頭平助が福島から引き返して、半藏を迎へに來た。半藏は平助の附添ひに力を得て、脚絆に草鞋ばき尻端折りの甲斐々々しい姿になつた。

『自然(おのづか)に歸れ。』——本居宣長の遺したこの教は、半藏に取つて、當時の儒者からも佛侶からも、又は洋學者からも、誰からも聞かない聲である。彼がまことに素朴なものを求めて、それを百姓に得たやうに思ふ心も、日頃彼の尊敬する鈴の屋の翁の教にもとづく。

諸國には當時の嚴禁なる百姓一揆も起りつゝあつた。しかし半藏は、村の長老達が考へるやうに、それを單なる農民の謀反とは見做してゐない。百姓一揆の處罰と言へば、輕いものは笞(むち)、入墨(いれずみ)、追拂ひ、重いものは永牢、打首、獄門、あるひは家族非人入りのやうな嚴刑はありながら、進んでその苦痛を受けようとするほどの要求から動く百姓の誠實と、その犧牲的な精神とは、當時の他の社會に見られないものである。半藏に言はせると、當時の急務は下民百姓を教へることではなくて、あべこべに下民百姓から教へらるゝことであつた。

『百姓には言擧げといふことも更にない。今こそ草山の爭ひぐらゐでこんな内輪喧嘩をしてゐるが、もつと百姓の眼をさます時が來る——必ず、來る。』

さう半藏は考へて、庄屋としての父の名代を勤めるために、福島の役所をさして出掛けて行くことにした。

家を離れてから、彼はそこにゐない人達に呼びかけるやうに、獨り言つて見た。

『同志打ちは止せ。今は、そんな時世ぢやないぞ。』

四

十三日の後には、福島へ呼び出されたものも用濟みになり、湯舟澤峠兩村の百姓の間には和解が成り立つた。八澤の宋舍を出たもの、證人として福島の城下に滯在したもの、いづれも思ひ／＼に歸村を急ぎつゝあつた。十四日目には、半藏は隣家の伊之助と連れ立つて、峠の組頭平助とも一緒に、暑い木曾路を西へ歸つて來る人であつた。福島から須原泊りで、山論和解の報告をもたらしながら、半藏が自分の家の入口まで引返して來た時は、ちやうど門内の庭掃除に餘念もない父を見た。

『半藏が歸りましたよ。』

おまんは誰よりも先に半藏を見つけて、店座敷の前の牡丹の下あたりを掃いてゐる吉左衞門にそれを告げた。

『お父さん、行つて參りました。』

半藏は裏庭の梨の木の幹に箒を立てかけて置いて、汗をふいた。その時、簡單に、兩村のものゝ和解をさせて來たあらましを父に告げた。双方入合の草刈場所を定めたこと、新たに土塚を築いて境界をはつきりさせること、峠寄りの百姓ばかりがその邊へは鎌を入れることにして、一同福島から引取つて來たことを告げた。

『これはまあ、好かつた。お前の歸りが遲いから心配してゐたよ。』
と吉左衛門は庭の箒を手にしたまゝで言つた。

最早秋も立つ。馬籠あたりに住むものがきびしい暑さを口にする頃に、そこいらの石垣の側では蟋蟀が鳴いた。半藏はその年の盆も福島の方で送つて來て、更に村民のために奔走しなければならないほどいそがしい思ひをした。

やがて兩村立合の上で、かねて爭ひの場處である草山に土塚を築き立てる日が來た。半藏は馬籠の惣役人と、百姓小前のものを連れて、草いきれのする夏山の道を辿つた。湯舟澤からは、庄屋、組頭四人、百姓全部で、兩村のものを合せるとおよそ二百人あまりの人數が境界の地點と定めた深い澤に集まつた。

『そんなとろくさいことぢや、だちかん。』

『うんと高く土を盛れ。』

半藏の周圍には、口々に言ひ罵る百姓の聲が起る。

四つの土塚がその境界に築き立てられることになつた。あるものは洞が根先の大石へ見通し、あるものは向ふ根の松の木へ見通しといふ風に。そこいらが掘り起される度に、生々しい土の臭氣が半藏の鼻を打つ。工事が始まつたのだ。兩村の百姓は、藪蚊の襲ひ來るのも忘れて、いづれも土塚の周圍に集合してゐた。

その時、背後から輕く半藏の肩をたゝくものがある。隣村妻籠の庄屋として立合に來た壽平次が笑ひながらそこに立つてゐた。

『壽平次さん、泊つていつたらどうです。』

『いや、けふは連れがあるから歸ります。二里ぐらゐの夜道は譯ありません。』

半藏と壽平次とがこんな言葉をかはす頃は、山で日が暮れた。四番目の土塚を見分する時分には、松明をともして、漸く見通しをつけたほど暗い。境界の中心と定めた樹木から、ある大石までの間に土手を掘る工事だけは、餘儀なく翌日に延ばすことになつた。

雨にさまたげられた日を間に置いて、翌々日にはまた兩村の百姓が同じ場所に集合した。半藏は妻籠からやつて來る壽平次と一緒になつて、境界の土手を掘る工事にまで立合つた。一年越し睨み合つてゐた兩村の百姓も、いよ〳〵双方得心といふことになり、長い山論もその時になつて解決を告げた。

日暮れに近かつた。半藏は壽平次を誘ひながら家路をさして歸つて行つた。横須賀の旅以來、二人は一層親しく往來する。義理ある兄弟であるばかりでなく、やがて二人は新進の庄屋仲間でもある。

『半藏さん』と壽平次は石ころの多い山道を歩きながら言つた。『すべてのものが露骨になつて來ましたね。』

『さあねえ。』と半藏が答へた。

『でも、半藏さん、この山論はどうです。いや、草山の爭ひばかりぢやありません、見るもの聞くものが實に露骨になつて來ましたね。こないだも、水戸の浪人だなんていふ人が吾家へやつて來て、さん〴〵文句を並べた揚句に、何か書くから紙と筆を借せと言ひ出しました。扇子を二本書かせたところが、酒を五合に、錢を百文、おまけに草鞋一足ねだられましたよ。早速追ひ出しました。あの浪人はぐで〳〵に醉つて、その足で扇屋へも闖り込んで、到頭得右衛門さんの家に寢込んでしまつたさうですよ。見たまへ、この街道筋にもえらい事がありますぜ。長崎の御目附が御下りで通行の日でさ。永井樣とかいふ人の家來が、人足が遲いと言ふんで、わたしの村の問屋と口論になつて、都合五人で問屋を打ちすゑました。あの時は木刀が折れて、問屋の頭には四ケ所も疵が出來ました。やり方がすべて露骨ぢやありませんか。君と二人で

相州の三浦へ出掛けた時分さ――あの頃には、まだこんな蚊やおりませんでしたよ。」

「お師匠さま。」

夕闇の中に呼ぶ少年の聲と共に、村の方からやつて來る提燈が半藏達に近づいた。半藏の家のものは歸りの遲くなるのを心配して、弟子の勝重に下男の佐吉をつけ、途中まで迎へによこしたのだ。

山の上の宿場らしい燈火が街道の兩側にかゞやく頃に、半藏等は馬籠の本陣に歸り着いた。家にはお民が風呂を用意して、夫や兄を待ち受けてゐるところだつた。その晩は、壽平次も山登りの汗を洗ひ流して、半藏の部屋に來てくつろいだ。

「木曾は蚤の多いところだが、蚊帳を釣らずに寢らせるのはいゝ。水の清いのと、涼しいのと、そのせいだらうかねえ。」

と壽平次が兄らしく話しかけることも、お民をよろこばせた。

「お民、お母さんに内證で、今夜はお酒を一本つけてお呉れ。」

と半藏は言つた。その年になつてもまだ彼は繼母の前で酒をやることを遠慮してゐる。どこまでも繼母に仕へて身を愼まうとすることは、彼が少年の日からであつて、努めに努めることは第二の天性のやうになつてゐる。彼は、經驗に富む父よりも、賢い繼母のおまんを恐れてゐる。

酒のさかなには、冷豆腐。藥味、摺り生薑に青紫蘇。それに瓜、茄子の新漬ぐらゐのところで、半藏と壽平次とは涼しい風の來る店座敷の軒近いところに、めい〳〵の膳を控えた。

「こゝへ來ると思ひ出すなあ。あの横須賀行に半藏さんを誘ひに來て、一晩泊めて頂いたのもこの部屋ですよ。」

「あの時分と見ると、江戸も變つたらしい。」

「大變り。こないだも江戸土産を吾家へ屆けて吳れた飛脚がありましてね、その人の話には攘夷論が大變な勢ひださうですね。浪人は諸方に亂暴する、外國人は殺される、洋學者といふ洋學者は脅迫される、江戸市中の唐物店では店を毀される、實に物凄い世の中になりましたなんて、そんな話をして行きましたつけ。」

「表面だけ見れば、さういふこともあるかも知れません。」

「しかし、半藏さん、こんなに攘夷なんてことを言ひ出すやうになつて來て――それこそ、猫も、杓子もですよ――これで君、いゝでせうかね。」

「そりや君、同じ攘夷を唱へてるやうでも、多勢の中には不純なものが入つて來る。そいつは仕方がないでせうよ。」

「まあ、わたしから見れば、時勢は逆戻りです。」

「ちよつと待つて吳れたまへ。壽平次さんのいふのは嘉永六年の攘夷ですか、萬延元年の攘夷ですか。」

「やかましい話になつて來た。」

「一口に攘夷とは言つても、七年も前の時分と、今とぢや、中味はまるで變つて來てゐますさ。」

「さうかしら。」

「眼の前にあるものは、君、變つて行きますね。どん〳〵變つて行く。攘夷といふことを唱へた人達の變つて來たのは驚くやうですね。ところがです、その中味がどう變つて來たかと人に聞かれても、それを說き明すことは出來ない。たゞわたしは、それを感じることは出來るんです。」

　疲勞を忘れる程度に盃を重ねた後で、半藏はちよつと座を起つて、廊下から外の方に夜の街道の空を眺めた。田の草取りの季節らしい稻妻の閃きが彼の眼に映つた。

『半藏さん、まあ聞いて下さい。攘夷なんていふことは、君の話によく出る「漢ごゝろ」ですよ。外國を夷狄の國と考へて無暗に排斥するのは、やつぱり唐土から教はつたことぢやありませんかね。』
『壽平次さんはなか〳〵えらいことを言ふ。』
『そりや君、今日の外國は昔の夷狄の國とは違う。貿易も、交通も、世界の大勢で、止むを得ませんさ。わたしたちはもつとよく考へて、國を開いて行きたい。』
その時、半藏はもとの座にかへつて、壽平次の前に坐り直した。
『あゝあ、變な流行だなあ。』と壽平次は言葉を繼いで、やがて笑ひ出した。『なんぞといふと、すぐに尊王攘夷を担ぎ出す。』
『尊王は尊王、攘夷は攘夷さ。』と半藏は膝をかき合せながら答へた。『尊王は君、遠い理想。攘夷は當面の問題ぢやありませんか。』
『半藏さんも國學には凝つてますね。君のお仲間は今日流行の攘夷をどう思ひますかさ。それをわたしは聞いて見たい。』
『流行なんて、そんな壽平次さんのやうに輕くは考へませんよ。君だつてもこの社會の變動には惱んでゐるんでせう。良い小判は盜つて行かれる、物價は高くなる、みんなの生活は苦しくなる――これが開港の結果だとすると、こんな排外熱の起つて來るのも無理はないと思ひますね。しかし、これは當面の問題です。まあ、わたしとしちや、日本人のあこがれといふものがこわい。過去何百年も唐土にあこがれて來た日本人が、その同じ性質で、また新しい異國にあこがれでもしたら――』
『半藏さん、そんなら君達平田先生の御門人が古代にあこがれるのは。』
『止め。こんな話はもう止めませう。壽平次さんに逢つちや、かなはない。』

「半藏さんは先帝の言ふことをあんまり眞面に信じ過ぎるんですもの。つい混ぜつ返して見たくなる。しかし、お互ひにむつかしい時世に生れ合せて來ましたよ。わたしたちは冷靜に判斷して、かういふ時世を進んでいかなければならない。」
「まあ、これだけのことは君に言つて置いてもいゝ。あの平田先生などが古代に歸れと言ふのは、死んだ過去に歸れといふやうな、そんな意味ぢやありません。國學ほど世に誤解されてゐるものはないんです。」
二人が時を忘れて話し込んでゐるうちに、いつの間にか夜は更けて行つた。酒は疾くにつめたくなり、丼の中の水に冷した豆腐も崩れた。

五

平田篤胤歿後の門人等はしきりに實行を思ふ頃であつた。伊那の谷の方の誰彼は白河家を足だまりにして、京都の公卿達の間に遊説を思ひ立つものがある。すでに出發したものもある。江戸在住の平田鐵胤その人すら動きはじめたとの消息すらある。

當時は井伊大老横死の後をうけて、老中安藤對馬守を幕府の中心とする時代である。誰が言ひ出したとも知れないやうな流言が木曾街道にまで傳はつて來る。和學講談所(主として有職故實を調査する所)の塙次郎といふ學者は隱かに安藤對馬の命を奉じて北條氏廢帝の舊例を調査してゐるが、幕府方には尊王攘夷説の根源を斷つために京都の主上を廢し奉らうとする大きな野心がある。こんな信じがたいほどの流言が傳はつて來る頃だ。當時の外國奉行堀織部の自殺も多くの人を驚かした。その噂もまた一つの流言を生んだ。安藤對馬は密かに外國人と結托してゐる、英國公使アールコックに自分の愛妾まで與へ許してゐる、堀織部はそれを苦諫しても用ひられないので、刄に伏してその意を致したといふのだ。流言は一篇の僞作の諫書にまでなつて、漢文で世に行はれた。堀織部の自殺を憐むものが續々と出て來て、手向けの花や線香がそ

の墓に絕へないといふほどの暗い時だ。

誰もがこんな流言を疑ひ、また信じた。幕府の威信はすでに地を掃ひ、人心はすでに德川氏を離れて、皇室再興の時期が到來したといふやうな聲は、血氣壯んな若者達の胸を打たずには置かなかつた。

その年の八月には、半藏は馬籠にゐて名高い水戸の御隱居（烈公）の薨去を知つた。吉左衛門親子には間接な主人ながらに緣故の深い尾張藩主（德川慶勝）をはじめ、一橋慶喜、松平慶永、山內豐信、その他安政大獄當時に幽屛せられた諸大名も追々と謹愼を解かれる日を迎へたが、さういふ中にあつて、あの水戸の御隱居ばかりは永蟄居を免ぜられたことも知らず仕舞に、江戶駒込の別邸で波瀾の多い生涯を終つた。享年六十一歲。あだかも生前の政敵井伊大老の後を追つて、時代から沈んで行く夕日のやうに。

半藏が年上人の友人、中津川本陣の景藏は、伊那にある平田同門北原稻雄の叔父で、また同門松尾多勢子とは從兄弟の間柄である。この人もしばらく京都の方に出て、平田門人としての立場から多少なりとも國事に奔走したいと言つて、半藏のところへもその相談があつた。日頃謙譲な性質で、名聞を好まない景藏のやうな友人ですらさうだ。かうなると半藏もぢつとしてゐられなかつた。

父は老い、街道も日に多事だ。本陣問屋庄屋の仕事は否でも應でも半藏の肩にかゝつて來た。その年の十月十九日の夜には又、思ひがけない出來事が起つた。馬籠の宿は十六軒ほど焼けて、半藏の生れた古い家も一晩のうちに灰になつた。隣家の伏見屋、本陣の新宅、皆焼け落ちた。風あたりの強い位置にある馬籠峠とは言ひながら、三年のうちに二度の大火は、村としても深い打擊であつた。

翌文久元年の二月には、半藏とお民は本陣の裏に燒け殘つた土藏の内に暮してゐた。土藏の前にさしかけを造り、板がこひをして、急ごしらへの竈を置いたところには、下女が炊事をしてゐた。土藏に近く殘つた味噌納屋の二階の方には、吉左衛門夫婦が孫達を連れて假住居してゐた。二間ほど座敷があつて、曾て祖父半六が隱居所に宛て、あつたのもその二階だ。その邊の石段を井戸の方へ降りたところから、木小屋、米倉などのあるあたりへかけては、火災をまぬかれた。そこには佐吉が働いてゐた。

舊暦二月のことで、雪はまだ地にある。半藏は假の雪隱を出てから、燒跡の方を歩いて、周圍を見廻した。上段の間、奥の間、仲の間、次の間、寛ぎの間、店座敷、それから玄關先の廣い板の間など、古い本陣の母屋の部屋々々は影も形もない。灰寄せの人夫が集まつて、釘や金物の類を拾つた燒跡には、僅かに街道へ接した塀の一部と、半藏の愛してゐる表庭の松の樹とだけが殘つた。

さしあたりこの宿場になくて叶はないものは、會所（宿役人寄合所）だ。問屋場だ。幸ひ九太夫の家は火災をまぬかれたので、假に會所はそちらの方へ移してある。問屋場の事務も從來吉左衛門の家と九太夫の家とで半月交替に扱つて來たが、これも一時九太夫方へ移してある。すべてが假で、わびしく、落着かなかつた。吉左衛門は半藏に力を添へて、大工を呼べ、新しい母屋の繪圖面を引けなど、言つて、普請工事の下相談も既に始まりかけてゐるところであつた。

京都にある帝の妹君、和宮内親王が時の將軍（徳川家茂）へ降嫁とあつて、東山道御通行の觸れ書が到來したのは、村ではこの大火後の取込みの最中である。

宿役人一同、組頭までが福島の役所から來た觸れ書を前に置いて、談し合はねばならないやうな時がやつて來た。この

相談には、持病の咳で籠り勝ちな金兵衞までが引張り出された。

吉左衞門は味噌納屋の二階から、金兵衞は上の伏見屋の假住居から、いづれも假の會所の方に集まつた。その時、吉左衞門は舊い友達を見て、

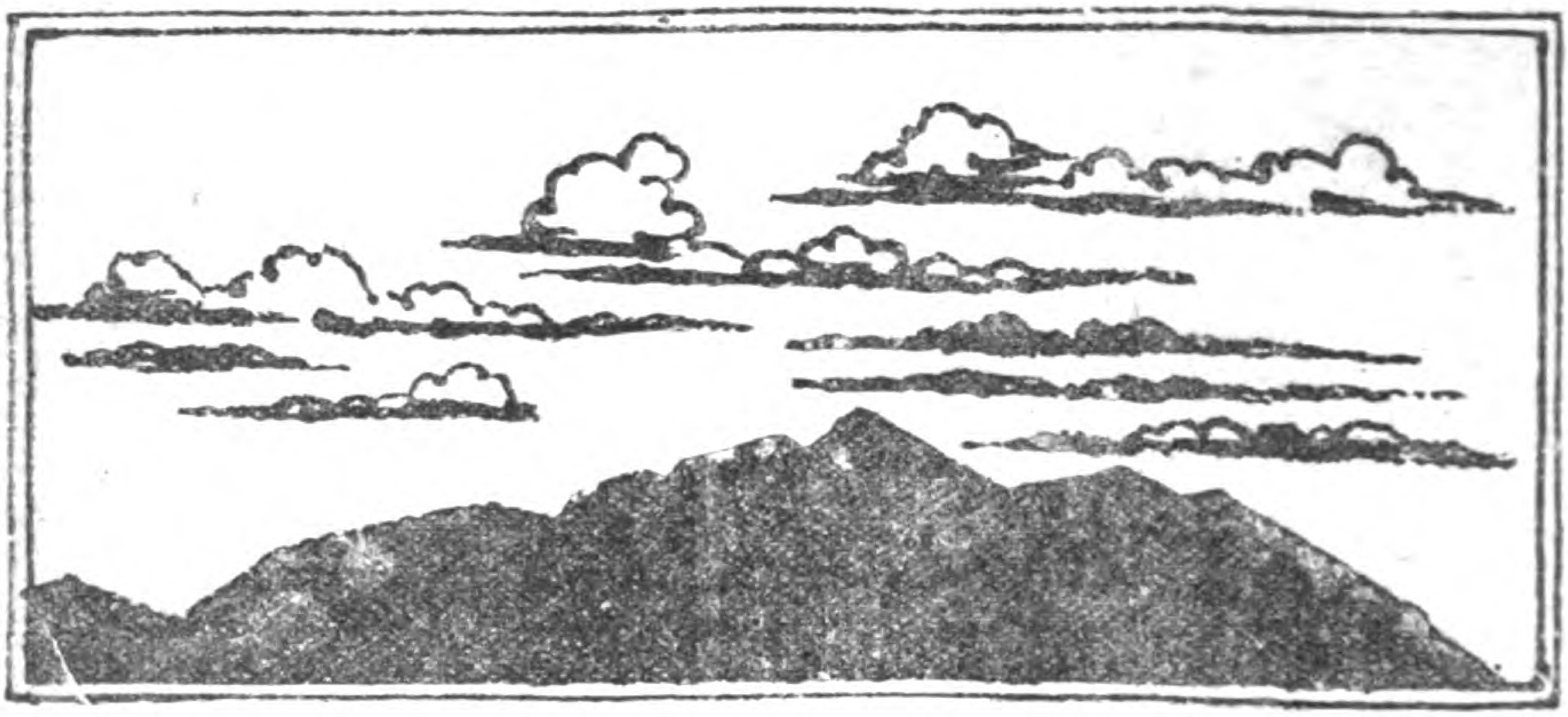
『金兵衞さん、馬籠の宿でも御通行筋の繪圖面を差出せとありますよ。』

と言つて、互ひに額を集めた。

本陣問屋としての仕事はこんな風に、後から後からと半藏の肩に重く掛つて來た。彼は何をさし置いても、年取つた父を助けて、西よりする和宮の一行をこの木曾路に迎へねばならなかつた。同時に、來るべき御傳馬、助郷の勞苦を思ひやつた。

（第五章をはり）

附記――次回例により來る十月號に。これを書きかけてゐるうちに、畏友田山花袋君の訃に接した。代々木での告別式、多摩墓地への野邊送り、すべて身にしみた。『雨五六條春尚淺、鶯三四囀繞庭枝、點々隣家美花早、雖有聞梅我發遲』この七絶一首は私の書齋に殘つた君の形見である。身邊のあわただしさから、今回の續稿は豫定ほどの長さに書き得なかつた。讀者諸君の寛恕を請ふ。猶、前回第四章のうちに、伏見屋金兵衞六十二歳とあるところは六十三歳の書き誤りであつた。又、前回に京都の梅田雲濱とあるは、若狹の梅田雲濱とあるべきだとのある人からの注意もあつたから、こゝに訂正して、且その厚意を謝する。（本誌特別號――正月、四月、七月、十月の四回に亙り、この稿連載の筈）



天國の記錄

——彼等はかうして、その血と肉とを搾り盡された——

下村千秋

一

三月の末日、空つ風がほこりの渦を卷き上げる夕方——。

溝の匂ひと、汚物の臭氣と、腐つた人肉の匂ひともいふべき惡臭とがもつれ合つて吹き流れてゐる、六尺幅、三尺幅の露次々々。その中を、海底の藻草のやうによれよれと聲もなくうろついてゐる幾千の漁色亡者。

一つの亡者が過ぎて行くと、その兩側の家の小窓から聲がかゝる。遠くから網をなげかけてたぐり寄せるやうな聲、飛びついて行つてその急所へ喰ひつくやうな聲、兩手で攔まへて力一ぱいゆすぶるやうな聲、嘆聲をあげておはれを賣るやうな聲、哀音をしのばせて可憐さを訴へるやうな聲。

「どうだえ、陽氣なもんだらう」

先に立つて歩いてゐた辰つァんは、後からついて來る周三とおきみの方へふり向いて、さう言ひかけた。

「まるで何だらう。夏の夜、谷川の道を歩いてると、それ、河鹿てえ奴の鳴き聲が、次ぎから次ぎへと新らしく湧いて來るちやうどあれ見てえだらう」

周三もおきみもそれには答へなかつた。周三は、よれ／＼の袷の裾下から現はした細い脚をひよろつかせながら、首を縮めて歩いてゐた。おきみは、からだ中に惡感を感じながら、胸を顫はして歩いてゐた。彼女の耳には、女達の呼び聲が、地獄の底から漏れて來る阿鼻叫喚に聞えた。

「何しろいゝ氣持ちのもんだよ。これが毎日毎晩、照つても降つても、三千人からの客がなだれ込むてえんだから、まつたく豪勢なもんだらう。おんなじ働くんなら、こんな場所で働かなけりや噓さ」

辰つァんはまたそんなことを言ひながら、叫びかける女共の聲へ頓狂な聲で答へたり、呼び込み口へ頭を突つ込んで、けすなことを吐き散らしたりした。

暗い露次は、奧へ入るほど複雜してゐた。それはまるで蟻の巢であつた。辰つァんは、その中を右へ折れ、左へ曲つて、後の二人を案内してゐたが、とある角の靑い軒燈のついた家の前へ來ると、その呼び込み口へ、モヂリの片袖を掛けて、

「こんばんは」と聲をかけた。と、中から可愛いゝ聲で、

「はい、こんばんは、おあがんなさいな」

「このおたんちん、お客ぢやねえや……ゐるかえ？」

「あら、辰つァんなの、いやに色男に見えたからさ……ゐるわよ、どうぞ」

辰つァんは、少し離れて立つてゐる周三とおきみの傍へ來て、

「ちよつと待つて丶くんな」と言ひながら、やつと人のからだが入れるほどの露次を、裏手の方へ入つて行つた。が、すぐ出て來て、

「こつちへお入りよ」と二人を手招いだ。

二人は、裏手の臺所から、三疊ほどの茶の間へ通された。そこの長火鉢の前には、銀杏返しの、髪に青つぽく光る羽織をだらりと引つ掛けた女が、いぎたなく坐つて卷煙草をふかしてゐた。

「こちらがおきみちやん、こちらが旦那樣、それからこれが、當家の御主人、お銀ちやん」

辰つァんは、そんな言ひ方で、双方を紹介した。

「どうぞ、よろしくお願ひします」

おきみは叮嚀に頭を下げた。

「あたしこそ」お銀ちやんと言はれた女はさう答へると、「辰つァん、二階へ案内しなよ。こゝは狹くつて話も出來やしない」

二疊と三疊と四疊半が二階の全部であつた。二疊と三疊は、彼女達の勞働部屋で、四疊半はひきつけ部屋になつてゐた二人はそこへ案内された。黑檀まがひのちやぶ臺、眞赤なメリンスの座布團、ビーズ細工を飾りつけた鏡臺、壁に貼りつけた活動俳優のブロマイド、ペンキ畫の富士山の額、一生懸命に明るく華やかに飾りつけてゐながら、そこには塵箱の中のやうなむさ苦しさとむせつぽさとが籠つてゐた。

辰つァんは、二人をその中へ坐らせて、「どうです、見かけによらずしやんとした家でせう」と、ふところから出した頸を撫でながら部屋を出て行つた。

間もなく階下からは、とき〴〵下司な大聲が混つて、辰つァんとお銀ちやんの密談がもれて來た。

周三は壁に凭れて、おきみは、ちやぶ臺の上に肘をついて、ぢつと息を殺してゐた。やがて周三は言つた。

「辰つァんが、こゝの主婦の亭主だといふのは嘘らしいよ。また引つかゝつたかも知れない」

「そんなこと、どうでも構はないわ」

おきみは、度胸を据へた聲で答へた。

「こんな場所で、お前につとまるかえ？」

「やつて見るわ、だつて仕方がないぢやないの、今更ら……」

二人はそんなことを話し合ひながら、各自の胸の中で――こんなことになる筈ではなかつたが、と自分に言つた。と言つて、――ぢや、かうならなければどうなつたのだ？　と自問しても、それに答へることは出來なかつた。

十日ほど前の夜のことであつた。おきみは、長野發の終列車で上野へ着いた。そして、省線電車のガード下に待つてゐた周三と一緒になつた。半年ぶりで會へた二人は、互ひの愛情を現はすために、互ひの腕を力一ぱいつねり合つた。彼等はそんな場所でものを言ひ合ふことを豫め禁じてゐたのである。

二人はすぐ省線に乘つた。新宿で下車した。その足ですぐ旭町へ入つて行つた。そして狹い露次中のマルマンといふ木賃宿へついた。

おきみは、命がけの仕事をして來てゐたのである。それは、火のついた爆彈を背負つてゐるやうな氣持ちであつた。二人はそのためにいつ粉碎されるかも知れない氣持ちであつた。それは何であつたか？

しかし二人はそれを二人きりの部屋の中でも口へ出さなかつた。あらゆる意力を水の如く冷靜に集中して、その爆彈の火を消さうとしてゐた。

二人は最初一泊二圓の四疊半の部屋で、メリンスの蒲團へ寢た。が、三日目には一泊一圓の木綿蒲團へ移らねばならなかつた。しかしこれも二三日で、こんどは一泊七十錢の、北向きの三疊の、棚も押入れもない、さまざまの汚物で眞黑になつた疊の部屋へ追ひつめられた。

二人は、この部屋の窓から、灰色の空を眺め、下の露次をうろつく浮浪者を見下し、近くの線路を往復する汽車と電車のひゞきを聞き、木枯らしの後の海鳴りのやうな都會の喘ぎ聲をきいた。さうして、明日の日の來ることも信じられない眞暗な前途に對し、深い溜息をもらしてゐた。

一週間ほどするうち、二人は日拂ひの宿料が支拂へなくなつた。當然の結果として、二人はその宿の追ひ立てを喰つた。おきみは、宿の主婦の膝元へひれ伏して、もう五六日泊めておいてくれと願つたが、主婦は、砂利のやうな言葉を吐いておきみの頼みをはねつけた。

そこへ一人の男が出て來た。彼等の隣室に泊つてゐる夜店のバナヽ屋と稱する男であつた。その男は、これまで廊下などでおきみとぶつかる毎に、へえへえと頭を下げて馴れ馴れしく言葉をかけてゐた。それが出て來て、

「同じ宿へ泊つてゐるよしみです。當分の宿料はわしが立て替へときやせう」と言つた。

さういふその男の魂膽はどこにあつたか？　しかしおきみと周三はその疑問を詮議する前に、背に腹は代へられぬ、といふせつぱ詰つた氣持ちから、とりあへず、その男の厚意を受けずにはゐられなかつた。

と、次の夜、その男は二人の部屋へ來ておきみへ言つた。

「どうだね。失禮な話かも知れねえが、實ア、わしの女房も働かしとくんでこんな話も持ち出すんだが、一つ、わしの女房のゐる銘酒屋で働いて見ちや」

おきみはそれを聞くと、ぐつと胸が詰つた。默つてゐると、相手は、

働くのがいやぢやこれから先、どうして生きて行かうてんだね。こんな木賃宿にいつまでそんなことをしてゐたら、飛んでもねえ誤解を受けて、警察へ突き出されますぜ」

この言葉には、おきみは思はず顏色をかへた。相手の男はそれを見逃さなかつた。そしてこんどはおつかぶさるやうに、

「そいつが恐かつたら、わしの言ふことをきゝなせえ。悪いやうにはしないよ」

「…………」

「いやかえ。いやだといふのかえ?」

彼は自分の顏を、おきみの鼻面へぶつけるやうに持つて來た。その顏の眉間には、チヤガ芋ほどの瘤があつた。その瘤の下へ暗い影を寄せて、彼はぐいとおきみを睨みつけた。そこには、金と意地とのためには命のやり取りもしかねない無智な狂暴性が自づと浮んで來た。

見てゐた周三ちそれにはギクリとした。

おきみは聲をふるはして答へた。

「行きますわ、どこへでも行つて働きますわ」

さうしておきみと周三は、首に綱をつけられた子犬の如く、いや應なしこの世界へ連れ込まれて來たのであつた。その男といふのが卽ちこの辰つァんだつたのである。

二人は、階下の密談にきゝ耳を立てながら不安の目を光らしてゐた。

そこへ辰つァんが先に、お銀ちやんも上つて來た。お銀ちやんは、ちやぶ臺の上へぐたりと片肘をつき、その上へ、平つたい濁つた顏を載せて、おきみと周三を代るぐ〵チロ〵と見守つてから、

「とにかくひも(情夫)つきには困るよ」とふてぐ＼しく言つた。

「まア待ちねえ」と辰つァんは受けて、いが栗頭をぬつと周三の方へ突き出し、「お前さんといふ男が喰つついてるんで、おかみが文句をいやがるんだよ。ひもつきには慾りぐ＼してるといやがるんだ。一體全體お前さんのやうなれつきとした一人前の男が、何だつてひもなんぞになつてゐるんだえ。お前さんがぶら下つてゐるばかりに、この女もこんな所へ身を賣らねばならなくなるし、おまけにそれもうまくは賣れねえつてことになるんだ。せめて、自分だけは自分で働いて喰つたらどうだえ。」

「……………」周三は、蒼白い顏をねぢ曲げながら視線を亂しておどぐ＼した。それがいかにもおどけなくまた意氣地なく、生れつきのひもらしい感じであつた。

「そんなことを言はないで下さい」おきみは辰つァんへ答へた。「あたしから賴んで無理にこの人を引き寄せてゐるのですから。あたしは、この人がついてゐるからこそ、どんなことでもする氣になつてゐるのですから……」

「お前の心懸けァそりや感心だが、男の方が、それでいゝ氣になつて働かずにゐるつて法はねえ」

「働きたくつても仕事がないんですから仕方がないんです。……それに男は、女のやうにからだを賣つて喰ふことは出來ませんもの」

「そんなら死んでしまへやいゝんだ」

「……だから、この人は、いく度も死なうとしたんです」

「……………」

「そいつをお前が助けてるてえわけかえ？」

「…………」

「野暮なことを言ふのァお止しよ、辰つァん」とお銀ちやんが口を出した。「ひもといふもんは縮見たいなもんで、切り離したら生きちやゐられないし、と言つて喰つつけといてもやつぱり、なァんて縁喜でもないことを言つて悪いわね。つまりそら、花に蝶々、水に魚で、持ちつ持たれつ、その味は辰つァんなんかにァわからないのよ」

「へん、そんなことを言ふなら、默つてこの花と蝶々と引き取つたらどうだえ？」

「それとこれとは別問題ぢやないの」

「面白くでもねえ……」

辰つァんは、さう言つて、急に、例の眉間の瘤の周圍に、恐ろしい狂暴性を浮ばせ、おきみと周三へ言ひかゝつて來た。

「とにかくお前達に言ふことがあるんだ。といふのァ、わしァこのおかみの亭主だと言つたが、そいつァ嘘だぜ。先づそれを承知して貰つて、それからわつしの商賣は夜店商人といふことにしてゐたが、おりや内職、本職はこの中の女の周旋屋で、それでおまんまを喰つてる男なんだ。ね、そいつをよく承知してくんなよ。かう言つちまや、お前達がいくらドチでも覺悟ァきまるだらうね。ぶちまけたことを言へや、わしァ、お前達がこないだ長野の方から來た終列車で上野へ着いた時から、後をつけてたんだよ。ちやうどわしが張つてる所へ、おめえ達はボンと飛び込んで來たのさ。ねえ、だから、このわつしに摑まつて、この中へ連れ込まれりや、もういくらヂタバタしたつてどうにもならねえ、つてことをよく承知しなよ。……ところで、今改めて言ふんだが、お前達ァ馬鹿に××つてものを恐がつてるね。いや、そいつァお互ひだが、そこでその××を恐がるものが隠れて絶對××だてえ所は、廣い東京にも、こゝと××の二ヶ所しかねえんだ。そりやお前達も百も承知で、承知だからこそわつしの言ふなりにこの中へ入つて來たんだらうが、とにかく、××の御用、つて奴が嫌えなら、こゝにぢつとしてゐるねえよ。お前達に取つちや、この中は極樂で、この外はどこもかも地獄なんだ、てえこともよく承知しときなよ。そいつを承知して、このおかみの言ふことをきいてりや、第一おめえ達の身が安全だし、こゝん

家でも安心して世話をしてくれるし、金も貸してくれるてえ譯だ。どうだ、解つたかね？」

「えゝよく解りました」

おきみは、垂れてゐた頭を更らに低く垂れた。

「君もわかつたらうね？」

辰つァんは、周三の顔を覗き込んだ。

「え、わかりました」

辰つァんはこゝで、お銀ちやんを顧み、

「二人が口を揃へてかう言つてるのだから、どうだ、置いてやりねえよ」

「……仕方がない。當分置いといて見ようかね」

お銀ちやんは、生あくび混りにさう答へた。

「ぢや、着物を買ふぐらゐは貸してくれるだらうね」

「まア、五六日樣子を見てからね」

「賴むよ」辰つァんは、こゝでもう一度、狂暴性の浮んだ顏でおきみと周三を睨みつけ、

「この中は、田舍のだるま屋たァわけが違うんだからね、こゝからずらからうなどとたくらんだら、脚の一本二本、おつぺしよられると思はなきァいけねえぜ。」

二

「今の男、口ぢやあんなことを言つても、氣は至つていゝんだよ。もつともあの鼻の上のこぶがくせ物だが、今日からこ

のお銀ちやんがついてゐるんだから、安心してりやいゝよ」

辰つァんが歸つたあと、お銀ちやんはさう前置きをして、おきみの方へ、

「それでどう？　今晩からでも働いて見たら」

「……え、でも、こんななりぢや」とおきみは、目を膝の上へ落した。それはボカ／＼になつたメリンスの羽織と着物で、膝のあたり、地がすけて見えてゐた。

「着物なんか何だつていゝのよ。厭ぢやなかつたら、この羽織を着ちやどう。模樣さへパッとしてりや、男の目なんかごまかせるのよ。」

「でも、あなたが困るでせう。」

「だからね、代るばんこに着ませうよ。實はね、あたしは、名義はこの家の主人だけど、ほんとうの主人は、この表通りの自轉車屋なのよ。それであたしは、この家の呼び込み口一つと二階の一間だけを、毎日二圓の日拂ひで借りてるのよ。だからあたしはあんたのほんとうの主人ぢやないし、つまり二人で共同に働くといふわけになるのだからね、この羽織も共同で使へばいゝのさ。ね、その代り、さういふ譯だから、お金もなし、あんたにもさうたんとは出せないのよ。それにあの辰つァんにも周旋料を拂はなけりやならないし……」

「それぢや當分、それを拜借さして下さいね」

「拜借なんて代物ぢやないのよ。この裏を見てごらん」とお銀ちやんは枯れた芭蕉の葉のやうに横切れのした裏を返して見せた。

「それはさうと、うちの奴がこんな場所の店へいきなり出て、お客が取れるでせうか？」

周三は、青白い頬を撫でながら、おど／＼と訊いた。

「ところが案外よ」とお銀ちやんは聲をひそめ、「今、お店でお客を呼んでゐる娘ね、あれはやつと十七よ。こないだ目黒の方からうちへ始めて遊びに來て、店へ坐つて鏡を見てゐたら、どうだ上つてやらうか、といふ客の聲がするので、聞き覺えで、おあがんなさいな、と受けたら、それがすぐ上つて來たのよ。それが手始めであの娘はこの商賣を始めたのだけど、今ぢやもう立派に一人前よ」

「それで、僕達は、その自轉車屋とはどんな關係なのでせう？」

「何の關係もないのよ。その點は、ちよつとも心配しなくもいゝの……あの自轉車屋も考へると賴さ。自分ぢや表できれいな顏をしてゐて、裏へ廻つてぼろい儲けをしてゐるんだからね。そんな家が外にもいくらもあるのよ。表ぢや、酒屋をしたり、荒物屋をやつたり、煙草屋をしたりしてゐる家がね、人のふんどし、ぢやない、人の××で角力を取らうつて奴さ。」

お銀ちやん始めは、狡猾な意地惡のふて〲しい女に見えたが、かうして話して行くうちに、腹の底まで平氣で見せるあけすけのお人好しに見えて來た。おきみと周三はいくらか氣樂な氣持ちになつた。

お銀ちやんは二人をまた下の三疊へ下した。そしておきみへ言つた。

「ぢや、お化粧を直して坐つてごらんよ。髮は、今晩はそれでいゝわ。あしたの朝、髮ゆひさんに行つてらつしやい。あんたはきつと結ひ綿が似合ふわね」

おきみは鏡臺へ向つた。その鏡へ映つた、眼の細い下ぶくれの顏を、周三はこつちからとき〲ぬすみ見て、そして泣きそうな顏をした。

お銀ちやんは、おきみの背へ向つて、店へ坐つてお客を呼ぶ方法を敎へた。その中に二つの××があつた。××を呼び込まぬこと、ひやかし客と長話しをせぬこと。

「××の顏はあとで教へるけど、ひやかし客と長ばなしをしてゐると、やつぱり××に踏み込まれるのよ。そしたら、主人名義のあたしとあんたとが三日の拘留を喰つた上に二十六圓づゝの金刑だからね。表の自轉車屋が、あたしのやうなものを主人として屆けとくのも、そんな場合の用心なのだが、それで一番馬鹿を見るのはあたしなんだからね。そこはしつかりやつておくれよ」

おきみは、髮を直し、顏の化粧をすますと、その顏をお銀ちやんの方へ向けて、

「これでようございますか？」と言つた。

周三はそれを見ると、顏を赤くしてうつ伏した。

「さうね」とお銀ちやんは、出來上りの品物を吟味するやうに、「眉をもつと濃くして、頰紅ももつと染めなさいよ。何でもいゝから、うんと若く見せる算段をしなきァ駄目よ。そんなこと御承知でせうが」

やがておきみは、店へ――やつと一人が坐れるほどの場所へ出て行つて坐つた。そして、音もなく左右へ流れる人の影へ聲を掛けた。

が、その聲は泣くやうに顫へた。

「駄目よきみちやん、そんなことぢや」とお銀ちやんは茶の間から怒鳴つた。「もつとかう力のある聲で、歩いて行く野郎をうしろからねぢ伏せるやうな勢ひでなくちや。……いろんな野郎が通るだらう。みんな雜魚野郎なんだから、こつちもそのつもりで、この馬鹿野郞怒鳴るつもりで呼びアいゝんだよ」

さう言はれると、おきみはますく聲がふるへて來た。夕方、外から見たときは、男を呼び込む女の聲が、惡寒を感じたほど哀れな悲鳴にきこえたが、かうして内から覗いて見ると窓先を群がり過ぎる男共が、一種奇怪な原始動物に見えた。

おきみは、窓の下に怯えちやまつて、一人ほろ〳〵涙をこぼした。

三

一ト月して、春も過ぎた。この中では、春が來て、その春も過ぎたことを、花が咲き、花が散り、木の葉が繁り出したことで知るのではなかつた。この中を縱横に流れてゐる溝の水が、溫氣でぶつ〳〵と煮え出し、その中にボーフラが行列をつくり出し、それが一つ一つ羽を生やして露次から露次、部屋から部屋へ、ワン〳〵と群がり出したことでそれと知るのであつた。

おきみは、近くの洋品店の二階の三疊の間借りさしとく周三のところへ、親雀が小雀の巢へ餌を運んで行くやうにして、一日に一度づゝその日の食べ物を運んでやつてゐた。

周三は蠻つた顏に、ふがいなささうな色を浮べながらも、その餌の方へ口を開けて持つて行つた。

暗い露次々々には、漁色亡者がボーフラのやうに夜每に群がりふへて行つた。

さういふ或る夜のこと、お銀ちやんの家では例の十七の女——八重ちやんが、うつかりして内業なひやかし客を呼び込んだ。二人は、呼び込み口の内と外とで、引張つたり引つ張られたりしてゐた。

そこへ××が飛び込んで來た。その結果は簡單明瞭であつた。八重ちやんと、主人名義のお銀ちやんとは、翌日午前九時迄に、T署へ出頭を命じられた。卽ち、三日の拘留と二十六圓の金刑とを二人は言ひ渡されたのである。お銀ちやんは、血相をかへて怒り出した。

この私娼窟に於ては、この體刑と金刑とが、周期的に、一年に×回乃至×回の割りで、全部の銘酒屋へ科せられることになつてゐた。で、一度處罰されると、一つの家で、出方（私娼）と主人とが二人で都合六日の拘留と五十二圓也の罰金を

申し渡されることに極つてゐた。だから、これを一年四回と見ても、一年間一軒の家で、二十四日の拘留體刑と、二百八圓の金刑處分をきちんと命令された。これは彼女達の一ヶ年の實收入の×分の一に當るので、彼女達はこの「本署へ出頭しろ」に對しては、いつもおぞけをふるつてゐるのであつた。

お銀ちやんは、毒々しく塗つた紅の唇から赤い唾を吐き飛ばしながら、八重ちやんを呶鳴りつけた。

「……白首のひよつこの癖に、いけ圖々しいことをしやがるから、こんなことになるんだよ。あたしや、どうしたつて行きやしないから、どつかで代りをめつけて來て頂戴」

「だつて、罰金はお銀ちやんが出すんぢやないんでせう。自轉車屋で出してくれるんですもの、ずゐぶんいゝわ。あたしは罰金も自分で出さなきァならないのよ」

八重ちやんも、固い小さな顏を角張らせて、負けてゐなかつた。

「八重ちやんが自分で出すのは當り前さ。しかしあたしの分を自轉車屋で出すなんてこと、當てになりやしないよ。あたしは、八重ちやんとは何の關係もないんだからね、八重ちやんの卷き添へを喰つちや堪らないよ」

「そんなこと言つたつて、お銀ちやんはこの家の主人なんでせう」

「そりや名義だけぢやないかね」

「名義だけだつて、主人は主人ですもの」

「だから癪で堪らないのよ。自分で泥棒をしといて、罰は人に被せるつてんだからね」

「そんなこと××へ行つて言ふといゝわ」

「へらず口をいふとのすよ、八重ちやん！」

「…………」

八重ちゃんはたうとう默つてしまつた。

お銀ちゃんは、唾の泡立つた脣を嘗めまわしながら、まだ何かを叫ばうとしてゐたが、やがてその目をおきみの方へ向けて、

「ねえ、濟まないが、あんた、あたしの代りに行つてくれない」と言つた。

おきみは、さう來ることを豫期してゐたが、いざさう出て來られると、はら／＼しながら、

「……でも、あたしが代つて行つてもいゝんでせうか」と何かを嘆願するやうに言つた。

「そりや構やしないのよ。あんたが代つて行つてくれりや、その間の稼ぎ賃まであたしが出すわよ」

おきみは頰に亂れ下つた結ひ綿の髮を、小さな脣でなぶりながら、深い溜息をついてゐた。

「いやなの？」

「……お銀ちゃん」おきみはおろ／＼と答へた、「そればかりは勘辨して下さいね。」

「あら、さう！」とお銀ちゃんは、ジロリと睨みつけて、「どうせさう來るだらうと思つてたよ。だからひもつきは大嫌ひさ！」

「さういふ譯ぢやないのよ」

「ぢや。何のわけさ。……あゝ解つたよ。ずらかりもんだからね、警察へ行つたらそいつを洗ひ出されるのが恐いんでせう。えゝ、もう賴みませんよ。その代りあしたつからこの家は空つぽになるんだから、今夜のうちに何處かへ行つちやつておくれよ。だけど、借金はきれいにしてつて貰はなきやア困るよ」

その夜更けである。おきみと周三は、このお銀ちゃんから、所有物一切を卷き上げられてしまつた。おきみは持ち金全部を、周三は、洋品店の二階で使つてゐた夜具まで强奪された。そのため周三は、その部屋からも追ひ立てられてしまつ

た。

二人は途方に暮れ、どこへ行くあてもなく、溝に沿つた暗い露次をうろついてゐた。

と、うしろから二人を呼びかけるものがあつた。見ると、八重ちやんである。

「ねえ、あんた達、これからどこへ行くの？」

「そのあてがないのよ」おきみはほそぐと答へた。

「さうだらうと思つて追つかけて來たのよ。それぢや、あたしについてらつしやいよ。只で泊めてくれる家があるんだから」

「それは銘酒屋ですか？」周三は、もう怯えてゐるやうに訊いた。

「うぞよ、何でもない家なのよ、あたしが、前に世話になつたことのある家よ」

二人は、八重ちやんの後について歩き出した。もう一時を過ぎてゐたが、雜魚野郎共はまだどの露次にも七人八人とうろついてゐた。

長屋の胴腹に穴をあけて造つたトンネル露次まで來ると、周三は、そこの破目に凭れてしやがんでしまつた。

「どうしたの。氣持ちが惡いの？」おきみは、腰をかゞめて周三の横顔を覗き込んだ。

周三は、何んにも答へず、兩腕の中へ頭を埋めた。

「どうしたのよ。ねえ」

「……お前一人、ついて行きなよ」周三は腕の下で言つた。

「何をいつてゐるの！」

「おれがついてるから、お前までこんなことになるんだらう。……おれは……」

「馬鹿なことをいふんぢやないのよ。あたしは、あんたがゐなかつたら、今頃、生きてやしない、あんたは、あんたは：：」

おきみはさう言つてゐたが、いきなり周三の腕を取つて引き起し、その胸へしがみついて、

「あんたは馬鹿、あんたは馬鹿！」と咽びながら叫んだ。

「…………」

周三は、默つて立つてよるべない足どりで歩き出した。

四

その夜、八重ちやんの案内で二人が行きついた所は、赤い軒燈の下に、外科、皮膚泌尿科、花柳病科といふ看板がかけてあつた。

玄關の三疊に坐つてしばらく待つてゐると、なまづの顏に似た目の小さい口の大きな男が、西洋寢卷を着て出て來た。

「あゝ、そんな譯なら、とにかく今晩はこの坐敷へ寢たらよからう」八重ちやんの話を一通りきいてから、彼はいかにも勿體ぶつてさう言つた。「人の病氣の世話は仕方がないが、そんな世話まではちよつと困るのだがね」

翌る朝、このなまづ醫者は、おきみと周三を、二階の居間へ呼び寄せた。彼はそこで朝酒をやつてゐた。だらしなく膨れた兩頰を、無花果のやうに染めて、娘とも見える若い女房(?)と差し向ひに坐つてゐた。彼は先づ十圓札五枚を、おきみと周三の前へ竝べて、

「そりや、當分のお小使ひに上げときませう」と言つた。それだけで、その金の性質に就ては何の說明もせず、急に語調を、醉つぱらひ口調に變へ、その大きな口をパク／＼させながらこんなことを言つた。

「君達は、萬物の理想は自滅に在り、てえことを知つてるかね。たとへばだ。醫者といふものは病氣を直すことが仕事で、その理想は、この全世界の人類から、あらゆる病氣を驅逐するのが理想なんだ。だが、この理想が實現したとしたら、結果はどうなる。醫者は一人もいらなくなるぢやないか。卽ち、醫者の理想は自滅に在りだ。敎育家も然り、宗敎家も然り、軍人もまた然りさ。これは、マルクス主義よりは徹底した理窟だよ。そこでだ、女の理想は何か？　子孫をふやすこと。が、こりや理想ぢやない。女の理想は、人間生活のあぶらとなり石炭となり食糧となることだ。都會を發展させるのも女だ、植民地を開拓させるのも女だ、軍人をしてよく戰爭せしめるのも女だ。……まア、ざつとそんな譯で、これらの理想を實現せしむるためには、われ〳〵はあらゆる助力と尊敬とを拂はなければならない。といふのだ。どうです。實に徹底した理論でせう」

おきみと周三は、妙な惡臭を持つた煙幕を目の前にひろげられたやうに不快を感じた。しかし、膝の前に置かれた五十圓の手前、目をしばたゝきながら神妙にしてゐた。

そこへ、お召しの着物をぞろりと着た一人の老婆が、誰の案内もなし、何の豫告もなしにのそりと入つて來た。なまづ髯者の煙幕は、「この老婆が現はれるまでの空虛を濁し埋めるためのものらしかつた。

老婆は、立つたまゝ、おきみと周三をじろ〳〵と見下した。その目は飛び放れて大きく揮いてゐた。

「このお婆さんは、うちで懇意にしてゐる方だ。君達のことをよく賴んどいて上げたから、安心して、何もかも任せるがいゝ。お婆さん、ぢや、お願ひするよ」

「はい〳〵」

間もなくおきみと周三は、その老婆に連れられて外へ出た。

日中の露次は、水の枯れた河床であつた。その中を、五月の温氣が、えたいの知れない臭氣を含んで流れてゐた。老婆

は、これを我がもの顏に、少し腰をかゞめて悠々と步いた。とき〴〵二人の方へふりかへつて、その大きな目を光らした。それはまるでひきがへるの目であつた。

電車線路を横ぎつて、三尺の露次を二三度折れると、二階とも三階ともつかぬ、屋根の歪んだ家の前へ來た。それは古い貝殼のやうにガラ〳〵になつて煤んでゐた。元は私娼を置いてゐた家らしく見えたが、今はそれにも使へない家である。

老婆は二人を、先づ、入口の横の二疊へ坐らせた。それから、おきみへ、

「お前さんだけ、ちよつとこつちへ來ておくれ」

と言つた。

おきみは、梯子段を上つて行つた。そこに高い所に北向きの小さな窓が一つしかない六疊ほどの部屋であつた。座敷牢のやうに暗く、空家のやうに荒れてゐた。道具といつては、火鉢代りであらう、つるの取れた古鍋に灰を盛つたものが一つ置いてあるきりであつた。勿論、それには火は入つてゐなかつた。

けれど老婆はその古鍋の前に坐つた。そして、入口の所に立つてゐるおきみをヂロリと見上げ、

「こつちへ、おいで」と言つた。その目とその聲には、おきみはゾーッとした。それには、動物的な凄味と、妙に鋭どく冷たい超人間的な威壓力とがあつた。そして更らに妖婆の持つ無氣味さが、そのからだから發散してゐた。

「それから足袋をお脫ぎ」

おきみは、言はれるまゝにせずにはゐられなかつた。

「そこで、右の足で、この鍋の灰を踏んでごらん」

おきみはその通りをした。うすら冷たい灰が足の裏にふかりと觸れたとき、おきみは、髮の毛がワーッと逆立つやうな思ひがした。

老婆は、灰の中に印されたおきみの小さな足跡をぢつと見詰めた。それから、その目をまばたきもせず、おきみの面へ移して、

「お前さんは、兩親がないね？」と言つた。

事實、おきみはさうであつた。

「兄弟はあつても、はなれ〴〵だね」

それもその通りであつた。

「他人の家ではあるが、子供の時は、しやわせに育つたね。けれど、この五六年は、所々方々、うろつき歩いたね。」

それも當つてゐた。

「さア、その五六年の出來事を話してごらん。」

お前が言へなければわしが話してやる、といふ言葉がその裏に潜んでゐた。

「……」おきみは面を伏せて、かたく口を噤んだ。

老婆は、片手を延して、おきみの顎を押し上げ、

「言へなければ言はなくともいゝ。けれど、これだけははつきり言つてごらん。この中へ連れて來られる前、どこに何をしてゐたか」

「…………」

「なか〳〵頑固な女だね、ぢや、かうして言はして上げようか」

老婆は、自分も立ち上りながら、おきみのまへ髪を掴んでぐいと引き立て、一方の手で、背後（うしろ）の襖をガバッと押し開けて、そこへおきみの顔を持つて行つた。おきみは、首筋を持つて吊された猫のやうに、何の抵抗も出來ず、されるまゝに動

いた。

が、そこでおきみは、危うく倒れやうとして、襖へしがみついた。その襖のかげには、大きな蜘蛛！　と思つたほど、蜘蛛そつくりの女が、ぢつと縮かまつてゐたのである。眞黑に痩せこけた顔、骨ばかりとなつた手と足．さうしてギロリと光つた目……。

「見たかね」老婆は言つた。「お前さんも、あんな目に會ひたくなければ、白狀しなよ。わたしはこの中へ逃げて來た女を三百人も手にかけて、これまでの經歴をみんな白狀さしてゐるのだから、わたしをごまかさうたつて駄目だよ。それ、その顔に、そのからだに、何もかも書いてあるぢやないか。白狀しなければ、白狀するまで、そこの女のやうな目に會はしとくよ。死ぬまであゝして置くよ。死んだ後は、あの大口の醫者が始末をしてくれるからね……」

「いひます、いひます、みんないひます……」

おきみは、疊の上へつつ伏して、顫ひおのゝきながらさう答へた。

さうしておきみは、胸の底の底へしまつて置いたこと、それは恐ろしい爆彈で、それに觸れたら、自分と周三とは粉微塵に粉碎されてしまふのだと思つてゐたこと、だからこれだけはたとへ殺されても言ふまいと自分に誓つてゐたことな、この老婆に依つて、みんな搾り出された。それはまるで、しめ木にかけられて搾り出されるやうなものであつた。

——今から二年前の春、はじめて福島縣K町の料理屋へ百五十圓で賣られたこと、しかしこれは、彼女の良人、周三の入院費（當時周三は、脚氣と肋膜で身動きも出來なかつた）をつくるためだつたので、半ば自分からすゝんで賈はれたこと。が、一年足らずして、群馬縣高崎市Y町の銘酒屋へ轉賣されたこと、この時は前借が四百圓にふへてゐたこと、この四百圓は七ケ月ほどの間に七百圓にふへたこと、で、それを消すために、つひに長野縣上田市の遊廓、M樓へ女郎として送られたこと、この時、彼女を女郎にする手續上不都合のため、良人周三と法律上離婚させられたこと、さうして、この

遊廓内での半年の間に、前借が八百五十圓にふへたこと、この頃から彼女は肺尖を悪くし、毎夜の勞働に堪へられなくなり××へ自由廢業を願ひ出たことが、××××から人道上許すべからざる不心得者として、こつぴどくどやしつけられ、再びM樓へ引き戻されたこと、こゝに於て彼女はつひに逃亡を決心し、良人周三の手を借りて東京へ脱け出して來たこと、

「……あたしは、殺されてもいゝ覺悟で逃げ出しました。あたしが逃げ出して來なければ、あの人(周三のこと)が自殺しさうだつたからです。あの人は、あたしが傍にゐなければ、生きてゐられなくなつたのです。あたしは、今となつてはもう、殺されても生きたいのです。あの人のために。だからどうぞ、あたしを警察へだけは届けないで下さい。あの人と離ればなれになるやうなことはしないで下さい。これだけは一生のお願ひです……」

老婆は、大きな目を半分閉ぢて、うす笑ひしながら聞いてゐたが、この時そのひき蛙のやうな目をギロリとむいて、

「おゝ、それは安心しといで、その代りお前さんはおほつぴらにお天頭樣の顏を見ることは出來なくなつたのだよ。法律の網をくゞつてゐる罪人なんだからね。その事をよつく承知しときなさいよ。……だが、お前さんもよつぽど運の強い女だね。お女郎屋から無事に脱け出した上に、この中へ逃げ込むことが出來たなんて、滅多にない話だからね。この中は、いはゞお城の中のやうなものだからね、どんな恐い敵でも、この中のものには、手出しが出來ないのだからね、その代りまたこゝを逃げ出したりしたら、それこそ最後だよ。この中からの出口は、監獄の入口へつゞいてゐると思ひなさいよ。警察の方でお前さんを見つけ損なつたら、わたしの方で摑まへて警察へつき出して上げるからね。さうなつたら、あの人と離れぐにされるどころか、お前さん達は、××××××××極つてゐるのだよ」

「いゝえ、もう決して、どこへも逃げ出しません。あの人と別れないやうにさへして下されば……」

かくておきみは、この老婆の手に依つて、そのかぼそい咽喉元を完全に摑み取られてしまつたのであつた。

五

老婆は、おきみをその部屋へ殘して、階下の女郎座敷へ降りて行つた。そしてそこにぐしやりとなつて坐つてゐる周三の前に、立て膝で坐りながら、狼が兎に向つて牙をむき出して見せるやうな調子で言つた。

「お前さんは、今日から、目も見えず、耳もきこえず、口もきけなくなつた男だと思ひなさるがいゝよ。お女郎屋から逃げ出した女についてゐるやうなひもは、さうならねば生きてゐられないのだからね」

そして老婆はニタリと笑つた。それから、下唇をつき出し、舌なめずりをしながら、

「お前さんの寢起きする部屋も世話して上げませう。夜具や炊事道具も貸して上げませう。そこでお前さんはおつとおなしく寢といでなさいよ。そしたら、あの女が稼いで食はしてくれるからね。それで、ひもといふものは、お殿樣見たいに、お腹がすいてもひもじうないといふ顏をしてゐるものですよ。もしも夢にでも、あの女を連れて逃げ出さうなどゝ考へたら、二人共、命はないものと思ひなさいよ。この中は、お女郎屋のやうな間ぬけには出來てゐないのだからね……」

周三は、蛇の毒氣に會つた蛙のやうになつてしまつた。よし、おきみはその咽喉元を絞められて、この闇のどん底へ叩きのめされてしまつたとしても、周三だけはむしろ餘計者として他界へ抛り出されるのかと思ひの外、同じやうに、その首と足とに、この闇の鐵鎖を結びつけられてしまつたのであつた。この男があつておきみは生きてゐるのであり、おきみが生きてゐる限り、その血と肉とを搾り取ることが出來ることを、老婆はすつかり見拔いてしまつたのである。これと較べると、周三を邪魔物とした長つァんなどはまだ他愛がなかつた。

こゝに於て周三も、おきみと同じやうに買はれた一個の商品といふよりは、おきみを生かすために捕へられた一匹の生き餌とされてしまつたのである。

その夕方、老婆の手に依つて、周三は表通りの蒟蒻屋の二階へ人質の如く預けられ、おきみはその近くの倉川といふ銘酒屋へ賣り込まれてゐた。そしておきみはその夜から再び、野良犬のやうな男を呼び込まねばならなくなつた。あのなまづのやうな醫者の不可解な言動もこゝで始めて解せたのである。

表通りではきれいな商賣をしてゐて、その裏へ廻つて私娼屋を經營し、彼女達から卑怯な搾取をしてゐる者が非常に多くあることは既に言つた。が、この外にもつと卑怯な搾取者があるのだ。それは、この私娼窟を圍んで商賣をしてゐるもの、醫者を始め、藥局、八百屋、豆腐屋、荒物屋、化粧品屋、要するに、彼女達の生活と直接關係を持つもの悉くが、有料、或ひは無料で、この私娼窟の女を周旋してゐるのであつた。彼等もまた、この私娼窟に寄生して生活してゐる寄生蟲であるからだ。一人でも多くこの世界へ私娼をふやすことは、取りも直さず、彼等自身の生活を豐かにすることであるからだ。

それは、蟻の一族が、油蟲の一族を育てふやしてその甘汁を吸ひ取るのと變りがなかつた。

この方法は、彼等自身をうるほすばかりでなく、私娼屋經營者側に取つても非常な利益となつた。即ち、本職の女衒（ぜげん）や口入屋から女を買ふのは、高い金がいるばかりでなく、上玉が容易に得られない。が、かういふ素人の手を通せば、世間知らずのうぶを殆んど無代で手に入れることが出來るからであつた。

兩者はこゝで完全に手を握り合つてゐるのである。が、この握手は以上の目的のためばかりではない。もう一つの重大な目的。それは、一度この巣窟へ引きずり込んだ女は、いかなる理由に依つても絶對に外界へ逃がさないための握手であつた。故にこの目的のためには、彼等は單なる握手には止まらず、更らに水も漏らさない連絡を取り一つの大きな有機體をつくり上げてゐるのであつた。

例の老婆が、その妖怪の凄みでおきみを引つ捕へて一室に監禁し、脅迫し、その法律的犯罪をも絞り出して、彼女の咽

喉元を完全に抑へ込み、同時に周三をも捕へた一匹の生き餌」としてしまつたことは、この有機體内に於ける一種の毒液の注射であつた。

かうなれば、この有機體は、個人の力では絶對に切り開くことの出來ない荊棘と毒草の原始林であつた。いかに切り開いても切り開いても、幾重の荊棘と毒草とが重なり合つて行く手を鎖し、動くことはます〳〵その刺と毒とに傷害されることになつた。しかもこの中に包圍されてゐる彼女達は、共同戰線を張ることに依つてこれ等の刺と毒とを相手に闘ふことは絶對に不可能にされてゐた。彼女達は、めい〳〵一人づゝ、鋼鐵の檻の中に監禁されてゐるからである。

このやうにして、おきみと周三も、あらゆる自由性を奪はれて、外界へ踏み出す力を完全に殺されてしまつたのである。

「さア、こゝは、きみちやんなんかの働くには、日本一のいゝ場所なんだからね。ひと身代つくるつもりで、どし〳〵働いてくんな」倉田の主人はさうおきみへ言つた。そして先づ商賣道具の衣裳を買はせた。それは、前の女から卷き上げたものらしい古物の錦紗の羽織と袷とで、袖口やふきはすり切れてゐたが、それにおきみは三十圓を拂はせられた。これと同時に、例の老婆の周旋料としてまた三十圓を取られた。醫者が渡した五十圓は、實はこの倉田の主人が出した金で、それは衣裳代及び周旋料としてすぐに卷き上げるためのものだつたのである。

おきみは、さういふ着物を着せられ、再びいや應なしに店へ坐らされたのである。

その店は、溝に沿つた九尺幅の道路に面してゐた。この道路は私娼窟吉川のものでなく、一般人の通路にもなつてゐたので、實はこゝで商賣をすることは禁じられてゐた。といつても女が呼び込み窓に坐つてゐる現場さへ見つからなければ罰にはならなかつた。

そこで、この道路に面してゐる六七軒の家は、互ひに連絡を取り、警戒しながら女を店へ坐らせてゐた。

倉田では、めざしのやうに干からびたおかみが、いつも便所へ入つてゐて、その窓口から絶へず表を見張つてゐた。主

人はまたその反對の家の隅の破目板の隙間から、往來を覗いてゐた。主人は、片目で、見える方の目は出目金のやうに出張つてゐるので、それは隙間から覗くために出來た目のやうに見えた。

さうして、恐い目を見つけたものが逸早く店の女へ合圖をするのであつた。合圖がかかると女は素早く窓を閉めて奥へ引き込む。この合圖は次ぎ〳〵と傳はつて、そこに並んでゐる店の女は順ぐりに窓から姿を消して行つた。それは、親蛙の鳴き聲で、子蛙が一せいに水面から出たり引つこんだりするのに似てゐた。

「だから、うちでは、パッと目につく着物を着てゐて、客が寄つて來たら素早いところで、いや應なしに引きずり上げなきァ駄目だよ、まァふみちやんのやり方を見習ふがいゝ、」

倉田の主人はさうおきみへ言つた。

ふみちやんといふのは、同じ家に働かされてゐる千葉生れの、十三の時に男を知つたといふ、大根のやうな手足を持つた大女であつた。倉田の店の呼び込み口は一つしかなかつたので、このふみちやんとおきみは、三十分交代に店へ坐ることになつたが、ふみちやんの番が來て店へ坐ると、あのふやけたからだから、どうしてあんな聲が出るかと思はれるやうな、彈力のある強靱な聲がその口からほとばしり出た。またふみちやんの手は吸盤を持つてゐた。呼び込み窓へ近づいて來た男の手首を一度握ると、金輪際離れなかつた。男は泣き顔をしながら上つた。

「どうだ。ふみちやんの腕は凄いもんだらう。上るときはあゝして泣きべそで上つても、かへるときァえびす顔だぜ。きみちやんもあゝならなけりや一人前たァいへねえよ。」

主人はまたそんなことも言つた。

しかしおきみには、ふみちやんの半分の眞似も出來なかつた。彼女は、店へ坐ると、その小さな窓口から、往來に沿つた溝の水をぢつと見詰めてゐた。眞黒な水が淀んでゐる面に、あぶくが上つては消えるのをぢつと見詰めてゐた。

「そんなことぢや商賣にならん」片目の主人はまた言つた。「仕方がない、きみちやんは奥へ引つ込んでゐて、ふみちやんに客を取つて貰ふことにしよう、その代り分け前は七三だよ」

それからおきみは、ふみちやんの呼び込んだ客を當てがはれるやうになつた。同時におきみは、窓から溝の水も見ることが出來なくなつた。朝から晩まで眞暗な茶の間の隅に、蝙蝠のやうにうづくまつてゐなければならなかつた。

「旦那！」おきみはたうとう言ひ出した。「濟みませんが、とき〴〵は踊鵜屋の二階へかへして下さいませんか」

「ちえッ！」主人は片目をむいて、「おや、かうしなよ。御亭主をうちへ泊りに來さしなよ。きみちやんの大事な人だから、特別ロハで泊めて上げらア」

この家の二階の部屋は、三角形のと五角形のとで、何疊とは數へられない廣さを持つてゐた。物置小屋をそのまゝ部屋に直したやうなもので、窓はあつても、それは闇を吸ひ込む窓でしかなく、これこそ蝙蝠の棲みさうな眞暗さであつた。

おきみは、からだのあいた夜は、この部屋の一つへ周三を呼び寄せた。そして、周三のふところへ顔をぐい〳〵押しつけ、くつ〳〵と聲をしのばせて咽び泣いた。

六

夏がやつて來た。そして炎熱は、無數の蚊と共に溝から湧いて來た。それは、汚物から湧いたうぢ蟲の如く、この世界の家々を取り卷いて離れなかつた。その熱度は、朝も夕も夜半も變りがなかつた。ぢつと毒瓦斯のやうに澱んで動かなかつた。

おきみのからだはだん〳〵と衰弱して來た。彼女は、二階の三角形の部屋へ引き込み、終日終夜、身動きもせず寢てゐることがあつた。

ふみちやんは、その枕元へ來ていぎたなく坐りながらかう言つた。

「あんたも、あんな青茄子見たいな男にいつまで喰つついてゐるから、そんなことになるのよ。それよりどつかの若旦那でも引つかける算段をした方がいゝわよ。地獄の中にやいゝことも悪いこともないんだからね」

[illegible]と、或るむし暑い夜、この家のおかみが腦卒で突然死んでしまつた。

ふみちやんは、待つてましたと言はぬばかりに、死んだおかみが坐つてゐた長火鉢の前にぐでんと坐つて、終日煙草ばかりふかしてゐた。彼女は、長火鉢の前を獨占すると同時に、おかみの夜の××まで占領してゐたのである。

さうしてふみちやんはおきみへ言つた。羽をむしられて飛べなくなつてゐる庭鳥の尻をひつぱたくやうにして、

「ねえ、あたしはもう店へ坐つちやゐられないから、あんたが代つて坐つて頂戴よ。そのかはり、捨て身になつて、命がけでやらなきァ、あたしの代りはつとまらないよ。死んだつもりでやつてごらんよ」

これは、羊に向つて野牛の蠻力を強要するものである。――ふみちやんはもう、立派に野獸のやうな無智な搾取者になりきつてゐたのである。

おきみは、おぞ毛をふるひながら思つた。

――こんな家にいつまでぐづ〳〵してゐたら、それこそ血も肉も絞り殺されてしまふに違ひない、と。

が、おきみがさうと氣づいた時はもう遲かつた。おきみはいつの間にか、こゝの片目の主人から、途方もない悪辣な策略のわなに掛けられてゐたのであつた。

主人は、その獨眼をギシ〳〵音のするやうに光らしながらおきみへ言ひ掛けた。

「ねえきみちやん、少し物いりが出來たんだが、借金をきれいにして貰へないかね」

「……すぐですか？」

「さうさ、四五日中に」
「そりや無理ですわ」
「なアにわけアねえさ、どつかへ住み替へりやいゝんだから」
「住み替へてもいゝんですか？」
「そりや、この場合仕方がねえ」
おきみに取つては、この家は吸血鬼の棲み家であつたので、これは耳よりな話であつた。で、その話をすゝめて見た。しかし彼女が返濟すべき前借の高を知つたとき、彼女は呆然としてしまつた。せい〴〵五十圓前後と思つてゐたのに、いつの間にか三百五十圓ほどになつてゐたからである。
「そんな筈はないでせう！」おきみは、息を彈まして訊き返した。
「と、思ふだらうが、よく考へてごらんよ。ひもの二人も持ちア、だれだつてそれぐれえの借金は出來るぜ」
「あたし、ひもを二人も持つた覺えはないわ」
「とぼけちやいけねえ、あれぐれえ注ぎ込んだら立派なひもだらうぢやねえか」
「だれのことをいつてるの？」
「あの、長さんのことさ」と、主人は、おきみの顏へ唾を吐きかけるやうに言つた。
「……？……？」
おきみはあつけに取られてしまつた。
長さんといふのは、東家一門の浪花節語りだと自稱してゐる、三十四五の、口の歪んだ小男であつた。最初、五六日に一度の割りでおきみのところに遊びに來て、金ばなれもきれいに、いやに乙がつたことを言つてゐたが、そのうち三圓五

圓とおきみの寡口から卷き上げて行くやうになり、やがて、おきみから直接取れなくなると、おきみの名で主人から借金して行くやうになつた。

その金が積つて三百圓ばかりとなつた。で、おきみ自身の前借と合せて都合三百五十圓になつた、といふのであつた。只のおなじみさんへ、この主人がなぜそんな金を貸してしまつたか？

實はこれは、主人と、この男――長さんとの共謀搾取だつたのである。主人は、おきみのひ弱い肉體からは碌な金が絞り出せないことをその片目で鑑定すると、この界隈のぐれ仲間の一人である長さんと結托し、長さんを浪花節語りの色男に仕立て、おきみの政略的情夫としたのである。そしてこの情夫を通して間接におきみから搾取しようとしたのである。

その搾取手段は簡單であつた。即ち主人は、おきみの名に依つて長さんへ金を貸す。が、その實はおきみの名に依つて貸した金額の二割ほどを長さんへ與へるだけなのである。長さんは情夫をかさに着て、おきみの名で、三十圓、五十圓と主人から借りて行くやうに見せかけて、實はその二割ほどを、政略的情夫の手數料として自分の懐へ入れるだけであつた。即ち主人は、二十圓ほどを失つて、百圓ほどの借金をおきみの身に背負はせたのである。

「あと半年すりや、俺ァ師匠の名をつぐんだぜ。そしたら新宿の新歌舞伎座で、大々的襲名披露の看板を掛けて、一ト月ぶつ通して語ることになつてるんだ。ね、さうなりや、死んだ雲右衛門ぢやねえが、一晩千兩は樂にこのポツポへ入つて來らァね」

長さんは、おきみへよくそんなことを言つて、今、自分へみつぐことは蝦で鯛を釣るやうなものだ、と大眞面目な顔をした。そしてそんな時は必ず裏へ廻つて、主人との共謀搾取を行つたのであつた。

それが積つて三百圓ほどになつたのである。主人はこれだけおきみの身に背負はせるのに、僅か五六十圓を長さんの手に渡したに過ぎなかつたのである。

かういふ世界でのザラにある手であつたが、おきみは、主人からさう言はれる迄、夢にもこれを知らなかつたのである。

おきみはカッとなつて叫んだ。

「あたし……そんな、そんなお金知りません！」

さう叫ぶと、おきみは、ワーッと氣違ひのやうに泣き出した。泣きながら疊の上をころげ廻つた。

主人もそれには手がつけられず、遠くから長い棒切れで恐い蟲でも制(おさ)へるやうに、

「まァ〳〵、おとなしくしなよ。表へ人だかりがするぢやねえか……」

さうして主人は、自分の手に負へないと知ると、第二段の手を用ゐた。それは長さんをして脅迫させることであつた。只の女を買はして貰つてゐる上に金を貰つてゐるこの種のひもは、こんな場合には命がけの仕事でもする。この點、おきみを始めてこの世界へ誘ひ込んで來たあの長つァんと少しも變りがなかつた。

次の夜であつた。長さんは短刀(ドス)をふところに呑んで來て、二階の五角の座敷へおきみを呼んだ。そしておきみの手首をねぢ切るやうに掴んで、

「おい、ぐず〳〵言はずに、さつさと住み替へたらどうだ！」と、その歪んだ口を、おきみの鼻面へ持つて來た。

おきみはすくみ上つた。唇をふるはして、凍死者のやうに動けなくなつてしまつた。

七

その夜半、おきみは二階の三角の部屋で、周三のからだに絡みついて、息が止まるほど泣いた。聲を出せば階下の主人夫婦にきこえるので、聲を殺さうとすると、その苦しさでからだ中が、窒息者の斷末魔のやうに波打つた。

周三はハラ〳〵しながら、おきみのからだを引き寄せては抱きしめ、引き寄せては抱きしめた。そして、

「どうしたのだ？　ね、どうしたのだよ！」

と繰りかへし訊いた。

が、おきみはその理由を一言も言はなかつた。そのうちに、咽喉に詰る涙に咽びながら周三の膝の上へ訴へた。

「あたし、今まで、みんなあなたの爲めに生きてゐたのだけど、今日からは、あなたが、あたしのために生きて下さいね。……あたし、……あたし……このまゝ死んだら、死んでも死にきれない。……あなたさへゐれば、あたしは殺されても生きかへつてやります。そして、きつと、きつと、この仇を取つてやります……」

曾ては、すかんぽの莖のやうに水々しく美しかつたおきみのうなじも、今はどす黑く瘦せて、カサ〳〵に乾いてゐた。周三はそのうなじを抱きしめながら、一生懸命、何か言はうとしたが、これも涙がこみ上げて來て、なんにも言へなくなつてしまつた。

蟋蟀がよく鳴いた。その聲が二人の胸にしみ通つて來た。――二人はその夜、一睡もしなかつた。

その翌々日である。おきみは、このT私娼窟から、K私娼窟の方の新組といふ家へ、前借四百圓で住み替へさせられてゐたのである。一切、長さんの仕事であつた。

が、長さんの仕事を操つたものに、倉田の主人夫婦と、もう一人、あの奇怪な魔力を持つた妖婆がゐたことを忘れてはならない。

さうして、おきみの生き餌としておきみと共にT私娼窟へ移された周三は、天神樣の裏手の煙草屋の二階の四疊半へ押し込められた。こゝに移されてからの周三は、生き餌であると同時に、完全な人質となつたのである。あの妖婆によつて、この二人の前科――逃亡癖を持つたくせ者であることを知つた新組の主人は、二人の逃亡の豫防策として、煙草屋の主人と共謀し、周三の毎日の行動を一つ一つ監視し、束縛したのであつた。(一方、おきみに對する監視と束縛の嚴しさは言ふ

までもなかつた)。これは、おきみの身に投じた四百圓の資本を守るための卑怯にも巧妙な鐵條網であつた。おきみは、風呂へ行くにも、髪ゆひに行くにも、一々、おかみに附かれてゐた。またそのおかみは吸血鬼のやうにチヨコマカしてゐた。

周三は、おきみに會ふにも勝手には出來なかつた。朝、おきみが店へ座る前の僅かの時間を、それも主人と主婦が坐つてゐる茶の間で監視つきの面會だけが許された。

「それで物足りなかつたら、まァお客になつて泊りに來るがい、さ」

主人は、干からびた茄子のやうな顏に狡猾な薄笑ひを浮べて、周三へさう言つた。お客になつて泊るといふことは、泊り込み料×圓を現金で支拂へ、といふことなのだ。搾取するに相手を選ばない點では、こゝの主人は、T私娼窟の倉田の主人よりはるかに意地ぎたなかつた。

周三は、自分の妻と一緒に寢るために金を支拂ねばならないのである。その金こそ、妻の身を賣つて得た金ではないか。妻を賣つた金で妻を買ふ。その買つた金はまた妻の借金となる。こんな馬鹿々々しいべら棒な話がこの世にあらうか。全世界のあらゆる社會層の中で、かういふ不可思議な取り引きを强ひるものは、女の肉を切り賣り切り買ひし得るこの社會のみであらう。

しかし周三とおきみが、二人だけの夜を得るためには、二人だけで話し合ふためには、この馬鹿々々しいべら棒な話を敢へて實行しなければならなかつたのである。二人はいやでも、何故、かういふべら棒な事實があり得るのかを考へさせられた。それは、金といふものに絶對權があるからだ、と解釋して見た。だが、金はなぜこの絶對權を持つてゐるのか、この絶對權を與へたものは誰であるか、何であるか、そこまで考へて行くと、二人には何の解釋もつけられなかつた。只、金を通して、金の周圍に、すばらしい同時にえたいの知れない不可思議な力を持つたからくり人形が、どし／＼と足音高

く濶歩してゐるのを感ずるだけであつた。そして二人はその跫音に耳を塞ぎ、身を縮めるより外はなかつた。

「どうする？」

「逃げるしかないわ」

二人は、二人だけの夜にありつくと、この一言づゝの會話を幾度となく繰り返した。金を取り巻く跫音に怯えながら。

だが、彼等二人の周圍に張り渡された鐵條網から、彼等はいかにして脱出すべきか。彼等は、信州の方の遊廓から逃亡した時のことを思ひ出した。それは全く命がけの仕事であつた。しかし、今、この中から脱出することは、命がけどころではなく、脱出即ち死であるやうな氣がした。事實またさうであつた。

T私娼窟の有機的細胞組織は、このK私娼窟に於ては更らに巧妙に完備してゐたからであつた。殊に、おきみの買はれてゐる新細の家のある場所は、その一年前、新らしく開けた一廓で、一間の露次々々はコンクリートでかため、その露次々々の出口の兩側には必ず、お目附役を兼ねる商店が並んで夫れ〴〵の關所をつくつてゐた。ばかりでなく、春夏秋冬を通して、徹宵、ひつきりなしに廻つてゐる幾組かの火の番は、私娼達の逃亡をも見廻つてゐるのであつた。むしろそれが本職であつた。そして一度、私娼の逃亡を見つけたら、野良猫を捕へたやうに、打つて蹴つて縛り上げて、元の家へ引きずつて行くのが極りであつた。

かくて、この一廓からの逃亡は絶對に不可能といつてよかつた。

然らば前借をきれいに返濟しきつて、大手を振つてこゝを出て行けるまで、この中に働らくとするか。だが、その時はいつ來るか。それは恐らく永遠に來ないであらう。來るものは死だけであらう。

この中にゐても死、脱出しても死である。

「同じ死ぬなら、脱け出して殺された方がいゝわ」おきみはさう言つた。

「さう無茶なことをいふな。こゝしばらく落ちついて、みんなに安心さしといて機會をねらつた方がいゝよ」周三はさう答へた。

が、それから一と月過ぎてもその機會は來なかつた。そればかりか、五日に一度は、例の長さんがやつて來て、ふところに呑んで來た短刀を盤の上につき差して見せたりしては、おきみの逃亡を脅迫豫防した。

さなきだにやつれ衰ろへて來たおきみの身體は、この監視、この束縛、この脅迫のために困憊するばかりであつた。そして梯子段を上り下りするだけで、息が切れるやうになつた。

八

と、更らに一と月して、思ひがけなく、脱出の機會が掴めさうな事態が生れて來た。それは、その頃、同じK私娼窟内から住みかへて來た女、清ちやんの變事に絡まるものであつた。

清ちやんは、或る秋雨の降る夕方、一人の男につれられてこの新楯へ來た。彼女は泣き腫らした目を伏せて、臺所の板の間にぢつと坐つてゐた。

「そこは冷えるでせう、こつちへいらつしやいよ」

おきみがさう言ひかけながら傍へ寄つて行くと、彼女はまたワーッと聲をあげて、板の間へつつ伏してしまつた。

その夜更け、主人夫婦が寢しづまつてから、「そんなに辛いことがあるの？」さう、おきみは聞いて見た。と、清ちやんはまた涙を一ぱいためて、惡いひもに附かれて、二百圓あまりの借金を背負はされてしまつたことを話した。

おきみは、自分も同じわなに掛けられてゐることを話して、心から清ちやんへ同情した。

清ちやんは昂奮して、

「あたし、あんたを姉さんと呼ぶわ、だからあたしを妹だと思つてね」と言つた。

まだやつと十六だといふ、色の白い、髪のやはらかい、ふつくらとした顔の、鳳仙花のやうな娘であつた。それが呼び込み口に坐つて客を呼んでゐる姿は、あまりに痛々しかつた。しかも彼女は、夜、泊り込みを掴まないうちは、主人の嚴命通り、正直に、夜明かししてでも客を呼んでゐた。

「淸ちやん、いゝ加減で寢なさいよ」

おきみが姉さんらしくさう言ふと、淸ちやんはまた涙ぐんで、

「でも、しかられるわ」といつも答へた。

さういふ女であつただけ、新編の主人夫婦は、淸ちやんの行動に對してはそれほど嚴しい束縛を加へなかつた。それに、彼に手枷足枷をはめてゐる政略的ひもはあつても、彼女を逃亡させようとする情人は一人もなかつたので。

主人は、彼女の一人歩きにも可なりの自由を與へた。所詮は紐に結へられた猿の自由ではあつたが。しかし彼女はその自由を利用しようとはしなかつた。いつも、三尺四方の呼び込み口に坐つて、薄暗く靜まつてゐた。そして、どうかすると、呼び込み窓へ額を載せて、すう〳〵と眠つてゐた。客を取つた後などには、呼び込み口へ坐るなり、打ちのめされたやうになつて眠つてゐた。

「淸ちやん、そんなことをしてゐるなら、二階へ行つて寢たらどう」

おきみがまたさういふと、

「でも、しかれるわ」と彼女は答へた。

「だつて、からだを毀はしちやうぢやないの、こんな寒いところに眠つてゐたら」

「どうせもう、こはれてゐるのよ」

果してそれから四五日した夜、満ちやんは、呼び込んだ客を二階へ上げようとして、梯子段の中途から轉げ落ちてしまつた。眞白になつた唇を喰ひしばり、泡を吹きながらからだ中をガク〳〵顫はした。

「満ちやん、満ちやん！」

おきみは夢中で叫びながら、そのからだを抱き上げ、茶の間へつれて行つて寢かした。が、この時の彼女の心臓の鼓動は殆んど止つてゐた。

主人もさすがに慌てた。彼は、満ちやんのからだを背負ひ上げると、近くの病院へ運んで行つた。この病院が、もう少し遠く、醫者の手當があと五分間おくれたなら、満ちやんはもう死んでゐたに違ひなかつた。

カンフルの注射で、満ちやんの心臓はとにかく動き出した。

この病院は、この私娼窟占有の病院のやうなもので、こゝの院長は、T私娼窟のあのなまづのやうな醫者と同様、私娼經營者の身方ではあれ、私娼の身方では決してなかつた。頭の先から爪先まで完全に買收されてゐた。

病院といへば、材木倉庫のやうなバラック建てで、內部は、一間の廊下をはさんで、二十疊ほどの疊敷きの部屋がいくつか並んでゐた。それは柔道の道場のやうにガランとしてゐた。

この一つの部屋の中に、六七人の患者が、思ひ〳〵の方向に向いて寢てゐた。みんな私娼窟の女であつた。病氣は、大部分、肺病と性病であつた。

おきみは、內膜から外膜を冒され、最後に激烈な腹膜をやられた患者として、この部屋の隅へ收容されたのであつた。これは、九十パアセントまでは性病に冒されてゐるといふ私娼のからだに、當然の結果として現はれる病氣であつて、この病院內で死亡するもの、半數以上は、この病氣に依るものであつた。

もう秋も末になつてゐた。そして、じめ〳〵した薄暗い部屋の空氣は、さま〴〵の藥品の匂ひに濁されて、避病院內の

やうな臭氣が、部屋の隅々までぢつと澱んでゐた。おきみは、さういふ中に蠟燭のやうな白い顏を横たへて、辛うじて呼吸をつゞけてゐた。

言ふまでもなく、附き添ひの看護人が必要だつた。新組の主人は、その看護人として、おきみの良人、周三を引つ張つて來た。煙草屋の二階へ置いとくよりも、この病院へ入れとく方が、人質としても更らに完全な人質とすることが出來たからであつた。周三は、淸ちやんの枕元へ、木偶坊のやうにぎごちなく坐つて、終日、ぼんやりとしてゐた。

周三がさうして囚はれてゐるためか、おきみは、二日に一度は、この病院の淸ちやんを見舞ふことを主人から許された。おきみは、淸ちやんをほんとうの妹の如く愛する心から、淸ちやんの好きなドロップを買つては訪ねて來たが、一つは、そこで周三と顏を合せることに依つて、逃亡の機會を掴まうとしたのであつた。が、その機會は全く與へられなかつた。醫者や看護婦達の目は偸むことは出來ても、同じ部屋の他の患者の目と耳を偸むことは絕對に出來なかつたからであつた。

院長は、毎日一度、午後三時頃、一人の助手と看護婦をつれて廻診に來た。頭が禿げてゐる上に、その天邊がキユーピーのやうに尖つてゐるので、みんなはキユーピー院長と呼んでゐた。彼は、患者の枕元を、そつぽを向いて只ヅカヾヾと通り過ぎるだけであつた。可なりの重症患者の所へ廻つて來ても、僅かに腰をかゞめて義理一片に顏を覗き見るだけであつた。只その患者が、數百圓の前借を背負つてゐる場合は、その抱え主のため、その前借を殺してはならぬといふ義務から――女自身の命を生かさうとするのではない――割合に丁寧な見方をした。

「院長さん、苦しい。サンソを吸はして下さいよ」

「院長さん、早く注射をして下さい。痛くつて死にさうよ」

「院長さん、からだ中が焦げさうだよ。何とかして頂戴よ」

だが、それらの訴へ聲が、僅かの前借か、無前借の女の口から出たものであれば、院長は、尖つた頭をふり向けもせず

に部屋を出て行つてしまつた。
「馬鹿！　畜生！　呪ひ殺してやるよ」
「みんな死んぢまへ！　世界中の人間が死んぢまへ！」
「火をつけて燒き殺してやるよ。日本中、燒き拂つてやるよ！」
さういふ叫び聲が、院長の背中へ投げつけられた。しかし、院長は病人は一面狂人である、といふべら棒な見解から、それを平氣で受け流してゐた。
「一體、淫賣なんて商賣を、だれが發明したんでせうね？」
そんなことを言ひ出す女もゐた。
「そりや、こゝのキユーピー院長見たいな人間さ」
「それであたし達は、いくら稼いでも稼いでも借金がふへるばかりなんだね」
「さうさ。先づ旦那にしぼられて、それから借金に卷き上げられて、ひもに取られて、衣裳代に取られて、罰金に取られて、税金に取られて、おしまひにこんな病院に取り上げられてしまふ。……骨も殘りやしないわ」
「あゝ、早く死んぢまつた方がいゝ」
「さうよ、死んだ方がよつぽど樂よ。地獄だつて、こんなぢやないわよ」
みんなはそんなことを言ひ合つてゐるうちに、誰かヾワーッと泣き出す。と、それにつれて、そつちでもこつちでも泣き出す。
それは全く堪らない絕望の叫びであつた。

九

かういふ中で、満ちやんは日に日に弱つて行つた。それは、冷たい時雨が、彼女の頭の上の窓に降り注いでは止み、降り注いでは止みしてゐる午後であつた。おきみが、いつもの通り見舞ひに來ると、満ちやんは、ふるへる手をおきみの方へ差し延べた。

「苦しいの？」おきみは、自分の顔を満ちやんの顔の上へ持つて行つて訊いた。

「……え、」

「また注射をして貰ひませうか」

「いや」

「ぢや、酸素？」

「いや」

「どうしていやなの」

「あたし、直りたくないの」

「そんなこと言ふもんぢやありませんよ」

「だつて、ほんとうにさう思つてるのよ」そして満ちやんはぢつと目をつぶつてゐたが、

「極樂つて、地の中にあるの？」と言つた。

「……さア、さうでせうね」

「あたし、いくら極樂でも、地の中はいや。やつぱり天國がいゝわね。ひろびろと晴々してゐて、……あたし、この世で

地獄にばかりゐたんだから、死んだらせめて天國へ……」さう言ひかけて彼女は咽び出してしまつた。

「清ちやん！　清ちやん！」おきみは叱りつけるやうに叫んでゐたがやがて、これも涙に咽喉を詰らして默つてしまつた。見てゐた周三は、只おろ〳〵しながら、立つたり坐つたりしてゐた。

その夜更けである。清ちやんは全く危篤に陷つてしまつた。周三は、新繼の主人へ使ひをやつたが、主人は來ずに、清ちやんのひもがやつて來た。物質的にも、肉體的にも蛇の如く絡みついて、彼女の肉と血を絞り喰つて來たひもである。

廿七八歲の職人風の小男であつた。

その男は、蒼い顏を昂奮さして入つて來ると、紺の股引をはいた膝をきちんと合せて、清ちやんの枕元へ坐り、

「清坊、清坊！」と呼んだ。

しかし清ちやんの耳はもう聞えなくなつてゐた。彼は部屋を驅け出し、宿直の醫者を呼んで來て、强心劑を注射さした。と靜まりかけてゐた心臟は思ひ出したやうにコト〳〵と動き出した。がそれも五分としないうち、毀れた時計のセコンドが止るやうに靜まつて來た。

「清坊！　清坊！」

その男は、膝頭を揉みながらまた叫んだ。そして傍の周三へ言つた。

「これきりで死んぢやうのかねえ！」

そこへおきみが、ハア〳〵と息を切らしながら入つて來たが、この時はもう清ちやんの心臟はぴつたりと止つてゐた。おきみはすつかり昂奮し、髮を搔きむしつて泣き出した。泣くといふよりは、からだ中でうめき叫んだ。その聲には、いつものおきみの聲が入つてゐなかつた。月に向つて吠える犬の聲のやうな音を出した。周三は、そんな泣き方をするおきみを始めて見た。

おきみに取つては、清ちやんのこの死が、單なる清ちやんの死ではなかつたからである。それはもう自分の足元へもしのび込んで來てゐるものであつたからである。同時にそれは、自分と同じ地獄にうめいてゐるすべての女達の周圍を取り巻いて、隙を見れば飛びかゝらうとしてゐるものだからである。

清ちやんのひもは、膝の上に頭を垂れて石のやうに固くなつてゐたが、これもやがて、ボロ〳〵と涙をこぼした。彼は、おきみと周三に向つて何か言はうとして、頻りとからだをもぢ〳〵さしてゐたが、やつとのことで、

「こ、こ、こうなりや、あんた達がやりなせい」とどもりながら言ひ出した。

「こうなる前に、清坊を逃がしてやりやよかつたんだが、もう間に合はねえ。せめてもの罪ほろぼしに、あんた達に加勢しやす。後の始末はわつしが引き受けやすから、今すぐこゝからずらかつちやいなせえ」

この男は、おきみ達が逃亡を企てゝゐたことを既に感づいてゐたのである。

周三は、突嗟に湧いて來たこの男の義俠心に對し、ひそかに昂奮し、感謝した。長い間ねらつてゐた脱走の機會が、こんな場合に突然めぐつて來るとは夢にも思はなかつたからである。

けれど一方、清ちやんの死に依つて生命の根柢からぶち毀はされたやうになつてゐるおきみは、今、思ひがけなく與へられたこの機會に對して、殆んど何の昂奮もしなかつた。ばかりか、その話も耳に感じないかのやうであつた。

と、その男はまた言つた。

「ぐづ〳〵してちやいけません。新館の旦那か、長さんでも來たらおぢやんだ。外までわつしがつれてつて上げるから一人づゝ、わつしの後について來なせえ」

「おい」周三はおきみの肩をゆすぶつた。「しつかりしなよ。さつさと立つて出て行きなよ」

そして周三はおきみの手を取つて、廊下へつれ出し、

「天神様の前を右へ、それから川に沿つて左へ、二つ目の橋の袂で待ち合せるのだ。わかつたか、大丈夫か!」

周三はそれからまた一方の男の耳へ囁いた。

「こゝの醫者や看護婦に感づかれやしませんか?」

「そんな心配はいらねえ、わつしがついて出るんだから」

そこでその男は、おきみを前に立て、煙草に火をつけ、悠々とふかしながら、いかにもおきみの行動を監視するかのやうにして病院の玄關を出た。

間もなくその男は一人で引きかへして來た。そして廊下から、清ちやんの枕元に坐つてゐる周三へ目くばせをした。周三は立つて部屋を出た。

二人が廊下の突き當りの階段を降りかけた時であつた。逃げた筈のおきみが、ふら〳〵と階段を上つて來る。おや!さう二人が思つた瞬間、二人の目には、おきみの後から上つて來る長さんの姿が映つた。

「おい、松公、柄にもねえことをするなよ」

長さんは、さう言ひながら、おきみの先へ出て階段を上つて來た。そして松公と呼んだその男の前へ立ち塞がると、例の歪んだ口を思ひ切り歪まして、

「だれの許しを受けて、こいつらをずらかさうとしたんだ?」

「だれでもねえよ」

松公はさう答へて、長さんの鼻先へ顎を突き出した。

「ちえッ……まア外へ出ろ!」

「へん、どこへでも行くよ」

二人は、階段を下りて行つた。

さうして五分とたゝない時であつた。清ちやんの枕元に坐つてゐる周三のところへ、おきみが泳ぐやうにして走り込んで來た。

「あなた、大變よ、大變よ！　はやく逃げなさいよ。あの二人が往來で切り合ひをしてゐる」

周三は、蹴られたやうに立ち上つた。おきみはまた叫んだ。

「あの男が、長さんの短刀で、からだ中、まつ赤に切られちやつた。お腹からはみ出した腹わたを片手にぶらさげて……」

それは搾取者のからくりの罠に自分から引つ懸つた人間共の滑稽な悲劇であつた。

周三はその場へ行つて見ようとした。

「あなた、どこへ行くのよ。長さんは、こんどはあなたを殺しに來るよ。はやく、はやく逃げて下さいよ」

さう言はれると、周三は急に慌て出し、

「あゝ、さうか、どこへ逃げよう？」

「遠くへ、出來るだけ遠くへ」

「だから、どこへ？　場所をきめろ」さう言ひながら周三は廊下へ出て、その奥の非常口の方へ歩いてゐた。

「……新宿の、いつかの木賃宿」

「よし、わかつた。後からお前も來るんだぞ」

周三は、非常口の階段を、夢中で病院の裏庭へかけ下りた。表の切り合ひで病院中の人間が湧き立つてゐるので、周三の逃亡はだれにも氣づかれなかつた。

十

周三は、新宿旭町の宿、マルマンの三疊へ落ちつく間もなく、一人の警官に踏み込まれ、ちよつと派出所まで來たまへ」と言はれた。

周三はギクリとした。Kでの切り合ひ事件の參考人として調べられるのか、それにしてもどうしてこんなに早く足がついたのだらう。

周三は不安な不審に包まれながら、近くの派出所へ連行された。

警官は、電話で本署と打ち合せをした。周三に氣取られないやうに、要點には觸れずに話してゐたが、先方の言葉へうつかり鸚鵡返しに返した言葉に、上田といふ一言が入つてゐた。周三はすくみ上つてしまつた。

彼は、さつきの切り合ひ事件に關したことばかり思ひ極めてゐたので、この不意打ちには全く面喰つてしまつたのである。

「さア來た！　遊廓の逃亡がばれやがつた！　爆彈が破裂しやがつたぞ！」

旭町の宿マルマンへは、この春、周三とおきみがそこを引き上げると間もなく、捜索の手が入つたのであつた。そして再び周三達の姿を見たなら、直ちに本署へ密告するやうマルマンは嚴命されてゐたのであつた。

一時間の後周三は本署へ連行された。そしてすべてを告白させられてしまつた。おきみが現在どこにどうしてゐるかを。

「それでよろしい」一人の刑事は一枚の電報を見せながら言つた。「この電報通り、上田市のM樓から、君の女房の取り押へ方を依頼されてゐるのだから、こちらはそいつを先方へ渡せばいゝだけのことだ。君には大して迷惑のかゝることではあるまいから安心したまへ。しかし今晩はこゝへ泊つて貰はうぜ」

周三は、翌朝になつて、留置場を出された。彼はその足で、K町まで圓タクを飛ばした。しかし、さうして行つて見るまでもなく、おきみは前夜のうちに拘引されてゐた。

おきみは、最初は、長さんと松公の切り合ひ事件の關連者として引つ張られたのであつた。そこへ、周三の自白に依つておきみの在りかを知つたY署から、その捕縛方の依賴があつた。おきみは前後から挾み打ちを喰つたのである。おきみは直ちに調べ室から留置場へぶち込まれてしまつたのであつた。

一人殘された周三は、この場合自分をどう處置すべきかまるで見當を失つてしまつた。

――とにかくおきみに會はして貰はう。

それだけを考へながら周三はK署へ急いだ。彼は、刑事部屋まで入ることを許された。そこには、瓢簞のやうに出張つて禿けたおでこを持つた男と、厚司を着た赤髯の男とが將棋をさしてゐた。

「お願ひがありますが……」

「何だ？」厚司が言つた。

「面會さしていたゞきたいのです」

「だれだ？」

「おきみといふ女です」

「駄目だよ。あいつは淫賣だ」

「ちよつとでいゝんですが」

「なアるほど」と××が言つた。周三は次の言葉を待つた。と、それは將棋の方のことで、××は腕を組んでしばらく考へてゐたが、その大きなおでこをぎりゝと周三の方へ向け、

「うるさい、かへれ！」と忌々しさうに呶鳴つた。

周三は、取りつく島もなかつた。

その夜周三は、千住の木賃宿へ泊り、翌日の夕方、旭町のマルマンへ行つて見た。おきみが周三へ何かの通信をするなら、この宿宛てにするしかなかつたからであつた。この宿だけが辛うじて二人の引き破られた心と心とを仲介するものであつたからだ。だが、何の便りも來てゐなかつた。

その翌日も行つて見たが、やつぱり徒勞に終つた。さうして周三は四日ほどの徒勞を重ねた後、やつとおきみの手紙を手に入れることが出來た。その手紙の中には十圓札が二枚ほど入つてゐた。そして、鉛筆の走り書きの紙片が入つてゐた。

K警察から、前橋の警察の手に渡されたこと、それから、併ておきみを信州上田のM樓へ周旋した大阪屋といふ口入屋の手に渡されたこと、そして今はその家に監禁されてゐること、だが周三がそこへ訪ねて來ることは、生命に關はる危險にぶつかるかも知れぬから、おきみの方から、知らせがある迄は絶對に來てはならぬこと。

「……それまでは、封入の金で暮してゐて下さい。かうなればあたしはもう棄て身です。殺されるまでたゝかつてやります。だからあなたも、決して絶望せぬやう、やけにならぬやう、これだけは、くれぐ〳〵もお願ひします。あたしのために飽くまで強く生きて下さい……」

おきみのからだが、上田市のM樓へ引き渡されずに、どうして前橋の大阪屋へ引き渡されたか？

すべて遊廓では、一度逃亡した女郎は、きず玉として、自分の所へ引き取ることは決してせず、それを周旋した口入屋の手に渡すことになつてゐる。周旋屋では、一人の女のために、大事なお得意を棒にふることは堪へられないので、その女が遊廓へ掛けた損失一切の責任を負はねばならない。で、大阪屋の場合も、おきみがM樓で踏み倒した八百五十圓は、大阪屋の責任となつて、大阪屋はそれだけの金をM樓の方へ返濟してゐた。だから今は、おきみとM樓との關係は絶たれ

て、大阪屋との直接關係となつた。大阪屋は、おきみのからだをもう一度轉賣することに依つて、失つた八百五十圓を取り戻さねばならない。おきみのからだが、大阪屋の手に渡されたのは、その爲めだつたのである。

前橋のK町、そこは高崎のY町と同じ組織の寶春屋で充たされてゐた。群馬縣は、日本唯一の廢娼縣として誇つてゐるが、それは同時に日本第一の私娼窟を繁殖せしめた縣としてまた誇るべき土地である。大阪屋の家は、かういふ私娼窟が軒を並べてゐるK町の中に、待合風な小綺麗な玄關を持ち、横手には白壁の土藏を持つて、いやに森として構へてゐた。

大阪屋は、××からおきみのからだを受け取つてこの家へ連れて來ると、先づ言つた。

「お前の亭主は、昔のまゝ、お前のからだにぶら下つてゐるのかね？」

「………………」

「そりや念を押す迄もないが、もしもあの男をこゝへ呼び寄せるやうなことをしたら、お前の逃亡を導いたもの、つまり犯罪敎唆罪として、赤い着物を着てせやりますよ。でなければ、がんじがらめにして、この下の利根川の底へおつぽり込ませてやりますよ」

「あの人に、あの人に罪はありません」おきみはせき込んで答へた。「お女郞屋から逃げ出したのは、みんなあたし一人でしたことですから」

「とか、なんとかおつしやいましても、世間には通らぬ話だ。尙ほ更ら××へは通らぬ。ほんとうなら、お前のからだを引き取ると一緒に、あの男は刑務所の方へ引き取つて貰はうと思つたのだが、まア〳〵こんどだけは勘辯してあげたのだからね」

「いゝえ、あの人には何の罪もありません、あの人は……あの人は……」

おきみは、目を引きつらして大阪屋へ刃向つて行つた。

「さうむきにならんでもいゝよ……ともかく氣の鎭まるまで、あちらでゆつくりとからだを休めるがいゝ。わしは、一度かうと言ひ出したなら、金挺でも動かない男なのだから、さうして、もくろんだことは、火の中をくゞつてもやり遂げる男なのだから、よく／＼考へてからものを言ふがいゝよ。」

さう言つて大阪屋はニタ／＼と笑つた。その顔は、兩のかん骨が飛び出し、その間の門地に盛り上つた鼻の頭が白く剝げてゐて、その下に大きく裂けた口を結んで默ると、まるで、しやれかうべの相となつた。

おきみは、見てゐるうちにからだ中がゾク／＼して來た。それは、曾て、T私娼窟で、おきみの咽喉元を絞めるやうなことをしたあの奇怪な妖婆が、再び目の前に現はれたやうに感じたからであつた。違ふ所は、老婆が老爺になつただけであつた。上田の遊廓へおきみを賣り込んだ當時の大阪屋からは、さそりのやうな小汚ない狡猾さを感じたのであつたが、今は、生きながらの人の生血を吸ひつくす毒蛇(どくじや)の貪慾さを感じさせられた。

大阪屋は、凹んだ眼窩の底に青白く光る目を、ぢつとおきみの面に注いでゐたが、やがておきみを無理に立たして座敷から廊下へ引き出した。その廊下は三度ほど曲つて、急に暗くなつた。突き當つたところは、土藏の入口であつた。大阪屋は、その入口の鐵の扉を音もなく開けた。しめつぽい冷たい空氣が、スーツと流れて來た。

おきみは、その中の二階座敷へ引き上げられたのである。鐵格子のはまつた三尺四方の窓が南に向いて一つあるきりの六疊の座敷であつた。

「こゝだと、誰に遠慮もいらぬ。手足をのばして、よく休むがいゝ。」

さう言つて、大阪屋は例のしやれこうべの顔をニタリと笑はせ、そして梯子段を下りて行つた。と間もなく外から扉に錠を下す音が、ビーンとひゞいて來た。

十一

おきみは、例の妖婆のの家二階の一室へ監禁されて、殆んど死ぬばかりになつてゐた蜘蛛のやうな女を想ひ出した。そして、その女の運命が、今、自分へ廻つて來たことを思つた。

しかし、これを運命といへるだらうか。

――運命ではない、運命ではない！

おきみは階段を下りて行つた。鐵の扉を力一ぱい押して見た。からだでぶつかつて見た。が、扉は動きもしなかつた。

二階へ上つて來た。鐵格子へ掴まつて、腕の脱けるほどゆすぶつた。からだをぶら下げた。が、格子はミシリともしなかつた。

つひに彼女は、へとへとになつてしまつた。そして、疊の上にばたりと倒れて、打ちのめされた蟲のやうに、力のない息をつゞけてゐた。

梯子段を上つても息が切れるほどに弱つたのは、もう二三ヶ月前のことであつた。そこへこの三日間ほど、おきみは、夜もろくろく眠らされず、まるでぼろ布の如く持ち運ばれたので、今は、性も根も全く盡き果てゝゐた。額が妙に鋭どく尖り、目だけがギロリと飛び出してゐる。――その夜おきみは、惡夢に襲はれながら、コンコンと眠りつゞけた。

その翌日の午後であつた。おきみは、大阪屋の奥座敷へ引き出され、四人の男から、賣り物としての價値を鑑定された。おきみは今まで、幾度か轉賣されて來たが、四人もの男から値ぶみされることは始めてゞあつた。

四人とは、大阪屋と、升屋といふ同業者と、えたいの知れない老人と、瀬下屋といふ料理屋の主人とであつた。彼等はおきみのからだをぐるりと圍んで、まるで廢物のせり賣りのやうに始めた。

「わしが見たところうぢや、きづ玉もきづ玉、ひでいきづ玉だから、まアせいぜい百圓といふところだね」

料理屋の主人瀬下屋は、張り子の虎のやうに首をふりながらさう言つた。

「冗談いつちや困ります。そりや東京で二三年働いてはゐたが、何も淫賣屋にゐたといふわけぢやねえし……」

大阪屋は、鋭どい目を光らしながら言つた。

「それぢや、どのくらゐで話をつけようてんだね？」

えたいの知れない老人は、顎髯をしごいて大阪屋を顧みた。

「左様、少なくも千倆ですな」

「御冗談でせう」瀬下屋は冷笑しながら、

「それぢや話にも何んにもなりやせんや」

「さう言はずに、何とか歩み寄つたらどうだね。千倆もちと高えやうだが、百兩も可哀相だからね」

同業者の升屋がさう口を入れた。

「ぢや、九百圓迄我慢しませう」

「いや、百圓がせきの山です」

「ぢや、八百五十倆」

「いや、百圓」

「ど、ど、どつこいさうは參りません。八百五十倆より鐚一文も引いちや賣れません」

大阪屋は、口から泡を吹き飛ばして我ん張つた。

これ等の會話を隣室から聞いてゐたら、一匹の牛か馬の賣買としか聞えないであらう。

おきみは頭を垂れ、兩手を膝の上に置いて身動きもせずに坐つてゐたが、周圍の四人の貪慾に輝く目にぎゆつと睨められてゐると、見てゐる間に、からだ中の血液が吸ひ取られてしまひさうに思はれた。おきみはもう、無言の反抗に依つて辛うじて自分を主張するしか出來なかつた。

賣買の話は結局不調に終つた。

大阪屋は再びおきみを土藏二階へ引きずり上げた。彼もすつかり疲れ、おきみを前にして、がたりとあぐらを掻き、せい〳〵と肩で息をしてゐた。羊をこゝまでくわへては來たが、もう喰ふ力もなくなつた老ひぼれの狼のやうに。

が、翌日になると、大阪屋はまたおきみをその部屋から連れ下し、奧座敷の眞中へ坐らせた。そこには、おきみの新らしい買ひ手である高崎の銘酒屋の主人と、一人の女衒とが坐つてゐたのである。

「この通り年齢もまだ若いし、客ずれもしてゐない、ほんのうぶなんですからね」

大阪屋は、二人の相手の顏をいら〳〵と見較べながら言つた。

「いやどうも」と、かまきりのやうな三角な顏をした女衒は額を撫でた。「これぢや話がてんで違つてまさァ」

「全くだ」と、銘酒屋の主人もさも汚物でも見るやうに顏をしかめた。「大阪屋さんも、人が惡くなりやしたねえ」

「そいつァ御挨拶だね。わしはもうこの商賣を始めてから十五年にもなり、何百人てえ女を手にかけてゐるんですぜ。それが、あんた達を相手に喰はせようなどと考へられますかね、わしは、値だけのことしか言つてないんですよ。踏めるだけのことしか踏んでゐないんですよ。まァよく目を開けて、どつからでも覗いてごらんよ」

「冗談いつちや困ります。わしも長い間女を抱へて來てやすが、こんなひでい玉は始めてでさァ」

「ぢや、話にも乘つてくれないんかね？」

「乘るも乘らないもありませんや。そりやロハ同樣なら引き取らねえこともねえが」

「一體、どれくれえまで踏みます」

「さうさ、失禮だが、始めの話の一割だね」

「と、いふと、五十個?」

「へえ」

「ば、ば、ばかな!」

大阪屋は吐き出すやうに言つたが、その顏は今にも泣き出しさうであつた。

結局、話はまた完全に不調に終つた。

その翌々日の夜であつた。おきみはまたも土藏から引き出された。そして、大阪屋の女房なのか女中なのか、えたいの知れない下卑た中老の女から、ぺら〳〵の錦紗の着物と羽織を着せられ、その上面をかむつたやうな厚化粧をさせられて、鹽原から來たといふ怪しげな男の前に坐らせられた。

東京のTやKの魔窟は、その周圍を取り卷く商店街との握手に依つて、恐ろしい毒液を持つた有機體をつくり上げ、その周圍に鐵條網を張り渡して、私娼達のからだを搾取してゐたが、この地方へ來ると、それとはまた違つた細胞が、遠く廣くかすみ網のやうに掛け張られてゐて、このやうに、次ぎから次ぎと、新らしい吸血鬼人が現はれて來るのである。さうして、一旦網へ入れた女は、その命のつゞく限り、轉賣しまた轉賣して、絶對にこの世界から逃さない點は、東京の私娼窟と少しも變りがなかつた。

しかしこの地方のこの種の搾取者は、一方ではまた被搾取者でもあつた。資本主義制度の無數の段階は、この種の搾取者の世界をその最下層に押し潰して置くだけ、彼等に與へられた搾取量は、最後の肉の一片、最後の血の一滴でしかなかつた。搾れるだけ搾り取つた最後の殘骸から、命がけの力で嚙み取り吸ひ取ることだけが許されてゐた。だから彼等は搾取

するそのことだけに疲勞困憊してゐた。さうして大阪屋の現在の姿が、それを最もよく實證してゐたのである。

鹽原の男の前に出た今日の大阪屋は、困憊の果、むしろ殺氣立つてゐた。

「一匹の豚の子の賣買にも、掛け引きといふものはありますが、この玉は、一文の掛け引きなしの正札つきです。一聲できめちやつて下せい」

「左樣ですな、――止めときませう」

相手の男は、ブスンと言ひ切つた。

「何ですね、そりや？」

「これが手前の一聲ですよ」

「そいつアあんまりひでい一聲ですね。……いくらでも構はねえから踏んで見て下せえ」

「いくら、などと値のつく代物ぢやありませんよ」

相手は、それを蹴飛ばすやうに言つた。

大阪屋は、突きのめされたやうに、口を開けたなり、煙草のやにだらけの眞黑な齒を現はしてゐたが、急にベッ口になり、聲をふるはして、

「さう言はずゝねえ、助けると思つて引き取つて下さいよ。さつきも話したやうに、二三日中に、あれだけの金が出來なきア、わしはこの家にゐられなくなるんですからね」

「そりやお氣の毒ですが、賣りものにならねえものを買つたところで仕方ありませんからね、お免をかうむりますよ」

大阪屋はぺしよりとなつて默つてしまつた。

しばらくして大阪屋は、そのしやれこうべのやうな顏をあげると、おきみの橫顏へ噛みつくやうに言つた。

「お前は……お前は生きてゐるのか！ 生きてゐるなら、なぜもつと人間らしく、女らしくしないのだ。どいつもこいつも、お前を蟲けらほどにも買はないのを口惜しいとも思はないのかえ！」

さう言はれると、おきみは靜かに面をあげて、ぢつと大阪屋を睨みかへした。その顏は氷のやうに冷たく澄んでゐた。あれほどこんな場合、今までのおきみなら、口惜し泣きに泣き叫ぶところであつたが、今のおきみはもう泣かなかつた。よく泣いたおきみであるのに、今のおきみは、目をうるませさへもしなかつた。

大阪屋は、さういふおきみから、恐怖に似た壓迫を感じたらしく、妙にへどもどしたが、それを拂ひ除けるかのやうにまた叫んだ。

「その面は何だ！ 睨むなら睨んで見ろ！ 呪ふなら呪つて見ろ！ 貴樣がいくら我を張つたとて、わしはビクともせんぞ。この大阪屋はな、一旦かうと言ひ出したら、火の中へでも飛び込む男だぞ。見てやがれ！ そつ首を縛つてでも叩き賣つて見せるから……」

さう叫んでゐるうちに大阪屋は、すつかり息が切れて、聲が出なくなつてしまつた。そしてまたぺしよりと首の根を折つて默つてしまつた。

おきみは尙もぢつと目を据へてゐたが、やがてふら／＼と立ち上つて隣室へ入つて行つた。大阪屋はその後を睨めながら、おきみが戻つて來るのを待つてゐたが、稍〻しばらくしても戻つて來ないので、これも立ち上つて、隣室へ入つて行つた。

と、いきなり大阪屋が奇怪な驚きの聲を出した。つゞいておきみのからだを引きづりながら出て來た。——見ると、おきみの頭髮は、ギザ／＼に斷き切られてゐたのである。おきみは、隣室の鏡臺の上に載つてゐた鋏を手に取るや、ある限りの髮を根元からぶつ／＼切り離してしまつたのであつた。さうしておきみは下唇を血の出るほど嚙ひしばつて、すつかり昂奮してゐた。

「馬鹿なことをしやがつた！　途方もないことをしやがつた！　こん畜生、それで賣り物にしまいといふ魂膽だな！」
大阪屋はぢたんだを踏んで吼へ立てた。
「ヘッヘヽヽヽ、まつたくそれぢや買ひ手もねえ。ヘッヘヽヽヽ、うめえことをしやがつたねえ」
薑原の男は、口をへの字にして笑ひ立てた。
大阪屋は、どうしてくれよう、と、その手段を考へ出さうとするかのやうに、部屋の中をわた〳〵と歩き廻つた。が、急に立ち止つて、男らしい餘裕を見せるかのやうに、
「結構、々々。……この節は、斷髮のモダーン・ガールといふのがはやるぢやねえか。このまゝ横濱のチャブ屋へでも向けりや、返つて値が出るんだぞ！」
さういふと、そつくりかへつて、ケッ〳〵〳〵と庭鳥のやうに猫高く笑つた。

十二

その一夜が過ぎた。
玄關の格子の開く音がした。それだけで何の聲もしない。
大阪屋は立つて行つた。
と、そこには周三が兩手をぶらりと下げたまゝ、うつろの目を開けて、すーッと、消えかゝる影のやうに立つてゐたのである。
大阪屋は、思はず身を引いた。からだ中、水を浴せられたかのやうに、しばらくすくみ上つてゐた。
が、やがて、たゝきの上へ下り立つと、周三の兩手を、ありつたけの力で抻へた。それは、逃げ場を失つたものが、命がけで敵の急所へ喰つてかゝるやうな狂暴さであつた。

大阪屋はそこで何か言はうとしたが、何も言ひ得ず、そのまゝ往來へ周三を引き出した。そしてどん／＼と歩き出した。

二十分の後、大阪屋は、周三を、警察の刑事部屋へつれ込んでゐた。

「この身なり、この人相を見ても解る通り、氣違ひか馬鹿か、それとも恐ろしい惡人かに違ひありません。とにかく人の家へ無斷で上り込んで來た奴です。立派な家宅侵入罪です。どうぞ、何とか處分して下さいまし。」

さうして周三を警察に叩き込み、うちへ歸つて來ると、大阪屋は、奥座敷へ昏倒してゐた。

が、やがてふらつく脚を踏みしめて立ち上つた。そして、土藏の座敷牢から、おきみを四度引き下して來た。

今朝のおきみは、ギザ／＼に切つた髮をぼう／＼にして、それに蔽はれた目を火のやうにギラ／＼光らしてゐた。その相貌は、東京のT私娼窟のあの妖婆の家に監禁されてゐた「蜘蛛の女」そつくりであつた。

大阪屋は、前夜おきみのからだに着せた着物を、おきみの前へ置いて、

「さア、早く着た！」とおきみの視線を避けながら言つた。

「………」

おきみは、ギロリと開いた目をまばたきもせずにゐた。

「コラ！　汽車に乘つて出かけて行くんだぞ！」

「………」

おきみは石のやうに、動かなかつた。

「この畜生！」

大阪屋はガバリと立ち上ると、おきみの襟がみを引つ摑んだ。そしてぐゐりと引き立てた。

おきみは、よろ／＼と立ち上り、うしろの壁へ倒れかゝりながら、ギリゝと白い歯をむいた。さうしてチリ／＼と大阪屋の方へにぢり出た。と同時におきみは急に咳き込み、苦しさうに首を振ると、その口からパッと眞赤な血がほとばしり

出た。その血は顎から胸へざつと掛つた。おきみはつひに喀血したのである。
おきみの面相は一變してしまつた。そのからだ全體から、何とも言へない凄慘な氣が發散した。
大阪屋は、からだをよぢりながら夢中で叫んだ。
「この畜生！　畜生！　畜生!!」
叫びながら、蛇でも叩きつけるやうに、目茶苦茶におきみの腦天をなぐりつけた。
おきみは、バタリと疊の上に倒れた。ちよつとの間、泥のやうにぢつとしてゐた。が、やがて倒れたまゝ、靜かに顏だけあげた。血にまみれた顏を。
と、その顏の表情は全く破壞されてゐた。瀕死の動物の顏に見るやうなグロテスクな陰が全面に流れてゐた。――おきみは、氣が狂つたのである。
この後の事件は詳しく書くに堪へない。
その日一日、土藏の二階から異樣な叫び聲がきこえてゐた。すべて意味不明であつたが、とき〴〵「天國、天國！」と叫ぶのだけははつきりと聞き取れた。
大阪屋は、閉め切つた奧座敷の蒲團の中に、致命傷を負つた野獸のやうにうめいてゐた。
その夜更である。土藏の裏手へ一つの影が忍び込んで來た。それは其日の夕方警察の留置場から出された周三であつた。
周三は、土藏の横手に掛けてあつた竹梯子を外して、二階の窓へ掛け渡した。そして、まるで夢遊病者のやうに、ひよろ〳〵と梯子を登つて行つた。
しかし、この時、すべては終つてゐた。おきみは、窓の鐵格子へしごきを掛け、縊死してゐたのである。
翌朝、鉛色の水が音もなく流れてゐる利根川の上を、一つの溺死體が流れてゐた。それは周三の自殺體であつた。

――一九三〇・五月――



アスファルトの仲間

立野信之

1

七月の太陽が、頭のまうへにあつた。アスファルトの道路は白く輝いてゐた。熱つぽい、キラキラした埃の渦が舞ひあがり、突走る……。

サイド・カアに手拭地の反物を積んだオートバイが、たちまち埃の雲を追ひ越して行く——バタ、バタ、バタ……タ、タ、タ……爆音を小僧の自轉車が追ひかける。貨物自動車が駛る。引越しの荷車、てくてく歩いてゐる背廣、女、犬、小學生……。

熱い！　輝くアスファルト。いらだゝしげに埃が舞ひあがる。

あぶれた勞働者達が軒下に佇んでゐる。腕組みをしたり、鼻をこすつたりして、自分の汚れた手を、それから破れた地下タビを眺めてゐる。足で、脚を掻いてゐる。

彼等は、見たところがッしりした肩を持つてゐた。はだけた胸板は分厚

く、日に燒けてゐた。樣々なシャツポの下には黑い髯ツ面がふくれ出てゐた。が、手も、足も、胸板も、埃とあかで汚れてゐた。

彼等はぼんやりと、眼で、人や車のあとを追つた。時々、彼等の眼はシャツポの下から異樣に光つた。

その眼はかう言つてゐた。――

『胃袋が空つぽなんだよ。兄弟(きやうだい)……仕事がねえんだ!』

そして、またかうも呶鳴る。

『行きやがれ、コン畜生! 俺達あ見世物ぢやねえんだぞ。見るんなら、仕事をくれ……仕事をよ!?』

一人のボロを下げた若者が、向う側からこつちへ渡つて來た。汚物でかたまつた長い髮の毛を繩でしばつて、古ぼけた一ゴム靴の片方だけを大事さうに抱えてゐる。非常に早い足どりで、駛つてゐる一切の物から超然として眞すぐに道路を横切つた。奴は、何處かで拾つて來た短い卷莨を口にくわへてゐた。

奴は洋食屋と紙屋の間に入つて行つた。其處にゴミ溜があつた。イキナリ蓋をあけると、首を突込んだ。何か取り出した。マッチだ。耳の所で振つてみた。それから箱の尻を押した。一本の軸。長いことこすつて、火を點けた。

チビた莨の先から僅かな煙があがつた。次に、鼻の穴から煙が出た。と、奴は滿足げにすぱすぱやりながら、足早に往つてしまつた。

軒下の勞働者達は、ぼんやりと見送つた。たが、彼等の眼には嘲笑の色が泛んでゐた。

『乞食め!』

一人の勞働者がならんでる相棒に向つて、話しかけた。

『あの野郎、マッチを探すのに洋食屋のゴミ溜にまつすぐやつて來るなんて、さすがくらうとだ。』

『アハヽヽヽヽ。』

相棒は笑ひ聲を立てた。が、彼は長く笑はなかつた。――胃袋がからつぽなんだ！

彼は空を見上げた。すると相棒もさうした。……それから彼等は、眼を、自分の汚れた手に、破れた地下タビの上に落した。足で、脚を掻きはじめた。

2

めし屋と煙草屋の間から、見すぼらしい身なりの十一二の男の子が飛び出した。男の子は、小脇に黒い丸めた布きれを抱えてゐた。

後から、肥つた禿頭の親爺が追つかけて來た。親父は眼を皿のやうにし、短い肥つた腕をふり廻して、喚いた。

『その餓鬼を捕へろ。掻つ……ぱ……』

めし屋から、一人の勞働者が飛び出した。

『おッと、待つた、老人！』

勞働者はいきなり禿頭の袖をつかんだ。袖がビリビリッと裂けた。禿頭はびつくりして、立ち止まつた。その間に、男の子は逃げのびてしまつた。

禿頭は喰つてかゝつた。

『チエッ、畜生。たうとう逃がしちやつたぢやねえか、うん!?』

『ツベコベ言ふねい、禿ちやびん！』

勞働者は燒どのやうに赤い顏を、にゆつと近づけて行つた。

勞働者はフラフラに醉つぱらつてゐた。身體中から安酒の匂ひを發散させてゐた。
禿頭は白眼を使つて相手を見た。――アブレ者ぢや相手が惡りいやな？……。
『放せ！』
と禿頭は腕を振つた。が、彼の肥えた手首は何時の間にか、勞働者の荒れた掌の中にあつた。禿頭は、垂れさがる袖を掬ひあげた。が、破れた袖はだらしなくずり下つた。
『何だつて、ひとの腕をつかまへるんだ？』
『腕だつて？　これや手ッ首ぢやねえか。』
軒下に立つてゐた連中が寄つて行つた。――面白れえ、やれ〳〵！
野次馬が取巻きはじめた。――『何だ？』
すると人だかりの中で、突然、醉つぱらひが演說をはじめた。
『諸君。聞きたまへ。……たつた今一人の子供が掏つぱらひをやつた。此處にゐられる老人がその被害者だ。半襟を一枚やられた。……所が、諸君！　この老人は追つかけて來て、曰く――その餓鬼を捕へろ！　餓鬼とは、餓えた鬼……これ卽ち、われわれ失業者のことだ。』
『うめえぞウ！』
野次馬は喜んだ。二三人が拍手したり、『ヒヤヒヤ！』と吹鳴つたりした。
『……今や、失業者はわが國にあふれてゐる。東京市には、仕事はなくなつた。我々は文字通り路頭に迷つてゐる！　然るに、現內閣はこれが對策にあたつて、八方に無能なケツを出してゐる。民政黨の消極政策は、完全に國民の信賴を裏切つた。消極政策は最早ダメだ。此處に於ては、我々は積極政策を標榜するところの政友會をして、內閣をとらしめ……』

醉つぱらひの演説は、なほ綿々とつゞいた。――男は、この界わいでの「社會主義者」であつた。

『ふん、何云つてやがんでえ！』

幾人かの勞働者は、其處を離れた。軒下に添つてアテもなく歩き出した。

「一泊十五錢」の木賃宿の窓から、瘠せた、汚い素裸の上半身を突出して、一人の勞働者が何か叫んでゐた。慢性失業者だ。女や洋服の通行人が、その前を避けて通つた。

すると、男は瘠腕を振りまはして、威かくした。

『やい、こら、女つちよ！　やい、月給取り野郎！　行きやがれ！』

3

ごーッ！　と、城東電車が燈をキラめかしながら走つて行つた。滿員だつた。菜ッ葉服や、紺がすりの女工や、詰襟の男達が、釣革にぶらさがつてゐた。白い、細い、幾本もの腕が、見えた。

十一、二の男の子は、電車を見送りながら、マルセル石鹸工場の黑いトタン塀に添ふて、曲つた。男の子は、もう何にも抱えてゐなかつた。

男の子は、元氣に口笛を吹いた。

トンネルのやうな長屋がつゞいてゐた。軒下におしめやボロ着物がぶらさがつてゐる。路地を生活の汚濁が占領してゐた。鼻もちのならない臭氣が流れてゐた。

男の子は踏板をならして行つた。少し行くと、道路からイキナリ家の中へ飛び込んだ。

『何處をホウつき歩いてたんだ！？』

激しい聲が起つた。母親だ。
男の子はだまつて、母親の顏を見上げた。暗い部屋の中に泛んでゐる母親の青ぶくれな顏は、鬼婆のやうだつた。
男の子は、ぶる〳〵ッと身ぶるひした。
『何處をホウつき歩いてたんだよッ!?』
もう一度、上づつた聲が爆發した。
男の子はだまつて掌をひらいて、差出した。掌の上には、汗をかいた十錢玉が三つ載つてゐた。
『何だい!?』
母親は近づいて、のぞき込んだ。そして眼を瞬つた。
『何處から、この金を――?』
母親はだまつて、子供の顏をまじまじと眺めてゐた。――『どうしたんだ?』
小さい子供等が寄つて來た。のぞき込んで、そして頓狂な聲を發した。
『錢々!』
『銀貨!』
『十錢銀貨だね、母ァちやん?』
突然、母親は恐ろしい形相をして、子供の掌から錢をひつ奪つた。
『ご飯をおあがり!』
破れ障子のかげに寢てゐた父親が、だまつて寢がへりを打つた。そして濕つぽい壁と向き合つて、眼をあけてゐた。

4

父親は失業してゐた。もうまる二年になる。もとは鐵工所の鍛冶屋だつた。一日二圓五十錢取つてゐた。

その工場には三百人の勞働者が働いてゐた。大きな瓦斯タンクを作つてゐた。「不景氣のため」從業員の待遇が惡かつた。

職工達は不平を抱いてゐた。が、多くの者はあきらめてゐた。こんなふうに……。

『不景氣だからなア。』

そいつ等は會社に「同情」してゐた。一體、勞働者が資本家に「同情する」なんてのは、何だ？ 暮になると、八十人の勞働者が街頭に放り出された。幾人かの「同情者」もその仲間だつた。

馘切られて見ると、呑み込めた。

彼等はヤツ氣になつた。工場主や、その因緣關係の職長を恨んだ。

『馘首絕對反對！』

だが、もう遲かつた。ふだんの心掛けがよくなかつた。會社は鼻であしらつた。中の連中は、知らん顏をよそほつてゐた。首を切られたなア、俺ぢやなくてお前さんだ！ そんな面をして、默つてゐた。畜生め！

六十日分の解職手當が、足代になつた。

彼等はてんでん勝手に、仕事をめッけにホウつき步いた。何處にも、しかし緊縮風が吹きまくつてゐた。

『畜生！ 緊縮なんて勞働者泣かせだぞ！』

ごく僅かな人達が、同種の工場に入つた。

父親も、馘首された一人だつた。

家には妻と、子供が五人口をあけて、待つてゐた。

父親は足を搨子木にした。が、仕事は無い！　何度も「親子心中」をやらうと決心した。新聞に似通つた記事が出てゐると、人事でなく、心臟がヒヤリとした。

半年目に、大きな建築場で仕事に有りついた。高い足場の上で、鐵骨に燒いた鋲を打ち込んだ。ガタ、ガタ、ガタ、タ、タ、タ……眼まぐるしい、騷々しい生活がはじまつた。頭の上では、起重機が幾本もの鐵材を掴んで、靜かに動いた。

危い！

カラン、カラン……と、鐵材は林立する鐵骨の間を、左右にぶつかりながら、捲きあがつた。と、ガタ、ガタ、ガタ、タ、タ、タ……火花が散り、こぼれ落ちた。

晝も、夜も、鐵骨の間で働いた。そして「いゝ賃銀」になつた。

高い足場の上で、彼は滿足して下を見おろした。白いアスファルトの上に、汚れた半纒を着た失業勞働者が佇んでゐた。彼等はプラターナスの樹に倚りかゝつて、鐵骨作業を見上げたり、通行人を眺めたりしてゐた。彼等のうちのある者は、こんな顏つきで、建築場に眼をやつた。……

『俺らは、こゝの建築場に働いてゐたことがあるよ。基礎工事つてやつ——つまり穴掘りだ。それからセメント撹ぎをやつた。すると間もなくセメント流しの仲間がやつて來て、俺らはお拂箱になつたよ……』

不熟練勞働者の彼等は、到る所でお拂箱になつた、——

足場の上で、燒いた鐵鋲をはめ込みながら、彼はアスファルトの上の「仲間」を、輕蔑した。

『ふん、見れ……能無し共が！』

毎日、暗い鐵骨の間を燒いた鋲の火花が飛び交ひ、頭の上では、鐵材がカラン、カランと激しい音を立てゝぶつかり合

つた。

或日、エア・ハムマァの爆音の中で、彼は短い叫び聲をハッキリと聞いた。

『危い！』

ヒョイと身をかわしながら、彼は見た。……百六十斤の鐵材が鐵骨の谷をまつすぐに落ちて行つた。矢よりも、早く……

…危い！　一瞬間の後、彼は谷底の恐ろしい光景を、見た。……逃げ負ふせなかつた若い勞働者が、鐵材をはすかひに背負つて、恰好惡くなつてゐた。奴は腹這ひになり、手と、足を、伸ばした。

勞働者達は驅け寄つて行つた。彼も震へる足で、降りて行かうとした。が、思ひ止つた。途中で、彼は現場監督の飛び上るやうな聲を、耳にしたのである。

『大建築にや、三人や五人喰はれるなア、あたりまへなこつた！』

彼は靜に足場によぢのぼつた。心臓が消えてなくなりさうだつた。頭がボウッとして、瞬間、自分を忘れた。落ちさうだつた。鐵材のやうに、矢よりも早く、谷底めがけて……彼は、何度も足を踏みしめた。一日中、胸くそが惡かつた。

それから四日後に、彼は足場の上で氣持が惡くなつた、と思つた途端に、墜ちた。が、谷底まで行かないで、濟んだ。すぐ下の足場に凧のやうにひつかゝつたのだ。

『ぼやぼやしてやがるからだ！』

彼は監督の遠い聲を聞きながら、ラクな氣分になつた。墮ちながら、鐵骨に腕丈をしたたかぶつつけたのだつた。で、彼は「お拂ひ箱」になつた。

彼は、毎日ぶらぶら歩き廻つた。何處かで、アブレた勞働者に出逢すと、彼は話しかけた。

『兄弟。お前は、何處の建築場をお拂箱になつたんだい？　俺かい…俺は多倉組にゐた。帝都大劇場も六井信託も、俺が建てたんだぜ。二つ共、あすこにや俺の仲間が人柱に立つてるから、大地震だつてビクもしねえだらうよ、多分…』

頭の氣味が少し變だつた。

家では、「子供等が可哀さうで、まともに見ちやゐられねえ」といつて、暴れた。出刃庖丁をふり廻して、細君を追つかけた。

時々、凄い眼つきで、馳け出さうとたくらんだ。

『首相に逢つて、失業勞働者の救濟策を具申して來る。百五十萬の失業者を、救つてやるんだ。放せッ！』

細君がふくらんだ腹を抱えて、建築場へ出かけて行つた。

『おすがり申します！』

金ぶち眼鏡をかけ、ズボンを二つ穿いた現場監督が、優しい調子で云つた。

『どうも頭のヘンな人は、ねえ…』

取合つて貰へなかつた。…それ以來、たうとう本物の病人になり、そしておとなしくなつた。

米粒のない日が、やつて來た。

細君は一本五錢のハタキを抱えて、出掛けた。上の二人の子供は、辨當を持たないで學校に通つた。

子供達は、毎朝、駄々をこねた。

『二錢の豆餅一枚でいゝよ、母ちやん…』

『何云つてやがんだ。愚圖々々してゐると、ひつぱたくよ！』

母親は、二錢の豆餅をあてがふ代りに、威した。

で、子供達はスゴスゴと出掛けた。一番上の男の子は眼に見え、ひねくれ屋になつた。學校の途中で、小さな子供を劫つて、辨當を奪つた。

中味を食つてしまふと、殼をドブ河へ棄てた。學校では、他の子供の辨當を盗んだ。

若い男教員が、男の子をつれてやつて來た。子供が、學校へ辨當を持たないで來るのは、どういふわけか?

『どうもかうも有りやしません。親がずつと失業して居りますんで……見て下さい、建築の足場から落つこちて、腦を打つたんで、すつかり馬鹿になつちまつたんですよ。』

座敷の隅に、病人は寢てゐた。病人は垢だらけな掌をマジマジと瞶めてゐた。

『………?』

小學校の先生は、默つてお辭儀をして、出て行つた。……先生が腰をかけてゐた障子のかげに、五十錢玉が二つ光つてゐた。

一家は間もなく、慢性失業者のウヨウヨゐる江東へ引越して行つた。

5

十月に、東京市で一齊に「失業勞働者の登錄」をやつた。

『二十七日午前八時から、第×小學校で受付開始!』

登錄所になつた小學校は市内で六つしかなかつた。

細君は、病人の夫を引つ張つて行つた。小學校には、アゴ紐をかけた警官が立つてゐた。

『並ぶんだ。列を亂した奴は、登錄を受ける資格が無くなるぞ！』

さう威した。

絆天着の「仲間」は、小學一年生のやうにおとなしく並んで、順番を待つた。長い列が幾條も出來た。彼等は胸と腰を、前の奴の背中にくつつけながら、少しづゝ押されて歩いた。

あたりには、數千人の體臭がごつちやになつて、鼻もちのならない惡臭が漂つてゐた。身體を前と後から押へられてゐるので、恐ろしく窮屈だつた。

『仕事を下さるツてんだ！』

彼等は我慢してゐた。

入口に洋服着がガン張つてゐて、一人々々寫眞を撮られた。それから、申込書に震へる手で「署名」した。彼等は文字を大小不揃ひに、間違つて消したり、アテ字だつたりして、分り難く書いた。

机を前にして、でつぷり肥えた好い男の役人が、よく響く聲で一人々々訊ねた。

『お前は、失業してからどの位になる？』

『えーと』老人が歯のない唇をふるわせて云つた。『ハツキリは分りましねえが、もう七八年になります。』

『もとは何してゐた？』

『ずつと前に本所の綿工場にゐやした。あすこで肺を煩ひましてね、それから失業してゐたんでさあ。』

『もう治つたのか？』

『まあ、どうやらそれなりに固つちやいましたよ。』

『本籍は何處だ？　よし、次――』

働く意志と、能力と、がつしりした體格とを持つた男が、立つた。
『わたしは、つひ半年ほど前に、紡績を馘になつたんです。』――
入口を堅めてゐた巡査が、イキナリ手をふつて云つた。
『女はダメだ、女は……！』
細君は、びつくりして立止つた。すると、アゴ紐の巡査がつか〳〵と寄つて來た。
『女はダメだ、といふのに！？』
肩を摑んで、引つぱられた。
『この人が、腦が惡いもんで從いて來たんですよ。』
『腦が惡い？』
巡査は、病人の蒼ぶくれな顔を瞶めた。それからくるりと廻れ右をして、部長の所に聞きに行つた。
『腦が惡いんださうですがね……構ひませんか？』
『どれだ？』
『あれです。神さんが連れて來てます。』
順番をひとに奪られないやうにと、再び列により添ひながら、細君はどうしたつて此處を退くものか、と思つた。
聞きに行つた巡査が、戻つて來た。
『ご亭主は入れてやるから、お前は此處で待つてろ！』
どうしても入つちやいかん、といふんだ。細君は仕方なく外で待つことにした。夫は列の中で、浮かぬ顔付きをしてゐる

た。

細君が、夫に繰返し云つた。

『いゝですか――仕事が貰へるやうに、はつきりと申上げるんですよ。一年と二ヶ月も遊んでゐるつて……いゝですか、一年と二ヶ月ですよ！』

『一年と二ヶ月なら、まだいゝや……俺なんざあ、紡績をおッ放り出されてから、まる三年だ……今ぢや、夫婦子供わかれ別れだい！』

列の中から、突然、一人の勞働者が呶鳴つた。で、そのために一しきり、警戒の巡査がびつくりして飛び込んで來たほどの、ガヤ／＼騷ぎが起つた。唾をしたり、唾を吐き散らしたり、笑ひ聲を立てたり、叫んだりした。

巡査が來ると、みんな靜かになつた。

『仕事を下さるッてんだ！』

そして彼等は、順番を奪られないやうにと、犇めきあつた。

――みんな夫婦別れをしたり、子供や、老人を死なせたりしてゐる人達だ！　みんな、今が今の飯に有付けなくてガッガッしてゐる人達だ！……

細君は離れた所に行つて、この汚い、子供のやうに仕事に手を出して犇めき合つてゐる人達を、眺めてゐた。知らない間に、涙がにじみ出て來た。……夫は浮かぬ顏つきで、人の肩にそつと手をかけて、少しづゝ進んで行つた。

失業者登錄は、さつぱり効目がなかつた。勞働手帳は交付されたけれども、仕事はめつたに與へられなかつた。

毎朝、職業紹介所へ出かけた。不渡手形みたいな「勞働手帳」を持つて・・・彼は、病人だつたが、鐵骨になめられてできた禿のある不恰好なガン首の下の、図體は大きく、巌丈だつた。

毎朝、千人餘りの仲間が、群がつてゐた。面數は減らなかつた。いや、ふえた。そして、いつも見る面が多かつた。

その面は、不機ながらも親しげに近づいて來た。肩をたゝいて、話しかけた。

『今日もあぶらしいぞ、兄弟！』

『ちえツ、毎日ぢやねえか・・・おらあ、今日で九日も通ひ詰めたよ！』

受付の硝子戸には、新しい紙がぶらさがつてゐた。

> 所員は連日連夜求人開拓にかけまわつてゐますから、皆さんも心棒強く待つて下さい。

『ちえツ、俺らを石ころだと思つてやがるのか・・・おしや迦様ぢやあるめえし・・・さう待つてられるかい！』

『全くだ！』

犇めき合つた。

が、仕事は千人の半分位しか渡らなかつた。その半分も、あらかたはちやんと親方のある「土方部屋」の仲間だつた。

親方は、何の親方でもさうであるやうに「裏」を知つてゐた。

で、失業救濟事業にも無數の裏があつた！

親方は、職業紹介所長とじつ近であつた。それから、所長を通じて所員は飲み仲間であつた。

『一つ頼んますぜ！』と親方が云ふ。

すると、「札」が廻される。

『××下水擴張工事――所要人夫三十名。』

ごそッ！　と、引つこ拔かれる。

こんな「親方」が何人もゐた。こいつは勞働者に喰つついてゐるだにだ！　あらゆる失業勞働者救濟の仕事にしがみついてゐる！

毎日、あぶれが多くなつて行つた。仕事に有りついた日から有りつく日までの開きがひろがつた。

東京は美しく復興した。外國からかへつて來たえらい人達が批評した。

『ヨーロッパの大都市に負けない！』

そしてなめらかなアスファルトの上を、磨きたてたビルヂングの中を、公園を……着飾つた貴婦や、從者や、紳士や、貴女が散策した。大砲が鳴つた。花火があがつた。復興祭！

一流の商店街は、あでやかに化粧した。

花電車が、騷々しく駛つた。イルミネーション！　復興萬歳！

だが――

市民は「緊縮」「節約」しなければならなかつた。世界の産業が行詰つた。アメリカのフォード工場が、生産過剩でコッソリ休業した。賃金を値上げして、勞働者の働く日數を減らした。一週――五日。

それが、産業合理化だつた。

日本も眞似しなければならなかつた。緊縮！　政府は官員の減俸で、味噌をつけた。だが、味噌はつけはしなかつた。

資本家共が、始めた。

「緊縮・節約せよ！」

赤いビラを工場内にはりめぐらした。生絲が、暴落した。すると製絲が、紡績が…人減らしと、操業短縮！

鐵工所が、硝子工場が、セメント工場が…ドシドシ閉鎖した。勞働者が街頭へ――アスファルトの上へ流れ出した。

農村から、いゝ身體をもつた男や女が、汽車に乘つてやつて來た。だんだんふえる。堰止めにやならん！

社會局から、宣傳隊が汽車で出動した。停車場に、彼等――宣傳隊はガン張つた。一人々々調べた。

『貴方は何處へ行きます…東京ですか？　東京にはもう働く仕事は一つも有りません！』

都會では――勞働者が追拂らはれた。

『國にお歸りなさい。鐵道は割引です！』

街頭にウロついてゐる朝鮮の仲間は、××が社會局と一緒になつて、一まとめに汽車の中に押込められた。

『國へ還れ！』

だが、朝鮮の仲間は還る國を持たなかつた。で、途中から引返して來た。再びウロつき始めた。…

病人は、下水擴張工事の仕事に有りついた。穴の中で、腿まで腐つた泥水につかつて、働いた。頭から泥をあびた。

『人間、働くつてことは、愉快な仕事だァね――』

彼は、泥だらけになつて、滿足であつた。

工事は、しかし日限に迫られてゐた。で、穴の上には、絶えず監督の黑い、苦味走つた面が、にゆつとのぞいてゐた。

『馬鹿野郎！』

監督はひつきりなしに、嚙みついた。

溝鼠の仲間の一人が、怒つて、監督に喰つてかゝつた。

『さう一々、馬鹿野郎呼ばりして貰ふめえ。これだつて……』

男は恐ろしく小男で、やぶ睨みだつた。彼は百姓だつた。いつか、仲間の一人が『社會局が失業者に歸農させる方針をとつてゐる』ことを話した時、穴の中で飛び上らんばかりになつて、怒つた。――

『土地が只で作れると思つてるんか、え、!?』

……監督は腕ぶしが强かつた。いきなり百姓出の小男を、地上に引き上げた。

『何だ？　もう一ぺん言つて見ろ！』

ぽかりと、横ッ面をなぐつた。が、小男は百姓の執拗さをもつて、監督の無法をなじつた。

『やたらに、人の面をば毆るッ……』

もう一つ、ぽかりと來た。百姓はよろめいた。

『文句云はずにやれ！　お代りがウョウョ居るんだぞッ！』

百姓は、子供のやうに頰ぺたをおさへて、暗い穴に降りて來た。

頭の上を自動車が馳り、電車が地響きを立てた。洋服着が、穴をのぞいた。

着飾つた女が、爪先きを立てゝ通つた。

『まあ、汚いこと！』

五日目に、病人はアスファルトの上に這ひ上つた。……お代りが闘えてゐた。彼は、お拂箱になつた。

そして、それが總工事費何百萬圓かの「失業者救濟事業」であつた。そして使用勞働者延人員何十萬かの……その仕事であつた！

彼は、だまつて――何を言ふことがあらう――家へ歸つて行つた。

細君が、怒つてゐた。

「勞働手帳を出しな。破つて棄てッちまふから……あんなものはストライキ破りと强盜や何かの調べに、都合がいゝだけだつてさ！」

病人から、ボロボロになつた紙屑を受取ると、細君は、代りに黄色な紙片を渡した。

「誰かゞ放り込んで行つたんだよ。何が書いてあるか讀んでみな！」

――失業者に仕事かパンを與へろ――

病人は吸ひつけられるやうに讀んだ。

7

男の子は、腹を凹ませて、街をキヨロキヨロ步いて行つた。板きれのやうな下駄をひきずつて、口笛を吹いた。

鐵工所のゴミ山に、若い男と女がしがみついてゐた。棒でしきりに掻き廻した。鐵屑が出て來ると、大急ぎで拾つて、袋の中へ入れた。

工場の中は暗かつた。所々に、ぼんやりと電燈がついてゐた。もうもうたる埃が、渦まいてゐた。埃の下で、職工達が眞赤な鐵を叩いてゐた。

頭に汚れた手拭ひをまいた若い職工が出て來た。口と鼻のまはりが、眞黑だつた。

彼は、ゴミ山の男女を見ながら、鼻をほじくり、唾をすると、また埃の中に入つて行つた。

男の子は、口笛を吹きならしながら、下駄をひきずつて行く。

白い橋の上に出た。

頭の上には、傾きかけた七月の太陽があつた。…下には、大都會の排泄物を溶かし込んだドブ河が流れてゐた。河は、機械油を浮べて、黒光りがしてゐた。むつとする惡臭が、立ちのぼつた。

パーフ、パーフ、フッ、フッ、フッ…小さな蒸汽船が、傳馬の間を縫つて行つた。板屑やブリキ罐が、かきまはされた水と一緒に、一つ處で旋回した。

河の兩岸には、様々な工場が楕形にならんでゐた。黒い煙突と、赤い屋根と、燒けたトタン塀。熱くるしい煤煙が、低く河の上に垂れさがつた。

男の子は、河をのぞき込んで…また歩き出した。横ッ飛びに驅け出した。

電車道に出た。

陽の當つてゐる片側を、腕をふり廻しながら、男の子は歩いて行く。時々、鋭い視線を商店の店先きに注ぎながら…。

たべもの屋のショウヰンドウに寄つて、指に唾をつけて、硝子に字を書いた。

横丁を曲つた。

コンクリート建の職業紹介所が建つてゐた。――男の子は、おや？　といふ顔つきで立止つた。

百人あまりの勞働者が群がつてゐた。何事か、喚いてゐる。

アゴ紐をかけた警官が、血走つた眼で、勞働者達を追拂つてゐた。

『立つてちやいかん！　あつちへ行け！』

『歩け、といふのに、歩かんか！』

俺らがこしらへた道路に、俺らが立つちやいけないのか！？　勞働者はぶらぶら歩いた。が、すぐまた一つ所にかたまつて行つた。

『面白れえなア――』

男の子は、鼻の孔に指を突つこんで、眺めてゐた。
警官達はヤッキになつて、追ひ立てる。
『あつちへ行け！　行けッ!!』
すると、勞働者達は上手にぶらついた。
突然、勞働者のかたまりから、渦聲が飛びあがつた。
『仕事を吳れねえ職業紹介所なんて‥‥×××しちまへ！』
『さうだッ。』と鋭い聲が應じた。『ぶッ××ちまへ！』
バラ、バラ、バラッと警官達が、たまりの中へ飛び込んだ。
『そいつだ。捕へろ！』
アゴ紐が寄つて來た。‥‥と、若い印絆天の男が、駈け出した。
逃げながら、印絆天の若者はビラをふり撒いた。ビラはひろがつて、舞ひ落ちた。勞働者達が、ビラに向つて殺倒した。
『ビラを拾つちや、いかん！』
『ビラを拾つた奴は檢束だぞ！』
警官と勞働者がこんがらかつて、モミ合つた。‥‥ビラ撒きの青年は逃げてしまつた。
『烏賊だな、あいつ‥‥ビラで姿をかくしをつた。アハヽヽヽ。』
勞働者が嘶いて、笑つた。
頭の上で、突然、激しい音が起つた。コンクリートの硝子窓がヒビ割れて、落ちた。音は、しばらく續いた。
『やつてるなア——』
『よし、×××けろ！』

ヒユーッ！　小石が飛んだ。
ビイーン！　と硝子戸に穴があいた。
『こらッ‼　貴樣、こらッ‼』
『そいつだ、捕へろッ！』
一人の絆天着の上に、三四人のアゴ紐が重り合つた。
勞働者達は逃げ出した。散りぢりになつた。一旦逃げて、ある地點まで行くと、立止つて眺め、それから胸をときめかしながら、寄つて行つた。
『面白れえぞ――』
男の子は、小石を拾つた。ビユーン！　とやつた。また、拾つた。ビユーン！　五六回目に、彼はそツと石を落した。
肥えた、顋髯を生やした警官が、何にも知らないで、男の子に近づいて來た。
『あつち行くんだ、小僧！』
男の子は、歩き出した。警官が拾ひ殘したビラを一枚、懷中にねぢ込んでゐた。
男の子は、陽の照つてる電車道の片側を、横ッ飛びに駈けて行つた。
橋の所に行くと、懷中からビラを取出した。一字、一字ゆつくりと拾つて、讀んだ。
『失……業……者……に……仕……事……と……パ……ン……を……よ……こ……せ……！』
そして、『十三日の議會は不景氣と失業問題で政府をとッちめる日だ。失業者は、雪崩の如く××に押し寄せろ‼』と書いてあつた。
男の子は、長いことかゝつて讀んでしまふと、また懷中にねぢ込んだ。
『面白れえ！

けへッ！と男の子は笑ひ聲を立てた。そして歩き出した。恐ろしく腹が減つてゐた。で、男の子は乾いた唇をなめづり、なめづり、商店の店先きに横眼をくれながら、下駄をひきずつて行つた。

8

からつと晴れた、暑い日が續いた。

男の子は、毎日、口笛ならしながら職業紹介所へ出かけて行つた。ふたゝび、あの腹の減つた「仲間」と××との「面白れえ」場面を見ようと、欲した。

男の子はしよつ中、活動の繪看板を見て歩いた。が、中には這入れなかつた。時々、お客の尻について入つた。見付かると、ヒドイ眼に逢はされた。

『警察へ突き出すぞ！』

シャツ一枚の腹の太いをぢさんが威した。××は怖くなかつたけれども、をぢさんに殴られるのが痛かつた。

で、次々に變る繪看板とガラスの中の寫眞だけをのぞいて、傳次郎やバンクロフトに親しんだ。が、ガラスの中の俳優達は始終笑つたり、刀をふり上げたりしたッ切りで、動かなかつた。

で、すぐ見飽きてしまつた。

職業紹介所の「××」は、寫眞よりも面白かつた。それは動いた。追つかけられた。××んだ。

だが、あの日以來、職業紹介所にはおとなしい、羊のやうな勞働者達が長い列を作つてゐる切りだつた。

あの日のビラと同じ様なビラが、方々の、工場の黒いトタン塀や、石垣や、電柱にぺつたりとはりつけられてあつた。

□政府資本家全額負擔の失業保險を作れ！

□資本家的産業合理化絶對反對！
□七時間勞働制を實施して失業者に仕事を與へろ！
□時間外勞働絶對反對！
□失業事業を起し最低二圓五十錢の日給を出せ！
□失業者にガス、水道、電燈、住宅を無料で提供しろ！
□失業者を××とする帝國主義戰爭絶對反對！

『あッ、また新らしい奴がはつてあるな！？』
工場へ行きかへりの勞働者や、下級勤人や、女工や、あぶれた失業勞働者が立ち止つて、讀んでゐた。何度見ても見飽きなさうに、寄つて行つた。
『×××のビラだぞウ！』
『どれ、どれ――』
かれ等は囁きあつた。
『やつてるなア……すげえもんだ！』
『こないだストライキの時、勞農黨の奴が來て、××黨はつぶれた、なんて云つてたッけが……これを、見ろ、これを！？』
『最近盛んにやつてるらしいなア。』
『うん。俺とこの車庫に二人ビラ撒きに來た。××が、三人で入口を固めてたんだ。しかし、野郎等ボカンと立つて、どうすることも出來なかつた。×××なし共が……！　あとで、みんな言つてた。四人のダラ幹に、あの人達の靴の泥を煎じて飲ましてやりてえもんだ、なんて……』

「××の車掌ぢや、一人が捕つたのを見て、×××からいきなり××とやつたとよ、×の×で……」
「ふん、なァ――」
「政府も、手古擦つてるだろよ、日に、數千人か幾萬人か數え切れねえほど、失業者がふへて行くつてからなァ。」
「××黨は勞働者の眼だつつて、政府はヤッキになつて捕縛してるけど、×××つたつて、×××いたつて……から勞働者が食ふに食へなくなつて來りや、どうしたつて×ち上らァね、全く……」
「ふんとだ！」
「やつて呉れ。職業紹介所なんて、有つて無きが如しだ。失業者救濟費喰へだ！　第一、×そのものがうんでゐるのに、うんでねえふりしたつて始まるめえ。早く大手術をやつて、さういふ×××になつて貰ひてえもんだ。」
そんな噂ばなしをやつてゐた。
男の子は、大人共の囁き合ふのを聞くのが、樂しみだつた。何度も聞いた。そして不思議に、胸がをどつた。
命知らずの××黨！　耳にした男の子は身ぶるひが出た。
『強えんだ。きつと、強えんだ――』
街を行きながら、男の子はさう思つた。
だが、毎日見に行く職業紹介所にあれッ切り姿を見せないのが、何よりも寂しかつた。……男の子は、毎日待つた。――

9

朝。
職業紹介所のワキに、四五人の勞働者が――いつもの長い列の尻つぽが――見える……と、思つたら、どッと現はれた。
『×××かな？』

胸がドキッとした。……と、警官隊の列が現はれた。追ひまくられた勞働者達が、電車道を散つて逃げた。
『市役所へ押しかけろ！』――
上ずつた聲が、飛んだ。二三人の警官が、一人の勞働者を追つかけた。男は、非常にはやい駈け方で、橋を渡つて逃げてしまつた。
横丁に外れた十人餘りの勞働者について、男の子は歩いて行つた。歩きながら勞働者達は話した。――
『デモをやりながら行く……つてことになつてゐたんだけどなア。』
『十人ばかりぢや、仕様があるめえ。』
『みんな、どうした？』
『四五人、捕つたよ。』
白い、小さな橋を渡つて、廣い道路をまつすぐに歩いて行つた。この邊には、もとは失業勞働者達が住んでゐた。が、復興都市、東京が完成するにつれて、追拂らはれた。で、今は一直線の三間道路が、電車通りまでつゞいてゐた。
電車通りを越えると、アスファルトの大通へ出た。街路樹のかげに、失業勞働者達が集つてゐた。
眞ッ先きにゐた、鳥打帽の若い男が見つけて、手を擧げた。
『居た、居た――』
鳥打帽は身體をふつて、駈け出した。
集つて見ると、五六十人しか居なかつた。
『さつきは百人以上居たんだけど、なア……』
と、鉢巻きした絆天着の親爺が、汗だらけな燒どのある片頰を光らせて、云つた。
『みんなどうしたんだ!?』

『捕つたり……逃げたりしたよ。』

『少ねえなア――』

とまた鉢卷が、歎息した。

『いゝさ。三人だつて五人だつて、やらなきやならねえんだ。行かう！』

鳥打帽だつた。彼は、眞ッ先きに歩き出した。

行列は、無統制にゾロゾロとくり出した。男の子は、列とならんで歩いた。――『面白れえなア。』

鉢卷きの親爺が見つけて、訊ねた。

『あんちやん。何かい、お前も失業勞働者かい？』

すると、行列はガヤガヤ騷ぎを止めて、瘠せた、貧弱な男の子を見出した。――なんだ、餓鬼ぢやねえか??

男の子は、白い齒を出して、笑つた。それから、元氣に肯いた。

『うん。』

列が笑ひ出した。

『こいつあ、面白れえ餓鬼だぞウ！』

鉢卷が、滿足して訊ねた。

『お前、ぢや、何處へ行くんだい？』

『市役所へ押しかけるんだい。』

男の子は瘠せた頰骨を尖らせて、答へた。

列が、喜んだ。

『畜生、好いぞウ！』

そして、晴れ晴れとした笑ひ聲が、列の上でこんがらかつた。

一人の詰襟が、近寄つた。

「君、腹が減つてさうだな。これやらう……食ひたまへ！」

餡パンが二つ、袋の底にあつた。……男の子は、袋と詰襟の顔を見比べながら、そつと受けとつた。

「あ……り……が……と……う……！」

男の子はまごつきながら、低い聲で云つた。

「食へよ、え、……おめえはプロレタリアの戰士だ！」

誰かゞ、さう呶鳴つた。

再び、汚い列は笑聲や、ガヤガヤ騷ぎをふり撒きながら、進んだ。男の子は、餡パンを摑みだすと、口一杯に押し込んだ。

朝から何も食つてゐない勞働者が多かつた。横眼で子供の口元を盗み見て、それから『アハヽヽ』と笑つて、唾を嚥み込んだ。

パンを食つてしまふと、男の子は元氣に頰を輝かした。口笛を吹いた。勞働者の歌をうたつた。

街路樹のかげに佇んでゐる「仲間」を見つけると、手をふりあげた。

「飢餓行進だ。參加しろ！」

「失業者の示威行列だ。入れ！」

男の子は瘠せて尖つた頰を輝かせながら、甲高い聲で叫んだ。

「×に入れ。俺らは×××だぞ！」

すると、アスファルトの仲間はためらひながら、しかし喜ばしげな面持ちで近づいて來た。

（この倉卒の間の小篇を同志T・K外五人に贈る）　――一九三〇・六・六朝――



風鈴キングのアメリカ話

川端康成

風鈴をアメリカではウインドオ・ベルといふ。つまり日本人は風に鳴る鈴と思ふんだが、アメリカ人は窓に鳴る鈴と考へるんだらうか。

あのガラスの風鈴だ。ガラスは元來毛唐のものだし、安繪具の色ガラスなんていかにも輸出向きの東洋趣味だ。しかし風鈴の、さうだ、夏しか聞くことを好まないほどにも、さやかに、そしてさびしい音は、まことに日本の音だ。この音は今でも、アメリカの窓々でささやかに鳴つてゐるはずだ。ちやうど日本の都會の窓の小さい鉢の植物のやうにね。この音をアメリカに廣めた――僕がその一人なんだ。

一貧書生だつた僕が赤手空腕、一夏に二千ドルばかり儲けた話なんだが――待つてくれ給へ。古里へ錦を飾るとは美しい言葉だが、いつたい日本人は法螺を吹きに歸るところどして、古里を愛するんぢやないかしら。この風鈴成金の話もま

た例によつて、海外立志美談かと思はれると、僕は顔が赤くなるよ。

先づ明らかに笑つてくれないと、僕は話せない。

例へば柔道だ。日本柔道は故國へ錦を飾つたものの一つにちがひはない。僕はアメリカ人からも在留日本人からも、柔道のことをよくきかれる。一九二〇年前だつたと思ふが、ニユウヨオク第五街四十一丁目のフランス愛國婦人會館で、柔道の試合を見せたことがあつた。黄色い小倅がしたりげに愛へたもんだ。

「スピリツト・オブ・ジヤパンとして紹介するんでせう。ところは婦人會館でせう。この間のやうに水兵の前でならいいですが、婦人があいふ姿を見たら、婦人に失禮を働く術を研究するのが、日本精神だと誤解しやしないでせうか。」

「立業だけを見せとくんでせう。」

「願くばさうありたいですね。山下八段がルウズヴエルト大統領に教へた――海を渡つた第一歩から、名擧に輝いてゐるんですから。」

いかにもこの男のいふやうに、講道館の山下義昭八段がルウズヴエルトに教へる眞似をした――その一九〇六年、明治三十九年六月が、柔道のアメリカ誕生月だ。さういふことになつてゐる。

しかし、フレシユマンといふトルコ風呂は、その前からちやんと、ニユウヨオク第四十二丁目第六街の街角にあつたんだ。逞しい日本青年が十五人ばかりも、そこに三助をしてゐた。三助の一人に佐竹といふ講道館四段があつた。柔道のマツサアジが、好色なアメリカ女を樂しませたかどうかは知らないが――トルコ風呂と柔道、この方がよつぽど、大統領と柔道よりもほんたうらしいぢやないか。

いや、僕の穿ち過ぎた空想は、佐竹四段の名擧を傷けたやうだ。白い女のお好きな黒い奴隷とまちがへてはいかん。この四段は毎晩トルコ風呂の屋上庭園で、アメリカ人に柔道の宣傳をしたんださうだ。ところが、ちやうど日露戰爭の頃な

んで、日本兵の強いのは柔道のお蔭だとでも、謎をあつさり解きたがるアメリカ人が思つたんだらうか。似非柔道家が雨後の筍のやうに現れて、あちこちでしきりに亂暴を働いた。このために、それこそ日本柔道は危險千萬なものだと毛嫌ひされた。――ついでだからいふが、これらのいかさま柔道家のやうな失敗を、日本移民は何度繰り返して、何度日本人の信用を落したことかしれない。さういへば、僕の風鈴だつて怪しい。とにかく、トルコ風呂の柔道家は、こんなものとはわけがちがふ。

しかし、トルコ風呂の湯氣の中からトルコ風呂の屋上庭園へ引つぱり上げたところで、やつぱりトルコ風呂で、やつぱり僕には面白いよ。

僕はいふよ。だいたいアメリカそのものからして、先づ流人や落人が鍬を入れたと見てもいいんぢやないか。神話も傳說もないアメリカが、それらの先祖を英雄に祭り上げてしまつたまでだ。それがなんぞや。アメリカ獨立後、一八二三年に出版した、ニユウ・ハンプシャイア州の學校の世界歴史敎科書、"The Elements of General History" なんかをみ給へ。日本の二千五百年の歴史はたつた半頁だ。

"The Empire of Japan was discovered by Portuguese about the middle of the 16th century." と、これがその書出しなんだ。

ポルトガル人が發見したんだつて――コロンブスに發見してもらつたアメリカは、日本もやはり發見された小さい島だと思ひたかつたらしい。僕もその筆法で――アメリカを發見した日本人は？　つまり、初めてアメリカ大陸の土を踏んだ日本人は誰なんだ。問ふまでもない。

「安政七年の新井豐前守、明治四年の岩倉具視――さういふ遣米使節達でせう。」

「それはさうにちがひないが――。」と、僕はここで、大正の頃花やかなりし三人の藝術家を思ふんだ。お蝶夫人の三浦環。

「ミチオ・ダンス」の伊藤道郎。カアネギイ・ホオルで大管絃樂を指揮した山田耕作。この三人の花やかさから、過ぎし日の哀れな藝人を思ふんだ。

「外國の交際は國の安危に關し、使節の能否は國の榮辱に係る。今や大政維新海外各國と並立を圖る時に方り、使命を絶域萬里に奉ず。外交内治前途の大業、其成否實に此擧に在り、豈大任にあらずや。大使天然の英資を抱き、中興の元勳たり。所屬諸卿皆國家の柱石、而して所率の官員亦是一時の俊秀、各欽旨を奉じ、同心協力を以て其職を盡す。我必ず奏功の遠からざるを知る。行けや、海に火輪を轉じ、陸に汽車を輾らし、萬里馳驅英名を四方に宣揚し、無恙歸朝を祈る。」

行けや、海に火輪を轉じ、陸に汽車を輾らし――このハイカラな文句は、明治四年の人々に虹のやうな幻であつたらうと思ふが、宮中の遣外使節祭席上の、三條實美の送別の辭なんだ。

特命全權大使は岩倉右大臣。副使は參議木戸孝允、大藏卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、外部少輔山口尙芳。一行總員四十八名。案内役はアメリカ公使デ・ロング。「海の火輪」はアメリカ丸。――維新の花形役者の町廻りのやうに、この顏振れもまた花やかだ。

この花やかな顏振れが、丁髷、裃、太刀、脇差、大江戸の大名行列のいでたちで、ニユウヨオク五番街を通つた時のことだ。輕業師が五六人道端に土下座してゐるではないか。日本人だ。彼等は明治維新を知らない。昔ながらのお大名のお通りと思つたんだらう。維新の花形連中が、そつぽを向いたかどうかはしらない。しかし、輕業師はみんなはらはら泣いてゐたさうだよ。

彼等は慶應二年にイギリスの興業師に買はれて、長崎から國々をさまよつた果てに、ニユウヨオクに流れついてゐたんだ。

アメリカの日本輕業の家元は、北村萬吉だといふことになつてゐる。しかし、ほんたうの元祖はあの土下座をしてゐた

薩摩といふ藝名の悲しい男達だよ。花やかな三人の藝術家の先祖も彼等だよ。政府の使節達が、大統領に柔道を教へる眞似をした八段だとすると、この輕業師達は、トルコ風呂の三助の四段だよ。

「アメリカを發見した日本人は薩摩といふ輕業師です。」と僕が云つたつて、まんざらじやうだんと思はないでくれ給へよ。少くとも、日本人がアメリカの土に落した最初の涙は、輕業小屋からアメリカを見た、輕業師達のものだつたんだからね。

明治十八年頃アメリカ公使だつたハッバアドは、本國政府への意見書の中に、いかにもヤンキイらしい思ひ上りを洩してゐる。「アメリカ人民なる名稱はあたかも昔日のロオマ市民の名稱の如く、日本全國内を通過する無形の旅行免狀となりたる程の次第なり。」――アメリカが日本を愛したからだつていふんだが、まんざら嘘ぢやない。

「海に火輪を轉じた」岩倉大使の一行にしたつて、サンフランシスコに着くとから、ホテルの廣場へ、烏帽子、直衣、切袴の姿を現して、市民に挨拶をしなければならんほどの歡迎振りだつた。それより十年前の一八六〇年、安政七年、つまり日本人の初物、新見豐前守や村垣淡路守等八十一名の幕府の使だつて――さうだ、この時の副使村垣範正の航海日記は僕をアメリカで微笑ませた本の一つだつたよ。

舞踏會を見ては、「踊とはいへど、只くるくるめぐるのみ。」だとか、「樂隊の號令官は、杖の頭に銀の玉を付號令するさま大にこつけいなり。兵卒のうちに小なる樹を背にかけて行二八の美人あり。(是は氣附の火酒をもつ役なるよし)舞ひ廻りたるさま祭に等し。」だとか、

時鳥なきやもせんと思ふまで
青葉すずしき河そひの宿

なんて、ワシントンの「新聞紙屋の長なる者の山莊の高樓」で、御國風の三十一文字をひねくつたりなんだ。

「此ホテルも六階造にて美を盡したり。數多の窓毎に小なる旭章と花旗をさし(節分のひいらぎをさしたるがごとし)屋

根には三間四方もある旭章花旗二本建て、往來所々にも屋根よりやねに繩を張つて各國の旗を懸、眞中に御國旗懸たる所あまた有、子供など、紙にて作りたる御國旗を持て、是を振りて祝す。市居には御國旗を賣も有、我江都に開張佛の來りし如くもてはやしけり。」――これがニユウヨオクだ。

四頭立の馬車が、「祭の如く少し行ては止り、無益の道を廻りて行」くほどの見物人だつたんだ。開張佛の來りし如くもてはやしけり。――とは、淡路守もなかなか皮肉の分る男だつたぢやないか。皮肉といへば、僕の胸を冷くする一節があるんだ。聞き給へ。

「酒盃をすすめけるまま、盃を傾けてかへらんとすれば、とどめて啞人を見せけるよしを云、いかなることかと待しに、姿艶の婦人二人來り、何れも啞人なり。兩手の指を屈伸してさまざまの體をなせば、男子一人會得してをのれ等への挨拶を述たり。啞人互に兩手の指にて、さまざまの體いとはやくしけるは、話をするよし也。此府に啞院ありて百人餘も在りて、アベセを手眞似にて覺させ、一身の用を辨ずる爲にをしへたるもの也。啞院までもかく敎へけるといふをほこりたる爲に見せけることなるべけれど、富有の家に生れし人と見えて美服を飾りたる少年、かく不具成るを外國人に逢せるは見るも氣の毒なる心地すれど、渠は少しも恥るさまもなし、人情の異なる事を知るべし。」

例の「新聞紙屋の長なる者の山莊」のことなんだが、この新聞社長のいたづらな、もしかすると意地悪い、北叟笑みが僕の目の前に浮び上つて來るぢやないか。

使節の一行はアメリカで啞なんだよ。さぞ手眞似もしたらうよ。だから、彼等がいとまを告げようとするところをわざわざとどめて――惡いしやれだよ。毒々しい皮肉だよ。下卑たヤンキイだよ。それをおつとりと受け流したのは、さすがお大名の朗らかさだと、僕は大江戸がなつかしいね。

お大名の朗らかさのもつといい例がある。在留日本人の間に排日問題の話が出ると、僕は笑つて云つたもんだ。

「タウセンド・ハリスとお大名の對話を知つてゐるかい。」

一八五七年の安政四年だ。

「問。世界中一族に相成候樣致し度と申儀は交り方の模樣等猶承り度候

答。外に趣意は無之互に平等に致し壹人飛離れ候て我意を立候儀等無之樣致候樣に御座候先より眺め候得ば何れも親疎無之一齊に候間近しき兄弟同樣一結に相和し候事を申儀に御座候左候迚萬國皆親族に相成互に婚姻可致との儀にて無御座候」

「ええ、實に意味の深い對話ぢやないか。お大名は子供のやうにあどけなく聞いてゐる。ハリスは開き直つて外交辭令を並べてゐる。嘘八百だ。何十年か後の排日問題なんかと考へ合せると——交り方の模樣等猶承り度とは、實に昔、千古を貫く、また骨を刺す皮肉ぢやないか。」

おつとりしたお大名の口から、たくまずして出たこの皮肉は、「新聞紙屋の長」の惡がしこい皮肉とは、まるで月の明らかさとすつぽんのいやらしさだよ。

この皮肉くらべでは段ちがひだつたが、しかしあの輕業師以來、日本人はアメリカでずゐぶん泣かされたもんだ。もつとも、僕はこの話のはじめに、朗らかに笑つて聞き給へと云つた通りに、泣きなんぞはしなかつたがね。一つには風鈴のお蔭でだよ。

トルコ風呂の三助柔道家、土下坐の輕業師、啞の手眞似——僕のしやべつたのは、なんだか僕自身が「新聞紙屋の長」みたいに、したりげな皮肉家のやうだが、だいたいガラスの風鈴そのものからして、餘り上品でない皮肉みたいなもんだ。

これはもう僕が「風鈴キング」とまで歌はれてゐた時、僕は僕の風鈴倉で、女工のアメリカ娘に接吻しようとしたこともあつたんだ。風鈴が四つ五つ落ちて毀れた。それと一しよに、一ぱいつるしてあつたガラスの風鈴が、一せいに搖れて鳴

り出したぢやないか。

とにかく、僕はその頃風鈴屋の元祖で通つたんだが――と云つたところで、どんな本からアメリカの日本品の目錄を搜し出しても、風鈴といふ字は先づ見つからないほど、ささやかなものなんだが、海外での元祖といふものは、本國へ表向き聞えてゐるほど立派なもんぢやないつて、つまりは僕自身の謙遜のために、いろいろ失禮な例を引いたまでなんだ。美術品だつてさうだ。起立工商會がアメリカに創立された頃には、狩野派の軸とか、傑れた工藝品なんかを、アメリカ人は見向きもしないで、京都の金光山の花瓶なんかの安物が、百弗、二百弗で飛ぶやうに賣れたんだからね。クリスマス用の扇なんかも、一本二十五六錢のものが、見る見る一弗、二弗、たうとう五弗までせり上つたんだからね。

僕の風鈴はそんな夢のやうな話ぢやない。僕が初めて受けた注文は、一グロス（十二ダアス）十八弗だつた。風鈴一個が僅か十二仙そこそこなんだ。勿論、この花瓶と風鈴とでは、時代がちがふ。さういへば、花瓶の二百弗も今の二百弗とは弗の値うちがちがふ。一八一六年、明治九年の弗なんだ。もう一つさういへば、僕が一夏に儲けた二千弗だつて、今の二千弗とは大いにちがふ。まだ「零のあつた時代」の弗なんだ。

「零のあつた時代が花でしたな。」

「いや全く。この次の零を待つのに百年かかるとは、數學上から見て、なんだかをかしいですな。しかし百年待つたつてもう一度零の花が咲くでせうか。この頃のやうな、ハアスト系の雲行ぢやね。」

「この次の零の時代には、アメリカの日本人は、それこそほんたうの零になつてしまふかもしれませんね。」

しやれどころぢやない。僕達はこんな風に、「零のあつた時代」をなつかしがつたもんだよ。

ハダソン河畔の高峰博士邸の日本風裝飾と、櫻公園の開設と――僕も見た、この二つの花々しさを名殘として、「零のあつた時代」は過ぎ去つて行つてしまつたんだ。

キリスト暦で、一九〇何年——つまり、一九〇次に零のあつた年代を、誰かが「零のあつた時代」と名づけたんだ。日露戰爭前後のことなんだ。そのなかでも、一九〇三年、明治三十六年から、一九〇七年、明治四十年までが、花なんだね。この四五年の間は、アメリカ人の日本熱が滿開の花だつたんだよ。それはもう、日本名物の櫻のやうな咲き方だつたね。

滿洲の勝いくさの報せに醉ひながら、僕達は「日本人なら娘をやろか」といふやうな歌を——無論、日本語の自作でねカフエで歌つたもんだよ。——なんて云ふと少し大げさだが、日本人と結婚することがアメリカ娘の流行になりやしないかと、これも大げさだが、とにかく日米結婚が目覺しい殖え方だつた。日本人の經濟的發展も、社會的地位も、この時分に風船のやうにふわふわ上つたもんだ。——僕の風鈴なんか、それの小さいしやぼん玉かもしれない。

毎日新聞紙が日露戰爭をはやし立てる、それがまた僕等を踊り上らせる——例へば、スペクテエタア紙なんか、

「開戰以來アメリカ人は殆ど國を擧げて日本に對する同情を發露せり。今若し全國州々會に於ける數回の投票を以て之を推さば、露國の同情者は實に全合衆國を通じて、其百の五にも足らざるべし。」

かういふのが、開戰の頃の新聞の調子の見本なんだし、それに連戰連勝の報につれて、その調子がいよいよ高まり、たうとう賞讚から恐怖さへ生れ、あの黄禍論をしづめるために、金子堅太郎もアメリカへ來てゐたはずの——明治三十八年の、しかも正月、僕は學資が途絶えたために、ペンシルバニアの大學を止めなければならないなんて、全く運命のいたづらといふやつだつた。

女學生は別れを惜んでくれたよ。

「おお、愛國者。あなたは御自身の學資を戰費として、お國へ送つておしまひなすつたのね。アメリカにゐる多くのけなげな兄弟達に倣つて。」

「ええ、幾分かの節約はしました。」

「いいえ、すつかりだわ。私は日本人の愛國心を見た。美しい行ひをしながら、それを隱して、默つて去つていらつしやる、それが神秘な武士道なんだわ。」

「結果から云ふと、僕の學資は戰爭のために家で出せなくなつたんですけれど――。」

「忘れないで頂戴、アメリカ娘にバンザイといふ日本語を敎へたことをよ。バンザイ、バンザアイ。」

「天皇陛下萬歲。」

「明日はもう私より美しい、淸敎徒の娘に、乃木の話をなさるのね。私の悲しい、一たうおしまひのバンザアイ。」

しかし僕は次の朝、淸敎徒の都のフィラデルフィアで目覺めて、窓から首を出すと、イタリイの子供が二人、白墨で人道(サイドウオウク)の上に繪を書いてゐた。裏町の下宿の五階、つまり屋根裏に僕はゐるのだ。ポケットには十弗だ。子供の頭の毛は黑い。フィラデルフィアに日本人が三四百人ゐることを思ひ出した。仕事の口(ジョッブ)を搜してもらはうか。

「ふん。家庭勞働にきまつてゐる。勞働組合からも、正當勞働(レジチメイト・レイバア)と認められない、白人の奴隷か。」

一たい、日本人がアメリカで馬鹿にされたのは、このファミリイ奉公のためだつたとも云へるんだ。支那に日本が勝つたのでびつくりしてもまだ、日本人といへば例外なしに家庭勞働者――つまり、ボオイか、コックか、野良働きしか、出來ないものだくらゐに、アメリカでは考へられてゐたんだ。明治十三年頃から軍艦に雇はれてゐた、司厨料理人や從卒なぞは、きつと最も上等の日本人と見られてゐたんだらうね。

新島襄なんかも書生だつたといへるし、森有禮なんかもドクトル・ハリス家のパン燒きだつたといへないこともないが數少い立志美談は別としてね、――この半ば奴隷の境涯の家庭勞働から一本立ちの職へ、いかにして多數の日本移民を引き上げるかといふことが、日本がアメリカに持つてゐる一番大きい問題なんだ。

僕は大西洋海岸にゐたんだから、太平洋海岸のことはよく知らんが、朝に平家の家庭に仕へ、夕に源氏の家庭で働くといふファミリイ奉公でなくつてもだよ。たいていの日本移民はジプシイだ。あの元祖の輕業師のやうにね。高橋新吉の假

事時代だつたから、明治二十年頃なんだらうが、角力や手品師や藝者がニユウヨオクへやつて來ると、さういふものを見せるのは、日本の面よごしだから、旅費を持ち出して、追ひ歸したがよからうなんて、土地の日本人が騒ぎ立てたのは、ちやんちやらをかしいよ。

浮草のやうに流れても行くが、賤業的にもジプシイなんだ。日本内地の香具師の群――つまりおれなんだな。夏は海水浴場で玉ころがし屋をやるかと思ふと、冬はクリスマス目あてにいかものの日本裝飾品屋となるといつた風に。――僕の風鈴も實はそれなんだがね。

いや、風鈴よりも前に、僕は支那の少女と二人で、アトランチツク市の復活祭を、どんなに待つたことだつたらう。馬場辰猪の寂しい墓へ參つた歸り路に、拾つた少女だつたよ。

「おれは浮草にも奴隷にもならないぞ。」

その覺悟で僕は日本人が雜居してゐる町へは足も向けずに、屋根裏に閉ぢこもつて、英文を書いたんだ。たしか「日本人の見たるフイラデルフイヤ」といふやうなものだつたと思ふ。それをレコオドだとか、インクワヤラアだとか、フイラデルフイヤ市の大新聞社へ賣り込みに持ち廻つたんだから、いくら下宿を追ひ立てられてゐたにしろ、今考へると顏が赤くなるよ。しかし、一角の論說家氣取りだつたと見えて、僕はこの市に葬られた馬場辰猪を先輩だと思つたんだね。

その墓で夢を見て下宿の近くまで歸つて來ると、汚い白壁に支那の少女が樂書をしてゐる。見ると、それが鳳凰の繪ぢやないか。

「ほう、鳳凰とは氣に入つたね。」

勿論、日本語は少女に通じやしない。だから、英語に云ひ直さうとするんだが、「鳳凰」といふ言葉を思ひ出さない。思ひ出してみるとつまらない。

「その chinese-phenix を、君はどうして知つてゐる？」

ところが、この裏町の支那娘はフエニツクスなんて言葉を聞いたこともないんだらう。それでチヤイニイズと冷かされたと思つたらしいんだね。振り向いた。あいの子だ。おやぢはイタリイ人のごろつきかなんかだらう。

「君の描いてゐるその鳥を、君は見たことがある？」

「お母さんが支那服を見せてくれたわ、この鳥のついてゐた。」

「さう。その鳥は支那の火の鳥なんだよ。お母さんの國の誇りを現す鳥なんだよ。」

「誇りつて？——あんたは日本人なのね。支那の隣なんですつてね。あたい一ぺんだけ、日本の少女と思はれたことがあんの。日本ロシアに勝つたでせう。それでお母さんの働いてるお家から、あたいを雇ひに來たのよ。そのお家の人がね、あたいを日本人に假裝させて、假裝舞踏會へ連れて行つたのよ。」

「どうだつた、日本の少女は？」

「その紙頂戴よ。」

「え？」少女が叫ぶやうにいふので、僕はびつくりした。

「これか。」と、僕は少女が指すものを、ポケツトから出して、

「これはパンに化けそこなつた反古ぢやないか。」

「あたいパンをくれつて云やしないわ。乞食ぢやないわ。」

「あげてもいいがね。こんなものを何するんだ。」

「繪を描くの。」

「繪か。——日本人が表に字を書いて、支那人が裏に繪を書いて、フイラデルフイアの芥箱へ棄てて、面白いね。」

「頂戴よ。」

「そんなに繪が好きなの？――下宿へおいで、新しい紙を上げよう。」

少女はドアの外からひどく生眞面目な顔で部屋を覗いだだけで、內へ入つては來なかつた。

ストオヴの石油がなくなつた。僕は寢ついた。異國で病むなかれとは金言だ。僕はなぜだか、焰の燃える夢ばつかり見た。目が覺めると、この間、町で見た老日本人の幻がしつつこくつきまとふ。

老人は吳蓙（マット）一枚と毛布一枚しか持つてゐない。それで寢るんだ。石油のない僕よりもつと寒いから、夢ばかり見る。しかしこの老人にとつては、夢を見ることが眠ることの目的なんだ。なぜかつて、翌る朝になると前夜の夢占ひに從つて馬鹿票（ばかつぺい）といふ支那ばくちの札を買ふんだ。生きることがその札なんだ。

朗らかに笑つて聞き給へと、僕はこの話のはじめに云つた。悲しむことの好きな日本人――僕はその日本人でなしに、アメリカ暮しをして來た男だと、思つてはゐるんだが。

「悲哀に泣いて、其美を樂しまんと欲するは我日本人の特性なり。」なんて、在留日本青年の美文集の文句から、僕も出られなかつたんだらうか、病の時はね。

僕の手もとに今もある、この本の中の一句だよ。在留日本人だつて、美文くらゐは書いたよ。サンフランシスコの日の出商會から出た本だが、明治四十五年だから、日本には自然主義文學が盛んだつた頃で――僕もこの本國の作品を讀んだがね、アメリカの日本人にはあんまり喜ばれなかつたんぢやないかしら。とにかく、その頃日本の青年はアメリカでどんな文章を書いてゐたか、その見本として――僕が石油のない屋根にゐた時より六七年後に出た本だが、僕の病の床のセンチメンタリズム、また在留日本青年の悲しみを歌つたやうな一節を、一つ二つ讀んでみようか。

「悲哀に泣いて、其美を樂しまんと欲するは我日本人の特性なり。日本人がアメリカに來りて、常に何ものか不滿を覺ゆるもの、一はこの欲求の充され能はざる爲なり。銀燭煌々たる舞踏場裡、蜜の如き乙女の囁きは求むるに難しとせず。而も冬の夜の鐘を數へ、待つ身につらき置炬燵の、悲調を帶びたる戀の味や遂に知るべからず。おおかの洋々たるワルツの

樂に醉はんと欲して能はず。寧ろ却て霜冴ゆる夜、門づけの三味の悲しき撥の音を、戀しと思ひしこと幾度ぞや。我詩や遂に哀詩たらざるを得ざるなり。

悲哀に泣かん事は、げに我半歳の冀なりき。而して病床に臥すこと三月、靈趣神興沛然として、懐鄕綿々盡きざる哀情の衷に湧きつ。云ふ勿れ、これ好んで悲哀を弄ぶものなりと。我遂に涙なき北米の人生を忍ぶこと能はざるなり。」

もう一つ、別の青年のもの——

「史は傳ふ。三千の美姬王者に纏ふと。試に街頭に立てば、嬋妍たる美姬、窈窕たる阿嬌、點々として指呼すべし。吾は信ず、吾も亦美姬に擁せられ、阿嬌に纏はれんと。然れども、昨は數理に究し、今は夷語に惱む。手に唾して取らんとすれば、檐端の梅花、尙達すべからず。懐に手をやれば、一皿の炙肉（グリル）すら尙求むるに窮す。借問す、籬下、白髮の翁、我願ひ妄なりや、我思ひ亂なりや。

我は憐れむべき一農奴の子なり。昨日市に蔬を賣つて、今日街に菓を商ふ。轣轆たる展庶、豐軀を乘せて走り、悠々たる縉紳、我を睨して去る。我は襤褸に纏はれて、毫厘に叫ぶ。我父は菜を培ふて老ひ、我母は裸を縫ふて衰へたり。噫、吾も亦市に呼び、街に叫んで老ふべきか。我脈を搏つ血流は、何の故か、吾を襲ふて悶々たらしむ。ああ吾も亦斯くして老ふべきものか否や。」

三千の美姬の宮庭のかはりに——貧しい支那の少女が屋根裏へ、僕に紙をもらひに來た。

「もう紙もありはしないよ。」

「何かない、繪を書かせてよ。」と、少女は寢臺へ近づいて來て、僕の手を拾ひ上げながら、

「あたいの手より黃色いのね。」

「君、口紅なんておしやれねだね。」

「拵つたの。」

そして、金色の小さい筒から紅を押し出しながら、なにげなく僕の掌に繪を描くんだ。梅の花だ。

「やつぱりこの花、支那服の模樣で見たの？」

「さう。」

「お母さんは何をしてる。」

「洗濯屋なの。」

「紅梅だね。梅は支那や日本の花だよ。日本の暖い海邊には、今頃もう咲いてゐるよ。」

「何かないの？　あたい繪具を持つてんだもの。」と、壁にかかつてゐた白いネクタイを見つけると、いきなり水彩の薔薇を描くぢやないか。僕はあつけに取られた。あんまり樂しさうなので、僕はしばらく默つてゐた。

「いたづらしちや困るぢやないか。紙もない男のネクタイに繪を描くなんて。」

「あたいのお母さんは洗濯屋よ。」

その翌る日、僕はしかたなしに、薔薇を描いたネクタイをして、下へおりて行つた。下宿のおかみさんは、僕を追ひ立てる口實を、また一つ見つけたんだ。

「あんな支那の小女郎なんか引つぱりこんでもらつては、うちの品位にかかはりますよ。それにあいつは――この邊で小さい惡魔のやうに嫌はれてんですからね。あいつときたら、壁だつて、窓ガラスだつて、洗濯物にだつて、手あたりしだいに樂書をすんのさ。何か支那人の深い呪ひのしるしをつけて歩いてんぢやないかしら。あいつが來てから、町の子供の間に樂書がはやり出したつていふくらゐですよ。」

ところがしかし、僕のネクタイは食堂で拍手喝采なんだね。皆が賣つてくれと云つてきかないんだ。たうとう一弗までせり上げた男が、僕の首を絞め殺すやうにして持つて行つたぢやないか。

「しめた。ヤンキイて、なんて物好きな。――これで忽ち成金だぞ。」

僕はネクタイなしに街へ飛び出した。支那の少女を捜し歩いた。

「おい。絵を描いてくれ、花だ、花だ。絵具も、絵手本も、寫生するほんたうの花も——いくらだつて買つてやる。」

「あら、あら、あら。」

支那の少女はヤンキイ娘のやうに僕に飛びついた。僕はヤンキイのやうに接吻してやつた。

「あたい日本が好きになつたの。」

「なに云つてんだい。君は紅を唇につけるより、それで絵を描いた方がいいと思ふの。」

「さうよ。」

「唇につける口紅だつて、一ぱい買つて上げるよ。」

「それから寫生する花もね。」

「よろしい。」

「それほんたうのことなの？」

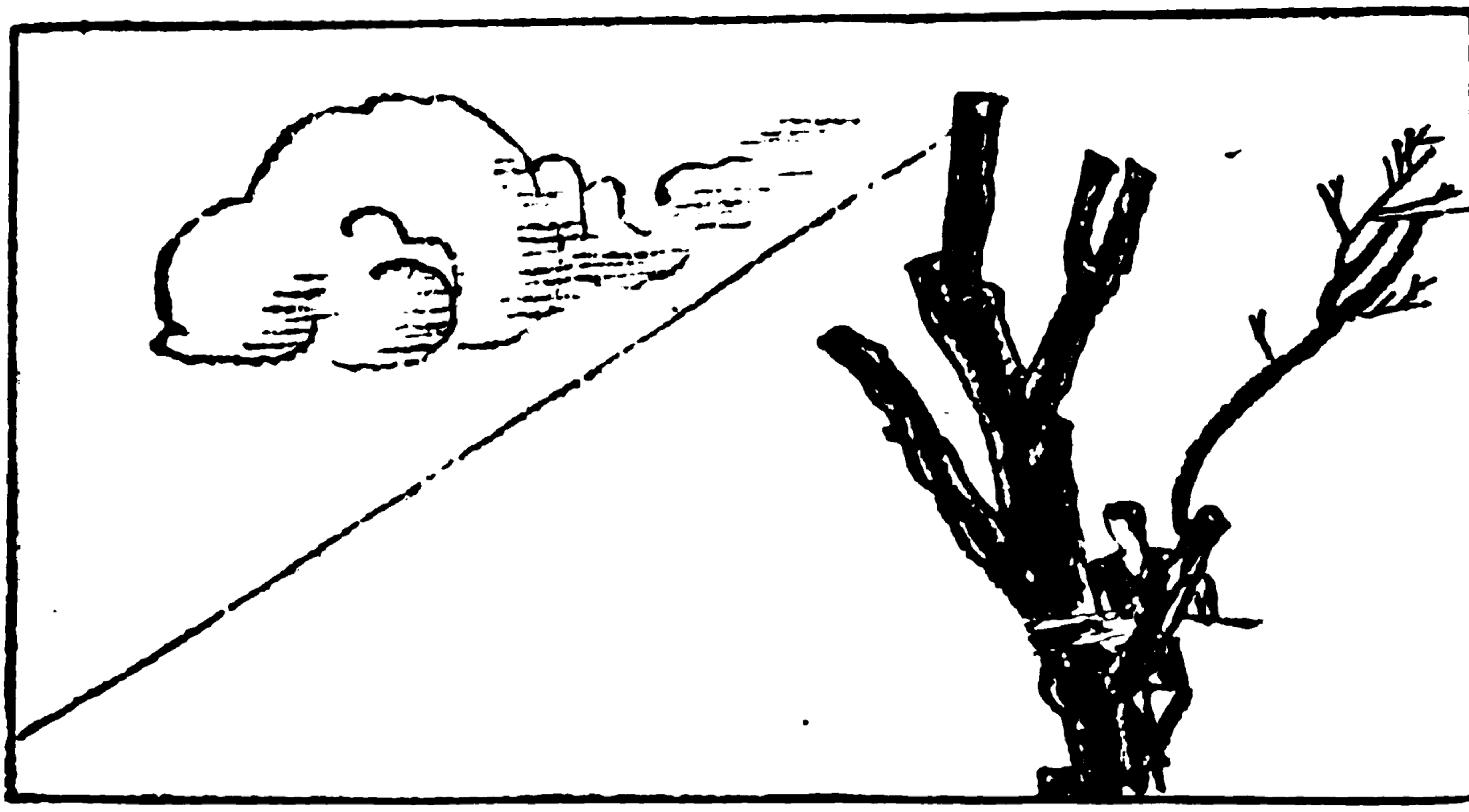
「もう直ぐ春が來て復活祭(イイスタア)だ。復活祭(イイスタア)には、アトランチツク市のボウドウオウクへ行かうよね。二三十萬の人がお祭に集つて來る。ネクタイが二千本賣れるとしても、元價十四五仙のが一弗——。」

「ネクタイつて。この間私が花を書いたんで、あんたネクタイをつけてないの？　お母さんに洗はせるわ。」

「どつこい、洗濯どころか。——今年は三月二十一日の後で、いつが第一の滿月なんだい。その滿月の夜が復活祭なんだよ。支那や日本ではね、お月さまをもつともつと大切にして、彼女にいろんな思ひを話しかけるんだよ。」

「さうなの？　あたいもこれからもつとよく滿月を見るやうにするわね。」

勿論、僕のネクタイの見本は、フイラデルフイアの大百貨店で、五十年も前のヨオロツパの流行だと、頭から笑はれてしまつた。しかし、それを持ち歩いた日本雜貨店の一つで、風鈴を造つてみないかと云はれたんだ。それが「風鈴キング」の出發だつたんだが——。



最後の失望

近松秋江

一

階下では又火の附いたやうに子供の泣く聲がした。宵に、やつと寢かしつけたと思つたら、毎夜今時分になつて、きつと眼をさまして泣き出すのであつた。

去年の十月產まれて、今月の中旬が來ると、ちやうど一年の誕生日を迎へるのであるが、今は、それどころではなかつた。先月の初、母親が急性な流行性嗜眠症腦脊髓膜炎に罹つて、既に一ヶ月ばかり病院に入つてゐるのであつた。その方は、どうやら一命だけは取留めたらしいが、母親が突然發病するまで、母乳ばかりで育てゝ來た乳兒は、そのために一夜のうちに食餌から離れてしまつたのであつた。不意に重湯やミルクを與へてみても、母乳の、天然に具へてゐる滋味を缺いてゐるものは決して馴染まなかつた。それで母親を來診した博士の紹介で、それは、ある小兒科にあづけて、人工榮養に習慣つけてもらうことにしたのであつた。二十日ばかり、そこに托してゐる間に、小兒科院長の積

極的な取扱法によつて、それでも、どうやらかうやらお粥や馬鈴薯の裏漉しくらゐのものを攝取するまでに漕ぎつけた。

母親の病氣騷ぎで、女中や派出婦など幾人となく出つ入りつしたが、そんな厄介な處に落着いて働いてゐる者はなかつた。たゞ、病氣の絶頂の時から居つゞけた婦人ばかりは、乳兒の境遇に憐憫を抱いてゐたのみならず、普通の渡り者でない落着と思慮を備へてゐた。頭もよく働いた。

宇佐美は、階段を驅け降りてくると、泣く兒の寢室へ入つていつて、

「又泣き出したのですなあ。どうも困つたものだ。」と、屈托さうにいふのであつた。

光子といふその婦人は、子供に泣き出されると、もう、自分の頬まで赤く逆上したやうになつて一生懸命、愛したり、すかしたりするのであるが、一旦爆發したら最後一時間くらゐは、泣き止めなかつた。お腹がひもじいわけでもなかつたが、やつぱり温い乳房をふくむに優る鎭靜法はなかつたのだ。子供は涙と鼻汁と唾と一所になつて、顏が濡れつぶれるほど泣いた。まるで鯨波を揚げて叫ぶやうに泣きしきつた。

宇佐美は、片の附けやうもない顏をして、たゞ心を痛めるのみであつた。

「どうしたら、いゝんでせうね。」

「構ひませんです。どうぞお休みなすつて下さいまし。」

光子は、さういひながら、もう十二時から一時といふ眞夜中に起き上つて、寢んねこ絆纏で子供を負つて、座敷の中を搖り歩いた。

「ねんねんこんこんよう、ねん〳〵こん〳〵よう。」

と、遠い東北訛りで、四邊の寢靜つた秋の夜更に、小唄のやうに口ずさむのが、極度に感傷的になつてゐる宇佐美の腸を斷つやうに沁み透つた。

「でも、毎晩のことですから、あんたも疲れるでせうと思つて。」
「一と仕切りお泣きになつたら、又おやすみになりますから、わたくしも寢ます。」
「さうですか。……ぢや頼みますよ。」
さういつて、彼は又二階の自分の寢所に戻つて來て身を横へるのであつたが、やつぱり子供の泣き聲が靜まるまでは、快く眠れなかつた。
そして眠れないまゝに、いろ〳〵なことが空想に浮んできた。今のところでは母親の病氣は、先づ生命には不安はないと病院ではいつてゐるのであるが、病症によつては、その病に罹つた者は、或は一生の癈人になるかも知れぬのである。宇佐美は、そんなことを思つてゐると、まるで眼の前が眞闇がりになるやうな氣がした。それでも不憫なる乳兒の生みの親であることを思ふと、さういふ病難の負擔も辭するところではなかつた。又それを避けらるべきことでもなかつたが、發病前後彼女が宇佐美に對して抱いてゐた氣持ち——それは後になつて宇佐美には解つたのであるが——や、危篤の際押掛けて來た彼女の親や兄弟が宇佐美に對して、露骨に表はした無理解な不信や、兇暴なる態度は、今でも生々と宇佐美の頭に深く刻み附けられてゐるのであつた。彼女の肉親の者等は、彼女の病氣を、まるで宇佐美の行爲であると信じてゐるのであつた。
病人が、もう眼を上げてしまひ、たゞ、うゝと單音の唸りを發してゐるだけで、醫者も最後の宣告を與へてゐる間際にあたつて、本當ならば近親者といへども、病床を遠ざかつて、ひたすら靜粛にして居るべき場合に、彼女の父親は、病人の枕頭で、疊を叩いて宇佐美に向つて怒鳴りつけた。
「まるで虐待ぢやないか、元の身體にして返せ。」
宇佐美は、その時、それを聽いて呆れてしまつたのであつた。しかし、何を置いても病人の一命を取留めるのが第一の

場合であつたから、端ない言ひ爭ひは、いかなる堪忍の犧牲を拂つても、それは後日の懸案として、靜として置かうとしたのであつた。が、彼は、今でもその夜の活劇を思ひ起すだに、ふるふる厭氣がさすのであつた。

看護婦も女中も、前夜からの睡眠不足に、他の者と入れ代つて休息してゐて、そこには彼女の父親と弟や妹などが四五人居るばかりで、他人といつては光子が少し前から枕頭を看護つてゐるだけであつた。宇佐美は、臨時に雇つた、そんな職業婦人であつても、他人の見てゐる面前で、さういふ端ない言動を愼まない肉親の者をひどく耻ぢた。

好い都合に元の健康に囘復したならば、その夜父親がいつたとほりに、綺麗に彼女を返してもいゝと思つてゐた。

病氣は全く虛を突くやうに、不意に襲ふて來た。それは、病む者にとつて、さうであつたばかりでなく、宇佐美にとつて、より多くさうであつた。劇しい炎暑の一夏を通しての業務に疲れたところで、十日ばかりの閑暇をこしらへて、ある山地の溫泉場に靜養に出掛けてゐるところへ、落ちついてゐる間もなく、電報が來たので、歸つて見ると、彼女は殆ど人事不省であつた。尤も、そんな難治の病が突發するには、前年の秋出產して間もなく、又二度めの姙娠をしてゐるところから、身體の抵抗力が、ひどく衰へてゐるうへに一夏の劇暑にあてられたゝめでもあつた。その姙娠もまた宇佐美にとつては、思ひもかけぬ壓迫であつたが、それは、發病する前、掛り附けの醫師の診斷であつて、それが、或は姙娠でなく、他の、もつと複雜な病の仕業で、たゞ姙娠に似た症狀が見えてゐるのではないかといふのが病院の博士達の懸念であつた。宇佐美は、むしろ、さうであることを心に願つた。病氣が囘復しさへすればいゝ。子供が又、この上一人ふえるといふことは、彼等の生活が、一層面倒に交錯してくることになるので、宇佐美は、それを恐れた。

二

そのうち、子供も眠つたと思はれて、階下は靜になつた。宇佐美もいつしか寢入つてしまうのであつた。明朝になると

子供は、昨夜の泣き顔は何處へ消えていつたかわからぬやうな明るい笑顔で、光子が支度してくれる牛乳や卵黄などが食卓に並ぶのを待つてゐた。

九月の初、子供がまだ小兒科に預けられてゐる時分、母親の方に多くの人手が入るので、そつちは病氣で入院してゐるわけもなかつたので、小兒科の院長がいふまゝに、すべて向うへ預けつきりにして、たゞ此方からは臨時に雇つた婦を一人附添はしておくだけであつたが、勿論そんな者は、子供に親みも馴染みもあるわけではなかつた。宇佐美は、親心として、そんなことで一入子供が不憫に思はれてならなかつた。慈味のある母乳から不自然に切り放されて、生活狀態が急變した、めに、乳兒は本能的な苦痛や不滿を劇しい號泣によつて訴へた。他の病兒等には、それが病氣の妨になつた。そして、そんな苦情を聞いてゐることは附添の者にとつても厭であつた。彼等は二日か三日、やつと辛抱してゐると、直き暇をとつて去つてしまうのであつた。

宇佐美は、自身で附添つてやりたいと思ふのであつたが、毎日二ケ處の病院を、日課にして見舞つてゐる場合とて、後方勤務も忽せにすることは出來なかつた。今、自分までが倒れてしまうやうなことがあつては、それこそ大變だと思つた。母親の方は、病院の指定によつて、熟練の看護婦が專任で附添つてゐる上に、自宅から二人の手傳まで附けてあるので、そのうへの人手は無用であつたが、やつぱり子供のことは絕えず氣にかゝつた。

初は一人で一室に置かれてゐたのが、九月頃の氣候とて、患者が立込むところから、隣室の病兒と同室することになつたりして、そのうち母親の病氣が小康を得たら、自分で傍に附いてやらうと思つてゐる間に、寢泊りする場處もなくなつてしまつた。

同室した病兒は、宇佐美の子よりもまだ一二ケ月遲かつたが、色の白い、肥つた大柄の子供であつた。そのために腎臟を患つてゐた。それには、若い兩親が泊りつきりで、親しく看護の手を盡してゐるのであつた。

「お母さんが、そんな御重患で、ほんとに御心配でございますねえ。お孃さんがお可哀さうですわ。」
「ありがたうございます。ほんとうに困ります。あなたの方のは、いかゞですか。お互に子供では心配しなければなりませんねえ。」
宇佐美は爲方なく苦笑を洩してゐた。
「ありがとうございます。先生は、先のうちより大分良くなつたと仰有つて下さいますのですが。」
「子供がひどく泣くさうでして、さぞ御迷惑であらうと思つてをります。」
「いゝえ、お互さまですわ。……急にお母さんのお乳をお離れなすつたんですから、ご無理ありませんわ。」その妻君は三十近い、大柄な、色の白い、小意氣な樣子の女であつた。
「子供が病氣でなければ、母親が危篤であつたり、あなた方のやうに、御兩親が、さうして始終附添つてゐてお上げになることが出來ると、お子さんが病氣であつたり、どちらにしても、好いことはないものですねえ。」
「ほんとにさうでございますわ。……宅ともさう申して居ります。お隣のお孃ちやんのお父さんは、ほんとに氣がお強くつてゐらつしやいますつて。よく他人まかせにしてお置きになりますつて。」
宇佐美は、その言葉の奥にも、二三日居つては去來する桂庵から來た女中や派出婦などが、どんなことをなして子供を看護つてゐるかといふことが肯けるのであつたが、その妻君のいふやうに、決して氣の強いわけではなかつた。強氣な小兒科の院長が熟練した看護婦長が居るから、それに任せきりにして置いた方がいゝといふので、それに信頼してゐるだけのことであつた。
最後に光子に行つて附添つてもらつた。
「あなたに家に居つてもらはないと、私が毎日留守にすることが出來ないんだけれど、どうも、今まで行つてゐた連中が

あんまり子供をよく看てくれなかつたらしい。どうぞ暫くいつて居つてやつて下さい。」

そして、翌日小兒科にいつてみると、何處かへ負つて遊びに出ていつたところであつたが、同室の病兒の母親は、宇佐美の顏を見るなり、明るい顏をして、

「今度附添ひに來た方はいゝ人ですよ。あの方にずつと附いてゐておもらひになるとようございますわ。」

「さうですかねえ。」宇佐美もほゝえんだ。

「とてもお孃ちやんに優しいんですよ。先に來てゐた人は、それは、ひどかつたんです。夜遲くなると自分は、ぐう〳〵寢てしまつて、お孃ちやんのことなど、ちつとも見ないんですもの。私何度も夜中に蒲團を脫いでおいでになるのを見て、あゝ、こんな夜の冷えるのに、風を召すといけないと思つて、被せかけてあげました。尤もあの人も風邪をひいたとかいつて鼻をつまらせてゐましたが、二三日前の晩でした、たうとう、お孃ちやんを寢臺から轉け落したりなどしてゐました。」

「は、寢臺から下に落したですか。」

「いえ、それは、お孃ちやんが御自分で、寢てゐて轉け落ちたんですけれど、附添つてゐて、大事なお子さんをそんなことをして。……あんな雇人など、ほんとに薄情なものですよ。」妻君は、しんみりといつた。

「いろ〳〵あなたの方のお世話になることでせうと思つてゐます。有難うございます。」

「いえ、お世話といふほどのことは出來ませんけれども。お母さんが御病氣ですから、ほんとにお可哀さうですわ。」

「そして、こんな高い寢臺から落ちて、よく何ともなかつたものですなあ。何處も何ともなさゝうですが。」

「それが、ほゝゝ、あの人が下で、ぐう〳〵寢てゐる蒲團のうへ、又いゝ鹽梅に落ちたんですの。それで自分も眼を覺しましたから、私、さう申しましたんです。ほんとに、もつとよく氣を附けておあげにならないと、いけませんよつて。……

今度の人は、すつかり、それとちがつて、それはよく面倒を見ますよ。泣いたりなさると、鳩ぽつぽを歌つたり、はつちよく〳〵をしたり、泣かせないやうに泣かせないやうにするんです。先の人は、あんまりにお泣きになると、お孃ちやんは、どうしてそんなに泣くんですかと叱つてばかりゐました。いくら叱つたつて、まだお小さいんですから、解りやしませんわ。」

「いや、どうも、いろ〳〵ご心配難有うございます。……何處へいつたらう。」

「つい、先つきまで、こゝで機嫌よく遊んでゐらしつたのですが、すこし飽き〳〵なすつたので、そこらを歩いて來ませうといつて出ておいでになりました。」

宇佐美はそれで、表の通りの方にぶら〳〵出てみると、紫の銘仙のねんねこで負んぶした子供が、赤い風船玉を高く揚げながら、こちらに歩いてくるのが眼についた。街は九月の祭で賑はつてゐた。金ぴかの御輿や梵天王を擔いだ若い衆や子供が、わつしよく〳〵と往來を練り歩いてゐた。明るい初秋の日がそこらに輝いてゐた。

光子の方でも、こちらを認めて、笑ひながら近寄つて來た。

「どこにいつてゐた?」

「ちよつと、そこの神樣にお詣りしてきました。さうらお父さまのお迎へ。」

といつて、彼女は背の子供を宇佐美の方へ向けた。今度の危篤があるまでは、快濶に笑つたり、達者に這ひ〳〵してゐたのが、すつかり笑はなくなつた。這ふことも出來なくなつてしまつた。子供は父親の顏を見ても、浮かぬ顏をしてゐた。

しかし、先刻同室の病兒の母親の話を聽いて、すつかり安心してゐた。小兒科の院長も、この分ならば、あと三四日も樣子を見て、無事にお粥まで漕ぎつけられるやうだつたら、自宅に連れて歸つて、あとは通つて來てもよからうといつてゐた。

三

その頃になつて、わびしい秋雨の降る日がよく續いた。重い病人を病院に入れてゐたり、母の懐を離されて、知らぬ他人の手に托されてゐる乳兒を抱へてゐる者にとつては、いとゞ憂鬱な氣分が募るのであつたが、さういふ境地に置かれ、ば置かれて、どうしようにも爲方のない諦めがついてくるのであつた。それが宇佐美には、一時的な安心を與へた。そして、囘復は遲々としてゐても、病勢の昂進せぬだけの狀態に在る病院を見舞つて、その日はその日だけの無事の樣子を見て來ると、彼は安心した氣持ちになれるのであつた。

曇り勝ちの陰鬱な日は家の中まで暗くなるが、冷々とした空氣の肌觸りがして來ると、さすがの郊外の住宅にも少しづつ蚊が減つて來て、朝夕の寢心地に夜の衾が懐しかつた。主婦の居ない家の中は、子供の身に着けるもの、移り更りなど、一向勝手が分らなかつたが、頭のいゝ光子に相談しながら、押入れから、何か斯か取り出した。宇佐美が、自分で、さうしないかぎり、彼女の立場としては、立ち入つたことは出來ないことであつた。もとから衣類などには趣味を持つてゐる方であつたが、子供の着物のことなど、どうしていゝか分らなかつた。それを思ふと、これから遠い先のことが押被るやうな厄介であつた。不幸なる子供の爲には、たとひ自分の身の皮を剝いでも、どうかしてやりたいと思ふが、その相談對手のないといふことが、ひどく憐れであつた。

眞夜中に、ふつと眼が覺めたりなどすると、子供の泣く聲はしなくつても、彼は、何となく氣掛りに想つて、階下の子供の寢處に入つていつて、そうつと窺いてみた。子供は、小さい呼吸の音をさせて、すや〳〵と眠つてゐるが、側に添ひ寢をしてゐる光子は目敏く眼を覺ました。

「今よくお寢みになつてゐます。」

彼女は眠さうな聲でいひながら、子供の襟元を直した。

よく眠つてゐる顔は、まことに安らかであるが、それが一旦號泣に爆發する時のことを思ふと、獅子の眠つてゐるやうに憚られた。

「どうぞ、このまゝ、ずつと朝まで寢てくれるといゝがなあ。」

さういつて、宇佐美は足音を忍ばせながら、すぐ又二階に戻つて來た。

夜半に定つて、少くとも一度は眼を覺ますので、子供と光子とは、なるたけ朝は遲くまで寢てゐるやうにさしてゐた。彼女は子供の世話と、家事向きのことを、たゞ指圖をしてゐるだけで、雜仕をする婢がゐた。

明るい朝が來ると、宇佐美も、八時九時頃になつて起きいでゝ來て、寢卷のまゝ子供の寢室に入るが、その時は、何の遠慮もなく蒲團をまくつて、寢床の中に寄添ふのであつた。子供は眼を覺まして、腹ばひになつて、セルロイドのがらがらを振つたり、ぢやらん／＼を鳴らしたりしてゐるところであつた。

光子はまだよく眠り足りないやうな顔をしてゐることが多かつた。

「あなたは睡眠が不足でせう。もつと寢てゐたらいゝでせう。」

宇佐美は、子供を氣を附けてもらはうと思へば、彼女に對して心を使はねばならなかつた。

「いゝえ、私ももうよく眠りました。……」そして寢卷の袖口を抑へて、欠伸を一つしてから、

「さあ、もう、おつきしませうねえ。」と掛聲をした。

宇佐美は、朝寒を感じる足の先を、寢溫まつた子供の蒲團の中に入れてゐると、一旦夜具の外に出てきた身體が、ふたたび溫まつて來て、何だか氣怠いやうな伸び／＼とした心地がして、今度起きるのが大儀になつた。寢臭いやうな、子供臭いやうな、甘酸つぱい匂ひが、彼の氣分を魅惑した。

勿論彼は、病人のこと、それにつれて自然に係る經費のこと、病院の看護を入れて四人の病人の始末などのこと、いろいろなことで、いつも頭は思ひ疲れてゐるので、光子に對して異性的な感情など促されてゐるわけではなかつた

その時、光子が、つゝましく身體を向うへねぢまげるやうにして、上半身を起き上らうとしたはづみに、蒲團の裾の處で、ふと、彼女の柔かい脛が、宇佐美の足の先に觸つた。彼は、びつくりした。何か知ら、長く忘れてゐたものが、身體の何處かに蘇つたやうな氣がした。そして、直覺的に光子の顏をちらつと見た。

彼女は、そんなことには氣の附かぬ風であつたが、妙に表情をむつかしくして、その癖心持ち顏を赤くして起上つた。

彼女はそれから、子供に着物を着せてやつたり、夜の汚れた物を始末したりしてゐた。

宇佐美は又、二階の自分の寢處に戻つて來て、もう一遍蒲團の中に顏を隱した。此の間小兒科の病院で、同室の病兒の母親が眞顏になつていつた言葉が、又歴々と彼の心に思ひ浮んで來た。(あの方は好い人ですよ。あの人に、これからは、お孃さんを見ておもらひなさいまし。)先月の初、病氣で家の中が大騷ぎをしてゐるところへ、賴みつけの、ある會から派出して來た時には、雜仕婦にしては、ちよつと容姿に重々しいところがあるので、度々そんな婦人を使つた經驗のある宇佐美は、働けるだらうかと思つた。白いものなど雜つて、江戸紫がゝつた半衿をかけてゐるのが、一層顏を引き立つてみせた。落着きのある束髮にも、何となく人柄なところが見えた。高い鼻筋がとほつて、長過ぎる顏が、すこししやくれて、下顎がやゝ受け口のやうになつてゐたりするのが男のやうな顏に見せるのであつたが、それだけ、うつかり馬鹿に出來ないやうなところがあつた。背が高くて、白い肉附きもよかつた。

「こんな者を寄越したつて、爲樣がありやしない。」彼は、氣も顛倒してゐる心配の最中に、さう思つたが、一人でも人手の欲しい場合であつたから、そのまゝ居つてもらうことにした。

そして、かれこれ一と月以上も居る間に彼女の價値が分つて來た。

「あんたなんぞ、そんな仕事をしてゐないで、もつと、どうかならないものかなあ。一と口に派出婦などゝいはれて、玉石混同されては、これから後隨分損をするですよ。」

「えゝ、そんなことも考へないこともありませんけれど。」微笑しながらいつてゐた。

宇佐美は頭から蒲團を引被いで、もう一度先刻の場合の彼女の表情を思ひ出してみた。薄く施した白いものが、寢不足の顔に斑に剝げてゐるのが、三十女の肉體の色をまざ／＼と見せてゐた。そんなところに、處女の持つてゐない魅惑があつた。

彼女自身の語るところによると、彼女は、女の美しいので名高い東北のある小い城下の產であつた。そこの小身の士族の出であつた。一人娘であつたので養子を迎へて、一人の女の兒が生まれたが、三年前に夫は流行性感冒に罹つたのが原因で死んだ。それから子供もまた二つで亡くなつた。あとは、元のとほり、老いた母親と自分と二人きりになつたところ、その母親にも一昨年の春死なれてしまつて、彼女は全くひとり者になつてしまつた。何方を向いても、賴りになる近い親戚は一人もなかつた。たゞ神戸とか大阪とかに從姉がひとりあるといふことであつたが、それは、まだ會つたこともなかつた。彼女の少女時代からの願ひは、東京に出て、華やかな都會ぶりの學問や生活をしたいことであつたが、もとより、そんなことは許される筈もなかつた。何もかも一生の運命と諦めて、望みの多い生涯を、雪深い、遠い東北の片田舍に埋もれて果すよりほかはなかつた。そこへ、最愛の夫にも、子にも、一人の老母にも死別れて、孤獨な自分の姿を、まざ／＼と見せられてみると、彼女は絕望の極、それまで抑壓されてゐた運命に對して今度は反抗する勇氣を振ひ起した。彼女は淚の底から蹶起して東京に行くことを思ひ立つたのであつた。

もはや女の身で三十にも近くなつて、今更東京などへ出て行かなくつてもいゝであらうといつて、親しい、鄕里の知人の中には、彼女の前途を心配して慰留してくれる者ばかりであつたが、彼女は、あまりに悲しい自分の孤獨を慰め、不幸

なる絶望から救はれるには、ぜひとも、自分から運命に逆ふて、雄々しく奮ひ起つよりほかはなかつた。

再縁の好い口を勸めてくれる者もあつたが、彼女は、少女の時分から長く諦めさせられてゐた東京の夢を本當に見たければ、どうあつても滿足できなかつた。それが、つれない運命と闘ふ、自分の復讐でもあつた。

宇佐美は、やがて起き出でゝ階下におりていくと、光子は、その時もう顔など直して、いつものとほり朝の食卓に向つて、子供に牛乳とトースト、ビスケットなどを與へてゐるところであつた。主人の朝餉の支度も、ちやんと、そこに調つてゐた。

「ほゝ、やつてゐるな。今朝はどうです。よく食べるですか。」

「えゝ、おいしく召上ります。」

また、やつと一誕生にしかならぬにしては、食餌の積極的な與へ方が、少し無理であるので、子供は、どうかすると食欲が不進であつたりした。醫者の指定した牛乳を飲まないで、ビスケットだけを食べようとしたりした。さういふ場合に、光子は最も細心な注意を拂つて、子供のその時々の氣先きをよく看てとつた。宇佐美は殆ど心から彼女に感謝してゐた。

四

そのうち又、わびしいながらも、氣持を落着かすやうな雨の日が來た。

宇佐美は、子供のことから、深く心に謝してゐる光子の、しつかりした容姿に、うつかりした戯談もいへないやうな氣がするのであつたが、又、そんなに弱氣でゐては大事な機會を逸してしまう。いつそ淡白に當つてみてやれと思つた。女中は用たしに出てゐた。

「光子さん。」彼は茶の間の餉臺に凭れながら聲をかけた。

「はい。」臺處の向うの三疊の室で子供を遊ばしながら、毛絲の編みものをしてゐた彼女は、さういつて、出て來た。
「まあ、おすわんなさい。」
「何か御用でございますか。」
彼女はちよつと更つた顏をして、そこに坐つた。
「そんなに更まられると、ちよつといひにくいが、……しかし、これは戲談にいふのではないんですよ。……あんたは、何處か、働きながら、もつと何か稽古したいといつてゐましたねえ。」
「え、、さうしたいとは思つて居りますけれど。」
「何が習ひたいんです。」
「何といつて、もうこの歳ですから、普通の夜學校へもいけませんし、技藝とか裁縫の學校へ行きたいと思つて居ります。實は九月から、さうしたいと思つて居りましたところへ、かうしてお宅へ上りましたので、今度は來年の一月からでないと入れなくなりました。」
「あゝ、そんな譯だつたのですか。それは、私の方のために、とんだ御迷惑をかけたことになつてゐるんですな。何時でも入れるといふわけにはいかないんですか。」
「え、、九月でなかつたら、今度は一月ですけれど、それは、もう、どうせ遲くなつても構はないのでございます。」
「さうですか。それならいゝけれど。……しかし、私の處では、見らるゝとほりの次第ですから、あなたには、事情のゆるすかぎり長く居つていたゞきたいのです。」
「はあ。」
「ほんとに、私は、あなたに心から謝してゐるんですよ。おせつだの、八千代だの、隨分、小兒科で子供を非道く扱つた

らしいんだ。あの、隣の子供のお母さんがいつてゐました。」
「寢臺から、お孃さん轉げ落ちたんださうでございます。」
「さうだつて。……あんたねえ……どうですか。その、どこかへ物を習ひに行くといふのでしたら、晝間働いてゆくといつたつて、なか／＼大變ですよ。隨分身體も樂でないと思ふ。それで、あなたが承知なら、私の方で相當の補助をして上げますから、私の處に長く居つてくれませんか。」
「はあ、……」
「厭ですか。」
「そのうち奧さまもお癒りになるでせうから、奧樣が御退院になるまでは、私も、どうせ學校も來年の一月まで延ばすことにして居りますから、お孃さんのお世話はして上げますつもりで居ります。」
「どうぞ、さうして下さい。……そして學校に行く時になつても、かうして子供が、生みの親も及ばぬお世話になるお禮としても、出來るだけの力を入れて上げたいのです。……それにです。先月の初のあの大騷ぎの夜のことを、あなたも、その場に居つてよく見ておいでゝせう。母親がたとひ本復して、無事に歸つて來ても、これから先果して、此の家に置いておくべきものか、又、私の方で置かうとしても、本人なり、或は本人よりも親や兄弟が置いとくか、どうか分らないと思ふのです。眞實をいふと、私は、一人のこの子供の爲に、何事を忍んでも生みの親を離したくないのですが、あなたのやつて下さることを見てゐると、あなたのやうな人であつたら、たとひ生みの親でなくつても、子供を任せて、安心できると思つてゐるのです。」
宇佐美は、眞情のこもつた口調でいつた。
光子は、始終硬くなつたやうに默つてゐた。彼女は、本當をいふと、はじめて、この家へ會から派出して來た時、細君

が意外の重態で、ひどく家の中が取込んでゐるのに驚いた。これは飛んだ處に來たと思つたが、といつて、直ぐ逍けて歸るわけにもいかなかつた。主人は、朝の内に、乳兒を市中の小兒科病院へ託けにいつたといつて留守であつたが、奥さんの兄弟らしい若い人間と、昨夜、電報を見て、先刻來着いたばかりだといふ父親らしい人とが枕頭に附いてゐるばかりで、女中が一人働いてゐた。そこへ午頃になつて主人が歸つて來て、大分昂奮してゐるらしい樣子で、彼女の屬してゐる會から碌な人間を寄越してくれない不足を、いきなり彼女に向つて並べた。光子は默つて聽いてゐたが、今朝子供を負つて、主人と一所に小兒科へ附いていつてゐる婦人が、重病人の出來た家を暇を取りたいと申出たところから、自分がその代りに派出されたものだと分つた。主人の話の樣子では、もう前から、幾人も來た婦人が、みんなやくざな、出代りの早い浮浪者であつたといつて、腹を立てゝゐるのであつた。光子もそれをきいて、好い氣持ちはしなかつた。そんなに氣に入らぬものばかりなら、はい左樣ならと、すぐにもご免を蒙らうと思つてみたが、まさか、さういふことも出來なかつたので、せめて一日だけでもと、思つてゐると、細君の病勢は時間の經つにつれて、段々惡化するばかりであつた。そしてその晩は、醫者も、つひに、いけないといふことになつた。瀕死の病人の枕頭で、主人と細君の父親と兄弟達と何か言ひ爭ひの上から、ひどい暴力で、あはや主人を袋叩きにもしさうな騷ぎを眼の前に見せられた。光子は、自分もはら／＼した。派出などをして、方々の家庭に入つてゐると、いろんなことに出會すものだと思つたが、行きがゝり上そんなところを、すぐに退きも去りも出來なかつた。そして、だん／＼家の中の樣子が分るに從つて、主人は、物の道理のよく解る人だと思つた。

「まあ、よく考へてみて下さい。急ぐことでもないでせうから。」宇佐美は催促するやうにいつた。

「初めて此方へ上つた時には、私、すぐにお暇をいたゞいて歸らうかと、餘程思ひましたんですが、あんな次第で、こんなに長くおいていたゞくやうになりました。」

「それで結構です。」

五

十日ばかり前から、代つて雇入れた女中は、片眼斜視の、すこし智恵の足りない、頓狂な女であつたが、食事の指図から、商人の御用きゝなど光子に相談してゐた。

「おみつさん、八百屋さんですよ。何か用はありませんか。」

光子は、それをきいて、奥から子供を抱いて臺所に出て來た。

「今日は！」阪下の八百屋の主人は、威勢のいゝ聲をかけながら、みると、先に見てゐたとちがつた奥さんが子供を抱いてゐた。

「おや、奥さんが變つたんですか。……今日は何か御用はございませんか。」

「まあ、隨分馬鹿にしてゐるわ。奥さんが變つたんですかなんて。こゝの奥さん病氣して入院してゐるわよ。」

「あ、御入院なすつて。それは、……えゝと、今日は何か御入用は？……さうですねえ、里芋の好いの、枝豆、八つ頭、ふじ豆、新生薑、をはり初ものゝ胡瓜、それから、もぎ茄子。これもおしまひです。」

そこへ、ちやうど、病院を見舞つて戻つて來た宇佐美が、顏を出した。

「旦那さま、いかゞでせう。何か召上るもの。」

光子がきいた。

「里芋を、とつておいたらいゝでせう。それから、もぎ茄子を漬けてもらひたいな。」

「ぢや、八百屋さんそれだけ。新生薑も少し置いといてもらひませう。」光子は、とりはからつていつた。

一旦少くなつたと思つた蚊が、又、腹に大きな縞のあるやつが、晝間出て來て、不意に人を襲つた。

ある晩二階に來て、蚊帳をつつてゐる光子の背後から、宇佐美は、何か知ら、抑へきれぬやうな氣持に驅られて、つつと彼女の腕を握りかけた。

と、いきなり彼女は強い力で、それを振りはらひながら、

「なにをなさるんです!?」と、眞面目な調子でいつた。

「あッ、そんなことをしたのが好くなかつたですか。」

「失禮ぢやありませんか。」

「いや、そんなつもりでしたのぢやありません。それが、あなたの意に逆つたら、どうぞ大目に見て下さい。」

「私、お暇をいたゞいてもようございます。」

宇佐美は、びつくりしてしまつた。

「とんでもない。あなたに今行かれては、子供をどうすることも出來ない。決して、失禮をする氣でしたのではありませんから、どうぞ、そんな向きになつたことをいはないで、相變らず子供の面倒を見てやつて下さい。」

あはれな宇佐美は、下手なことをしたのを後悔しながら、變な空洞な氣持で、そのまゝ、いつもするやうに、子供の寢顔も覗かずに蚊帳の中に入つてしまつた。

子供のことで、もう、すつかり氣の弱くなつてゐる彼は翌日から、そんなことは、すつかり忘れたやうに愼んでゐたが、思ひなしにか、その頃から、光子の、湯上りの化粧の色が、先の時分よりも、濃くなつてきた。黒く濡れた頭髮の艶澤、紅を潮した頰から腭に白くのつた御園の香が、ちやうど、その季節の木犀のやうに匂ふた。

彼は、夜半に、一と寢入りすると、きつと眼がさめた。そして、きまつて一度は子供の寢所に降りていつて、のぞいて

みることは、今までとちがはなかつた。その夜も、いつものとほり一時頃になつて、自然に眼が覺めた。そして何だか、身體中に踊り狂つてゐるやうな元氣なものがあるのを感じた。野生的な勇氣が湧いて起つた。それと一しよに、ひどい劇情が昂つて來た。

彼は、何故か、いつもと異つて、階段を下りて來る足音を忍んだ。そして、緣側をつたふて、そつと、子供と光子との寢室である奧の八疊の障子を音のせぬやうに開けた。すると、彼女はぱつと眼を見ひらいて、そちらを見た。白くおしろいをした顏とその眼が、こんなことが、もしかありはせぬかと用意してゐるものゝやうに、宇佐美には思はれた。

「どうです。今晩はよく寢てゐるやうですね。」と、低い聲でいひながら、彼は、子供の顏を、じいつと覗いてみた。

光子は默つてゐた。

彼はそのまゝ、子供の脇に身を橫へた。

靜かな子供の寢息と、彼と彼女の凝つたやうな呼吸の音とが高くきこえてゐた。

「この間お話のあつたことを、あれから、よく考へてみましたけれど、それは、おことわりいたします。」光子は、いひ出した。

「何故です。」

「なぜつて、妻子のある方と筋のちがつた交はりをすることは罪でございますから。」

「それは、一應そのとほりですが、一と口にいへない場合がありますから、もつとよく考へて置いて下さい。」

宇佐美は、それだけいふにも、口が妙に痙攣したやうに粘ばつてゐた。胸が彈んでゐた。

「なにを僞さるんです。いけません。」

「そんな大きな聲を出すと、子供が眼をさます。」

「聲を立てますよ。」

……………………………………………………………

……………………………………………………………

光子は、寢亂れた白い顏を、枕に載せたまま、まるで死んだ者のやうになつて橫たはつてゐた。崩れた頭髮が、氣味わるく額のまはりに絡んでゐた。宇佐美は、そこを立ち去らうとして、ほんとにどうかしたのではないかと氣づかつた。そして、後になつて、あんまり彼女の身體が靜かになつたのが、彼には、ひどく濟まぬことをしたやうな氣がした。彼は、そつと夜具を彼女の胸に着せ掛けて置いて二階に上つた。

何か咎められるやうな翌朝が來た。でも彼は、それほど正直者でもなかつたので、つとめて、白々しい顏を裝つて、いつものとほり起き出で、來た。顏を洗つて、無心な子供と一緒に朝餉の食卓に向つた時、恐いものを見るやうな心地で、それとなく光子の顏を見ると、彼女の顏も、いつもと少しも違つてゐなかつた。彼は、胸の中で、ほつと安心した。

午後になつて、少しく足りない女中が使ひに出ていつたあとで、光子と宇佐美とは、又餉臺によつて向ひ合つてゐた。すると光子は、更つた調子で、

「わたくし今日お暇をいたゞきたいと思つて居ります。」突如としていつた。

宇佐美は、もう、さうなると爲方がないので、わざと、とぼけた顏をして、

「どうしてゞす？」

「どうしてつて、………あんなことをされて、私、とり返しのつかぬことをされました。」彼女は、一本氣な調子になつて、泣き出しさうな顏をした。

「わたくし、このまゝにはして置かれません。これから、家に歸つて、考を仕直さなければなりまんから、お暇をいたゞ

きます。」彼女は昂奮していつた。

光子の樣子が意外に本氣になつてゐるので、宇佐美はやゝ慌てた。

「家に歸るつて、あなたは、やつぱり舍に歸るか、友達とかの處にゆく外はないんでせう。」

「えゝ、さうです。私は、自分の歸つてゆく家もない者です。」彼女は、さういひさして兩袖に顔を蔽ふて泣き出した。

「まあ、さう、あんたのやうに處女のやうな分らないことをいつては困ります。」

「處女だつて、處女でなくたつて同じことです。あんたことをされては一生の汚れになります。一生忘れられないことです。」

「そりや、まあ、理屈をいへば、それにちがひはないが、さう、あんたのやうに一本氣に思ひつめないで、もつと心を鎭めて考へてもらひたい。度々いつてゐるとほり、私は、心からあんたに感謝してゐるんですから、少しも惡い氣でしたことではないのです。」

「惡い氣でないたつて、正しい行ではありません。……わたし、もう郷里の人達に會はす顔がありません。女の身一つで東京に行くのは危險だといつて、皆な反對するのを、强い自信を以て押切つて出て來たのです。わたくし、もう、この身體では郷里には歸られません。おうゝゝゝゝゝゝゝ。」

彼女は、聲を發して悔しさうに泣きながら、俯向に顔を伏せた。

宇佐美は、愚かしい、困惑を顔に表はしながら、强いて言葉を安らかにして、

「それは、あんたとしては困つたことかも知れませんが、隣家も近いことです。さう一圖に思ひつめないでもらひたいものです。私の心の内を、もつと、よく胸を落着けて考へてもらひたいのです。」

「いくら考へたつて、もう、元の身體にはなりません。……わたしどうしても今日かぎりお暇をいたゞきます。」

彼女はヒステリッにいつて、いきなり起ち上つて、臺所の向うの二疊に入つていつて、三尺の押入を開いて、慌しく行李を引つぱり出した。やつと、又、這ひかけた子供が、襖だの、壁につかまつて、よち〳〵その後を追ふた。

宇佐美もつゞいてそちらに入つていつた。

「ねえ、そんな、あんたのやうに子供じみたことをいはないで……」

「なにが子供じみたことです。……わあッ……」といつて、光子は又、押入の行李の上に、そのまゝ顔を俯伏せて泣き入つた。

宇佐美の子供が、何にも知らずにその後から、彼女の背に手をかけて、とり附いた。

困り切つた顔をした宇佐美は、

「おゝ、をばさんを、えゝこノ〵しておやんなさい。」

光子は、背後から子供にとり縋られたまゝ暫く押入れに顔を突込んで泣く音を忍ばせてゐた。

「ねえ、そのことは、又、あとで、十分詫びますから、もう、泣くのだけ止めて下さい。やがてお竹が歸つてくる時分だから。」

宇佐美は、抑へるやうな言葉でいつて置いて、却つて、いつまでも自分が側にゐない方がいゝと思つて、そこを去つた。そして一旦、逃げるやうに二階に上つて來たが、やつぱり氣になつて落着いて居られないので、四五分の後又下りて様子を見にゆくと、光子は、今度は、子供を連れて奥の八疊の脇の三疊の隅に置いてある鏡臺の前にいつて、泣いた顔をつくろつてゐるところであつた。無心の子供も、一所に鏡臺の緣にはひ捉つてゐた。

「あゝ、それがいゝです。……女中などに見られるといけないですから。」

彼は胸を撫でる心地でいつた。

「……たゞこの方がお可哀さうですから……」光子は涙をすゝりながら、いくらか氣を靜めた樣子でいつた。

宇佐美は、それからいつものとほり、病院の妻を見舞ひに出かけていつた。

七

それから四五日過ぎた。宇佐美は、光子の、あんまり角ばつた性質に懲りて、この間のことは、なるべくあのまゝそつとして置きたいと思つた。又、自分の方から、あれ以上に積極的に出ることも控へた。散々病氣騷ぎで重荷を背負つてゐるのに、この上家の中のことを面倒にしては、堪らないと思つた。

すると、その晩も女中が一寸用たしに出ていつたあと、光子は、子供を寢かしてゐたが、そこへ宇佐美が、ふつと顏を出したので、彼女は、

「あの、旦那さま、ちよつと。」といつて、寢床の上に起きなほつた。

光子は、此の間から、もう胸の中に何か重いものでも入れてゐるやうに心配の固りが痞へてゐるのであつたが、それよりも宇佐美が、あれつきり、あつたことを忘れたやうに、けろりとして、素知らぬ顏をしてゐるのが、腹が立つて堪らなかつた。口でうまいことをいつてゐるやうに眞實自分を思つてゐるものならば、そんな白々しい風で居るわけがない。もし、ほんとに、口でいつてゐるとほり、心でも思つてゐるのならば、自分にも、その覺悟がある。奧さんのことだつて、この間中の有樣では、まつたく、この後どうなるか分らないのだ。光子は、今となつて、何となくある物足りなさを感じた。

「え、何ですか。」

宇佐美は正直にさう思つて、返事した。

「ちよつと旦那さまにお話し申上げたいことがございます。」光子は更つていつた。
「あの、……多分、そんなことはないだらうとは思つて居りますけれど、もし、私が姙娠でもしてゐるやうなことがございましたら、どうしていたゞけますか、それを一寸承つて置きたいと思ひました。」
宇佐美は心の中で、あゝ、そのことかと思つたので、極めて氣輕に、
「あゝ、そのことですか。もし、そんなことがあつたら、丁度可いです。決してあなたに心配はさせません。その點は、どうぞ安心してゐて下さい。」
彼は明確に受合つた。
光子は、それだけでは、何だかまだ氣が濟まなかつた。
「もし、そんなことがございました時に、私の身體をどうしていたゞけますでせうか。」
「どうしてつて？」
「わたくしの身體の置き場でございます。」
「置き場といふのは？……もし、そんなことがあつたら、何處かへあなたを置いて、靜かに身二つになつたらいゝでせう。それから先のことも知らないとは、決していひませんよ。」彼は優しくいつた。
それでも彼女は、昂奮した顏を一層募らせて、
「厭です。わたし、人の妾なんかになりたくありません。正妻にしていたゞかなければ厭です。」きつとなつて、いひ放つた。
宇佐美は、その一と言を聽いて、忽ち、今までの光子が厭になつたやうな氣がした。彼は、少しも浮氣で彼女を愛するといふ氣はないのであつた。今、病氣してゐる妻が幸にして健康に囘復する時が來ても、宇佐美の處に落着くか、どうか

は分らなかつた。それは彼女の方でさういひ出すか、又は、彼の方でさう決心するか、いづれにしても未定であつた。もし、そんな場合になつたと假定して、自分のこと、子供のこと、を等分に考へて、光子は、容易に求め得られない婦人であると思つてゐたのであつた。

「正妻でなければ厭だ……」宇佐美は、光子のいつたとほりを、鸚鵡がへしに、くり返していつてみた。

「何にも、あなたを妾にして樂まうとは、私も思つてはゐませんよ。……ですが、今、こゝで、そんなことを、私としてあなたに、たとひ口約束たりとも出來るものではありません。」

「それでは、私を弄んだことになります。」

宇佐美は、わざと笑つてみせた。

「はゝ、そんな、ひた向きにならないでもいゝでせう。よく心を落着けてみて下さい。」

「わたくし、誰れか然るべき人に頼んで、この話は、してもらはうと思つて居ります。」

宇佐美は、ますます、そんなことをいふ光子が厭はしくなつた。

「人に頼んで話す。……そんなことをすると、却つてお互の身の損害ですよ。決して私は、あなたを苦境には置かないつもりです。けれど、私の立場も少しく考へていたゞきたい。いくら病人でも、又、愚かな連中でも、家内ときまつた者があるのです。……尤も理窟をいへば、妻子のある身で、他の女に戯れるといふことは、いつはりの行爲であるといつてしまへば、それまでゝすが、又、一と口にさうともいへないものだ。……まあ、今の今、かうせいと、あんたのやうに、さう思ひ詰めたことをいはないで、靜に時節を待つてゐてもらひたい。」

彼は宥めるやうにいつた。

それでも光子は、ヒステリックに凄じい顔を和げなかつた。

「そんなことといふあなたは、人に難題を持ちかけるやうなものだ。」

「いや、難題ではありません。」彼女は、喰ひ付くやうな調子でいつた。

「子供が眼をさますといけない。まあ、よく、心を落着けて考へたらい丶でせう。」

宇佐美は、さういひすて丶置いて、さつ〳〵と二階に上つて來た。さうして机の前に坐つたが、つい、自分も、大分昂奮してゐるのが分つた。そして光子の今の言葉や表情や態度が可なり彼の胸に反感を唆つてゐた。彼の光子を愛し、且つ信じようとする氣持ちが、そのために殆ど破壞されてゐた。宇佐美は、じつと胸の中でそれを考へてみた。どうして、あんなに昂奮してゐるのだらう。……やつぱり、こちらから强制的な態度に行つた方が、彼女の方でも滿足なのかも知れぬ。それにもかゝはらず、この間のことが一度あつたきり、彼の方で、すこしも側に寄らうとしないので、彼女の心を一層荒立て丶ゐるのかも知れぬ。だが、あの翌日、あんな大騷ぎをして昂奮したりするのを見ては、恐いものに觸るやうで、一寸ふたゝび手が出せなかつた。女といふ者は、堅くなければ可けないが、あんなに角がとれなくつても困る。今の話だつて、正妻でなくつては厭ですといつたのでも、もう十分に彼女の心は解つてゐるのだ。光子の方で、何と反撥的に出ても、それには構はず、こちらの親密をもつと露はに、遠慮なく押付けた方がよいのだ。それは宇佐美にも解つたが、どういふものか、彼女の、あまりに角張り過ぎた態度が、彼女の女らしさを、ひどく破壞してゐるやうで、彼の胸の中にこの間から、折角芽ぐんでゐた柔かなものがだん〴〵後退りした。

「やつぱり淸淨なつきあひにして置けば子供の爲にも幸福なのだ。」

前後左右に勃發する災難に、彼は、ひどく小心翼々となつてゐた。

八

妻が入院してから、やがて二ケ月近くもなつた。回復は極めて遅々としてゐたが、順調に快方に向つてはゐるのであつた。入院の當座は、病氣の方の診察や治療に專らで、發病前に主治醫が診斷した姙娠のことは、長い間疑問のまゝに置かれた。何事も院長を信じて疑はない心の態度で居らうとする宇佐美は、自分の方から、あれこれと訊くことを遠慮してゐた。たまに、看護婦に向つて、

「先生は、姙娠のことを、まだ何ともお話ありませんか。」

と、訊いてみるが、

「そのことは、まだ何ともお話ありません。」

「どんなものでせう？」

「さあ、先生が何とも仰有いませんから、私からは、何とも申されません。それが、どちらであつても、本病の方をすつかり良くしてから、御診察になるのでございませう。きつと。」

そんな狀態で長く過した。すると、ある日病院を見舞ふと、看護婦は、先生から、あなたがお見えになつたら、話してくれとのことであつたといつて、

「やつぱり姙娠ださうでございます。しかし、その方は格別心配のことはないから、さう申傳へてくれとのことでございました。きつと、何でございませう。本當の御病氣の方さへだん／＼およろしくおなりになればいゝんでございませう。どうぞ御安心なすつて。」

熟練な看護婦は、明晰にさういつて、院長の旨を傳へた。

が、宇佐美は、それを聽いて、最後の判決を宣告されたやうな失望を感じた。今だつて、たつた一人の子供を持て餘してゐるのに、この上又一人出來ては、いよ／＼自分にとつては拔き差しならぬ桎梏を嵌められることになる。主治醫はさ

ういつても、病院の博士が疑問にしてゐるのが、せめてもの頼みの綱であつたが、どうあつても免かれられない解決が與へられたのである。光子の問題も、その爲に一層面倒になつたばかりでなく、悪性の腦脊髓膜炎など患つた重症者の胎内に居つた子供が滿足な健康兒であらうとも思はれぬ。そんなものにでも産れられたら、もう一生涯の重荷である。

宇佐美は、その日、いつにない重い足で歸宅した。そして、その晩、食卓に向つた時、沈痛な調子で、

「やつぱり、病人は姙娠ださうです。」と、光子に向つていつた。

彼女は默つてゐた。

それから半月ばかり後に、醫者のゆるしが出て無事に退院した。

最後に、産科の部長の診斷の結果、一層そのことが確認された。退院の際の注意事項は、

「たゞ普通の姙娠だから、この上はたゞ、母體に注意して、滋養を攝取することをつとめるのが何より肝腎ださうでございます。」看護婦から傳言であつた。

宇佐美は、それでも、まだ心配であつたので、退院後のお禮に、院長の私宅を訪ふた時、

「いかゞでございませう。重患の際胎内に居りましたんで、生まれてから後、たとへば、不健康兒だとか、又は何處か不具なものになりはしますまいか。」

「さあ、その點は、……少しく成長して、どんなことがあるか、それは今から保證出來ませんが、今のところ、出産は普通の出産のつもりです。」

「はあ、左樣でございますか。おかげさまでした。……姙娠中止といふやうなことは出來ないものでございませうか。」

「それも一應考慮したうへのことです。今、中止するには、もう時期が遲いです。却て病後の母體を衰弱せしめる恐れがあります。………本病の方も、熱が、あの病氣にしては割合に低かつた方ですから、さう、組織の變化もなかつたらうと思つてゐます。」

博士は、訊かれるまゝに、科學者らしい精確な返答を與へた。

宇佐美は心の中で、やつぱり運命に服從するのほかはないと思つた。

九

光子は、その年中居つて、子供の世話をしてゐた。

病後の母親は、病の快方に向ふに反比例して、一方月の重なるに從つて、身體は重くなつて來た。自分のひとりの自由がやつと叶ふだけであつた。

その後光子も宇佐美も、話さうと思へば、いくらも話をする機會はあつたが、どちらからも、心の中で、考へてゐるだけで、複雜な氣持については、すこしも口に出さなかつた。

年が明けて彼女が宇佐美の家を去つて、何處かの事務所に働きながら、夜間學校に通學するやうになつた時にも、彼女は宇佐美に保證人の印を賴みに來た。彼は快く捺印を承諾した。

宇佐美の妻は、間もなく二度目の分娩をした。滑稽なくらい思つたより輕い出産であつた。が、それだけ、宇佐美の立場は、拘束されることになつた。

光子に對しては、どうかして、一度、あの晩きり打明けなかつた、心の奥底を、十分に語らうと思つてゐる間に、いつしか時は過ぎてしまつた。二年の修學も滯りなく卒つてから、彼女は、紹介する人があつて、近郊のある資産家へ、少し病弱な娘の看護やら、話對手に住込んでゐたが、そのうち、そこの相續者の妻が二人の子供を遺して死んだのでこの人ならばといふことで、正式に後妻に直つた。

宇佐美は、その後、その通知を彼女から受取つた時、いよ〳〵運命は自分に味方をしなかつたのだと思つて、最後の失望を感じた。(五年六月九日)

定價

定價	送料
一冊 八十錢	參錢
六冊 四圓八十錢	送料共
十二冊 九圓六十錢	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年六月十八日印刷
昭和五年七月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　竹內喜太郎

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

東京市丸ノ內ビルヂング五八八區

中央公論社

電話丸ノ內（二〇〇）五五三五・五五三六・五五三七番
振替東京三三四番
同長野三二〇五番



新マツダ
内面艶消

明治三十二年一月十九日第三種郵便物認可

CHUO KORON (*The Central Review.*) **Published Monthly.**

By The Chuo Koron Sha Publishing Co. Tokyo Japan.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.